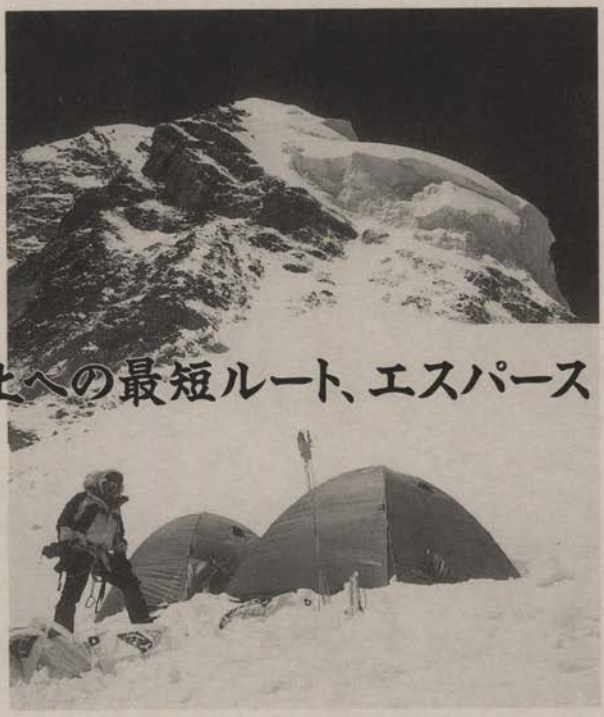
山岳



Vol.91／1996

KAMOSHIKA



頂上への最短ルート、エスパースII。

1996年8月、日本山岳会青年部K2登山隊は、
急峻な南南東リブルートから12人の登頂に成功。
7,850mのC3(ファイナルキャンプ)で採用されたテントは、
シンプルなフレーム構造で高い剛性を持つ「エスパースII」でした。

カモシカスポーツは登山家の信頼に応えます。

カモシカスポーツ

山の店・本店　☎03(3371)4333
〒169 東京都新宿区高田馬場3-3-3

山の店・横浜店　☎045(212)2044
〒231 神奈川県横浜市中区桜木町3-11

●AM10:30～PM8:00(月～金)
AM10:30～PM7:00(土・日・祝)
●定休日／日曜日(4月・7月・8月・12月は定休日なし。
他の月は最初と最後の日曜日は営業します)





第九十一年（通巻一四九号）

山岳

一九九六年

山岳　一九九六年　目次

山の履歴書……梅棹忠夫……7

マナスル登頂40周年特集
マナスルへのプロローグ……松田雄一……20
ネパール雑記……田口二郎……37
ジル・ヘンダーソン夫人とシェルパ……村山雅美……44
座談会　マナスル登山を振り返る……大塚博美・川喜田二郎・日下田実・堀田弥一
松田雄一・村木潤次郎・村山雅美・山田二郎……50
マナスル登山クロニクル（一九五〇～一九九六）……池田常道……62

海外遠征登山の記録
シニオルチュー登頂……東北大学医学部艮峻山の会……78
ナンガ・パルバット北面新ルートからの登頂　千葉工業大学登山隊一九九五……坂井広志……87
ムスターグ・アタ山群未踏峰の登頂　一九九五年夏、青年部登山隊の記録……絹川祥夫……94
インド・ヒマラヤ、サラ・シュワ峰登頂　足利工業大学登山隊一九九五の記録……沖　允人……100
トゥインズ初登頂　東京農業大学山岳会一九九五年の記録……谷川太郎……106
ウルタルⅡ峰初登頂　東海支部登山隊一九九六……松岡清司……112

日本山岳会創立九十周年記念フォーラム……大森弘一郎……125
ヨセミテからのメッセージ……大森弘一郎……126
中高年登山の楽しみ……山口俊輔……130
ヒマラヤ登山・回顧と展望……池田常道・原真・鹿野勝彦・重廣恒夫・山本篤……135
桜門の山を語る……松田雄一……147
写真展「ウエストンの見た明治・大正の日本」開催のいきさつ……杉本誠……161
図書紹介……166
『母なる大空　冬期サガルマータ南西壁』（山本宗彦）、『日本大学エベレスト登山隊一九九五　北東稜登山報告書』（大塚博美）、『七つの最高峰』（冨岡一郎）、『ヒマラヤの東』（雁部貞夫）、『鳥居龍藏伝』（松家　晋）、『「日本百名山」の深田久弥と山の文学展』（大谷一良）、『山と人　八十年』（越田和男）、『山　ひと　スキー』（山本健一郎）
＊
追悼……189
山口健児氏（湯川龍二）、今西壽雄氏（藤平正夫・大塚博美）、金山淳二氏（太田敬）、今村正二氏（村木潤次郎）、飯田輝英氏（織内信彦）、橋本誠二氏（有馬　純）、福嶋一馬氏（村上　巖）、戸村貞男氏（松田雄一）、安彦六郎氏（風見武秀）、住吉薫氏（倉内司郎）、佐藤　光氏（安藤　治）、野島福三郎氏（佐伯郁夫）、入澤郁夫氏（小林　碧）、赤沼　節氏（清野義美）、高尾徳繁氏（吉村健児）、中　保氏（國見利夫）、村井喜一氏（中世古隆司）、曽根義一氏（熊木貞夫）、皆川孝平氏（田尻一實）、国島陽三氏（横田明信）、久保孝一郎氏（関塚貞亨）、飯野　信氏（柴崎　徹）、清野　恒氏（小倉董子）、田邉　史氏（中村太郎）、宮城恭一氏（小倉　厚）、石井恵美子氏（大井正一）、宿屋昭一氏（渡辺富衛）、アダムス・カーター氏（吉澤一郎）

＊
支部だより……236
会務報告（一九九五年六月～一九九六年五月）……253

山岳図書目録……A65
高所登山のためのトレーニング　高地トレーニングと呼吸技術トレーニングの重要性……山　本　正　壽……A54
英文梗概……A21

写　真

海外登山の記録……80～81
ウエストンの見た明治・大正の日本……160～161
追　悼……192～193

表紙挿絵・本文中カット　遠藤光男・小寺佳美

山の履歴書

梅棹忠夫

会員番号三九六三

「三九六三」――これがわたしの日本山岳会における会員番号である。一九五二年二月十日の入会である。いまは会員番号が一万をこえているので、わたしも古顔になってしまった。

一九九五年十月十四日の日本山岳会創立九十周年記念晩餐会において、わたしは名誉会員におされ、名誉会員章を受けた。わかいときから山を愛し山をあるいてきたが、はたして日本山岳会の名誉会員にしていただくほどの登山歴がわたしにあっただろうか。ふりかえってみると、はずかしいおもいがする。

わたしは登山とともに、ながく世界各地で学術探検の仕事にたずさわってきた。その経歴も加算され、評価されたのかもしれない。イギリスでは、山岳会と王立地理学協会とのあいだには役割分担があるが、日本の場合は日本山岳会が両者の性格をかねそなえているとおもわれるからである。

いまここに、わたしの山の回想録をくわしく書きしるすつもりはないが、名誉会員にしていただいた記念に、村木

潤次郎会長のおすすめにしたがって、わかいころからのわたしの山に関する履歴書を簡略に書かせていただくことにしたい。

北山そだち

京都は三方を山にかこまれた盆地である。東には比叡山がたかくそびえ、大文字山から東山三十六峰がつづく。西には愛宕山がくろくおおきい壁をつくり、それに西山連山がつらなる。そして比叡山と愛宕山のあいだ、つまり京都の北側いっぱいにひろがっているのが北山である。わたしは幼年のころから、毎日これらの山やまの姿を見てそだった。

一九三二年、わたしは京都府立京都第一中学校（京都一中）に入学した。現在の洛北高校である。その三階だて校舎の屋上にたって北をながめると、北山の連山のかさなりが手に取るようにわかる。わたしはそれらの峰みねを五万分の一地形図上に同定しながら、あかずながめいったものである。

京都一中に入学して、わたしは博物同好会というクラブにはいった。わたしは小学校のころから昆虫採集と標本づくりに熱中していた。中学校にはいった年の夏、博物同好会は北山で合宿することになり、わたしもそれに参加した。参加者は六、七人で、リーダーは四年生だった。鞍馬山の西側の貴船川の谷をさかのぼって滝谷峠をこえると、雲ケ畑側の源流直谷（すくたん）にでる。それをすこしのぼったところに、スギの木だちにかこまれて京都一中山岳部が管理する北山小屋があった。これがわたしたちの合宿所であった。

小屋は三十平方メートルばかりのちいさなもので、つねは無人で休日には山岳部員たちが利用していた。わたしたちの合宿は二泊三日であった。わたしはこのときはじめて木綿の寝袋で寝た。この小屋を根城に付近で昆虫を採集して、三日目に直谷をくだって雲ケ畑村におりた。

この北山の合宿が機縁になってわたしは山へゆくようになり、二学期からは山岳部に入部した。博物同好会はその

ままつづけた。京都一中山岳部は、一九一〇年代からつづく中等学校山岳部のいわば名門だった。今西錦司、西堀栄三郎、桑原武夫などの人たちが初期の部員だった。その山岳部の前身に青葉会というグループがあって、その人たちが山城三十山というのを選定して、登山の目標にしていた。五万分の一地形図に山名がでていること、三角点があることなどを条件にして、山城国内で三十の山をえらびだしたのである。

京都一中山岳部員となったわたしは、せっせとこの山城三十山をのぼった。もっともたかいものでも一〇〇〇メートルにみたない山だったが、ふかい森におおわれていた。わたしはこれらの山やまを丹念にあるいた。それによって地形図がほぼ完全によめるようになった。

在学中にこの山城三十山の改訂がおこなわれて、五万分の一地形図に山名の記入がなくても選に入れることとなって、平均高度がずいぶんたかくなった。三年生のとき、その山岳誌『山城三十山記』（上・下）をつくることになった。一九三四年に上篇がでた。編集は、のちに大阪商大山岳部員として活躍することになる大橋秀一郎だった。そのあとをわたしがひきうけて、下篇は一九三五年、わたしが四年生のときに完成した。その春までにわたしは三十山を完登していた。

登山の基礎を身につける

山城の三十山をのぼっているあいだに、わたしは登山のもっとも基礎的なマナーと技術を身につけたようにおもう。動物や植物の知識もまなんだ。もっぱら北山が舞台であったために、ほかにはあまり足をふみだしていない。それでも二年生の夏には伯耆大山に遠征した。三年の夏には、北山を横断して由良川源流をのぼり日本海まであるいた。四年生の夏には紀伊半島の山をあるいた。高見山、国見山、大台ヶ原山と大峰山脈を釈迦ヶ岳から吉野まで縦走した。

一九三六年には第三高等学校すなわち三高に入学して、さっそくに山岳部に入部した。ここからわたしの本格的な山あるきがはじまる。一年生の夏には、当時すでに京都大学の学生になっていた鈴木信をリーダーに、三人で南アル

プスにむかった。中学時代にはわたしは日本アルプスには足をふみいれていなかったので、これがはじめてのアルプス経験だった。一般的な登山路ではなく、遠山川の支流の兎洞という沢をのぼりつめて、聖岳の北にある兎岳にとりついた。あとは赤石岳、小河内岳、塩見岳まで縦走した。当時の南アルプスはまだ登山者もすくなく、まことに気もちのよい山旅だった。

南アルプスをおりると、そのまま上高地にはいった。槍ヶ岳にのぼり、黒部源流におりた。黒部五郎岳、薬師岳にのぼり、有峰にくだった。この黒部源流には、のちにたびたびゆくようになる。

冬はスキー合宿である。信州の南小谷村の蕨平というところで、はじめて本格的にスキーをならった。三高山岳部のスキーは、先輩の高橋健二氏がスイスから導入された正統アールベルク派であった。一週間ほどで、いちおうの山岳スキー術を習得すると、さっそくに冬山にむかった。乗鞍尾根の途中、天狗原のすこし下の森林内に重量天幕をはって、そこで合宿した。積雪期登山のトレーニングがはじまり、白馬乗鞍をへて小蓮華岳までいった。これでわたしは山スキーとアイゼンの積雪期登山の基本的な技術を身につけた。

翌年の春には、積雪期の黒部源流にはいった。鈴木信をリーダーに中村恒雄、四方治五郎とわたしの四人のパーティーだった。有峰から折立峰をこえて、真川から太郎小屋にはいった。薬師沢と黒部本流の出合いに、軽量天幕を二張りたてて根拠地とした。

三月の黒部源流は、まったくスキーの天国だった。薬師、鷲羽、水晶、黒部五郎などにのぼり、かえりはスキーですっとばしてかえった。黒部本流は両側からの雪崩のデブリで、いたるところにスノー・ブリッジができていて、渡渉は一どもなかった。わたしはこの山ゆきで、積雪期登山の醍醐味を満喫した。

「雪よ岩よ」

その後、毎年十二月には山岳部のスキー合宿に参加した。あとは冬山である。山岳スキーは上達したが、危険なこ

ともあった。一ど雪崩にまきこまれ、雪の急斜面での滑落もやった。天狗原では吹雪のなかでリング・ワンデリングをやり、雪上でツェルト・ザック一枚のビバークも経験した。

一九三九年の一月には八ヶ岳の西壁をやった。行者小屋を根拠地にして、赤岳西面のバットレスをのぼった。最初の日は時間ぎれでひきかえして、二回目に成功した。アンザイレンしている先頭の隊員がピッケルでステップ・カッティングをやっているのを見あげると、紺碧の空を背景に氷片がヒラヒラと飛びちって、じつにうつくしかった。

この冬の八ヶ岳では赤岳のほかに、権現岳と阿弥陀岳にのぼっている。阿弥陀のコルの風のすさまじさにはおどろいた。

当時、妙高山の南麓の笹ヶ峰に京都大学のヒュッテがあった。春にはここを根拠地に、いわゆる頸城アルプスをあるいた。火打山、焼山、妙高山などである。ここもスキーの天国で、妙高のグルワ（外輪山）のブナの斜面の滑降はすばらしいものだった。

三高ではわたしは二ど落第したので、けっきょく五年間を山岳部ですごしたことになる。山岳部のルームの壁におおきな方眼紙がはってあって、部員ひとりひとりの登山日数がグラフにしめされるようになっていた。わたしは年間百日ほど山にいっていた。これでは出席日数の点からいっても、落第するのは当然である。

三高山岳部歌は「雪よ岩よ」ではじまる。後世「雪山讃歌」の名で世間で歌われている歌である。わたしの五年間は、まったくそのとおりだった。岩のぼりもひととおりやったので、どの山にいっても少々岩がでてきても、なんということはない。ただ、たいした岩壁はやっていない。穂高も劔もわたしのフィールドではなかった。

当時、京大には山岳部はなかった。そのかわりに旅行部というクラブがあって、これが先鋭なアルピニスト集団でヒマラヤを目ざしていた。そのルームにはすばらしい山岳図書のコレクションがあった。神戸のイギリス人の貿易商が帰国するにあたって処分したものを、京大が買いとったのである。わたしはそのルームにかよって、それらの本をよみあさった。グリブルの『ジ・アーリー・マウンテニアーズ』などを読破して、ヨーロッパ登山史についてもかな

りの知識をえた。

三高山岳部のルームにも、イギリス山岳会の数次にわたるエベレスト遠征記録をはじめ、かなりの山岳書があった。そのなかで、わたしたちが教科書として愛読していたのは、バドミントン・ライブラリーというスポーツもののシリーズの一冊で、ウインスロップ・ヤングのあらわした『コンプリート・マウンテニアリング』という書物だった。このことからもうかがえるように、わたしたちの登山はその思想においても技術においても、岩のぼりを主とする大陸派の登山よりも、イギリスのオール・ラウンドなアルピニズムの文化的系譜につながっていたのかもしれない。しかし、スキーは完全にアールベルク派である。

白頭山

三高山岳部の五年間は、まことに充実した年月であった。わたしはここで山以外のこともたくさんまなんだ。そして、おおくのすぐれた友人たちをえた。その人たちとは今日も親交がつづいている。

一九三九年には、川喜田二郎と北海道の大雪山系にはいった。松山温泉からカウンナイ川をのぼった。大島亮吉の『山―研究と随想』のなかにでてくる沢である。トムラウシの頂上に達して、それからヌタップヤンベツ川をくだって石狩川源流に達し、層雲別にでた。そのあと北見の海岸の鉄道のないところをあるいて開拓村をみた。かえりに札幌で佐々保雄先生のお宅に泊めてもらった。

三高時代の最後の夏には、北朝鮮の山やまをあるいた。同行者は藤田和夫、伴豊のふたりであった。ソウルでは京城大学山岳部の人たちと飯山達雄氏らに世話になり、教示をえた。日本海岸の朱乙温泉から冠帽峰連山をこえて豆満江上流にでて、さらに摩天嶺山脈をこえて鴨緑江源流にでた。そのとき、北胞胎山、白沙峰、南胞胎山にのぼっている。

白頭山は匪賊が出没するというので、原則的に入山は禁止されていた。わたしは恵山鎮の警察までいって署長にあい、交渉の結果、黙認ということにしてもらった。胞胎里から神武城まではトラックに便乗した。神武城は満州側へ

の道路工事のための前進基地だった。そこで空白だらけの未公開地図をみせてもらった。それによると、白頭山頂の天池の水は北にながれて三道白河となる。それをたどれば、満州側の警備の最前線にでられるはずである。わたしたちはこの冒険を実行することにした。

白頭山の頂上までは二日かかった。火口壁からみた天池の景観はすばらしいものだった。一八八六年にインド連隊のわかき士官フランシス・ヤングハズバンドが満州側から火口壁に達し、やはりこの天池の景観に接して狂喜したという。

その日の夕がた、わたしたちは絶壁にちかい火口壁をおりて、湖岸にある無人の崇徳寺にまっくらになる寸前にもぐりこんだ。

翌日は嵐がふきあれて滞在、つぎの日に火口壁をよじのぼって稜線にでた。これからわれわれがおりてゆこうとしている白頭山の北面は、地平線まで見わたすかぎりの大森林だった。天池の水は火口壁の切れ目から噴出して滝となり、この大森林のなかに吸いこまれている。わたしたちは北面の急傾斜をくだって、川ぞいに北へと密林のなかの行進をはじめた。

猟師道らしき踏みあとが断続的につづいていたが、倒木をこえて道のない密林の行進は時間と労力がかかった。三日ぐらいで人家にゆきあたるかとおもっていたが、じっさいは六日かかった。そしてついに、満州側最前線の警備隊にたどりついたのであった。そこで、われわれがおりてきた川筋は二道白河であることを確認した。つまり地図がまちがっていたのである。わたしたちは第二松花江の源流の確認という、地理学上の発見に成功したこととなる。

大興安嶺探検

一九四〇年の十二月には、京都大学探検地理学会がカラフトにイヌぞり踏査隊を派遣した。隊員は六名で、わたしひとりが三高生であとは京大生だった。そのなかには、のちにマナスル登頂者となる今西壽雄やおなじくヒマラヤで

活躍する中尾佐助がいた。わたしたちは敷香（シスカ）郊外にあるオタスの杜の原住民の村でギリヤーク（ニブヒ）とオロッコ（ウイルタ）をやといいれ、二台のイヌぞりチームとともにカラフト東北山脈にむかった。

このイヌぞり行は、もちろん将来の南極探検を想定しての準備行動であった。カラフトのイヌぞりについては、西堀栄三郎氏におしえられるところがおおかった。のちに日本の第一次南極観測隊が派遣されたときに、加納一郎氏らの指導によりイヌぞり隊が参加している。わたしはその準備段階で多少のお手つだいをした。戦前のこのささやかなイヌぞり体験も、いくらかは役にたったのである。

一九四一年にわたしは京都大学理学部に入学した。今西錦司先生を中心に探検家を夢みる学生たちがあつまって、その夏にはミクロネシア諸島における探検の実地訓練がおこなわれた。パラオ、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルートとまわり、そのうちポナペ島にはもっともながく滞在した。島を一周し、中心のナナラウト山にも登頂した。この遠征は、いわば探検隊の見習士官たちの訓練旅行だったのである。

翌年には今西先生を中心に学生探検家たちが力を結集して、北部大興安嶺縦断を決行した。ハイラルから黒竜江上流のガン河をさかのぼり、大興安嶺の主脈にそびえる英吉利（イキリ）山頂に達した。それからビストラヤ川本流を下降する本隊と、中央部のまったく地図のない白色地帯を突破する支隊とにわかれた。支隊は川喜田二郎を隊長に藤田和夫、土倉九三、そしてわたしの三名が隊員で、コサックひとりとウマ三頭がついていた。約二十日ののち、空白地帯をぶじ突破して、北から南下してきた漠河隊に合流することができた。地図のない地域をゆくには天体観測と推測航法をもちいた。この探検行は実質的には地球上の空白地帯をうめるという点では、地理学的探検として最後にちかいものであったかもしれない。

一九四四年には中国の張家口に西北研究所というのができて、今西先生が所長として赴任されることとなった。所員には加藤泰安、中尾佐助などがいた。わたしもその所員として二年間を大陸ですごすことになる。モンゴル草原には、わたしは前後三どはいっている。そのうち、冬の半年間をウマとラクダの背でくらした。モンゴルは大草原であっ

て、山はない。しかし、当時は登山家たちもたびたびモンゴルに遠征隊を出した。京城大学の泉靖一らのグループや京都大学の木原均教授らの調査隊のほかに、京大旅行部の学生たちも鈴木信を隊長に遠征隊をだしている。ヒマラヤにゆけない戦争中はモンゴルがその代替物だったのである。わたしたちが蒙彊の張家口に乗りこんだのも、しだいに内陸アジアを西にたどって、青海、チベットをへて、北側からヒマラヤに接近することをかんがえていたのである。

終戦とともにモンゴルを脱出して天津にいたり、翌年の五月にわたしは帰国した。

マナスル攻略

終戦後は国内に閉じこめられてしまった。それでもゆけるかぎりとおいところにゆこうというので、一九四九年に屋久島にいった。好日山荘の西岡一雄老と今西錦司先生との三人づれである。安房（あんぼう）から宮之浦岳に登頂し、島を一周した。これが戦後最初の山ゆきだった。

戦前の京都大学には山岳部はなく、実際の活動は旅行部とＡＡＣＫ（のちの京都大学学士山岳会）によっておこなわれていた。戦時中は旅行部は解散を命じられ、ＡＡＣＫも実質的な活動は停止していた。わたしはその戦前における最後の会員である。

戦後に京大山岳部があらたに結成され、ＡＡＣＫに接触をもとめてきた。わたしはかれらの相談にのることとなった。伊藤洋平、藤平正夫、舟橋明賢、林一彦の諸君がいたようにおもう。伊藤はマッキンリー計画を提案したが、わたしはそれにつよく反対してヒマラヤをやるべしと主張した。講話条約はちかく締結されるであろうし、国外遠征にでられる日もとおくないと判断したのである。インド学術会議を利用して、西堀栄三郎さんがニューデリーにゆき、ネルー首相にあい、日印合同のヒマラヤ登山を提案されたが、ネルー首相の反応は時期尚早というものであった。西堀さんはその後、戦後の日本人としてはじめてネパールのカトマンドゥにのりこみ、ヒマラヤ登山の許可を申請された。

京都ではＡＡＣＫが再建され、活動を開始していた。すでに目標の山はマナスルと決定されていた。この山についてはまったく資料がなく、はじめは対象から除外されていたのであるが、今西先生は「なにもわからないから、これをやるんだ」といわれた。わたしは今西先生の強烈なパイオニア精神に感動した。

今西先生とわたしが所属する理学部の動物学教室が、いわば作戦本部となった。わたしはそこに勤務する参謀将校だった。資金づくりもその仕事のひとつだった。わたしは朝日新聞社に後援を依頼するために、甲子園の藤木九三氏宅をおとずれた。藤木さんはたいそうよろこばれて、朝日新聞社で話がまとまりそうだった。ところがこれがひっくりかえって、けっきょく毎日新聞社が後援することにきまった。ＡＡＣＫ会長の木原均先生の「学術は朝日、スポーツは毎日」という方針がものをいったようである。

ネパールからの許可はなかなかこなかった。一大学のクラブでは許可をだしにくいのだろうというので、この計画は日本山岳会に全面的に委譲することになった。このときにわたしは日本山岳会に入会したのである。

ところが全面委譲がきまってからネパール政府の許可がきた。しかし、すでにことは決定していた。マナスル攻略作戦は東京ですすめられていた。一九五二年には今西先生を隊長とするマナスル偵察隊が派遣され、その学術班として中尾佐助と川喜田二郎が参加した。わたしももちろんマナスル隊に参加するつもりであったのだが、一九五一年にドクター・ストップがかかった。わたしは肺結核におかされていたのである。

一九五三年には京都大学のＡＡＣＫは独自のヒマラヤ遠征隊をだすことになり、今西壽雄を隊長とする七名の隊がアンナプルナⅣ峰をめざした。日本山岳会によるマナスル攻略はつづけられて、一九五六年六月には今西壽雄によって初登頂がなしとげられたのは周知のとおりである。

ヒンズークシとアフリカ

わたしは二年間の療養生活の甲斐あって、健康を回復した。一九五五年には木原均教授を隊長として京都大学カラ

コラム・ヒンズークシ学術探検隊が派遣されることになって、わたしはそれに参加をゆるされた。わたしはヒンズークシ隊に所属してモゴール族の探査にあたることとなった。西ヒンズークシ山中のどこかに、むかしのイルハン国の辺境駐屯部隊のモンゴル人の子孫がいるはずだというので、それをさがしにゆくことになった。そして、西ヒンズークシの奥ふかくにモゴール族とよばれるかれらの村があることをつきとめ、その調査に成功した。

この西ヒンズークシは山または山の山岳地帯だったが、ここでもわたしは登山らしいことはやっていない。三〇〇〇メートル級の峠をいくつか越えただけである。この探検行が転地療養になったのか、わたしは完全に肺結核を克服した。

一九五七年には、当時わたしが所属していた大阪市立大学が東南アジアに学術調査隊を派遣することになって、わたしがその隊長をつとめた。この隊は隊員六名、ジープ三台という編成で、タイ、カンボジア、ベトナム、ラオスの諸国をはしりまわった。それは自動車を主とする調査隊ではあったが、北タイのチェンマイにちかいタイ国の最高峰ドーイ・インタノンにのぼっている。三〇〇〇メートルにもみたない山だが、大きな山でけっこう時間がかかった。

一九六一年には大阪市立大学と京都大学学士山岳会が共同で、ビルマの奥のカカボ・ラジ峰に登山隊・学術調査隊をおくることになった。わたしはその総隊長として、登山隊と学術隊と両方の指揮をとるつもりであった。ところが、この隊にはビルマ政府の許可がおりなかった。ビルマと中国のあいだには国境未確定という問題があったので、許可されなかったのであろう。今日では入山がゆるされるようになって、一九九五年にはいくつかの隊が登頂をこころみたが、いずれも成功しなかった。この山はヒマラヤにつづく高山帯の東の端にあたるが、こうしてヒマラヤ遠征の隊長をつとめるというわたしの夢は、ついに実現しなかった。

その後わたしはビルマには二ど入国しているが、山にふみいることはなかった。

マナスル陥落後、AACKはつぎからつぎへとヒマラヤ、およびカラコラム方面に遠征隊をおくりだして、いずれも登頂に成功した。チョゴリザ、ノシャック、サルトロ・カンリなどである。わたしはこのいずれにも参加はしていないが、計画の相談にのり、また報告書の刊行を手つだった。

一九六三年からはアフリカで仕事をした。今西先生らの京都大学アフリカ学術調査隊は、その数年前からアフリカでの類人猿の調査をおこなっていたが、その対象を人間にまでひろげることになり、わたしは本来の仕事である牧畜民の調査のためにタンザニアにいった。

そのとき、調査地のちかくにあるキリマンジャロの登山をこころみている。しかし、このときはわたしは足をいためて、登頂をはたせなかった。キボ小屋までいったのだが、ファイナル・ピークにはゆけなかった。

山をみる旅

肺結核をわずらってからあとは、わたしはからだをいたわって、あまりはげしいことをやっていない。ヒマラヤにいどむこともなかったが、機会あるたびに山にちかづいた。のぼらないまでも山をながめるのは、まことにしあわせなことであった。一九五五年の秋にはインドのカリンポンへゆき、カンチェンジュンガをみた。夜あけに、まずその頂上が、あかい火が点灯されたようにかがやきだす。そして見るまに全容が朝日に照らされる。そのさまは、まことに荘厳雄大なながめであった。

一九六一年にはひとりでネパールを旅行して山をみた。バドガオンの高地ではエベレストは雲にかくされてみえなかったが、カカニ・ヒルでは好天にめぐまれて、アンナプルナ、ダウラギリ、ヒマール・チュリ、マナスルのすばらしい眺望をたのしんだ。

一九六〇年代にはなんどもヨーロッパにゆき、アルプスをみた。イタリア側からモンテ・チェルビーノ、すなわちマッターホルンに接近した。一九七〇年にはピラトゥス山からアイガー、メンヒ、ユングフラウをみた。ヨーロッパ旅行は自分で車を運転して、おおきな峠をいくつもこえた。バルセロナからアンドラでピレネーの大峠をこえ、フランスにはいった。モンブラン・トンネルをぬけて、イタリアからシンプロン峠をこえ、スイスにはいった。峠のうえにはおおきな雪田があった。

一九八二年にはパミールにいった。カシュガルから南下して、コングール峰とムスターグ・アタ峰との中間でキャンプした。コングールは山のかさなりのなかから頭をだしていた。ムスターグ・アタの巨大な山容が目のまえにひろがっているのは、すばらしいながめだった。

一九八三年にはチベットを旅行した。ラサから五〇〇〇メートル以上の峠をこえて、シガツェまでいった。氷河の末端にちかかったが、わたしは高度の影響を感じなかった。

一九八六年の春、わたしは最後の積雪期登山をやろうとおもった。立山本峰である。一九五七年秋、わたしは黒四ダムの予定地をみにいったことがある。扇沢からヘリコプターで鳴沢岳をこえて、黒部本流と御前谷の出合い付近にいったんおりて、それからさらに黒部本流にそって内蔵助谷の出合いまでいった。その後、黒四ダムができあがってから、いわゆるアルペンルートをこえたことがある。しかし、立山にはまだのぼっていなかった。

一九八六年に当時関係のあった富山県庁のひとが立山を案内してくれるというので、登山を決心したのである。AACKのメンバーがサポートしてくれることになった。ピッケルもアイゼンも息子たちがもっていってしまっていたのをとりもどした。立山ゆきは春に予定していた。ところが三月十二日に、わたしは突然に両眼の視力をうしなったのである。ウイルスによる球後視神経炎という病気だった。最後の積雪期登山は幻ときえた。

もう一ど北山へ

一九九四年六月十二日、わたしはなつかしい北山をおとずれた。今西錦司先生のレリーフが、むかし京都一中の山小屋があった付近の岩にはめこまれるという。その除幕式に参列するためである。しかし盲人が道のない谷筋をゆくのはかなりむつかしかった。わたしは長靴をはいて渡渉しながら谷をのぼった。日本山岳会京都支部の諸君がずいぶんといたわってくれたので、ようやく現場に到着した。現場には山岳会の会員多数が貴船のほうからあがってきていた。わたしは岩のうえにあがって、手をのばして今西先生のながいアゴをなでた。

マナスルへのプロローグ

松田雄一

まえがき

今年は、マナスルに登頂して四十周年を迎える。さらに西堀栄三郎元会長がマナスルの登山許可の交渉に、単身ネパール入りしてから数えると四十五年になる。この機会に日本山岳会としても当時を回顧し、今まで秘話となっていたことも堀りおこし、マナスル登頂に成功するまでにお世話になった方々の名前を記録に残しておくことは意味がある。むしろ遅きに失していることを、田口二郎氏から指摘され、当時マナスル登山参加の最年少隊員であったことをも顧みず、諸先輩をさておき、この難しいテーマにとりくむことになった。

たまたま、昨年物故された初登頂者の今西壽雄氏の会社で保管していた本会関西支部の資料の中に、西堀氏が一九五二年にマナスルの登山許可交渉にでかけた際に、現地から今西錦司氏宛て報告された「Dr. 西堀の印度・ネパール便り」の二冊のファイルとその後の英文の往復文書のコピーが、偶然の機会に発見されたということを耳にし、阿部関西支部長にお願いし、AACKの許可を得て、コピーをお借りすることができた。そしてこれにより今までわからなかった幾つかの事実もわかってきたので、別項の座談会「マナスル登山を振り返る」での発言なども合わせて参考にして本稿をまとめることにした。

この稿では、マナスルが具体的に登山の目標として選定されてから、踏査隊が出発するまでの一九五一～五二年にかけての間の問題点にスポットをあて考察してみることにした。内容については極力、活字になった記録をもとにまとめたつもりであるが、何分にも当時主役を演じた方々は、極く一部の方を除き、殆ど故人となっていることもあり、思い違いや誤りがないとはいいきれない。この点については、ご指摘を戴き修正してまいりたいと考えている。

一、戦後のヒマラヤの黎明

日本山岳会の動き

一九三五年前後から、京大、早稲田、慶応、立教などの各大学では、ヒマラヤを目指して具体的な研究をつづけていたが、僅かに一九三六年に立教大学がナンダコートに登っただけで、太平洋戦争の影響もあっていずれも実現には至らなかった。

戦後日本山岳会では、一九四七年頃より松方理事長を中心に関東の大学山岳部のOBが動員され、着々と再建計画がすすめられていた。一九四八年一月には国体登山に対応し、また将来の遠征計画に備えるため、理事を大幅に増員する等定款の一部を改正（会報一四一号参照）し、松方理事長のもと、堀田、浜野、谷口の三常務理事等が中心となって、ヒマラヤへの研究を行ったこともあった。しかし現実の問題としては敗戦後の日本からの海外登山は、直ぐには実現することも出来ず、十一月下旬に堀田氏を総指揮者、谷口氏を同補助として学生のために富士山で冬山技術講習会を実施したり、九重山の国体登山に協力するなどして、お互いの力量を認識しつつ、いざという時に備えていた。

一九四七年にインドが独立してからは、ヒマラヤへの入国事情が一変した。今までチベット側から迂回してエベレストを登っていた英国隊も一九四九年のネパールの開国に伴い、ネパール側から偵察に入るようになり、一九五〇年のフランス隊による「アンナプルナ―最初の八〇〇〇メートル峰の初登頂」に刺激され、各国がネパールへの入国をアプローチするようになり、ここにヒマラヤの黄金時代が開幕した。

日本山岳会でもこれに備えて一九四九年四月の総会で、堀田彌一氏を責任者とする、望月、山田、村木氏等による特別委員会が設置されている（会報一四五号参照）。この委員会は、ヒマラヤ遠征に関する、あらゆる研究調査を行う委員会ということであった。しかし具体的目標がないまま富士山の国体を手伝ったりしていたが、やはり具体的目標がないと進まないということで、一九五〇年初めには、早稲田のグループ、今村、関根、村木氏等六名により、特別委員会の下部組織としてブロードピーク小委員会が設けられた。目標は八〇〇〇メートルの未踏峰ブロードピーク。日本山岳会の名のもと、日本を代表する遠征を行おうとするものであった。（会報一四九号参照）。しかしこの計画も登山許可の入手が難しかったため意気が上がらず、そのうちに、関根氏が早稲田の遠征隊を指揮して南米のアコンカグアに向かうことになり、この委員会も消滅している。

この頃朝日新聞の藤木九三氏は、アテネ文庫の一冊として『ヒマラヤ登高史』（一九五〇年七月、弘文堂刊）を発行し、ヒマラヤに新時代が訪れることを予測し、高山一覧表の中に世界第九位の高峰としてマナスル（八一二五メートル）の名を記している。その後一九五一年になり対日講和条約の調印が近いことを見越し、福岡山の会がトゥインズを計画（会報一五八号参照）して本会への後援を依頼している。

京都大学のマナスル計画

一方京都大学のグループでは、戦争中も大興安嶺等へ探査隊を送り、将来のヒマラヤを目指して準備を怠らなかった。一九五一年九

月、サンフランシスコで対日講和条約が調印され、愈々海外渡航の路が開かれた。この頃京都大学は戦前のＡＡＣＫ（京大学士山岳会）の今西、梅棹、中尾氏等のグループと、戦後京大山岳部として育った伊藤洋平氏等が話し合って、ヒマラヤ登山の構想を練り、その機会をうかがっていた。先ず資金の調達が先決であるとして木原均先生をかつぎだして毎日新聞社をスポンサーとする見通しをつけ、登山許可の取得のための策をめぐらしていた。

この辺の経緯については、徳岡孝夫氏の『ヒマラヤ――日本人の記録』（一九六四年一月、毎日新聞社刊）に詳しく述べられており、その後、京都大学ＯＢの斉藤清明氏により、今西錦司編『ヒマラヤへの道・京都大学学士山岳会の五〇年』（一九八八年五月、中央公論社刊）が発行されたが、マナスル当時の記事については前者とほぼ共通している。

詳しいことは、これら両著にゆずるとして、その時間的経過を要約すると――

ヒマラヤ計画は一九五一年夏から始まっている。先ず、伊藤洋平氏が、人文科学研究所の今西氏の部屋を訪れ、〝講和条約も大詰めを迎えようとしている。来年は日本人も海外へ出られそうだ〟〝よしネパールだ〟ということになり、伊藤氏は、中尾、梅棹氏等と話し合って、毎日新聞の京都詰め記者三好修氏を同行して木原均氏を訪ね、木原先生の協力する旨の約束をとりつけて具体的に動きだした。

ところが戦前にヒマラヤ計画をたてていたＡＡＣＫは未だ開店休業中であり、今西氏らも、実働部隊である山岳部の若いＯＢ達を知らなかった。そこで今西氏は、登山と共に探検も考え、そのための組織として、生物史研究会（Fauna & Flora Society：略称ＦＦ）を一九五一年秋に発足させている。

ヒマラヤ計画の発端をつくった伊藤氏が、この計画を『岳人』の創刊で世話になった藤木氏に打ち明けたことから、毎日新聞社と朝日新聞社との間で争奪戦がはじまる。十月十一日の広島の遺伝学会、さらに十月十六日の東京の日本学術会議の時までこの争いが持ち込まれたが、最終的にはＡＡＣＫ会長の木原先生の「学術は朝日、スポーツは毎日」という方針で毎日新聞に決定された。さてヒマラヤ・エキスペディションの派遣を決め、スポンサーもついた。あとは目標とする山を決めることになった。その時期は明らかではないが、前記二著によれば、今西、中尾、梅棹、伊藤氏ら主要メンバーが集まって検討会が行われたが、席上、今西氏が『山岳』第四十五年（一九五一年六月）の木暮理太郎氏の遺稿「中央亜細亜の山と人」に出ている「中央亜細亜の高山目録」を提示し、既に登られたアンナプルナ峰を除く八〇〇〇㍍以上のジャイアント十四座の中のネパールにある九座の中から、消去法で選ぶことになった。既に外国隊が手がけている山やローツェの様に隣接している山を除くと、マナスルが目についた。この山については未知なところが、今西氏の探検心を揺さぶり、マナスルが目標として選ばれた――（筆者注・ティルマンの記録は既に公刊されていたが）と記されている。そしてこれが今まで定説になっていた。

マナスル異聞

しかしその後田口二郎氏はこの定説に対して、別の説があるとし

て藤木九三氏も陰の功労者ではなかったかと唱えはじめた。事の起こりは、瓜生卓造氏の書いた『日本山岳文学史』（一九七九年、中日新聞出版局刊）であり、同書の藤木氏に当てられた章の終わりの部分に次のような記述が見られたからであった。

「日本山岳会にマナスルという山を進言したのも藤木である。彼はティルマンの書によりマナスルの存在を知り、これこそ日本隊が狙うにふさわしい山と思った。しかし朝日は学術探検には熱を入れるが、登山の方はナンダ・コート遠征（昭和十一年）以来毎日に伝統がある。朝日の藤木が毎日に持ちこむことには障害が多い。藤木は今西錦司に話した。今西から木原均とリレーされ、毎日がマナスル行の後援者となった。」

このことについて田口氏は、『東大山の会五十周年記念・山と友』（一九八一年十月東京大学山の会刊）に、「マナスルの頃――パーソナル・ノート」と題して次のように書いている。「誰が最初にマナスルを云い出したのか（というようなことは）、古い昔のことで、どうでもよいように今では思われる。私自身もそのことは考えたこともなかった。しかし瓜生氏の文章は、あらためてそのことに私の注意を向けることになった。これはきちんと確かめておくべき問題かも知れない。」と述べ、その後瓜生氏に問い合わせたりし、陰の功労者として藤木九三氏があったのではないかとの自信を強め、西堀氏に確認を求めるなどしていた。しかし今となっては、当事者の今西、西堀、藤木氏等関係者の誰からも、直接話を聞くことが出来なくなってしまったがと前置きして、次のように述べている。

木暮理太郎氏の「アジアの高山表」のリストの中から、これだといって特定の山を選ぶのは、理屈の上からは簡単だが、八〇〇〇㍍峰登山を行う目標の選定としては、これだけでは理由が薄弱すぎる。何か他に理由がある筈だ。そしてそれが触媒的役割りを果たして「マナスル」が選ばれたのではなかろうか。そしてそれには、一九五一年五月に発行されたアルパイン・ジャーナル二八二号に掲載されたW・H・ティルマンのThe Annapurna Himal and South Side of Everestが影響しているのではないのか。ティルマンは、マナスルの西側を偵察し「ここからのルートの壮麗さと、困難さはわれわれを強く引きつけるに違いないが、もしこの山の高度が、実際の半分のものであったら、私は本当にひきつけられたかも知れない」といって、マナスルからアンナプルナへ転進している。この文章はティルマンのこの時の隊では登るのは無理だと判断したのであって、本格的に挑めば登れると思っていたのではなかろうか。ともかくマナスルを間近に眺めた初めての写真をとっており、しかも隊員のロバーツは東面ものぞいているのであるから、最初の登山の対象としてのマナスルの発見者はティルマンであり、特にこの時発表された写真は、今西氏のマナスルへの目標決定に大きな影響を与えていたのではなかろうか、と推察している。

時間的にみてもティルマンの文献は入手できた筈であり、ましてやヒマラヤに関心をもつ藤木氏のことでもあり、しかも朝日新聞社におられたのであるから、ロンドンから直接とりよせることも容易である。この頃には藤木氏は既にAACKの関係者とも接触があった筈なので、藤木氏のアドバイスが、マナスル決定の触媒的役割を果たしたことは間違いない。その上、田口氏が踏査隊の一員として

今西氏に同行した際も、今西氏がティルマンのA・Jのコピーを片時も離さずにもって歩いていたことからみても、ティルマンが真のマナスルの発見者であり、これを登ろうと考えた構想者は今西さんであったことは間違いないのだが、マナスルを進言した藤木九三氏の名も陰の功労者の一人として記録に名をとどめてもよいのではなかろうかと述べられている。これらの点については、田口氏は、「山と渓谷」七三四号（一九九六年九月号）の「特別企画・マナスル登頂四〇年」の中に、回顧録〝マナスルはヒマラヤに咲いた古典の花〟と題する談話を発表されているので参照されたい。

田口氏はこの談話の中で、「ものごとは実行の前にまず発見があるわけである。マナスルの最初の着想者は誰であるかということは、実行者の陰に隠れて見えなくなってしまっているけれども、そもそもマナスルに登るという発想がないとはじまらない。誰がその触媒の役を果たしたのか。社会的にも、登山史にも大きな影響を与えたマナスルの陰の功労者についてはもっと語られてもよいし、しかるべき名誉が与えられるべきものと考える。そう考えると、そもそもマナスルを最初に登ろうと考えたのはティルマンであり、そしてティルマンが日本の先遣隊の役割を果たしていた。山登りというのは、そういう先人の足跡をアプリシエートとしていくものではないだろうか。」味わいのある言葉である。

なお筆者は、田口氏の談話にでてくる朝日新聞社の片山全平氏（故人）の関西学院時代の同僚である藤木九三氏の令息・藤木高嶺氏に、直接問い合わせてみた。早速同氏から返事を戴き、大要次のようなお話を伺うことができたので、参考までに紹介したい。

(1)マナスルのことは、当時父に相談にこられた西堀氏に進言している。

父はA・J二八二号にでたティルマンの写真を見て、この山は英国が狙うとの確信をもった。しかし当時、イギリスはエベレストを登るために全力を傾けていた。だから早いうちにマナスルの許可をとる必要がある。

(2)梅棹先生が父に会いに来られたのは、父が西堀氏にマナスルを進言した後のことで、朝日新聞社の後援を依頼するためであった。

(3)京大独自でマナスルを登ろうという初期の段階では、朝日新聞後援の話があったが、実は朝日はひそかにイギリスのエベレスト登山隊を後援し、ロンドンタイムスから独占記事の特約を得ていたので、当時の朝日新聞の社長の意向で、朝日はエベレストにしぼり、従ってマナスルから降りて、毎日に譲った経緯がある。

(4)マナスルが毎日に決まった段階で、〝父が西堀さんに進言した話〟などはすべてお蔵入りとなった。

私はこの話を西堀さんのヨット「ヤルンカン号」で相模湾でクルージングした際西堀さんから直接聞いたので克明に覚えている——とのことであった。

因みに日本での「マナスル」という名の出現を時系列にみると、

①一九四八年十一月　山日記第十四輯「アジアの高峰」一覧表（吉沢一郎編）（注・出典は未刊の木暮氏の原稿の由）

②一九五〇年七月　藤木九三著『ヒマラヤ登高史』（アテネ文庫）。

③一九五一年五月　A・J二八二号、ティルマンの〝The Anna-

purna Himal and South Side of Everest"

④一九五一年六月『山岳』第四十五年、木暮理太郎編「中央亜細亜の山と人」。(注・木暮氏の原稿は遺稿であり、昭和十九年五月に亡くなられる以前に執筆されたものであり、バラードの名著「ヒマラヤ及び西蔵の地理地質概略」新版 "A Sketch of Geography and Geology of the Himalaya Mountains and Tibet (1933)" にもとずいてまとめられているが、バラードの「概略」には Kutang I (26,658 ft) としか出ておらず Manaslu の名は見られない。しかしインド測量部の地図には、

1932 年版 1 inch 4 mile map (1 : 253,440) } Manaslu (26,658 ft)
1933 年版 1 inch 8 mile map (1 : 506,880) }

の名称が見られる。従って木暮氏は、バラードの「概略」以外の文献・地図に目を通し、補足していることがわかる。

二、西堀氏の登山許可交渉

さて次に本稿の本論ともいうべき、マナスル登山許可交渉に話をすすめることにしたい。講和条約の調印も終わり、具体的な目標もスポンサーも決まった。一九五一年も慌ただしく暮れようとしていた。今西氏はじめＦＦを作った京都の人達は、次のステップとしてどうしてネパール政府にアプローチするかで頭を悩ましていた。しかしチャンスは意外に早く訪れた。カルカッタで開かれるインド科学会議 (Indian Science Congress) に招待されて、木原氏が訪印することになったのである。そしてこれを機会に、交渉能力にすぐれた西堀氏がアポイントされ、木原代表の随行という形で、インド、ネパールへでかけることになった。当時日本は講和条約に調印はしたものの、まだ批准されておらず独立国として認められていない状況にあったので、ネパールへの直接入国は無理と考えて、隣国のインドとの合同による「日印合同ネパール学術調査隊」を組織して、搦め手からネパール入国の許可をとろうというのだった。

この西堀氏のインド・ネパール行については、既に『山岳』第四十六・四十七年合併号（一九五一～五二年号）に「ネパール紀行」と題して公式報告が、要領よくまとめられているので、今更詳しい紹介は必要ないようにも思われるが、本稿の冒頭に述べた、西堀氏の「Dr. 西堀の印度・ネパール便り」には、公式報告には省略されている貴重な記録が詳述されており、多くの方々の温かい協力があってはじめて、短期間にあれだけの成果を上げられたことがわかったので、この機会にこれらの方々の協力を記録に残す意味でも、この交渉の跡を西堀氏の手紙をもとに、辿ってみることにしたい。以下は西堀レターの要約である。従って文中「私」とあるのは西堀氏である。

[インド政府との公式折衝]

一九五二年一月二日、インド科学会議は予定通りカルカッタで開催された。開会式の夕方には、ネール首相招待による晩餐会が行われた。この席で、木原先生と私は、ネール首相をつかまえて、日印合同でのネパール学術調査 (Indo-Japanese Scientific Expedition to Nepal) を提案した。ネール首相は大変興味を示され、その計画書を資源・科学大臣のバトナガール博士 (Dr. S.S. Bhatnagar) に手

渡し、あとはニューデリーでバトナガール博士と具体的に話を詰めるようにとのことであった。一月十二日以後ということであったので、その間ヒマラヤン・クラブでヒマラヤ事情の調査をしたりして、一月十二日デリーへ飛び、ニューデリーでの交渉がはじまった。しかし多忙なバトナガール大臣には会うのも大変で、日本政府のデリー在外事務所の関氏の協力を得て漸く会うことが出来たものの、今度はネパールでのことだから外務省のハクサール次官を訪ねるようにいわれ、外務省へ行くと今度はネパール大使館と相談するようにタライ廻しされ、時間ばかりかかって進展が見られなかった。はっきりとはいわないものの、提案は断わる理由はないが、機が熟さずというようなことであった。このような経過を辿り、木原氏は帰国の途につかれ、後は私が一人で孤軍奮闘することになった。

[ラフール教授の協力]

インドとの交渉が全く暗礁に乗り上げ、困っていたところ、一月二十四日夜、ヒマラヤン・クラブのビスワス博士の紹介で、ラフール教授（Prof. R.N. Rahul）の訪問を受け、次のような貴重なアドバイスを受けた。

〝貴方のやり方は間違っている。ネパールに入国したいのであれば、はじめからネパールに申請すべきである。インドに気兼ねする必要はない。むしろ独立国としてのネパールを尊重するべきである。もう一度計画書を作り直して、私と一緒にネパール大使に会おう〟というのである。……インドの登山事情、ヒマラヤン・クラブの実情、将来の可能性など、話は十二時過ぎまで続いた。彼の熱意には動かざるを得ない。何故もっと早くヒマラヤン・クラブは彼を紹介してくれなかったのか。彼の考え方は他の人達とは余りにも違いすぎる。彼の話を聞いていると、今の私のしていることは、イソップ物語のロバと老人を思わせるようなものだ。

[クリシュナからの電報]

一月二十七日、この日私のもとには三通の電報が届いたが、その中の一通は、私を狂喜せしめるものであった。私が念のために、カルカッタから手紙を出しておいたネパール人からの返事であった。このクリシュナ・バハドゥール・ヴァルマという人は、ネパールの体育協会の会長で、一年前のデリーの第一回アジア大会に、ネパール選手団長として参加した人で、私は毎日新聞運動部長の竹節作太氏から、彼宛ての紹介状を貰っていたので、これを同封して手紙を出していたのである。しかしその後何の音沙汰もないので、なかば諦めかけていたところだった。

VISA AND ACCOMODATION READY WIRE STARTING DATE FOR MEETING PATNA

つまり、カトマンズでの入国に必要なすべての手続きをしてくれて私をパトナまで出迎えにきてくれるというのだ。

私はすぐにラフール教授を訪ね、彼の指示を求めた。彼は〝この電報はネパール大使館にも内緒にしておいて、ともかくネパールに入国することだ。手続きなど必要ないので、早速パトナへ飛んで、ネパールからの使者を待つことだ。幸いネパール大使館には一応書類を出しているのだから、話はつながっているので心配ない〟という。〝カトマンズでの成功を祈る。ネパールでの話がまとまったら一緒にダージリンに行こう〟というのである。そこで私はともかく

すべてに優先してカトマンズに行くことにし、その旨クリシュナ宛てに電報を打った。H・Cのラフール教授との出会いは重要な出来事であったので詳述した次第。

〔念願のカトマンズへ〕

二月十日、ネパールの玄関口、パトナへ飛び、そこで出迎えのクリシュナ氏に会った。

二月十一日朝パトナ空港を飛び立ったINA（Indian National Airways）のDC3ダコタ機は、ネパールの首都カトマンズを目指し、順調に飛行した。そしてともかく戦後初の日本人としてのネパール入国を果たしたのである。

カトマンズについてからは、クリシュナ氏の住まいの近くのカマール・ホテルという急造の民宿に荷を下ろし、翌日からの活動の準備にそなえた。カトマンズでは自分が余りにもよくネパール人に似ているので、早速クリシュナ氏に頼んで、ネパールの国民服と帽子（トピー）をとりよせてもらった。これを着ると誰もがネパール人と間違える程である。ネパール服の私はどこでも大歓迎を受け一躍人気者になった。

〔コイララ首相とのインタービュー〕

ネパールでの公式訪問のアポイントは、すべてクリシュナ氏にまかせていた。

二月十四日、今日から公式訪問がはじまる。先ず最初が、M・P・コイララ首相（Matrika Prasad Koirala）である。私は例のネパールの国民服を着て、ラナ家の一族の息子の自動車で、首相官邸に乗り込んだ。応接室に招じ入れられ、一分とはたたぬうちに、国民服を着た数名がぞろぞろと入ってきた。この中の一人、四角い顔をした人が首相であり、握手の挨拶をした後、私に席をすすめながらの第一声は「貴方の国民服は実によく似合う。ネパール人との区別がつかない」といって最初から、大変フランクな気持で迎えてくれた。私はまず、入国させてもらった喜びとお礼をのべて、直ちに話題に入ろうとしたら、「貴方のネパールに対する印象はどうか」と問いかけてきた。私は空港についた時からアット・ホームの感じがし、山の景色や、竹藪のある風景も日本とよく似ており、その上、物の考え方がよく似ていることを話したところ、首相も早速それに同意して、〝自分の知る限りでも、日本には大変ネパールと似たところがあり、むしろインドよりも似たところが多い〟ことをのべ、日本がCottage Industryに大変すぐれた能力を持ち、ネパールは、今それを最も必要としているので、日本に大いに学ばなければならないことを力説された。これに対し私は〝その方面の研究もしているので、協力できると思う。是非しかるべき人材を派遣されるべきだ〟ということを話した。彼は既に日本に送ることも考えていることを話した。さらに桑の木もネパールには沢山あり、日本のように養蚕も適地であり、当然今までになされていなければならなかったのであるが、前の統治者がこれを禁止していたのでできなかったが、今は違うというようなことも話された。

話を本論にもどし、マナスル山群に登りたい旨説明すると、その山の場所を聞かれた。マナスルはアンナプルナのすぐ東側にあり、カトマンズからも近いことを話したところ、それなら問題ないと思う。自分はこの話を、ニューデリーで、ネール首相からも聞いたし、

ネパール大使からも聞いている。ネパールの国のためにもなることなので、是非やられるがよい。しかし今はその時期ではない。まだそれだけのアコモデーションもない。しかし数ケ月後にホテルも出来る。スイス隊にも、イギリス隊にも許可を出しているので、正式に申請してくれれば、閣僚（キャビネット）とも相談してみることにしよう。とのことであった。

私は今までのヒマラヤ登山が、一九三六年の日本のナンダコート登山隊をのぞき、すべて欧州人によって行われていることに不満を述べ、もしこの度の日本のマナスル隊に許可がいただけるのであれば、是非ネパールからも隊員としてメンバーをお迎えする用意のあることを述べ、首相も同意された。最後に、出来れば来年の本隊の前に今年の夏に下調べのための先発隊を派遣したいのでその許可も併せてお願いしたいことも伝えたところ、勿論許可するといわんばかりの態度で必要なアプリケーションをすぐに出すようにとのことであった。以上を以て私としてはいいたいことのすべてを伝え、ある程度の感触も得た。丁度秘書の人から、時間だからという声がかかったので、私も日本でネパールを紹介することに努力することを述べ、真珠のネックレスをお土産に差し上げて退出したが、会談は大成功であり、登山許可の取得に対し大いに自信をもった。

コイララ首相の印象は見るからにお世辞のない平凡な顔立ちをした人であるが、彼の顔や態度には、ありありと積極性があふれているように思われた。彼は昨年の革命のあとをうけ、Nepali Congress（ネパール会議派）の総裁として新生ネパールを背負って立つにふさわしい首相であると感じられた。彼のあの気のおけない気軽な態度、彼の博識、強い積極性こそ、ラナ家を中心として長年続いてきた鎖国から門戸を開き Autocracy を Democracy に切りかえた人そのものであった。

しかし経済的にも苦しい立場にあるなかで、インドという大国のそばにあって独立を守ろうとする苦労の程がうかがわれた。今後この国がどのように育っていくかということは、インドの出方次第であることは確かであるが、かつての満洲国と日本との関係のようなものでなく、もっと独立性が認められていることは注目すべきことであり、商人以外、役人などは、すべてネパール人であることが嬉しかった。

〔カイザー将軍の好意〕

二月十四日の午後は、時の国防大臣の官邸を訪問した。この国防大臣は一九四八年当時の統治者であるマハラジャ Mohan Sham Sher Jung Bahadur Rana の弟で、ラナ家から閣僚に入っている実力者である。官邸は立派な宮殿であった。この小柄で丸い顔の見るからに柔和な老紳士は、当時のネパールを支えていたご意見番であり、王様からの信任も厚く、大の親日家でもあった。カイザー氏は一九三九年十二月、アメリカより日本郵船の竜田丸で帰国の途次日本にも立ちよられた際、当時インドからの鉄鉱石の輸入で関係のあった神戸の岸本商店の田口氏（田口二郎氏の父君）にお世話になっており、田口氏はどうしておられるかとの質問があった。田口氏の二男・二郎氏は、戦後スイスから帰り、我々の山仲間として元気でいることを話したところ大変よろこばれていた。彼は心からの親日家で明治天皇を尊敬しておられ、別室には明治天皇・皇后両陛下の色写真

の額が掲げられていた。その前で私が最敬礼をしたので、彼は至極満足気であった。そして訪日した時に秩父宮殿下ご夫妻にもお会いになったとのことで、もし宮様に会われたら、自分がこのようなことをしていることをよろしくお伝え願いたいとのことであった。そこで私は秩父宮殿下は登山がお好きで、常に私達のことをご理解下さっており、今度のヒマラヤ登山が許可されることを願っているに違いないと思うという話を申し上げた。

私が今度登ろうとしているマナスルの登山許可について重ねてご協力願い度い旨をお願いしたところ、その山は何処にあるのかといい地図を見るために、彼のご自慢のライブラリーに案内してくれた。さすがに自慢するだけあって一寸見ただけでも五万冊は下るまいと思う。地図も沢山あるらしいが、見せてくれたのは、ネパール全体が三メートル位の長さのもので壁にかけられるものであったが、マナスル三山の部分にはマナスルでなくManachuliと書いてあった。勿論インド測量部の二十五万分の一の地図もあるのだと思われるが、今回は見られなかった。

〔編者注〕カトマンズの菊地参事官からの連絡によれば、〝カイザー元帥〟は現地では、英語読みでケーシャル・シャムシェル・ラナといわれており、このケーシャル・ライブラリーの創設者、ケーシャル・シャムシェル・ラナ元帥が世界一周の途次日本に立ちよった時に秩父宮殿下とお会いになられたとのことで、このライブラリーには秩父宮・同妃両殿下の署名入りの写真が飾られているとのこと。因みに元帥の夫人はトリブバン国王陛下の妹君ターラ・ラージャ・ラクシュミ妃殿下とのことであり、この写真がその頃のケーシャル・シャムシェルと故秩父宮ご夫妻との交流があったことを示すものであれば、両国の皇室・王室間の交流は随分古くまで遡ることができるとのことである。なおこのライブラリーの蔵書目録は、かつて本会会員神原達氏により整理されたことがある。

〔クリシュナ氏の協力〕

今回の私の訪問の際のネパール側の儀典長ともいうべき人は、クリシュナ氏そのものであり、彼はマナスル登山の実現のために献身的に協力することを惜しまなかった。今回この十日間という短い期間に、ネパール国王、首相、国防相、農相等主要な政府の要人に会って、文字通り日本の代表として、親しくお話を交わす機会が作られたことは、全くクリシュナ氏の功績によるといっても過言でない。それでは何故クリシュナ青年がこの様に一生懸命、日本のために努力してくれたのだろうか。

二月十五日、彼はこの辺の事情につき次のように説明してくれた。それは、彼が二年間位日本でCottage Industryの勉強をしたいからであった。そして彼はそのことが新生国家ネパールをよい国にするための道だということを知ったからである。彼は一年前のニューデリーでの第一回アジア・オリンピックの時に、その後亡くなった榎本氏から、Chamnan Lal：“Cottage Industry and Agricalture in Japan”という本を貰い、これをむさぼるように読んだ。そしてこれこそネパールをよい国にする唯一の道だと思うようになった。そのような時に西堀氏からの手紙が届いたのである。そして彼としてのありとあらん限りの努力をしてくれたわけである。

幸い彼の父はチェトリー（＝カースト名）でネパール国王の侍従武官をしていた関係で、王室との人脈があり、彼が体育協会の会長をしていた関係で、スポーツに理解をもつ皇太子とも、その秘書ローク・ダルシャン（Loke Darshan）氏を通じて親しかった。

そこで今回の場合も、クリシュナ氏は先ず、皇太子に事情を打ち明け、皇太子からは首相と同じ党派であるネパリー・コングレスの大物、ガネッシュマン・シン（Ganesh Man Singh）農林大臣に会うことをすすめられ、そして農相を通してコイララ首相を動かし、一方カイザー将軍からも王様に対し側面からプッシュして貰うようにしていたのであった。

彼はこのようにして、私のネパール入国を実現させ、マナスル登山許可が下りるべく最善の努力をしてくれたのである。

なおたまたまクリシュナが、出迎えにバトナへ出かけている間に、彼の夫人が、第二子（女）を出産したが、産褥熱にかかり、産後の肥立ちも悪く、大変な時期であった。にもかかわらず都合をつけて、必要なアテンドを行い、どうしても手が放せない場合は、次弟ディリー・バハドゥールか末弟ラム・クリシュナを動員して友人の手を借りるなど、フル・アテンドの労を惜しまなかった。

革命前のネパールでのスポーツはラナ家などの独占であって、一般の人には手の届かないものであったが、革命後は国王自身もスポーツはデモクラシー推進のために必要だとして大変力を入れておられた。それにこたえてクリシュナ・バハドゥール氏がうまくマネージしたこともあってネパールのスポーツは急速に普及し、バドミントン、サッカー、ピンポンなどの選手を、デリーのアジア大会に送ることができ国威を発揚することができた。成績はともかくとして、独立直後のネパールの国民の意識の高揚にどれだけ役に立ったか、またこれによってデモクラシーも促進されたものと思われる。

彼がネパール選手団の団長兼マネージャーとしてデリーに出かけ、そこで日本選手団の浅野均一博士や毎日新聞の竹節運動部長とも親しくなり、このことがネパールと日本との間の友好親善の面でいかに役に立ったか。ともかく未だ講和条約も発効していない時期に、戦後初のネパール入りを果たし得たことは彼の努力なしでは出来なかったものと、あらためて感謝の気持を表明したい。

〔ガネッシュマン・シン農相の協力〕

クリシュナに対し皇太子が先ず第一に相談するようにいわれたというガネッシュマン・シン氏はネパール独立の志士で、ネパリー・コングレスの大物であり、コイララ首相を動かすには最適任者であった。

彼は今回のマナスル計画にも賛同して、大いに共感の意を表し、英国の政策や旧封建時代の悪弊のために何もかも逆行したが、今は違う。ネパールは今日本の援助を心から願っていることを強調した。そして一日も早くネパール人がその隊員として参加できるようになりたいものだと述べた。またコイララ首相ともども、日本がネパールの留学生を受け入れてくれたら、どんなにかネパールは恩にきるかわからないとのこと。

話題をかえてマナスル登山許可申請のことになったが、マナスルではわかりにくいからヒマルチュリ・グループとした方が通りがよい旨のアドバイスも受けた。

ネパールの正確な地図は目下のところはインド測量部の地図しかないが、昨年（一九五一年）にスイスはArea Surveyのために写真を撮影したりして、援助してくれている。スイスもネパール同様Land Lockされた国という点ではネパールと共通点があるが、人種的にも、山のコセコセしていることも、米を常食としていることも、仏教のさかんなことなども考えると日本の方がより共通点が多いのではなかろうか。しかし今スイスは具体的にネパールを援助する姿勢を示している。学びたいのは日本であるのだが……と日本に対する期待感の大きいことも述べられた。最後に来年の本隊と、本年秋調査のための二～三名の先発隊の許可を重ねてお願いしたところ、ベストを尽くすと約束してくれた。

［その他カトマンズでお世話になった方］

カトマンズで滞在中、私は寸暇を惜しんでヒマラヤの展望台めぐりをして写真を撮ったり、農林大臣にディナーに招待されたり、革命の中心人物であった国務大臣（Parliament Minister）のKargaman Singhより〝日本に学ばなければならないことがあまりにも多い〟という話をきいたり、インドのマルワリ族の実力者の訪問をうけたり、クリシュナ夫人の妹の結婚式に招待されたり、トリ・チャンドラ・カレッジの化学の先生Surendra Singh K.Cより教育制度の話を聞いたり、ネパール政府の経済顧問であるBhosh Raj Sharmaより、ネパールの経済事情、有望な鉱物資源、戦前の対日貿易量が大きかったことなどの話を聞いた。最後にカトマンズを離れる前日の二月十九日は、Democracy dayを記念する観兵式に招かれて出席し、トリブバン国王陛下にも親しく拝謁する機会を得、登山許可申請について、最後のコンファームをすることができた。またその夜のロイヤル・パレスにおける映画会では、ロイヤル・ファミリーとも親しくお話することができ、インド大使にも挨拶する機会を得た。

［カルカッタでの残務］

二月二十日、愈々カトマンズを離れる日である。漸くこの日になって、以前から依頼してあった登山許可申請書のプリントが出来上ってきたので、これにサインし、後事はすべてクリシュナ氏に頼んで飛行場に急いだ。

こうしてこの日の夕刻、十日ぶりにカルカッタに戻り、やり残した仕事にとりかかった。先ずその一つはカトマンズで会ったマルワリ族のHimalayan Aviationという会社に頼んでマナスルの空撮を行うことであった。たまたま、カルカッタに来られた旧知のコイララ首相を空港でつかまえて、フライト許可を依頼し、三月五日未明にダムダム空港を離陸してマナスルの空撮に向かうところまで手配したが、最後の最後になって、ネパール政府からのフライト許可が得られず断念せざるを得なかった。

そこでトゥイーキという飛行士に、大金をはたいてマナスルの撮影を依頼して送ってもらうことにしたが、この写真はついに届かなかった（編者注：この写真については会報『山』四六〇号＝一九八三年十月＝松田雄一による「幻の巨峰――謎のマナスルの航空写真」を参照されたい）。

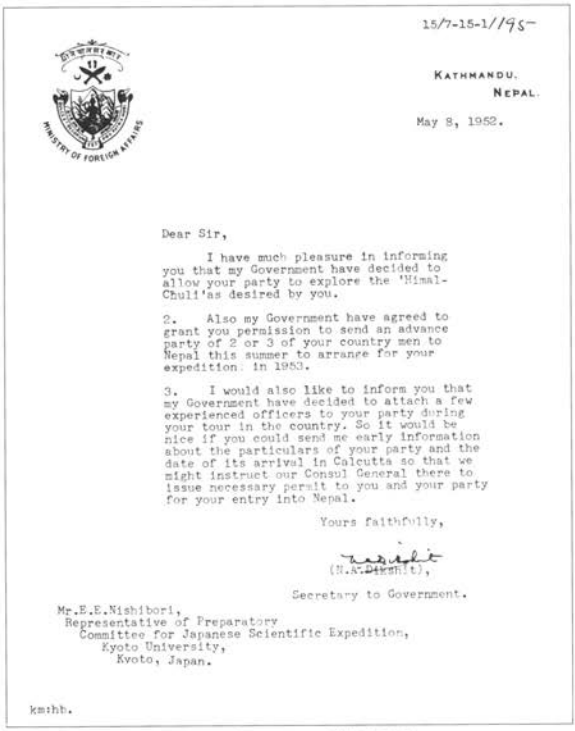
もう一つどうしても欲しかったものの一つにインド測量部の「地図の入手」の課題があり、正式に手続きをとったが、遂に入手はで

きなかった。

かくして最後の仕事としてラフール教授との約束で、ダージリンを訪問し、ヘンダーソン夫人に会って、シェルパのお願いをすることができた。

こうして「Dr. 西堀の印度・ネパール便り」は終わるのであるが、三月十四日、西堀氏は日本を出てから二ヶ月半ぶりに大役を果たして帰国した。

なおこの時の西堀訪ネの旅費は、すべて毎日新聞社が負担され、外貨はＵＰＩを通じて送られていた。記して謝意を表したい。



15/7-15-1/195-

KATHMANDU.
NEPAL.

May 8, 1952.

Dear Sir,

I have much pleasure in informing you that my Government have decided to allow your party to explore the 'Himal-Chuli'as desired by you.

2. Also my Government have agreed to grant you permission to send an advance party of 2 or 3 of your country men to Nepal this summer to arrange for your expedition in 1953.

3. I would also like to inform you that my Government have decided to attach a few experienced officers to your party during your tour in the country. So it would be nice if you could send me early information about the particulars of your party and the date of its arrival in Calcutta so that we might instruct our Consul General there to issue necessary permit to you and your party for your entry into Nepal.

Yours faithfully,

(N.A. Dikshit),

Secretary to Government.

Mr.E.E.Nishibori,
Representative of Preparatory
Committee for Japanese Scientific Expedition,
Kyoto University,
Kyoto, Japan.

km:hb.

ネパール政府のマナスル登山許可証

三、本会へのマナスル計画の移譲

一九五二年三月十四日、多くの成果を上げて西堀氏は帰国した。その結果ネパール側は学術探検よりも、むしろ登山の方を歓迎しており、登山を前面に出す方がよいのではないかと考えるようになった。となるとＦＦだけでは手に負えなくなる。学者は沢山いても、登り手が少ないからである。

一方戦前のＡＡＣＫは未だ休眠の状態であった。西堀氏の帰国に先立ち、来るべきネパール遠征にそなえて、戦後の新制大学移行に伴い、旧京大旅行部の流れをくむＯＢ、三高ＯＢ、新制の京大山岳部ＯＢ等のグループと、戦前のＡＡＣＫの会員との間で、ＡＡＣＫ再建の準備会が行われており、一九五二年春には、ＡＡＣＫも正式に再発足し、ヒマラヤを目指す体制ができつつあった。

（編者注：この間の経緯については、前記今西錦司編『ヒマラヤへの道・京都大学学士山岳会の五十年』の第八章に詳しく出ているので参照されたい）

西堀氏の帰国後、京大ＦＦの名（正確にはPreparatory Committee for Japanese Scientific Expedition to the Nepal Himalaya, Kyoto University）で申請してきた登山許可の返事は、すぐにはこなかった。ネパール政府は、一大学ではなく、日本を代表するナショナルチームが来ることを望んでいるのではないかとも想像されたし、また手強そうなマナスルの登山は、京大だけではなく、日本の登山界を代表する日本山岳会でやる方がよいのではないかということで、木原、今西、西堀氏らの意見がまとまり、日本山岳会への計画移譲の話が生まれた。

勿論ＦＦやＡＡＣＫの若手の間には、これに対する反対意見もあったが、日本初の八〇〇〇㍍峰に対する挑戦は、日本登山界の総力をあげてやるべきだとの大義名分論もあり、四月上旬には、木原、西堀両氏が、日本山岳会の槇会長を訪ね、間もなく到着するであろうマナスル登山の許可は、日本山岳会で実行して貰いたい。そしてこの計画には、既に毎日新聞社がスポンサーについていることも付け加えられていた。ただし本隊の登山については無条件で日本山岳会にお任せするが、この年の秋に行う先発隊と本隊に加わる科学班とは、ネパール政府との約束もあるので京都が中心になって実施すること、従って偵察隊の隊長には今西錦司氏をお願いしたいことが条件として付け加えられていた。

この申し出を受けた日本山岳会では、直ちに四月十六日、臨時役員総会を招集して、慎重に審議の結果、これを受諾したのであった。

本会は直ちに、本計画の推進と、責任の所在を明確にするために、ヒマラヤ委員会の組織を設け、一般会務とは切り離した特別プロジェクトとして実施することになった。

委員長＝槇有恒、委員＝松方三郎、木原均、日高信六郎、藤島敏男、伊集院虎一、三田幸夫、今西錦司、西堀栄三郎、堀田彌一の九名（注：後に早川種三氏が加わり十名となった）が推薦された。

四、登山許可の入手と踏査隊の編成

五月中旬になってネパール政府からの登山許可書が届いた（注：三二頁のコピー参照）。

五月八日付、外務省公文15/7-15-1/195、京都大学日本学術探検隊準備委員会代表西堀栄三郎宛て。内容は、

①貴殿要望のヒマルチュリ探検隊を許可する。

②一九五三年の本隊の準備のため、今夏の二～三名の先発隊も許可する。

③貴隊には何人かの経験のあるオフィサーを同行せしめることも決めた。従ってこれでよろしければ、カルカッタの総領事に対し、ネパール入国に必要な許可書を発行する様に指示するので、隊員氏名、カルカッタ到着日時等を早めに送付して欲しい。

これに対し西堀氏は、五月二十五日付で、この計画は、Nation Wide（全日本的）な登山計画とするため、既に日本山岳会に移譲され、同会でも特別ヒマラヤ委員会を組織して対応していること、そして西堀自身もこの委員会のメンバーであるので何卒了承願いたい旨をネパール政府宛て連絡しており、先発隊二～三名のメンバーにも二名程追加したいので併せて許可願いたい旨の文書を出状している。

このようにして、日本山岳会では、マナスル登山のための事務局を日本橋呉服橋の辰沼理事の経営する病院の一室に開設する一方、先発隊員（当時は踏査隊のことを先発隊＝Advance Party と称していた）の選考に入った。

ヒマラヤ委員会では、先ず隊長として今西錦司氏を決め、ついで隊員については、ヒマラヤの氷河の経験者としてナンダコートの登頂者も加えてはどうかとの意見も出されたが、何回も慎重な論議の末、最終的には、今西隊長の意向によって田口二郎、高木正孝、中尾佐助、林一彦氏と決まり、さらに毎日新聞社より竹節作太運動部長が特派員として参加同行することになった。

なお当時偶々社用によりインドに渡っていた田口理事が、インド測量部の五十万分の一地形図（三枚セットのもの）、写真、ヒマラヤの文献等、極めて有用な資料を得て帰国し、本計画推進のために重要な役割を果たされたことも付記しておきたい。

その後七月十一日付ネパール政府からは、本会宛て先発隊について、すべて快諾した旨の厚意溢れた返書が届き、先発隊の一行は八月二十五日勇躍カルカッタへ向け出発した。

（編者注）マナスル踏査隊の記録については公式報告書『マナスル一九五二～五三』（毎日新聞社刊）の他、『山岳』第四十八年（一九五三年版）に今西錦司「アンナプルナとマナスルゥ」を参照されたい。

またマナスルを日本山岳会に移譲した後、ＡＡＣＫとして独自に一九五三年秋にアンナプルナⅣ峰の登山を行ったが、その経過については、前記今西錦司編『ヒマラヤへの道・京都大学学士山岳会の五十年』を参照されたい。

五、西堀氏によるアフター・ケアー

西堀氏は二月訪ネの際、ネパール政府および関係者に対し、種々と先方の要請も受け入れ、約束もしてきた。これに対し西堀氏は誠心誠意を以てこれに対応し約束を果たした。

一例としてあげれば、クリシュナ氏の Cottage Industry 研修のための日本留学である。この点については、クリシュナ本人の熱意もあったが、コイララ首相やガネッシュマン・シン農相からも強い要望があり、西堀氏自身もネパール政府から研修生として派遣してくれれば、Cottage Industry の分野では、日本側でもお世話できると話してきた。その後ネパール側と何回ものやりとりがあって、ネパールの首相や王室からの推薦もあり、前記クリシュナ氏の他、ラナ家の青年、ハリハール・シャムシェール・ラナ君の二名を、留学生として受け入れることになった。とはいっても、講和条約が批准された直後のこと、日本側の受け入れ体制もできてない頃のこととて、西堀氏は苦肉の策として〝交換留学生〟ということにして、外務省と接衝した。因みに日本からネパールへの留学生は、今西錦司（人類学・動物学）、中尾佐助（植物学）ということにした。

この受け入れについては日本政府（外務省・文部省）との接衝には、岩村忍氏の助力もお願いし、受け入れ先は国際学友会（当時の理事長は日高信六郎氏の友人守島伍郎氏）とし、ここには本会会員の斉藤健治氏も常務理事（当時は主事であった）としておられお世話になった。

一方その資金集めのために、西堀氏は「日本・ネパール文化友好協会」（渋沢敬三理事長）を設立、本会会員の工楽英司氏（京大OB、参議院文部専門委員）が世話役として苦労され、最後は川喜田二郎氏にバトンが渡され二年間の留学資金の面倒を見られた。

西堀氏はこの他にも東京で開催された世界仏教者会議（The 2nd World Buddhist Conference, Tokyo）に出席されるアムリタナンダ師（Ven. Bhikku Amritananda）を団長とする四名のネパール代表団のお世話もされていた。

その後一九五七年にはマナスル当時大変お世話になった皇太子の秘書官であったローク・ダルシャン氏（来日時は宮内庁長官として国王の信任が厚かった）が、日本の憲法を勉強するために来日されたが、ダルシャン氏もクリシュナの友人で、登山隊がお世話になった忘れられぬ一人である。

（編者注）佐藤達夫著『憲法随筆・ネパールの伊藤博文』（一九七二年十月啓正社刊）参照。

あとがき

以上長々と「マナスル」の構想のルーツから、登山許可を得て日本山岳会の踏査隊が生まれるまでの経過を述べてきた。この間従来断片的にしか書かれていなかったことか、報告されていなかったことも出来る限り掘り出して、一連のストーリーとしてまとめてみた。そしてこの間に実に多くの方々がこの計画の実現に努力され、またお世話になったことを述べてきた。

ネパール側の最大の功労者は、何といってもクリシュナ氏（Krishna Bahadur Verma）とその兄弟である。西堀氏は〝彼の協力なくしては、日本のヒマラヤ登山史はこんなに輝かしいものにはなっていなかったのではなかろうか〟と述べている（会報一三九号「マナスル以前」）。

クリシュナ氏は日本留学で多くの知識と人脈をつくって帰国した後、ネパール政府の中に家内工業局（中小企業局）Department of Cottage Industries を設けてその責任者となり、ネパールの産業発展の基礎作りのために努力され、晩年は Nepal-Nippon Research Center を設立して自ら会長となり、日本の文化・技術をネパールに紹介するなど、日本・ネパール両国の友好親善のために貢献されてきた。

同氏の次弟 Dili Bahadar Verma 氏は、一九五二～五四年にかけ三回の日本のマナスル隊にリエゾン・オフィサーとして参加の後一九五四年秋、フランスのマカルー隊にリエゾンとして参加中、不幸にして肺炎のためベース・キャンプで亡くなられている。

一方マナスルの登頂者今西壽雄氏はクリシュナ氏の末弟ラム・クリシュナ（Rum Krishna Verma）氏の留学（天理大）のお世話をされ、その後もクリシュナ氏の令嬢アムリタさんの留学等に至るまで親身になって献身的にお世話をされた。それらの功績が認められ、晩年はネパール政府にのぞまれて大阪の名誉総領事に就任され、昨年十一月に亡くなられるまでネパール国のために尽力された。

このようにクリシュナ・ファミリーと西堀、今西氏らの友情は、お互いに感謝と尊敬をもってつづけられてきたのである。

日本山岳会でもマナスル登頂四十年を迎えるに当たり、その功労

に報いるため、クリシュナ氏を名誉会員に推挙し、永くその功績をたたえることにした。そして本年十月四日には、マナスル関係者がネパールを訪れ、お世話になった方々をお招きして旧交を暖めた。この会では、マナスルの初登頂者で一九六一年にランタン・リルンで遭難したガルツェン・ノルブ氏の遺児ラクパ・ノルブとも会うことができた。

以上ネパールでお世話になった方々にスポットを当てて紹介してきたが、日本国内で、マナスル登山を通じてお世話になった方々を上げれば枚挙に暇がない。そしてその中の多くの方々は既に鬼籍に入られている。

本年の年次晩餐会では、マナスル登頂四十周年記念晩餐会として、これら当時お世話になった方々をお招きして旧交を暖めることにしている。しかしこの席に秩父宮妃殿下をお招きすることができないことは何としても残念である。秩父宮様亡き後、妃殿下にはいつもマナスルのこと、本会のことをお心にかけていて下さったからである。ここに更めてご冥福をお祈りする次第である。

なお最後になったが、毎日新聞社におかれてはマナスル登山に際し、計画の当初から、登頂に成功するまで、終始ご支援、ご協力をいただいた。当時の本田社長、渡瀬常務取締役編集主筆、古市ヒマラヤ登山事務局長をはじめとする社を挙げての物心両面の協力がなければ、マナスルの登頂も難しかったことを思い、ここに更めて謝意を表してこの稿を終わりにしたい。



マナスル登頂40周年特集②

ネパール雑記

田口二郎

（本稿は一九五三年発行の『日印協会会報』昭和二十八年第一号に筆者が「ネパール雑記」と題して寄稿したものである。マナスル踏査隊員として一九五二年九月～十一月ネパールを訪れた時の印象記で、当時のネパールの状況が活写されているので、本特集に再録した。なお、再録に当たり、旧漢字、旧仮名遣い、外国地名・外来語の表記等は極力現在の用法に改めた。）

昨秋、私は日本山岳会主催のネパール・ヒマラヤ踏査隊の一員として、かの地を二か月ばかり歩いてきた。

「秘境ネパール」が門戸を開いたのは、つい三年この方である。門戸を開いたといっても、普通の意味で自由に入国できるわけではない。インド人の場合を除けば、ネパール政府の要人に知己があって、余程の後だてがなければ、今だにもって入国はまず困難である。

私達の場合は、昨年の春に、同じ山岳会員である西堀栄三郎博士が、非常な幸運にめぐまれて、初めての邦人として、ネパールの首都カトマンズに乗り込み、その工作の宜しきを得て山岳会主催の踏査隊入国許可の段取りに至ったものである。私事にわたって恐縮であるが、現在、同国の枢密顧問官の筆頭をしているカイザー将軍が、世界漫遊の途上日本を訪れたことがあり、将軍がインド鉄鋼株式会社の大株主であった関係から、私が現在勤務している岸本商店の役員と大いに歓を交えたその縁故が、私を交えての踏査隊の入国を大変易しくしたらしいと西堀博士はいっておられた。

一旦入国許可を得れば、ネパール入りは極めて簡単である。カルカッタからパトナに飛び、そこから一時間の飛行でカトマンズに着陸する。インディアン・ナショナル・エアウェイズによる週四回のスケジュール。空路をとる旅人にとってはパトナはいわば、国境の町に位している。ネパール行きのインド人は、パトナの飛行場で入国申請書に署名すれば、何なく入国できるが、一般外国人にとって同国が今だに要塞地帯のように閉ざされていることは、前に申し上げたとおりである。ネパールに対するインドの勢力は圧倒的である。

百年余りこの国をカンヅメにしていた英国が、インドが独立して以来この国からも手を引かざるを得ないようになった後、ネパールの政府はいち早くその政治的空間を埋める手を打った。今日カトマンズに公館を設けているのはインドと英国だけである。他の国は在印の大使をもって必要な場合の対ネパール事務を兼務させている。わが国の場合も、ネパールとは外交代表を交換していないので、私達の踏査隊の入国手続は、まずカトマンズ政府から会宛てに入国許可の公文書を送ってもらい、これをインド政府に呈示して、インド通過の査証の下付を受けカルカッタに赴いた後、改めて同地のネパール総領事から空路にてネパールに入国する旨のエア・パーミットを入手して飛行機に乗り込む、という手順になっている。外国の遠征隊に入国許可を与えるか否かについて、ネパール政府は、一応インド政府の意向を打診するものと見ねばなるまい。インド側としては、内諾を与えた後でも都合の悪い事態が起これば、いつでも通過査証を拒否できるから、遠征隊にとって、インド政府の好意をかち得ることは、ネパールのそれと同じように必要なことである。もう一つ便利でないことは、さきに申し上げたカトマンズ政府からの公文書は、入国を原則的に承認するという書類にとどまって、正確な意味での査証ではない点である。本来的な査証は、カルカッタ経由で同国に向かう日本隊の場合を例にとれば、本国政府からの訓令に基づきカルカッタの総領事が交付するエア・パーミットがそれに当たっている。昨年八月末、カルカッタに到着するとすぐその足でネパール総領事館に赴き、エア・パーミットを入手したが、翌日、当時の在カルカッタ西山総領事宛てに、私達のエア・パーミットを無確定期限でキャンセルするとの通告を受け前にも進めず、さりとて帰国するわけにもいかず、私達は全く途方にくれた。幸い私達の苦境を見かねて西山総領事がネパール国王宛ての親書を認めてくださり、しかもそれを同国の急便に托してくださったお陰で、私達も予定どおりに旅を進めることができたのである。後程聞いた話では、私達がカルカッタに着いた頃、丁度カトマンズではネパール最大の政党「ネパリ・コングレス」の大会が開かれており、反インド的な言辞を弄する小数の議員等があり、為に出席のインド人記者たちが総退場するという一幕もあり、政治的にゴタゴタしていたというのが、私達の査証をさし止めた理由であったらしい。しかしこういう次第だから色々の許可があったといっても、実際にカトマンズの土を踏むまでは、ネパールの入国はなかなか油断ができないのである。

パトナからカトマンズへの一時間の空の旅は、好天に恵まれるなら、世界一の豪快な眺めである。私は、帰路、十一月にこの眺めをほしいままにすることができた。ダウラギリ、アンナプルナ、マナスル、ガネッシュヒマール、ゴザインタン、ガウリサンカール、エベレスト山群、カンチェンジュンガといったヒマラヤの横綱格が、中央アジアからの流れをせきとめる純白の長城のように、西から東へと、見渡す限り、何百里、蜿々と連らなっている。飛行機の高度は一万二、三千フィートであり、その高さから見はるかす遠望に連立しているこの山々は、私が見た空からの欧州アルプスとはまるで違った異常な形相であった。山は、下から仰ぐべきもので、空からはつまらない、とはよくいわれるが、この空から見たヒマラヤほど、私に本当のヒマラヤを見せてくれたものはなかった。たとえて見れ

ば、遠望の欧州アルプスから人は白い波頭の乱れ立つ海洋を連想できるだろうが、この山々はどう見てもチョッピリした波頭ではない。平原からモリモリと盛り上がったその図体の大きさは、全く私達が地質学の話に聞く地殻の隆起を目のあたり偲ばせるものである。空から見るインドの平野は、行けども行けども乾いた褐色の果てしない連続で、恐ろしいような平盤の大きさを感じさせるものだが、このサブ・コンチネントを、北方から見下しているヒマラヤの並びは、全く見下すという言葉が一番ふさわしい程に化物のように巨きく怪異である。

さてネパールに入る道は、今申し上げた空路が一番手っとり早いのであるが、ネパールの首都カトマンズに達する文明の利器といえば、実のところ、これ以外にはない。しかも、インド政府がカトマンズに簡単な飛行場を作ったのは、つい三年前のことである。従来ネパールに入る道は、インドのラクソールという国境に近い町から軽便鉄道に乗り、十キロばかりで終わるその終点からは、徒歩で七千フィートの峠を二つも越し、タンコートという小村にたどり着いて、そこから自動車で首都に向かうルートしかなかった。この国にある二つの発電所の機械やカトマンズの自動車や、工業もまたロクな手工業もないこの国のことだから、少し大げさにいえば、少し文明度の高い一切の資材はインドから、今申し上げた二つの峠を越えて遙々ネパールの苦力が背負って来たのである。

九月四日、私達はカトマンズに着いた。ネパールでモンスーンの明けるのは九月の下旬なので、雨雲が低かった。竹で三方を囲った小屋掛けがあって、二つ三つ仕切りがあり、税関とあとの二つは男女別の貴賓待合室である。山岳会とネパール政府との仲立ちになって私達の遠征実現のために奔走してくれた体育協会のクリシュナ君が、私達には見慣れないネパール服で出迎えてくれて、早速ジープに分乗して道のり一里のカトマンズに走らせた。このクリシュナ君は現在日本に留学中である。盆地を走らしてぐるりを見ると四囲を千メートルばかりの山が輪のようにとりまいて、昔は、それが首都の理想的な自然の防壁をつくっていたことがわかる。大昔、この小盆地は湖水であったそうだ。しかし、空からこの壺のような小盆地に舞い下りると、ちょっと井戸の中に飛び込んだという気がしないでもなかった。カトマンズはこの国で都市という名に値するたった一つの町である。盆地の全住民を入れると五十万、町だけでも少なくとも十五万はいるだろうから、小都会といってもよい。町の古い部分と新しい部分とは建築様式と、道路のちがいで一見して区別できる。小さな町だから、歩いてどこにでも行ける。カトマンズとは、元来「木造の寺」の意味だと聞いたが、町の古い部分はお寺や神社や淫祠や仏像やヒンズー教の神格化された象や牛や熊や猿の像の間に、人間が住んでいるといってよいくらいに、そうしたものが多い。町はさながら迷路で、人二人すれ合うことができない狭い露地が多い。露地を囲んだ両側の家は、くすんだ褐色の木造で、表面の窓枠やそれを支える腕木にはいかにも中世紀風な手のこんだ木彫りがしてある。三階建てが多いが、入口も頭のつかえる低さで、窓もやっと一人の頭がつき出せる小さなもの。今度の戦争で灰燼に帰してしまったが、戦前に訪れたことがあるニュルンベルクの古い区画を思い出した。中世紀の手工業者が丹念につくり上げた凹凸やゆがみの多い

個性的な、しかし小人の住居のような建物である。町の中央部は、文字どおりお寺の林のようで、白壁の四角な土台の上に乗った三重の金閣寺がいくつも林立している。何十もの高い石段を積み重ね、その上から町を見下ろす高い塔もあり、この塔の上には浮浪児が数人巣食って堂宇にクソや小便をたれ流していた。ヒンズーの祭日に偶然めぐり合わせたが、一丈有余もあり、しかも中広のどっしりとした木製のワダチに、金の塔を乗せた大きな山車が五、六台、それぞれ二十人余りの屈強な男達に引かれて、立つすき間もないほど、群衆が密集した町の中央部をねり歩く。女子供は一人の例外もなく広場を見下ろす寺や塔の石段に腰かけて見物している。ネパール人は、アリアンとモンゴルの混血だが、居並ぶ数百人の女子供のなかには柔らかい顔の輪郭で、目ぶたの厚い日本の娘そっくりなのがいる。しかし、お隣には彫刻的なインド娘がいるといった具合である。祭なので、色彩豊かなサリーをまとい、近郊から来た百姓女は、六尺ふんどしと考えたら一番ピタリとくる長い布地で部厚い胴巻きをしている。胴巻きの中に金も乾米もぶち込むわけだ。男女共通のネパール百姓風俗である。但し、カトマンズの商人や学生や役人は、これをさげすんで使用せず、独特のネパール服を持っている。ルパシカ風のワイシャツを着て、シャツの下の部分をズボンに入れずにだらりと流し、その上に普通の背広の上衣を着る。ズボンははかず、ももひきが代用となる。だから、後から見ると、背広服の男がズボンをぬき放しにして歩き出したという格好になる。これにトルコ帽に似た、柔軟布のトピー帽をかぶる。国王以下、高官から小商人にいたるまで、これがネパールの日常服である。前から見るとフランス革命前のルイ王朝の宮廷服を連想させる。この国の一にぎりの支配階級が、欧州の宮廷服を真似て、あるいは輸入して着ていたのが、漸時、カトマンズの町人の着るところとなったのかも知れない。もっともこの国の九割を占める稲作りのお百姓は、年中ルパシカ風のシャツ一枚とフンドシひとつに裸足である。先に申し上げた胴巻きはなぜか忘れない。

町の中心部が、古い町と新しい町の分け目あたりになっていて、警察の横にとてつもなく馬鹿でかい皮革張りのドラが置いてある。火事の場合の半鐘だとわかった。この下からちょっと離れたところに、男根の見事な浮き彫りがあって、ネパールの女が額や髪の分け目につける赤い染料が塗ってあった。見ていて度胆を抜かれるような閻魔の立像もある。そんな下に両替屋や果物屋が大通りで商売をやっている。インド・ルピー対ネパール・ルピーは、大体一対一・三という相場。ネパール・ルピーの紙幣の通用するのはカトマンズだけで、一歩田舎に出ると銅貨でないと受け取ってくれない。新しい町は、道路も広く練兵場につづいている。映画館一つ。商人宿二つ三つ。呉服商の並び。石鹸と称する泥をこねたような丸玉を山と積んだ店、雑貨商、写真屋、かなり広い大通りに古タクシーが十台も並んでいる。最近この国に対するアメリカの関心が高まって、「アメリカン・ライブラリー」が設けられた。ピンナップ・ガールが四、五名同時に送りこまれたそうだが、私達は拝眉の機会に接しなかった。この国での英国の勢力が退潮して、インドがその空間地帯を埋めようとしている時、ワシントンは、また独自の立場から、チベットと北境を画するこの国に関心を持っているように受け取れた。二、

三、四年の間に、この方面からの相当の勢力、当面のところは、文化的の方面での勢力があらわになるにちがいないと心配気にいうアジア民族主義を奉ずる二、三の青年もいた。さて、商店街の九割までが安物のインド製品を売っている。反物、日常用品、雑貨、煙草、マッチ等すべてインド製である。ここは今のところ、全くインドの独占市場である。反物などはヒマラヤの奥地まで何十里、人夫の肩に担がれ、裸足でスタスタと担がれていく。戦前には日本の反物が入っていたそうだ。ネパールの土地には無限の天然資源が埋れているという。国連から、この国に目下四名よりなる農業技術委員が派遣されているが、やはり国連関係でカトマンズに三年契約で派遣されているスイスの地質学者トニー・ハーゲン氏の話だと、九州くらいの大きさのこの山国には、いたるところに銅、鉄鋼、雲母、石油、石炭、アスファルトがあるそうだ。ネパールとインドのネ印国境の間に西から東にかけての森林ベルトをつくっているテライは、無限の木材やパルプの資源を提供しているはずであるし、ヒマラヤ山麓の山羊や牧畜、それに南部のオレンジ、ミカン等すべて計画的に栽培すれば、大変な富をつくり出す可能性を持っている。それよりもまずヒマラヤ山脈から、ネパールを通って、北インドの平野に南下し、やがてはガンジスに合流する六つの峡谷に、水力発電を架したらどんなものであろう。優にインドの北部全体を電化するに足るものだと、国連の人はいっていた。しかし——これは、すべて可能性であって、現実ではない。

カトマンズの街を歩くと、私は、何となく斜陽を浴びて夕暮れにむかうイタリアのフローレンスに遊んだことを思い出した。斜陽といっても、南欧のことだから、いくつもの高い尖塔を区切って、古い石畳にさしかける陽はなかなかに強くて、五月のその日には見る目にはまばゆいばかりだった。しかし、陽の当たらぬ町や道の部分は、濃い紫がかった灰色に妙にしづんで感じられる、古い古い町のおもかげである。同行の日本人の仲間は、これは飛騨の高山の感じだといっていた。いかにも古都と感じさせるのは、この町の古い建物のせいばかりではない。ひまで困るという町人達が町をブラブラしている。是非今日中にという用件のないような人達である。いやこの町そのものがそういう雰囲気なのだ。百年来全国の百姓からの貢物で食ってきたカトマンズは、工業はおろか、ロクな手工業ひとつ作るにも余りにも怠惰で、文字どおり百年の眠りを眠って来たわけである。この国の九割五分は文盲である。田舎のいわゆるバザールと名のつくちょっとした町に行っても、およそ紙というものは見当たらない。本や新聞とは無縁の人達なのだから当然かも知れぬ。用便の時は草ですます。カトマンズでも、郊外の民家は中産階級でも便所を持っていない。モンスーンの雨が大小便を田地に流し込む。どこに行っても肥ダメのないのはモンスーンのせいかとも考えた。

カトマンズ風景の大きな特色は、三年前の革命まで百年余り政権を独占していたラナ一族の立派な邸宅群である。ラナ家といっても四百余りあるらしいが、そのうち実権を持っていたのは二十家くらいだと聞いた。これがそれぞれちょっと赤坂の離宮みたいな宮殿を持っていたのである。どの宮殿にも映画館、プール、動物園まで備え、映画館、芝居小屋ひとつとしてなかった町人のカトマンズと、するどい対照をつくっていた。どの宮殿にも後宮二百人もいたとい

うウソみたいな本当の話がある。これがつい五年前までの事だからあきれるばかりである。

百年余りこの国を鎖国していたのは、実際にはイギリスの政策だった。ネパールの百姓の食いつめた二男坊、三男坊をグルカ兵として知られた傭兵として前世紀来、用いてきた英国としては、この素朴な農民がインドの独立運動と接触してその影響を受けることを極度にきらった。グルカ兵は第一次大戦に各地で戦功を立てたので、その褒賞としてネパールは一九二三年、英国によってその独立を認められた。そして両国間に大使が交換されたが、ネパールの「独立」に対してどの外国も何等の興味も払わなかった。というのは、ネパールが依然として英国の保護領であることには変わりがなかったからである。しかし一九四七年のインドの独立は、この北方の小隣国に宿命的な影響を与えることになった。インディアン・コングレスのネールやチャンドラ・ボースと親交をむすび英国と結託したラナ家の専制支配の打倒を目ざして多年闘ってきたコイララ兄弟が、ネパリ・ナショナル・コングレスをひきいて革命を成就したのである。一九五一年十一月のことだ。この革命には、ネール政府の圧倒的な支持があった。その結果、支配者のラナ系のシャム・シェール一家の頭領、当時の総理大臣は南インドのバンガロールに亡命するに至った。しかし、これと相前後して多くのラナ家の国外逃避が始まり、百年来カトマンズに蓄積された巨大な貴金属、証券が国外に流出した。さてこの革命を陰陽に助けてきたのが、現在の国王トリブバン陛下と皇太子殿下である。ネパールの王朝とラナ一家の地位は、徳川時代の天皇と将軍家と全く同じで、ラナ一家は総理大臣として政治と搾取をほしいままにしていたのであるが、三年前ラナ支配が倒れてからは、王家は、再び昔日の陽の目を見るようになった。それまでは王家も実質的には数ある裕福な大貴族のひとつの地位に甘んじなければならなかった。

詳しくは書かないが、現在、ネパールはトリブバン王の親政である。六人の枢密官が閣議をつくって親政を補佐している。六人のうち二人はラナ直系で、本稿の当初に触れたカイザー将軍がその一人であり、枢密院の筆頭を勤めている。皮肉なことに、国外に逃亡したモハン・シャム・シェール・ラナはカイザー将軍の長兄であり、なお次兄のパパール将軍は現在この国の旧勢力の真の黒幕だといわれているが、このカイザー将軍だけは「時代とともに進むラナ」として、カトマンズ住民の尊敬を集めており、「私の目の黒い間は、私の財産のひとかけらもこの国を出ることはない。私はネパール人以外の何ものでもない」と語って、反ラナ風潮のなかにカトマンズに止まり、その風格はちょっとギリシャ古典のトラゴディーをしのばせるものがある。将軍の宮殿にはネパール第一の図書館があり、お目にかかったカイザーさんはいかにも心の温かそうな六十幾つかの短軀のお年寄りであった。インドの参謀総長が昨秋カトマンズに来た時、国を代表して飛行場に出迎われたのは、国防関係の枢密官であるカイザーさんであったが、いつも黒いネパール服を着ている将軍から、軍人という印象はさらに受けない。私達はイギリス外交官とイタリアの民俗学者と同席のカクテル・パーティーに招かれた。三十歳ばかりの美しい令夫人が待っていた。ネパールの国王は二人の后を持たねばならぬことになっている。カイザー将軍が四季

に移り住む四つの宮殿を持っていることは有名だが、御婦人の数の方はどうなのであろうか。ネパールでは、女の地位は極めて低く、ヒマラヤ山間のお百姓でも、田地を遠く距てて持っている場合は複数の女房を持つ習わしである。

三年前の革命後、ネパリ・ナショナル・コングレスが天下を取ったが、もともと変革はニューデリーの後押しで行われたものであり、大部分の国民はカトマンズの政変とは余り縁がなかったものだから、百年の支配者が国外に逃亡したという事実が劇的なスポット・ライトを浴びるの余り、国家機関が依然としてアンシャン・レジュームの手下の手に残っている事は忘れられがちであった。ラナは往ったが、同時に、残っていたのである。英国にとって代わったインドも、ネパリ・コングレスの急進化を許さなかった。左派によるカトマンズの乗っ取りのクーデター等の劇中劇も行われ、その首領のK・I・シン氏は目下北京にいるという。K・I・シン氏の三日天下は今でもカトマンズの急進的な青年知識層の語り草になっている。かくして、一旦政権についたコイララ・グループの議会派も、依然として金づる、人づるの網をめぐらした旧勢力と左派の急進化のはさみ打ちに合って、昨春、政治的な麻痺状態に陥り、トリブバン国王はネールの招きでニューデリーに飛び、事態を救うために親政を行うことになった。そして、この状態は現在まで続いているが、インド政府としてはネパール工作に、国王、議会派、ラナ派という三つの選択を持っていると見ても大過ないと思われる。伝統的にも、気質的にも、ニューデリーの政府は議会派に一番近いのだが、ネパールという国の戦略的位置が微妙であるから、将来のことは誰もいえない。

私達はカトマンズ滞在の十日の間に、国王陛下並びに皇太子殿下に拝謁を賜わった。外国遠征隊としては初めてのことで、破格の光栄である。その他、各枢密官並びにコイララ兄弟等のお招きに預かった。またネパール唯一の高等教育機関であるトリチャンドラ・カレッジ――大体日本の旧制高校の程度――の学生が私達の遠征準備に奔走してくれた。カトマンズでお会いした方々の日本に対する好意はこちらが面喰らう位に厚い。元来礼節を重んずる古い習わしの国であるから、遠来の客に対する厚遇は私達の場合だからとて例外ではなかったかも知れぬが、カトマンズの多くの人達は現在のネパールを明治維新直後の日本になぞらえて、この先進の東洋の国に学びたいとの真面目な気持を持っているようだった。私達の遠征も、従来は白人種の独占であったヒマラヤ遠征に、同じアジア人である私達が堂々と乗り込んだというところに声援の大きな原因があったらしい。

（一九五三年三月二十八日、第一次マナスル遠征出発直前に記す）

ジル・ヘンダーソン夫人とシェルパ（※1）

村山雅美

その頃のカルカッタの町並みは英国統治時代の面影を十分残していた。歴史を物語る重厚な建物、華やかなショーウインドーに賑わうチョウリンゲ通り。その向う側はフグリ河畔まで二キロという広大なマイダンの芝生は市民の憩いの場であり、路上生活者という言葉は聞かったし眼にもつかない美しい都会だった。悪名高い税関への日参で顔馴染みとなった相手は我々の時間を超越した視点にいるお役人だと悟った頃には、銀光丸からハウラ埠頭の保税倉庫に山づみされた装備品の通関の見通しもどうやらつきカトマンズへの空輸便チャーターの予約もかたずいた。やれやれとダージリンでひと息つけていたのは三月十三日のことだった。そればかりではない。当時はヒマラヤといえば誰にも特別の思いを寄せさせたシェルパとの出会いにうきうきしていた。わざわざヒマラヤン・クラブ（以下H・Cという）のダージリン支部にまで赴いての雇用契約が必須の仕事であった時代である。シェルパチームの善し悪しが登山の成否の鍵とも言われていたくらいだった。我々の動静は加藤泰安氏の『森林・草原・氷河』（茗渓堂）にゆずり、H・Cの名誉幹事（Honorary Local Secretory）としてシェルパに係わる一切をとり仕切っていたヘンダーソン夫人（以下ジルという）を語り部に、彼女が見てきたシェルパの足跡を、ヒマラヤン・ジャーナル（以下H・Jという）三五号を参照しながらたどることにする。

ジルは一九〇三年、英国エセックス州のスタンステッドに生まれオックスフォード大学で経済学を修めた。インドの茶園主に嫁いでいた姉を訪ね義兄の協力者として茶園で働いていたジャック・ヘンダーソン氏に出会い一九二九年カルカッタで結婚した。彼女の長女アンからこんな話を聞いた。ジルの本名はメアリーだが英国で昔から唄いつがれている童謡「ジャックとジルは山へ水をくみに行きました」の歌詞にならってジルと呼ぶようになった由。結婚してアッサムのバグマリ茶園から一九三〇年代半ばにベンガルのシリグリに

近いラニチェラ茶園に移ったことがジルの人生に転機をよぶことになった。それはカメットの登頂、エベレストを八五七二㍍まで登攀した当時随一の登山家F・スマイスが登山の帰りに、休養をかねてヘンダーソン夫妻の茶園を訪ねてきた。スマイスの豊かな植物学の学識（エンジニアともいわれるがジルは植物学者という）から茶の育成にはより適地であるばかりか毎日カンチェンジュンガの山並みを眺め、しかも働き手としてこのあたりのブーティヤにくらべものにならないシェルパを使えるダージリンに行くべきだと夫婦はこんこんと説得されたようだ。飽かぬ炉辺のもの語りは登山人夫としてのシェルパの働きぶりから愛すべき山の民への期待へと語りあかした夜を忘れられないという。同年代の気安さなどとても持てない程取っ付きがよくないスマイスとは、ジルが結婚前スマイス夫妻の招きで丹精のシャクヤクを見てコレクションの自慢話を聞かされたのが縁だった。何処が気にいられたのか静かで決断の人に見込まれたものだといたずらっぽく片目をつぶったジルが目に浮かぶ。

H・Cによるシェルパの組織化

エベレストの南麓、クーンブ地方に十五世紀頃から住みついたチベット系高地民族であるシェルパ族は高地で農業と牧畜に生きると共にヒマラヤ越えの交易を生業としていた。今世紀の初頭、登山人夫としての優れた彼らの素質をみぬいたのはヒマラヤのパイオニアの一人、A・ケラスといわれる。彼に登山の手ほどきをうけたヒマラヤの原住民は一九二〇年代初期以来エベレストに赴くJ・ブルースに引き継がれた。何よりの現金収入にありつこうとダージリンへと出稼ぎにきたものが、運よく山で身につけた経験と資質がやがて「シェルパ」とたたえられる名声を得るようになった。しかしその陰には「山に召される子」と呼ばれるような悲しい運命があった。

ヒマラヤの探検・登山の普及に対応して一九二七年の秋ほとんど同じ頃にそれぞれカルカッタとシムラを本拠にして生まれたインド山岳会、ヒマラヤン・クラブが翌年末には共通の目的のためにH・Cの名のもとに合併することになった［H・J六頁］。折から盛んになった海外からの登山をも視野にいれて登山者への情報提供と現地におけるポーターの斡旋等諸般にわたる援助などH・Cへの期待は、あい次ぐ欧米からの大型登山隊の来訪とともに高まった。一方高地ポーターとしてシェルパがリクルートされ、登山隊に雇用されて優れた評価をえたものをH・Cに登録する仕組みによりシェルパの組織化が図られた［H・J五八頁］。これまでの出稼ぎ稼業に過ぎなかったものが「シェルパ業」としての地位を獲得する一方で山での負傷や「山に召される子」と呼ばれるほどに頻発する事故の補償に対してはベンガル州では行政措置がとられるに至った。シェルパの家族の福祉、子弟の教育、雇用の促進等についてシェルパ社会の向上に精魂を傾け、シェルパ全員から「タウニィメンサーブ」［H・J一七頁］と慕われる人があらわれた。旧インド山岳会発起人の一人であったタウネンド氏の夫人は一九三四年、H・C東部支部名誉幹事になった。折から起こったナンガパルバットのシェルパの遭難に心を痛めて追悼会を催す時、彼等の履歴が全く分からないのに困ったことが、かの有名なシェルパ手帳の発端となり、彼女はシェルパの母と称えられた。

スマイスとダージリン

スマイスの説得により、気の早い似たもの夫婦のジャックとジルは一も二もなくダージリンに茶園を物色し始めた。ひと山むこうのダージリンはシリグリから八十二キロ、今もヒマラヤン・ツゥフィーターズの愛称で鉄道愛好家に親しまれている鉄道が一八八一年に開通していた。六十センチ幅の豆汽車はカーブにループ時にはスイッチバックで急勾配をけなげにかけ登る、見ても乗っても楽しい乗り物である。カン高い汽笛をならしてカンチェンジュンガを背景に走る住民の足、片道七時間の長丁場もジルにはシェルパとの楽しい会話の場だった。シェルパの生活を家族からもじかに聞きその生き様を身近に知るようになったジルはカルカッタに住むタウネンド夫人の片腕となってシェルパの社会にとけこんで行った。あいつぐ悲壮な最期を知らされて悲嘆にくれる遺族とともに泣いたジルは、スマイスと並ぶ大御所E・シプトンとH・ティルマンがシェルパは今や一介の人夫や召使いに非ず、テントや食料を分かちあう立派な我々の山仲間になったとの評価を我がことのように喜んだ。その頃スマイスの紹介で後年エベレストやカンチェンジュンガにその名をのこしたC・エバンスと知り合い、次世代への橋渡しとなりエベレストの登頂に一役買うことになる。

ダージリンに茶園の見通しがつきかけた頃、第二次大戦の影響はヒマラヤに及び、H・Cの活動は中断し、一九四二年タウネンド夫人はインドを去った。極めつきの愛国者ジルはカルカッタの陸軍検閲局に入り、ジャックは印緬ルート建設の土木技師となった。ダージリンで寮生活を続ける娘たちとラニチェラで過ごせるのは夏冬の休暇だけだった。シェルパの身すぎ世すぎもジルの肩にかかっていた戦時中をふりかえり問わず語りに「タウニィメンサーブの影がそこにあったからね」と呟いたものだ。

日本の敗戦を待ちあぐねていた連中がインドにいた。我々に痛恨のインパールの敗退をもたらした英国航空隊にいたH・C会員はカシミールに航空隊登山センターを作り、ガルワル、シッキムの山歩きを再開した。シェルパの仕事も復活し、アンターケー、パサンダワラマ等は個人的に案内を始めるなど新しい生業の兆しであった[H・J五九頁]。



ダージリンにてヘンダーソン夫妻と。左から田口二郎、村山雅美、加藤泰安の各氏（1953年3月　加藤喜一郎氏撮影、田口二郎氏提供）

一九四七年、インドは独立し、ヘンダーソン一家は待望のダージリンに移った。一九四九年の春、因縁浅からぬスマイスがヒマラヤの山・花の撮影に現れた。テンジンとの二人旅はアミーバー赤痢とも伝えられる重病で中断し、ダージリンのバンガローに運びこまれた［H・J六〇頁］。幻想に悩まされる彼をジル、アンと交替で看護した次女ジェーン（後にロンドン大学出の内科医）は彼の恐ろしい症状を振り返り風土病的奇病としか言えないという。空路帰国したものの彼はペニシリンショックで亡くなった。ダージリンを勧めシェルパ社会に誘ったスマイスとの悲しい別れを一生悔やんだジルだった。

ダージリンのウィンドメァホテルの北斜面をくだった丘の上にひろがるランゲリート茶園はシェルパの居住地に近い。当然シェルパは家族ぐるみ働き手として茶園にあつまり彼等の社会と堅く結ばれるにいたった。H・Cダージリン支部では一九五〇年、ネパールの開国に伴うアンナプルナの登頂に始まる新時代に対応する活動に入った。登録番号・写真・生年月日・登山経歴・特徴・雇用主の評価を明記し、アンターケー、パサンダワラマ、テンジンを頂点とする百七十五人のシェルパ名簿を作成すると共に民主化の機運による数々の要求も受け入れられた［H・J三四頁］。シェルパの育成、家族の福祉に実績とその組織力をかわれたジルは一九五一年、タウニィメンサーブの再来としてシェルパの大歓迎をうけてダージリンの名誉幹事となり、一九五六年までシェルパの面倒を見ることになった。

ダージリン・シェルパの良き時代の終焉

大小を問わず多くの登山隊でジルの助けを受けなかったものはないと言われる。当時、旅行者や登山に期待された能力を身につけたシェルパをダージリンが一人占めしていたのはジルが持つシェルパ社会とのユニークな結び付きによるものだった。山案内や人夫頭としての才能を売りものに稼げと励まし、収入に恵まれないものには特に気を遣うなどして自立の道を教えたことが後年カトマンズ周辺に生まれた案内業にもつながった。仕事にありつけない長い冬の期間の収入の道を作ってやるなどシェルパ社会の母として敬愛されていた。ウィンドメァホテルで初めて会った時のことだ。さっそうと早足で登ってくるジルの後を、それこそ三歩下がってラケットを捧げもってうつむき加減で従うアンターケー。冗談を交えながらの応対はさながら男衆にたいする大だなの女主人の貫禄を見た。一九五三年のエベレストのJ・ハントはサーダーにアンターケーをのぞんでいた。しかし彼の体調が万全でないとジルはテンジンを勧めた。前年のスイス隊で心身ともに疲れ果てたと辞退するテンジンを懸命に気長に説得したのはジルの功績だった［H・J四九号二七〇頁］。

一九五四年一月、ダージリンでジルにとって最高の喜びの会がH・C会長のC・クロフォードと彼女の名で催された。エベレスト隊に参加したシェルパは家族共々集まった。サウスコルに達した二十二人のシェルパにはエリザベス女王よりコロネーション・メダルが贈られ、その中でも特別の働きをした八人にはH・Cよりタイガー・バッヂが授与された。この集まりは一九三四年ブルース主催

の茶会以来の記念すべきもので、シェルパは喜びお互いの親交を深めた。四月には初めて日本への旅をした。古い友人（※2）に案内された鎌倉、京都を思い出としたその年は内外に恵まれた年と喜んでいた。その喜びと裏腹にシェルパ社会はテンジンを英雄にしたてたナショナリズムに揺り動かされて、ダージリンに登山学校ができシェルパ組合が生まれた（※3）。

一九五五年九月末、ジルはH・Cの送別会でカルカッタにいた。その頃マナスル先遣隊として居合わせた私に、今迄のH・Cは時の流れの前には余命いくばくもない、送別会は私にはほんとに良い潮時だと寂しげにもらしていた。エバンスのカンチェンジュンガ成功のうらにあったダージリン組合のシェルパのボイコットとソロクーンブからの選択は、彼女の示唆によったものか旧友エバンスの決断かは思い過ぎとしても、彼等のもつノウハウに敬服した。シェルパの忠誠とサーブの信頼、両者がかたい絆に結ばれた古き良き時代の終焉とともにジルが四十年近く愛し続けたシェルパの地を離れたのは一九五六年二月であった（※4）。

ロンドン近郊で老後を楽しみ一九六八年ジャックに死別後は次女ジェーンが嫁した南アフリカ・ダーバンに近いナタールに移り住んだ。広大な砂糖黍畑に囲まれたバンガローの生活。老いてなお男まさりのジルは一九九一年三月二十四日、八十八回目の誕生日の四日前心臓麻痺で誕生を祝いに来ていたアンにもみとられて亡くなった（※5）。

おわりにジルの生涯を象徴するような話を紹介しよう。

アンナプルナでその名をあげたアンターケーがチベット狆ラサ・アプソをジルに贈った。昔からダライラマが内外の貴紳に友好のしるしとして贈呈するチベットを代表する長毛小型の愛玩犬アプソを喜んだジルはジグメィ・ターケーと名付けた。それを知ったテンジンは負けてはならじと捜し求めたアプソの雌犬を贈った。ジルはテンジン夫人にあやかって名をアング・ラムとした。ジグメィとアングとの間に生まれた子犬には次々にシェルパの働き者の名を付けていた。あのバンガローの暖炉の前で、アプソにまつわりつかれていたジルをマナスルの思い出とする人は田口二郎さんくらいになりさびしい限りだ。

［編者注］

（※1）一九五二年当時は、ネパール（ソロクーンブ）のシェルパは組織化されておらず、登山の経験を有するものも少なかったので、どうしてもダージリンのシェルパに依存する必要があった。一九五二年三月、マナスルの登山許可の交渉に行った西堀氏は、帰途ヒマラヤン・クラブの紹介で、ダージリンに赴き、ヘンダーソン夫人に会って、シェルパの斡旋を依頼した。筆者は一九五三年の第一次登山隊の出発に際し、シェルパの選定のため、ダージリンにでかけ、ヘンダーソン夫人に会って、その人柄にふれ、爾来、同夫人が亡くなるまで友情が続いていた。

（※2）槇有恒著『私の山旅』（一九六八年二月、毎日新聞社刊）の一九四頁によれば、〝マナスル登山終了後、夫妻はインド事情変化のため、茶園を閉鎖して母国への帰途わが国を訪ねた。静岡の茶園なども案内したが、紅茶について長年の経験は、わが国茶業関係者

にも寄与するところがあった。〟との記事がみられる。しかし、本会の「会報」にも、ヘンダーソン夫妻来日の記録はのこされていない。前記加藤泰安氏の『森林・草原・氷河』の四一六～四一七頁の間に挿入されている写真「日本を訪れたヘンダーソン夫妻」によれば一九五四年四月となっている。この写真には、槙、三田、松方、成瀬、加藤、田口、交野氏等の顔が見られるが、村山氏等第二次マナスル登山隊員が一人も出席していないので、この時期に来日したものと思われる。なおこの点については、『山岳』第五十一年（一九五六年）に所収の成瀬岩雄氏の「ネパール紀行（一九五五年）」にも、〝旧知のヘンダーソン夫人〟の文字が見られることからも裏付けられる。

（※3）第一次―二次隊のサーダーであったガルツェン・ミッチェンは登山学校のインストラクターになったので、第三次には参加できなくなった。一九五五年五月西堀、成瀬両氏が一九五六年のマナスル隊のシェルパ予約のため、ダージリンを訪れた際、ヘンダーソン夫人の紹介、推薦により、第三次登山隊先遣隊から、ガルツェン・ノルブが参加することになった。彼はサマ問題の解決のためにも尽力し、自らもマナスルの山頂に立った（『山岳』第五十七年（一九六二）追悼、ガルツェン・ノルブ参照）。

（※4）古きよき時代の終焉とは、「ダージリン・シェルパ」のことで、その後、シェルパ・クライマーズ・アソシエーション所属のダージリンシェルパと、ネパールのヒマラヤン・ソサエティー所属のソロクーンブ・シェルパの対立による問題は、ネパール登山禁止令が解けるまで続いていた。この問題の一端を知る資料としては、本会「会報」二〇八号（一九六〇年四月）所収の大塚博美「ネパールのシェルパ問題」を参照されたい。

（※5）「会報」二五一号（一九六六年四月）村山雅美「ケープタウンより――南極の帰途」および「会報」五六四号（一九九二年五月）村山雅美「ヘンダーソン夫人を偲んで」参照。

マナスル登山を振り返る

——登山隊参加隊員座談会——

出席者（五十音順）

大塚博美（第二、三次隊）
川喜田二郎（第一次隊科学班）
日下田実（第二、三次隊）
堀田弥一（第二次隊隊長）
松田雄一（第二、三次隊）
村木潤次郎（第一、二、三次隊）
村山雅美（第一、二、三次先遣隊）
山田二郎（第一、二次隊）

松田　今年（一九九六年）はマナスル登頂四十周年になるということから、『山岳』編集委員会から現時点でマナスル登頂の意義を総括するような特集を組みたいという相談がありました。また、百年史編纂委員会からもマナスルは百年史の中のハイライトになるから、この機会に資料を残しておいて欲しいという要望がありまして、本日皆さんにお集まりいただきました。『山岳』編集委員会から進行役は私にということですので、司会をさせていただきたいと思います。

考えてみますと、一九五二年から五六年の間のマナスル登山に係わった隊員関係者延べ五十二名のうち、二十二名の方が鬼籍に入られております。特に第三次登山隊を例にとると、登頂三十周年の時には元気だった加藤喜一郎さんを皮切りに半数の六名が亡くなっております。そこで四十年という節目の機会に、これまで明らかにされていなかったこともここで明らかにして整理しておく必要があると思います。例えば、第一次から第三次の間にタクティックス等の面で相当に変わってきているのですが、その辺りのことはこれまでほとんど議論されておりません。

先に総括的な話になって申し訳ないのですが、本日参加できなかった田口二郎さんがマナスルの意義について、当時の社会に与えたインパクト、とりわけ文化的なインパクトを強調しておられました。敗戦でどん底にあった日本がマナスル登頂に成功して、ここまで立ち直ったという明るい話題を提供したこと、その関心が日本だけでなくアジア全体のものであったこと。私も共感するのですが、そうした総括的な意義づけはいずれ百年史では避けては通れないテーマでしょうから、そちらに譲ってもよいのではないでしょうか。マナスル登頂三十年の時に『山岳』一九八六年に座談会が

掲載されておりますが、そこではあまり核心に触れていないように思います。つきましては、この誌上では、三次にわたる登山の具体的な問題について検討をお願いしたいと思います。登山の対象がマナスルに決まり、踏査隊が編成されるまでについては別項「マナスルへのプロローグ」で述べられておりますので、踏査隊が出た後、第一次隊の準備が進められるあたりのお話から。

すべてが初めての経験

山田　踏査隊が出発したあたりから、第一次隊の準備が急速に進められたわけですが、日本山岳会には戦前から各大学山岳部でヒマラヤへの憧れの中で育った人たちが集まってきていた。そういう下地があったからこそ短期間に準備できたのだと思う。

村木　そのことで思い出すのは、一九四三（昭和十八）年十一月十七日に開かれた山岳関係出陣学徒壮行会のことが会報一二八号に書かれています。出陣学徒を代表して近藤等さんが「もとより生還を期してはいない。しかしわれわれのうち幾人かは還って来るかもしれない。……皆さんもその時のためにヒマラヤの研究とその準備とを忘れないでいて頂きたい」と挨拶した、とあります。そうした思いがマナスルへのエネルギーになったと思います。

村山　踏査隊が出た後は、加藤泰安さんが踏査隊との連絡を兼ねて、同時進行的に第一次隊の計画を進めていましたね。

大塚　その時の登山計画、いわゆるビジョンとかポリシーというのはどうだったんでしょうね。

村山　ほとんど泰安さんの一存じゃないでしょうか。

村木　その頃のことは、我々は若手であり、手伝いで集められた程度であったし、また隊員として行けるかどうかも分からないという時であったから、あまりよく分からないというのが実感なのです。今西錦司さんが帰ってきて、踏査隊の報告を龍名館でやった時に初めて、これからいよいよスタートだと思ったことを覚えている。

松田　龍名館での報告会は、五二年十二月二十九日です。会報によれば、五三年一月二十一日隊員の候補者が決まり、その中から最終的に隊員を決定したとなっています。

山田　第一次というのは、すべてが初めてで、ヒマラヤ登山の経験もないし、情報もないという状況で行っているから無理もないのですが、私とか、村木さんとか、加藤喜一郎さんというのはポーラーを中心にしたシステマチックな山登りに慣れたメンバーだったのですが、一方、三田さんも田口さんも高木さんもアルプス的な山登りを中心にしてきて、組織的な登り方よりも自分の力で登るやり方をしてきた人でしたから、そういう考え方のギャップがあったと思います。

堀田　隊長を先に決めれば、自ずから隊長の考え方によって登り方や隊員が決まるのだが、第一次では最後まで隊長が決まらなかったという問題がある。田口君、高木君は踏査隊に参加していて経験者だったから中心になったわけですよ。隊長が先に決まったのは踏査隊と第三次だけだった。

山田　氷河のことを田口さんや高木さんに教わったのはよかったと思っています。

堀田　ヨーロッパではアルプスからヒマラヤへというステップで考えられたわけです。

すがそれは当然のことで、日本でもそうかといえば、僕は必ずしもそうとは思わない。ヒマラヤでは経験が大事で、初めて行くと誰でも大きさに騙されてしまう。最初はこんな所は登れないと思った所も、二回、三回と経験を重ねることにより、今まで見えなかったことが見えてくるんですよ。

松田　第一次の装備はどうだったんですか。

山田　踏査隊が帰ってきて、大変怒られました。一生懸命やって、当時としては戦後では第一級の装備を準備して送り出したんだが。外国の登山隊の方がはるかに優れていて、「お前らが準備した装備はシェルパのものよりまだ悪かった」と怒られた。それからは持ち帰ったフランス隊などの装備を参考にして――これは村木さんの仕事でしたが――装備の改良にとりかかった。

村山　僕はたまたま横浜に仕事場があって、スイスの会社と縁があった。そこのマネージャーがスイスの山岳会員で、スイスの用具のカタログを取り寄せてもらった。その中からこういう靴ならば日本の靴屋でできる、オーバーシューズはスイスのものがいいというので取り寄せた。ナイロンのロープも見本として何本か取り寄せた。テントも、ミード型のを一張りか二張りをサンプルで取り寄せて細野へ持って行った。

大塚　第一次隊のテントは濃い紺で、わりあいボテッとした綾織りのものでしたね。二次隊はそれを改良して、三次はもう少し良くなった。

山田　ビブラムはマナスルからでしたかね。

村山　靴は高橋でつくり、ビブラムは底だけ輸入したんです。いくつつくれるか見当がつかないから、合わせて注文するのに苦労した。

せっかくの酸素も役に立たず

松田　今のように金さえあれば何でも揃うという時代ではないのに、極めて短時間に準備して送り出したんだから、大した力があったのだと思いますね。

村山　一次隊の酸素は？

山田　川重（川崎重工業）でした。

村山　ボンベに酸素を詰めて送ろうとしたら、待てと言われた。日本の高圧充塡物はまだ運べないと。だから空のボンベをロンドンに運んで、ロンドンで詰めてカルカッタへ運んだんです。ボンベ一つにしてもBOACは日本の技術を信用してなかったんですね。

大塚　三次の時は日本で充塡して船で運んだ。

村木　一次の時はごたごたしながらも酸素を持って行ったのだが、どんなに有り難いものかは山の上では分からなかった。みんな抜けちゃってたから。

山田　ベースでテストしたし、ナイケ・コルでもテストしたけどほとんどゼロ。あるいは三割くらいしか入っていない。

松田　当時のものは一度開けたら閉めても駄目なんですね。それをテストの度に開ける。だから三次の時には酸素が抜けていないかどうかを調べるためにバルブを開けなくても分かるようにゴム風船をつけたりした。素人がテストすると、閉める時に完全に閉められないから、絶対に開けるなといわれていた。そんなに苦労して準備したのに、その辺りの記録は残っていないんですね。短兵急にやったから記録を書く時間

的余裕もなかったということでしょうか。食料はどうでした？

山田　失敗ですね。ヒマラヤン・ジャーナルの一九三九年号にイギリスのティー・ディールという人が書いた「ヒマラヤの食料」という記事を読んで、そのまま持って行ったんだから口に合うわけがない。

村木　踏査隊が帰ってきた直後かな、舟橋さん、加藤喜一郎さん、山田さんで富士山へ行って山田・舟橋式のレーションの試食をしたんですよ。一回ぐらいなら何でもおいしいんで、これはおいしいと。ところがマナスルへ行って毎日食べるとなると、ビスケットと紅茶みたいのばかりでは口に入らなかった。

山田　一次の時はポーラーの運行表なんてのはなかったですね。田口さんにいわせれば初めての経験なのだから作りようがないと。どこにキャンプをどれだけ作るかも分からないんだから。だから、食料も大雑把に、ベースキャンプから上が六十日だとすれば、シェルパ何人、隊員が何人で、六十×人数分くらいの見当で持って行った。

松田　途中でナイケ・コル以上の食料がないからというので、あわててBCから現地食を荷上げしたということはなかったですか？

山田　システマチックにキャンプに上がっていないということだね。厳密な運行表によって作ったものではないから。

松田　第一次隊のルートについてコメントしていただきたいのですが、ナイケ・コルまでのルートは踏査隊が決めてきたから、その上ですね。

山田　C7がノース・コルだから、C5とC6の間のルートは田口さんの功績ですね。アイス・フォールの中を横切って。そこから上は、僕の記憶ではC6の場所を作る時に加藤喜一郎さんと大分長いこと議論した。あの時の可能性としては右と左と二つあり、左は雪崩が怖い。右は距離は長くなるが安全に登れそうだと判断して右を採った。

村木　左の方は、最初田口さんと加藤喜一郎さんと三人で偵察した時、足元から雪崩で切れていた。それでノース・コルの方へ逃げたんです。ところが第三次で今西壽雄さんたちと行った時には、第一次の山田さんたちがプラトーに出るために採ったルートは雪が付いてなくて手がつけられないほどでした。

松田　第一次の時の雪のコンディションでは、あれしかないということだったんですね。

大塚　私もそう思いますね。第一次のルートは、あの時期のマナスルの雪の状態では最適だったと思います。

松田　キャンプの数とか、キャンプ間の距離といったことについてはどうですか。キャンプ間の高度差は五〇〇メートルと考えて、ナイケ・コルまで四つのキャンプを作った。

山田　正直いってあれで限界というか、これ以上は苦しくて登れないとあの時は思った。しかし後でみると随分近かったね。二回目なら、苦しくてもこのくらいなら大丈夫だと分かるけれども、あんな苦しい思いをして登ったのは初めてだから。

松田　第一次隊の締めくくりとして、山田さんが最高到達地点から引き返した時のことを。

山田　石坂君と加藤喜一郎さんと三人で最終キャンプを出発して、途中には小さい

クレバスがあったり、青氷があったり、快適な雪の斜面があったり、それからかなりの距離がプレイカブル・クラストですごくバテたですね。酸素なしだから五回くらい息をしてやっと一歩を歩き出すというくらいのペースだった。距離にしてプラトーの半分くらい行ったか行かないかの所で休んだ。バテてはいたが、喜一さんも石坂君もどうしようもなく動けないほどではなかった。私の想像では、引き返す手前で休んだ時に、たまたま石坂君が上向けに寝ていたのを見て喜一さんは引き返す気になったのではないか。喜一さんが、残念だけどもこれで帰ろうといったんで、特に議論したわけでもなくそれに従った。

大塚　何時頃でした？

山田　二時過ぎじゃないかな。まだ天気はいいし、上まで行こうと思えば行けなくはないほどで、それほどバテていたわけではない。ただ、上へ行って、無事にキャンプまで帰れるかどうか自信は無かった。

日下田　プラトーはだだっ広いから、暗くなったら見当がつかない。

山田　今の山登りと違うと思うのは、当時はチームを組んで歩くということは、チームの誰かがへばれば、一緒に山から降りるというのが鉄則だった。リーダーが帰ろうといえば、それに従うのが我々が育った時代の山登りの仕方だったから、何の疑いもなかった。今のような時代だったら、喜一さんくらいは一人で頂上へ行ったかも知れない。あるいは今だったら頂上まで行って途中で軽い気持でビバークして降りてくる。あの頃はそんな経験も無いから自信も無い。装備も良くない。ただ、降りる時に少々残念だと思ったのは、下り出してみると楽なんで、スタコラ歩ける。これならもう少し上まで行けたなあと、下りながら思った。

村木　あの日はすごく天気が良い日で、日が暮れるまでそよ風ひとつ吹かないという感じだった。

山田　これは一次隊のこぼれ話のようなことだが、一次隊で「加藤、村木、山田の反乱」といわれている〝事件〟があった。我々は上の方にいて、ハイ・キャンプには計画どおり食料、燃料を補給してくれるだろうと思っているのに、どうもきちっといかない。田口さんがいわれるように、経験がないし誰も分からないから計画の立てようがなく、ポーラーは無理だ、臨機応変な登り方でよい、というのも一つの考え方だと思うが、我々は、やはりポーラーのような計画を組んで行って、それを補正しながら登るやり方をするべきだと考えていた。そこで日本へ帰ってから三人で三田さんの家へ押しかけて行って、第一次ではこうだったと、第二次についてはポーラーのやり方をわきまえたリーダーを最初に決めて下さいと談判した。ところが巧みに三田さんのペースに巻き込まれて、ウイスキーなんかをご馳走になって帰ってきてしまった。

サマ部落での入山阻止問題

松田　第二次登山隊に移りたいと思います。

大塚　第二次隊はタクティックスを論ずる前にサマ問題に尽きると思います。一つの遠征ができなくなってしまったのですから。

山田　三田幸夫さんの『わが登高行』を

見ると、五三年に三田さんがゴンバに挨拶に行ったら、前年の踏査隊の時のことからいちゃもんをつけてきた、とある。だから第二次の時のサマ事件の片鱗みたいなものが既にあったように読めますね。

川喜田　遠慮なくいいますと、リエゾン・オフィサーの責任は重いでしょう。しかし地元との接点に気をつけて行かなかったのは、やはり日本人の旦那（サーブ）が悪い。日本人の性格の問題も感じますね。どうも日本人は最初は慎重にやるんですよ。ところが一回うまくいくと急にずうずうしくなる。西洋人ならいつまでも用心する。

山田　確か二次の時、僕は修羅場にいなかったから知らないが、他人から聞いた話だと、ネパール政府の登山隊を援助せよというお墨付きを示して「この証文が見えないか」とばかりに見せたら、サマの親方が「ここはネパールじゃない。サマだ」と言ったという。

川喜田　当時はネパールの王様とさえ意思が通じていたら、下の方の役人は取るに足らないというような考え方がかなりあったと思いますね。やはり郷に入っては郷に従え、ですよ。

村木　初めてヒマラヤへ行きたいだけのために入った隊としては、そこまでの配慮は無理ですね。

川喜田　最初のイギリス隊は大分用心しているんです。日本人も最初に行くのはそうなんですが。だからサマで腸チブスの患者がいたら、林一彦君は今西さんに「お前は診療に専念せえ」と言われて悔しい思いをしたが、医者としての信用はものすごくあった。

山田　三田さんによると、五三年の時にラマ僧たちがいうのは、前年に日本隊が来たために疫病が流行ったりしたと。そうしたらディリーが、冗談じゃない、林ドクターがお前の息子が死にそうなのを助けたではないかといって反論した、と書いている。

川喜田　とにかくあの事件は、リエゾン・オフィサーに任せている間にその辺でもめごとが起こっているのを上の方の日本人隊員がよく知らなかった。それが尾を引いて結局サマのベースキャンプを取り払う時の荷物の取り合いですね。あれが元でラルキャ・バザールの下で大乱闘でしょ。その通報を受けてサマ僧院の地域も管轄に入れ、この地域の裁判権を持つセプトゥ・ラマというラマの大僧正が馬に乗って駆けつけた。それで仲裁してくれたんです。今にして思えば残念なことに、あのころ聞いたのでは、くわせ者の坊主がいて煽動したというような受け取り方を日本人隊員にされたようです。このラマこそ無視された上に、存在自体を日本隊に無視されていた訳で、気の毒な思いがしますよ。それが尾を引いて翌年のあの騒ぎでしょ。やっぱりあれは不注意ですよ。

山田　あれは宗教的な問題だったのか、経済闘争だったのか、今だによく分からない。

村山　宗教的なものではない。かといって金で解決できるような雰囲気ではなかった。感情問題ですよ。サマに入った登山隊を心よろしく思っていなかった。物価を引き上げたということもあるでしょうし、諸々のことが鬱積していたんでしょうね。それが爆発したのでしょう。そしてガネッシュヒマールへの転進ということになった訳ですが、一言でいえばわれわれには危機

管理能力というものが欠如していた。

山田　サマの人たちにとって、我々があの地域に入ったことによって良かったことは何もなかったんでしょうね。

大塚　それで第三次では最終的にお賽銭を出すという形で話をつけたんですね。

村木　村山さんが第三次の先遣隊で小原さんや橋本さんと行かれた時はどんな動きがあったのですか？

村山　チョコンのスッバ（郡長）、川喜田さんがいわれたセプトゥ・ラマその人ですが、彼だけを頼りにしたわけです。サマの部落民は全然対象にしない。スッバだけをねらったわけです。それでスッバから、来年皆さんが入る時には現場に行くから来年まで問題を持ち越すことはない、という結論を得ていたわけです。ところで本隊で槙さんが渋い顔をしたお布施、あれはどういう恰好で出てきたんですか？

大塚　交渉の過程でだと思いますよ。

松田　向こうがちらっと金の話を出したんでしょ。膠着状態にあった時に。

大塚　ゴンバの修復といった話が出て、槙さんはピンと来た。お金の話が出りゃ話は早いと。結構値切ったということですが、向こうにとってはびっくりするほどの額だったのでしょう。第三次ではそういうことがあってはいけないというので、多田等観さんから知恵を授かって、装備係で金襴緞子のようなものを準備していった記憶がある。

松田　サマ部落民の偏見と盲信について、会報二三四号に吉沢一郎さんが興味深いことを紹介しています。チベット仏教学者のスネルグローヴという人が一九五六年にサマの僧院調査に訪れた時の村人の話として、ブン・ギェン（マナスルのチベット名）の神様はその神域に招かざる外国人が入ってきたのを怒り、疫病を流行らせたり、家畜を病死させたりした。マナスル踏査隊が帰った年の冬には大雪崩が廟を襲いラマ尼など十八人も死んでしまった。これは日本の登山隊が聖なる山に登ったからだと。そして、日本人は僧院の再建費を寄付したが、それでも村民の気持は一向に納まっていない、というスネルグローヴ氏のコメントが紹介されています。そして、これにつけ加えて、日本人が仏教徒だといってもチベット語を話せないでどうしてチベット語のお経を理解できるのかというサマ村民の意見をとりあげているが、一つの考え方であり参考になると思います。

一方、最近出たトニー・ハーゲン博士の"Building Bridges to the Third World"という本によれば、同氏も一九五三年の九月に同じサマの谷で中国のパスポートを持っているかと詰問され退去を勧告された、という記事があり、やはり当時のサマ周辺にまではカトマンズの威令が行き渡っていなかったようです。

堀田　ステップ・バイ・ステップで小さい隊が行っていればよいものを、二十年のブランクを埋めて一気に八〇〇〇㍍をやろうと意気込んで行ったところに無理があったのではないか。ただ、いろんな経験が得られ、その経験が後に役に立って落ちつくところに落ちついているのだが、ヨーロッパみたいに幾つかの小遠征隊が出て事情を知って行けば、マナスルのようなミスは起きなかったのではないかと思う。

日下田　第二次はマナスルを見ないで引

き上げたんですが、その後ガネッシュやヒマルチュリへ行って、氷河の上を歩いたり、ああいう所で生活したりしたことは非常にプラスになったし、ヒマラヤの楽しさも味わうことができた。

第三次隊成功の要因

松田　第三次隊は成功した隊でもあり、書かれたものが色々ありますので、それを補足するようなお話をお願いします。

大塚　第三次は槙さんが全部計画し、それを村木さんが具体化した?

村木　槙さんにいわれて、僕が素案を作って最後の仕上げは松田さんがやった。

松田　槙さんは大まかな基本方針を出して、準備の段階で村木さんが企画みたいなことをし、私は装備を担当していたが、現地では荷上げ計画も担当することになった。

村木　タクティックスの面からいうと、荷上げ計画からみると二次と三次というのは原案はほとんど同じなんですね。ただ、二次の時は高度順化を加味した垂直に対応する動きではなかったように思います。第一次隊の経験から極力キャンプを減らすという方針で。1、2、3でナイケ・コルでしょ。4、5、6と高所キャンプを伸ばし、そしてファイナルキャンプは7という計算でした。槙さんはそれでよいといっていた。

大塚　1、2、3でナイケに行ったけど、2はいわゆるリレーキャンプで、ルートができてからは一つ減らしたので、結局はナイケ・コルのアドバンス・ベースはC2であった。

日下田　ああいう中継キャンプは当初は必要だけど、ある程度きちんと整備されて何度か往復して慣れてきたら当然いらなくなる。

大塚　C6をファイナルとするとC2とかC4が根拠地となる。

日下田　C2ができてからナイケ山の方に行ったことがあった。

松田　あれは槙さんの命令で、直接象のお腹の下に入ってしまっては背中の方が見えないからと、ナイケ山に登って朝からずうっと双眼鏡で雪崩のルートを見ていて槙さんに報告した記憶があります。そうして雪崩の危険のあるC4の場所は北峰側からと、プラトーからの両方の雪崩の死角となる場所に決めたんですよ。

日下田　その時はエプロンを経由して直接プラトーに出るという計画はあったんでしょうかね。

村木　あったでしょう。

松田　一次隊がプラトーに出るのに使ったカマ氷河の所は岩が出ていたから第三次隊の時はルートにならなかった。

山田　そう。第三次の時の写真を見ると真っ黒だったね。

大塚　その逆だったら困るわけだ。キャンプが一つ増えるから。

山田　三次はポーラーで行ったけど、予め計画したのと実際は変わっているでしょう。その時の輸送計画の修正は?

日下田　松田さんがC3で肺炎になって下り、C2でずっと頑張ってくれた。あれでもうその心配は全くなかった。各キャンプからこれが足りないから至急持ってこいというようなことはほとんどなかった。輸送計画は一〇〇パーセントきちっといっていたと思う。

松田　ところで食料は二次ではやや細かすぎたように思いましたが。

日下田　三次の時は自分で選択できるように直したのと、できるだけ市販の物で間に合わせることを考え、特別に作らせるとか、包装し直すということはしなかった。食料の献立は一次の反省から、食べられるものということで、二次からは米食を中心として大幅に日本食が採用された。なお二次では槙委員長の方針でグラニュー糖を大量に採ることにしたが、これはかなり余り処分に苦労したことを覚えている。

村木　装備では一次は全然だめだったけど、二次ではかなり改善されてほぼ合格点という所まで行った。二次で使わなかった高所用装備などはそっくり保管しておいて、三次ではテントは半分くらいは二次のを持って行った。

山田　第一次から第三次にかけての五二年から五六年頃というのは、日本の経済力が疲弊した状態から急速に立ち上がった時期で、そういう背景があって日本の産業界もこぞって協力してくれたので、遅れていた装備も隊が出る度に新しいものができていった。ヒマラヤの登り方についても、新しい知識がもたらされた。水を大いに飲めといい出したのは三次からでしたね。二次まではそんな学説は無かった。

大塚　ハントの報告の中にあったんですよ。

山田　ハントはオレンジ・ジュースを奨励していた。

松田　ハントの話が出ましたが、高度順化についてはハントがモデルを作ったということですね。ハントの『エベレスト登頂』ですね。高度順化の概念が登山のタクティックスと結びつけて考えられだしたのは、ハント隊のドクター・ピューが提唱したのが最初でしょうね。

大塚　ハント隊がきちんと資料を残してくれたお陰ですね。

松田　第二次から帰ってきたらハントの本が出ていた。こういう風にすればよかったんだなあってわかりましたね。三次はそれが基本になった。槙さんの基本計画はこれに基づいていました。酸素を積極的に使うとか、高度順化を組織的にやるとか、上へ行ってから全員下に降りて休養するとか。

大塚　イギリスが三十年かかったエベレスト登山の集大成だからね。

山田　人間の強さというのは、自分の経験でなくても経験が蓄積されてくると、心理的な怖さがなくなってきて、物理的な体力が出てくるという感じがする。

川喜田　それが本当の科学的人間学ですよ。

時には抜け駆けも必要？

村木　ところで、登頂が成功して、それはそれでよかったのですが、中には第一隊がなぜ今西壽雄さんとガルツェンだったのかという人がいるんですね。

大塚　でしょうね。外から見ればそういいますよ。

山田　いかにも槙さんらしい配慮ですね。

松田　槙さんのそういう配慮がいろんな意味でうまくいったということですね。アジア人でしかもシェルパを登らせたこと、隊員扱いしたことはネパールやインドによい意味での大きな影響をもたらした。

日下田　あの時、私はC4にいて、村木さんから登頂隊の第一隊が今西・ガルツェンで、第二隊で加藤さんとお前といわれた。

頂上なんて全く考えていなかった。頂上へ行くのは加藤さんと村木さんか大塚さんだと思ってましたから。

村木　最年少ということですよ。無線で話をした。

山田　今様の考えだったら多分プラトーのルート偵察にでかけた大塚さんがそのまま頂上まで行っちゃったんじゃないですか。

大塚　そうそう。後で聞いたら、下から我々を見ていて、どんどん登って行って急に見えなくなっちゃった。あの調子じゃ頂上まで行ってしまうのではないかと。実際、私はシェルパのペンバ・スンダと一緒にいまして、七九〇〇㍍まで行って時計を見たら一時半ちょっと過ぎですよ。まだ酸素はあるし、どうしようかなとは思った。しかし私の任務はルート偵察とキャンプ・サイトの選定ですから、任務は十分果たしたので帰ろうとしたら、ペンバがどうして頂上に行かないのだ、と。

山田　大塚さんは昔風の教育を受けているから…。

大塚　全く不思議に思わず、今日はここまでいいんだと、帰りました。ただ、自分個人の反省としては、十年くらい経ってから明大OB会の『炉辺通信』に書きました。あの時あそこで帰ってよかったのかと。登れるチャンスのある時は、特にジャイアンツの時は必ずゴールゲットしなければいけないと。マナスルの時はあれでよかったかも知れないが、今後の山登りではそれではいけないんだと。

山田　そう、抜け駆けということもあるけど、翌日の天気次第では正規のアタック隊が登れないということもある。

村木　僕らはすぐ下にいたから分かるんだけれども、もともと抜け駆けの気持はあったから、大塚さんにやられたって。僕と喜一郎さんはプラトーへのルート偵察の時、エプロンの右側の岩場の変なところをやっちゃって時間がなくなり、その上喜一つぁんの酸素がなくなっていた。

大塚　あの偵察の時、相棒が喜一つぁんのような日本人だったら分からないね。行っちゃったかもしれない。

村木　それで槙さんにえらく怒られることは間違いない。

三次にわたる隊の光と陰

松田　三十年の時に、会報『山』四九〇号に「マナスル登頂三十年に想う」と題して、大塚さんがそれまでの三十年間を総括されておりますが、今回も代表してまとめていただけませんでしょうか。

大塚　マナスルの三次にわたる隊を比べてみると、光と陰の部分が目につきます。第一次隊は初見参の隊であり、五二年の踏査隊に参加された方を除けば、全員がヒマラヤの新人のようなものです。したがって戦前より蓄積していた財産で、がむしゃらに登り、ともかくあそこまでよく登れたということでしょう。第二次の隊は第一次の経験をもとに、今度こそはの意気込みで出かけましたが、結局はサマの住民の反対に遭ってマナスルの山麓にも辿り着けないという不運の隊でした。天候にもよりますが、この時に登山ができたとしたら、堀田さんが会報一七二号に「偉大なる経験の蓄積――マナスルへの出発に当り」と決意を表明しているとおり、恐らく登っていたことでしょう。第三次隊は幸運に恵まれた〝栄光

の隊〟であって、この隊の報告はこれまでに多くの記録が残されています。

松田　マナスルの頂上に立った四人のうち、残っているのは日下田さんだけになってしまいました。

日下田　一九九〇年にシャモニーでアンナプルナ登頂四十周年のお祝いの集まりがあり、ヒラリーとか、ハントとか、K2へ行ったコンパニョーニ、ローツェのアンドレ・ロック、エルンスト・ライス、カンチェンジュンガのジョージ・バンドなど錚々たる人たちが来ていました。ところが驚いたことには、みんな随分年寄りなんです。一九五〇年代に登っている訳で、当時の初登頂者は三十代後半の人が多かったから。私みたいに二十代の真ん中で頂上に立った例の方が少ないのです。ヒラリーなんかは若い方で、それでも七十ぐらいです。

大塚　今西壽雄さんはいくつでした？

日下田　八十ちょっと前ですか。大体みなさんその年代でしたね。

松田　マナスルの四十年をマナスルの側から回顧してみますと、十周年の一九六六年はネパール・ヒマラヤは登山禁止になっていた時期で、六〇年代は八〇〇〇㍍の登頂が終わった後、登り残した所の登頂がなされる時期だったのですが、登山禁止令のため六〇年代の後半はめぼしい記録は残っておらず、七〇年代にずれ込んだ。マナスルについていえば、七一年に高橋照さんが西壁（現在は北西稜といわれる）ルートから登ったし、七四年には女性隊が登ったというふうに、パリエーション・ルートからとか女性隊だとかが登った時代です。七〇年代は壁の時代で、二十周年の七六年は日本・イラン合同隊が北東面通常ルートから秋季に初登した。三十周年の八六年になると、山田昇氏が厳冬期・無酸素・アルパインスタイルでマナスルを登った年で、八〇〇〇㍍の難しい登り方はほぼ終盤に入った時代といえます。四十周年になった今は、ヒマラヤの記録的なことはほとんど終わって、八〇〇〇㍍峰が公募登山の対象になった中、ヒマラヤ登山の経験のある中高年者が酸素とシェルパを使って楽しんで登る時代になっています。

ところでこの座談会は日本山岳会の座談会ですから、この四十年を日本山岳会の側から回顧していただきたいのですが。

大塚　私の個人的見方ですが、日本山岳会としてマナスルの遺産が生かされ引き継いだ登山は一九五九年のヒマルチュリから七〇年のエベレスト登山までで、私自身これ以降マナスルは博物館入りにしたつもりです。このエベレスト隊に参加した隊員の中には、後の遠征に隊長を務める等重要な役割を果たした人が沢山おり、彼等によってその後の新しい登山の局面が展開されていった。植村直巳、小西政継、平林克敏、鹿野勝彦、松浦輝夫、井上治郎、平野真市、神崎忠男等といった人々です。

この観点から眺めてみますと、一九七六年の二十周年にはナンダデビーに東峰から主峰へ縦走する新しい試みが鹿野隊長率いるJAC隊により、インドの協力を得て成功しています。さらに一九八六年の三十周年の時には、その前年の八五年、同じく鹿野隊長以下当時の若手の総力をあげてカンチェンジュンガの縦走を行っています。

JACとしてのヒマラヤ登山の系譜としては、八〇年中国のヒマラヤ登山開放による一連の登山であるチョモランマ北壁・北

東稜、八八年には日本・中国・ネパール三国友好チョモランマ・サガルマタ登山隊の交差縦走、さらに九〇～九二年の日中合同による二度のナムチャバルワ、九五年のマカルー東稜と続き、四十周年に当たる今年は平均年齢二十六歳という若いK2登山隊を山本篤隊長が編成し、十二名が登頂し画期的な成果を挙げ若さへの信頼を回復した点、新しいターニング・ポイントを示しました。

さらに最近のエベレストに対する日本隊の挑戦を眺めてみると、群馬岳連による南西壁の厳冬期初登（一九九三年）、愛知学院大隊によるサウス・ピラー（一九九四年）、日本大学隊による北東稜ルートからの初登（一九九五年）、立正大学隊による北稜ルートからの登頂（一九九六年）と、各ルートから登られているが、これらの中には極地法登山の経験が生かされ、マナスルの遺産が再認識された隊もあったと思います。

松田　ところでこれからの五十周年は日本山岳会の百周年の翌年になりますが、その頃はどんな山登りの時代になるのか、村木さんに展望していただきたいのですが。

村木　今後の展望といわれても困りますが。この四十年の間にヒマラヤ登山は勿論のこと、登山そのものもすっかり変わって多様化してしまった。O・Rみたいに単純な未来観測は不可能です。技術、装備、登山のシステムもどんどん変わり、人の考え方も変わってしまった。

これからは、様々な人が様々な考え方で多様多彩な登山を楽しむという方向に進むでしょうし、どれが良くてどれが悪いかということもない。そうしたものを包み込んで、少しは育てるような日本山岳会であればよいと考えています。しかし、少し気になることが無いではない。人は少しでも楽をして、労少なく効多い方向を望んでいるようで、ヒマラヤ登山もそんな方向に流れているが、自分の生命と安全はいくら金を積んでも買えないんだということを忘れている人がいるんじゃないかということです。

もう一度マナスル登山を振り返ってみますと、確かに自分たち自身の努力の積み重ねと幸運によって登頂は成功したけれど、会の内部は無論のこと、どれ程周囲の支えを受けていたかということを忘れてはならないと思います。それらの御支援に対して改めて感謝したいと思います。所詮、ヒマラヤ登山も日本山岳会も多くの人の理解と応援がなければ成り立たないのではないかと考えております。

［編集委員会より：マナスル四十周年に当たっての座談会は、第一回を一九九六年四月二十日、堀田、村山、川喜田、山田、村木、松田の各氏の出席により問題点を拾い出す目的で行い、第二回を八月三日、村山、山田、村木、大塚、日下田、松田の各氏の出席により、前回においてクローズ・アップされた問題にしぼって、いずれも松田氏の司会により行われた。本稿は二回にわたる座談会の内容を編集委員会において整理・編集したものである。貴重な御意見ながら誌面の制約で本稿に収録できなかった部分も少なくなく、それらを含めて座談会の内容は百年史の資料として残すこととしたい。］

マナスル登山クロニクル（一九五〇～一九九六）

池田常道

一九五六年に日本山岳会隊（槇有恒隊長）が初登頂の際にたどった。七二年西ドイツ隊（G・シュマッツ隊長）が第二登、七四年日本女子隊（佐藤京子総隊長）が第三登。以後続々と登られ、この山の通常ルートとなっている。

(2)東稜オーストリア・ルート

マナスル氷河とプンゲン氷河を分ける尾根で、一九七四年の日本女子隊が試登。その後三回試みられたあと一九八五年のオーストリア隊（W・シュトゥダー隊長）が核心部岩稜帯の先からノース・コル方向へトラバース、プラトーに出て登頂した。また八六年のポーランド隊（J・ククチカ隊長）は北東壁下部からダイレクトに東稜に達し、ピナクルの肩七六〇〇㍍まで直登、これを左に巻きプラトーに出て登頂した。前者のルートは八八年スイス隊（T・シュピーリヒ隊長）が第二登した。

・西面ドメン・コーラ側

マナスルの概要

位置　ネパール・ヒマラヤ　ガンダキ部マンシリ（マナスル）ヒマール

東経　84度33分43秒

北緯　28度32分58秒

標高　八一六三㍍（初登時は八一二五㍍、一九七〇年八一五六㍍に改定、八三年より現在の数値となる）

マナスル主峰へのルート

・東面マナスル氷河側

(1)北東面日本山岳会ルート

マナスル氷河から北東稜のナイケ・コルに上がり、北峰南面をトラバースしてノース・コル下へ。そこから頂上プラトー上に出る。

(3)北西稜日本ルート
初登時マナスル西壁と呼ばれたルート。ドメン・コーラから北峰の西にひろがる氷河内院に入り、右手の北西稜からプラトー突端に抜ける。中間部に傘岩と呼んだ岩場がある。一九七一年日本マナスル西壁隊（高橋照隊長）が初登し、初のバリエーションとなった。その後再登はおろか試みた隊もない。

(4)西壁フランス・ルート
ドメン・コーラをさらに奥まで入り、西壁右手のバットレスを経て南西稜上部、さらにプラトーに出る。一九八一年フランス隊（P・ベジャン隊長）がセミ・アルパイン・スタイルで初登。再登、試登ともなし。なお西壁中央のダイレクト・ルートは手付かずである。

・南西面ツラギ氷河側

(5)南西壁オーストリア・ルート
ドバン・コーラ源流のツラギ氷河から下部の岩場「ロニヨン」を突破して上部盆地に入り、南西稜上部からプラトーの西端に出る。以上(3)(4)(5)とも(1)に比べてプラトーの横断距離が長い。一九七二年オーストリア隊（W・ナイルツ隊長）が初登。第二登は八三年西ドイツ隊（G・ヘルター隊長）が上部盆地からアルパイン・スタイルで。第三登は八五年一月のポーランド隊（L・コルニシェフスキ隊長）で、これはマナスルの冬季初登頂であった。

・南東面プンゲン氷河側

(6)南稜ポーランド・ルート
ピーク29とのコルから始まる南稜は、一九八四年ポーランド隊（J・クリス隊長）によって初登された。この稜への挑戦は八〇年のポーランド隊（J・フェレンスキ隊長）がプンゲン氷河側から試みたあと、八三年の春と秋にツラギ氷河側から行われ、結局プンゲン側から成功した。第二登は九一年のウクライナ隊（V・シュミチン隊長）で、南東壁を断念後アルパイン・スタイルで南稜から登頂、北東面へとトラバースした。

(7)南東壁
頂上からプンゲン氷河に雪崩れ落ちる南東壁は、この山の最後の課題といえよう。雪崩の危険にさらされたうえに氷雪まじりのロックバンドが立ちはだかっている。一九七四年のユーゴスラヴィア隊（J・ボボフスキ隊長）が七四〇〇㍍に達したのを最高到達として、以後三回の挑戦はいずれもこの高度を越えてない。

マナスル登山クロニクル

〈凡例〉
- 文中敬称略。
- ここでいうシェルパとは高所ポーターの意で、いわゆるシェルパ族以外の場合も含まれている。
- ソ連邦、東西両ドイツ、チェコスロヴァキア、ユーゴスラヴィアなど九〇年代に入って分裂・統合のあった国々については当時の旧称で示した。

一九五〇年春〜夏　H・W・ティルマンが前年に続いてネパール入り。ドゥド・コーラからマナスルを観察するが、北峰越えの北稜

ルートは困難と見て一行六人はアンナプルナ4峰を試登。その後八月に再びマナスルを訪れ、J・O・M・ロバーツがラルキャ・ラを越えて北東面に可能性を認めた。

一九五二年秋　今西錦司ら四人の日本山岳会偵察隊。ティルマンのルートにしたがいアンナプルナ4峰試登後まず西面、ついで北東面を観察。サマのはずれにBCを置いてマナスル氷河に踏み入り、ナイケ・コル手前まで試登した。また、東稜上から南東面（プンゲン氷河側）も見たが、こちらは絶望的だった。

一九五三年春　三田幸夫ら十五人の日本山岳会第一次隊。偵察結果を踏まえて北東面にルートをとり、プラトーの七五〇〇㍍にC9を建設。六月一日に加藤喜一郎、山田二郎、石坂昭二郎が頂上を攻撃したが七七五〇㍍で断念した。（なお、この最高到達点は五六年になって七五〇〇㍍であったことが判明する）

一九五四年春　堀田弥一ら十四人の日本山岳第二次隊。前年の雪辱を期したが、サマ住民の反対に遭いガネッシュ・ヒマールに変更。登頂失敗後、谷口現吉ら九人はチューリン・コーラからヒマルチュリ東面を観察、ルピナ・ラを越えた。

一九五五年秋　小原勝郎ら三人の日本山岳会先遣隊。サマ問題の折衝を兼ねて入山し、ナイケ・コルまで登る。

一九五六年春　槙有恒ら十二人の日本山岳会第三次隊。今回はノース・コルを経由せずプラトーへは別ルートを採り、七八〇〇㍍にC6。五月九日に今西壽雄、ギャルツェン・ノルブが初登頂に成功し、十一日にも加藤喜一郎、日下田実が頂上に立った。この〝世界的快挙〟が日本に伝えられ、新聞の第一面を華々しく飾ったのは十八日のことだった。

一九六四年秋　ヤン・ブーンら五人のオランダ隊がヒマルチュリ断念後にマナスル北峰（七一五七㍍）を試み、ノース・コルから十月二十五日に初登頂。頂上に立ったのはJ・ド・リント、A・J・ドリーセン、フーベルト・シュリーブル（オーストリア）とシェルパのニマ・テンジン、イラ・ツェリン。

一九六五年　ネパール政府は中国国境の緊張に配慮して登山禁止を宣言。この措置は六九年三月まで続いた。

一九七〇年秋　青木敏ら二人がドゥド・コーラの支流、ドメン・コーラに入ってマナスル西面を偵察。西壁そのものは不可能と見たが、北西稜に可能性を認めた。

一九七一年春　高橋照ら十一人の日本マナスル西壁隊。北峰西面の氷河内院から北西稜に取り付き、プラトーに抜け出して五月十七日に登頂。新ルートから第二登を果たした。頂上に立った小原和晴、田中基喜は十五年前に頂上の岩に打ち込まれたアイスハーケンを持ち帰った。

一九七一年春　同じころ北東面を登っていた韓国隊（金祐燮（キム・ホスプ）ら八人）は、五月四日、隊長の弟、金祺燮（キム・キスプ）が七六〇〇㍍付近で転落死、登頂を断念した。

一九七二年春　ヴォルフガング・ナイルツら九人のオーストリア隊が南西面のツラギ氷河に入り、南西壁にルートをとってプラトーに出た。四月二十五日、ラインホルト・メスナー（イタリア）が単独登頂したが、途中から引き返したフランツ・イェーガーが行方不明、これを捜しに出たアンディ・シュリックもプラトー上で消息を

絶った。なお、五六年と七一年の登頂では酸素が使用されたが、この登山はマナスルで初めて無酸素で行われた。

一九七二年春　前年失敗に終わった韓国は再びマナスルに挑んだ。金禎燮（キム・ジョンスプ）ら十二人のチームには日本から安久一成カメラマンも加わっていたが、四月十日にC3（六五〇〇㍍）が雪崩に襲われ、同氏を含む五人がシェルパ十人とともに犠牲となった。一九三七年ドイツ隊のナンガ・パルバットにおける十六人に次ぐ、ヒマラヤ登山史上二番目の惨事であった。

一九七三年春　ゲルハルト・シュマッツら八人の西ドイツ（当時）隊が北東面から第四登に成功した。七五五〇㍍のC5から四月二十二日にシュマッツ隊長、ジークフリート・フップファウアー、シェルパのウルキェンが頂上に立った。

一九七三年秋　ハウメ・ガルシア・オルツら十二人のスペイン隊が北東面ルートを目ざしたが、十月十日から十三日の間にC1、C2が雪崩に流された。幸い両キャンプとも無人だったので犠牲者はなかったが、一行は六一〇〇㍍で登頂を断念した。

一九七四年春　佐藤京子（総指揮）、黒石恒（隊長）ら十三人の日本女子隊。当初東稜を目ざしていたが約七〇〇〇メートルで断念。北東面通常ルートに転じて五月三日、七六五〇㍍にC5を建設。翌四日に中世古直子、内田昌子、森美枝子がシェルパのジャンブーとともに頂上に立った。八千㍍峰の頂に女性が立ったのはこれが初めてであった。しかし、第二次攻撃のため翌日C5に向かった鈴木貞子が消息を絶ち、のちにザックなどの遺品がC4とC5の間で見つかった。

一九七五年春　ハウメ・ガルシア・オルツら十二人のスペイン隊が二度目の挑戦で登頂に成功した。北東面通常ルートを採り、四月二十六日にヘラルド・ガルシア、ヘロニモ・ロペスがシェルパのソナムとともに頂上に立った。

一九七六年春　韓国から三度目の挑戦。金禎燮ら十九人で北東面通常ルートに七八〇〇㍍のC5までキャンプを進めたが、五月五日に雪崩のため隊長と登攀隊長が負傷、断念した。

一九七六年秋　日本＝イラン合同隊が北東面通常ルートから登頂。モハメド・ハクビツ（総隊長）、渡辺公平（隊長）以下両国十人ずつのチームは、十月十二日、七六五〇㍍のC5から影山淳、J・M・アサディとシェルパのパサンの三人を頂上に送った。通算第七登であった。

一九七七年春　ゲルハルト・レンザーら九人の西ドイツ（当時）隊。北東面通常ルートを六七八〇㍍まで登ったが、降雪と雪崩に阻まれて退却した。

一九七七年秋　ジャン・フレールら五人のフランス隊。東稜をセミ・アルパイン・スタイルで攻めピエール・ベジャンとティエリ・ルロワが七五六〇㍍に迫ったが断念。二人は凍傷のためBCからヘリコプターでカトマンドゥに運ばれた。

一九七八年春　グレン・ポーザックら十一人のアメリカ隊。北東面通常ルートに七三一五㍍のC4までキャンプを進めたところで降雪のため断念した。

一九七八年秋　清水清二と加藤保男のペアがシェルパ六人を伴って北東面通常ルートに挑んだ。九月十三日にBCを設け、十月五日

には七五〇〇㍍にC5を建設。七日に頂上を目ざしたが、プラトー上は腰までもぐる深い雪で約八〇〇〇㍍から引き返した。

一九七九年春　ロレンツォ・マッサロットら六人のイタリア隊は、北東面通常ルートの七三五〇㍍に作ったC4が五月五日雪崩に遭い、隊員二人とシェルパ二人が生き埋めになった。幸い自力で脱出したものの凍傷を受けて戦力は半減。五月十五日に他のメンバーが七五〇〇㍍まで登ったところで断念した。

一九七九年秋　ギジェルモ・ビエイロら十四人のアルゼンチン隊。同じく北東面通常ルートを登ったが、十月九日にエドガルド・ホセ・ポルセジャナが雪崩のため死亡。六五六〇㍍を最高到達点として断念した。

一九七九年秋　ウラディーミル・クルピカら十人のチェコスロヴァキア（当時）隊がラルキャ氷河から北峰を目ざし、四二〇〇㍍のBCのあと五つのキャンプを設けて北峰Ⅱ（七〇五〇㍍）に登った。頂上に立ったのは十月十六日にヤン・チェルヴィンカとオタカル・スロヴァナル、十八日にミロスラフ・ノヴォトニーと隊長の計四人。

一九八〇年春　韓国から四度目の挑戦。今度は李仁禎（リ・インジョン）ら七人の東國大隊で、四月二十一日に早くもC5（七五〇〇㍍）を建設。二回の攻撃が失敗に終わったあと四月二十八日に徐東煥（ソ・ドンワン）とシェルパのアン・パサン、アン・ザワが頂上に立って韓国積年の願いを叶えた。

一九八〇年春　ヤヌシュ・フェレンスキ隊長ら九人のポーランド隊は、初めてプンゲン氷河から南稜を目ざした。陸送した隊荷の遅れから四月上旬にカトマンドゥを出発、氷河上に二つのキャンプを進めて六五五〇㍍まで達したが、頻発する雪崩に阻まれ、五月十七日に断念した。

一九八〇年秋　ハンス・シェルら七人のオーストリア隊がスキーを使って北東面通常ルートに向かった。雪のコンディションが悪く、カール・フープが六八〇〇㍍地点まで使用したにとどまったが、以後も登山を進め、十月十四日に隊長ら三人とシェルパ四人がプラトーのエッジ手前七四〇〇㍍地点で断念した。

一九八〇年秋　ディナ・シュテルボワら女性八人に男性四人が加わったチェコスロヴァキア（当時）隊は南稜をあきらめてマナスル氷河に変更。北東面通常ルートに四つのキャンプを進めて七二〇〇㍍に達して断念したが、女性隊員ヤナ・クカロワがノース・コルから北峰を往復した。

一九八一年春　オーストリアのギュンター・ハウザーが経営する旅行社ハウザー・イクスクルジオーネンが組織した公募登山隊が北東面通常ルートを登った。西ドイツ、スイスも含めた三国から集まったメンバーは二十八人で第一グループ（十三人）をハンス・フォン・ケーネル、第二グループ（十五人）をベルント・シュレッケンバッハが率いていた。ちなみに公募メンバーの個人負担金は九五〇〇ドイツ㍾、シェルパは十三人であった。BCから一ヵ月でC5（七四五〇㍍）までキャンプを展開。五月七日に三人、九日に五人、十九日に七人の計五人（うちシェルパ二人）を頂上に送った。九日に登ったアンデルル・ローファラーは六十二歳で八千㍍峰の最高齢登頂者となった。また、十九日のペーター・ヴェルゲッターとゼップ・ミリンガーは頂上からC1までスキー滑降に成功した。

一九八一年秋　加藤保男、尾崎隆、富田雅昭は、サーダー以下四

人のシェルパと北東面通常ルートをすばやく登った。十月一日にBCを置き、十日後に早くも七一五〇㍍にC3を建設。十月十二日に尾崎が登頂し、二日後に加藤、富田も頂上に立った。日本人が無酸素でマナスルに登ったのはこれが初めて。

一九八一年秋　ピエール・ベジャンら四人のフランス隊がドメン・コーラから西壁を目ざした。中央部はさすがに手が出ず、右寄りの岩稜に取り付き、上部で七二年オーストリア・ルート（南西壁）に合流してプラトーに進出するライン。四八〇〇㍍のABCから五八〇〇㍍にC1、六七〇〇㍍にC2を出しただけで上部ではアルパイン・スタイルを採用。十月六日、七四〇〇㍍でビバークしたベジャンとベルナール・ミュレルが翌日頂上に達した。ジェラール・ブルタンも八日に単独攻撃を敢行したが、プラトーに出たところで夜となり、二人の残したビバーク・テントが見つからなかったため深夜C2にもどった。

一九八二年春　エンリク・フォントら六人のスペイン隊が北東面通常ルートで雪崩遭難した。五月十日、隊長とペレ・アイメリチがC5（七四〇〇㍍）から頂上を攻撃、七六〇〇㍍から引き返してC5に一泊したが、その夜のうちに雪崩のためキャンプごと流され二人とも行方不明となった。

一九八二年秋　ルイ・オードゥベールら十四人のフランス＝イタリア隊が北東面通常ルートを登り、十月十日に隊長とシェルパのナワン・テンジンが登頂した。

一九八二年秋　同じころ東稜に挑んだフランス隊（ジャン＝ポール・バルマら五人）は六二〇〇㍍で断念。通常ルートに入る許可をオードゥベールからもらったが、連絡官がカトマンドゥにその旨を伝えなかったため正式許可が下りず、そのまま断念した。

一九八二年冬　山田昇ら十人の日本ヒマラヤ協会隊が十一月三十日にBCを建設、北東面通常ルートから冬季初登頂を目ざした。七四〇〇㍍地点までのルート工作を終え、十二月十七日にC3（七一五〇㍍）を建設。翌日、佐久間隆、角田不二、青田浩が頂上を目ざしたが、プラトーの七六五〇㍍地点から強風のため引き返す途中、佐久間が滑落、約三〇〇㍍落ちて死亡した。

一九八三年春　ヴィンコ・ムロヴェッツらのユーゴスラヴィア（当時）隊。ツラギ氷河側から南稜を目ざしたが、四月二十五日に四五〇〇㍍地点で雪崩に遭い、イェルネイ・ザブロトニク他一人が死亡。七一〇〇㍍を最高到達点として断念した。

一九八三年春　ダグ・キーランら十二人の英軍隊はノース・コルから北峰に登った。C3（六七七〇㍍）までキャンプを進め、五月四日にパット・パースンズ、チャールズ・ハタースリー、テリー・ムーア、ダグ・ボースウィックの四人が登頂した。

一九八三年秋　ギュンター・ヘルターら九人の西ドイツ隊。同じくツラギ氷河から南稜をねらったが、七四〇〇㍍のC4から十月十八日に頂上攻撃をかけたときにはピトンとロープが不足し七五〇〇㍍で断念。南西壁の七二年オーストリア・ルートに切り替え、C2からアルパイン・スタイルで登攀。ヘルター以下七人とシェルパ二人が攻撃に参加し、六六〇〇㍍、七四〇〇㍍とビヴァーク後、十月二十二日に隊長とヘルベルト・シュトライベル、ヘルマン・タウバー（イタリア）、フーベルト・ヴェールがシェルパのアン・ドル

ジェ、ニマ・リタとともに頂上に立った。同ルートの第二登である。

一九八三年秋　韓国の許永浩（ホー・ヤンホ）が北東面通常ルートから単独登頂した。ルート下部の工作とキャンプ建設に二人のシェルパの手を借りたが、頂上攻撃は単独。十月八日の攻撃は七七〇〇㍍から引き返したが、十九日にあらためてBCを出発、C1、C2、C3と泊まりを重ねて二十二日頂上に立った。下山途中、南西壁を登ってきた西ドイツ隊と頂上直下ですれちがった。

一九八三年秋　ヴィルフリート・シュトゥダーら五人のオーストリア隊は東稜を攻めたが、十月七日に隊長とマンフレート・ケスラーが七四〇〇㍍に達したところで断念した。

一九八三年冬　レッフ・コルニシェフスキら十一人のポーランド隊が冬季初登頂に成功した。南西壁オーストリア・ルートをたどるが、十二月十二日にC1から下降中のスタニスワフ・ヤヴォルスキが落石による固定ロープ切断で転落死。この事故で予定が遅れ、C3（七一〇〇㍍）を建てたところで本格的な冬となり、登山は年を越した。八四年一月十一日、マチェイ・ベルベカとリシャルド・ガエフスキがプラトー上に達して七七〇〇㍍にC4、翌日二人とも頂上に立った。このルートの通算第三登にあたる。またポーランドにとっては、一九八〇年二月のエヴェレスト以来二つ目の八千㍍峰冬季初登頂であった。

一九八三年冬　北東面通常ルートからはアラン・バージェスら四人のカナダ隊が、こちらも冬季初登頂を目ざしていた。十一月中にナイケ・コルまで上がってC1を設け、十二月一日を待って登山開始。十日六五五〇㍍にC2のあと、アランとエイドリアンのバージェス兄弟が七一〇〇㍍に達したが、強風のため追い返された。

一九八四年春　アレシュ・クナヴェルら四人のユーゴスラヴィア（当時）隊が二手に分かれて南稜と南西稜を試みるべくツラギ氷河に入ったが、結局後者一本に絞った。六五五〇㍍のC3まで三つのキャンプを設け、五月二日にヴィクトル・グロシェリとスティペ・ボジッチが頂上を攻撃。途中で二回ビバークして四日に登頂した。BC建設後十八日目の登頂であった。

一九八四年春　西ドイツ（当時）のギュンター・シュトルムとスイスのハンス・アイテルがそれぞれ六人ずつの合同隊を組み北東面通常ルートを登った。BCから一ヵ月で登頂態勢をととのえ、四月三十日にスイスのエアハルト・ロレタン、マルセル・リュエディが登頂。五月七日に西ドイツのフリッツ・ツィントル、ミヒャエル・ダッハーが続き、十一日にはノルベルト・ヨース（ス）と西ドイツのシュトルム隊長、ヴォルフガング・シャッフェルト、ルドルフ・シャイダーがシェルパのアン・チャパル、ウォンギェルとともに頂上に立った。

一九八四年秋　ヤヌシュ・クリスら八人のポーランド隊（スイス人一人も含む）が南稜を初登攀した。プンゲン氷河からピーク29とのコル（プンゲン・ラ、六七五〇㍍）に向けてルート工作し、取付から二週間をかけてコルに到達。クシストフ・ヴィエリツキとルドヴィク・ヴィルチニスキが七四〇〇㍍まで固定ロープを張ってから四人が頂上に向かい、七三五〇㍍でビバーク。ヴィエリツキとアレクサンデル・ルヴォフが十月二十日頂上に立った。

一九八四年秋　チェザーレ・チェザ・ビアンキら六人のイタリア

隊は北東稜通常ルートをたどったが、七五〇〇㍍で断念した。

一九八四年秋　クラウス・ヴィンガーら七人の西ドイツ（当時）＝オーストリア隊が北面からマナスル北峰を目ざしたが、五九〇〇㍍地点で断念した。

一九八五年春　ヴィルフリート・シュトゥダーら八人のオーストリア隊。静岡岳連隊のキャンセルにより南西壁の許可を東稜に変更した。上部はピナクルへ直登せず、核心部岩稜の先から右（北）方へトラバースして六五〇〇㍍にC3。シュトゥダーとルディ・マイヤーホーファー、シェルパのアン・カミは四月三十日午前中にC3に入り、仮眠をとってからその夜二十二時に頂上に向け出発。七〇〇〇㍍地点で夜が明けるまで仮眠し、プラトーから下りてくる側稜を登って七六〇〇㍍地点で通常ルートに合流、十五時頂上に立った。第二次攻撃は五月四日に行われた。クリスチャン・ガプル、アントン・シュランツ、トーマス・ユーエンの三人は東稜を忠実にたどり、ピナクルに向けて直登しようとしたが、七三〇〇㍍で敗退。下降にかかってすぐユーエンが雪崩に流され、七〇㍍の氷壁を転落。行方不明となった。

一九八五年秋　対馬巌ら九人の青森県隊も同じ東稜を試みた。核心部岩稜の先六三〇〇㍍にC3を設けたが、十月八日からの悪天候に阻まれて断念した。

一九八五年秋　降旗義道ら七人のイエティ同人隊。北東面通常ルートのスキー滑降を目ざし、十月二十三日にC3（七二〇〇㍍）に達したが、二日後六四〇〇㍍にあったC2が雪崩に襲われてニマ・ノルブが死亡、装備の大半を失って断念した。

一九八五年秋　フェリペ・ウリアルテら七人のスペイン隊も同じルートに入ったが、降雪のため六三〇〇㍍で断念した。

一九八五年秋　フリッツ・ツィントルらの西ドイツ（当時）＝オーストリア＝スイス隊が北稜から北峰に向かったが、大雪のため四九五〇㍍までしか行けなかった。

一九八五年冬　山田昇、斎藤安平はアルパイン・スタイルで北東面通常ルートを登り、冬季第二登に成功した。十二月五日にBCを設け、五三五〇、六一〇〇、六八五〇㍍とビバークして九日に頂上を攻撃したが、強風に阻まれて七二〇〇㍍で敗退。十一日に再びBCを発し、六一〇〇㍍で降雪のため二泊、七〇五〇㍍にもう一泊後十四日頂上に達した。下部は深い雪に苦労したが、プラトー上はアイゼンのよく効く堅雪だったという。なお二人は、五六年の初登時に残された記念のメモの入ったピース缶を持ち帰った。

一九八六年春　ミヒャエル・ダッハーら十六人の西ドイツ（当時）＝オーストリア隊。北東面通常ルートを目ざすが、五月三日に四人がC4（七四〇〇㍍）へ向かう途中ヴィルヘルム・クライバー（独）が単身引き返したまま行方不明。C4を建てた他の三人も翌日天候悪化で下降中に、ディーター・オーベルビヒラー（オ）が七二〇〇㍍で滑落死。遺体を運び下ろそうとした二人とも負傷した。あとの六人はその後も続行したが、五月十一日に登頂を断念した。

一九八六年秋　カルロス・エドワルド・ゴメスら十人のコロンビア隊（ポーランド人を含む）。北東面通常ルートに十月三十一日C4（七二五〇㍍）を設けたが、その夜から天候が悪化したため断念した。

一九八六年秋　イェジ・ククチカらポーランド四人、メキシコ一人の合同隊。東稜をたどるが降雪のため七七五〇㍍でいったん断念。その後北東面下部から東稜上部へと直登するルートに切り替えてククチカとアルトゥール・ハイゼル、メキシコのカルロス・カルソリオがアルパイン・スタイルで攻撃。十一月五日に開始し、五五〇〇、六三〇〇、七三〇〇、七六〇〇㍍とビバークしてピナクルのプンゲン氷河側を巻き、プラトーを経て十日頂上に立った。カルソリオは凍傷を負ったため最後のビバーク地に残り、ククチカとハイゼルが登頂した。

一九八六年秋　ヨヴァン・ポポフスキら十三人のユーゴスラヴィア（当時）隊はプンゲン氷河から南東壁を試みたが、七四〇〇㍍に達したところで断念した。

一九八七年春　ヴォイチェフ・シマンスキらポーランド三人、チェコスロヴァキア（当時）二人、西ドイツ（当時）一人の混成隊が南東壁を目ざした。通常ルートを七一〇〇㍍まで往復して高所順応後プンゲン氷河に移り、クシストフ・パンキェヴィッチとルドヴィク・ヴィルチニスキ（ポ）がアルパイン・スタイルで攻撃。六二〇〇㍍、六八〇〇㍍とビバークしたが、その上部にある三五〇㍍のロックバンドが乗り切れず断念した。

一九八七年春　スペインのエンリク・パサスをフランセスク・バルセロナがシェルパ二人を伴って北東面通常ルートに向かったが、四月八日のC2（五六〇〇㍍）到達後数日にして雪崩のためキャンプを失い、断念した。

一九八七年秋　アルトゥール・ハイドら二十人のオーストリア隊が北東面通常ルートを登った。頂上に立ったのは十月七日で、登頂者はヴァルター・ハウザー、ヨハン・エチマイヤー、シェルパのラクパ・ソナム。

一九八七年秋　松島静吾（総隊長）、菊地晶三（隊長）ら十五人の青森県岳連隊。八五年に続く東稜挑戦だが、ピナクル直登はあきらめてオーストリア隊のトラバース・ルートに変更。十月十七日に六三〇〇㍍に達したが、降雪のためテントを失い二十五日に再建。しかし、二十八日に最高到達点からBCに下りた工藤一義が脳血管障害で急死し、断念した。

一九八七年秋　西ドイツ隊とデンマーク隊がマナスル北峰の許可を持って入山したが、実際は両者ともトレッキング隊で、BC以上での活動は行わずに終わった。

一九八八年春　冬にマカルーを試みて七五〇〇㍍まで達したポーランドのアンジェイ・マフニクとアメリカのアンドリュー・エヴァンズがその足でマナスルを訪れ、北東面通常ルートをアルパイン・スタイルで試みた。三月八―九日、十二日と二回にわたる攻撃を行ったが、ひどい降雪のため五四〇〇㍍で断念した。

一九八八年春　ロベルト・ペら六人のイタリア隊。北東面通常ルートを登り、五月一日に七〇五〇㍍に達して引き返した。

一九八八年春　トニー・シュピーリヒら七人のスイス隊。東稜から北東面に抜けるオーストリア・ルートをたどり、六八〇〇㍍のC2まで建設。四月三十日、ベーダ・フスター、リヒャルト・オット、ウルズラ・フーバーの三人は長駆頂上を攻撃し、七五〇〇㍍でビバーク後に登頂。第二次攻撃は五月十日に隊長とウエリ・シュター

ヘル、ピエール＝アンドレ・レヴェによって行われたが、天候悪化のため七六〇〇㍍で断念した。

一九八八年秋　アントニオ・ロペスら十二人のスペイン隊。北東面通常ルートを登り、十月二十五日にファン・アグーリョとシェルパのアン・ラクパが頂上に立った。

一九八八年秋　弘前大の堀弘、黒滝淳二がシェルパ二人を伴っただけで同ルートに向かった。十月二十三日に堀とモティ・ラル・グルンが七五〇〇㍍まで登ったところで断念した。

一九八九年春　ブノワ・シャムーら八人のフランス国際隊。八千㍍峰全座登頂を目ざすイタリアのプロジェクト「クォータ8000」がフランスに引き継がれ「エスプリ・デキプ」と名を変えたもので、メンバーにはイタリア、チェコスロヴァキア（当時）、英国人も含まれていた。　ツラギ氷河から南稜を目ざしていたが、雪崩の危険が大きいと見て南西壁オーストリア・ルートに変更。五月九日にシャムーとピエール・ロワイエル（仏）、十日にソロ・ドロテイ（伊）とヨゼフ・ラコンチャイ（チ）、十一日にフレドリック・ヴァレとイヴ・ドトリ（仏）、十二日にもアラン・ヒンクス（英）とマウロ・ロッシ（伊）がシェルパのティルタ・タマンとともに登頂した。

一九八九年春　キース・ブラウンら米国人とスペイン四人の合同隊は北東面通常ルートに向かった。五月七日、七二八〇㍍のC5を目ざしていた三人のうちスペインのサンチアゴ・スアレスが七二五〇㍍付近で滑落、のち七〇〇〇㍍地点で遺体となって発見された。

一九八九年春　オスカル・ピアッツァら六人のイタリア隊は東稜を目ざし、五月一日に七三〇〇㍍に達したが断念した。

一九八九年秋　マーク・ディクスンら三人の英国隊が南西壁に向かった。下部岩壁「ロニヨン」にルート工作を施し、五二〇〇㍍のABCから一気に頂上をねらったが、六五〇〇㍍でビバークしたディクスンとエイドリアン・パースンが十月二十七日七〇〇〇㍍に達しただけで終わった。

一九八九年秋　エイドリアン・バージェスら十三人の米国隊は北東面通常ルートを目ざしたが、十月二十五日に七〇六〇㍍に達したところで断念した。なお十月二十日に軽い地震があり、セラックの崩壊でデポ地が被害を受けたが、人員に被害はなかった。

一九八九年秋　ホルスト・フランクハウザーらのオーストリア＝スイス＝西ドイツ（当時）隊も同ルートの七三〇〇㍍地点で十月十日に断念した。

一九八九年秋　福島正明ら四人のヒマラヤ同人隊も同ルートを登ったが、十月十七日七四〇〇㍍で断念した。

一九八九年秋　カルレス・ヘルら三人のスペイン隊も同ルートの六〇〇〇㍍で敗退した。

一九八九年秋　村口徳行ら二人のチームが北峰の許可をとってナイケ・コルに達し、チベットからインドへ向かうツルの渡りをビデオに収録した。

一九九〇年春　ドナルド・グッドマンら九人の米国隊が北東面通常ルートで雪崩遭難した。四九九〇㍍にC1を設けたが、三月二十七日、降雪直後に下降を始めた隊員三人とシェルパ二人が四七二〇㍍付近で雪崩に埋められ、ナンシー・ジャクスン、チャーリー・シャーツ、シェルパのウォンチュクの三人が死亡した。

一九九〇年春　ファウスト・デ・ステファーニら六人のイタリア隊も同ルートに入り、四月二十六日にデ・ステファーニが単独登頂した。

一九九〇年春　ドミニク・ノイエンシュヴァンダーら六人のスイス＝フランス隊は同ルートのスキー滑降を目ざしたが、四月二十九日六〇〇〇㍍で断念した。

一九九〇年秋　ファン・フェルナンド・アスコーニャら十二人のスペイン隊は北東面通常ルートの六四〇〇㍍に達したが、十月一日に断念した。

一九九〇年秋　カズベク・ワリエフら八人のソ連カザフ隊がプンゲン氷河から南東壁を目ざした。十月五日、核心部のロックバンド下にキャンプ（七〇〇〇㍍）を置いたが、翌日五ピッチ登ったところで三人が転落、ムラト・ガリエフ、グリゴリー・ルニャコフ、ジヌル・ハリトフが死亡した。

一九九〇年冬　ロン・ラットランドら六人の英国隊が北東面通常ルートを目ざしたが、六〇〇〇㍍で十二月十日、早々と断念した。

一九九〇年冬　フランスのエリック・モニエが南西壁に単独で挑戦。九一年一月六日、プラトーの七九五〇㍍に迫ったが、あまりの寒気にそれ以上進めなかった。

一九九一年春　フランコ・デラトーレら五人のスイス隊。北東面通常ルートを六四〇〇㍍まで登ったが、四月六日に達したこの地点が最高到達点となった。

一九九一年春　ドウスン・ステルフォックス、フランク・ニュージャントが共同で率いるアイルランド＝英国隊十五人も同ルートに入ったが、深い雪のためルートが延びず、C4手前の六一〇〇㍍で四月二十七日、断念した。

一九九一年春　ハンス・カマーランダーら十二人のイタリア＝ドイツ隊も通常ルートを登った。七〇〇〇㍍にC2を設けたカマーランダーとフリードル・ムッチュレヒナー、カール・グロースルバッチャーは五月十日に頂上を目ざすが、二人が途中で脱落、カマーランダーのみが七五〇〇㍍まで達したところで引き返した。C2へ下る途中、グロースルバッチャーが首の骨を折って死んでいるのを発見。ムッチュレヒナーと合流してC1を目ざしたが、今度はムッチュレヒナーが雷に打たれて即死してしまった。

一九九一年春　ウラディーミル・シュミチンら九人のウクライナ隊は南東壁を目ざして入山。三つのキャンプを進めて七二〇〇㍍に達したが、ルートが難しいので四月二十四日に放棄、南稜に切り替えた。アレクセイ・マカロフ、ヴィクトル・パストゥフ、イゴール・スヴェルグンの三人が五月一日アルパイン・スタイルで攻撃を開始し、三日にコルに到達。さらに二回のビバークで六日に登頂し、北東面通常ルートを途中二泊で下降した。

一九九一年秋　アントニ・リャセラら七人のスペイン隊が北東面通常ルートを試み、十月六日七九〇〇㍍に達したところで断念した。

一九九一年秋　オレステ・フォルノら九人のイタリア隊も同ルートに向かい、九月二十八日と十月八日に七一〇〇㍍に達したが、失敗に終わった。

一九九一年秋　ブルーノ・イェルクら十八人のスイス隊も同ルートをたどり、十月二十五日にマウロ・フェラーリとホルスト・ブラ

ンチェンが頂上に立った。

一九九一年秋　オースティン・ワイスら七人のアメリカ隊は南西壁を試み、十月二十二日に七八〇〇㍍で断念した。

一九九二年春　毎年複数の登山隊が八千㍍峰に殺到するなかにあって、このシーズンには一隊もマナスルを訪れなかった。

一九九二年秋　パク・テキュら十人の韓国チョスム大隊。北東面通常ルートをたどり、九月二十五日にリ・ヤンチョルとシェルパのナワン・プルバが登頂した。頂上に立ったのが一八時三〇分と遅かったため最終キャンプ（C3）まで帰れず、七九〇〇㍍でビバークした二人は凍傷を受け、BCからヘリコプターで運ばれた。

一九九二年秋　クシストフ・ヴィエリツキらポーランド人五、イタリア人四、ブルガリア人二、ベルギー人一の計十二人も同じルートをたどった。九月二十八日、ヴィエリツキとマルコ・ビアンキ、クリスチャン・クントナー（伊）が六二〇〇㍍のC2から長駆頂上を目ざして登頂した。彼らは三日前に登った韓国隊の足跡が最高点の手前二、三〇分、距離にして一五〇㍍はなれた前衛峰で終わっているのを発見、写真に撮った。他のメンバーはもう一つキャンプを設けるべく行動した。十月二日、シルヴィア・ドモフスカ（ポ）とスヴェン・ヴェルメイレン（ベ）がC3に向かったが、予定地の七二〇〇㍍付近で暗闇の中ドモフスカが滑落死。翌朝C2近くまで帰ってきたヴェルメイレンも滑落し、キャンプに収容されたものの三時間後に亡くなった。

一九九二年秋　マイクル・ガルブレイスらのカナダ隊も同ルートをたどり、十月一日に八〇五〇㍍に達したが断念した。同日ジェフ・パウターとピーター・タッカーがノース・コルから北峰に登頂。

一九九二年秋　クロード・レイら九人のフランス隊は北稜から北峰Ⅱを目ざし、二つのキャンプを進めたが五五〇〇㍍で断念した。なおトレッキング班のリーダー、ベルナール・クロワゼは十月十三日にチョロン付近で落石に当たって死亡した。

一九九三年春　アルトゥール・ハイドら八人のオーストリア隊が北東面通常ルートから登頂した。頂上に立ったのは五月二日でメンバーはヨゼフ・ブルンナー、ゲルハルト・フロスマン、ヨゼフ・ヒンディング、ミヒャエル・ロイプレヒトの四人。

一九九三年秋　パオロ・パリーノら十一人のイタリア隊が南西壁オーストリア・ルートに向かい、十月十三日にシルヴィオ・モンディネリが頂上に立った。

一九九三年秋　ゼップ・インヘーガーら十人のオーストリア隊は北東面通常ルートに入り、十月十五日インヘーガーが登頂した。

一九九三年秋　ワレリー・カルペンコら九人のロシア隊も同ルートをたどり、十月十九日にウラディーミル・ロパトニコフがまず登頂。二十一日にもイゴール・フミリヤルとエカテリーナ・イワノワが頂上に立ったが、下山中にフミリヤルが転落死した。このほか二十三日に六二〇〇㍍地点のキャンプが雪崩に襲われ、セルゲイ・ヤドリシニコフが死亡している。

一九九三年秋　ハインツ・シャウアーら六人のドイツ＝オーストリア隊は十月六日、同ルートの七三〇〇㍍で断念した。

一九九三年秋　ミシェル・リシャールら五人のフランス隊がノース・コルから北峰を目ざしたが、十月二十三日六四〇〇㍍に達した

だけで終わった。

一九九四年春　この年春の入山はゼロ、秋も次項の一隊だけという結果だった。

一九九四年秋　アンドレ・ジョルジュら七人のスイス隊が北東面通常ルートをたどり、十月十九日にジョルジュとアルマン・サラマンが登頂した。フランス女性シャンタル・モデュイはスピードについて行けず七六〇〇㍍から引き返した。

一九九五年春　ホルガー・クロースら十一人のドイツ隊。北東面通常ルートを六一〇〇㍍以降アルパイン・スタイルで登るが、一日に標高三〇〇㍍しかかせげず、プラトー上七七〇〇㍍地点までビバークはじつに五泊に及んだ。五月七日、イェルク・バルトック、トーマス・シュテフェン、ミヒャエル・ツンクの三人が頂上に立った。しかし、下降中最後尾を歩いていたツンクが転落死。登頂前日には途中から引き返したイェルク・シュタルケも転落死した。

一九九五年秋　金沢健ら八人のカトマンズクラブ隊。北東面通常ルートに三つのキャンプを設け、十月十三日に谷口守、木本哲、堀弘が無酸素で攻撃したが、板状雪崩の危険から七四〇〇㍍で断念である。金沢隊長ら四人とシェルパ三人の二次隊は酸素を使って十六日に攻撃したが、これも同じ地帯で敗退。木本、堀による第三次隊も翌日降雪のためC2で断念した。

一九九五年冬　カズベク・ワリエフら十二人のカザフスタン隊は冬の北東面通常ルートに挑み、十二月八日に八人が登頂。メンバーはユーリ・モイセーエフ、アレクサンデル・バイマハノフ、シャフハト・ガタウリン、ディミトリ・ソボレフ、オレグ・マリコフ、ウラディーミル・スヴィガ、ディミトリ・ムラエフ。冬季通算第三登である。

一九九六年春　サムドルクら九人の中国・チベット登山協会隊。八千㍍全座登頂計画の一環としてマナスルに挑み、北東面通常ルートから登頂に成功した。まず五月三日にツェリン・ドルジェ、レン・ナ、アケブ、ペンバ・タシ、翌四日にもワンギャル、ギャルブ、ダチュン、ローツェが頂上に立った。

一九九六年春　メキシコのカルロス・カルソリオが弟のアルフレッドとともに通常ルートを登り、五月十二日に二人とも登頂。カルロスはこれで八千㍍峰全座登頂を完成した。メスナー、ククチカ、ロレタンに次ぐ四人目の快挙である。

一九九六年春　エルンスト・シュヴァルツェンランダーのドイツ＝スイス隊は五月十日、同ルートの六七〇〇㍍で登頂を断念した。

一九九六年春　四月二十八日にブモリ、五月十日にローツェを登ったシャンタル・モデュイは、シェルパのアン・ツェリンとともにヘリでマナスルBCに飛び、五月二十四日に単独登頂した。彼女にとって五つめの八千㍍峰登頂成功である。

［編者註：一九九六年秋には日本隊ほか数隊が頂上を目指したが、残念ながら小西政継氏が登頂後行方不明になった。］

Expeditions on MANASLU : 1953–96, compiled by Tsunemichi Ikeda

YEAR	SEASON	NAT.	LEADER	NUM.	ROUTE	SUMMITTERS		FATALITIES		REMARKS
						Climb.	HPs	Climb.	HPs	
1953	spring	JPN (JAC)	Yukio Mita	15	NE Face	–	–	–	–	7,750 m, June 1
1956	spring	JPN (JAC)	Aritsune Maki	12	NE Face	3	1	–	–	1st, May 9 & 11
1971	spring	JPN	Akira Takahashi	11	NW Spur	2	–	–	–	1st by the route
1971	spring	KOR	Ho-Sup Kim	8	NE Face	–	–	1	–	7,600 m, May 4
1972	spring	AUT	Wolfgang Nairz	9	SW Face	1	–	2	–	without oxygen
1972	spring	KOR	Jung-Sup Kim	12	NE Face	–	–	5	10	avalanche, April 10
1973	spring	GER	Gerhard Schmatz	8	NE Face	2	1	–	–	1st German ascent
1973	autumn	ESP	Jaume Garcia Orts	12	NE Face	–	–	–	–	C1, C2 avalanched
1974	spring	JPNwomen	Kyoko Soto	13	NE Face	3	1	1	–	1st 8,000 er by women
1975	spring	ESP	Jaume Garcia Orts	12	NE Face	2	1	–	–	1st Spanish ascent
1976	spring	KOR	Jung-Sup Kim	19	NE Face	–	–	–	–	7,800 m, May 5
1976	autumn	IRI-JPN	Mohammed Khakbiz	20	NE Face	2	1	–	–	1st autumn ascent
1977	spring	GER	Gerhard Lenser	9	NE Face	–	–	–	–	6,780 m
1977	autumn	FRA	Jean Frehel	5	E Ridge	–	–	–	–	7,560 m, Oct. 26
1978	spring	USA	Glenn Porzak	11	NE Face	–	–	–	–	7,300 m
1978	autumn	JPN	Seiji Shimizu	3	NE Face	–	–	–	–	8,000 m, Oct. 7
1979	spring	ITA	Lorenzo Massarotto	6	NE Face	–	–	–	–	7,500 m, May 5
1979	autumn	ARG	Guillermo Vieiro	14	NE Face	–	–	1	–	avalanche, Oct. 9
1980	spring	KOR	In-Jung Lee	7	NE Face	1	2	–	–	1st Korean ascent
1980	spring	POL	Janusz Ferenski	9	S Ridge	–	–	–	–	6,550 m, May 17
1980	autumn	AUT	Hanns Schell	7	NE Face	–	–	–	–	7,400 m, Oct. 14
1980	autumn	CZE	Dina Sterbova	12	NE Face	–	–	–	–	7,200 m, Oct. 16
1981	spring	GER-SUI	Hans von Kaenel	28	NE Face	13	2	–	–	commercial expedition
1981	autumn	FRA	Pierre Beghin	4	W Face	2	–	–	–	1st by the route
1981	autumn	JPN	Yasuo Kato	4	NE Face	3	–	–	–	Oct. 12 & 14
1982	spring	ESP	Enric Font	6	NE Face	–	–	2	–	avalanche, May 11
1982	autumn	FRA-ITA	Louis Audoubert	14	NE Face	1	1	–	–	Oct. 10
1982	autumn	FRA	Jean-Paul Balmat	5	E Ridge	–	–	–	–	6,200 m
1982	winter	JPN (HAJ)	Noboru Yamada	10	NE Face	–	–	1	–	7,650 m, Dec. 18
1983	spring	AUT	Vinko Marevec		S Ridge	–	–	2	–	7,100 m reached
1983	autumn	KOR	Young-Ho Huh	2	NE Face	1	–	–	–	solo, partly with Sherpas
1983	autumn	GER	Guenter Haerter	9	SW Face	4	2	–	–	alpine style
1983	autumn	AUT	Wilfried Studer	5	E Ridge	–	–	–	–	7,4000 m, Oct. 7

1983	winter	CAN	Alan Burgess	4	NE Face	–	–	–	–	7,100 m, Dec. 10
83–84	winter	POL	Lech Korniszewski	11	SW Face	2	–	1	–	1st winter ascent
1984	spring	YUG	Ales Kunaver	4	SW Face	2	–	–	–	May 4, only 18 days
1984	spring	GER–SUI	G. Strum, H. Eitel	12	NE Face	6	2	–	–	Apr. 30–May 11
1984	autumn	POL	Janusz Kulis	8	S Ridge	2	–	–	–	1st by the route
1984	autumn	ITA	Cesare Cesa Bianchi	6	NE Face	–	–	–	–	7,500 m reached
1985	spring	AUT	Wilfried Studer	8	E Ridge	1	1	1	–	direct line avoided
1985	autumn	JPN	Iwao Tsushima	9	E Ridge	–	–	–	–	6,300 m, Oct. 4
1985	autumn	JPN	Yoshimichi Furuhata	7	NE Face	–	–	–	1	7,200 m, avalanche
1985	autumn	ESP	Felipe Uriarte	7	NE Face	–	–	–	–	6,300 m reached
1985	winter	JPN	Noboru Yamada	2	NE Face	2	–	–	–	alpine style
1986	spring	GER–AUT	Michael Dacher	16	NE Face	–	–	2	–	7,400 m reached
1986	autumn	COL–POL	Carlos Eduard Gomez	10	NE Face	–	–	–	–	7,250 m, Oct. 31
1986	autumn	YUG	Jovan Popvski	13	SE Face	–	–	–	–	7,400 m reached
1986	autumn	POL–MEX	Jerzy Kukuczka	5	E Direct	2	–	–	–	E Face up NE down
1987	spring	POL–CZE	Wojciecu Szymanski	6	SE Face	–	–	–	–	6,800 m, May 20
1987	spring	ESP	Enric Bassas	2	NE Face	–	–	–	–	5,600 m, Apr. 8
1987	autumn	AUT	Arthur Haid	10	NE Face	2	1	–	–	Oct. 7
1987	autumn	JPN	Seigo Matsushima	15	E Ridge	–	–	1	–	6,500 m. Oct. 28
1988	spring	POL–USA	Andrzej Machnik	2	NE Face	–	–	–	–	5,400 m, Mar. 8 & 12
1988	apring	ITA	Roberto Pe	6	NE Face	–	–	–	–	7,050 m, May 1
1988	spring	SUI	Toni Spirig	7	E Ridge	3	–	–	–	2nd ascent of 1985 route
1988	autumn	ESP	Antonio Lopez	12	NE Face	1	1	–	–	Oct. 25
1988	autumn	JPN	Hiroshi Hori	2	NE Face	–	–	–	–	7,500 m, Oct. 24
1989	spring	ITNL	Benoit Chamoux	8	SW Face	8	1	–	–	May 9–12
1989	spring	USA–ESP	Keith Brown	6	NE Face	–	–	1	–	7,280 m, May 7
1989	spring	ITA	Oscar Piazza	6	E Ridge	–	–	–	–	7,300 m reached
1989	autumn	GBR	Mark Dixon	3	SW Face	–	–	–	–	7,000 m, Oct. 27
1989	autumn	USA	Adrian Burgess	13	NE Face	–	–	–	–	7,060 m, Oct. 25
1989	autumn	AUT–SUI	Horst Frankhauser	5	NE Face	–	–	–	–	7,300 m, Oct. 10
1989	autumn	JPN	Masaaki Fukushima	4	NE Face	–	–	–	–	7,400 m, Oct. 17
1989	autumn	ESP	Carles Gel	3	NE Face	–	–	–	–	6,000 m, Sep.
1990	spring	USA	Donald Goodman	9	NE Face	–	–	2	1	avalanche, 4,940 m
1990	spring	ITA	Fausto De Stefani	6	NE Face	1	–	–	–	April 26
1990	spring	SUI–FRA	D. Neuenschwander	6	NE Face	–	–	–	–	6,000 m, Apr. 29
1990	autumn	ESP	Juan F. Azcona	12	NE Face	–	–	–	–	6,400 m, Oct. 1

1990	autumn	KAZ	Kazbek Valiev	8	SE Face	–	–	3	–	5 pitches above 7,000 m
1990	winter	GBR	Ron Rutland	6	NE Face	–	–	–	–	6,000 m, Dec. 10
90–91	winter	FRA	Eric Monier	1	SW Face	–	–	–	–	7,950 m, Jan. 6
1991	spring	SUI	Franco Delatorre	5	NE Face	–	–	–	–	6,450 m reached
1991	spring	IRL–GBR	Dawson Stelfox	15	NE Face	–	–	–	–	6,100 m, Apr. 27
1991	spring	ITA–GER	Hans Kammerlander	12	NE Face	–	–	2	–	7,500 m, May 10
1991	spring	UKR	Vladimir Shmichin	9	S Ridge	3	–	–	–	S.R. up NE down
1991	autumn	ESP	Antonio Llasera	7	NE Face	–	–	–	–	7,900 m, Oct. 6
1991	autumn	ITA	Oreste Forno	9	NE Face	–	–	–	–	7,100 m, Sep. 28
1991	autumn	SUI	Bruno Jelk	18	NE Face	2	–	–	–	Oct. 25
1991	autumn	USA	Austin Weiss	7	SW Face	–	–	–	–	7,800 m, Oct. 22
1992	autumn	KOR	Tea-Kyu Park	10	NE Face	1	1	–	–	Sep. 25
1992	autumn	ITNL	Krzysztof Wielicki	12	NE Face	3	–	2	–	Sep. 28
1992	autumn	CAN	Michael Galbraith	6	NE Face	–	–	–	–	8,050 m, Oct. 1
1993	spring	AUT	Arthur Haid	8	NE Face	4	–	–	–	May 2
1993	autumn	ITA	Paolo Paglino	11	SW Face	1	–	–	–	Oct. 13
1993	autumn	AUT	Sepp Inhaeger	10	NE Face	1	–	–	–	Oct. 15
1993	autumn	RUS	Valery Karpenko	9	NE Face	3	–	2	–	Oct. 19
1993	autumn	GER–AUT	Heinz Schauer	6	NE Face	–	–	–	–	7,300 m, Oct. 6
1994	autumn	SUI	Andre Georges	7	NE Face	2	–	–	–	Oct. 19
1995	spring	GER	Holger Kloss	11	NE Face	2	–	2	–	May 12
1995	autumn	JPN	Ken Kanazawa	8	NE Face	–	–	–	–	7,400 m, Oct. 16
1995	winter	KAZ	Kazbek Valiev	12	NE Face	8	–	–	–	Dec. 8
1996	spring	CHNtibet	Samdruk	9	NE Face	8	–	–	–	May 3 & 4
1996	spring	MEX	Carlos Carsolio	2	NE Face	2	–	–	–	May 12
1996	spring	GER	E. Schwarzenlander		NE Face	–	–	–	–	6,700 m, May 10
1996	spring	FRA	Chantal Maudit	1	NE Face	1	–	–	–	cotinued from Lhotse
		TOTAL	95 expeditions		8 routes	113	19	34	12	
SUMMARY of STATISTICS			56 out of 69 succed.		NE FACE	80	15	25	12	1st by JPN 1956
			1 exp. only		E RIDECT	2	–	–	–	1st by POL 1986
			2 out of 8 succed.		E RIDGE	4	1	1	–	1st by AUT 1985
			2 exps. failed		SE FACE	–	–	3	–	unclimbed
			2 out of 4 succed.		S RIDGE	5	–	2	–	1st by POL 1984
			6 out of 10 succed.		SW FACE	18	3	3	–	1st by AUT 1972
			1 exp. only		W FACE	2	–	–	–	1st by FRA 1981
			1 exp. only		NW SPUR	2	–	–	–	1st by JPN 1971

シニオルチュー登頂

東北大学医学部艮峻山の会

――これ以上高貴な峰を想像できようか。その均斉と調和、そして雪の稲妻模様でおおわれた断崖の壮麗さは見る人すべてを感動させずにはおかない。登山家にとってシニオルチューは理想の峰であり至高の座である。その静寂の中には独り神が住んでいる、遠く遙かに、光り輝き、そして近づきがたく――

一八九九年東ヒマラヤ最大のゼム氷河を辿りカンチェンジュンガ周辺を探査したフレッシュフィールドはこの山を間近に仰いだ感激をこう記している（"Round Kangchenjunga" 1903, 吉坂隆正抄訳『山岳』第三七年一号、一九四三年）。

シニオルチュー（Simolchu, 六八八七㍍）は世界第三位の高峰カンチェンジュンガの十七キロ東に位置し、標高は七〇〇〇㍍にとどかないけれどもその美しい山容のゆえにシッキムヒマラヤを代表する麗峰として古くから広く知られてきた。十九世紀中頃シッキム北部の植生を調査した植物学者ジョセフ・フーカーやカンチェンジュンガ一周を果したフレッシュフィールドらによって岳界に紹介されたこの美しい頂は、一九三六年九月ドイツのバウル・バウアー隊によって初めて登られている。戦前二度カンチ北東稜に挑み、転進したナンガ・パルバットでは大雪崩で多くの仲間を失ったバウアーであるが、彼の五回にわたる八〇〇〇㍍峰の登攀は失敗に終ったにもかかわらず今世紀ヒマラヤ登山史の礎となる水準の高いものと評価されている。

一方、彼らがシニオルチューに登った一九三六年のエクスペディションは、バウアーにとっては三度めのシッキム行であり、翌年の三度めのナンガ・パルバット遠征のプレ登山として四人の仲間で計画されたものであった。ゼム氷河の七〇〇〇㍍秀峰群に遊ぶ放浪の旅のように自由で気楽な雰囲気のある当時の記録は、何度読んでもその登山が本当に楽しかったことが感ぜられるのである（"Himalayan Quest", 1938）。その時の彼の登山スタイルは今日の

ライトエクスペディション、ラッシュアタックのセミアルパインスタイルに近く、四人は六四〇〇㍍でビバークしたあとゲットナーとヴィーンの若い二人が初登頂を果している。

シニオルチューを初めて目にした日本人が仏僧の河口慧海師であることは岳人の間では余り知られていない。十九世紀末あの苦難の一人旅ののちにヒマラヤを越えてチベットに潜入し、一僧侶として三年余の修行生活を送った慧海師は、一九一四年一月、ダージリンよりティスタ河沿いに北上してシッキムへ入り再び彼の第二の故国チベットを目指した（『第二回チベット旅行記』講談社学術文庫）。

――かくていよいよ頂につきて北の空を望めば、青山重々と連なれる彼方の空に堂乎として妙光天を衝く雪峰を見る。彼の円錐形の如く高く光れるものは、シンニヨルチュ雪峰なり――

師が眼前にシニオルチュー雪峰を仰いでから八〇年ののち私達はその頂を目指すことになった。シニオルチューは急峻で降雪量が多く、日中は気温が高いので雪崩の危険も高い。

バウアー隊以後のスイス（一九三七年）、インド（一九七九年）、スロベニア（一九九四年）各隊はいずれも初登時のルートである北西稜を辿っており、九四年春の偵察ののち私達もやはりこのルートを選んでいる。

トラブル続きのキャラバン

四月九日ニューデリー到着早々トラブルに巻き込まれる。法律が変わって別送品（アナカン）で送った一・五トンの隊荷には、なんと八〇％の関税がかかるという。急遽内務省から特別許可の書類を作成してもらい暑いデリーで通関手続にあたる。隊荷通関のトラブルで出発が遅れ、シッキム州都ガントクのホテルタシデレクに全隊員が集ったのは十六日、待ちかねた隊荷がトラックで到着したのはその二日後であった。食糧等を調達したのちシッキム北部最奥の村ラチェンに向けて出発したのは十九日夕方になる。河口慧海師も通ったティスタ河沿いの石楠花（ラリーグラス）咲く美しい渓谷を北上し、翌日昼前には懐しいラチェンのゲストハウスに到着した（標高二七〇〇㍍）。

ラチェンからベースキャンプとなるレストキャンプ（四五七〇㍍）までは約二十五キロ、ゼム河沿いの美しい森の中を辿るトレッキングキャラバンである。隊荷の輸送のためポーターを手配するが、ここではポーターの人数が七〇名程と限りがあり、私達は日程が遅れたため、テント・ピークを目指すオーストリア隊とかちあうことになった。

二十二日、二日間続いた雨があがる。最初のキャンプ地であるテリンまで隊荷をピストン輸送することになるが、テリンの先で丸太橋が増水のため流出していることが判明した。その上この日はポーターが二十名程しか集らず、二・八トン余の山積みされた隊荷を前に頭をかかえる。予備の装備・食糧などの隊荷の減量やタクティクスの変更などを検討する一方、丸太橋の掛け替え費用をオーストリア隊と折半し、かろうじて残っている古い橋の修理にとりかかる。

今年は雪が多く、テリンから先は殆んど雪の上を歩くことになるため、ポーターの負担も大きい。清流のほとり、カンチとリトルシニオルチューをのぞめるテリンの美しいキャンプサイトに滞在しな

がら、余りに遠いシニオルチューの頂に思いをはせた。

次のキャンプ地ジャタンの先にも丸太橋があるが、これも流出している。今は残雪があり、スノーブリッジを渡れるので問題ないが帰路の増水を考えるとこの橋も掛け替えなくてはいけない。土台を積み直し丸太を集めて橋づくりである。

二十九日、BCとなるレストキャンプに三名が入り、憧れのシニオルチューをまぢかに仰ぐ。他の隊員は森林限界であるヤブクに滞在しレストキャンプを往復して高度順化をはかり、翌日には残雪の中にBCを設営する。

出発以来トラブル続きで予定より大幅に遅れたが、その分日程がゆっくりとなったので隊員の体調は良く、何より食欲がすごく旺盛なのは心強い。

危険なアイスフォール

五月一日、松木・千田・太田の三名は、ゼム氷河を対岸に渡り、シニオルチュー氷河右側のサイドモレーンを登りつめたところにABC（四七〇〇㍍）を設営する。翌日、三名はABCよりサイドモレーンを下降してシニオルチュー氷河へ入り、第一アイスフォール右側にルート工作を行い、二〇〇㍍のフィックス・ロープを張って第一プラトーのC1予定地（五三〇〇㍍）に達した。

四日、千田・太田・中野の三名はC1へ入り、他の五名とハイポーター四名はBC～ABC間を荷上げする。この日はキャラバン中に左足を負傷した後藤隊員の誕生日でもあり、四日間BCに滞在した葛西・山口両先生が帰路につくので、特製のバースディケーキを囲んで楽しい朝食となった。元気に出発した彼らを見送った後、BCでは低気圧の接近で小雨が降り続く。気温は氷点下二度。

六日、晴。千田隊はC1～C2間の第二アイスフォール中間地点五六五〇㍍に達してルート工作。

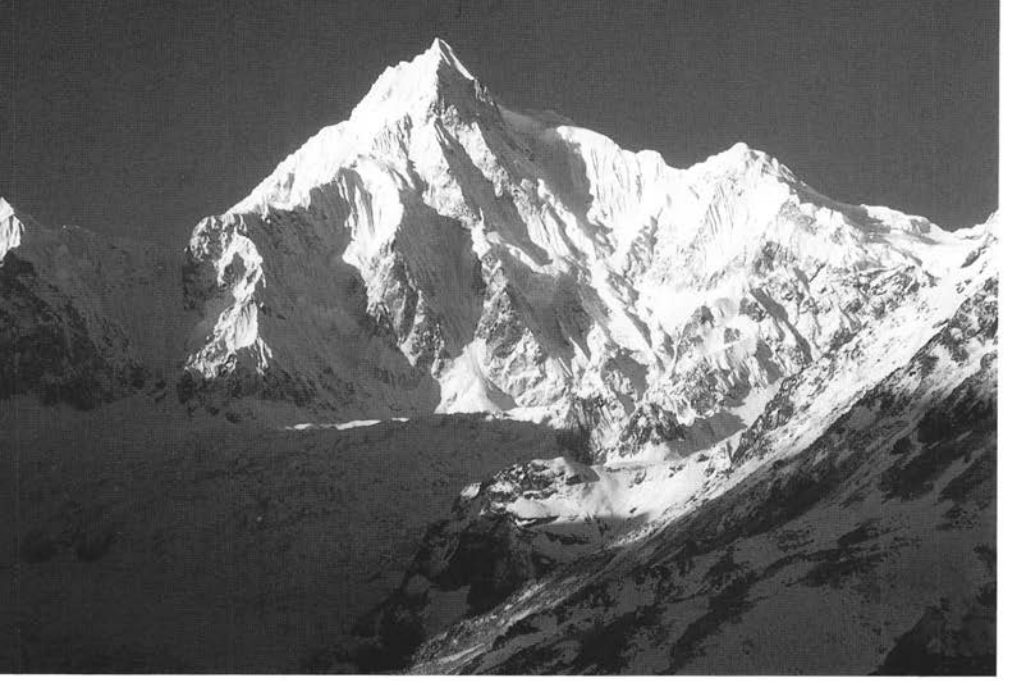
翌日には右側壁にルートをとって危険なアイスフォールを突破し、北西稜コル直下の第二プラトー六〇〇〇㍍のC2予定地に達した。BC～ABC間の荷上げは終了し、ABC～C1間の荷上げを続ける。

九日、雪。保坂・小山に加え、片山隊長・松木・市川・涌沢が更にC1入りして行動隊九名が揃い、C1にはエスパーステント三張が並ぶ。その日の降雪は二〇センチ程になった。

翌朝は快晴となったがシニオルチュー北面では新雪雪崩が頻発するためC2への荷上げは中止する。シニオルチューはまるで純白のドレスを纏ったようでこのうえなく美しい。

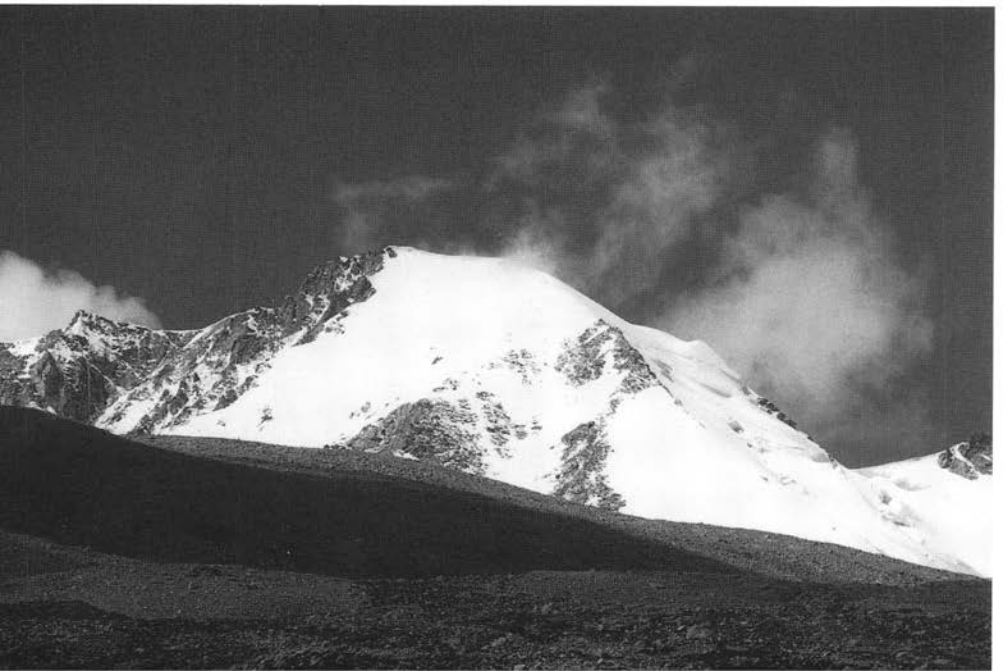
十一日、晴。七名がC1からC2へ荷上げするが、八時半頃、第二アイスフォール左岸ルートの通称〝への字岩〟にリトルシニオルチュー側から大規模な雪崩が発生し、遅れてここを通過していた涌沢・市川パーティが直撃された。二人ともその瞬間岩陰にいて危うく難を逃れた。続いてルートに覆いかぶさるように聳え立っていた巨大セラック（〝仁王セラック〟）が物凄い轟音とともに突然崩壊した。この時、上部第二プラトーにいた千田は「後ろは全員やられたと思った」。リトルシニオルチュー側から小雪崩が頻発しており、その間隙をぬって隊員はC1へ帰着した。

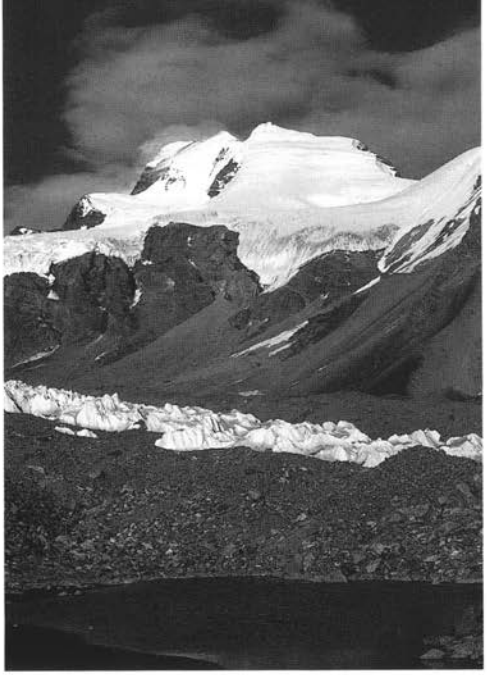
陽がさすと気温が上昇し、第二アイスフォール帯のルートは非常



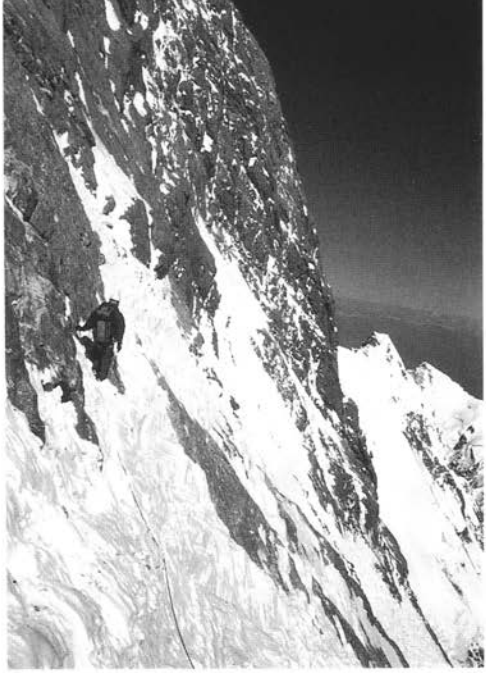
▲BC からのシニオルチュー北面
Northern side of Siniolchu seen from BC.

▼サラ・シュワ東面、中央右の岩と雪の北東稜から雪の頂稜が登頂ルート
Sara Shuwa. Eastern side.
Summit route : Northeast rock ridge to skyline.





▲BC からムスターグ・アタ山頂を見る
Mustagh Ata seen from BC, the summit far left.



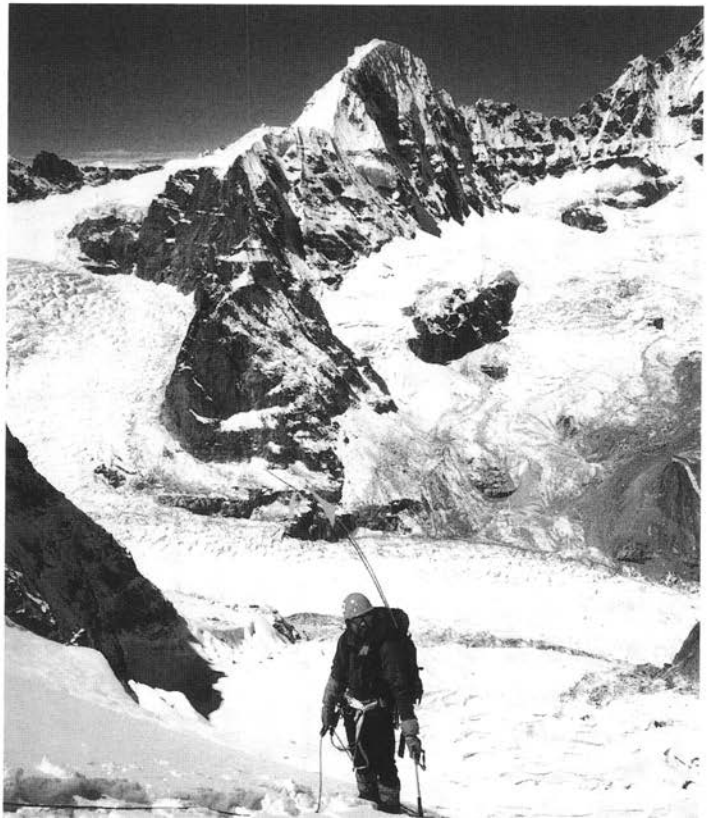
▲7 000m 附近のミックス壁のトラバース
Traversing just under mix wall from C 3 to C 4, Nanga Parbat.

▼北の肩からシルバー・プラトーを望む
View toward Silver Plateau seen from northern shoulder.





▲BC（パンペマ）からのトゥインズ
Twins seen from BC, Pangpema.



◀C1～C2（6000m附近），背景はウェッジ・ピーク
Ascent at 6000m, Wedge Peak in the background.



▲ウルタルⅡ峰のヘッド・ウォールと頂上
Head wall and the summit of Ultar Ⅱ.



▶頂上に立つ山崎彰人、背後はシスパーレ
Akito Yamazaki on the summit, Shispare in the background.

▼懸垂氷河の登攀
Climbing the hanging glacier.





第２アイスフォール帯

に不安定となる。この状況の中で危険なアイスフォール帯を全員で行動するのは無謀すぎるので、Ｃ２への荷上げを大幅に減らしＣ２往復は最小限とする。又、夜十二時起床として暗いうちに危険なアイスフォールを通過し朝までにその日の行動を終えるように変えた。

十二日、晴。隊員五名がＣ１～Ｃ２間を荷上げする。一時にＣ１を出て六時半にＣ２へ到着、朝十時前にはＣ２へ帰着した。

十三日は曇って視界もよくないので中間地点までの荷上げのみとし、翌日千田・太田・中野がＣ２入りする。

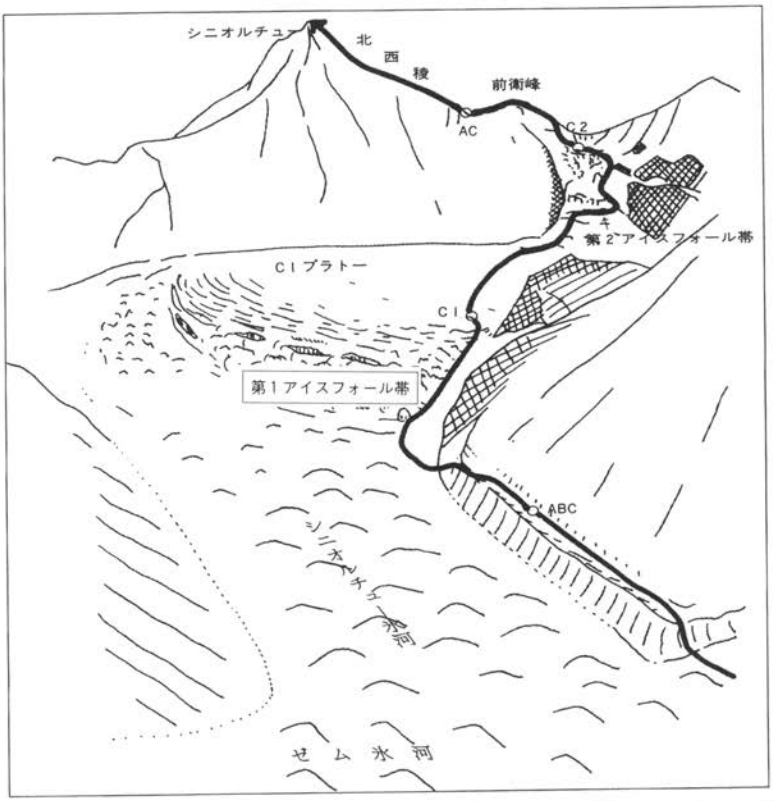
十五日、千田・太田の二人はＣ２より北西稜のコルへ達するべく出かけるが、稜線は二〇～五〇㍍の高さの雪屁・雪壁が続き、これを越えるのに半日を要した。

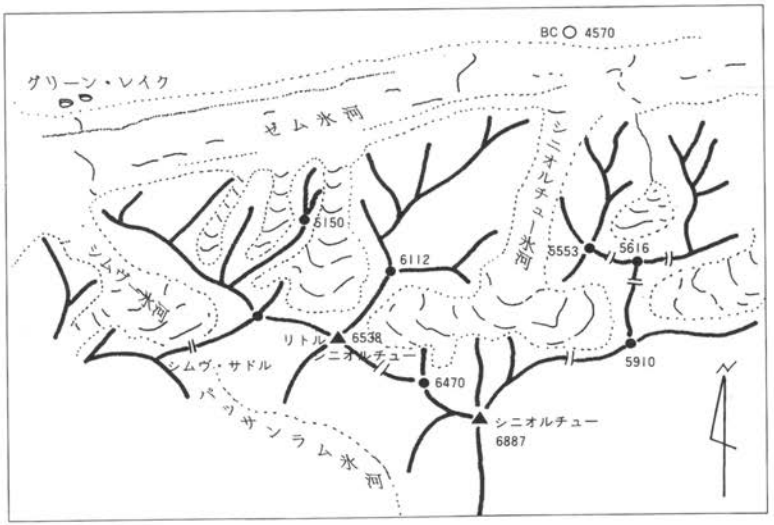
十六日、前日頭痛で休んでいた中野が夜半嘔吐する。脈拍も速く高度障害が明らかである。急拠、千田・太田がつきそってＣ１へ降したところ高度が下がって病状は改善した。更にその日のうちに彼をＢＣまで降した。

この三日間霧雨だったＢＣでは翌朝から雨となり、午後にはキャンプサイトわきの小川が増水して濁流となって渡れなくなる。そろそろモンスーンが近づいているようだ。

グリーンレークのオーストリア隊は撤収日が迫っており、ネパール・ピークまで到達したところで登頂をあきらめ下山を開始するという。

私達は登頂日を二十一日頃としてアタック態勢に入る準備をする。千田・太田の二名を登頂隊、保坂・涌沢をサポート隊とした。


シニオルチュー
北西稜
前衛峰
AC
C2
第2アイスフォール帯
C1プラトー
C1
第1アイスフォール帯
ABC
シニオルチュー氷河
セム氷河


BC 4570
グリーン・レイク
セム氷河
シニオルチュー氷河
5150
6112
5553
5616
シムヴー氷河
リトル
6538
シニオルチュー
シムヴ・サドル
6470
5910
パッサンラム氷河
シニオルチュー
6887

C1には松木登攀隊長他三名とハイポーター二名、ABCには平泉副隊長とハイポーター二名、各キャンプに隊員を配置する。片山隊長はBCへ下った。

白いピラミッドへ

記　太田尚志

五月十八日、晴。この日は千田・太田がC2～前衛峰（六五〇〇㍍）のルート工作、その後を保坂・涌沢がサポートの荷上げを行う。C2上部雪壁部分のフィックス・ロープを使って主稜線に出ると、行く手の北西稜上にはクレバスが縦にずれてできた断層がいくつも見える。この〝段差〟はクレバスが広いし壁も高いので我々は稜線をいったん離れて南側を大きく巻くことにした。遙か足下で雲の切れ間にのぞくパッサンラム氷河は黒々としてなんとも険悪だ。

南西側から雪壁を六〇㍍直上して前衛峰下の樋状テラスに出る。このテラスを右に抜け氷雪ミックスの壁をトラバースすると前衛峰の肩に出た。十三時三〇分、辺りはガスにつつまれ時間も遅いのでルート工作を終え下山を開始する。フィックスを伝って慎重に下るが風が強く寒くて長い下りとなる。

十八時帰幕、きつい一日だった。BCとの夜の交信では、気象ファックスによる高層天気図でトラフが近づいていることから明日は停滞することに決まる。

五月十九日、C2ではガスの中を小雪が舞う天気。疲れて何をする気にもなれず、一日中テントの中でゴロゴロする。明日は千田・太田で前衛峰先のコル（六四五〇㍍）にアタックキャンプ（AC）を設営、そのまま泊り翌日アタック。保坂・涌沢はサポートにまわりACまでテントと食糧を荷上げした後C2に戻り、翌日は前衛峰まで登ってアタック隊を迎えることになる。

五月二〇日、二時起床、満点の星空を仰ぐ。朝のうちは足もあまり潜らず、フィックス・ロープを伝って快調に進む。雲海の上で抜群の眺望だ。見慣れた山なみの北方に雪はまばらで、どこまでも果てしなくチベット高原が広がっている。七時、前衛峰に到着し、初めて頂上までの稜線全貌を見ることができた。前衛峰からはナイフリッジが小刻みに波打ち、ACコルの先で一〇〇㍍程の険しい雪壁となる。それを越えると傾斜のやや緩いリッジが小ピークへと延びている。そこには幾筋かの巨大クレバスが縦に走っているのがみえた。天を突くような真白い氷のピラミッドの頂上がその奥に凛然（りんぜん）と構えている。「あれを登るのか」思わずごくりとなまつばを飲みこんでしまう。こんな素晴らしい頂上があるだろうか。いつのまにか僕の足はそちらに向って動いていた。

八時、ACコルへのナイフリッジのルート工作を開始。取り付いてみると、腐れ雪の中に氷塊が混じって足元がよく崩れる上に、西側はスッパリ一〇〇〇㍍も切れ落ちている。できるだけ重心を低くして、そろりそろりと進む。

コルの手前で北側の雪棚に降り、大きく張り出した雪庇の下をトラバースする。最後のフィックス・ロープ一〇〇㍍と2本の五〇㍍ザイルを使い切ってようやくACコルにつくが、たった二〇〇㍍の水平移動に四時間半もかかるとは。しかしこれで今日の行動が終ったわけではない。サポート隊が帰ったら、明日のルートのためにこのロープを回収しなくてはいけないのだ。

けだるい午後の日差しの中を前衛峰まで戻り、保坂・涌沢両隊員と固く握手を交わす。別れ際になって保坂さんが「ちょっとでも危ないと思ったら、もう登らなくていいよ」と言う。確かにこの山は我々の力量を越えているかもしれないし、たとえ頂上に立ったとしても、無事に帰らなければ意味がない、と強く思った。十五時、ようやくロープの回収を終えACテントを設営。二人とも疲労困憊でテントに転り込む。

五月二十一日、日の出を待つ間に「二度もアタックする余裕などない、僕らにはワンチャンスしかないのだ」と自分に言い聞かせてテントを出る。

ACから二〇㍍ほど登ったところにアンカーを埋め、太田リードで雪壁に取り付く。最初の幅の広いクレバスは右端の浅いところを下りて通過し、そこから左上気味にぐんぐん登るが、途中から雪壁が青く堅い氷に変り、途端にスピードがガクッと落ちた。持っているのは縦走用のピッケルで、ブルーアイスには文字通り歯が立たない。

予定ではアタック隊のトップはバイルを二本、フォローが1本持つことになっていたが、二人で一本づつしか持たないで来てしまった。しかし、今ないものを望んでもしょうがない。

微妙なバランスで八〇㍍の雪壁を越え、ダンラインの残り二〇㍍を続くナイフリッジまで延ばす。これでフィックス・ロープは使い果たした。そこから先は広くなった雪田をスタカットで三ピッチ進み丘状稜線の基部に着く。この先はすぐ垂直の短い雪壁だ。これを越えて緩い氷雪壁を三ピッチ登って小さな雪田に出る。ここから稜線は小ピークへと続く。北側の幅五～一〇㍍の雪棚をすすむ。

十一時三〇分、本峰直下の雪壁基部に辿り着く。山頂までの標高差は約三〇〇㍍あるはずだが、思いのほか頂上は近く見える。

最後の難所と考えていた上部露岩帯もどうやら避けて通れそうだ。登頂は十四時頃になる見込み、とBCに伝え、ポケットにレーションを突っこんで出発。残りの荷物はデポしていく。

取り付いてみると、きらきら白く輝いて見えた美しいピラミッドの〝雪壁〟は、ガチガチのブルーアイスだ。またピッケルが決まらなくなってがっくりとペースが落ちる。バイルがもう一本あれば、と後悔の念が甦ってくる。割れた氷がカラカラと空しい音をたてて落ちていく。もう今朝ほどの腕力も残っていないのでちっとも進まない。幾らか氷が柔らかく、かろうじてピックが刺さる氷壁と露岩のコンタクトラインを登る。

十六時、七ピッチ目にしてようやく氷壁を抜ける。頂上まであと五〇㍍か。あと一息。陽が傾き、カンチェンジュンガの巨大な影が雲海の上に伸びていく。最後の力をふり絞って、一歩、一歩、頂上への雪稜にステップを切る。視界に白いピークが入ったら五〇㍍ザイルがいっぱいになった。

十六時一〇分、ついに憧れの頂上に立つ。実際の最高点はそこより一〇㍍程東側にあるが、この頂は「独り神が住んでいる」ところだから、そっとしておこう。BCに登頂を伝える。頂上の東側はあいにくガスがかかり眺望はきかないし時間も限界だ。

お互いの写真をとっただけで休む間もなく下山にかかる。登頂の感動に浸る暇はなかった。ビバークは必至だが、それよりも日没ま

でにこの壁を下りきれるかどうかが問題だ。何しろ二人ともヘッドランプをザックに入れたまま置いてきてしまっていたのだから。傾く太陽とのにらみ合いが続く。

アブザイレンをしてデポ地に降り立ったのは日没寸前の十八時四〇分。完全に燃え尽きた。もう一歩も動きたくない。このまま寝てしまおうか、とさえ思う。千田さんはビバークの場所に目星をつけていたので、そこまで行こうと言う。三〇分程歩いただろうか。稜線から北面を一ピッチ下降したところで水平に開いたクレバスを見つけ、ツェルトを張ってビバーク態勢に入る。二人とも黙ってひたすらレーションをむさぼる。横になるが寒さで眠れず、夜通しトランシーバーから聞こえるみんなの声だけは嬉しく暖かかった。

五月二十二日、雲海に浮かぶチョモユモ、カンチェンジャオ、パウフンリが次第に薄紅色に染っていく。

朝五時、ビバークサイト（六六四〇㍍）出発。滑稽なほどにペースが遅い。今日中にC2まで戻らねばならぬのかと思うと余計に足取りも重くなる。とにかくACに戻って一服したい。

ACに辿りつくや否や早速、ラーメンを作って食う。死ぬほどうまい。体の芯から暖まり生きた心地がする。ポカポカと暖かいテントの中でいつのまにか二人ともうたた寝をしてしまう。ふと気が付くと時計は八時を回っていたが、すぐ動く気にはなれず、再びバーナーをつけて紅茶を沸かす。交信でサポート隊がC2を出発したのを知って、我々もテントを撤収し、九時すぎACを後にする。

前衛峰にはすでに保坂・涌沢両名が待っていた。二人の顔を見た途端に、安堵とも歓喜とも、なんともいいようのない感情がドッとこみ上げてきた。

「おめでとう、よくやったよ。」「どうも……」再び、堅い握手を交すことができたが、そのあとの言葉が続かなかった。

振り返ると「白い美しいピラミッド」の稜線に我々の刻んだトレースが潤んでかすんで見えた。そして、これでやっと終った、無事に帰れる、そう思った。

下　山

五月二十三日、登頂・サポート隊四名はC2を撤収後、朝四時に下山開始。各キャンプの隊員達の出迎えと祝福を受けながら合流し一緒に下山した。同時にC1からABCへ荷下げする。この時C1から出迎えに行った小山隊員はC1近くでヒドンクレバスに落下するが大事に到らず一同ほっとする。隊員九名とポーター五名は十七時三〇分BCに到着した。二十四～二十五日、五名のハイポーターはABCを往復し隊荷を降ろす。二十七日、ポーター七〇名とともにBCを出発、ジャタンを経由し、二十八日、ラチェンに着く。三十日、ガントック着。ダージリンを経由し、六月七日、帰国した。

＊　　＊　　＊

シニオルチューは戦前から知られた名峰であり、ヒマラヤを愛する人なら一度は訪れ目の前にしてみたい山である。フレッシュフィールドは「世界で一番美しい山」と讃え、バウアーは、「その氷のピラミッドを見た瞬間、全地球上にこれに匹敵する山はない、と誰にも憧れをおこさせる」と述べている。まさにその通りであり、シッキムの美しく豊かな森の中をこの山へ向けてトレッキングする

こと、それ自体が十分に楽しい。

戦後久しく閉ざされてきたシニオルチューの登山許可取得に成功した日本ヒマラヤ協会の稲田定重氏のご好意により、私達は幸運にもこの山に出会うことができた。

シニオルチューは標高七〇〇〇㍍にとどかず、未登峰でもないのだが、この山に魅了された私達にとって、それらは余り大きな問題ではなく、むしろ私達の登山を通じて多くの方々にまぢかにシニオルチューの美しさを再び紹介できたことを今はたいへん嬉しく思っている。

（文責　副隊長・平泉　宣）

〈記録概要〉

隊の名称　東北大学医学部艮峻（ごんりょう）山の会

活動期間　一九九五年四月二日～六月七日

目　的　インド・シッキムヒマラヤのゼム氷河を辿り、シニオルチュー（六八八七㍍）に登頂する

隊の構成　隊長＝片山正文（44）、副隊長＝平泉　宣（37）、登攀隊長＝松本克雄（39）、隊員＝後藤　均（37）、千田雅之（34）、保坂正美（31）、市川宏文（31）、小山　敦（29）、太田尚志（27）、涌沢亮介（24）、中野岳仁（22）、山口正人（46）、能勢眞人（50）、学術隊長＝葛西森夫（73）、総隊長＝佐藤春郎（75）、リエゾンオフィサ＝メジャー・プラビン・ガングアニ（30）、ナク・ギリ（24）、ハイポータ＝ミグマ・シェルパ（50）、ニマ・ドルジ（30）、パサン・シェルパ（31）、ダワ・シェルパ（26）、ランドウ・シェルパ（22）、コック＝デネシ・バット、テラ・トラジ、パサン・トラジ、ガイド＝キャプテン・ワサン、パサン・シェルパ（シカール・トラベル）

行動概要　四月九日ニューデリー到着、二十九日ＢＣ建設（四五七〇㍍）、五月一日ＡＢＣ建設（四七〇〇㍍）、五月四日ＣⅠ建設（五三五〇㍍）、十四日Ｃ2建設（五九〇〇㍍）、五月十九日ＡＣ建設（六四五〇㍍）、五月二十一日登頂（十田、太田）、頂稜への氷壁直下（六六四〇㍍）でビバーク、五月二十三日Ｃ2を撤収、二十七日ＢＣを撤収し、三十日ガントック着、ダージリンを経由し、六月七日帰国。

報　告　『東北大学　シッキムヒマラヤ学術登山報告書』（一九九六年八月）、東北大学艮峻山の会発行

ナンガ・パルバット北面新ルートからの登頂

——千葉工業大学登山隊一九九五

坂井広志

はじめに

ナンガ・パルバットを登りながら常に私の心の底に流れていたのは、一〇〇年前に初めて挑戦したママリーであり、単独初登頂を果たしたヘルマン・ブール、ここでなくなった数多くのドイツ人たちのことでした。彼らが持っていた山にかける深い思想、激しい情熱、勇気を自分を含めてメンバーが持っているのか……でした。自分なりにこの山にはいるには周到にして完璧なる準備をやってきました（一九九二年偵察より三年間）。しかしナンガ・パルバットという山はそれだけでは登れないとても巨大な相手だと当初より感じていました。人も山も自然の造形物です。それからすると人に人格があるように、山にも格があると私は思います。この山には偉大な格とスケールがある。ナンガ・パルバットを相手にするには彼らが山にかけたと同等なる深い思想、激しい情熱、勇気がどうしても必要でした。技術・装備・体力・高所登山の科学的分析など初期の登山技術に比べ現代登山テクニックは格段に進歩を遂げています。これらを駆使しても難しい相手だったことを隊長として私は登山期間中痛感いたしました。ナンガ・パルバットは登頂を目指す我々にルート上、次々と物理的障害を立て阻みますが、逆に私たち人間側の、障害を乗り越える可能性を引き出させようとしているようにも思われました。そう感じたとき山と人間との間に何か精神的一体感ができ、登頂への道が開いてくるようでした。

一単科大学の山岳部ＯＢを主体として組織され、決して大きい登山隊でなかったが故に、すべてが登山隊独自の発想・企画と運営のもとに実行されました。二度の落石事故により当初の計画であった登頂後の西壁側へのトラバース下降はできませんでしたが、新ルートから三名の登頂成功で、私たちは主体性のある創造的登山という哲学を、貫き通したと確信しております。

ルートの選択について

ナンガ・パルバットに初めて登頂を試みたのはアルピニズムの先駆者A・F・ママリーである。彼は一八九五年この山のルパール側、ディアミール側と登路を探るが当時の技量からして登れるルートではなく、最後にラキオト側に入るべくディアマコルに向かうがそのまま消息を絶ってしまう。一九九五年はママリーの初挑戦からちょうど一〇〇年目となった。今日までに数多くの登山隊が挑んでおり、その歴史には初登頂までに、多数の遭難者を出したことで有名な山である。

ナンガ・パルバットに開拓されたルートはこれまでに六本ある。(一)驚異的な単独行を成し遂げた初登者、ヘルマン・ブールのたどった北面ラキオト氷河より東稜を経たもの、(二)西面ディアミール側には現在最もポピュラーになっているドイツ隊のルート、(三)同じく西面側、ラインホルト・メスナーが単独無酸素アルパインスタイルで登ったルート、(四)南面ルパール側の壁の標高差四五〇〇メートルの南南東側稜ルート、(五)同じく南面ルパール側の南西稜ルート、(六)東面バツィン側の急峻な南東側稜がある。

この開拓された六本のルート以外にもいくつか挑戦されたルートはあるが、この山のむずかしい要素から登頂に到っていない。さらに西面のドイツ隊ルート以外は再登の回数も少ない現状である。今回私たちが登頂した北面については一九五三年の初登頂、一九七一年にチェコスロバキア隊が登頂した以外、入山した隊はあったものの登頂には成功していない。

今回の新ルートが登れそうに感じられたのは今から十数年前のことである。ギルギットに向かう機中から北面を見た際にシルバーツァッケン東峰より北に落ちるかすかな尾根に注目し、もしここが登れればシルバープラトーへ簡単に抜けられる、ヘルマン・ブールがたどったルートは大変長い、それをショートカットして登れれば……と思った。帰国後暇を見てはナンガ・パルバットについて資料を集め調査を始める。幸いこの山は登山開拓期に北面側に数多くの登山隊が入り詳細な文献があったうえ、メルヘン・ヴィーゼ(北面ラキオト側のキャラバン地で大変美しい牧草地、おとぎの森という意味)付近からの写真をはじめいろいろな角度から撮った写真が豊富にあり参考になった。また一九九二年の私の偵察行後は、川崎教員隊の坂原様(一九八三年に初登ルートに挑んだ)より北面に関する写真資料やアドバイスを頂いた。

このルートに関する情報を集めた結果、ルート上のポイントは何なのか、また成功させるための条件は何かを分析してみた。

ルートのポイントは次の三点

①C1からの取り付き岩壁帯(標高差約五〇〇メートル)とC2上に立ちはだかる懸垂氷河(標高差約一〇〇メートル)の通過。

②BCをグレート・モレーンの上(通常三九〇〇メートルにおくBCを四五〇〇メートルとした)に設置した場合、頂上までの水平距離は九・二キロメートル、垂直距離は三・六キロメートルある。この高さと距離をいかに安全に通過できるか。

③シルバープラトーの平らで長い雪原の通過と登りルートでない西面への下降。

③の西面下降は登頂後に早く高度を下げることが安全につながると考え、また西壁のドイツ隊ルートならばルート資料も多く、サポート隊を下から送れば下降も可能と判断したからである。未踏ルートからの登頂だけでなく、西面への下降を加えることにより、さらに自分たちの登山に課題と意義をつけ加えることとした。そのため計画上、登頂後に西面へ縦走した場合には水平距離一六キロメートル以上という長距離となる予定だった。

タクティクスの計画と結果

(一) 偵察

ナンガ・パルバットに関する資料は多いものの目指すルートは未踏のルートである。実際に自分で現地確認することは登山計画の確認と安全の向上につながると考え、私が一九九二年に、藤井隊員が一九九四年にベースキャンプ予定地まで偵察に行ってみた。その結果C1からC2間の岩壁帯とC2上の懸垂氷河に登路の可能性はあると判断した。それまでこのルートに関する私の疑問は、なぜ初期の頃のドイツ隊は私たちの狙うルートを選ばなかったのか、であった。ヘルマン・ブールの登頂までに北面に入山したドイツ隊は四隊、緻密に調査し執拗に北面に入りながら最初に挑戦したルートしか選んでいない、その上初登までに三十一名もが亡くなっている。偵察の結果、彼らが選択しなかったのは当時の登山技術からして取り付きの岩壁帯は急峻で隊員たちが登るにも、またポーターが荷揚げするにもあまりにも難しいと感じたからだ、と結論づけた。ヘルマン・ブールの著書『八千メートルの上と下』にもこの取り付きの岩壁帯の記述はなく、ルート対象外としていたようだ。さらに私たちはパキスタンの登山家ナジール・サビール氏にルートの航空写真を撮っていただきルートのポイントについてより詳細に調べることができた。

このような偵察情報はタクティクスを作る際に多いに役立ち登攀具の積算やキャンプ配置、高度予測はほぼ予想通りだった。

(二) キャンプ配置とルートの概要

①BC(四五〇〇メートル)まで

北面に入山したこれまでの登山隊は標高三九〇〇メートルの牧草地をベースキャンプに、標高四五〇〇メートルの通称グレート・モレーンの上をC1にしている。私たちは頂上までの水平距離の長さを考慮し、ベースキャンプはできるだけ上に上げたく標高四五〇〇メートルのグレート・モレーンの上をBCとした。BCを設営した六月上旬は約三メートルの積雪(七月末にはほぼ消えた)があった。ここは丘状の地形のため、北壁からの雪崩の心配もなく、安全且つ北面ルートの見通しの良い場所である。BCへの荷揚げは選び抜いた約二十名の強いポーターに長靴とサングラス等を支給し、隊員も共に六日間の荷揚げを行った。早朝の雪面の堅いうちに行動すれば、昼前には楽にBCを往復できた。

バルトロの奥の八千メートル峰に比べ、ナンガ・パルバット北面へのアプローチは大変短い。藤井隊員は仕事のため登山途中、日本に帰国し再度入山した際は、成田を出発後三日目でBCに入った。新鮮な食糧も、BC設営後は約二週間に一回ギルギット又はタトーから簡単に揚げることができた。

㈣　ＢＣ（四五〇〇㍍）からＣ１（五三〇〇㍍）

ＢＣのグレート・モレーンを約一五〇㍍下り、ラキオト氷河に出る。北壁からの巨大な雪崩が時々ある。雪崩のデブリを避けるように氷河上の雪面をつめ、途中より氷河中央部のセラック帯に入る。時期的にまだ積雪も多く、クレバスも小さくルート工作には迷うことなく約二日間でＣ１の台地状に上がる。辿ったルートは初登のルートと同じである。

隊員は高所順応がうまくすすむに連れ、Ｃ１への登降スピードはあがっていく。

㈤　Ｃ１（五三〇〇㍍）からＣ２（五九〇〇㍍）

今回のルート上、最も危険なところである。Ｃ１より見上げる岩壁は谷川岳の衝立岩を思わせる。約四五度の雪稜のテールリッジより取り付き、岩壁帯に入る。岩壁帯の平均斜度は約六〇度で数カ所は垂直、雪の薄く着いたところを縫うようにルートを延ばすがグレードはⅣ～Ⅳ＋。この岩壁帯は日差しが当たると同時に落石が発生。中間部のルンゼ状の所は特に危険地帯で五分に一回は落石が発生。固定ロープも数回切断される。岩壁取り付きと中間部のルンゼで隊員二名が落石事故でリタイアする。岩壁帯を登りきった五七〇〇㍍に仮Ｃ２を設営、これによりＣ２へはナイフエッジの雪稜に変わる。

㈥　Ｃ２（五九〇〇㍍）からＣ３（六七〇〇㍍）

Ｃ２までの岩壁帯を第一の関門とすると、Ｃ２上に約一〇〇㍍くらいの高さのアイスビルディングがルート上の第二の関門である。北壁上部にたまった氷雪が巨大なアイスビルディングを形成している。幸い中央部は垂直ながら二つに割れておりこの門状の部分を突破する。たいへん硬い氷であった。Ｃ１のテールリッジより、このアイスビルディングを抜けるまでフィクス・ロープはべた張りとなった。アイスビルディングを抜けるとやさしい雪尾根へと変わり、赤旗を立て標識にしＣ３へ上がる。

㈦　Ｃ３（六七〇〇㍍）からＣ４（七三五〇㍍）

シルバーツァッケン東峰の基部を右から巻き、シルバープラトーにでるルートを取る。Ｃ３から上は傾斜は再び増し、やさしい尾根は終わり右上する。七〇〇〇㍍付近には急なミックス壁が立ちはだかっていて、この基部を水平に右にトラバースする。行き詰まったところを今度は直上で３ピッチ、最後のピッチはグランドジョラスのレビュファクラックのような垂直で困難な箇所で矢部がリード、グレードはⅤはあった。ここを抜けでた雪田を右上し急な雪壁を登ると、いよいよシルバープラトーへ出る。ようやくナンガ・パルバットの頂上が遙か彼方に見えてくる。

㈧　Ｃ４（七三五〇㍍）から頂上（八一二五㍍）

最終キャンプＣ４に七月二十一日坂井、矢部、秋山の三名で入る。翌二十二日未明にアタックをかけるが、前日からの睡眠不足と寒さで矢部、秋山がリタイヤ、結局この日のアタックは日が昇る前にあきらめてＣ４へ戻る。翌二十三日は午前三時一〇分に出発、星空のもと、シルバープラトーは幸いくるぶしぐらいの雪の深さで速いペースで歩けた。シルバープラトーを抜け出たのは午前八時、突然目の前に頂上岩壁帯が現れる。今日中に頂上往復は可能と考え、ほとんどの食糧と装備をデポする。パツィンムルデに約一五〇㍍一旦



C3～C4のミックス壁、遠景はバルトロ山群

下り、頂上岩壁帯のルンゼに入るが途中で垂壁に阻まれた。迷ったあげく、左にエスケープと判断、二ピッチザイルを使用後、北の肩直下の稜線にでる。ルート選択は正しかったが、ここの突破と八〇〇〇㍍を超える高度のため三人の登攀スピードは極端に落ちていた。その後はやさしいが長く苦しい岩稜をたどって頂上へ。ようやく午後五時一三分に坂井が登頂、午後五時三〇分に矢部、秋山も頂上に到着。BCとかすかな交信をし直ちに下山、しかしデポ地点までは戻れず、頂上岩壁帯のルンゼをヘッドランプをつけ八ピッチ懸垂下降。下りきった雪の斜面で吹雪のなか午後一〇時半にツェルトだけの腰掛け状態でビバーク体制に入る。疲労と寒さで、ほとんど寝られない苦しい一夜を過ごし、翌朝デポ地点まで登り返し休憩。残されたストーブと食糧でようやく暖を取る。昼前、このデポ地点を後にするが相変わらず外は吹雪の上、ホワイトアウトで五〇㍍先も見えない。シルバープラトーで登頂以来交信の取れなかったBCと再交信。登頂の感動後不安のまま待ち続けていた隊員達も生きていたことに安堵するが、アタックメンバーにとって生還する唯一の頼みのC4の位置がわからない。前日C4を出た際、帰路は東北東と覚えていたことだけが頼り、コンパスを常時見ながらシルバープラトーの雪原をのろのろと歩む。距離感も方向感覚も全く捉えられない不安な時間が過ぎる。再度、苦痛のビバークかと思われた夕刻、幸運にもほんの一時のガスの晴れ間が現れた。遙か彼方に青色のC4のテントを発見、午後六時一〇分、無事帰還する。

(三)　天候と登山時期

今回の成功にまず挙げられる条件として天候の安定があった。B

Cへ荷揚げを開始した六月初めから一気に好天期が始まり、七月中旬まで悪天による停滞日がたった一日だけという恵まれた年であった。ナンガ・パルバットは天候の悪い山として有名である。日本での準備中は、いかにして天候を察知すべきかいろいろと方策を練った。気象ファクシミリによる高層天気図のキャッチとBCでの自記記録計による各種気象データの記録を計画したが、機械操作の不備もあり、結果的には現地では全く役に立たなかった。もし、しっかりとデータが取れていれば、なぜこのように天候が安定し続けたのか解明できるデータが得られたであろうと思う。

計画時には登山時期の選定に苦慮した。これまでの登頂者たちの登頂日もかなり幅があり、いつの時期が登山に適しているのか、なかなかつかめなかった。ただルート上の取り付き岩壁帯（C1からC2の間）は時期が早い方が雪も多くついて登りやすいのでは、と考えた。そのため登山時期を六月上旬開始と設定し、登頂を過去の記録からモンスーンの影響の現れる七月末までにとした。

（四）高所順応

私たちは昨今の短期速攻で登頂をする隊ではない上、二〇代の隊員達はヒマラヤの高所経験がなく、じっくりと高所順応をすることにした。しかし登山期間は長くとも二ケ月が精神的にも肉体的にも限度であろうと考えた。

まず四〇〇〇㍍ラインはBCへの荷揚げで幾度も往復し、順応させた。その後は各自の体調をよく観察し、順応が十分でない場合は速やかに下のキャンプに下げさせた。また初めて上がった高度で宿泊はしない、上部キャンプでは極力休養日は入れないこととした。さらに十日間から二週間をサイクルにBCにて十分に休養を入れた。特に最終ステージとなるアタック前はBCで四日間の休養をすることにした。最も高所順応で注意を払ったのはC4（七三五〇㍍）入りであった。計画当初よりアタックにワンビバークは必要であるとしていた。七〇〇〇㍍ラインを超えての宿泊数を少なくするには天候と隊員の体調を見計らってC4に入り、速やかにアタックをかけることだった。

今年の安定した天候にもよるが、結果はほぼ満足できた。高所経験者の少ないメンバー構成だったため無理せず慎重に行ったせいもあるかと思う。体調を崩し、タクティクスに関わる大きな変更もなかった。しかしアタックメンバーのうち一名は頂上付近で幻覚を見たうえ、下降中に肺水腫の疑いのある兆候があった。幸い下るに従いその症状は消失した。

（五）酸　素

八〇〇〇㍍を一二五㍍超えているだけなので、順調に高度順応すれば酸素は不要と考えた。しかし緊急用として三本のボンベをC4にあげた。アタック後にC4に戻ったメンバーのうち、体調のよくないものにほぼ一本吸わせた。行動用として酸素は使用していない。もともと私たちは全員登頂を目指してはおらず、登頂は実力のあるメンバーによるワンチャンスくらいの難しい山ととらえていたため必要最小限の酸素量とした。

（六）スキー

長いシルバープラトーの通過にはスキーの使用は有効なのではと考え、山スキー（一六〇㌢の板）を用意した。結果はこのスキー

を持ってC1からC2の岩壁帯をあがるのは不可能に近く、断念をした。C4からのシルバープラトーは雪面は堅くスキーの必要性は感じなかった。

（七）GPS（グローバル・ポジショニング・システム）

スキーと同様、結果的には使用しなかったが、精度と軽量さがあれば今後積極的に使われても良いものと思う。事実、アタックの帰路、シルバープラトーでホワイトアウトになった際はコンパスだけでは不安であった。方角と距離の表示されるナビゲーションシステムがあればどんなに安心できるかわからない。

〈記録概要〉

隊の名称　千葉工業大学ナンガ・パルバット登山隊一九九五

活動期間　一九九五年六月八日～七月二十九日、ベースキャンプ設営から撤収まで五十二日間

目　的　北面新ルートからの登頂後、西面を下降

隊の構成　隊長・タクティクス＝坂井広志（38）、医薬＝藤井正善（48）、タクティクス補佐＝寺本正史（47）、装備・環境＝矢部幸男（29）、渉外・会計＝平田潔（28）、記録・気象＝石井渉（29）、食糧＝田村恵一（28）、装備・環境＝秋山武士（26）、食糧＝上坂隆幹（25）、輸送・通関＝岩本崇（22）

行動概要　六月八日グレート・モレーン上部四五〇〇㍍にBC建設。ラキオト氷河経由、C1建設（五三〇〇㍍）因難な岩壁帯を突破し仮C2建設（五七〇〇㍍）後、ナイフエッジの雪稜を越えてC2（五九〇〇㍍）。アイスビルディングを突破しC3建設（六七〇〇㍍）、困難なミックス壁と雪壁を越え、シルバープラトー経由C4建設（七三五〇㍍）。七月二十一日登頂隊三名はC4へ。二十三日登頂後、頂上岩壁帯でビバーク。二十四日にC4帰着。

『千葉工業大学ナンガ・パルバット登山隊一九九五概要報告』、正式報告書一九九七年一月刊行予定、『山と渓谷』七二三号（一九九五年十月）、『岳人』五八一号（一九九五年十一月）、『ヒマラヤン・ジャーナル』Vol. 五十二・一九九六『登山研修』（文部省登山研修所）Vol. 十一・一九九六、『アメリカン・アルパイン・ジャーナル』96年号掲載予定

ムスターグ・アタ山群未踏峰の登頂

―一九九五年夏、青年部登山隊の記録

絹川祥夫

はじめに

この計画は、総隊長川上が一九八一年コングールチュビエ峰の登山終了後に、ムスターグ・アタ南面を展望し、更に九三年頃、頂上から西面にかけての端然とした雄姿に感嘆した時に始まる。

当初は防衛大山岳会でと考えられていたが、諸々の事情から実現できず、社会人の混成隊に変更し、九四年夏偵察隊を出した。偵察隊は隊長に本隊の総隊長である川上、隊員には本会会員の松永敏郎氏の紹介、山形大の関係、防大ＯＢによるものであった。偵察の結果、上部三つのピーク間の距離は長く、登攀の安全確保の上からも、高所登山経験者で前線指揮がとれる者のもと、チームワークが登頂の成否を左右すると判断された。

隊長を除く偵察隊員は海外登山の経験が少なく、本会の宮下副会長に相談が持ち込まれ、前青年部担当の村井龍一理事のもとで検討された。その結果、青年部が実行し、登山隊長は絹川と決定した。

実際のところは、青年部の忘年会を兼ねた例会に遅れて出席した私に声がかけられ、何も知らないまま「いいですよ」ということで始まったのだが、この山は総隊長川上の懸案の山であり、既に長い間真剣な討議がなされていたとは、当時の私は知る由もなかった。何はともあれ、実行の母体と登山隊長が決まって隊は動き出した。

青年部で実施する以上、学生部を含めた若手で隊を組織し、会の次代を担う登山家に育ってもらおうというのが主眼として考えられた。青年部は近年、次代の登山家を育成しようと数々の試みを実践してきた。国内のフリークライミング、アイスクライミングだけではなく、ネパール、中国、アラスカをはじめとする数多くの登山隊にメンバーを派遣し、多くの成果をあげてきた。そこで今年は、主要メンバーが山岳会創立九十周年記念のマカルー登山隊に参加している中で、青年部としては更に若いメンバーによる隊を組織し、若

手の力で未踏峰を初登頂しようということになった。若手メンバー自身がタクティックスもロジスティックスも計画し、それが現地での登山活動とどのように違うかも学んでほしいことの一つであった。そして何よりも、未知の山―未踏峰に、自らの力と方法で登ることによって、登山本来の喜びを味わい、次のステップに向って飛躍してほしいというのが、本隊の基本であった。そしてメンバーの条件として、(1)年齢は二十代前半、(2)海外登山経験のない者又は少ない者、(3)今後も海外登山を継続的に行おうとしている者とした。

準備から出発まで

年が明けて、学生部や青年部から参加したいという者が次々に名乗りをあげ始めた。準備は学生主体の自主性を重んじた準備活動というわけで、万事が順調に進んだとは言い難かったが、諸先輩からの物資集めの協力と適切なアドバイスのお陰で右往左往しながらもどうにか進んだ。

若い隊員と言うこともあって、宮下副会長から「高所登山概論」といった話を伺ったし、われわれと同時期に同地方をトレッキングするという会員の長尾ドクターに高所医学概論を、斉藤副会長には具体的な高度障害に対する対処法を講義していただいた。これらのことは若い未経験の隊員達には極めて有意義なものであった。

資金面では、海外登山基金助成金を申請したものの認められず、そこで青年部のメンバーが発奮、結果として十分な資金を調達してくれた。若い学生達はそれぞれの出身母体でバックアップ、隊としても資金の目途は比較的早目についた。

タクティックスの検討、梱包作業と忙しく進んだが、ビザの問題、隊荷の受入先等々でやきもきすることもあった。この間に合宿も富士山と谷川岳で三度行って技術的な検討をしたり、直前までいつもながら慌しかった。出発までの中国側との遣り取りは、すべて現地ウルムチとのFaxで行われた。誠に便利になったと感心することしきりであった。

行動記録

七月二十一日、朝成田を出て北京経由でその日のうちにウルムチ着。慌しい直前の準備を終えて、もう一安心、あとは山だけと思っていたらさっそくトラブル発生。担当隊員が全員の帰りの航空券を紛失、結局見つからない。やはり皆少し浮き足立っていたようだ。

二十二日、カシュガル着。アプローチは、ウルムチ（烏魯木斉）、カシュガル（喀什）と古い会員諸氏には恐らく懐かしく響くシルクロードの街を辿って行く。カシのバザールは千年以上の歴史を持ち、大変な賑いをみせ、われわれも最終的な買い出しを行った。フィックス・ロープも十分なものがあり補充を行った。さすがに果物類は豊富で、西瓜、メロンを荷上げ、これはBCで堪能した。シルクロードの砂漠の西端に聳えるムスターグ・アタ山群への登山は、このカシュガルの街から始まる。

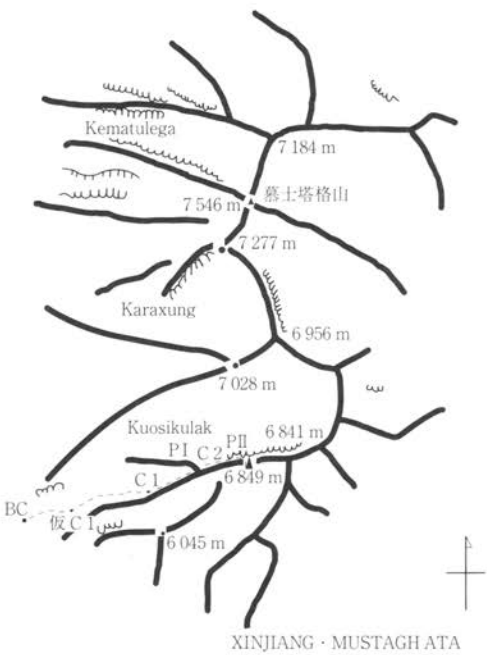
二十五日、カシュガル―バシククル湖。

二十六日、高所トレーニング。

バシククル湖畔から、各自四四〇〇メートル～四六〇〇メートルまで、ほぼBCと同高度を往復してBC入りに備えた。隊の医療装備として、パル

スオキシメーターを準備したので、この日より各自測定を始めた。その後隊員達は、その数値に一喜一憂することになる。

二十七日、バシククル湖―BC（四六〇〇㍍）カラクリ湖からジープで中パ公路を進み、途中よりムスターグ・アタ山群の西裾をまく砂漠に入って、車の限界まで行く。そこからラクダ十一頭に隊荷を移して、半日をかけてBC入りする。途中、ラクダ工のストライキや賃上げ交渉もあって到着は遅れた。BCは標高四六〇〇㍍で、小さな氷河湖の湖畔にあり、目標とするピークを正面に望むその眺めは登頂意欲をかきたてるのに十分な場所であった。BCに集積された隊荷は約四〇〇㌔、その中には生きた羊が1頭、われわれの食料用として上げられた。



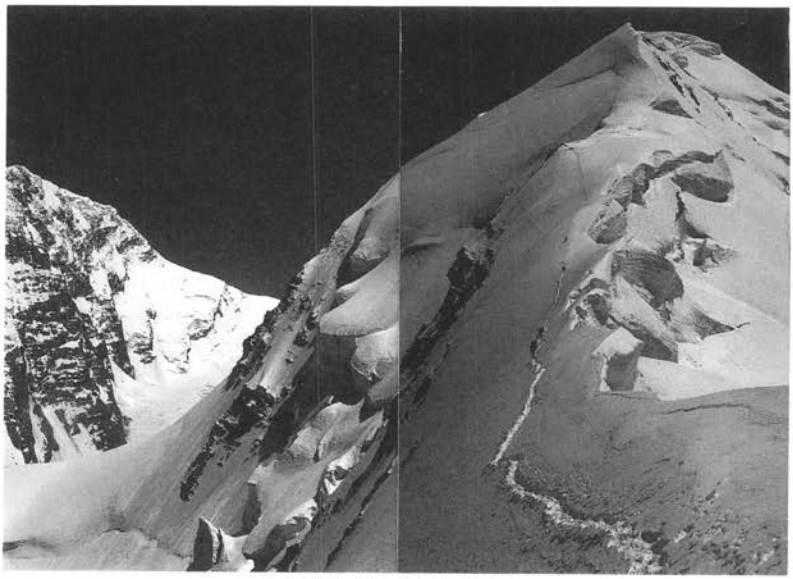
二十八日、BC整備の後、氷河のルート偵察と荷上げを開始する。偵察の結果、C1予定地までは水平距離も長く、高度差も大きいので、氷河を渡ったサイドモレーン上に仮C1（四七二〇㍍）を設け、上部用の荷物を集めることにした。この間一名の隊員が体調を崩したので、一時下山の川上総隊長と共にカシュガルまで下ったが、三十一日にはBCに復帰した。

二十九日、三〇日、荷上げ、ルート工作。ルートは、氷河に取り付くためにルンゼ状を行って出たところを左にトラバースして氷河の大斜面に登り、ついで主稜のコルを目指す。ルンゼの中は午後になると軟雪、また氷河の斜面も雪がゆるんでルートの再整備が必要となることもあった。フィックスのための支点は、スノーバー、スナーグ、ワードフォッグ等を使用したが、パイプ類が有効であった。

三十一日には五四〇〇㍍までルートが伸び、C1の位置も決まり、とにかく第一ステージが終ったというわけで、八月一日は全員が休養。日本を出発して十二日目に初めて休みを取ったことになり、疲労もかなり蓄積されているのだろうが、若手は元気で意気も高い。

八月二日、C1（五四五〇㍍）。氷河の大斜面にはクレバスがあるもののそれ程ひどいものではなく、長い斜面を抜けて主稜上のコルにC1を建設し、二隊員がC1入りする。ルート整備と荷上げに若手隊員はその力を大いに発揮する。

C1から上部のルートは、まずPI（五九〇〇㍍）まで大斜面が続き、BCより顕著に見えるPIを越えると一挙にやせた細い尾根



C1上部のPⅠ（5,900m）から、
C2（6,070m）とPⅡ（6,360m）
へ続くルートを見る

となって長く続く。PⅠへの斜面は、右の稜上に沿って直上する。

ヒドンクレバスが随所にあるものの大きなものではなく、落ち込む隊員もいなかった。PⅠはこのルートで唯一岩が露出しているが、それを左にまいて越えると、ルートの様相は一変する。北側は下部氷河まで一気に切れ落ち、右手南側は雪庇が大きく張り出して、稜線通りに行くことができない。トラバース気味に主稜を辿る登攀となった。技術的には登山活動中、このPⅠ～C2間が最も困難な部分であった。さすがにこの高度になると雪質も安定し、その下層の氷に打ち込まれる支点類もしっかりきいてくる。ここのルート工作には三日間を要した。

八月八日、C2（六〇七〇㍍）。六日に仕事のため予定通り下山帰国した隊員を除く八名は、細くやせた主稜上の台地に張られたC2に三名、残る五名がC1に入った。C2から頂上までは、当初、相当の水平距離と高度差もあると考えていたので、もう一つC3を出して登頂に万全を期すことにしていたのだが、PⅡ（六三六〇㍍）は鋭く峻立しているものの比較的近くに見える。そこで翌日偵察を出して、上部をうかがい、もう一つキャンプが必要かどうかを探らせることにした。計画では、C2に全員が上った後、C3位置を往復し、一度BCに下って登頂体制に入るというものであった。

八月九日、第一次登頂。C3の位置とルートを見通すために、早朝よりC2上部のルート工作を続ける。前日C2入りした三名の隊員は、依然細く続く急峻な主稜を行く。C1の五名は最後の荷上げを行ってC2入りの後、PⅡまでのルート整備をする。先行する三名がPⅡを越えると傾斜も落ち、広い斜面に出て、コル状の場所が

C3位置として適当と判断した。しかし時間的にも余裕があるので、更に上部をうかがうことにして、ドーム状ピークへ続く容易だが長い長い稜線上を登って行く。そして、そこを登りつめ少し南に寄ると遮るものもなく頂上であった。十六時三十八分。上大迫、青野、佐藤の三名。

八月十日、第二次登頂。前日の意外にあっけない登頂に続いて、残りの隊員は前日のトレースを辿り順調に登頂。頂上でJAC旗をかざし、これで全員が登れたと一安心する。十三時四〇分。絹川、椎名、平沢、中川、竹谷の五名。

十一日、C2よりフィックス・ロープ他全てを回収しながら仮C1に一気に下山した。雪と氷の世界から久し振りに解放される。

十二日、全員ケガもなく山のような荷物を背負って元気にBCに下った。十三日までの二日間は、残った隊荷の整理と下山の手配に費やされ、迎えのラクダを待った。

十四日、ラクダによる下山のキャラバン。若い隊員達は思い思いの山を胸にノンビリ下山した。十六日川上総隊長とカシュガルにて合流。

二十日、残務処理も終りウルムチにて登山活動を終了し、隊は一応解散した。若い学生達は各々のプランに従って九月下旬まで中国国内の旅に出て行った。これもいい経験になったに違いない。四川連合大学に留学を決めて成都に残った隊員を除く九名全員が久し振りに顔を揃えたのは十月初旬になってからであった。

おわりに

計画の当初、目標とするピークは、九六頁の概念図（中国登山協会発行の中国登山案内書により作成）にある七〇二八メートル峰に連なる尾根上の六九五六メートル峰として、七〇〇〇メートル峰の初登頂と期待された。つまりカラシュン氷河の南に位置する西に伸びた尾根を辿って登頂するというのが、われわれの計画であった。入山時に位置的には一つ南側のコシュクラク氷河に面する六八四九メートル峰が目標のピークにあたるのではと隊員間に疑問が出された。このことは前年の偵察にも取り上げられていたようだが、更に南側からの氷河の位置や中国側からの意見で、目標とするピークは六九五六メートル峰と落着していた。

しかし実際に登ってみると、やはりコシュクラク氷河に面する稜線上にあるピークにほぼ間違いなく、標高は六八四九メートルと地図上に示されている。そして登頂時の高度計もほぼこの高度にあたるものであった。私見ではあるが、ムスターグ・アタ山群は、大きく主峰（七五四六メートル）、中央峰（七〇二八メートル）、そしてわれわれが初登頂した南峰（六八四九メートル）と名付けられるのではないかと思われる。土地の人々は、中パ公路から顕著に見えるこの三つの頂にそれぞれ独立したピーク名を付けず、全体としてムスターグ・アタとしているだけである。従ってわれわれも、あえて登頂後ピーク名をつけることはしなかった。ちなみに七〇二八メートル峰へは神奈川教員隊（我妻隊長）が、われわれと同時期に登頂している。

登山期間中、降雪はあったものの雪崩を心配するほどのものでもなく、好天に恵まれ続けた。このことが成功の大きな要因ではある

が、何よりも若い隊員達のがんばりがその第一のものであった。全員（総隊長と途中下山の隊員を除いて）による初登頂を目標として計画立案されていたために、より安全策を取ったことで、元気あふれる一部隊員には、トップに出て、新ルートを切り開いて行くという楽しさを味わってもらえなかった。その結果、不満が残ったかもしれないが、全員元気に頂上を踏めたことで納得いく登山であったと言えるのではないだろうか。若い隊員達は、それぞれの思いを熱くして次の山に向って出発して行く。隊員の一人は、そのまま中国に留まって留学し、ある隊員は来年のK2登山隊に参加を決めてその準備に入っているし、他の隊員達も母校の山岳部の監督、コーチとして活躍してくれることと思う。

最後になりましたが、青年部の皆様をはじめ会員諸氏、更に数多くの岳友、又、企業の方々から賜った御力添えに心から感謝致します。そして、この計画は、中国新疆大自然旅行社の全面的な協力を得たことを付記しておきます。張保華、葉江網、李軍充氏をはじめとする皆さんに心からお礼申し上げます。

〈記録概要〉

隊の名称　日本木斯塔格阿塔山群登山隊一九九五年

登山期間　一九九五年七月二十一日～八月二十一日

目　的　ムスターグ・アタ山群六八四九㍍峰の西稜からの全員による初登頂

隊の構成　総隊長＝川上隆（67）
登山隊長＝絹川祥夫（49）
隊員＝矢部大（学習院ＯＢ30）、上大迫淳（防衛大ＯＢ27）、青野達司（法政大23）、椎名厚史（早大24）、佐藤大輔（成蹊大ＯＢ26）、平沢徹（立大22）、中川滋裕（東洋大22）、竹谷大介（東洋大20）

行動概要

七月二十一日成田発北京経由ウルムチ、二十三・二十四日カシュガルにて現地物資調達及び準備。二十六日バシククルにて高所トレーニング。二七日ＢＣ入り。八月二日Ｃ1、ＢＣ～Ｃ1間に仮Ｃ1を設置し、主稜のコルにＣ1を建設。八日Ｃ2、ＰＩを越えてやせ尾根のフィックス工作に三日を要す。主稜上の細い急な尾根上台地にＣ2建設。九日第一次登頂。ドーム状ピークへ続く長い斜面を越えて南によったピーク。十六時三八分、上大迫、青野、佐藤。十日第二次登頂、九日のトレースを辿って順調に登頂。絹川、椎名、平沢、中川、竹谷の五名、十一日Ｃ2よりフィックスを全部回収して仮Ｃ1に一気に下山。十二日ＢＣ。十四日ＢＣよりカラクリ湖。二十日ウルムチにて登山活動終了後、学生達は九月下旬まで中国国内をトレッキング。

報告

『日本木斯塔格阿塔山群登山隊一九九五年報告書』（一九九六年九月）

インド・ヒマラヤ、サラ・シュワ峰登頂

足利工業大学登山隊一九九五の記録

沖　允人

はじめに

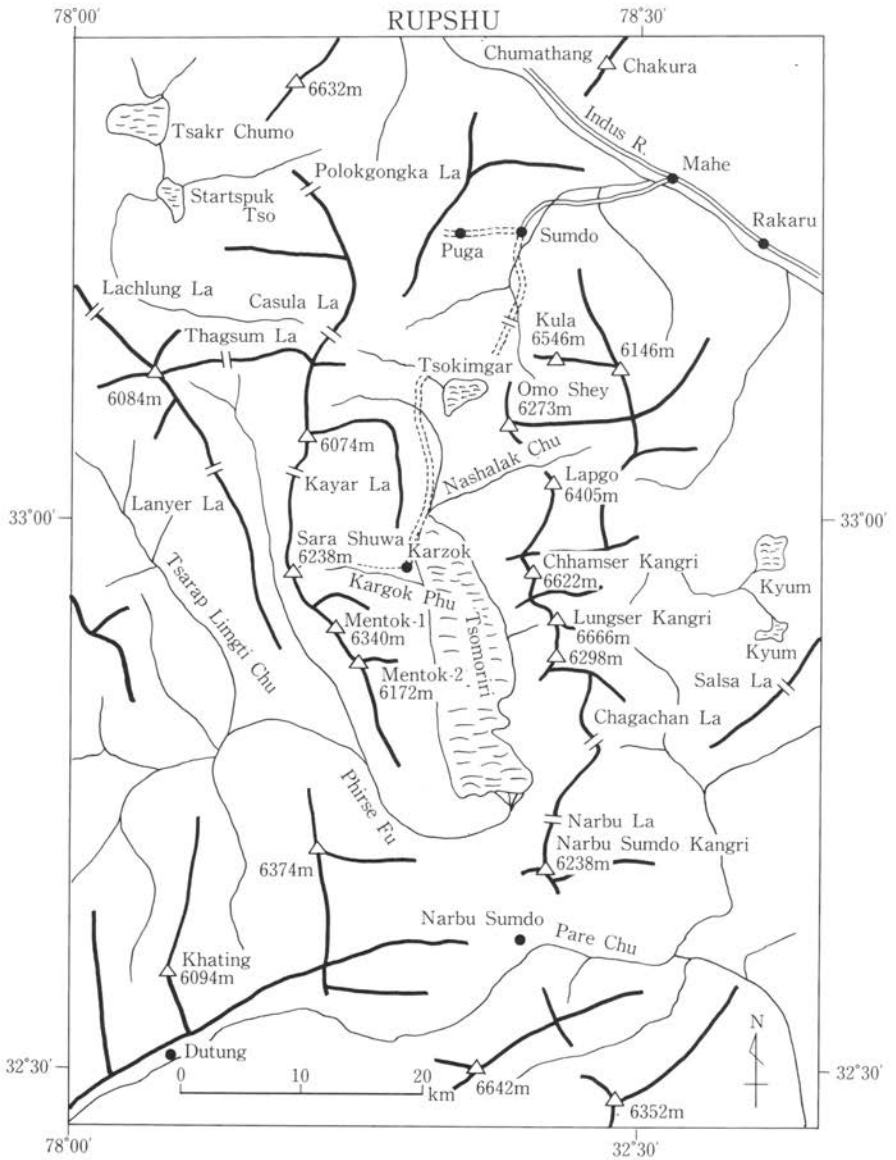
インド北辺境・ラダック地方南東部にある標高約四三〇〇㍍のツォモリリ湖の西側の奥に、山麓の人たちが「サラ・シュワ」と呼んでいる山群がある。「サラ・シュワ」とは「雪の友達」を意味するという。この地域はルプシュ地方またはマングリック地方と呼ばれており、少なくとも二十余りの六〇〇〇㍍を越える山々があり、未踏峰も多い。サラ・シュワ山群は、ほぼ南北に一〇キロほど連なる連山で、上部は万年雪に覆われ、下部は氷河推石の岩石帯で形成され、山麓は夏季の山羊の放牧地となる広大な高原風景を展開している。

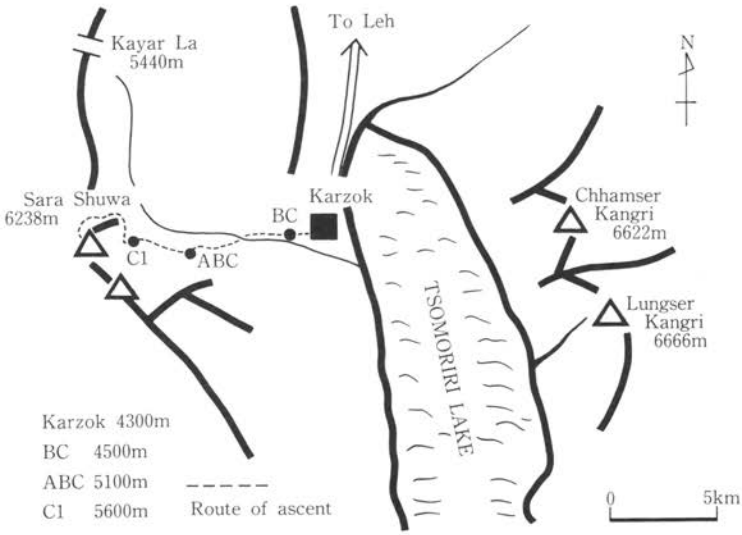
一九九五年八月十六日と十七日の両日にわたり足利工業大学登山隊の六名全員がこの山群の中心となるピーク、推定高度六二三八㍍の無名峰に初登頂し、サラ・シュワ峰（Mt. Sara Shuwa）と名づけた。山岳部の創部二十五年周年記念登山であった。

アプローチ

登山期間を大学の夏期休暇中に設定して登山目標を調査した結果、インド北部の山の数座が候補にあがった。調査をすすめているとき、これまで入域禁止区域であったインド北辺境・ラダック南東部が外国人にも解禁されたというニュースが入り、未知な部分が多く、不安もあったが、未踏の山があり幸運なら初登頂ができるかもしれないとの夢もあってこの山域に的を絞り，約一年間の準備をし、ニューデリーへ向けて出発した。

八月五日にニューデリーを車二台で出発し、タグラン・ラの峠（五三五九㍍）など多くの峠を越え、三日間の旅でラダック地方の首都レー（三五〇〇㍍）に着き、二日ほど滞在し、レーから強行一日のドライブでベース・キャンプ地に着いた。


RUPSHU
78°00′
78°30′
33°00′
32°30′
Chumathang
Chakura
6632m
Tsakr Chumo
Indus R.
Mahe
Polokgongka La
Startspuk Tso
Rakaru
Puga
Sumdo
Lachlung La
Casula La
Kula 6546m
6146m
Thagsum La
Tsokimgar
6084m
Omo Shey 6273m
6074m
Nashalak Chu
Kayar La
Lapgo 6405m
Lanyer La
Sara Shuwa 6238m
Karzok
Chhamser Kangri 6622m
Kyum
Kargok Phu
Tsarap Lungti Chu
Mentok-1 6340m
Tsomoriri
Lungser Kangri 6666m
6298m
Kyum
Mentok-2 6172m
Salsa La
Chagachan La
Phirse Fu
Narbu La
Narbu Sumdo Kangri 6238m
6374m
Narbu Sumdo
Pare Chu
Khating 6094m
N
Dutung
0
10
20
km
6642m
6352m



レーからの道は悪路であるが、インダス川の河原のそばの草原には小犬ほどのマーモットがいたり、黄色の花や紫色のラベンダーが沢山見受けられる。周辺は岩と砂の山また山である。チョルテンの沢山あるチベット系の人々の住む村を通過し、高度四八四五㍍ほどのナムシャン・ラの峠を越えると、しばらくしてツォモリリ湖が見えてくる。湖の水は、かつては、濃い塩水であったと報告されているが、現在はあまり塩辛くない。湖畔にはインド軍のキャンプ（兵舎）があり、軍事訓練用のボートが湖に浮かんでいる。湖のすぐ西側にカルゾック村がある。

カルゾック村はこのあたりでは一番大きく、人々が定住している唯一の村である。村の民家は、少し小高い斜面に五十軒ほどある。一番高いところに大きいゴンパがある。民家はチベット様式の建物が多い。

この地域は、標高が四〇〇〇㍍を越すことに加え、アプローチとなる軍用道路が一部未完成となっているので、ラダックの主都レーからのジープによる接近は容易ではない。特に奥地の道路の整備が極端に悪く、また、ここ二、三年の夏は雨が多く、そのための土砂崩れによる交通遮断がある。

ベース・キャンプ建設

八月十日にカルゾック村の西方の高台に着き、ベース・キャンプ（四五〇〇㍍）を建設した。

十一日にベース・キャンプで隊荷の整理と登山準備をし、十二日、ツォモリリ湖に西から流れ込んでいるカルゾック・プーの川を少し



ツォモリリ湖東側の山々遠望
左奥・ラプゴ（6,405 m）、中央・チャムセル・カンリ（6 622 m）、
右・ルンサール・カンリ（6,666 m）

遡って右岸に渡り、サラ・シュワ峰東面の低い草の生えた広大な斜面を登り、偵察をした。上部への登路は、この斜面を登りきり、モレインの丘を越え、サラ・シュワ峰の東面の中央にのびている雪壁と岩稜の北東稜をとることにした。

十三日に前進基地となるアドヴァンス・ベース・キャンプ（ＡＢＣ・五一〇〇㍍）地点の偵察と馬二頭による荷上げをした。

ＡＢＣ地点は、ベース・キャンプから半日行程で到達できる、かつては氷河であったと思われる斜面を登りきった上部のモレインの下である。以後の荷上げは隊員、ポーター、馬によって行なった。

翌日、ＡＢＣを建設し、第一キャンプ地点（五六〇〇㍍）の偵察をした。第一キャンプは雪壁の取り付きが見えるモレインの中とした。日中は雪解け水が得られ、北東稜の上部終点から南に伸びている頂稜の雪庇を仰ぎ見ることのできる格好のところである。

十五日に第一キャンプを建設した。続いて、頂上への登路偵察および北東稜の困難な岩と雪の壁にルート工作をし、ロープを約五〇〇㍍固定した。この日までに登頂態勢を整えることができた。隊員の体調は良く、五〇〇〇㍍を超す峠を幾つも越え、レーでの準備作業を行ったせいか、血中酸素飽和度、脈拍、血圧などの測定結果も良く、五六〇〇㍍程度の高度には順化していると判断できたので、好天なら短期登頂を決行することとした。

六〇〇〇㍍の高度に未経験の隊員もいたので、救急用酸素も第一キャンプに用意し、サポート態勢も万全を期した。

全員登頂

例年、八月は晴天が続くのだが、一九九五年の夏は天候不順の毎日であったが、幸運にも、十五日夜から好天となり、翌十六日は久し振りの快晴となった。第一次登頂隊の竹沢雄三、高瀬浩紀、A・R・チョウダリ（リエゾン・オフィサー）の三名は、第一キャンプを午前五時四十分に出発し、下部の三〇〇㍍ほどの傾斜約七十度の雪壁を登り、岩稜の基部へ達した。前日のフィックス・ロープを利用し、岩稜に沿って高度を稼ぎ、最後の不安定なガリーを登って岩稜の上に出た。そこから一〇〇㍍ほどの雪壁が頂稜に続いていた。

雪壁を二ピッチほど登ると頂上に続く雪庇のある稜線に達した。稜線は第一キャンプから望遠鏡で偵察したときの感じより容易であった。雪庇は東に大きく張り出していたが、幸いに反対側は比較的傾斜の緩い雪の斜面となっていた。一時間ほど頂稜を進み、午前十時五十五分に岩と雪の頂上に達した。

その夜はABCまで下山して泊まった。この日、第二次登頂隊（沖允人、安間義之、松崎高志）はベース・キャンプから第一キャンプへ入り、登頂隊を支援した。

翌日、第一キャンプから第二次登頂隊が午前三時に出発し、午前九時に登頂した。お昼前から小雪がちらつく天気となったが、悪天候に巻き込まれる前に第一キャンプに帰り着き、サポートの隊員やポーターと共に第一キャンプを撤収してABCへ下った。

十八日に全員ベース・キャンプへ下山し、二日間で隊荷の整理をし、二十一日、ベース・キャンプを車で出発し、帰国の途についた。

おわりに

資金不足、天候不順、道路の決壊、馬方とのトラブルなど多くの困難があったが、ともかく、多くの方々のご協力のお蔭で何とか初期の目的を達成することができた。隊員一同、一九九五年八月の登山の日々を、初登頂の感激を、無事帰国を喜んでくださった方々の笑顔を、決して忘れることはないであろう。心から感謝申し上げたい。

付記

ツォモリリ湖周辺で一九九五年八月までに登頂されたサラ・シュワ以外の山々は、一九九五年六月のボンベイのカパディア（H. Kapadia）隊によるカルゾックの村から湖の対岸に眺められるこの周辺の最高峰であるルンサール・カンリ（Lungser Kangri）（六六六六㍍）、その北に続くチャムセル・カンリ（Chhamser Kangri）（六六二二㍍）、とラプゴ（Lapgo）（六四〇五㍍）の三山、そして、一九八四年にインドのバタチャルジー（R. Bhattacharji）隊によって登頂されたサラ・シュワの南にあるメントーク（Mentok またはMata）Ⅱ峰（六一七二㍍）がある。メントークⅠ峰（六三四〇㍍）は一九八四年と九五年にインド隊が試登したにとどまっている。その他の山々の登山記録はない。山名はいずれもローカル・ネームで、地図上は無名峰である。なお、インドと中国国境に横たわる長大なパンゴン湖とその周辺も一九九四年から特別許可を取得すれば一般の旅行ができるようになっている。

〈記録概要〉

隊の名称　足利工業大学山岳部・OB会インドヒマラヤ学術登山隊一九九五

活動期間　一九九五年七月三十日～八月三十一日

目　的　サラ・シュワ峰（六二三八㍍）の初登頂、周辺地域における学術調査

隊の構成　隊長＝沖允人（60）（足利工大教授）、副隊長＝竹沢雄三（53）、登攀隊長＝高瀬浩紀（22）、隊員＝安間義之（40）、隊員＝松崎高志（19）、インド政府連絡官＝A・R・チョウダリ、ポーター他七名

行動概要　七月三十日先発隊（高瀬・安間・松崎）成田発、八月三日本隊（沖・竹沢）成田発、八月五日デリー発。レーで入域許可取得、八月十日ツォモリリ湖西側のカルゾック村西方に着き、ベース・キャンプを建設、八月十一日ベース・キャンプで隊荷の整理と登山準備、八月十二日上部への登路（北東稜）偵察、八月十三日、アドヴァンス・ベース・キャンプ（ABC）地点偵察と荷上げ、八月十四日ABC建設と第一キャンプ地点偵察、八月十五日第一キャンプ建設と頂上への登路偵察およびルート工作、八月十六日第一キャンプから第一次登頂（竹沢・高瀬・チョウドリ）、ABCへ下山、第二次登頂隊（沖・安間・松崎）がベース・キャンプから第一キャンプへ入る、八月十七日第一キャンプから第二次登頂し、ABCへ下山、八月十八日全員ベース・キャンプへ下山。八月十九日―二十日ベース・キャンプで隊荷の整理、八月二十一日ベース・キャンプを車で出発、マナリで滞在後、二十四日デリー着、八月二十五日関係官庁等に登山報告後、八月三十一日から九月初旬にかけて成田帰着。

報告

一、沖允人…スピティ／ラダック解禁地区を走破、インド・中国国境にまたがる湖、『ヒマラヤ』、二七七号、一～十一頁、一九九四年十二月

二、登山隊編（公式報告書）…『サラ・シュワ初登頂』、一九九五年十二月五日、足利工業大学、自費出版

三、沖允人…インド・南東ラダックルプシュ地方、サラ・シュワ峰初登頂、『ヒマラヤ』、二九二号、一～一五頁、一九九六年三月

トゥインズ初登頂

——東京農業大学山岳会一九九五年の記録

谷川太郎

はじめに

一九九五年十月十六日、東京農業大学・ネパール警察ギヴィゲラ峰（トゥインズ）合同登山隊はギヴィゲラ七三五〇㍍の登頂に成功した。私達農大山岳部にとって、三十二年間の長きにわたって先輩から後輩へ伝えられ、温め続けられた宿願の頂であった。

一九六三年、農大山岳会は初めての海外登山隊をトゥインズへ送り出した。宮沢憲隊長以下六名のメンバーは、ネパール側よりこの山に挑み、七〇〇〇㍍に達したものの、モンスーンの到来による悪天候のため、初登頂を果たすことはできなかった。その後、中印国境紛争のため、トゥインズは外国人立入禁止区域となり、再挑戦の機会を得ることができぬままとなっていた。

一九八六年の崑崙山脈七一六七㍍峰以来、八九年ナンガ・パルバット、九一年ブロードピーク、九三年ガッシャーブルムⅡ峰と継続された農大山岳会の海外登山のエネルギーの源には、常に、一九六三年に登り得なかったトゥインズがあった。

一九九三年、明治学院大学山岳会がインドのシッキム州からトゥインズの登山許可を取得した。農大山岳会から、当時、山岳部監督をつとめていた佐藤正倫と谷川の二名が参加した。しかし、アタック時、佐藤が頂上真近の約七〇〇〇㍍附近のクレバスに転落、死亡するという結果に終わってしまった。

崑崙山脈七一六七㍍峰に始まる近年の農大山岳会のヒマラヤ登山の間に、私達は内外の山で四名の仲間を失なっている。早坂敬二郎、馬場哲也、中嶋真也、そして佐藤正倫である。彼ら四名は、一九六三年のトゥインズに始まる農大山岳会のヒマラヤへの夢を継続させ、実現させた中核メンバーであった。三人の後を追うように、佐藤が逝った山がトゥインズであることに、私達は深い因縁を感ぜずにはいられなかった。一九九四年春、私達は三十年振りにトゥイン

ズを目指すために、ネパール政府に対して、登山許可を得るための働きかけを始めた。

ネパールでは依然としてトゥインズは未解禁の山であった。延べ八回にもわたる山下のカトマンズ訪問と、現地でトランス・ヒマラヤン・ツアー社を経営する宮原巍氏をはじめとする内外の多くの方々の御助力のおかげで、ネパール警察との合同という形で、一九九五年一月に登山許可を得ることができた。因みに、トゥインズのネパールでの正式名称は「ギヴィゲラ」となっている。

計画について

今回の私達の目的は、三十二年来の宿願であるこの山の頂上に立つ事が最大のものであったが、もう一つ大きな目的として、九三年の秋以来、頂上間近のクレバスに眠る佐藤正倫の捜索があった。頂上へのアタックキャンプをC3とし、その後の捜索のために頂上直下とシッキム側の事故現場付近にキャンプを設ける予定で、合計五つの前進キャンプを作る計画を立案した。

隊の構成は、日本人隊員、山下康成総隊長以下十一名、ネパール隊員五名、高所ポーター十二名、キッチンスタッフ六名、メールランナー二名、リエゾンオフィサー、無線技師各一名の総勢三十八名であった。

ベースキャンプまで

九月十七日、ネパール警察の盛大なセレモニーに見送られ、トラック二台とバス一台で大半の隊荷と先発メンバーが陸路バサンタプールへ向かった。通常は、私達のベースキャンプ予定地であり、カンチェンジュンガ北面のベースキャンプとして知られているパンペマ（五一〇〇メートル）へは、ロードヘッドのバサンタプールか、あるいは空港のあるタプレジュンから十日～十五日以上のキャラバンをしなくてはならないのだが、今回私達はバサンタプールまで隊荷をトラックで輸送し、そこから最奥の村であるグンサまでロシア製の大型ヘリコプターのシャトルで運ぶ計画を立てた。しかし、九月七日、カトマンズよりバサンタプールを目指したヘリコプターは、上空の視界不良のためヘリポートが発見できず、ダンクッタに着陸。まだモンスーンが明けきらず、雲のかかりやすいバサンタプールからの離発着はむずかしいと判断し、より平野部に近く、雲の少ないダンクッタからグンサへの輸送へ切りかえることになった。すでにバサンタプールで待機していたトラック二台とバス一台は再びダンクッタまで戻り、九月十一日よりグンサへ向けてのヘリコプターシャトル輸送が始められた。うまくいけば一日で、と思っていたが、天候の影響で五往復に都合四日間かかった。しかし、雨期であるこの時期の、標高の低い地域でのキャラバンから解放され、登山そのものに体力と時間を温存することができた点で非常に有効であった。

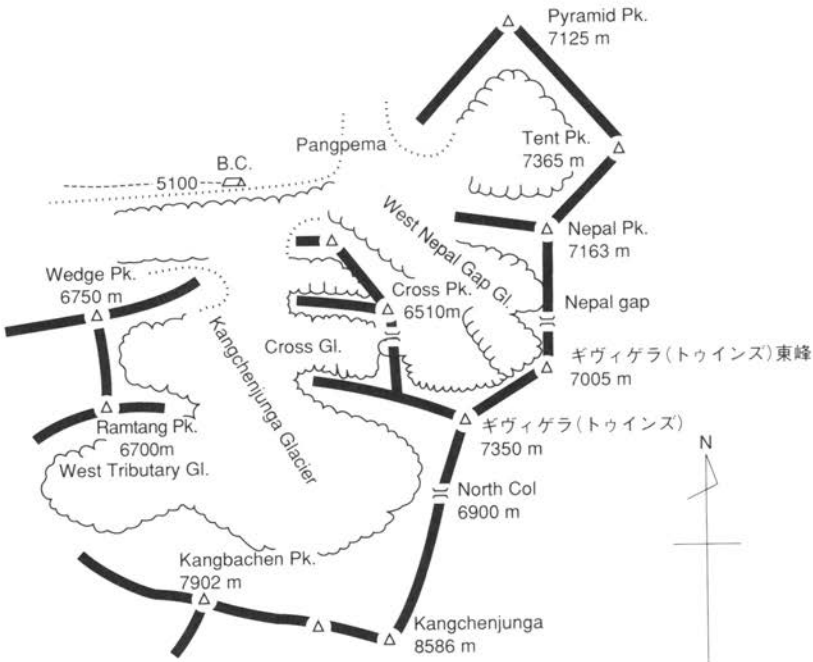
グンサからのキャラバンは九月十五日に始まった。輸送の主力は、この地方に豊富なヤクで行なわれ、ネパール警察主導のもとカンバチェン、ロナーク、BCとスムーズに三日間で到着。日本人メンバーは高度順応を図りながら九月二十日、全員がBCに到着した。

ルート決定まで

カンチェンジュンガとトゥインズを正面にのぞむパンペマにベースキャンプを建設した私達は、九月二十一、二十二日を登路の偵察に割いた。

まず第一の候補と考えていたのは、頂上からカンチェンジュンガ氷河へとまっすぐ伸びる西稜を末端から辿るものであった。六三年の遠征は、西稜の末端にある岩壁帯を突破するだけの時間的、物量的な余裕がなかったため、ルートにはとらなかった。写真で見る限り雪崩の危険が少なく、頂上への最短距離を行くすっきりしたルートに思われた。偵察の結果、末端の岩壁帯は、技術的にはそれ程困難には見えなかったが、赤茶色のいかにももろそうな岩で、なおかつ上部には今にも崩れ出しそうなセラックがひっかかっているという状態だったために、大人数での極地法登山には不向きであると結論した。次にウェスト・ネパール・ギャップ氷河に入り、北面からトゥインズとクロス・ピークのコルに出る登路はないかと偵察したが、氷河の状態が悪く、こちらも見送られた。

最終的に私達が採用したルートは、西面からクロス・ピークとトゥインズの間に分け入っているクロス氷河をつめて、トゥインズ・クロス・ピーク間のコルを経て、西稜の上部に出るというもので、六三年の隊とまったく同一のものであった。六三年当時で七〇〇〇mまで達しているので、これが最も可能性が高いことは当初からわかりきっていたことであったが、当時のメンバーから、コルへ上がるルンゼの真上に巨大なセラックがあり、もしそれが崩れたら



ひとたまりもない、との指摘があったために敬遠されていた。結局、他のルートと比較して最も危険性が少ない、ということでこのルートから頂上を目指すことになり、C1をクロス氷河の五六〇〇㍍地点に建設した。

登山活動

九月二十三日よりC1への荷上げが開始され、二十六日に、前日C1へ入った谷川、長久保、吉田の三名でC2へのルート工作を始めた。懸案事項であったコルへの入口に立ちはだかる不気味なセラックを避けるため、クロス・ピーク側の岩壁に取り付き、弱点をぬうように右上。問題のセラックと同高度まで登って右へトラバースし、コルから直接落ちるルンゼに入り、それを直上した。この部分は、工作に三日を予定していたが、弱点をつないだ容易なルートを発見したことにより、一日でコルまで到達することができた。

翌日は同じメンバーでコル上に広がる大プラトーをラッセルし、トゥインズ西稜上部に続く雪壁の取付に近い、六一〇〇㍍をC2予定地とした。

C2決定の翌日、沼野、広瀬以下八名がC1へ入り荷上げにそなえたが、九月二十九日は夜半から降雪があり、C1では約三〇㌢の積雪となった。雪崩の危険を考慮し、その日の行動を控えた。BCに入って以来、まだ残るモンスーンの影響と思われる、あまりすっきりとしない天気が続いていたが、悪天候による停滞は、これが初めてであった。しかし、翌三十日からは雲ひとつない快晴が続くようになり、モンスーンが明けたことがはっきりと感じられた。

十月二日、C2より始まる雪壁を一気に十八ピッチ工作し、西稜上に飛び出した。標高は六七〇〇㍍。稜線直下に三十二年前の最終キャンプ地と思われる絶好のキャンプサイトがあったので、少々C2から近すぎる気もしたがC3予定地とした。一旦C1へ下って休養した工作パーティーは十月七日C3を建設。翌日から西稜上を頂上へ向かって工作を開始した。西稜は、極端に難しい箇所こそないものの、全体を通して細いナイフエッジが続く気の抜けないルートであった。ただし雪の状態はとても良く、空中に浮かんでいるような両側がスッパリと切れ落ちた抜群の高度感を充分に堪能することができた。工作パーティーは二日間で三十四ピッチの工作を快調にすませ、頂上直下二ピッチを残しBCへ下降した。まだC3への順化がすすんでいないネパール人隊員と、次のステージで一緒に頂上に立とうという配慮からである。工作パーティーがC3より上部へルートを延ばしている間に、小笠原以下のメンバーによって、頂上アタックとその後の捜索活動に必要な約四〇〇㌔の荷物が全てC3に荷上げされ、アタック態勢が整った。

アタックを前に全員がBCに集結し、今後の活動について最終的なミーティングが行なわれた。当初の計画では、アタック後、C4、C5を作り、佐藤を捜索、収容し、BCまで搬出する、というものであった。それゆえに頂上直下まで延々とフィックス・ロープを張り続け、十二人ものシェルパを雇用したのである。登り一辺倒の通常のヒマラヤ登山と違い、頂上の向こう側へ下り、滞在することにはかなりのリスクが感じられた。天候の急変や体調が悪化した場合に身動きがとれなくなることも考えられる。さらに、七〇〇〇㍍を

越える高さで、捜索や搬出といった重労働がどこまで出来るのか、シェルパはそうした作業にどこまで協力してくれるのか、など計画そのものに対しての疑問も常に頭から離れることはなく、日本での準備期間中から何度となく隊員間で議論されていた。

しかし実際には、六七〇〇㍍からたどる西稜が思っていた以上に細いナイフリッジが続き、小さいアップダウンも多く、水平距離も長いという悪条件が重なり、搬出はとても無理だと判断せざるをえなかった。

最終的には、頂上直下にC4を作り、そこから、ともかく佐藤が眠るクレバスまで行く、ということで方針が決定された。

十月十五日、第一次アタック隊がC3に入ったが、この日の昼前からすじ状の雲が高層に見られるようになり、十月に入ってから続いていた好天に変化の兆しがうかがわれた。翌十六日、夜半から吹いていた強風は朝になって弱まり、アタック隊は五時三十分、C3を出発した。登頂後にC4を建設するため、各自十㌔程度の荷を背負ってのアタックとなった。C3から稜線上に固定されたロープを忠実にたどり、C4予定地の七二〇〇㍍に一旦全員が集まった。その後、ネパール側のクライミングリーダーであるギーダー・B・ジョシー氏を先頭に、十一時二十分、快晴の山頂に立った。谷川、長久保、吉田、ネパール隊員二名、シェルパ六名の合計十一名である。ネパール人メンバーは口々に歓声を上げ、大声で歌い、ここまで持ち上げたタルチョーを揺揺と風になびかせた。日本人メンバーは、トゥインズへの夢を果たすことなく逝った早坂以下四名の写真を頂上の雪の中に埋め、冥福を祈った。

登頂後、谷川以下三名の日本人メンバーは七二〇〇㍍のC4に入り、他のネパール人メンバーはC2へ下った。そして第二次アタック隊が入れかわりにC3へ入った。十月十七日、昨夜半から西風が今までになく強く吹き始め、頂上からシッキム側に強風による雲が大きく張り出していた。ネパール側は視界には問題がないので、強風をついて第二次アタック隊がC3を出発した。間断なく吹き続く強風の中、ネパール人メンバー四名が途中で引き返したが、小笠原、小林、沼野、広瀬の四名とシェルパ二名が頂上に立った。

その間、昨夜C4に泊まった三名は、朝一番で頂上を越え佐藤の眠るクレバスへ向かった。頂上から東側の斜面は、ネパール側とはうって変って雪が吹きだまり、雪崩の危険が感じられた。視界がきかない濃いガスの中、安全とルート確保のために頂上からロープを固定しながら下っていった。時々開けるガスの切れ目に見覚えのあるセラックを発見し、三年前の事故現場を確認することができた。手持ちのロープ十四本を固定し終わった時点でガスは極端に濃くなり、一歩先の状態も判然としない程になったので、その日の行動を打ち切り、再び頂上を越えC4に戻った。

この夜はC4に四名が残り、もう一度捜索活動を行なう予定であった。しかし翌十八日も強風が吹き続き、最も風当りの強いC3は天幕三張がつぶされ、完全装備のまま朝をむかえるという状態であった。

協議の結果、捜索活動を打ち切り、強風の中、全員が下山した。

この後、仕事の都合で一人遅れて入山した小池他の第三次アタックを予定したが、強風は吹きやむことがなく、十月二十二日には上

部キャンプを撤収し登山活動を終了した。

〈記録概要〉

隊の名称　東京農業大学山岳会・ネパール警察ギヴィゲラ峰（トゥインズ）合同登山隊一九九五

活動期間　一九九五年九月～十月

目　的　①ギヴィゲラ（トゥインズ）の登頂
②佐藤正倫の捜索

隊の構成　総隊長＝山下康成（56）、日本側チーム・リーダー＝小笠原岩雄（42）、日本側クライミング・リーダー＝谷川太郎（28）、隊員＝元吉仁志（42）、小林新二（38）、小池英雄（36）、沼野幸正（30）、長久保浩司（26）、広瀬健太（25）、吉田裕一（24）、医師＝砂子由美（31）
ネパール側チーム・リーダー＝グプタ・バハドゥール・ラナ（50）、ネパール側クライミングリーダー＝ギーター・バハドゥール・ジョシー　隊員＝ラームカジ・シワコティ、フル・バハドゥール・ライ、サンタ・バハドゥール・アレ、サーダー＝ミンマ・テンジン、高所ポーター十二名

行動概要　八月二十三日先発隊、九月二日本隊カトマンズ入り、九月二十日BC集結、九月二十四日C1（五六〇〇㍍）建設、十月一日C2（六一〇〇㍍）建設、十月七日C3（六七〇〇㍍）建設、十月十六日隊員五名とシェルパ六名が登頂、十月十七日隊員四名とシェルパ二名が登頂、十月二十六日BCを撤収、十一月下旬全隊員帰国。

報　告　『山と渓谷』七二六号（一九九六年一月）『岳人』五八三号（一九九六年一月号）報告書、一九九七年五月刊行予定



ウルタルⅡ峰初登頂

―東海支部登山隊一九九六

松岡清司

憧憬の南東ピラー

六月二十二日昼過ぎ、我々はコックとリエゾンと共にナガール目指し、おんぼろのSUZUKIにしがみついていた。今日は遂に目標のウルタルⅡ峰南東ピラーをこの目で見ることができると思うと、ハッサナバードBCから帰ったばかりの疲れもふっとぶ。アリアバードから見る何とも見映えのしないウルタルと違い、写真以上に素晴らしいピラーだろう。

車は広い河原のモレーン沿いの道から、急傾斜のガケ道に入っていく。途中流水により道が一部決壊していた。こんなところ通れるのかと思っていると、車はためらわず、勢いをつけ、流水に突っ込んだ。が、水の一番深いところで止まってしまう。乗客全員で膝まで漬かり車を押し出す。何とこの小さな軽トラックに10人以上も乗っていたのには驚いた。水から出ると、車はそのまま客を待たずに走っていってしまった。ボウ然と見送る。仕方無く靴を履き他の乗客と一緒に小走りに道を走った。するとあっという間に車に追いついた。この急傾斜では、オンボロはたいしたスピードが出ない。更に客が追いつき乗り込み始めると、人の歩くスピードより遅くなってしまう。このオンボロは一体何キロ走っているのだろう。まったくこの人たちには恐れ入る。

斜面を登りきり、アプリコットと大麻の生い茂る緑地帯に入った。車は、下りになったデコボコ道を今にも壊れそうにガタガタとスピードを上げ始めた。突然ポプラの樹々の隙間から圧倒的な垂壁が目に飛び込んできた。ゴールデンピーク（ピラー）、スパンティークの北面のようだ。あまりにもすっきりした、素晴らしい壁だ。「ウルタルの次はあれだな」などと思いながら、SUZUKIの屋根からの景色を楽しむ。

ナガールに近づくと左手に、とうとうウルタルⅡ峰の南東ピラー

が見え始めた。午後二時すぎ、楽しいドライブを終え、ナガールに到着。ここからではよく見えないので、穀潰しリエゾンを置いて、対岸の丘にコックと三人で登った。三十分程登り双眼鏡で南東ピラーを観察する。遂にこの目で見た。ここからでは上半分しか見ることができないが、予想以上に美しく圧倒的な迫力で山頂へ一気にせり上がっていた。期待以上に素晴らしいこのピラーに目が釘付けになる。

僕はすっかり魅了され、興奮しながら観察する。そして観察すればするほど、不安や恐怖が頭をもたげ始める。リッジ通りに登れば雪崩の危険はさほどないように思われた。しかし、技術的にはかなりの困難が予想できた。しかも写真で見るかぎり技術的な核心部と思われる下半分は見えていないのだ。

観察の結果、成功の可能性はかなり低く思えた。頭の中も、期待と興奮から、不安と恐怖に変わっていく。しかし、こんなのいつものことだ。不安と恐怖を押さえ込み、行動する時の快感を味わいたくてクライミングをしているのだ。時には不安と恐怖に負け、行動を止めてしまう時もある。そして、完登する自信はないが、生きて還る自信はあった。根拠などないが一%でも可能性があれば取りつく価値はある。

山崎さんは早々と他のルートへの転進をほのめかしだした。僕は聞こえぬふりをして下りにかかった。約束の時間にナガールの茶店の前に行き、SUZUKIに乗りアリアバードへ向かった。そんな彼に反発するように僕は「絶対に南東ピラーへ取り付く」と思った。そのときはウルタルⅡ峰の初登頂よりも、南東ピラーに取りつく事の方が僕には重要だった。

翌日、星野清隆氏とちょっぴり関係のあった我々はお墓参りを兼ねて、ウータンクラブBCへ偵察に行った。複雑なルンゼとリッジに覆われた下部をつぶさに観察する。雪崩、落石の危険は噂に聞いていたほどではない。複雑ではあるが、登攀ラインは明瞭だ。

山崎さんが突然に「松岡、これを登るしかないぞ。」遂にきたか！今まで変化球でコーナーをついていたのが、突然ド真中の直球を投げ込まれた。そんな気がした。なんのこっちゃ。

その場では生返事をして、双眼鏡を覗き続けた。確かにここを登った方が登頂の可能性は高い。しかし、僕は南東ピラーを登りに来たのだ。目標を変えるということは、屏風岩を登りに行って、岳沢から前穂へ登頂するようなものだ。

初登頂の三文字になど惑わされずもっと純粋な気持ちで取りつかなければならない。そう思った。しかしこの頃から、未踏峰の三文字が、初登頂という勲章が頭の中をチラつき始めていたのも確かだった。ホテルへ帰る道中その事ばかりを考えていた。山崎さんもそれを察してか、ほとんど僕に話し掛けなかった。

夜、当然のことながらルートについて話し合った。僕は「敗退してもいいから南東ピラーに取りつきたい」そう真剣に言った。

「何言ってんだ」山崎さんは一笑に付した。僕の気持ちは理解してもらえなかったようだ。腹も立ったが、彼の気持ちはもう完全に南西稜へ行っていることが読み取れた。もう僕は彼を言い負かすことはできないだろう。それと同時に南東ピラーを諦める言い訳を必死になって探しているとても醜い自分も発見した。「南東ピラーを

目指したが、自分にはどうしようもない理由により諦めざるをえなかった」そうして自分を守ろうとしている、初登頂という勲章が欲しいがために。

幸い南東ピラーへはアプローチが長く我々の手持ちの現金では足りないことが判明し、実はギリギリなんとか足りたのだが、その事を理由に南西稜への転進を決意した。

山崎さんに「金が足りねえんじゃしょうがねェな」などと言った。とても自分が情けなかった。そしてホッとしたような、安心したような不思議な気分でもあった。芸術家が金欲しさに売れ筋を狙って作品を作るときは、こんな気分ではないのだろうか。

こうして我々の登攀ルートは決定した。

憧れの南東ピラーを諦めて。

出　発

六月三十日、アタック準備を整えた我々は荷上げを手伝ってくれたシャガリープと共に、降りしきる雪の中、休養の為ベースキャンプへ向かって下山していた。時折ガスの切れ間から、我々の小さなベースキャンプが見え隠れする。

次にＡＢＣへ上がる時は我々二人だけ、いよいよアタックの時だ。もうパキスタン入国から一カ月がたとうとしていた。待ち望んでいたアタックを目前にして、興奮を押さえ切れない。山崎さんも同様、興奮の臭いを隠しきれずに辺りに漂わせている。あとは連日の荷上げとフィックス工作でちょっぴり疲れたこの体を休めるだけだ。

翌朝、明日（七月二日）ＡＢＣへ上がる事を認め合い、思い思いに時を過ごす。いやがおうにも緊張が我々を包み、極端に口数が減る。僕と同様に山崎さんも誰とも喋らない。そんな彼を見て、奴も人間だ、などと思い少しホッとした。そんな我々の気配を察して、コックのイスラームは「Ｙｅｓ」か「Ｎｏ」しか言わない我々に、チャイやポテトチップスを心配そうな顔をして持ってきてくれる。昼には凝った中華料理も振舞ってくれた。

一方、鈍感で気のきかない愛すべき穀潰し・我々のリエゾンオフィサー、モルタザは、いつもの様に日本語のレッスンの為僕のテントにやって来た。英語を紙に書き、日本語に訳してくれと注文してくる。僕は完全にシカトを決め込んだ。

夜はにわとりを一羽潰し、豪華なディナーを腹に収めた。

明日は早朝の出発を確認し、それぞれの寝床へ向かった。なかなか寝つけない僕は、シュラフから這い出てテントの外へ出た。月光が煌々と照らす中、草の上にごろりと横になった。月は完璧な円を僕に見せつけた。満月の夜にアタックをする予定だった事を思い出し、自分の考えが甘かった事を反省した。満月の夜にアタックを開始し、登り続け、ごく短時間の内にベースへ帰ろうと思っていた。しかし今僕らが取付こうとしているウルタルという山は、僕らの力で短期間の内に登り切れる程生易しい相手ではない。複雑な岩稜、危うい懸垂氷河、下からではルートの全容を見ることさえできない。かなり時間がかかると判断した。食料も大幅に増やし七日分、燃料は八日分用意した。荷上げの為のユマールも一つ持っていく事にした。

下部は雪崩の危険があるため、夜間に行動するが、当初思ってい

た夜間登攀とはだいぶ意味が違うように思えた。自分の力の無さを恥じた。

それと同時に冷静に自分を見つめることのできる自分にちょっぴり満足もした。

そんな事を考えながらテントに戻り、眠りについた。

七月二日早朝、我々の小さなキッチン・テントに潜り込む。お決まりの朝食のチャイとチャパティーを黙々と食べる。イスラームは大変な気のつかいようで、我々はじっとして彼の差し出す物をただ受け取っていればよかった。外に出て、靴を履き、出発準備を整える。

僕は余計な事を考えずにただ目の前の事に集中しようとだけ思った。

いよいよ出発だ。イスラームが心配そうな顔をして「インシャアラ」と見送ってくれた。そんな彼と堅い握手を交わし、ウルタル氷河へと向かった。氷河を横断し、ゴルジュの中へ入る。そして、左の壁に食い込むガレたルンゼへ進む。何度か雨宿りに使った岩小屋を通り過ぎ、ジャスミンの生い茂る斜面へ出た。花が辺りでちらほらと咲き始めていた。そこで休憩し、久し振りに山崎さんと言葉を交わした。

荷物は全てＡＢＣへ上げてある。ほとんど空荷の状態で快調なペースでここまで上がってきたが、何も焦る必要はない。今日はＡＢＣに着きさえすればいいのだ。そんな事を思うと周りの山々に目がいき始めた。ここからでは台形で何とも見栄えのしないレディースフィンガー、意外に立派な壁を持つフンザピーク、フンザの対岸に、偉そうにいつも我々を睨み付けているディラン、フンザの象徴ともいえるラカポシも見え始めた。そんな景色を見ながら、好きなことを心ゆくまでやれる幸せを感じた。

朝陽が斜面を照らし始めた。僕と山崎さんはジャスミンがほのかに香る中、ゆっくりと一歩一歩確かめるようにしてＡＢＣへ向かった。

山頂へ

七月三日午前零時、眠い目を擦りながらシュラフから這い出る。ストーブに火を付け湯を沸かす。熱い紅茶をすすりながら外の天気を窺う。雲一つ無い空に月が眩しいくらい輝いている。

絶好のコンディションの下、午前二時にＡＢＣを後にする。前回の降雪でトレースが消え、いきなり膝までのラッセルを強いられる。焦ってペースを乱す。落ち着いていつものリズムを取り戻す様自分に言い聞かせる。徐々にいつもの調子を取り戻す。交替でラッセルをして一時間程でフィックスに辿り着く。山崎さんが先頭でフィックスを伝い、岩場のトラバースを開始した。五日前張ったばかりのダンラインを思い出すように辿った。トラバースを終え、上に向かい細いルンゼを行く、最後のフィックス・ロープを過ぎ、いよいよ本流の大きなルンゼへ入る。雪崩により雪面が堅く締まっており、クレヴァスの危険が無いと判断し、ロープはザックに入れたまま思い思いに稜線目指して登った。

日が登っても正午までは雪崩は起こらない。焦る必要はないと自分に言い聞かせて、逸る気持ちを押さえ、一歩一歩確実に進んだ。

登攀ルート図

1996.7.11 6:45a.m・初登頂
ウルタルII峰(7388m)



※標高は高度計にて測定

アゼインの前爪が適度にくい込み快調に登り続けた。

辺りが明るくなり順調に稜線を目指した。登るにつれ、雪面は傾斜を増し所々きれいなブルーアイスが見え始めた。ロープが欲しいくらいになってきたが一気に稜線目指して登った。

最後のキノコ雪を山崎は右、僕は左から乗り越した。午前八時、南西稜上に飛び出した。雪面は腐り始め、アイゼンに団子のように雪がつき始めた。

今日はここまでとし、テントを張り上部を窺う。ここから見る限りでは懸垂氷河の突破は右寄り以外は可能性が無いと判断した。

少々悪そうに見えるが右の岩稜をラインに取ることにし、テントの中で眠った。灼熱の太陽の下、我々のテントは燃えるように熱くなり、裸同然のかっこうで無理矢理目を閉じ時間を過ごした。

日が沈み、涼しくなった午後九時、シュラフから這い出て食事にとりかかる。そして、十一時、月光が壁を照らすのを待って出発する。

予定通り、右の岩稜を辿るが、雪のルンゼは狭いガリーとなり、チムニーとなった。予想以上に悪く時間がかかる為一ピッチ下降し、左の少し大きなルンゼに入りなおす。雪のすぐ下は堅いブルーアイスとなっていて、時間がかかる。辺りはとっくに明るくなり、焦り始める。

時にはブルーアイス、時にはスラブにガリガリとアイゼンを軋ませ数ピッチ進むが、あまりの悪さにこのラインを諦め五〇メートル程下がり、左へ大きくトラバースした。空中に飛び出したテラスに到着し、一息つく。既に午後二時を回ろうとしている。今日はここまでとし、テントを張る。ここからだと懸垂氷河の下で右へ大きくトラバースしなければならない。それとも左へ回り込み弱点を探すか、話し合ったが結論が出ぬまま寝入ってしまった。

七月五日午前二時、目を覚ますが、外は雪。様子を見ることにし、またシュラフに潜り込んだ。明け方再び目を覚ますと、辺りで雷の音が鳴り響いている。ビリビリ、突然我々の体に電気が走った。

二人とも焦りまくり、急いでポールを外し、まるで亀の様に地面にへばりついた。ジーッと身動き一つせずただひたすら待った。時刻は昼近くになった。相変わらず辺りで雷の音が鳴り響く。すると一際大きな音が鳴り響いた。雷とは違う、懸垂氷河の崩壊だ。辺りに氷塊が唸りをあげて落ちてくる。幸い僕らのテントは垂壁の下なので直撃はまぬがれた。

夕方ようやく雪がやみ空に晴れ間が見え始めた。食事の準備を始め、さっき崩壊した氷河を見た。聞いてびっくり見てびっくり。何と今までハングしていて一〇〇%突破不可能と思っていたところが欠け落ちて、傾斜のゆるい氷壁になっていた。あそこなら突破できそうだ。夜八時、神の恵みとしか思えない崩壊の跡を目指して出発した。相変わらず悪いミックスの登攀を繰り返し、ようやく懸垂氷河の舌端にやってきた。八〇度ほどの氷壁を越え、さらに抜け口がハングした段を越しにかかる。抜け口は一メートルほど雪が積もっていてアックスが決まらない雪にチョップを繰り返し、なんとか乗り越した。スクリューをねじこみ山崎さんを迎える。順調にここまでやって来たが、ここから七メートル程はハングしておりかなりの困難が予想された。空荷で何度かトライしたがアックスが抜け、その度にぶち落

ちた。やっぱりジェフ・ロウはすごいな、などと思った。

いったん下降し他のラインを登り直すことも考えたが、トップを交替し空荷で山崎さんがトライすることにした。順調に進むがやはり同じ所で行き詰まり、動きが止まる。そこでさっき思いついたが行動に移せなかった案を彼に告げる。恨めしそうな顔をして、縦に割れたクレヴァス目指してトラバースを始めた。そして、氷を砕きクレヴァスの中に入っていった。氷越しに彼の影が見える。本当にやりやがった。さすがは我らの隊長だ！　彼が薄い氷の手前で躊躇している。とうとう泣きを入れてきた。「大丈夫だよ、行ける行ける！」僕は無責任にも言い放った。また恨めしそうな顔でこっちを見、恐る恐る薄氷の上を登り始めた。ロープの流れが止まり、フォローを始めた。クレヴァスの中は夢のようにきれいで、そして恐ろしかった。直径一メートル程の氷柱が出口に向かっている。どうやらこれを登ったようだ。フォローといえど恐ろしい。いつ崩れるかと思いながらヒヤヒヤしながら登る。背中の荷物に邪魔されながらも何とかビレイ点に辿り着いた。何とも不安定な氷のテラスでビレイしている山崎さんにちょっぴり罪悪感を持っていた僕は「あんたはすごい」などと言い、そのまま登り続けた。その後もクレヴァスに行く手を阻まれ右往左往し時間をくわれ、やっとテントの張れそうな場所を見つけた時は既に七月六日の午後四時になっていた。遅々として進まない我々の登攀に少々焦りも見え始めた。

七月七日、またもクレヴァスに行く手を阻まれ、まるで振り子の様に右へ行ったり左へ行ったりする。いったん下降し左へ巻きながら登り返したりする。残酷なほど時が過ぎるのが早い。決死のトラヴァースを終え、ようやくのこと氷河の上に出たのはもう日が沈む直前だった。今日登ったのは高度差にして約三〇〇メートルだった。あまりに時間がかかったためいったん下降することも考えたが、残りの食料は十分。天候は良い。そして何よりもまた再びこの氷河の突破をするのはあまりに骨が折れるので、このまま登り続けることにする。

七月八日、ようやく目の前に現れたヘッドウォール目指し、まるで硫黄尾根の様な岩稜を進む。雪の下はすぐにブルーアイスが現れとてもノーザイルでは進めない。消耗しきったアイゼンはなかなか氷に食い込んでくれない。ハーケンでビレイしながらつるべで進む。

アップダウンの繰り返しでなかなか高度が稼げない。そして、遂に僕らは行き詰まってしまった。稜線は細い尖った雪のピナクルでとても登攀は不可能。右手は大きなキノコ雪が幾重にも重なっており、とてもラインにはとれない。左手は垂直の壁になっていてこちらも可能性はない。しかし左手の垂壁に、古いフィックス・スロープが3本程垂れている。そしてその下のルンゼにもどうやらロープらしき物も確認できた。以前の隊はここをラインにとったのだろう。しかしどう考えてもここを登り返せるとは思えない。フィックスが必要だ。

古いロープは全てちょん切れてただぶらぶらと空を漂っているだけだ。我々はその時二本のロープを持ち合わせていた。一本は登攀用八ミリ五〇メートル、そしてもう一本は荷上げ用及び懸垂下降用の六ミリ五〇メートル。一本を残置することも考えたが我々の手持ちのギアではヘッドウォールの下降にどうしても二本のロープが必要だ。更にヘッド

ウォールの下降で持ち合わせているピトンは、全て使い果たしてしまうだろう。スノーピークから下は厳しいクライムダウンを強いられる。

「無事に返ってきただけでもよかったよ。」そう言ってなぐさめてくれる仲間の顔が浮かんだ。

「君らが成功する可能性は五%位しかない。」そう面と向かって言ってくれたおっさんの憎たらしい笑顔が浮かんだ。とうとう引き返すのか！　食料と燃料は充分、奇蹟的に晴天は続いている。今降りたら二度目のトライは不可能だ。往生際の悪い僕たちはそこに座り込み、考え、悩んだ。

そして結論は出た。「絶対に登り返せる」そう信じて下降することにした。岩角にスリングを掛け下のルンゼへ懸垂する。下降しながら壁を観察し、これなら何とかなるだろう、そう自分に言い聞かせルンゼへ降り立った。そして稜線へ登り返し、再び稜線を忠実に辿る。そして再び信じ難い光景が目に飛び込んできた。何とウータンクラブ隊の残したと思われる大量のギアが、壁にぶら下がっていたのだ。有難くお借りすることにした。これで下降は比較的楽になるだろう。ウータン隊に感謝。そこからしばらく行って時間切れ。ヘッドウォールまで岩塔を一つ残しビヴァーク。

七月九日、ヘッドウォール手前の最後の岩塔を右から巻く。もろい岩に悩まされ、意外に時間をくった。ヘッドウォールを左から大きく巻くことも考えたがツァッケの丸みとアイスギアの不足から壁に取りつくことにした。夕方ようやくヘッドウォールに取りつく。残置ピトンに導かれ、左へ少しトラバースし、雪を繋ぎ順調に高度を稼ぐ。ときたま残置ピトンを見つけると下降に必要な物以外は全て山崎さんが回収してきた。壁の中程で小さなテラスを整地し、ピトンを打ちロープでテントをがんじがらめにして中に潜り込む。

七月十日、日が昇ると同時に登攀を開始する。いきなり微妙なスラブの登攀を強いられる。すっかり丸くなったツァッケを軋ませジリジリと、時にはガバにランジして突破した。この辺りから残置ピトンを見掛けなくなった。さらに厳しい登攀を強いられる。七〇〇〇(メートル)近いここではマントルを返すのに多大な労力を必要とし、思い切って返したはいいが垂壁にへばりついたまま、息が整うまで五分もかかったりする。今朝出発してから四ピッチ程で五級を感じるところも数カ所あり、三回も素手になった。快晴無風の中なので凍傷の危険はない。それだけが救いだ。

八〇度程の氷壁からハングしたチムニーの中へ入ろうとした瞬間、僕は宙を舞った。氷壁に背中からたたきつけられ、滑り落ちる。ガクンという衝撃と共に僕は止まった。頭を上にして再び登り直す。見るとチムニーの下にきめたキャメロット一番で止まっていた。

キャメロットに関しては、アタックに際し、持参するかどうかかなり迷ったが、持ってきてよかった。背中のザックをキャメロットにクリップし、またもや素手になり、今度はチムニーの右のフェースを登り、何とかテラスへずり上がった。テラスでロープをフィックスして、山崎さんに荷物共々ユマールで上ってもらった。

テラスに着いた彼にトップを替わって欲しいと泣きついた。更に悪そうな凹角を彼が行く。行き詰まったらしく、ロープが流れない、フォローすると、あまりにも不安定な場所でビレイしているので、

その少し下でキャメロットとフレンズでがっちりとビレイした。直上を諦め、彼は右手の雪壁を目指してトラバースを開始した。なかなかロープが出ずに時間だけが過ぎる。

およそ二時間の格闘の末ロープはようやくいっぱいになった。強引にゴボウしながらビレイ点に辿り着く。雪壁へのトラバースは不可能で再び直上する。しかしいかにも悪そうなフェースだ。セカンドは全ての荷を背負い、ユマーリングすることにして空荷で彼が取りついた。風が吹き始め、ガスが立ち込める。しかしこのピッチでヘッドウォールは抜けるはずだ。ガンバレ、山崎！

山崎さんがガスの中に消え、ロープの流れは止まったが一向にコールがかからない。ただ空しくピトンが岩に弾かれる音だけが響きわたる。そして、支点が取れないからフォローしろと上からコールがかかる。僕の左のオーバー手袋はズタズタで指が全て出てしまい、感覚が鈍くなっていた。おまけに重たい荷物、薄い酸素、喘ぎ喘ぎ何とか登りきった時、彼の横に倒れ込んだ。ここからは容易な雪壁が続いている。日暮れ間近の稜線は美しいかぎりだ。しかしそんな事を言っている余裕はない。すぐさま彼は僕の背からザックを取り、雪壁を登り始めた。しばらく行き雪面を削りビヴァーク。

七月十一日、今日こそ確実に頂上に立てる。風は強いが空は晴れている。しかし確実に悪天は迫ってきており、我々は日が昇る前に昨夜のテントサイトを後にした。ポケットにチョコレートとカメラを突っ込み、ロープ以外はここにデポした。

雪壁を快調に、ただ高い所を目指して登る。軽くなった背中のおかげで、空気の薄さもさほど感じない。ジャンクションピークと思われる雪のドーム目指しひたすら登り続けた。そしてドームの上に出て思わず倒れ込んだ。ピークを探し辺りを窺う。あれっ？

「松岡、ここが頂上だぞ――」出し抜けに山崎さんが叫んだ。

稜線のはるか向こうに、同じくらいの高さのⅠ峰のピーク、そしてその右手に一際尖った雪のシスパーレがそびえている。他には確かにここより高いところはない。

「頂上だ！」思わぬ登頂の瞬間に我を忘れ、思わず叫んだ。山崎さんとガッチリと握手を交わす。涙目の彼は思わず抱きついてきた。

「ありがとう」僕の心からそんな言葉が出たのは、生まれて初めてのことだった。

山崎さんも僕に「ありがとう」と言ってくれた。やっぱり彼とザイルを結んでよかった。

七月十一日、午前六時四十五分ついに我々は山頂に達した。しばし、下降の不安も忘れ、喜びに浸った。

遙かなるアドヴァンスベースキャンプ

七月十一日、我々はウルタルⅡ峰の山頂で不安の真っ只中にいた。忍び寄る悪天候、今まで登ってきた長大なルートの下降、「よし、降りるか」山崎さんの一言で記念撮影もそこそこに、下降を開始した。ゆるんだ僕らの顔も再び引き締まった。

ヘッドウォールの抜け口で何とか支点を取らなければと二人で必死になって雪をほじくりかえした。そして無理矢理一本ピトンをねじ込み、懸垂下降を開始した。ひたすら下降を繰り返す。ほとんどピトン一本、時には岩角で支点を取る。そして日暮れ前、七月八日

のピヴァーク地点でテントの中に潜り込んだ。夕食を作りながら「こんなカッコイイ登り方ができたのは松岡のおかげだよ」と山崎さんが言った。うれしかった。返す言葉を考えたが、そのうち、そんなことどうでもよくなり、黙って手を差し出した。ガッチリと握手。しかし、まだ山を降りたわけではない。気をゆるめてはいけない。明日早朝の出発を確認し合い、眠りに付いた。

七月十二日、空が明るくなる前に行動を開始する。以前の隊の残したギアの中からロックピトン五～六枚、アイススクリュー二本を利用させてもらう。どの隊のものなのか明確ではなかったが、大変助かった。心から感謝申し上げたい。

ひたすら稜線を辿り、右のルンゼを降りる。問題の垂壁の基部に着いた。下降するのをさんざんためらった垂壁の下だ。山崎さんがトップをかってでた。二時間ほど右往左往し、トップを替わろうかという所で何とかレッジへ辿り着いた。

更に黙々といくつものピークを越え、スノーピークを目指した。昼過ぎからとうとう辺りにガスが漂い始め、あっという間に雲の中に巻き込まれてしまった。まるで視界がきかない中、必死になって稜線を辿る。何とかロープがいっぱいになり、ピトンを打ち込んだ。突然僕の体に電流が走る。ものすごい長い時間僕は電気に踊らされた。体の金属を外そうと思うが体がいうことを利かない。だんだんと手が岩から離れてきた。やばい！　僕はまだピトンにクリップしていない。山崎さんがビレイしている地点からランニングも一つもとっていない。やばい！　だれか助けてくれ！

誰が助けてくれる訳もない。パートナーは五〇㍍向こうだ。フッと電流が止まった。助かった！　ラッキー！！　急いでピトンにクリップし、山崎さんには何も話さずそのままひたすらスノーピークを目指した。何とかスノーピークに到達し、テントに潜り込んだ。

風は止んだ。登りの時よりも雪の量が減っていて以前の隊のデポが顔を出していた。夜、最後に残ったアルファ米半袋を食べ、眠りに付いた。明日はデポしてある食料に辿り着けるはずだ。

七月十三日、昨日止んでいた風も再び吹き荒び、外は完全にホワイトアウト、一度出発するが視界が利かない為下降点が分らず引き返しテントの中に潜り込んだ。

七月十四日、嵐は全く衰える気配を見せない。じっとテントの中で耐え忍ぶ。あまりに腹が減ったので、そこら中のポケットをまさぐり、ザックをひっくり返して何か食べ物を探す。ビスケット六枚を発見。しかし出発の朝に食べることにして、その場はガマンした。明日はきっと晴れる。

七月十五日、今日もテントの外は風が吹き荒れている。いよいよ体は弱ってきており、空腹感もなくなった。足の感覚もだんだん鈍くなってきて、指先から徐々にかかとの方まで感覚がなくなった。五年前の凍傷の跡が気にかかる。何も食べず、何も飲んでいないのに何故か便だけは出る。一度外に出ると、体が冷えきって、テントの中に入っても濡れたシュラフにくるまるだけでなかなか温まらないので、ギリギリまでガマンする。そしてテントの入口に小さな裂け目ができ、風によってそれはみるみるうちに広げられ、テントの中は雪で真っ白になった。

七月十六日、またもや嵐。とても寒い。知らず知らずの内に、二

人ともテントの中央に寄ってきて、体がくっつく。二人ともガタガタと震えている。ときたま震えが止まる。焦って声を掛ける。「おい」「何?」返事が返ってきた。明日の晴天を祈り、ただひたすら時が過ぎるのを待つ。

「松岡」山崎さんが声を掛けてくる。「ん?」「生きてるならいいや」冗談ではなく本当に凍死するかと思った。食べ物の事、H な事、ただ楽しい事だけを考えようとした。

七月十七日、風は止んだ。テントの裂け目からディランの姿も見えた。待ち望んでいた出発のはずなのに、全然、嬉しくない。むしろ体を動かさなければならないことにうんざりした。今日の為に残しておいたビスケットを三枚ずつ、噛んで飲み込んだ。食べるという言葉はまるで当てはまらない。そしてわずかに残った燃料でほんのちょっと水ができた。太陽が昇り、体が温まるのを待って、十時頃ようやく出発した。

よろよろと立ち上がり、何度も転びながらようやく下降点を見つけた。一本だけ持っていたスノーバーを打ち込み、懸垂する。いきなりハングしていてロープの先がかろうじて下の雪面に届いていた。山崎さんは「松岡、セルフはずしとけ」今一つ頼り無いスノーバーを見ながらそう言った。「別にいいよ」と僕は言い返した。ここまで一緒に来たのに、今更自分一人だけ生き延びようなんて、思うわけなかった。

そこからアイススクリューを使い、ひたすら懸垂下降を続けた。二人とも弱り切っていたため、ロープを引き抜くのに苦労した。そして見つけるたびに引き抜いてきたピトンもけっこうな数になって いて重たい。しかしここから下をクライムダウンするなど今の我々では不可能だ。やっぱり捨てる訳にはいかない。

十ピッチ程下った所で、無情にも日は沈んだ。しかたなくデコボコの雪面を整地もしないでテントを張った。明日は確実にチョコレートと熱い紅茶にありつける。夜、懸垂氷河の崩壊があり、ごく小さな氷片がテントに当たった。焦る気配などまるでなし。もうそんなのどうでもいい。

七月十八日、ノロノロと出発準備を整え、懸垂下降を始める。ピトンがみるみるうちに減っていく。軽くなって助かる。ノロノロとチョコと紅茶めざして下降した。ようやくデポ地点が見え始めた。かなりの降雪と懸垂氷河の崩壊で明らかに地形が変わっている。もしや?! 日暮れ寸前にようやくデポ地点に到達した。やっぱりデポは見つからなかった。無情にも目印にした赤旗だけが見つかった。大ショック。夜、ライターで雪をとかし、水をつくり半分ずつなめた。

七月十九日、雪崩の危険地帯の下降の為、何とか四時過ぎに出発にこぎつけた。最後のアイススクリューをねじ込み、懸垂下降を始める。次のピッチからは岩で支点を取り、懸垂をひたすら繰り返す。我々は足の感覚が無いため、雪面をクライムダウンするのを怖がった。

最後のピトンで懸垂した後、ロープ一本とカラビナ全てを捨て、慎重に一歩一歩確かめるように下降した。時計の針は十時に近づいて、雪面はゆるみ始めた。急げ!

十時三十分、山崎さんがフィックスに辿り着いた。続いて僕も

フィックスにしがみついた。緊張の糸が切れ、その場にへたりこんだ。一ピッチ先で彼もへたり込んでいる。僕はもう一本のロープも捨て、ノロノロとフィックスを辿った。

ようやくＡＢＣの赤いテントも見え始めた。もうここまでくれば大丈夫だ。

生　還

七月十九日、ＡＢＣ目前のフィックスの途中で、一ピッチ先行している山崎さんが、岩にへばりついている。何かおかしい。不自然だ。両の掌と頭を横にして壁にへばりついている様はまるでカエルのようだ。とうとう頭にきたのか、どうしたんだ。

山崎さんはこっちを向き、か細い声で「松岡、水が飲めるぞ」と言ってきた。僕もそこに到達し、壁をちょろちょろ流れている水を、カエルのようにして吸った。とてもうまい。もっとうまい物ももう少しで手に入る。重たい疲れた体を引きずって、僕は進み始めた。ＡＢＣに人影が見える。シャガリープ（ポーター）だ。

もう少しもう少しと自分に言い聞かせ足を前に出す。フィックスは終わり、雪壁をトラバース、そして登るとき膝まであった雪もすっかり無くなり、ただの歩きづらいガレ場になった斜面を下った。山崎さんはすでにＡＢＣに達し、シャガリープと抱き合っているのが見えた。ヨロヨロとＡＢＣ目指して下る。五歩下るたびに座り込み全然ＡＢＣは近づかない。下からシャガリープが登ってくるのが見えた。右手にオレンジジュース、左手に食べ物の入った袋を持って息を切らして登ってきた。そんなシャガリープを見て思わず涙がどっと溢れた。そして「ありがとう」を連発し、抱きついた。「ＭＡＴＳＵＯＫＡ－ＳＡＮ！」そう言ってジュースを差し出してくれた。久し振りのことで飲み方も忘れ、ほとんどこぼしながらもノドに流し込んだ。そしてチョコレートをむさぼるように食べた。

山崎さんはテントの中で、僕はテントの前で、横になった。夜になるまでピクリともせず、時間が過ぎた。シャガリープは、僕らの登攀具を持って下山した。夜、手足が痛んだ。僕は這ってテントに潜り込んだ。二人で手足を確認した。二人ともきれいな肌色の指だった。

ここには食料も燃料もたっぷりとある。回復するまでここでゴロゴロしていればいい。もう何も心配することはない。正に「生還」そのものだった。

ラーメンと雑炊を食べながら、生還した喜びに浸り、とめどもなく話をした。

最後にランタンの明かりを消す前に「ありがとう」と声を掛けた。山崎さんは何も言わず、目に涙を浮かべ、会心の笑顔で応えてくれた。

終　焉

生還から二日後の七月二十一日午後十一時、昨夜からの原因不明の腹痛により、山崎彰人さんは息をひきとった。悲しみと、混乱の中、我々のＥＸＰＥＤＩＴＩＯＮは終わった。雪蓮峰、クラウン峰、チリン峰、そしてウルタルⅡ峰、未踏の頂に情熱を燃やし続けた偉大なクライマー山崎彰人の人生と共に。

僕は、山崎さんの為にこれから何をすればいいのか解からない。ただ一つ言えることは、僕はこれからもやりたいことをやりたいだけやる。ただそれだけだ。

「SHUKURIA　YAMAZAKI」

〈記録概要〉

隊の名称　日本山岳会東海支部ウルタルⅡ峰登山隊一九九六

活動期間　一九九六年六月～八月

目　的　ウルタルⅡ峰（七三八八㍍）の初登頂

隊の構成　隊長＝山崎彰人（28）隊員＝松岡清司（24）

行動概要

六月三日　日本出発→イスラマバード着

六月四日～八日　食料・装備購入、ブリーフィング

六月九日　イスラマバード発

六月十日　ギルギッド着

六月十一日　フンザ着

六月十二日～二十四日　ハッサナバード氷河、ナガールにて高所馴化、ウルタル偵察

六月二十五日　ウルタル氷河舌端草地ＢＣ設営（三一〇〇㍍）

六月二十六日　南西壁基部ＡＢＣ設営（四五〇〇㍍）

六月二十七日～三十日　上部偵察

七月二日　ＢＣ出発　アタック開始

七月四日　南西稜コル西側（五二〇〇㍍）食料・装備デポ

七月六日　アイスフォール帯通過（五五〇〇㍍付近）

七月七日　懸垂氷河突破　スノーピーク上（六一〇〇㍍）

七月九日　ヘッドウォール下部（六八〇〇㍍）

七月十日　ヘッドウォール突破（七一〇〇㍍）

七月十一日　午前六時四十五分初登頂→主稜線（六五〇〇㍍）

七月十二日　スノーピーク上（六一〇〇㍍）

七月十三日～十六日　吹雪、雷雪、停滞

七月十七日　懸垂氷河下降（五五〇〇㍍）

七月十八日　食料・燃料デポ地点（五二〇〇㍍）

七月十九日　ＡＢＣ帰着

七月二十一日　午後十一時　山崎死亡

七月二十三日　遺体収容→ＢＣ→カリマバード→ギルギッド

七月二十四日　ＡＢＣ、ＢＣ撤収

七月二十五日　イスラマバード着、ブリーフィング

八月五日　帰国

報告

『岳人』五九二号（一九九六年十月）『山と渓谷』七三五号（一九九六年十月）

『東海支部報』No.六六号（一九九六年九月）山崎彰人君追悼号

［註：本登山は日本山岳会海外登山基金からの一九九六年度助成金を受けて実施された。］

＊＊日本山岳会百年の資料ノートとして＊＊

環境、中高年登山、ヒマラヤ

―創立九十周年に当面の三課題を展望、記念フォーラム―

日本山岳会は一九九五年十月十四日に創立九十周年を迎えて、東京・品川の「新高輪プリンスホテル国際館パミール」で記念式典と晩餐会を開いた。これに先立って、同ホテル内で「環境」「中高年登山」「高所登山」の三つの課題について記念フォーラムを開催、一般に公開した。

まず午前中に二課題、十時からヨセミテ協会のメドレー会長を招いて「ヨセミテからのメッセージ」と題する講演を中心に環境問題を、また併行して、関西の登山者三人による「私の山行き―中高年登山の楽しみ」と題し、それぞれユニークな登山論が展開された。また、午後一時からは、「高所登山・回顧と展望」でマナスルからマカルー東稜まで四十年間の登山のビデオを見ながら、高所登山の問題点と意義、創立百周年にむけての展望を語ってもらった。各フォーラムのスタッフは次のとおり。

Ⅰ「ヨセミテからのメッセージ」
コーディネーター　小野有五
スピーカー　スティーブン・P・メドレー
パネリスト　沼田　真　岡島成行
司　会　大森弘一郎

Ⅱ「中高年登山のたのしみ」
コーディネーター　斎藤惇生
パネリスト　阿部和行　高木康夫　横田明男
司　会　山口俊輔　南井英弘

Ⅲ「高所登山・回顧と展望」
コーディネーター　池田常道
パネリスト　原　真　鹿野勝彦
重廣恒夫　山本篤

ヨセミテからのメッセージ

大森弘一郎

この記念フォーラムを開いた目的は、山岳地域の環境保全のモデルとして「ヨセミテと上高地」の類似点と相違点を対比し、山岳地域の環境保全、自然保護の望ましい姿、その望ましい未来を展望しよう、ということであった。

フォーラムには、皇太子様、同妃雅子様が出席され、来会者は約三百五十人、ヨセミテ協会のスティーブン・P・メドレー会長をスピーカーに、会員の沼田真氏、岡島成行氏、小野有五氏をパネリストとして進められた。

上高地の将来に対する示唆に富んだフォーラムであったが、その内容は講演録に記載（註1）されているので、重複を避け、メドレー会長の講演、会長が来日して後、秋の上高地と、その周辺を見ていただいた感想、この講演会が生れる過程での司会者およびパネリストの体験、フォーラム後に得た知識などを加え、ヨセミテがいま我々に伝えたいメッセージをまとめてみた。

（註1）講演録は自然保護委員会発行のミニコミ誌「木の芽草の芽」第14号95年11月10日発行を参照。

このフォーラムを開くきっかけは、三年前に始めた「山の自然学講座」であった。その活動のために自然保護の原点であるジョン・ミューアの愛したヨセミテへ行き、いまどのような方策がとられ、どのような歴史をへて、現在の姿になったかを勉強し、体験することが必要だ、と考えて計画に加えたこと、そして今年（一九九五年）五月にヨセミテ行きが実現したことである。

九十年前にジョン・ミューアがこよなく愛して、世界の自然保護運動の原点になる活動をおこしたヨセミテ、日本山岳会の創始者の一人小島烏水が八十年前に訪れたヨセミテ、その渓谷にたったときの感慨を、自然学講座の指導者で、このフォーラムのコーディネーターである小野有五氏は、次のように語っている。

ミューアと烏水のヨセミテと上高地

小島烏水が初めてヨセミテを訪れたのは一九一五年のことであった。名著「氷河と万年雪の山」に書かれているように、烏水のヨセミテ行きは、日本アルプスとシェラネバダの氷河地形を比較するという明確な目的をもった旅であった。地形や地質の専門家ではなかったにもかかわらず、岳人として日本アルプスの氷河問題に大きな関心をもった烏水は、当時の学者たちがヨーロッパ・アルプスをお手本に日本アルプスの地形を論じていたことに不満を覚え、日本アルプスと同緯度にあって、高さも同じようなシェラネバダとの比較を目指したのである。

ヨセミテに入った烏水を驚かしたものは、その巨大なU字谷であり、岩盤につけられた明瞭な擦痕であった。この強烈な体験は、烏水を日本アルプスの氷河否定論に導くことになる。

しかし烏水がヨセミテから日本に持ち帰ったのは、それだけではなかった。ヨセミテをアメリカの山岳の聖地にしたジョン・ミューアの精神を、烏水は初めて日本に伝えたのである。

上高地はひとり烏水だけでなく、ウェストンにとっても、日本山岳会の草創期の人たちにとっても日本の山岳の聖地であった。その自然を守るために、上高地で行なわれていた放牧をやめさせ、ついには上高地を特別天然記念物に指定させたのは、まさに烏水の伝えたジョン・ミューアの精神を引き継いだ日本山岳会の力であった。

日本山岳会創立九十周年という記念すべき年に、ヨセミテ協会会長のスティーブン・P・メドレー氏をお招きしたのは、このような背景がある。

いま烏水にならって、上高地とヨセミテ渓谷を同じ縮尺の地面の上で比較してみると、U字谷の急な岸壁が両側から迫るヨセミテ渓谷は、上高地の開けた谷の広がりより更に狭いという差はあるが、梓川に相当するマーセッド川の清流は、同じように東から西へと流れており、驚くほど似ている。

上高地とヨセミテが、こわいほどまでに類似していることを八十年前に見抜いた烏水の眼力には驚かざるを得ない。そしてまた日本の山岳の自然を守るためには、ジョン・ミューアの精神を必要とすると悟り、それを身をもって伝えた烏水の功績を、我々はいま一度思いおこすべきではないだろうか。

ヨセミテの成功と失敗

メドレー会長の講演から、ヨセミテの概要を要約すると、ヨセミテ国立公園はカリフォルニア州中部、シェラネバダ山脈に属し、延べ三千百平方キロの広さの中に六百の湖、二千百キロにおよぶ流れ、千三百キロのトレール、五百六十五キロの道路、二千カ所におよぶキャンプサイトを持っている。その中のピークのいくつかは三千メートルを超え、最高峰のライエル山は三、九九七メートルの高さがある。

公園の中心はヨセミテ渓谷で、広さは十八平方キロ、大きな滝がいくつもあり、ほかに平均七百六十五メートルの花崗岩の絶壁が渓谷の底から聳えていて、年間四百万人の観光客が、この狭い谷間に集中して訪れている。

メドレー氏は「この渓谷は国民の利益と鑑賞のために、連邦政府

が最初に指定した自然景観地区であり、また世界最初の国立公園であるが問題も多い。渓谷の狭い地域に観光客が集中して訪れる。上高地は十一月から翌年四月までの雪の季節はオフ・シーズンだが、ヨセミテは一年中オープンしている違いはある。しかしヨセミテを訪れる人は六月から九月までの夏期に集中しており、冬は少ない。

しかもアメリカは車社会なので、上高地のようなマイカー規制に同意を得るのは容易ではない。ヨセミテでは上高地の徳沢に相当するあたりまで車で入ることが可能となっている。シャトルバスもあり、多くの人が利用しているが、自家用車が同時に入り込むので、このバスも渋滞に巻き込まれることになる。また、駐車場難などで、夏は渓谷の入口は車であふれ、排ガスによる被害も心配だが「ビジターが充分にヨセミテの素晴らしい自然を味わうことができないのも問題だ」と語っている。以下はヨセミテと上高地の、それぞれの現状と長所、短所、特長を比較して展望につなげたい。

〔管理システム〕

アメリカでは国立公園の土地はすべて国有地であり、管理は連邦政府の国立公園局によって一元的に管理されている。ヨセミテでは保護、メインテナンス、資源管理、インタープリテーション（教育）などを夏は七百五十人以上、冬は五百人の局員が行なっている。スタッフには警官、裁判官もいて、公園施設には裁判所や監獄まである。

日本の国立公園の土地は、林野庁、都道府県のものであったり、殆どが民有地の国立公園もある。管理も公園内の森林は林野庁、河川は建設省、道路は建設省と運輸省、というように分担して管理されており、管理の主体であるべき環境庁が主導的立場をとりにくい。

〔メインテナンス〕

ヨセミテは過去数十年にわたって自然破壊を含む渓谷の改修工事を続けたほか、渓流下りのボートに危険だから、という理由で流木や倒木を除去するなど、人の手を加えてきたが、最近は自然はあるがままに、なるべく手を加えない、流木も倒木もそのまま、というように管理方針を転換している。

一方、上高地は現在、大正池の浚渫、梓川の改修工事を行なっており、工事用トラックのための道路も奥地まで延ばしている。メドレー氏は上高地はマイカー規制をして環境保全に努めているのに、一方で浚渫や護岸工事をして自然を破壊している矛盾に疑問を持っている。パネリストの沼田真氏も、この工事に反対した経緯を、次のように語っている。

「十数年前に梓川に堰堤をつくるということで、建設省、環境庁が中心になって検討委員会を設けました。そこでは『なるべく目につかないようにつくる』という説明があった。しかし化粧柳などは氾濫のあとに育つものだから、コンクリートで固めてしまったら、上高地的景観はなくなる。守るつもりでやったことが景観を台無しにしてしまう、と反対したが、とおらなかった」

これらの工事は必要なのか、どうか、例えば北アルプスは毎年四㌢の早さで隆起しているという。梓川流域で岩盤が崩壊する量をみると、年間約二万立方㍍の岩が流れこむ計算になるという。自然はなるべく手を加えないで、共存を学ぶべきではないか。パネリストの岡島成行氏は「自然は人間の生命にくらべれば、永いようだが、

自然も変わっていく。上高地の景観をどうするか、山が崩れても自然のままに推移させるのがよいのか―大正池が典型的な例だが―考えてみる必要がある」と語っている。

［都市公園化と原生的自然］

ヨセミテ渓谷を上から見下ろすと、核心部はまるで都市公園のようにみえる。渓谷の開発は東端に集中しており、約千軒のストア、レストラン、プールまであるホテルから劇場まである。しかしこのような都市化された公園は、ヨセミテのほんの一部で、国立公園区域の九七％はウイルダネス（原生的自然）とされ、そこはウイルダネス・アクトの規定によって、野生生物の生活を人間が妨害してはならない地域となっている。そこには一軒の山小屋もなく、入山者は一切を背負ってテント生活をしなければならない。パネリストの岡島氏はヨセミテの長所を次のように語っている。「ヨセミテの南には、ジョン・ミューア・トレールとよばれる日本の北アルプス全体を歩くような縦走路が続いている。そして南端にはマウント・ホイットニーというアラスカを除くと北米で一番高い山がある。ヨセミテ渓谷の周囲は北アルプス全山ほどのところに人が殆んどいないという状況がある」と。またパネリストの沼田氏は、バッファ・ゾーンの重要性を次のように指摘している。

「日本の保護地域では国立公園であれ、林野庁の保護林であれ、いずれも大切なところだけをコアエリアとしている。しかし世界的な考え方としては、コアのまわりにバッファゾーンをつくって、直接インパクトが及ばないようにしている。さらに外側にカルチャーエリアがある、というように三段階になっているのが理想だ」。

そのほかヨセミテにも酸性雨、湿原や草原の回復の問題、野生生物のバランスなど、人間が大勢入りこんだことによって崩れている問題がある。このほか岩壁のボルトなど、まだ解決すべき多くの問題を抱えている。その対策には、きめの細かい配慮が必要で、問題は複雑に入りくんでいる。またヨセミテでは「野生生物に餌を絶対に与えてはいけない」ことになっている。その理由を数カ国語で詳しく説明した立札が要所に立てられている。このほかDDTで卵の殻が薄くなり、自然孵化ができなくなってしまった隼がヨセミテを去って三十五年になるが、こわれ易い卵を人口孵化して野生の巣に帰す試みが成功して、再び隼が帰ってきた話など、環境保全について人間の協力を必要とする例が強調された。

むすび

メドレー会長は上高地のマイカー規制と、多くの人たち、老若男女、子供たちまでが、楽しそうに山路を歩いている姿に感銘を受けて、高く評価していたが、メドレー氏が上高地をみて考えたことは、ヨセミテのことであったようだ。私たちもまたヨセミテで楽しみながらも、考えたことは上高地のことであった。

上高地は、どのように守られるべきなのか、私たちが役立つためには、どうすべきなのか、ヨセミテと上高地は八十年の差をもって、同じような道を歩んできている。ヨセミテはよい先輩であるとともに、都合のよい反面教師でもあり、身をもって失敗の結果を私たちに見せてくれている。私たちは、それを学び、同じ過ちを繰り返さないように努めることは可能であろう。

中高年登山の楽しみ

―関西を中心に山の会の在り方を三人に聞く―

山口俊輔

中高年登山については、すでに『山岳』第八十七年（一九九二年）に特集を組み、その実践面や医薬、健康およびトレーニングについて、専門家を中心に論じてもらい、また本会会員で、高齢者でありながら比較的ハードな登山を実践している人たちに、これらについて実際面から語ってもらっている。

このため九十年記念フォーラムでは、斉藤惇生副会長をコーディネーターとして、関西を中心とするユニークな中高年登山者をパネリストとして「中高年登山の楽しみ」と題する集会を開くことにした。このフォーラムによって、近年いよいよ激増している中高年登山者の諸問題、遭難事故対策、山行、生涯スポーツとしての山岳の登り方、何を楽しみ、何を語り、何を心に植えつけるか、など中高年登山者が山登りを実践するうえで参考になればと考えたわけである。

ところが、フォーラム開催を三週間後に控えて副会長が病にたおれられたために、急遽私（山口）が引継ぐことになり、補佐役として南井英弘理事（図書委員会担当）、ドクター斉藤副会長の代役として、健康、怪我などの問題で堀井昌子理事（高所医学）を推薦していただき、フォーラムは無事発足することができた。

開会にあたって村木潤次郎会長から「近年の山登りについて三つのことが、おきている」として概ね次のような内容の挨拶があった。

一、近年、中高年層の登山者が爆発的に増えている。私もその一人だが、山が白髪の軍団に占領されているような気がする。ヒマラヤに行こうというムードすらある。より高く、より険しい山に向うという精神は変わりないと思うが、日本の登山界全体が新しい体験をしているように思える。

二、登山者層の広がりにつれ、山が荒れるということも現実の問題として起きている。

三、最近は山登り、そのものが若い人たちに嫌われるといわれるが、

もっと若い人たちが山登りに参加するように、若い人を仲間に入れる必要があろう。

さらに村木会長は「本日はそんなテーマを含めて、環境問題、高所登山、をテーマとするフォーラムを二つの会場で開いている」と挨拶につけ加えた。パネリスト三人のお話は次のとおり。

[横田明男氏（京都支部会員）の話]

『京都山の会』は一九六四年六月、私が二十六歳のときに仲間と作った。当時は若い人だけの集まりであったが、発足二十年後の一九八五年に会員数六十余名の時に、中高年層の増加に応える対策として会員を募集した。古参会員との実力に差があるので「二部制」を導入した。

現在、会員は男百二十一人、女百九人、合計二百三十人だが、二部に入った人たちの、知識の収集力の強さ、バイタリティの凄さは並ではなく、十年たった現在、一部、二部の実力が拮抗してきたので、部制を廃止した。最年長は一九二三年生まれ、若い二十代は三人いるが、若い会員の定着率は悪い。若い人たちで発足した、この会も中高年が中心となって、模索の続くなかで、新しいスタートをきった。

「十二支会」という会のこと。亡くなられた今西錦司先生が発案されて、昭和三十五年から続いている会。毎年、干支の山を登るというものです。

今年は「亥」年ということで、「猪鼻岳」つまり、箱根・金時山にのぼりました。今西先生への想いもありましょうが、いまでもその数、百三十七名。圧倒的に経験者ばかりですが、末永く続きそうな会です。大概は一月の半ば、時に雪の状況とかで四月位に行くこともあります。メンバーは、九十三歳を筆頭に還暦三名、古稀五名、喜寿一人、傘寿三名、といった具合です。

もちろん、この中間にも何人かいるわけです。この他、米寿、卒寿、といった節目の方には参加者から五百円ずつ集めてのお祝いをします。一方、若い人もたまには参加します。でも、二度は来ません。まあ、とにかくリーダーはたいへんです。高年齢のパーティが七十メートルも百メートルも続くのですから、気が抜けません。

こんな苦労もありますが、頂上に着いたときの皆さんの喜びよう、これにはどんな苦労も吹き飛びます。そして、頂上で「これから一年、元気に生きられそう」という実感を得るのです。皆で協力して登るということがいかに大切か本当にわかる山登りです。人について行くだけでは駄目、自ら計画に参画し、実行してゆく。こういう努力をすることが「中高年」登山者にも大切と思います。

三、この他の山登りのこと。

遠征は別にして、「一等三角点」研究会のことにもふれたいと思います。この会も実は今西錦司先生の発案でした。さすがの発想です。「一等三角点」なら測量の原点のはず。眺望の悪い峯がないという発想です。「一年間に十座位やれ」ということでした。二十二年前のことです。会員数、百十九名。全国にある九百七十一座を目指しています。この会のメンバーの中には、すでに一人で九百二十六座を登った人がいる。会報「しょう嶺」はすでに二十一号を発刊しました。

私は数年前、病魔に倒れて今、人工肛門をつけております。袋を

ぶら下げながらの日常生活であり山登りですが、これに負けないで克服すること。これが大切なことと思います。（まるでこのハンデをお持ちとは思えない横田さん。ただ敬服の一言です）

つづいて、登壇した高木康夫氏はこのフォーラムの開催日直前に岐阜近郊の山で発生した遭難騒ぎの捜索に二日間費やした後、この会場に馳せ参じたとのことであった。

高木氏は中高年に多く発生している遭難の実態をふまえ、「事故を起こさないような山登りをして欲しい」と訴えた。

◇登山者・遭難年齢層の変化。（北アルプスを中心に）

一九七三年、七四年代は青年層（十代から二十代）が約八〇％を占め、七三年は四十代以上ゼロ、七四年は五十一～六十歳が一％だった。ところが、近年はどうか？　九三年は五十歳代がおよそ五〇％以上、九四年は同じく八一％、九五年は同じく八〇％。

全国的に同じ傾向となっている。登山者の遭難年齢層の数字でみるように、近年、若い人自体の登山者がめっきり減っていることも、この数字を変化させている。

◇今年の夏の北アルプス・飛騨側からの登山者層、事故内容など。

構成、青年が三分の一、中高年が三分の一で、どんな事故が多発したか。二つの状況ある。

（その一）浮き石に乗る。（その二）転落。

中高年の特徴的なことは瞬発力の著しい低下。このことは日本山岳会年報「山岳」第八七年に大森薫雄ドクターが紹介されているのでおわかりの方も多いと思うが、顕著に影響している。

ただ、持久力はあまり低下していないようだ。むしろ、瞬発力を持久力でカバーしている風にもみられる。

垂直飛びのケース。二十歳代を一〇〇とすればおよそ半分の体力しかない。これでは転落につながり易い。

こんなことを考慮して、私は中高年の方にはストックを使うことをすすめている。

あのヘルマンブールさえ、ストックを愛用していたようだ。バランス上たいへんいい。

［自分の山登りを見つめる］

五八年（昭和三十三年）発足の岐阜県山岳連盟に所属する会とともに、これまで登山活動を続けている。発足当時五十名位の小さな会も、次第に減少してきた。そこで、八八年に会友制度を作り、中高年に門戸を広げたら、あっという間に二百三十余名に膨らんだ。昨年一年間で、会として二百九十七回、約一千山のピークを極めた。奥美濃の山がバックグランドとなっているが、会員増大の対応策として、毎月発行の会報で次回以降の「山行計画」を発表するが、★印の数の多さで難易度をつけている。

［中高年登山者の特徴、そして問題点］

①　依頼心がたいへん強く、連れていってもらうという気持ちが強すぎる。地図さえ持ってこない。コピーを渡してもダメ（京都山の会でも、同じだそうだ）。

②　ブランド志向が強い。いつか本田勝一さんが「朝日ジャーナル」に書いていたが、百名山とか、有名な山だけを目指す。

③　とにかく頑固。特に昔、山登りしていた人に多い。古い道具、長靴、等を使い回顧にふける。

（結論）

若いときはただガムシャラ、山を見る目は中高年になってから。という風に感じるということで結びたい。

この後、司会（山口）は、パネリスト・阿部和行氏に入る前に、会場に出席の神長氏（山と渓谷社・編集長）にショートスピーチで意見を求めた。このフォーラム直前に発行の同誌が同様の企画をしていたからである。

［山と渓谷社・編集長、神長幹雄会員の話］

今年の夏山での特徴は、北アルプス南部を管轄とする豊科署の管内では「一般登山道での転落、滑落」が多かった。そして、特徴的なことは、日程に余裕がない、ガイドブックに踊らされ、トレーニングさえしていない。もっとゆとりのある山歩きを心がけるべきだ、と結んだ。

［阿部和行氏の話］

三人目に登壇の阿部和行氏は最初に、ここに座った経緯についてふれた。最初のコーディネート役だった斉藤副会長から「関西でユニークな奴を捜せ」と指示をうけたが、受ける奴がいなくて、私がここに座りました、と会場を沸かせた。

［自分の山登りを振り返る］

十代の後半から山にいっていた。合間に体操等をやっていた。これが後年、山登りの役にたった。社会人になって、四国にいった。そこでは大きな山岳会に入ったが、次第に面倒を見る機会が増え、自分の山どころではなくなった。そこで会をやめた。

そこから、一人の谷歩き、雪山が始まった。見えないものが、パッと見える楽しさ、無垢の雪道を踏む楽しみ、人の真似はしたくない。何事にも代えがたいものがあった。だから有名な山には行かないが人に知られていないところばかり登っていた。

そのうち自分で小さい山の会を作った。でも指導はしない、会員は募集しない。やりたいことを自分でやる方式だった。だから、いま残っている人は少ない。そんなことをしながら昭和四十年に黒部にある奥鐘山の壁を目指したりした。そんな時に第二次ＲＣＣの奥山章氏に出あった。奥山氏は「そんなゴルジュのような山は登るな」といった。そんな山がつづいた。昭和五十二年に転職。ここから方向がそれた。カヌー、自転車、パラグライダーへと次第に変わっていった。自転車ではドナウ河の源流から、河口へと目指した。ついこ年前のことである。今は山と関係ない方向に来ている。

パラグライダーを始めたのは昭和四十年カナダへいった時でスカイダイビングを誘われたが、これは怖いのでやめてパラグライダーに転じた。それから山スキー。ついでにバラパント。この五つのものが私の現在の主流である。

日本で一番長い川、信濃川、この川は槍ヶ岳と甲武信岳に源を発するが、今はこの五つの道具を使い分けて、上から下までというのもおもしろいのではないか、と思っている。

［中高年の山登りについて、感じること］

横田氏も言われていたが、ずっとつづけていた人、再開の人、新たに始めた人、というパターンになる。

よく考えてみると体力・精神力・技術の一般的なことの他に、感性というものが必要ではないだろうか。

つまり、状況を予知できるもの、これはまさしく感性以外のなにものでもない。たとえば山道でころげ落ちないなどというのは、まさしく感性の優れた技であろう。この感性というやつは年老いれば落ちて行くであろうし、トレーニングによっては養えると思う。感性は重要なポイントで年によって老いるから、まして中断でもすれば比較にならないほど、感性は低下する。感性を低下させない為の要件は、日頃のトレーニングのほか、月に一回以上は山登りすることが大切と思われる。

中高年の山登りについて感じることは、「注意しろ」だけの喚起だけでは駄目で、登山やトレーニングに実践がもっとも大切だと考える。

[登山やトレーニングの実践はいかにすればよいか]

スキーをやりたいと考えれば、まず人よりも多く自転車に乗ることや、すこしランニングをするとか、方法を考えることだろう。やはり、本人次第ということか。

「やる気次第」という意味の言葉で、阿部氏の話がおわりました。

三人のパネリストの話が終わったところで、堀井昌子ドクターから医学的見地からの講評があった。

[医学的見地からの講評　堀井昌子理事]

(一) 横田さんの話から。

横田さん自身がハンデキャップを背負われていることと、これに立ち向かう姿勢が凄いと思う。私は「登山医学シンポジウム」を主宰し、ここ二年間「中高年」をテーマにした。その中で、慢性の病気を持った人が意外に多いことがわかった。例えば、ニトログリセリンを持っている人とか、割合に多い。「安全に登るにはどうしたらよいか」を常に考えている。周囲の人はいかにして、こうした人たちを山に出してあげるか、この辺に鍵はあると思う。

それから、十二支会の高齢の方には、自信を付けさせてあげることが大切だと思う。

(二) 高木さんの話から。

瞬発力のこと、これはトレーニング出来ません。持久力、これは養えます。トレーニング次第です。まあ山を歩くこと、これがベストです。

杖をつくこと、特に具合の悪い側に突くと有効です。持って行くことは良いことです。

(三) 阿部さんの話から。

体力の低下を自覚して、いろいろ工夫しているところが凄い。おっしゃるように、昔のことを思い出しての山行はやはり無理。自覚が必要でジョギングとか、ウォーキングというのが良い。

以上のような講評で堀井理事は結んだ。

このほか、山岳会の同好会「アルパイン・スキークラブ」について、高原三平会員、また「アルパイン・スケッチクラブ」について深川安明会員から、それぞれ会員の構成、活動の状況・年間計画について説明があり、東京下町の「入谷山歩会」について、代表の袴田通孝会員から、ビデオを交えて活動の様子が紹介された。

ヒマラヤ登山・回顧と展望
―マナスルからマカルー東稜まで四十年の歩み―

コーディネーター　池田常道
パネリスト　原　真　鹿野勝彦
重廣恒夫　山本篤

宮下　丁度九十年前、一九〇五年の十月十四日に、日本山岳会が創立されたわけです。戦後、我々の登山に海外の夢を与えてくれたマナスル登山からぐっと裾野が広がり、奥行きが広がって、今やいろんなバリエーションを試みる登山の時代になってきていると思います。JACの九十年の歴史の中では半分足らずの期間ですけれども、大変目まぐるしい変化があった時代だと思います。

今日ご覧いただきますビデオ、それと海外登山にご造詣の深い池田さんはじめ、パネリストの方によりまして、日本山岳会が歩んできた海外登山の考え方、歩みの一端をご理解いただければ幸いと思います。また、これから百周年に向けての日本山岳会の歩み、二一世紀の山登りはどういうものが望ましいのか、それのサゼッションをいただければ幸いと思います。

伊丹　最初に、ヒマラヤン・フォーラムの主旨を少し説明させていただきます。我々の日本山岳会の最も大切な使命は、ヒマラヤ登山の継続的な実践であったというふうに考えました。で、本会のマナスル以来マカルー東稜までの約四十年のヒマラヤ登山の歩みを検証して、今後の日本山岳会のヒマラヤ登山のあり方、登山界への貢献等を議論していただきたい。

池田　これから五時までかなり長時間ですが、ディスカッションとビデオ上映を行いたいと思います。とりあえず、一番最初の記念すべき一九五六年のマナスルから一九七〇年のエベレスト、それから同じく一九七〇年の東海支部のマカルー東南稜、その三本のビデオをまず見ていただき、そこから話を始めたい。

マナスルからエベレスト

池田　一九五六年のマナスル初登頂は一九五二年の偵察隊以来、五三年、五四年と二回にわたって遠征を出して失敗した後の三度目の成功でした。その後日本山岳会としては、五九年のヒマルチュリが

あるんですが、七〇年のエベレストまでは非常に長い時間がたっています。実は六六年に日本山岳会はエベレストの許可を取って、六五年のインド隊に続くエベレスト登山をもくろんでいた。結局ネパール政府の中国との国境問題その他で登山禁止があり、その計画が七〇年になったという経緯です。それから同じ一九七〇年には東海支部の方で、マカルー東南稜という登山がありました。

一九七〇年代というのは、それ以前の五〇年代、六〇年代と違って、ヒマラヤ登山も新しい時代に入った。一つは八〇〇〇㍍がほとんど登られた時代に、どういう山登りをするか、例えば壁であるとか、長く難しい稜線であるとか、とにかくバリエーションルートから八〇〇〇㍍を登ろうという時代に入った頃です。ですから、サウス・コルから通常ルート経由の日本人で初めてのエベレスト登頂を狙うと同時に、南西壁からの初登攀ということも当然目標に入っていました。実は、南西壁は、その前年の一九六九年秋に宮下秀樹さんが隊長で試登隊というのを出し、その時は、ポスト・モンスーンという時季もあって、非常にスムーズに、確か八〇〇〇㍍を越えるところまで一気に上がっています。しかし七〇年の時は登れずに一九七五年まで未登で残ったわけです。ですから、そういう先鞭をつけたという意味で、ある程度意義があった登山ではないかと思います。マナスルとは、時代的にも離れておりますので無理があるんですが、マナスルに始まった日本山岳会のヒマラヤ登山というものを、一九七〇年のネパール・ヒマラヤ再解禁の時に日本人たちがどういう登山をやったのかというふうなこととあわせて話し合ってみたいと思います。パネリストの中で一番世代が近く、年長である原さんから、マナスルの時代背景とその意義といいますか影響といったようなものを簡単にお話しいただければと思います。

原　いま見まして、やはり血が騒ぐと言いますか、あの当時の興奮が甦ってくるという気持ちなんですけれども、私はマナスルの時には高校生くらいだったか、そして自分が十四年後にマカルーの東南稜をやったということになるんですが、その前に私はアコンカグアの南壁というのを登っています。

その時代は一体どういう時代だったのか、南米の登山とヒマラヤを比較しますと、ヒマラヤで一番困難なのは登山許可を得て日本を出ることだったわけです。マナスルの時代はそれがもっと大変だったということです。いまもってなお複雑怪奇な推薦状の発行の仕方が日本の登山界には残存していますが、当時もそうだったわけです。ですから山登りよりも行くまでの根回しだとか謀略だとかそういうのに疲れ果てるという感じの登山だった。マナスルはその百倍くらい陰でそういうことがあったんじゃないか。そういう時代の登山だった、というふうに思っています。

池田　補足しますと、マナスルの許可をとった一九五〇年代、実は日本は、ネパールとは国交がなかったと思うんですね。原さんの行かれた七〇年とも日本という国の実態が違っていたという認識は当然必要だと思います。もう一つは、この時代、一九五〇年のアンナプルナの初登頂から一九六四年にシシャパンマが登られて、世界の八〇〇〇㍍峰十四座が全てこの十五年で登られたわけですが、実質的には一九六〇年のダウラギリの初登頂をもって八〇〇〇㍍峰の黄金時代というのは終わるわけです。とにかく戦後の日本人のうちひ

しがれていた苦しい中で、明るい話題を提供したという、社会的な意味が非常に大きかったんじゃないかなという気がいたします。

それからもう一つは、日本人が八〇〇〇㍍の山に登ったことによって、「俺たちもそういう山へ登ることができるんだ」ということを日本の登山家が認識したということも非常に大きいかと思います。現実に、マナスル以降に起こった登山ブームというのは、今よりはるかに大きかった。ところで一九七〇年のエベレストには、鹿野さんが参加されてました。印象を一言お願いします。

鹿野　まず、マナスルの話ですが、一つ我々確認しておかなければいけないのは、ああいう幸せな時代というのか、頂上だけをただひたすら目指していけばそれが初登頂になっていくという、そういう時代はもう後にも先にもない。丁度原さんがアコンカグアに行かれたのは六五年ですが、その年に私も初めて海外登山へ出ました。それが、キンヤン・キッシュというカラコルムの山だったんですが、その山の資料というのはスイスのランベールから送ってもらった一枚の写真で、それだけを頼りに行ったんですが、行ってみたらその写真の尾根というのは我々の考えていた尾根と全く違っていた、そういう山登りをした。ところがエベレストでは五六年にはスイス隊がエベレストとローツェを一度に登る、六三年にはウエスト・リッジにアメリカが行く。六五年にはインド隊が東南稜からですが、九人まとめて登るという、こういうふうに登ればいいというスキームが既に出来上がっていた。ですから南西壁でなければ、もう行っても仕様がないというふうに建前はなっていたんだけれども、実際には我々の力と南西壁という目標との間には相当なギャップがあった。

やっぱり、あれは日本の登山界としては通っておかなければいけなかったステップで、私個人でいえば、南西壁は登れなかったけれども、エベレストはヒマラヤの他の山と同じ山だ、という、ある種の呪縛が解けたというか、そういう感覚で次の山に向かって行った。

池田　一九五三年にイギリス隊がエベレストに初登頂した時に、シプトンが「ここにこうやって八〇〇〇㍍で一番高いエベレストが登られた以上は、我々はそれから離れて―つまり、シプトンもエベレストにずうっと囚われ続けていたわけですけれども―本当に好きなヒマラヤの山へ、あるいは自分の好きな山登りに戻ることができる」ということをコメントしております。しかし、その後の経過をみれば、むしろエベレストは常に人を引きつけるというふうに推移していきます。例えば、初登頂から四十年後の一九九三年には、年間に九十人の人達がエベレストの頂上に登っている。エベレストというのはむしろ人気という点では高くなっています。

実は、七〇年は、ヒマラヤで、より困難なルートから頂上へ行くというふうな動きが始まった年ですね。ヒマラヤ鉄の時代と形容した人もあります。マカルーの東南稜もそういう意味では未踏の稜線だったわけですね。で、ヒマラヤのバリエーションの意味なんですが、全く新しい時代というふうに当時言われながらも、実際その登山方法の面では、むしろそれ以前にやっていた登り方をそのままもっと急峻な壁に適用して、補給を繰り返し前線の隊員を頂上に送る、というふうなスタイルを、踏襲せざるを得なかったわけです。その意味では、ヒマラヤの大きな壁というのは、それだけ難しくて、

簡単に手のつけられるものではなかったということがあります。それでエベレスト南西壁は、日本隊の後に一九七一年にディレンファースの国際登山隊、七二年の春には例のヘルリコッファーの国際隊、七二年の秋にはボニントンのイギリス隊、七三年の秋には第二次RCC隊が挑んで、同じような失敗をする、というふうに、ずうっと繰り返されていきます。実際登られるのは七五年の秋になってからなんですね。重廣さんは、七三年に南西壁に行かれた時に最高到達点まで達しています。ちょっと七三年の話しを重廣さんから……。

重廣　七三年と言いますのは、我々が本当にヒマラヤに行けるのかという感じがしはじめた時ではなかったかと思います。大学の山岳部の人達もヒマラヤを登るために極地法という体験を日本の国内の中で積み重ねていって、その頂点がマナスルであったと思うわけですけれども、それ以降そういう人達の登山が退潮していきまして、むしろ社会人の山岳会の人達がちょうど外貨の自由化その他もあったかと思いますが、ヨーロッパの三大北壁を目指して出発をした。そしてその先には、恐らくヒマラヤの頂があったんではないか。そのトレーニングが基本的には日本でできた。

私自身もヨーロッパの三大北壁を目指しているというのが大学時代の山登りでした。我々の登山というのは全天候型登山と言いまして、アルプスを、アイガーですとまあ二八〇〇メートル前後の岩壁を着のみ着のままで、自分の背中に荷物を担いで登る。そのスケールを日本で出したというのが、冬の岩壁の継続登攀、そういう人達がヨーロッパを体験し、ヒマラヤの体験をし、そして集まったのが一九七三年のエベレストの第二次RCCの登山ではなかったかと思います。今、思い起こしましても、あの時の隊の人達が一番強かったなという気がしています。強かったな、というのは、日本の冬の非常に厳しい登山の経験をし、それから更にヨーロッパで実践をしてきた。ただその後日本の登山が退潮し今日になったということで、非常に残念に思っているんですけれども。

池田　では次のビデオに行きたいと思います。一九七六年のナンダ・デヴィ縦走、それから続けて一九八四年のカンチェンジュンガ縦走です。

ナンダ・デヴィとカンチの縦走

池田　この二つの登山は実は八年間離れているんですけれど、両方とも鹿野さんが隊長です。それから重廣さんも参加していますし、共通するメンバーが多いので一緒にビデオを見ていただきました。実はヒマラヤの縦走というのは、壁の登攀に比べると非常に例が少ない。それは、あのように高い山で稜線というのは、常に一番激しく自然条件の影響を受けるわけで、また高所に滞在する時間が長いということで、登山として難しいというふうに感じます。従って、実施自体が少ないし、成功例はもっと少ない。で、七六年のナンダ・デヴィですが、縦走といっても縦走隊独力ではなかなかできないということで、主峰側からトラバースして東西両峰のコルにサポート・キャンプを作っております。縦走隊はそこへ一泊して翌日主峰の頂上へ抜けるという形でした。鹿野さん、ヒマラヤの縦走というのをコメントしていただきたいと思いますが。

鹿野　ナンダ・デヴィの縦走は、どちらかというと古典的なスタイルで二つのルートを延ばして、むしろサポートの方を重視し、縦走隊の下降路をどうやって確保するかというところに重点のある計画だったというふうに思っています。カンチェンジュンガもそうですが、縦走隊がピークをつないでいくそのコルには、サポートがテントを張って酸素を入れて、しかもピークには下降路を確保するということで、ある意味では、縦走という名前ほどには新味のない山登りだったかもしれません。当時の我々の力から考えれば、そういう山登りしか私の感覚ではできなかったということです。

もう一つ、今日はＪＡＣの会ということで多少補足しておけば、ナンダ・デヴィは、日本山岳会・インド登山財団合同という形を取りました。で、日本山岳会としては、実は会の総力をあげて計画に取り組むというより、個人的な計画を会として取り上げたという、いわゆるボトム・アップの形式をとったと思います。その形は、カンチェンジュンガまで繋がっていて、実際には四つのピークの縦走を目標に掲げて、結果は三つ目まで、それも三つ目は多少変則的な形の登頂ですから、決して万歳という程の成功ではなかった訳ですが、山登りの仕方はその二つの隊では一応貫けたかなというふうに思っております。

池田　重廣さんからみて、縦走の難しさというと……。

重廣　ヒマラヤ登山が当初の登頂を目指すものから、より難しくより困難にと高揚するのは必然なんですけれども、我々も一つの体験からそれを更に高揚させていくということで、縦走登山という試みをしました。で、ナンダ・デヴィの時は残念ながら私は東峰の頂上までしか到達できませんでした。そこで燃焼しきれなかった部分をさらにということで、カンチェンジュンガの縦走になるわけです。縦走登山というのは、最後まで自分自身の技術と体力と気力を持たせなければ完遂ができないということで、私自身は一番難しい登山の部類に入るのではないかと思っています。それも八五〇〇㍍という我々の限界点を越えたところで非常に長時間滞在をするわけですから、体に与える影響というものも非常に大きい。私自身はカンチェンジュンガで七二〇〇㍍以上で三十三日間、滞在をするわけですけれど、非常に苦しい登山でありました。ところが、その後一九八九年にソ連がいとも簡単にこれをやった。そうすると、我々は世界に追いつき追い越せと行って山登りをしながら、世界ははるかに進んでいるなという感じがします。

池田　一方ではアルパイン・スタイルというのがあります。一九七五年はメスナーがガッシャブルムのⅠ峰とヒドンピークにハーベラーと二人だけでアルパイン・スタイルで登っております。で、実はその後ヒマラヤでアルパイン・スタイルというのは増えてくるわけですが、アルパイン・スタイルで縦走した例はあるのかと言いますと、二例あります。まず、一九八四年のブロード・ピークです。ポーランドのククチカとクルチカのペアが、ブロード・ピークの北峰から中央峰、主峰と縦走しております。実は、これの第二登を今年、夏に日本人のチームが成功しました。全く同じ方式で三人で縦走しております。では、次の、年代が前後しますが一九八〇年のチョモランマ北壁―チョモランマというのはエベレストですが―、それから一九八八年の同じくエベレスト、これは北面と南面から交叉縦

走をしたときの記録です。二本のビデオを続けてお見せします。

中国側からのチョモランマ

池田　この二つは中国側からの登山ということで一緒にお見せしたわけですけれども、実は内容・意味合いとも違います。特に八八年の場合は日・中・ネパール三国合同ということで、登山そのもの以外の責任といいますか、背負っていたものが非常に大きかったというふうな感じもありますし、ＴＶの取材というものも同時にございました。まず八〇年のエベレストから話をしたいんですが、一九七〇年に南西壁に失敗をしてから約十年、北壁から行くことは意識の上では引きずってきたというふうな意味合いもあったと思うんです。その辺、重廣さん、いかがでしょうか。

重廣　そうですね。六九年のエベレスト南西壁の試登隊の隊長をやっていたのが宮下さんですし、一九八〇年の隊長も宮下さんです。そういう意味では、ヒマラヤのジャイアンツの壁を登るという目標があったのではないかと思います。それと同時に、日本山岳会の中に新しいスタイルが入ってきたのもエベレストの南西壁からですし、それがパーセンテージとして一番多くなったのが、このチョモランマの北壁ではないかと思います。

池田　七〇年当時に例えば壁のスペシャリストが、日本山岳会に参加すると言われたとき、当時の新聞・ＴＶなんかでは、例えば今のＪリーグの外人助っ人のような扱いでしたね。で、八〇年の時は、もうそういう言い方はされずに、それはナンダ・デヴィがあったせいだと思いますが、最初からそういうメンバーが選ばれた。実は北壁ルートは期せずしてエベレストの頂上へ真っ直ぐにいくルートなんですね。よく六〇年代からダイレクトと言われてましたが、エベレストにおいては真のダイレクトはこの北壁の日本ルートということになっています。

　で、重廣さん達が登られたのは春ですが、実はモンスーンの雪が降るとこの壁は状況が変わります。非常に厚く雪が付いて、技術的に非常に易しくなる、もちろん雪崩の危険はあるわけですが。そういう状態を利用して一九八六年にスイスのロレタンとトロワーユの二人が、この日本ルートからアルパイン・スタイルで一気に頂上を往復しています。

　ヒマラヤに限らず山というものは、ある意味では易しくなったり難しくなったりするということがあるという一つの証拠ではないかと思います。それから八八年の交差縦走ですが、この時はチームはそれぞれの国から一人ずつ出してチームを組んで縦走するという約束だったんですね。

重廣　そうですね。これは三国友好登山ということで、私自身はこの友好登山の中で、当初は、できればせっかくのチャンスですから、新しいルートから登りたい、と。北東稜からワン・ウェイで頂上に到達し西稜を下降するというプランを主張したんですけれども、これは中国、ネパールの反対にあって実現をしませんでした。そのかわりに、交差縦走を五月五日に成功させるという命題をいただきました。同時に頂上に各国一名の縦走者を到達させ、なおかつ各国一名のサポート隊員を登頂させるということであったわけです。

池田　山本さん、今までお話し聞かなかったんですが、この時北側

に参加されていましたね。自分も頂上へ行けるというのは当然あったわけでしょう?

山本　この時僕が北側の登山隊の中では、最も若い部類の隊員で、私個人としてはこの時点でまだ過去に一度の高所登山の経験しかなかったわけです。もちろん私自身も頂上へ行く思いがありましたが、全員が頂上に行って向こう側へ下りる可能性があるということで、全隊員がネパール側の隊員は中国のビザを取り、中国側の隊員はネパールのビザを取って出発した。私個人はこの時は残念ながら八二〇〇㍍まで三度荷揚げをしたに止まって、そこで終わったわけなんですが、八二〇〇㍍からみて、非常に近く頂上が見えたんですね。そういう意味では、僕自身にとっては大きなステップになりましたし、またこの登山に若い方が沢山参加していたんですが、この後に確か九名の新しい八〇〇〇㍍の登頂者をこの登山が生んでいるんですね。期せずしての効果だったかもしれませんけれども、そういった意義は、あったと思います。

池田　もう一つ、二つの中国登山に関して共通するのは、例えばそれ以前のマナスルは格別として、非常に大きく報道で扱われた、特に新聞よりもTVで扱われたということじゃないかと思います。とにかくTVが中国の素材を放映するというのは、あの頃から一気にブームになっていったわけです。今までパキスタンやインドやネパールでやってきた登山と非常に違う要素が入ってきた。それが登山隊の規模を必然的に大きくした。それでは、続きまして一番最近のマカルー東稜とナムチャバルワのビデオを上映いたします。ナムチャバルワは一九九二年、初登頂です。それからマカルー東稜は九五年の春、これも東稜から頂上へ行ったのは初めてです。

ナムチャバルワとマカルー

池田　ビデオはこれで終わりです。まず通してご覧になった感想を原さんから聞いてみたいと思いますがいかがでしょうか。

原　僕はですね、今日はこれから先のことが議論されるというので、結論の方から言いたい。私の完全に個人的な意見ですけれども、これから先、日本山岳会はこういう集団登山をやっては駄目だと思います。集団主義というのは、今日ここで問題になっておりませんが、中国に一体いくら金払ったんだという話から始まるんです。そういう登山をやって来た。私がマカルーへ行った時も、集団主義の登山の極致みたいなもので、数学の一番できる奴に、お前が管理しろ、俺はもう上に行かない、まあ極地法の登山というのはそういうものです。で、マカルーをやった後、私は二度とこういう登山をやりたくない、と固い決心をし、それで隊員の数も六人以下、それ以上の隊員は決して認めない。

　アルパイン・スタイルというのは基本的には、ラッシュ・タクティクスのことですけれども、ヒマラヤですから順応の期間がいる。しかし、下へ下りてきて、そして最後の登頂は一挙に行くというわけですね。マカルーをやった頃には、そのことがはっきり私はわかってなかった。で、マカルーの後、アルパイン・スタイルの登山しかやらないという決心をしてから、高所の登山というものは、順応の段階で、下へ下って回復してから一挙に上がる、そういう方法が大切だというふうに思うようになったわけなんです。ですから小チー

ムでやるからには、それなりの美学があるんだと。それともう一つは、山の途中に平な部分があると非常に困難になる。従って、一番気分のいい登山をやるためには平均傾斜三〇～四〇度のそのまま頂上に繋がっているようなルートを採用すべきだ、と。もちろん物量をかければ、縦走でも何でもできるわけですけれども、物量を無限にかければヒマラヤ全山縦走でもできるのかというと、疲労困憊しますから多分できないと思います。繋いでいけばできる。

そうするとどこに物量と、完結した登山というものの接点をとるかということを、これからの人は考えていくべきで、何でも作業量を増やせばいいという考えはよくない。それからチームの数も六人を原則とする。六人以上のチームというのは、どうしても人間関係に腐敗が出てくる。我々のマカルーでもありましたけど、日本の経済が大変悪くなってきましたから、あんな大量の金を払って中国に行くということもできなくなってくる方がいいんじゃないか。そうすれば、登山ももっと個人の戦いという方向へ行く。これから先は、日本山岳会であろうとどこであろうと、やはり小チームでやるべきだと、そういうふうに思っています。

池田　いきなり結論が出たんで、後のことが話しにくくなっちゃうんですけど。ただ、先程重廣さんおっしゃいました、日本の登山が退潮しているんじゃないかと、登山家の質といいますか、そういう面で。ちょっとそこを詳しく。

重廣　私のヒマラヤ登山の原点は一九七三年のエベレストになっているわけです。それにヒマラヤ以外の山で非常に体験を積んだ人が、ヒマラヤ登山は初めてということでたくさん参加しまして、エベレストが終わってから、それぞれが違う道を歩き始めました。長谷川恒男は、個人の力で冬の三大北壁を登る。それを完成した後には、同じような形態でヒマラヤの頂に迫ろうとしました。加藤保男はアルパイン・スタイルでヒマラヤのジャイアンツを登っていく。で、私の方は、どちらかというと比較的大きな遠征隊に参加した、ということです。これは一九六〇年から七〇年前後の間に、同じような体験を日本の岩壁でした人達です。そういう人達が今の若い人達と違う点というのは、ただ一点、すべてを総合した耐久力というものです。どうも最近の山登りというのは、外からの力に支えられた山登りに変化をしてきているんではないかと思います。一九二四年ですか、ひょっとしたら頂上に登ったかもわからないというマロリー達の服装・装備を今から振り返ってみますと、せいぜい我々の冬の通勤着にすぎません。そうなると、人間の方がだんだんと弱くなっているのではないかと考えざるを得ないわけです。

残念ながら、日本は社会環境の変化でこの二十年間で若い人達の山行日数がどんどん減ってきています。新しい風潮といいますか、状況がどんどん良くなっているわけですから、ある日突然山登りを初めても大体のところを登ることができる。装備その他が発達をしている、あるいは情報という登るための手段が完備しているわけですから。山登りというのは自らが切り開き―目標を設定し、その目標を完遂するためにいろいろな情報の収集であるとか、トレーニングというところから頂上に一歩一歩近づいていったわけです。今では、その過程なしに頂に到達することができる。

もともとヒマラヤ登山はイギリス隊がシェルパの養成をして、

シェルパの力に助けられながら、ピークを目指していきました。一九七〇年代に入りますと、それまでシェルパに頼っていた荷揚げを自分達でやる—この究極がアルパイン・スタイルでありますけれども、それに変化をしてきた。ところが、一九八〇年の後半から再びシェルパの力が必要になってきました。そしてシェルパの人達が知識・技術・体力ともに向上してきた。それまでは、隊員がルートを拓いたところを荷物を背負ってサポートするという役目であったものが、最近ではルートを拓き、なおかつ荷物を上げて、さあどうぞ登ってくださいというところまで来た。時代の移り変わりといえばそれまでですけれども、我々は、本当の山登りとは何であろうかと、もう一度思い起こしてみる必要があるのではないかと思います。

池田　山本さんどうですか、今のご意見を聞いて。

山本　そうですね。原さん、重廣さん含めて、我々若い人間にとっては痛いところを突かれたなというところもあるんですが、アルパイン・スタイルの象徴である冬季登攀をする人間は圧倒的に減っていることは、もう間違いないことだと思います。ただ、私としては、登山そのものが世間一般からあまり認知を受けていないというのが、一つ大きな原因ではないかと思います。要するに今の若い人達は非常に計算高い、行く先が明るくないものに情熱は燃やさないという部分が多かれ少なかれあると思うんですね。ですから日本山岳会の青年部の中で数年海外登山ということを行なってきましたけれども、結局それが大学四年間ないしJACに何年か来たその修学旅行的な意味合いでの遠征登山に止まって、次のステップに繋がらないというのも、結局続けていればまっとうな社会人として生きていかれない、そういったようなこともあるわけですね。

重廣　今のお話しで誤解があったら困るので、言い添えておきたい。我々の日本山岳会の登山の中でナンダ・デヴィ以降現在でも日本での登山—それも厳しい登山、それから海外登山を続けておられる人達がいます。それがチョモランマ、カンチェンジュンガ、ナムチャバルワそして今回のマカルーの中核になっている。決して光明がないわけではありません。是非、今後も続けて行ける環境を、我々が作る必要があるわけです。

池田　私が『岩と雪』という雑誌をずうっとやってきて感じることは、確かにアルピニズムの方の人材が減ってきているという事実です。例えば重廣さんの世代というのは、すでにもう五十近い歳になっている。その人達はもうずうっと登ってきた実績もある。何が足りないかというと若手の参入です。例えば、昔だったら二十歳そこそこでとんでもない奴がいる。イギリスの登山界なんかを見ても、ボニントン、スコットみたいなベテランから、今の二十代の人達までずうっと続いている。日本でも、八〇年代ですね、加藤保男さんはじめ何人かのリーディング・クライマーが、ヒマラヤで命を落とすということもありました。確かにそういうことが精神的なこの種の山登りに対するブレーキ要因になるかなという気もしますけれども、例えばイギリスなんか、もうすぐ次の世代が育っているんです。

日本の場合に今、才能のあるクライマーは、やはりフリー・クライミングに集中していて、そこから出てこない。逆にいえば、ここ十年以上の日本のヒマラヤ登山というものが決してはたから見て面白いな、あるいは私もやりたいなと思わせるものではなかったとい

う事実が一方にあると思います。そういった意味で、何かヒマラヤ登山がある種、登山界の—言葉は悪いですが、進歩から取り残された人達の牙城になりつつあるんじゃないかと、私は『岩と雪』を編集しながら思っていました。

今もう一つ思うのは、一般の人がヒマラヤの高い所へ行けると、例えば六万ドル出せばエベレストに行けるという—これはまた別の意味で、歓迎すべきことだと思うんですね。そういう登山で一回ヒマラヤへ行きたい人と、自分がある限界に挑戦するという意味で続けて登山をやる人の境目というのが、今はっきりしていないんじゃないか。特に、登山に参入してこようとする若い人達に見えていないんじゃないかという気がするんです。鹿野さん、その辺いかがですか。

鹿野　一番最初にも申し上げたけれど、ヒマラヤの黄金時代は後にも先にもあの時代だけで、我々がもう一度追体験しようというのは無理だということを押さえておく必要があるだろうと思っています。僕自身はヒマラヤの鉄の時代と同時に、日本の高度成長期というのにもたまたま出くわして、いつの間にかヒマラヤがむこうから近づいてきてしまった。その中で山登りを二十年位してきた、という実感です。では、今は何なんだという話なんですけれども、普通の人がヒマラヤへいろんな形で登っていく多様化の時代というのが一番正確な言い方で、その中にはパフォーマンスとして商品価値の高い山登り、という言い方をしたら怒られるかもしれないけれど、する人がいてもよろしいだろうし、一人で全く他人の評価というものを考えない山登りというのをする人がいてもいいだろう。

結論は僕は割と原さんと近いところへ行っている。つまり、これからは他人の評価というのを基準にして山登りをする時代ではない、と。池田さんはジャーナリストだから、面白い山登りがなくなったというふうにおっしゃったけれども、「いやそんなことはない、俺は面白いんだ」と言ったら、それでよろしいという時期に来ていると思いますね。その中で、いい山登り悪い山登りがあるかというと、悪い山登りというのはこれは非常にはっきりしている。つまり山で死んではいけないし、そこに住んでいる人に迷惑をかけてもいけないし、自然を汚してもいけない、そういうふうな意味ではっきりしている。では、いい山登りというのは悪いことをしなければいいのかというと、そうではないわけで、原さんが美学というふうにおっしゃったけれども、美学といえばこれはもう最終的に好みの問題になるだろうと、僕は思うわけです。

もう一つは、果たして登山家というのは育つものだろうか、育てるものだろうか、ということ……。僕は大学山岳部の育ちですから、システムとして人を育てるものだというふうに思っていた。育てられてきたというふうにも思いました。ところが、重廣にしても加藤保男にしても、誰かに育てられたという節はないわけです。実際に七〇年代に山登りを一緒にやって、すばらしい山登りをするというふうに思ったのは、どうもそういう人達ですね。登山家というのは無理して育てるようなものではないんじゃないだろうか、と。

池田　今の後の方の育つか育たないかということですが、人に刺激を与える登山界の雰囲気とかサークルの雰囲気とかというのは、ある程度大事だと思います。歴史的にはそういう山岳会なり山岳部と

いうのが全国に幾つかちゃんとあった。そういうところが人材の供給源になっていたという気がするんです。一方、翻って日本山岳会は会主催の遠征を幾つもやっている。しかし日本山岳会はそういう人達を育てるための場所であるか、というと、それは結局無理なんじゃないか。会員の中で有志が何人か集まって山へ行こう、ヒマラヤへ行こうということがあってもいいし、そういう場所としては常に活発であって欲しいけれども、日本山岳会の活動目的とそういうものとは一緒にならないんじゃないかという気がします。

原　二つ問題があると思うんです。一つはゼネラリストとスペシャリストの問題、ヒマラヤ登山はもちろんゼネラリストの問題ですから、どこかで壁だけ登っている人は当然ヒマラヤ登山はできない、やりたくないと言ってるんではなくて、できない。そういう意味では、ゼネラリストに価値を置くという考えがない限り、ヒマラヤ登山は価値があるものだとは言えない、その価値観が大事だと思うんです。それともう一つは規制緩和の問題です。要するに、どうして日本だけが面倒臭い推薦状の発行とかいうことがあるのか。止めるべきです。

池田　ただ、七〇年代にはある程度、原さんのおっしゃる推薦状の問題もあるけれども、昔に比べればはるかにらくに、行けるようになった。しかし精神の面での転機が起こらなかったということが言えます。やはり日本人の場合、行っている回数がそう多くない。例えば一人のクライマーだけをとっても、数行けば学ぶことも多く新しいことをやろうというふうに変わってきます。

鹿野　七〇年代のクライマーというのは、非常に層も厚かったし、優秀だったと、それは僕もそう思います。ただ本当に自分のイマジネーションで山登りをしていた人がどの位いるかという点になると、実は怪しいかもしれないという気がする。

JAC百年にむけての展望

池田　この辺で結論にもって行きたいんですが、そういう状況の中でじゃあ日本山岳会は何をすべきか、あるいは日本山岳会に何ができるかということですね。それを百周年への提言として、やはり社団法人で法人格を持っているし、だから遠征の母体になることは充分できる。で、日本山岳会隊を何年かに一遍出すんじゃなくて、多くの隊に日本山岳会という冠をかぶせて、行かせてやること—具体的には、基金ですね。あるいは日本山岳会の推薦があることによって、いろんなメリットがあると思います。もう一つは、情報サービス。アルパイン・クラブは既にコンピュータ化されている。パソコンで情報を取り出せるようになっていると思う、やはりそこまできちんと行くだけの力と、お金と、まず場所もあります。

原　結論はいつも言ってるんですけど、日本山岳会が会員に対して実益のある会になるためには、会員を十万人にすることです。そうすれば、保険も全部ある。紹介の制度というのは有名無実ですから、どこかの郵便局からでも入れるというような会に変身した方がいいと思います。会員を十万人にすれば、今、池田さんが言ったようなことはできるし、一番大切な日本の自然を破壊から守るという力も得られるのではないか。とにかく日本山岳会は自然保護とかいうけれども、実際には何もできない。力もない。

鹿野　私は個人的には、登山隊を出すための基金というようなものが本当にいるのだろうかということには、疑問があります。つまり、日本山岳会はオープンな場であるというのが原則だとすれば、その中でどういうふうにセレクションをやっていくのだという問題が当然出てくる。一方で開放的になりながら、一方で権威あるいは力を持つというのは大変難しいことで、反対をしているわけではないんですが、よくわからないというのが正直なところです。一番大事なことは、悪い山登りというのはこれははっきりしているわけで、お行儀の悪い登山というのは国内でもそうでしょうし、僕等も時々ネパールやインドへ行ってみていれば、いくらでもぶつかる。そういう意味で果たすべき役割はある、というのが一つ。それからもう一つは、あまりこういう登山がいいんだということを言うのは逆にいえば、ある意味でそれ以外のタイプの山登りの足を引っ張ることになる。日本山岳会は登山のあるべき姿というのを、あまり明確に打ち出すような組織ではないだろうと思っています。

重廣　今、日本山岳会というのは大きな変革期を迎えているのではないか。これからの日本山岳会というのは人数はもとより、いろんな多岐にわたった会員にどういう具合に対応していくか。それぞれの会員がいろんな期待をもって日本山岳会に入ってきておられる。その意味ではどんどん日本山岳会の会員の平均年齢も高くなっていますが、是非若い人達にはこれから更に研鑽を積まれて日本山岳会の山登りの中には、やはり確固たる流れを作っていただきたい。

山本　私の場合は、今日スポットの当たったＪＡＣの海外登山ということについて、先程から、人が育てられるかどうかということが焦点として出ていますけれども、僕は機会を与えてそれがその後、個人の努力で育ったことを、こっちから見れば「育てた」と言っていたに過ぎないと思うんです。それはこれからも機会を与えることによって、充分できると思います。いろいろ登山の計画が立てられていますが、ある登山を計画すれば、何を今更というような言葉をたまに耳にするんですね。ただ、どこの場所に行こうがその人達にとっては非常に新鮮なものなんだということを先に経験をした者が若い人達に語り継いで、体験させていく。その結果育つかどうかということは、別問題として、そういうことが今後の日本山岳会の海外登山というものを良い方向に持っていくのではないか、と感じております。

池田　確かに鹿野さんがおっしゃるようにいい登山と悪い登山―悪い登山はあるけれども、いい登山は決められない―ということがあります。しかし、漠然とした言い方ですが、さっき原さんがおっしゃっていた美学というふうな言葉で、なんとなく皆がいい登山というのはあんなものじゃないかなと思っているものがあるんじゃないか、いかにスマートに次の山をやっていくか。一つ終われば常にそういう進歩の感覚を持つことが大事じゃないか。百周年に向けてということであれば、これから十年のヒマラヤ登山は欧米の業績に追いつくのではなくて、むしろ精神に追いつけと言いたい。それができれば、ヒマラヤの美学―余計なもののない本当の純粋な登山―充分成果のあがる登山ができるのではないかと思います。皆さん、本当に長い間ありがとうございました。

桜門の山を語る

―日大山岳部エベレスト北東稜への軌跡―

松田雄一

平成七年秋に図書委員会担当南井理事より明年二月二十三日の山岳史懇談会で「日大山岳部の話をして欲しい」との依頼を受けて、当惑した。

山岳史懇談会という会は、そもそも伝統のある山岳部（会）の初期の頃の部報を中心として、その部報を繞る秘話のようなものを含めて、当時を回顧した話などを語ってもらい、これを記録に残す、というのが本来の趣旨であると理解していた。しかし日本大学山岳部には恥かしながら、外部へ発表するような部報は一号も発行されていなかったからである。

勿論七十年続いている部であるから部内誌的なものは、ないわけではないが、これも後述するように、必ずしも統一されているものではなかった。

そこで今回は、戦前のＯＢである崎田熙（会員番号三〇八四番）、村田顕（同三〇八二番）をメイン・スピーカーに、終戦直後のＯＢである芝田稔、北極点遠征隊長の池田錦重（同六〇三一番）等を加えて、時系列的に話をすすめてもらい、これを司会役の松田（同四一一一番）がまとめることにした。

草創期の頃

日大山岳部は、一九九五年に創部七十年を記念してエベレスト北東稜に登山隊を送ったので、七十年の歴史があることは想像できるが、創立の頃のことについては極めて曖昧な記録しか残されていない。日大山岳部の部内誌として一九三六年十一月に刊行された『岳人』第一号には、創立者の一人である豊島攖ＯＢにより「思い出すままに」と題して次のようにこの辺の事情が説明されている。

当時は他の大学のように山岳部を作りたいと考えても、大学当局の山岳部に対する認識がなく、大学当局から承認を受けることは困難を極めた。〝学生集会〟という名の各運動部の統制機関に向って正攻法を以って〝大

学の山岳部〟として形式だけでも公認してもらいたいと嘆願におよんだけれども、なかなか埒があかなかった。そこで今度は手をかえ、僅かの知り人の口添えを以て、当時の大学の職制における山名氏に運動した。また山名氏に働きかける前に山岡学長に、個人的な了解だけは得るようたのみに廻った。それが奏功したのか、七月に入って、暑中休暇となる頃、突然僕は呼出しを受け、山名氏の所へ出頭、天幕その他必需品だけを買ってもらった。品物は僅かであったが、山岳部に対して大学の特別会計で品物を購入して呉れたことは、即ち吾々の山岳部を事実の上で認めたことである、僕は嬉しかった。僕は朗らかな気持で信州の山へ入った。大正十四年夏のことである。



山岳史懇談会における桜門のメンバー　前列右から村田顕、崎田照、星野辰雄、山本晃弘、後列右から谷口元、池田錦重、松田雄一、芝田稔、小金井清治、中嶋啓、高緑繁伸、神崎忠男の各氏

大学当局の認識に問題がある一方、吾々の山に対する認識、自覚の程度も幼稚なものであった。一部の者以外には、冬期登山ということを殆ど考えておらず、或る者は散歩の延長位にしか考えていなかった。だから公認問題を解決する意味に於いても、山岳部の仕事はできるかぎり盛り沢山にしておかねばならぬと考え、冬期にはスキー、スケートの方にまで手をのばして活躍すると云ったような趣意書を作成した。そのうちに、吾々の運動の結果というよりも、時勢に対して当局がようやく眼を向けてきたのか、ともかく、予算会議にも招集されるようになり、公認問題は解消した。

こうして吾々は、本格的に部の運営についても考えるようになったが、今度は、山と自然を対象とした登行という行為を目的とした〝山登り〟と人と人との競技を目的とすべき〝スキー部〟、〝スケート部〟というものとは本質的に別個のものであらねばならぬと気がつき、第二期の運動としてスキー部を独立させることになり、部員総会の承認を得て、大学当局とは何等のいざこざなしに、極めてスムースに三沢龍雄君を首脳とするスキー部が、山岳部を母胎として分離独立することになった。しかしスケート部は、本格的にスケートをやる人がいなかったため流産に終った。

こうして昭和二年四月、進歩的、先鋭分子として、暁星中学出身の初見一雄が入部してくるにおよび、山岳部はハイキング部から、本格的な山岳部へと発展していくのである。

初見一雄の活躍

初見一雄は、暁星中学の時代から大学山岳部への入部を希望しており、日大に入学するとすぐに山岳部を捜したが、山岳部はすぐには見つからぬ様な状態で失望した。そこで初見は暁星中学が当時の中央線の始発駅のすぐ近くにあった関係で「土曜の夜に飯田町へ行けば、山に出かける誰かに会えるだろう」と思いつき、熱心に飯田町駅へ出かけ、ここで法政大学の角田吉夫氏（会員番号一〇四六番）

と知り会うのである。角田吉夫氏は当時法政大学山岳部のリーダーであったが、初見一雄の熱意にほだされて、関温泉の法政のスキー合宿への参加を認めてくれた。角田氏は後に日本山岳会の理事をつとめ、「山日記」や「会報」の編集を担当された方で、このような先輩に出会えたことは新人の初見にとっては幸運であった。このスキー合宿でスキーや岩登りの上手な高橋栄一郎氏（会員番号一一六二番）の指導も受けることができたことも幸運だった。こうして日大山岳部でリーダーに恵まれなかった初見も、めきめきと腕を磨き自ら日大山岳部のリーダーとしての力をつけていった。このように法政大学山岳部は、日大山岳部からみると兄貴分でもあった。

〔編者注〕初見一雄のこの間の経緯や山歴については、一九九三年に日本大学理工学部平山研究室発行の『初見一雄追悼集』を参照されたい。

一方初見一雄は部員の養成にも努力し、昭和三年十二月には針の木谷の大沢小舎でスキー合宿を行っている。この前年の昭和二年の十二月には早大山岳部が大沢小舎スキー合宿中に篭川谷で雪崩に会い四名が帰らぬ人となった丁度その一年後であった。

日大山岳部の創立者である豊島擴も、山岳部が当局から公認された時を最初のスタートとすれば、この大沢小舎生活が、二度目のスタートで、謂わば山岳部としての本当のスタートであったことを認めている。即ち「昭和三年十二月から翌年一月へかけての大沢小舎生活は、登高と云う点に於いてこそ、針の木岳、蓮華岳への放射状登高を目的としただけで劃期的な仕事と云う訳にゆかぬにしろ、吾々の山岳部としては、初めての本当に大きな計画であった。それだけに参加部員は、いずれも優秀な人達であった。初見、石井蔵之助、毛馬内次男、葛原合二、それに僕、等は、夏山を終ると直ちに、この準備工作に没頭し、幾度か研究会を開いたし、新雪の来る前も、来てからも準備のために、何回も現地へ向った。この計画内容は総て初見一雄君の腹案であった。極めて合理的に出来ているものと僕は考えた。そしてここ迄山岳部が飛躍したことがどんなに嬉しかったか、非常な喜びで初見君の説明を聞いたものである」（『岳人』一号）。

そうこうしているうちに関東学生登山連盟が昭和四年十一月に結成された。人のいい初見一雄は、早速かつぎ出されて創立総会の議長を勤めた。このように学連活動にものめりこんだが、部員の養成を忘れず、秋、冬、春山と毎シーズン穂高の積雪期の登山を実施していた。当時は穂高の積雪期の初登攀の時代で、主峰は登られても、難しいルートは残されているといった状況にあり、昭和六年の暮れから翌年の正月にかけては、槍～穂高の初縦走を誰がするかということが注目されていた。

先ず十二月二十二日に、立教隊の堀田彌一、沢本辰雄の二名がガイドの今田由勝を伴って槍～奥穂までの初縦走に成功。次いで学習院の加藤泰安が、ガイドの中畠政太郎と二人で十二月三十一日に槍～穂高小屋に達し、更に一月六日には穂高小屋～奥穂～西穂までの完全縦走を達成した。初見一雄率いる日大隊も学習院に遅れること一日、一月一日には肩の小屋に入ったが、以後五日間は風雪で動けず、一月六日になって初見、西山毅の両名は、ガイドレスで槍を出発。前の二隊が本谷カールを経由して北穂に達しているのに対し、大キレットを忠実に通過して北穂に達したが、穂高小屋の手前涸沢

岳のコルで日没となったので、このコルから徳沢へ下った。その後一月十一日に初見、毛馬内、武藤の三名は、再び穂高小屋に入り、十四日奥穂に登っているが、その頃の日大の力は他校に引けをとらぬところまで育っていた。

しかしこの時代には初見一雄が一人ですべてをこなしていたため、部報の刊行にまで手が廻らず、やむなく冬の穂高の記録などは学連報告に記録を残すことにしていたように見うけられる。

昭和七年十二月には待望の日大山岳部の部報第一号が刊行されたが、これも他校とは異り、部内誌の域を出たものではなかった。

富山衆の頑張り

初見一雄の在学中に、富山出身の所謂〝富山衆〟の廣田憲治（会員番号四四一七番）、米沢直治、土肥信義（会員番号一五三八番）等はスキーで、立山周辺を登っていたが、積雪期の穂高でも直接初見の指導を受け、初見が北大農学部に学士入学した後の、日大山岳部の後継者として育っていった。中でも廣田憲治は、対外的に知られた初見一雄に対し、地味であったが、後輩の面倒をよく見て、山岳部では神山勉はじめ多くの部員の信望を集めていた。

剱岳の西麓五百石で生まれた廣田は当時、未踏の池の谷の大滝を登って剱岳に立つことが、夢で、そのチャンスをうかがっていたが、昭和九年の春、大雪で大滝が埋ったとの情報を得ると、直ちにパートナーの鈴木（旧姓渡辺）克己（会員番号三七八六番）と共に馬場島に入り、慎重に偵察の末、四月九日夜半、雪の落ちつくのを待って、土地の猟師も入らぬ、前人未踏の池の谷の核心部を通過し、左俣を経由して剱の頂上に立った。この日は陽がかげるまでかなり長時間、長次郎の頭付近で時間をつぶし、雪崩がおちつくのを待ってデブリの中を往路と同じ馬場島へ下った。この翌々年、（昭和十一年）の三月には、池の谷尾根の登攀をめざした早大、青木茂雄氏のパーティーが、池の谷を登っているが、廣田パーティーは、池の谷初完登者として記録に残されることになった。

神山勉の黄金時代

日大山岳部中興の祖といわれた神山勉（会員番号三〇九〇番）は、昭和七年四月、渡辺克己と同年次に入部し、昭和十五年三月まで七年間在部していたが、この時期は、初見一雄が北大に進まれてから後、廣田憲治等三人の富山衆の頑張りがあって部員数も多くなり、戦前の山岳部の黄金時代を迎えていた。

当時、日大は、学校のデパートといわれるほど、学科が多く、それには付随する予科や、専門部もあり、地域的にも校舎が各地にバラバラに分散しており、集会を行うにしても、一堂に全員が集まれなかった。山岳部も各学部、予科、専門部等に部室をもち、それぞれの部署で予算も獲得し、必要な備品を購入していた。部内誌も予科理科は『霧氷』、専門部工科は『氷稜』というように、各山岳部でそれぞれ出していた。しかしこれら各山岳部は日大山岳部の傘下にあり、本部のリーダー会がまとめ役となって、夏山、冬山、スキー合宿等の大きな合宿は運営されていた。今でも、当時のことを回想すると、スムースに連絡がとれて、よく纏っていたものと感心させられる。（崎田熙談）

なおこの間に、昭和十一年十一月九日、「神田北沢グリル」において、三澤辰雄、戸村貞男、土肥信義、林幹夫、平沢一久等十五名が集まり、桜門山岳会の結成式が行われ、ＯＢ会が正式に誕生している。（『岳人』第一号参照）

神山勉を中心とする戦前の黄金時代のことについては、当時の主力メンバーの一人であった崎田熙は、次のように語っている。

「その頃戦争は迫っていたが、それ程の逼迫感はなく、山にもまとまってよくでかけていた。日大山岳部としての部室はなかったが、神田神保町の交叉点の角から二軒目にあった「万崎」デパートの四階にある食堂によく集っていた。というのはその食堂の一角に、十畳程の部屋があり、この部屋をいつの間にか山岳部が占領して集っていたのである。場所もよく、食事も出来るので大変便利だった。ここにいけば必ず山岳部の誰かがいるという具合で、ここが山岳部の部室代りになっていた。

昭和十三年になって、大阪薬専を卒業した佐藤耕三が三崎町の商学部に入ってきた。彼は山の経験も豊富な、異色な人間であったので、予科から来た山岳部員も大きな刺激を受け、教えられるところも多かった。ややもすれば、長年同じ場所で純粋培養になりがちであった我々は、彼の入部によって刺激を受け、お互いに切磋琢磨することができた。

昭和十四年十二月には、神山勉をリーダーとして天狗のコルから槍までの極地法登山を実施したが、この冬は例年に見ぬ悪天候の連続で第一キャンプ予定地の天狗のコルにも登り得ず敗退してしまった。そこで翌十五年三月に佐藤以下十九名により、同じルートで再挙を図ったが、この時には余裕をもって槍の頂上を往復して、自信を強めることができた。」この時のリーダー佐藤耕三は、報告文の巻頭に計画の意義につき次のように説明している。

「多数の部員を有するわが部は、夏や冬の合宿をのぞき、三々五々隊を組んで山行しており、全部員の精神的和合を図りながら困難な山へ立ち向おうとするには、分散的・集中的登山よりも、「極地法」と云う登山法にまとまって来るのは進むべき当然の方向であった。ただ極地法の研究とはいっても、我々の行った登山は、大きな山を仮想しての訓練をいうような意味ではなく、最も安全確実に穂高を経由して槍ヶ岳を登るための手段にすぎず、そこには一点の無理もない、団体的な強大な闘志がひそんでいたことを見逃すことができなかった」と述懐している。

この余勢をかって、四月には、佐藤耕三が薬専時代から狙っていた、当時未登攀であった不帰二峰の東面バットレスを、本片山数男（旧姓平野　会員番号三〇八七番）等四人のメンバーで初登攀している。しかしながら昭和十五年八月に、前穂北尾根四峰バットレスで、入来・上関の二名を失う遭難事故を起こし、失意のうちに、三田貞夫、遠藤二郎、湯浅英世らに後を引き継ぐことになったことは残念であった。

〔編者注〕佐藤耕三については、『佐藤耕三追悼集　俺って一体何だったのか』（一九九四年刊行）を、神山勉については、桜門山岳会編の『雲表の友』（一九六九年刊）を参照されたい。

戦時中の山岳部

以後終戦までの経緯については、村田顕に語ってもらった。

「この間山岳部は三田（昭和十七年卒）、遠藤（昭和十八年卒）、湯浅（昭和十九年卒）と部のバトンを引き継いできた。

昭和十六年十二月八日には、太平洋戦争が勃発し、世の中は騒然としてきた。文部省から団体行動が規制されたこの年は、殆ど山に行けず、マラソン等で非常時にそなえ訓練を行っていた。この頃は食糧難で苦労したが、十七年からは小グループで四月に富士、五月に穂高、七月には、文部省より体位向上の名目で米の特配を受けて剱沢に入っている。この頃より戦争は激化し、四月には東京が空襲され、六月にはミッドウェー海戦に敗れ、戦局はますます厳しくなってきた。

この頃には部の集まりも交番に届け出なければならず、山岳部の集会中に特高警察に踏み込まれたこともあった。その頃の議論の中心は〝生と死〟の問題で、山での死、戦場の死について真剣になって討議していたことを想い出す。結論としては山で十分に体を鍛え、また登山を通じて習得した山登りの戦略や戦術等の技術は、軍隊に入ってからも、必ず役にたつと思われるので、堂々と山には行こうではないか、というものであった。

この頃には文科系の学生には召集がかかり戦地へ赴いた者も多かったが、日大の山岳部は工科系の部員が多かったので、山岳部の活動は続けられており、昭和十八年の三月には、北尾根から奥穂への極地法が計画され、入山した。五月には谷川岳、七月には剱沢にも入山して夏山合宿が行われた。

昭和十八年十月二十四日、神宮外苑で出陣学徒の壮行会があり、十九年になってからは山岳部としての山行は出来なくなった。」

戦後の山岳部の再建

こうして終戦をはさんで戦後になるわけであるが、昭和二十一年春、足立区の千住柳原に住んでいた神山ＯＢから、焼け残った丸三製紙の工場に集るようにとの招集がかかって、ここで戦後の山岳部の再建計画が立案された。

戦争中から続いていた工科系の山岳部に対し、戦後は法文学部に新しい山岳部ができて活発に動きはじめた。それでは山岳部の伝統が伝わらなくなるということで、急拠戦前のＯＢにも招集がかかって、ここで戦前派の山岳部と戦後生れた法文系山岳部とが合体することになった。そして正式に体育会への加入が認められ、三崎町の校舎に立派な部室が確保された。戦時中に疎開しておいた器具も戻り、部員募集も活発に行われた結果、多くの新しい部員も入部し、ここに戦後の新生山岳部はスタートすることになった。

昭和二十一年五月、戦後初の合宿が谷川岳で行われた。この合宿には二十名の部員の他に、金坂他数名のＯＢも参加。七月には剱沢で、森下吉雄、横沢利武リーダーのもと本格的な夏山合宿が行われ、山岳部らしい形が整った。

戦後の山岳部には町の山岳会出身の者も多く、彼らの中には尖鋭的な岩壁登攀を志向する者もいたが、この中の何人かは、夏山合宿後社会人団体の日本山嶺倶楽部等へ移っていった。このように夏山

合宿で篩にかけられた人たちが部を去っていったので、九月の新学期になって再び新人募集が行われ、石坂昭二郎、芝田稔等が入部、次の年の春には、北村二郎、松田雄一等が入部し山岳部らしい形をなしてきた。この間ＯＢの人達も纏ってきて、千住柳原の神山宅には、常にＯＢが集まっていて、折にふれ学生にも声がかかり、よき先輩に恵まれて山岳部は順調に再建されていった。

ここで戦後の日大山岳部の再建に尽くした現役部員の記録について触れたい。まず一九五〇年厳冬期の石坂、岡本等による「北鎌尾根独標側稜より北穂高往復」（日本山岳会学生部年報第六号）、翌五十一年冬の北村、松田等による「奥又白より槍ケ岳の往復」は途中に前穂高山頂のＣⅡより前穂高東壁の集中登攀を行うなどユニークな計画であった。その後の特記すべき記録としては、一九七一年春の宇奈月～西穂高までの完全縦走（学生部年報第六号）、七八年春の「日高山脈全山縦走」（『山岳』第七十四年）等があり、現役部員だけの海外合宿として、マッキンリー、マーカス・ベーカー、アイランド・ピーク等がある。

〔編者注〕戦後の日大山岳部再建については『山岳』第四十九年号（一九五四）に金坂一郎により『戦後の学生登山―4、再出発の断面・日大山岳部の場合』と題して詳述されているので参照されたい。

山日記を通じた日本山岳会とのかかわり

日本山岳会の戦後の再建については、槙、松方、藤島氏等の首脳により、日夜努力が続けられていたが、谷口現吉（慶応ＯＢ）、関根吉郎（早大ＯＢ）、堀田彌一（立大ＯＢ）、林和夫（北大ＯＢ）等各大学のＯＢにも協力要請のための招集がかかり、これからの山岳会をどのように再建するかということで、業務を分担してすすめていた。

まだお茶の水のルームがなかった頃であったが、駿河台の岸体育館は活動を開始していた。この頃、福井正吉氏（会員番号四〇三六番）が、体協の事務局におられ、この頃は未だ会員になっておられなかったが、山が好きで、何かと日本山岳会に便宜を図ってもらっていた。こんな或る日、茗渓堂の坂本社長が体協の食堂で、軍隊時代の上司に会い、その方と福井氏が知り合いであった関係で、福井氏が、坂本社長を日本山岳会に紹介して下さり、茗渓堂が山日記を引き受けることになった。

この頃日本山岳会の山日記担当は、谷口、関根、林氏等が引き受けておられ、日大の神山ＯＢにも山日記編集を手伝って欲しいとの要請がなされた。このような関係で神山ＯＢは昭和二十二年九月、金坂、千谷らＯＢ十四名と一緒に日本山岳会に入会し、日大グループが山日記編集の実務を担当することになった。

こうして戦後復刊第一号にあたる山日記第十四輯（一九四九年版）は、昭和二十三年十一月刊行されたが、編集委員には、林和夫、千谷壮之助、金坂一郎、谷口現吉、津村利男、村田顕、神山勉の七名の名が記されている。このうち、五名は日大ＯＢであり、谷口現吉氏が編集代表になっているものの、実質的には神山が編集長であった。戦後初ということで、山小屋、登山コース、登山団体の調査などはすべて白紙からの調査をする必要があり、作業は困難を極めた。山小屋の調査などは、支部のある地域は支部に依頼することが出来

たが、かえって東京周辺の様子がつかめず、山岳部の二年部員になったばかりの松田までが調査に動員され奥多摩・秩父方面の実地調査にでかけたりした。

このように日大グループは、山日記の編集に随分頑張ったが、同時に日大グループの力も、関係者に大いに評価されるようになった。

山岳第四十四年第二号（一九四九年）には藤島敏男氏により「日本山岳会図書室再建報告」と題して経過報告が述べられているが、経費収支概要のところを見ると、総工費六十八万円のうち、建築費は五十五万三千七百円かかっており、この費用には山日記第十四輯の印税二十四万八千五百円があてられた。あのお茶の水ルームの半分近くは山日記の印税で賄われており、日本山岳会の再建に、日大グループが大きく寄与していたことがわかる。

山日記からヒマラヤへ

山日記が刊行された年末、その打上げをかねて忘年会が、神山邸で行われた。この席には石坂、松田らも多少の手伝いをしたということで、招待され、隅の方に座っていた。その席には慶応の谷口氏や北大の林氏も同席しておられた。この時の模様は、神山勉追悼集『雲表の友へ』に「追憶」と題して谷口現吉氏が書いておられるので紹介させていただくことにする。

敗戦後暫くたっても不敏な私は、荒廃の祖国のために何をして好いかわからなかった。ただ山は登るべく、また若い健全な登山者が数多く成長して行くことは意義深いと信じることができた。そこでその日までのように自分とその周囲の仲間との山登りだけでなく、若い登山者が健やかに育ち上がる下地作りのお手伝いをしようと考えた。人見知りをやめて日本山岳会のドマン中に座りこんで、本気でそんなことに取り組んだ。

こんな考えを持ったのは私ばかりではなかったらしく、かなり多くの人達が集って来て、私は新しい何人もの好い友人を得た。その中の一人が神山君だった。

一緒に山登りをしたことはないが、日本山岳会の行事には何回か同行して、古参兵のようにキリッとゲートルを巻いた彼の登山姿が記憶に残る。何故か徳沢と、吉田口の馬返での彼のその姿がはっきりと今日も目に浮ぶ。

次は山日記の戦後第一集復刊のことだ。これは彼なくしてはあるいは数年その復刊がおくれたのではあるまいか。彼こそまさに原動力だった。たまたま編集者筆頭の名において私がまえがきを書かされたのだが、あの仕事は全部神山君がやった。もちろん彼がすべてに手を下して一人でやったわけではないのだが、あんな面倒な仕事をやり了せるスタッフを易々として身辺に集める信望を彼が持っていたということなのである。だがあの時点では彼だけができたことだ。日本山岳会が戦後に初めて遺した大きなケルンの一つだといえよう。

そして校了の日に、彼の自宅で祝盃をあげた。私も招かれて席に連り、当時としてはとび切りのスキ焼を鱈腹ご馳走になった。その席で石坂、松田の二人を確実に相知った。

その後もずっとこんな仕事を一緒に続けて行ける心算でいたら忽焉と仙台に近い原町に去って行ってしまった。思えば彼も筆不精で、その後は、彼の霊前に弔電を捧げたことがただ一つのお互いの間の音信であったように思う。しかし松田や石坂から彼の消息を聞くことは私とて怠ってはいな

かった。ヒマラヤに旅立つとて、松田が原町に彼を訪ねたとも聞いていた。だがいずれにしても彼の訃は余りに早すぎた。

淡々とした、だが私が彼を信頼するに足る要素はすべて披瀝された短いつきあいだった。「あいつは好い奴ですよ、大丈夫です」との彼の一言だけで、数年を経て石坂をマナスルに送り、松田を同行者に選んで何の不安も感じない私達の信頼であった。

こんな彼との友情を今日にして、またなく得難く大切に思うのである。

何故ここに、この一文を引用したかについては、日大グループによる「山日記」の編集が、その後のヒマラヤ登山につながったことを言いたかったからである。

このような経緯で、その後の日本山岳会学生懇談会などで、他の大学の諸先輩と顔見知りになり、種々とご指導いただいた結果、マナスル登山にも参加できるようになったわけで、よき先輩に恵まれたお陰と感謝している。

マナスルのことについては、本号でも種々と特集記事として書かれているので、ここでは省略するが、マナスルが一段落した後、我々日大グループでは、第二次マナスルの帰途偵察を行ったヒマルチュリを東面から登る計画が立案された。

〔編者注〕日大部内誌『岳人』第三号（昭32年3月刊）「我々の目標ヒルマチュリという山について」参照。

しかし当時の外貨事情は一大学の登山計画では困難であるとの結論に達し、どうしてもこの計画を実現しようということであれば、日本山岳会のもっているスポーツ外貨の枠を使うしかないということになり、この計画はそれまで集めた資金も含め日本山岳会に対し、無条件で移譲することになった。

その後この計画は日本山岳会の理事会で承認され、日本山岳会の計画として村木隊長のもと一九五九年プレに実施されることになった。これに先立ち一九五八年秋には、金坂、石坂の両名が東尾根のルート偵察のためにヒマルチュリへと出発した。

〔編者注〕『山岳』第五十四年「ヒマルチュリの偵察（金坂一郎）」および『山岳』第五十五年『ヒマルチュリ―一九五九年の登山（村木潤次郎）」参照。

富士の遭難が縁で南極へ

昭和二十九年十一月二十八日の富士山の大雪崩は、日・東・慶三大学の学生十五名が遭難する大事故となった。その時日大では現場の捜索指揮を金坂ＯＢがとり、浅間坊におかれた合同捜索本部には、本部長として初見ＯＢが常駐し、ここで後に南極で活躍する東大のＯＢの鳥居鉄也氏や山上良夫氏等と知り合うことになった。一方、初見ＯＢが、北大出ということもあって北大グループとのつながりもあった。これらの関係で平山善吉が選ばれて南極の計画に参画し設営部門を担当することになった。こうして日大ＯＢも初期の南極観測に、平山を核として協力することになり、第十次の観測までに延べ十三名（うち越冬者五名）を送っている。この経験が後のグリーンランドから北極点遠征につながったことは、いうまでもない。

一方、平山を中心とする日大建築科のスタッフも南極基地の建物の設計・施工について優れた実績をあげている。

〔編者注〕この成果は「南極昭和基地建設の設計に関する一連の業績」と

して一九九六年度の日本建築学会賞を受賞した。

このように我々日大グループが極地の実績を上げることができた原点は、富士の遭難の捜索を通じての出会いであった。

金坂一郎の登山技術論

ここで金坂OBの登山技術論について触れたい。金坂一郎というと「制動確保」の理論を確立し「雪崩の研究」を追求したことで知られているが、金坂が確保、雪崩の二つの理論を研究する動機は、いずれも日大山岳部が関係した遭難事故が主な原因となっているように思われる。

まず確保論研究の動きは、金坂OBが「大学山岳部の現役時代、昭和十五年八月に入来、上関両先輩が前穂高北尾根四峰の明大ルートを登攀中、ザイルを結びあったまま墜死するという事故があり、それ以来、岩登りで先頭者がスリップした場合どうして止めるかということについて、大きな関心を持っていた、と聞いている」（熊谷義信談）。そしてコツコツと研究を続け『山岳』第四十八年（一九五三年刊）に「確保論」を寄稿し、制動確保（ダイナミック・ビレー）の理論を確立した。

また雪崩研究についても、一九五四年（昭和二十九年）の富士山の大雪崩事故の際に現地に急行し、救助に当たったのは勿論であるが、その後も自ら日本雪氷学会雪崩委員長として雪崩事故の再発防止に尽力された。

また日本山岳会の「登山技術指導者講習会」等を通じて各大学山岳部リーダーの指導に当たり、文部省登山研修所が設立されるまでの間、先輩の少ない新制大学山岳部の面倒を親身に見ていた。またこの講習会のテキスト『冬山技術セミナー』（山と溪谷社刊）は好評であった。その後登山技術関係の遺稿をまとめた『山岳技術考』（一九八八年茗溪堂刊）も残されている。桜門だけでなく、戦後の登山界の発展に多くの貢献をした金坂OBは、山スキー技術についても、一家言を持っており、六十六歳という早逝が惜しまれる。

グリーンランドから北極点へ

それではここで、北極のスペシャリスト池田錦重に北極点への軌跡について語ってもらうことにする。

「一九六二年、日大初のムクトヒマール登山の後、三年間ヒマラヤの計画は、力不足のため実現しなかった。そしてそのうちにヒマラヤ登山禁止令が出てヒマラヤに行けなくなった。その時代には、各大学の山岳部はアンデス、パタゴニアなどに眼をむけざるを得なくなった。その時に宮原巍は、アルパインジャーナルで、イギリスの登山隊がグリーンランド遠征で活躍している記事を見て、グリーンランドの計画を提案した。

彼はシベリア鉄道を使えばかなり安上りに行けることに着目して、自ら隊長として六名を率いてグリーンランドのフォーレル峰を目指した。この時にも彼の南極の経験が大いに役にたったし、一方観光外貨が自由化したことでグリーンランドにも入り易くなった。グリーンランドに入ってみると、今までの我々の登山で見られなかった広さ、未知性に遭いフォーレルには登れなかったが、当分は此処に腰を落ち着けることになった。

一九六六年には中島啓隊長以下六名の第二次隊を送り、グリーンランド第二の高峰マウント・フォーレル（三三六〇㍍）の第二登を果たし、帰途ロンドンで北極点関係の資料を収集して帰った。一九六七年には第三次隊として、五月女等がスピッツベルゲンに出かけ、一九六八年に、池田隊長以下十名の隊員により、念願の内陸氷床の横断に成功した。

しかし横断したからといっても、目標の北極点は遠かった。しばらくはグリーンランドで、犬橇の技術を磨くことにした。そこで次の目標として一九七〇年にグリーンランドの最高峰グンビエンス・フェー（三七〇〇㍍）を目標とし、ワトキンス山脈の登り残された山を登ることにした。これにそなえて一九六九年春には、五月女、嵯峨野の両名を偵察をかねて、犬橇による東海岸の踏査に派遣した。

こうして翌春のグンビエンス・フェー登頂を目指して準備をすすめていたところ、その年の冬に南極の最高峰ビンソン・マッシフにアメリカ隊の一員として初登頂（一九六六年）した物理学者の福島英一氏（当時三十歳）らが、飛行機を利用してグンビエンス・フェーに簡単に登ってしまったため、同計画は中止された。これをもって五ヵ年計画のグリーンランド遠征の幕を閉じた。

〔編者注〕グリーンランドの一連の報告については『山岳』六十一、六十二、六十四年に報告されているほか、公式報告書が『グリーンランド遠征報告書』として、同編集委員会より一九七一年に刊行されている。また池田錦重編『白い秘境―グリーンランド探検記』が、一九七二年にあかね書房より刊行されている。

目指すは北極点である。最初の計画は一九六七年に旗上げされ、それから十年の間に三回ほど計画をたてたが、空輸の問題と資金面の問題で機が熟さなかったため、実現しなかった。

この間一九七二年秋には、北極点を目指す植村直己と同じく日大隊の大島育雄が、犬橇の技術習得のために、グリーンランド最北の村シオラパルクに入り、その後植村は一九七四年十二月北西航路一二〇〇キロ㍍の犬橇の旅にでかけ、一九七六年の五月には、アラスカ西岸のコツビューに到着した。一方大島もＮＴＶの取材班に同行してエルズミア島のスミス海峡横断に参加する、などして腕を磨いていた。

この頃には民間の小型航空機が北極に向け自由に飛べるようになった。一方資金の方も植村隊の北西航路の成功でマスコミも取りあげ易くなり、我々の計画を支援するＮＴＶの岩下氏からもゴーサインが出たので、貯えていた力で一気に北極を目指すことになった。しかしこの頃にも一部のＯＢからは、ヒマラヤの高峰を離れて氷海上を歩くのは、山岳部的でないとの声も聞かれたが、未知の北極に惹かれ、極点に向かうことにしたのである。

〔編者注〕北極点の遠征については、公式報告書として遠征隊の事務局より『日本大学北極点遠征隊報告書一九七八』が一九八二年に刊行されており、同行取材された読売新聞社からも『北極点を目指す野郎たち』が一九七八年に刊行されている。

北極点を終った時、池田は四十歳であり、以後五十歳で登山を再開するまで、しばらく仕事に専念することになったが、グリーンランドや北極で育った人達は極地のスペシャリストとしてその後も活躍を続けている。

大島育雄―生産工学部で機械工学を専攻した大島は、現地で、エ

スキモーと結婚し、一男四女の父親として猟師で生活しているが、工学士としての技術を活かして発電所を計画したりして、エキスモーの生活向上に活躍している。

〔編者注〕『エスキモーになった日本人』文芸春秋社刊（一九八九年）参照

小嶋一男―毎年アラスカのアイディタロットの犬橇レースに、日本人唯一のマッシャーとして参加し活躍している。

五月女次男―北極クラブの事務局長として、和泉雅子の北極旅行をはじめ、多くの極地探検旅行のアドバイザーとして活躍している。

中村進―北極点到達の後、日本山岳会の三国友好エレベスト登山で、山頂よりTV生中継を行ってきたが、その後もベーリング海峡横断計画をNTVの企画として試みている。さらに、岩下莞爾NTVディレクター（会員番号四八三五番）亡き後、故人の遺志を継いで、一九九四年十二月にはスキーによる南極点踏破などを実行している。

このほか日本山岳会で活躍している東海支部長尾上昇や福井支部副支部長の関孝治（福井県岳連会長）、評議員の神崎忠男等も、グリーンランドで池田に育てられた人間である。このように極地が多くの人材を育てたことを特筆しておきたい。

再びヒマラヤへ

日本大学山岳部・桜門山岳会プロパーの計画としては、前記一九九二年のムクトヒマール学術登山隊のほかに、一九七〇年には、ダウラギリ山群のシタツツラ峰に清田清総隊長、高橋正彦隊長以下十名の登山隊を派遣しており、一九七四年には創立五十周年に当りヤルンカンに石坂昭二郎以下十一名の隊を派遣している。この隊の登頂隊のメンバー平野隆司は頂上直下八四〇〇㍍に達したが残念ながら登頂は出来なかった。しかしその後の日本山岳会の一九八四年のカンチェンジュンガ縦走計画にチームリーダーとして活躍した。

ヒマルチュリ南稜……一九八一年に橋本健隊長以下九名で、頂上直下まで到達。その後一九八六年、岡田貞夫隊長以下七名が再挙をはかり、南稜ルートからの初登を果たした。この隊で活躍して登頂者となった古野、井本、カメラマンの村口等が一九九五年のエベレスト北東稜の主力メンバーとして活躍したことは記憶に新しい。

その他、日本山岳会の主要計画にも、一九五三～五六年のマナスル（延べ四名）、一九五八～五九年のヒマルチュリ（延べ五名）、一九七〇年のエベレスト（四名）、同東海支部のマカルー（二名）、一九八〇年のチョモランマ（二名）、一九八四年のカンチェンジュンガ（四名）、一九八八年の三国友好登山（四名）と、報道協力隊員を含めると延べ二十五名が参加協力している。

この他個人的山行をも含め、桜門山岳会の会員は世界各地に足跡をのこしているが、部内誌『岳人』四号（一九八四年発行）に掲載された「日大山岳部・桜門山岳会員の海外登山年譜」（村口徳行編）によれば一九五三年～一九八二年までの間に、六十一の登山・遠征隊に延べ百七十五名が参加していることがわかる。

その他一九九二年には、岡田以下四名の若手が雪豹クラブの名でマカルー北東稜に挑戦しているが、一方、北極以降、十年間仕事に専念していた池田は、五十歳台を前にして一九八八年、同年代の仲間を誘ってマッキンリーに登頂、まだ体力的には動けることがわか

り八〇〇〇㍍峰への挑戦を開始。五十歳以上の仲間によりシルバー・タートルの同人をつくり一九九一年チョー・オュー、一九九四年ダウラギリに登頂した。彼等は三年置きに無理のない計画を立てており、一九九七年にはガッシャーブルムⅡ峰を計画中である。彼等は年齢のハンデを考慮して荷上げには優秀なシェルパを使い、登頂には積極的に酸素を使うことで、出発前のトレーニングと合理的な高度順化を組合せ、中高年にも八〇〇〇㍍峰の登山が可能であるという新しい夢を与えるタクティックスを考えて実践している。

〔編者注〕日大OBではないが、シルバータートルの仲間に途中から加った、石川富康、小西政継らは、ダウラギリの後もシッシャパンマ、マナスルと毎年早いペースで八〇〇〇㍍を登っていたが、一九九六年九月三十日小西氏はマナスルに登頂後還らぬ人となった。

エベレスト北東稜へ

以上延べて来たように戦後「山日記」からスタートしたヒマラヤへの〝流れ〟と、富士の遭難の捜索活動が縁で生まれた南極～北極への極地の〝流れ〟を通じて、豊富な経験と人材を育てて来た桜門山岳会は、日大山岳部創部七十周年を期して一九九五年エベレスト北東稜の計画を立案し、その総力を結集して登頂を果たすことができたが、この計画は戦後五十年、貯えてきた力の総決算ともいえるものであった。

この登山は好天にも恵まれ、無事七十年の区切りをつけることが出来たが、これも多年に亙り、ご協力を戴いた日本山岳会とお世話になった各大学山岳部の先輩のご指導によるものと感謝している。

まとめ

日本大学山岳部についてのイメージは、一般的に見て、金坂一郎OBに代表されるように、堅苦しくてロジカルな考え方をするグループではないかと印象を与えているが、日大・桜門山岳会の戦前からはじまる伝統は、工科系を主体とする会でありながら、どちらかといえば、自由で、リベラルな会であったように思われる。会ではこれといった会則もなく、部室も作らず戦争中も体育会に所属してない時期もあり、同好会的な形で伝統を守ってきた。しかし何時の時代でも、初見OBに見られるようなリベラルな人達、一方では廣田OBに見られる地味で堅実な人達と、この二つの考え方があり、これが時に応じて補完し合って、よい意味で調和が保たれてきたのではないかと思われる。

このような考え方は「ローマン派」と「現実派」、「思考派」と「実践派」、「小数精鋭」か「多人数包容主義」か、「アルパイン・スタイル」か、「シージ・スタイル」か、「ロジカル」か「ファージー」か、「尖鋭登山」か「静観登山」かというように、表現法は異っても常に相反する考え方が存在し、天秤のように一方に傾くと、今度は逆に他方に傾くといったことで、バランスが保たれている。

ひるがえって我が日大山岳部をふり返ってみても、七十年の部の歴史はこの繰り返しのように思える。しかし何時の時代でも、これらの二つの考え方を否定するような考え方はなかった。事実今回のエベレスト登山の計画についても、若い世代の者からは、堅苦しくて自由がないと見られないこともなくはなかった。そしてこれから

は、その反動として、再び広く分散する形でも自由な山行が続くのではないかとも思われるが、時には部の総力を結集するような計画があってもよいのではないかと思っている。

しかし何時の時代になっても、未知のフィールドに夢とロマンを求めつづけてきた山岳部の伝統だけは忘れたくないものである。

〔付〕日大山岳部・桜門山岳会の現況

〔桜門山岳会〕

◇在籍者二百四十五名（物故者百八名）、戦前のOBは在籍四十名（シルバー・グループを作って山行を続けている者二十名位）

◇組織・役員等

設立は昭和十一年十一月。設立より簡単な会則だけで運営してきたが、昭和二十九年になって現役部員に対する責任を明確にするために、コーチ制を導入する会則が制定され、会長、理事長制をとることになった。昭和三十六年度から全会員終身会員制をとっている。

現在の会長は横沢利武、理事長は山本晃弘。このうち日本山岳会の会員は、OBの約二割。日本山岳会全会員の一％（五十人）を目標として、維持してきたが、最近は物故者が、入会者より多く一％維持が困難となってきた。

〔現役学生部員〕部員の減少により、一時は存続の危機を迎えたが、ここ数年は部員数も増え、一九九五年の冬山参加者は二十八名で槍ヶ岳集中登山を行うまでになった。しかしその春には四年生の大量卒業等で、十数名に減少。再び部員確保対策を迫られている。

組織は保健体育審議会に所属する山岳部（略称体育会山岳部）で、部員は各学部在学者で構成。役員は他大学同様、山岳部長（教授）以下主将（チーフリーダー）、副主将（サブリーダー）、総務（マネージャー）、桜門山岳会より監督、コーチが学生の指導に当っている。

〔部報・部内誌の状況〕

〈戦前に刊行されたもの〉

◇部報　第一号（昭7・12）

◇岳人（本部山岳部の機関誌）第一号（昭11・11）、第二号（昭13・1）

◇霧氷（予科理科山岳部部内誌）第一号（昭9・3）～九号（昭15・3）

◇氷稜（専門部工科山岳部部内誌）第一号（？）～十一号（昭14）

〈戦後に刊行されたもの〉

◇会報1（昭23・5）～25（昭53・6）　同26（昭59・7）……一九六九～八二の年報～同27（平元・8）……一九八三～八八の年報、同28（平2・12）～31（平・6・4）一九八九～一九九三の記録

◇岳人3号（昭32・3）……一九三七～三八の年報　同4号（昭33・4）……一九三九の年報

◇時報1号（昭26・5）～107号（昭47）……会報を補完するため、主として学生の登山の登山計画等のOBへの連絡・通知等）昭和40年で廃刊）

◇げーとる1号（昭32・6）～18号（昭47・12）……現役による部内雑誌

◇桜門山岳会短信……昭和62年～現在までのOBへの連絡誌（隔月刊）

なお右はいずれも部内雑誌であり公にされていない。但し会報27号以降は、日本山岳会図書室に保管されている。

ウェストンの見た明治・大正の日本

L'INCANTO DEL GIAPPONE

WALTER WESTON （イタリア展題名：日本の魅惑）



国立トリノ山岳博物館のウェストン・コレクション250枚のうち，豊田市の展覧会では90枚が展示された。

解説はフォスコ・マライーニ氏（訳・見江子　マライーニ氏）が執筆し，ウェストン展実行委員会が補足したものである。



1894年（明治27年）7月に白馬登山をした時に宿泊した中倉家（現糸魚川市山之坊）。中倉家は運送業を営み，主人の中倉利忠治氏は，当時の小滝村村長だった。左端に立つのはウェストンだが，写真は裏焼きで，左右逆が正しい。同行者ハミルトン撮影。



二人の山案内人，左から上條嘉門次，根本清蔵と一人おいて19世紀末頃の女性アルピニストの服装をしたフランシス・エミリー・ウェストン夫人。中央は麻の繊維を取るための麻蒸し桶。1913年（大正2年）8月，岐阜県上宝村でウェストン撮影。

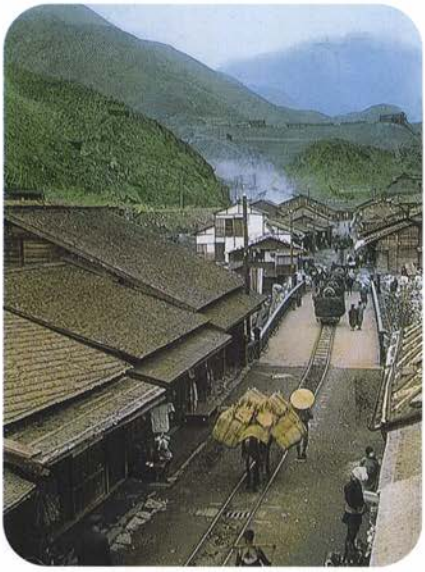
写真展「ウェストンの見た明治・大正の日本」開催のいきさつ　本文161ページ参照



東京・日本橋の日露戦争勝利祝賀の飾り。1905 年（明治 38 年）



結婚式の伝統的衣装を付けた新郎新婦。写真の夫婦は 1931 年（昭和 6 年）に結婚した槇有恒氏（元日本山岳会会長・第 3 次マナスル遠征隊隊長）と適子（旧姓大島）夫人。槇，ウェストン両氏の深い交流を示す一枚。撮影場所は東京・帝国ホテル。



足尾銅山。上間藤の3階建て木造旅館から赤倉方面を見る。鉄道馬車が深沢橋の上を通っている。遠くに銅山の精錬所が見える。足尾銅山鉄道は1902年（明治35年）に敷かれた。写真の撮影は明治40年前後と推定される。



戸隠山「剣の門（と）渡り」に立つウェストン夫人。1904年（明治37年）ウェストン撮影と推定される。



1902年（明治35年），東北地方を大飢饉が襲った。翌年2月から3月にかけ，ウェストンは救援のため現地に赴いた。これは，その時の写真と思われる。撮影は同行したフレドリック・パロット。現在，青森県三戸郡新郷村には，二つのウェストン顕彰碑が建てられている。

東津軽郡中平内村役場前に立つ二人。右が阿部豊馬村長，左は郡役所の石戸谷書記か。



宣伝用横幕をつけた乗合馬車。横幕の大岩館，つるやは白骨温泉の宿。ウェストンが上高地に最後の別れを告げた1914年（大正３年）当時，白骨―島々間に四輪馬車の通れる道はなく，彼は島々から帰りの馬車に乗っている。撮影者，年代不詳。撮影場所は松本辺りか。



山中の急流に架けた籠の渡し。明治中期まで山地ではどこでも見られた。今でもヒマラヤやカラコルムなどの奥深い谷では，大体同じ方法で使われている。この写真の撮影者・場所は不詳。



箱根湯本。三枚橋下流から撮影。川にせり出して建つ平屋は，茶屋と思われる。現在，国道は平屋の所を通っている。

©Museo Nazionale della Montagna, Torino (Italia)

第一著出版百年を記念して——

写真展「ウェストンの見た明治・大正の日本」開催のいきさつ

杉本　誠

発端

昨年（一九九五年）初秋の頃であった。イタリア国立トリノ山岳博物館から三冊のカタログが届いた。あの時の衝撃は今も忘れない。即座に「この写真展を日本でやろう」と思った。夏頃からイタリアでウェストンの写真展を企画している、との情報を得ていたし、フィレンツェのフォスコ・マライーニさんからは、監修者の立場で「日本でやるべき写真展です」との手紙を頂いていた。それで、ある程度の予備知識はあったが、やはりカタログの内容は意表を突いていた。

私はウェストンの著書は、邦訳本数冊を読んでいるだけで生意気なことはいえないけれど、第三著『知られざる日本を旅して』に最も近く、何よりもカラー写真であるのが、私をぐんぐん引き込んでいく原動力になっていた。それも現代の生々しいカラーではなく、例えばモノクロ写真を淡い色彩のベールでおおったような不思議な色をしていた。追い追いにこのカラーはモノクロ幻灯板に絵具で着色したものを原板にし、コンピューター修整してからプリントしてあることが分かってくるのだが、そのような技術的な処理には関係なく、見る者を明治の世界に引き寄せる力を持っていた。その時点で、おぼろげながら後に写真展のタイトルになる「ウェストンの見た明治・大正の日本」が浮かんだ。

トリノ山岳博物館とは年末までに数度ＦＡＸの往復をし、本年（一九九六年）に入って大筋が固まった。肝心のプリントは日本展用に新しく作成すること（九十四枚）、カタログはイタリア版を使い日本語解説書をつけること、プリント引き渡しは五月に開催するローマ展会場（日本文化会館）で行うこと、などである。当初、ロンドンにあったはずのウェストンの幻灯板が、なぜトリノにあるか不審だったが、これも何度かのやりとりの間に館長がスイスの知人の推

薦によって一九九一年十一月、ロンドンの古物市場で入手したことも分かってきた。トリノの山岳資料収集の熱意をずっと見つづけている私には「やはり」の実感があった。このあたりまで私は個人で交渉していたのだが、具体的な条件が出てくるとそうもいかず、組織づくりや会場確保の必要に迫られてきた。

その間、私は暇さえあれば手元のウェストンの本を眺めていた。そのうちアッと思う数字が目についた。一八九六。Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps の扉の最下端にあった。百年前ではないか。この本は（もちろん覆刻版だが）、百年前に出版されたのか。それなら何としても一九九六年中に開催しなければならない。それは、私にとっての大義名分であった。

幸い豊田市美術館が開館したばかりだ。展示施設はもちろん、防災、警備、ロケーションどれ一つとっても申し分ない。館の幹部職員の中には、かつて豊田市で開いた「フォスコ・マライーニ写真展」や「水越武写真展」に理解を示し協力してくれた人もいて快く相談に乗ってもらった。その結果、十月一日から十三日までが予約できた。

組織づくりと日本語解説書

さて、その次が組織づくりである。ウェストン展は豊田市から立ち上がるけれど、全国に展開できる要素を持っている。実行委員会は、その時のことも考慮して作らなければならない。豊田市内は私の生まれ育った所だから、気心、実力の分かっている人は沢山いる。外といえばまず東京だが、そこには大森久雄という名指南役が控えていた。ウェストン展の最初の情報を私に伝えたのはこの人だから心強い。横浜の山岳写真家、内田良平氏も同様である。ウェストンと横浜との深い関わりを考えると、この地にも有力な協力者が欲しかった。

それから送り出す側のイタリア。マライーニさんは監修者でカタログの原稿の大半を書いているから是非とも入って頂きたかった。次にトリノのアルド・アウディーズィオ館長。日本展への並々ならぬ厚意を形にするためにもお願いしたいのだ。もう一人、山とは関係ないけれど欠かせない人にトリノ在住の画家、宮原満男氏がいる。同氏はイタリア国籍の持主で、外国語はからきしダメな私の、なくてはならない分身ともいえる存在である。そのうえ館長の友人だから、双方の考えを汲み取り一つにまとめていくのに、これ以上の人は望めない。

さまざまな条件を考慮に入れながら、最上の陣容を整え、正式にウェストン展実行委員会が発足したのは四月五日である。開催まで残すところ半年、国内展なら何とでもなるが国際展となると時間は少ない。何より早く着手しないといけないのは日本語解説書の編集・印刷である。大森さんは現役の編集者、私も編集経験者（元『岳人』編集長）だから短いやりとりで意思が通じ合った。「翻訳どうするの。時間ないよ」「困ったね。イタリアに頼むか」「誰？」「マライーニ夫人」「あっ、最適だね」といった具合である。

日本語解説書は、セットにするイタリア版カタログの横文字を縦に直すだけでなく、ウェストンの年表やプロフィールを加えたいし、写真解説も一枚一枚調べ直し、百年前の日本を呼び寄せて現代につ

なぐ工夫の必要があった。そうしないと、特に見て欲しい若い人に写真の内容が伝わらない恐れがあったのだ。三十ページ足らずの小冊子だから充分とはいえないけれど、このところ急速に進んでいる日本のウェストン研究の成果を盛り込みたいとも思った。

これも大森さんの幅広い人脈によってウェストン研究会（川村宏、三井嘉雄、安江安宣）の方々のご協力が得られることになった。例え百年目という大義名分があったにせよ、それは、こちらのことで、開催まで半年という月日は余りにも短い。殊に夏の最中が仕事の多忙期に当たり、ご協力頂いた皆さんには、無理強いと映る行為があったのではないか、というのが、完成した解説書を手にした時の私の反省である。

なぜ豊田市なのか

ウェストンが撮影したり収集した写真コレクションが、ロンドンではなくトリノにあると分かった時、「なぜイタリアか」の質問をずい分受けた。次に最初の日本展を豊田市で開くと発表した時も「なぜ豊田市か」と聞かれた。これが松本市や横浜市なら出ない質問だろう。一度は説明しておく必要があるように思う。

本誌『山岳』にも書いた記憶があるが、私はこの十年ほどの間に豊田市の公共施設を会場に実行委員会方式によってかなり大きな写真展を企画・運営してきた。最初はヴィットリオ・セラを中心にした「山岳写真の源流展」、二回目は「フォスコ・マライーニ写真展・東洋への道」、三回目が「水越武写真展・自然へのまなざし」である。そのたびに、作者、関係者のご厚意によって作品を豊田市へ寄贈してきた。今回も他都市展などすべて終われば同様に寄贈する。その結果、豊田市が所蔵する山岳関係の写真は六百点に近づくはずだ。もちろん、市の協力も大きい。

そこで今回のウェストン展だが、その都度、多少形は変わるものの、実質的には大筋は同じ実行委員会方式である。冠をつけず、資金も自分たちで集めるのだから楽というわけにはいかない。私は今までの経験から、大切なのは「人」、次が「資金」と思っている。今回に限っていえば、人は万全であったが、資金集めには苦労した。それは現在もつづいている。最大の理由は金利の低下だ。いつも頼みの綱にしている文化関係諸財団の運営が苦しく、頼みに行っても当初見込みの半分かそれ以下に止まる。

しかし、私たちの実行委方式の良さは、この時に発揮されるから面白い。「資金不足の穴埋めは、自分たちで動こう」という手作りへの素早い転換である。地元実行委員の大半が、写真家、デザイナー、ジャーナリスト、会社経営者、市民文化運動のリーダーという面々だから、日ごろ蓄積したノウハウが随所に生かされ、困っても頭をかかえる暇なく代案が出てくる。

私は経験上、実行委の利点を生かすには、早い意思伝達と各パートの独立性の確保にあると思っている。素早く決めて担当者に任せ切ることだ。それには大本のところで、誰もが納得する大義名分がいる。やはり「百年目」は錦の御旗であった。

とはいっても、肝心の写真そのものに参加者が興味を持たなければ話にならない。みんな一国一城の主である。のめり込めないものに、誰が手弁当で動くものか。これはと思う意中の人物にカタログ

を渡し、黙って顔を見ていると、説明は全部イタリア語にもかかわらず、全員が五分とたたずに引き込まれていった。

実行委が発足して三ヵ月目、七月一日付夕刊の一面と十六面を使ってこの写真展を報じた読売新聞（東京）は、一面に五段の大見出し「失われた日本、鮮明に」をつけ、十六面では「明治・大正の庶民いきいき」の見出しを七段通しでつけた。この見出しは、写真の内容を最も的確に表現していると同時に、記事の扱いが展覧会報道ではなく、ニュースとしてとらえられていることを直感させた。

これからやろうとしている写真展は、今の日本人にとって必要な内容を持っている、との自信を、私たち実行委員に与えてくれた。

今思えば、実行委に加わった人たちが、初めてカタログを食い入るように見た時の感動を言葉にすれば、「失われた日本の発見」であり、「明治・大正の祖父、祖母に対面したなつかしさ」ではなかったか。それは、とりもなおさず、ウェストンが日本および日本人に注いだまなざしの追体験といえるだろう。ここまでくれば私たちに大義名分の必要はなくなり、一人でも多くの人に、この写真展を見てもらいたいという情熱のみが、行く手を照らす炬火となった。

関連資料、特に献上本について

当初、私たちは写真展に徹し、関連資料の展示については考えない方針だった。この地でウェストンの資料を納得いくまで集めることは困難だし、他に求めるには、余りにも時間がなさすぎた。だが、四月十九日に記者発表して間もなく、予想外のことが起きた。何と豊田市民の中から「関係者」が名乗り出られたのだ。硲（はざま）さくらさんという女性で、聞けば岡村精一氏の長女という。岡村氏は『日本アルプス―登山と探検』『極東の遊歩場』の初訳者として余りにも著名な方だ。偶然というより奇跡に近い話である。やがて届いた段ボール箱には、一杯の蔵書、原稿の束がぎっしり詰まっていた。第一級資料であることに間違いない。

中身は、右二著の原書三冊、邦訳書の初版本、『極東の遊歩場』の原稿、そのノート。硲さんは「ご自由に」と展示を快諾され、そのうえ実行委員会事務局に入ってお手伝いして頂くことになった。資料としては、これだけでも新発見だが、話はさらに広がっていく。

原書の一冊『日本アルプス――』が、マーブル紙と革で装われた特装本なので、その頃、毎夜のように電話をしていた三井嘉雄氏に意見を求めた。三井氏は電話の向こうで一瞬絶句され「大変なことでございます」といわれた。三井氏の知る特装本は日本にもう一冊あり、それは宮内庁書陵部所蔵という。つまり明治天皇への献上本であった。私はこの話に基づき、宮内庁に借用できるかどうか事前にお伺いを立てたうえで、正式に書類を整えて出願した。時は立秋を過ぎ、まさに「一日千秋の思い」で待つうち、出願は許可され、濃茶色革装でページの三方に金が打ってある見事な造本の献上本を特別展示することができた。さらにウェストンが再度献上した並装本に添えた南・北アルプスの写真の複製九枚も同時に展示の許可がおり、初めに予定したウェストンの写真コレクション九十四枚にさらに九枚が加わる望外の喜びを得た。

年の初めからお題目のように唱えてきた「出版百年目」が、開幕直前になって、恐らくウェストン師が最も望まれたであろう形に

なって実現できたことを、何と表現したらいいのか。今、私は言葉を知らない。

資料はほかにもある。愛知教育大学付属図書館所蔵のウェストン夫妻の書簡各一通ずつ、ウィンブルドンの写真館で撮影した夫妻の肖像写真各一葉（フランシス夫人はサイン入り）も借用できたし、川村宏、三井嘉雄両氏の重ねてのご協力で、ウェストンの著書四冊が原書で揃えられた。邦訳書は岡村氏の旧蔵書に私のものを加えて全部展示できた。

ウェストン展実行委員会は、余り長くても、という単純な理由から「ウェストン写真展――」と名乗らなかったのだが、これで写真と資料を兼ね備えた「ウェストン展」になった。臨機応変で小回りの利く実行委らしい展開ともいえるが、ことが大きくなれば出費もかさむのは当たり前で、ただでさえ四苦八苦の財政担当委員をきりきり舞いさせていることは間違いない。

かくして当日。日本展開幕に当たり、トリノ山岳博物館からは、アルド・アウディーズィオ館長が夫妻で来豊された。さらに同館を財政面で支援するピエモンテ州文化評議会委員長リタ・マルキオーリ女史も同行された。館長は、豊田展のために同館が所蔵するウェストンコレクションの中から原板六枚を選んで持参し、十三日の終了日まで滞在して持ち帰るという厚意を示されたうえ、一日のオープニング記念講演「トリノ市の博物館事情とウェストン展」の中では、イタリアで最初に撮影された山岳記録映画 CERVINO 1901 を上映されて参加者を喜ばせた。

開催期間中の来場者は、北海道から九州までの広範囲にわたり、土、日曜日には入口に列のできるような盛況になった。

豊田会場分のカタログが会期半ばで完売となり、どうしても欲しいという方にご迷惑をかけるようなことも起きた。

ウェストン展は、このようにして始まり、このようにして豊田展を終えた。文中でも書いたように、ウェストンの写真は公のものであるべきだと思う。他都市展終了後は豊田市に収まるが、これは市民のものになったということだと、実行委員会は解釈している。本稿は、実行委の動きと関連資料を主に書いた。トリノ山岳博物館の活動状況、同館がウェストン展を開いた経緯、写真の内容などについては、すでに『岳人』五九〇号（一九九六年八月号）に詳細に書いているので、重複を避けたことをお断りする。

「ウェストンの見た明治・大正の日本」グラビア一六〇ページ参照

編集注　十月十一日、イタリア国立トリノ山岳博物館館長ご夫妻の歓迎レセプションが日本山岳会本部ルームで開催された（図書委員会主催）。

アルド・アウディーズィオ館長は、宮原満男氏の通訳で山岳博物館の歴史と活動ぶり、ウェストンコレクション入手のいきさつなどを講演された。また、一九〇一年に撮影されたチェルビノ登山の記録映画のビデオ版が上映された。

図書紹介

群馬県山岳連盟編集

『母なる大空　冬期サガルマータ南西壁』



群馬県山岳連盟
1995年8月刊
B5箱入　384ページ

最高峰サガルマータ（チベット名チョモランマ）の南西壁に最初に手をつけたのは日本隊だったが、初登攀は一九七五年にクリス・ボニストンに率いられた英国隊によって成された。しかしそれから約二〇年近く、冬期の南西壁はその困難さゆえに未登を誇っていたがそこに日本の一地方組織が挑戦をしたのである。それも一回ではない。失敗を乗り越えての二回に及ぶ挑戦であり、プレ登山を含めるとこの冬期南西壁に関する登山だけで実に四回にも及んだ。

しかし、この登山の真の発端は一九八四年三月にさかのぼる。当時の中学生、高校生がやがて登れるようにとの考えで群馬県山岳連盟理事会で承認されたのがその始まりであったと言う。実に一〇年近くにもわたる、まさに大いなる挑戦であり、本書はその大いなる記録と言える。そこにはいわゆる「粘り」とか「執念」といった通り一辺の言葉では言い尽くせないものを感じた。もっとも、残念ながら失敗した一回目の冬期南西壁と今回の二回目の挑戦だけを抜き取れば確かに「執念」といった言葉も当てはまるかもしれないが、しかしここには、単なる「執念」をこえた何かを感じるのは私だけではないはずだ。それが一体何のか、という答えがこの報告書の中にあるのかもしれない。

約一〇年にわたる活動の後に結実した冬期サガルマータ南西壁初登攀の記録は、本来はとても一冊の本に収まる様なボリュームではないが、この報告書は二回にわたる冬期サガルマータ南西壁の登攀を中心にして簡潔かつコンパクトにまとめてある。

高峰登山については、一回目の冬期サガルマータ南西壁のプレ登山という位置付けをしたカンチェンジュンガのシッキムサイドからの登攀と、二回目のサガルマータのための事前の高所順応のためのチョー・オユーの登攀も合わせて簡潔に報告されているが、高所順応がほとんど残っていなかったとするカンチェンジュンガの検討をもとに、あえてリスクを冒しても本番の直前の秋に八〇〇〇㍍峰を登頂しようという野心的な戦略は充分に魅力的でかつ参考になる。順応訓練であれば頂上にはこだわらない、という見方もある中で、敢えて頂上も目指すという姿勢の中になみなみならない意欲が感じられるのは私だけではないと思う。

さて、本書の内容は先にも若干紹介した様に二度の冬期サガル

マータ南西壁を骨格として一九九一年春のＨＡＪによるカンチェンジュンガ北東支稜登攀と一九九三年の秋のチョー・オユー登山が要領よく付け加えられている。

一九九一年から一九九二年にかけての一回目の挑戦についての概要は尾形好雄氏の『烈風の咆哮』に詳しいがその敗退原因を詳細に検討してあり大変参考になる。一番の大きな原因は何と言っても「冬の烈風」で、これが到来する前に如何に決着をつけるかが大きな課題であると氏は結論付けており、二回目の挑戦の基本戦略は全てその課題の克服を如何にスムーズに行うかといった点から出発している。

一九九三年から一九九四年にかけての二回目の挑戦が本書のメインであることはもちろんだが、ここでは登山隊の報告書としてはごく一般的な各係の報告とならんで八木原圀明氏による『なぜ冬期サガルマータ南西壁か』と尾形好雄氏による『再び冬のサガルマータ南西壁へ』、そして佐藤光由氏による『冬期ヒマラヤ登山を考える』が何と言っても読みごたえがある。

群馬県山岳連盟の精神や、今までの活動を支えてきたもの、そして二度にわたる冬期サガルマータ南西壁への挑戦の経緯や意気込みが飾らない言葉で綴られており読む者を魅了してやまない。

さらに自分たちの貴重な経験を普遍的なものとして一般化させてより多くの岳人が冬期のヒマラヤに挑むことを促しているくだりにはすがすがしさも感じる。

これは純然たる記録であり、報告である。大いなるドラマではあるが感情に流されることなく、ある意味ではむしろ淡々と偉業が語られていく。決して驕ることなくあくまでも自然の摂理に忠実であろうとしたその精神が、次の八木原圀明氏の最後の締めくくりの言葉に言い尽くされていると思う。

『我々のアンナプルナⅠ峰南壁冬期初登攀も今回のサガルマータ南西壁の冬期登攀も、次の「真の厳冬期登山」へのワンステップと位置づけておきたい。』

群馬の岳人とその仲間達のさらなる挑戦を期待して、本書の紹介の締めくくりとさせていただきます。

（山本宗彦）



日本大学エベレスト登山隊一九九五編集

『日本大学エベレスト登山隊一九九五北東稜登山報告書』



日本大学エベレスト登山実行委員会発行　1996年3月刊　B5判横組全2巻ケース入り（学術報告203ページ　カラーページ27ページ　4500円　登山報告254ページ　カラー32ページ　定価表示なし）

今年の春のエベレストは南から北から国際公募隊の登山で騒がしいことだ。J・ハント卿が率いる英国エベレスト登山隊が三〇余年の課題を果たした初登頂頃から四〇年余り、時代の変遷である。そんな時「俺たちの山登りの流儀はこれだ」といって日頃馳れ親しんだ『極地法登山』をひっさげて未踏のエベレスト北東稜に正面から挑んで無事故で完登した記録のフォーマルな登山報告書である。

C・ボニントンはお祝いのメッセージの中で、「北東稜はアルパインスタイルでは登れない長く困難なものであり、日大隊のようによく組織された隊が極地法によってのみ登攀出来るものだ」と評価している。

また共同通信社特派員山賀記者の同行取材感想文には「登山史に残る成果であると評価する一方で『シエルパに頼りすぎ』、『酸素を使うのは時代遅れ』といったマイナス評価も聞かれる。しかし登山隊を拒み続けた巨大な北東稜を目の当りにした体験からすれば登山スタイルの主義、主張を越えてありとあらゆる手段を使って挑戦に値するし『登頂したそのことに最大の価値がある』、更にいえば『北東稜を登ろう』と言い出すこと自体がすでに大変勇気を要することではないか。そして池田副隊長が決然とした口調で『おれたちは登りたい山、登りたいルートに一番合ったやり方で登る』と語るのを聞いて、日大隊の強さの本当の秘密に触れたような気がしました。」と述べている。

この二人の現場体験者の言葉が、この登山隊のすべてを語り盡くし評価していると思う。明治のグループもカンシュンリッジから北東稜に挑み撤退した苦い経験から照しても賛辞を惜しまない。

正直いって九分どおり登れない、というのが前評判であったので成功のニュースを聞いたとき思わず目を見張り「やった、やった」と大声を上げたものだ。

遠征登山は計画準備、実行、報告出版で完結する。帰国後一年で最後のピリオドを打ち北東稜完登に花を添えた。

本書の内容・目次は記念事業登山報告書のフォームに従っている。挨拶、発刊の辞、メッセージ、はじめに、本文は一〇章で㈠計画と準備、㈡登山報告、㈢担当報告、㈣学術報告、㈤プレ登山報告、㈥支援隊報告、㈦事務局報告、㈧資料、㈨英文サマリー、㈩協力者

名簿、編集後記となっている。

『はじめに』では平山総隊長は「マナスル、南極からの経験を経て〔桜門の山〕としていくつかの遠征をヒマラヤや極地で行いこれらの成果が今回の登山で一つに結集し日大独自のエベレストという大きな花となった……。山岳部の長い歴史の総決算、苦労と犠牲の上に伝統に支えられた開花である。〝より高く、より困難な頂を目指そう〟をモットーとしているから北東稜を目標にした……」と力強く述べている。蓄積した経験と人材の総合力とチームワークの勝利である。

『刊行に寄せて』で桜門山岳会理事長で編集委員でもある松田氏は、「この登山隊が何故にこの難しいルートに目標を定め、どのような考え方で戦略・戦術を展開して目的を達したか」について「事実を刻明に報告する」と編集方針を述べ、各項目について失敗も含め率直に報告している。遠征とはハプニングの連続である。思わぬ出来事や失敗がどんな事であったか、それをどう対処して乗り越えていったかが読む側に興味あるところであり、この点は具体的に述べられて参考になる。『本文』㈠登山報告の「北東稜登山を終って」でC3にて登山の運行を指揮しロジスティックを組み立てた池田副隊長は「過去八回の総ての登山隊の記録を洗い直した結果、われわれが長年やって来た極地法登山でしか登れない、『時』を摑めば必ず登れると思った。北東稜だからといって特別なものを用意したり、普段と違った知恵をだしあったという感覚はない、われわれが日本の山で必ず頂に立つためにやって来た方法を、このヒマラヤ登山でやったと思っている。」と、その成功の原因として「(1)事前のトレーニング登山、(2)シェルパの多用、(3)ロシア製酸素の積極的使用、(4)気象情報のサポート」を挙げている。五月一一日、頂上に六名が余裕を持って立てたのは、二年余の準備の時間と努力の結晶である。(1)のマッキンリー、チョー・オユー、ネパールなどの登山では数々の失敗が述べられデメリットの方が目に付き何のためにやったのか分らないほどだ。しかしこの弱点を十分に承知しそれを補い、強化したことが日大の底力であろう。(2)のところでは「われわれのメンバーは二流だ、だからシェルパの力を借りて戦力アップを計った……」と帰京後の公開報告会で池田副隊長は率直に述べ聴衆にオヤッと思わせる場面があったが、事前のトーニング登山で隊員のレベルを知った上での完登のための必要不可欠な対策であった。(3)についてもシェルパの多用のタクティックスと同一線上にある。『酸素の多用は時代遅れ』の評価は当を得ない事だ。悠々と頂上に立ちC7～C6を撤収しABCまで無事下山できた結果を支えた裏に酸素の力があったのは明白である。日大山岳部の伝統の底力ではないか。

この登山の山場は八〇〇〇㍍を越え「門前の仁王」のように立ちはだかったピナクル群の登攀であり一番興味が持たれるところだ。これは「北東稜のルート工作」の頂でルート図八枚を参考に入り組んだリッジをジリジリと登っていった様子が簡潔に述べられている。「第二ピクナルのピークから五㍍程先に進んだ右側、登攀ルートから約二㍍の位置に一九八二年の英国隊々員の遺体が、半分雪に埋もれた状態で確認された。その近くにトロールのハーネスが落ちていて何とも不気味な光景であった」と古野登攀リーダーのショッ

キングな報告も含まれている。最後のルート工作を終えた井本隊員は「……天候は良かったとは言えないが事前の情報よりも雪の着き方が良かったためか、四日間でルートを開くことが出来た。これは経験豊かなシェルパの力と、軽量で扱いの簡単な酸素によるところが大きかった」と述べている。

最後のステージまでキャンプを設け登頂隊員を頂上に押上げた池田副隊長の腕力は見上げたものだ。(4)についても『時』を摑めば必ず登れる、と学術気象班は十分な情報を提供し、優れたロジスティックの組み立てと完登に大いに貢献したことが分かる。また同じ地域のJACマカルー東稜登山隊にも気象情報を提供した。その他登山を支えた分野の資料の中でシェルパ、保険、現地会計など『いま』の貴重な情報がつまっている。特に事務局報告の中の会計報告と募金はこの大遠征の台所がガラス張りで気持ちが良い。総計一億三千万円余。半端な経費ではない。その数字からこの隊の苦労と熱気がうかがえる。その上基金一千万円を残した。見上げたものである。

日大の総合力の証しであろう。遠征が終った後で報告し出版することも登山の一部であるが最近はこれを軽視する風潮の中で久しぶりに目にするフォーマルで重厚な遠征隊の報告書に触れて清々しい気持ちがする。

帰京一年を迎える節目に学術調査報告書を併せ発刊を成した努力には頭の下がる思いである。学術は、総括・高層気象学・高所医学・環境放射線科学・雪氷学・建築学・環境学の項目に分れ要領よく、分り易くまとめられている。専門外なので詳述は出来ないが、その目的が、登山隊の科学的支援とエベレスト周辺地域の調査となっており、例えば登山の成功と気象学的協力の関係がよく述べられて参考になる。この報告書が北東稜完登の偉業に画龍点睛したと評価すべきであろう。

終りに希望を述べるとすれば、別の出版（部報など）の機会で〔日大スピリッツのエネルギーたぎる人間臭い生の登攀記〕を切望する。

（大塚博美）

『七つの最高峰』

ディック・バス&フランク・ウェルズ
リック・リッジウェイ著　三浦恵美里　訳



文芸春秋　1995年8月刊
四六版　540ページ　2,600円

私が初めてこの本の主人公、フランク・ウェルズとディック・バスのセブン・サミッツ計画を知ったのは今から十四年も前になる

が、アメリカの経済雑誌「フォーブス」の誌面で、である。要約はこうだ。『ワーナー・ブラザースの社長、フランク・ウェルズは職を辞し、ユタの実業家、ディック・バスと二人で七大陸の最高峰を目指す。山登りの素人で五十歳を超えた二人の冒険は事業で成功した様にいくのだろうか?』それはそうだ。当時はまだ誰も七大陸最高峰の征覇をしていなかったし、それに、あのエベレストやヴィンソン・マッシフにズブの素人で人生の折り返し点を過ぎた中年の二人が挑むというではないか。誰だってビックリし、呆れるに決まっている。でも私にとってそれは、とても新鮮で衝撃的な記事だった。

当時、ある米国系多国籍企業の管理職だった私にとって、アメリカとアメリカ人は身近であり、彼等の何にでもトライするあのチャレンジスピリットは、常々尊敬していたアメリカの素晴らしいところで、自分もそうありたいと思っていた。

ビジネスの世界で大きなものを手に入れた二人の男が、今迄と違う世界を見に行こうと少年の様な瞳をもって旅立つさまは、まさに現代のオデッセイの感があった。そんな二人の生き様は、あの日以来、私の心に人生のお手本みたいなものとなって棲みついた。二人の内、ディック・バスはこの冒険を四年がかりで成し遂げ、世界初の七大陸最高峰登頂者となり、かつ、当時としては最高齢(五十五歳)エベレスト登頂者となる。本書は、この二人の山登りの多くに同行した登山家、リック・リッジウェイが執筆し、八十六年にワーナー・ブックスから出版された「セブン・サミッツ」の邦訳である。

物語は、同じ「セブン・サミッツ」の夢を持つ二人、一人はビバリーヒルズに住む娯楽産業のトップ・エグゼクティブのフランク、片やソルトレイクで自分のスキー場、「スノーバード」の完成に事業生命を賭けるアントレプレナーのディックが偶然に出会い、一時間かそこらで意気投合したところから始まる。そして早速、エルブルースから取り掛るが当然思った通りに事は運ばない。元来タフで動物的なディックは少しのトレーニングで既にマッキンリーに登頂していたし、二人で遠征した最初のアコンカグアにも成功する。一方、真面目だが不器用で、体力にも問題のあるフランクはことごとく途中でダウン。それでも執念と情熱は衰える事なく、やがて二人してエベレスト北壁初登を目指すアメリカ隊のメンバーとなる。しかしこの遠征で彼等は、ディックに登山の手ほどきをした彼のスキー場のパトロールで、レーニェ山(ワシントン州)の女性ガイド、マーティの死に見舞われ、更に、時を同じくして未登の北東稜に挑んでいたイギリス隊が、ボードマンとタスカーを失った事をキャンプ地でボニントン隊長から聞き、はじめて、如何に危険なゲームを二人が始めたかを思い知る。そして、それはついこの間まで、何不自由なく満ち足りた生活を送っていたファッションモデル上りのフランクの美しい妻、ルアンの心にも苦悩をかき立てる事になる。まだひとつも頂上を踏んでないのに……。しかし、二人の決意は固く、やがて翌年には揃ってアコンカグアの頂上に立ち、再びエベレストに向かう。八十三年のこの遠征隊は、エベレスト山頂からテレビ中継した事で話題になり、ご記憶の諸氏も多い事と思うが此度もフランクとディックは登頂できなかった。だが、二人ともこの遠征ですっかり山男らしくなり、マッキンリー、キリマンジャロ、エルブルースと立て続けに成功、南極へと向かう。彼等のヴィンソン・マッシ

フ隊は華やかだ。隊長は登山界のビッグネーム、クリス・ボニントンだし、飛行機のパイロットは超一流、そして私達日本人にはポピュラーな三浦雄一郎もスキー滑降で参加している。遠征は大成功を収め、二人は感激の登頂を果たす。だが実は、フランクはこの時点で妻、ルアンの『フランクが山で死ぬかも知れない……』という心の苦しみからエベレストを断念している。従って後に残るオーストラリアのコシウスコ山（当時はオセアニアの最高峰）がハイキング程度の山という事を考えると彼のオデッセイは実質、此処で終った。

一人となったディックは、今度はパーミッション取得に四苦八苦しながらも、遂に四度目の挑戦（頂上アタックは三度目）で地球の頂点に立つ。三人パーティでサウスコル経由、ヒラリーステップを越えて頂上を目指すが、ここはやはりクライマックス。ディックは恐怖と戦いながら登り続け、最高齢のエベレスト登頂者となり、疲労困憊して下山にかかる。既に力を使い果たした中での頑張り。それは妻との約束、『生きて還る』に支えられ、そして彼の好きなキップリングの詩に励まされ、無事テントに辿り着く。

相棒のフランクは、ディックのセブン・サミッツ成功を知り、感涙にむせぶが本人もエベレストを失ったかわりにディズニー・プロダクションの社長という別のサミットを手に入れ、ビジネスの最前線に返り咲く……。というストーリー。なお、私はその後、今から二年程前にフランクがロッキーでの山スキーの帰途、自家用機の事故で死亡したという事を日本の新聞で知った。

はっきり言って本書は、いわゆる「登頂記」ではない。しかし、これほどスケール、ロマン、そしてスリルに富んだノンフィクションには一寸お目に掛れない。原書には、クリント・イーストウッド、ロバート・レッドフォード等、ハリウッドのスーパースターや、アメリカ実業界の著名人達が、クリス・ボニントンと共に温かい書評を寄せて居り、ストーリーに華やかな色どりを添えている。兎に角面白い。原書の方も解り易い表現で書かれているし、収録されている写真の数々も楽しいので、本書共々、一読をお奨めしたい。

（冨岡一郎）

中村　保著

『ヒマラヤの東』



山と渓谷社　1996年3月刊
A5判　330ページ　3,000円

本書の舞台は、長江上流、瀾滄江（メコン川上流）、怒江（サルウィン川上流）、イラワジ川上流などの大河が、深い河谷を刻みつけて

いる大山岳地帯「横断山脈（ヘンドゥアンシャンマイ）」である。地域名でいえば中国の四川、雲南、東チベット、それにビルマ北部を含む広大な地域であり、そこには、六千メートル以上の雪山がそびえる山系が多く存在する。

右の各山系の探検、登山についていえば、今日では主峰の初登頂の時代が、わずかな例外を除いては終わり、遠征記録も多く出版されている。しかし、それらは個別的にすぎ、全体を鳥瞰的にまとめた本は、今までに無かったといってよい。本書はこの分野でその先鞭を付けたものといえよう。

簡単にはつかみにくい「横断山脈」中の各山系、水系などをわかり易くまとめ、かつ十一回に及ぶ踏査に基づく今日的な視点で把えた労作である。今後のための一里塚となる貴重な一書だと思う。

著者の中村保氏（本会会員）は一九三四年生れで、一橋大学の山岳部員として活動。六一年のペルー・アンデス遠征（吉沢一郎隊長）に参加し、プカヒルカ北峰の初登を果した経験を持つ。氏は長く石川島播磨重工に勤務し、海外支店での生活、とくに香港在勤が「横断山脈」と出合うきっかけとなった。最初にこの山域を踏査したのが、一九九〇年の事であるから、そう古い事ではないが、ここ五年間で十回以上も現地を訪れたというその熱中ぶりが想像できよう。

「横断山脈」という名称は、いつ頃から誰が使い始めたのだろうか。それは本書でも説明されていない。三省堂版『コンサイス　外国山名辞典』でも地理的な説明はあるが、命名の由来について触れるところはない。私はことによると、F・リヒトホーフェンあたりが使った言葉かも知れないとにらんでいるのだが。

ところで、私の手許にあるこの辺りの最も古い地図は、フランスの有名な地図制作者のS・ダンヴィルによるもので、〈Novel Atlas de la Chine〉（1735）と銘打たれた大地図である。これはデゥ・アルトの『シナ帝国誌』の付巻の大地図帳の中の一枚で、すでに一度毎の経緯度も入っている。地名、山名、河川名も記されているが（同定するのが難かしい）、「横断山脈」を包括する名称はない。

別にこの地図帳には一七三三年製のチベット図幅が入っていてかなり詳しく、興味あるもの。この地域の一八〇〇年代の探検者W・ギルやA・ブラットの著作にも地図は付いているが、古い時代に作られたダンヴィルの地図の方がはるかに詳しく興味深い。

× × × ×

以下に本書の記述に従い、水系による山岳区分を記しておこう。「横断山脈」の概念をつかむために、どうしても必要なまとめである（本書の第一章にあたる）。

①イラワジとツァンポーの間。この地域で最も有名なカカボラジ（五八八一メートル）を主峰とする山脈（中国名は担打力卡山（ダンダリカシャン））。

②イラワジとサルウィンの間。伯舒拉嶺（ボシュイラリアン）と呼ばれる山脈。六千メートル級の山があるといわれているが、よくわからぬとの由。

③ツァンポーとサルウィンの間。六八七〇メートルを最高に十座の六千メートル峰から成る念青唐古拉山（ニンチンタングラシャン）と呼ばれる山脈。ロヒト川流域には貢日嘎布（カラリガルポ）と呼ばれる大山群があり、いくつかの六千メートル峰が存在する。

④サルウィンとメコンの間。雲南の最高峰、梅里雪山（メイリーシュエシャン）（六七四〇メートル）を含む同名の山群やその北の他翁山（ターウェンシャン）山系の山々があり、ミニャ・コンカと並ぶすばらしい山域とされる。

⑤メコンと金沙江の間。中国のアルプスとうたわれる玉龍雪山（五五九六㍍）や哈巴雪山（未踏峰、五三九六㍍）がある。

⑥金沙江と雅礱江の間。北から南へかけて、㈠雀兒山、㈡沙魯里山、㈢工卡拉山などの山群があり、一九八八年に日本ヒマラヤ協会隊の初登したゲニ峰（六二〇四㍍）は㈡の山群に属する。㈡の山群中には三つの六千㍍級の鋭峰があり、殆ど手付かずの状況である。

⑦雅礱江と大渡河の間。「ヒマラヤの東」全体での最高峰ミニヤ・コンカ（七五五六㍍）を盟主とする大雪山系に代表される山域。一九二八年のJ・ロック以来多くの踏査、報告、写真資料がもたらされ、地図も詳細なものが公刊されている。なお、一九三一年のアメリカ隊のミニヤ・コンカ初登頂記は、近く一橋大学山岳会より上梓される予定。

⑧大渡河と岷江の間。邛峡山山系中の四姑娘山（六二五〇㍍）は、一九八一年の同志社大の初登で知られ、近年はトレッキングで賑わう山域。

⑨岷江と嘉陵江の間。岷山山系の最高峰に雪宝頂（五五八八㍍）があり、一九八六年に日本ヒマラヤ協会隊が初登した。四川での登山の入門にふさわしい山域とされる。

右のような概略を記すだけでも、本稿の大半の紙数を費やしてしまったが、この辺が頭に入っていないと、実際には本を読んでもピンとこない恐れがある。つまり、この地域はそれほど地理的概念のつかみにくい所なのである。

× × × ×

以下、十二の章にわたって、著者自身の踏査紀行、先蹤者の足跡をわかり易く記述してあり、どの章を取っても興味深い。しかし、この地域をまとめるにあたって、著者の払った苦労はなみ大抵のものではなかった筈だ。筆者の如き、この地域の探検、登山史の一端しか知らぬ者にも、その苦心の程がしのばれるのである。

私が特に面白く読んだのは、先ず第三章「梅里雪山から東チベットをうかがう」で、先駆者のA・ニール女史（フランスのチベット学者）、キングドン＝ウォードや、さらに古くはW・ギルらの足跡を簡略だが、わかり易く解読してある部分だ。日本の能海寛もここに登場する。机上の論ではなく、現在の実情を照らし合わせている事が興味深いのである。

次いで第六章「ミニヤ・コンカ西面と大雪山」が面白い。ここでは現地での個人旅行の実際がまとめられている。ランドクルーザーを駆使した著者の行動の実際が具体的に語られている。それによれば、費用は一日平均、二〇一米ドルかかる由。

地図についても触れているが、軍の管理による近年の五万分の一や十万分の一図は「門外不出」扱いで、手頃なものは入手できないようだ。結局、ONCとTPCを使うのがよいらしい。

この頃の先蹤者J・ロック、A・ハイム、A・ミゴーなどの触れ方は、簡略すぎてやや物足りなく思った。ここでは、ハイムに同行したイムホーフの『四川の巨大で寒冷な山』（Die GroBen Kalten Berge von Szetschun, 1974）の大冊にふれて欲しかった。写真、水彩画、地図の沢山入った美麗な本で、巻末に二十万分の一図（多色刷）が付いている。

さらに第十章「ビルマの氷の山」と十一章「幻の山、カカボラジ偵察行」を面白く読んだ。先駆者キングドン＝ウォードの足跡にもつぶさに触れている。ウォードについては、かつてU・シュヴァインフルトの詳細な書誌が出た時はちょっとびっくりした。その後、金子民雄氏の『東ヒマラヤ探検史』（一九九三年刊）と『フランシス・キングドン＝ウォード』（一九九四年刊）が出て、ウォードの著作とこの地域の探検史が、より身近かなものとなった。

ちなみに、故諏訪多栄蔵氏が中心となって企画、編集した〈ヒマラヤ人と辺境〉シリーズ中の一冊に『青いケシの国』（倉知敬訳、一九七五年、白水社刊）が加えられてから、もう二十年もたっている。良書は早く訳しておくべきだと痛感する。後続の志のある人々に役立つ日が、きっと来るからである。

今後ぜひとも、この著者に果してもらいたい事が二つある。一つは、本書では作成されなかった索引もしくは、地名、山座名（高度、位置をふくむ）峠名のリストを作ることである。二つ目は完備した探検、登山年表を作成することである。これがないと探検の歴史的な把握が出来ない。文献目録からもれている、いわば雑書扱いをされている本が何十冊もある。そうした不遇な旅行者にも目配りした網羅的な年表が欲しい。過去の事柄と現在のそれが断絶しては困るのである。例えば前述の雑書の中の写真によく出てくる雪山にサテッツオという高峰がある。本書には言及されていないし、三省堂の山名辞典には、その中国名が出てこない。そうした例はかなりある。完備したリストがあれば、読者はいらいらから直ちに救われるのである。

（'96年8月、チトラールにて記す）

（雁部貞夫）

中薗英助著

『鳥居龍蔵伝』



岩波書店　1995年3月刊
四六判　442ページ　3,600円

本書の紹介に入る前に、先ず鳥居龍蔵の略歴を一瞥しておくのが便利であろう。

鳥居は明治三年（一八七〇年）に、四国は阿波・徳島の煙草問屋の息子として生れた。小学校二年で退学し、以後学校教育を受けることなく、専門家や学者を訪ね、個人教授を乞い、彼独自の学習方法で修学に励んだ。

二十才で上京し、東京帝国大学理学部人類学教室標本整理係となり、坪井正五郎教授に師事する。同大学の助手、助教授となり、師のあとを継ぎ第二代人類学教室主任となる。日清、日露の両戦役時

から太平洋戦争の勃発に至る動乱の時期に、台湾、千島、満州、蒙古、中国南西部、朝鮮、樺太、東部シベリアなど極東の各地に繰り返し探検的な踏査を行ない、人類学、考古学の先駆的な業績を残した。

大正十三年、学内の論文審査等をめぐって大学当局の措置に不満を抱き、東京帝国大学を辞職、新たに鳥居人類学研究所を創設し、家族とともに自由な研究を続ける。

昭和十四年日中戦争の最中に、北京の米国・ミッション系燕京大学から招聘されその客員教授となる。太平洋戦争中、大学は閉鎖され、一時軍の軟禁状態におかれるが、戦後復学する。昭和二十六年同大学を退職し、北京より帰国。昭和二十八年一月、自伝「ある老学徒の手記」（昭和二十八年一月・朝日新聞社）を絶筆とし、八十二年の生涯を閉じる。

本書は明治二十八年八月、鳥居が東京人類学会から派遣されて、遼東半島の踏査に出発するところから筆を起している。遼東半島の港で陸軍の御用船から下船する二十五才の青年鳥居は、脚絆を巻き草鞋穿きであったという。極東への先駆的学術調査の第一歩である。

鳥居の探検的フィールド・ワークは、この遼東半島の探検からはじまって太平洋戦争勃発まで、その踏査は台湾、千島、西南中国、満州、蒙古、朝鮮、樺太、東部シベリアなど東アジアの広範囲に及んでいる。鳥居の踏査は同一地域を繰り返し訪ね（例えば、満州九回、朝鮮七回、台湾、蒙古それぞれ四回の如し）、人類学に隣接する民俗、美術などの分野に至るまで幅広く調査しているところにその特長がある。不毛の奥地や砂漠、草原やツンドラなどの厳しい自然条件のなかで、日本人として初のフィールド・ワークを行った先駆者としてその業績は高く評価されている。

著者は次のように現代の探検型学者の鳥居に対する評価を引用し、この異色の人類学者のフィールド・ワーカーぶりに大きな関心を寄せている。

「東大アンデス地帯学術調査団長として文化人類学のフィールド・ワークで盛名をはせた泉靖一教授が『若いころ、自分の行くところ、すでに鳥居先生が先に行っておられていやになりました』（現代の冒険8失われた文明を求めて）と語れば、対談相手の『騎馬民族国家』説でも知られた江上波夫教授は、鳥居の調査旅行を『白瀬中尉の南極探検、郡司大尉の千島探検、大谷探検隊の中央アジア探検など』に比すべき『空前絶後の探検型学者』によるものと指摘している」

著者は鳥居の探検行ごとに、また一つのエポックごとに一章を設け、その背景やそこに登場する人物、その他の関連事件にも触れながら筆を進めている。このため、探検型人類学者としての鳥居の人物像とその業績を理解するのに大変便利であり、どの章にも読者を未踏の地に引きずり込んでいくような迫力と緊張がみなぎっている。

鳥居の探検調査のなかで特に筆者の興味を誘ったのは、明治三十五年、当時まだ暗国の西南中国への踏査行である。鳥居にとって、残念ながらこの地域への再調査は実現せず、一回のみの踏査に終るわけであるが、大変新鮮なものを与えてくれる。著者は鳥居が後に

まとめた旅行日記風のこの記録について次のように評価している。

「『人類学上より見たる西南支那』は、ロシアへの特命全権公使榎本武揚がシベリアを馬車旅行した『シベリア日記』とともに、極東における南北両地域を活写した二大記録として、筆者は推奨してはばからない。どちらも昼間は苛酷な日程と難路をこなし、夜は睡魔とたたかいながら現地の状況や現地人の生活の細部にいたるまで観察した全てを記録し、日本人にとって未知の世界を明らかにした先駆的な旅行記だからである。鳥居はかねてから、日本の学者の発表する『石をかむような堅い報告調査類』に不満を抱き、調査研究上の論文レポートとは別に『学術家の紀行文』を考えていた。擬古文調の古い文体もまじるが、文学青年的な気質がここに開花したといえよう。」

鳥居の絶筆となった前記自伝の該当部分と併せ読むと、あるときは中国服に仮装し、日本人として初めて未踏の世界に入ってゆく鳥居の足跡におもわず引きつけられるのである。陶淵明の「桃源記」の故事の地を訪ねるなど、確かにその文学青年としての片鱗を読みとることができる。また鳥居のこの記録のなかに、のちに後学によって体系づけられる日本文化源流論の曙光を見る思いがするのである。

本書では主として極東への探査行を中心にまとめられているが、フィールド・ワークのパイオニヤーはどのように形成されていったかその胚胎を知るためにも、鳥居が青年時代、日本の山村で行った土俗調査、例えば秩父・浦山（明治二十七年）、阿波・木頭（明治三十年）、飛騨・白川（明治三十四年）などにも一章を設け触れて欲しかったような気がする。

鳥居の師・坪井正五郎教授は、イギリスのタイラーの流れをくむ人類学者であったが、坪井もイギリス留学中、とくに大学に入ることもなく自修に励んだという。鳥居は東京帝国大学人類学教室の標本整理係として働くかたわら、この坪井教授に師事し人類学者を目ざすのである。そしてその学習方法は、人類学の研究に必要な基礎的な各分野の講義を教授の紹介や許可を得て、徹底的に聴講してまわる自学自習の自由な学習方法であった。語学の独習はもち論であった。また理学部の講師ながら、満蒙についての考古学上の研究論文を提出し、文学博士の学位も授与されている。このような自学立行の姿勢がのちにスケールの大きな視野の広い探検型学者を形作っていったのではなかろうか。

官学に所属し、東アジアの各地にフィールド・ワークを続けるうちに、鳥居に一つの転機が訪れる。学内の論文審査その他の件について大学の措置に不快感を抱いた鳥居は辞表を提出し辞職する。

「かくして私は新たに小さな鳥居人類学研究所を設け、此處で町の学者として自ら研究するようになったのである。所員は私が所長が家族一同は研究員となった。その以後の研究及びその調査旅行はすべて本所からなすこととした」と鳥居は自伝で述べている。

日中戦争中、鳥居は北京において、アメリカのミッション系燕京大学から招聘され客員教授となる。太平洋戦争の勃発により大学は閉鎖され、一時軍の軟禁状態におかれるが、なお研究は続けていた。戦後再び大学に復帰するが、やがて大学を退職し、北京より帰国したときには、もう鳥居に残されていた時間は殆どなかった。

本書の著者中薗氏は鳥居と同じ頃、日本占領下の北京にあって邦字紙の記者をしており、鳥居の踏査の地も懐かしい回想にさそわれるという。本書はもともと雑誌『世界』（岩波書店）に連載されたものをまとめたものであるが、その発想から執筆を終えるまでに実に十五年以上の歳月を要しているという。そして著者は本書のなかで鳥居の業績を次のように評価している。

「鳥居学とその遺業は不滅といえるだろう。どのように不滅かといえば、日本最初の探検家型のフィールド・ワーカーとして、極東全域に相わたったフィールド・ワークのおびただしい全記録文書を、これも研究者として初めて採用したカメラ・ワークによる記録写真とともに遺したということである。いわば、旺盛にして飽くなき記録精神の勝利である。たとえそれらの記録文書の中に、後学の研究者がいささかのあと知恵を以って異同や誤認の箇所を発見し得たとしても、二度と創出できない記録的な業績の豊饒な価値は、けっして低められるものではなかろう。」

著者は後記で、初めは鳥居龍蔵を小説に書く計画でいたと記している。しかし本書では一切の虚構を排して、幅広い資料や記録を土台に、在野の探検家型人類学者を見事に描き出している。著者は鳥居の活躍した時代背景のなかで、その業績はどのようになされたか、またそれはどのように評価されているかにも触れ、本書をまことに手堅い評伝の力作に仕上げている。また鳥居の絶筆となった前記自伝は、出生から昭和九年（六十四才）までに留まっているため、それ以後を補完した本書はまた文献的にも貴重なものとなっている。

（松家　晋）

『「日本百名山」の深田久弥と山の文学展』



世田谷文学館編　1995年8月刊
A5判　144ページ　1,000円

深田さんが亡くなられて早くも二五年になる——

一九九五年四月に開館した東京世田谷区立世田谷文学館で、同年九月二日より十月八日まで、本会の後援により〈「日本百名山」の深田久弥と山の文学展〉が開かれ、同時に同じ題名の冊子が刊行された。美術展でいえばその図録にあたるものだが、A五判一四四頁のこれは文学展らしく文章と写真による内容の濃いものであり、同時に深田さんの人と文学・山との関わりを今改めて伝える一本として好ましいということで、この頁で紹介することになった。

装本はソフトカバーだが厚手の片面アート紙を使い、内田良平「新緑の谷川岳・一の倉沢」の写真の緑と影と空の色が山の匂いを伝え、そこに〈「日本百名山」の深田久弥と山の文学展〉の文字が二行で

橙色。編集は、館員の矢野進さん他の若い人たちで、中を開けば資料の写真をふんだんに使い、深田さんの人間記録として充実したものになっている。

先ず八部からなる全体の目次を追って紹介すると、巻頭が館長としての佐伯彰一〈「名山」と日本人〉と題するエッセイ。昭和三〇年頃の対談の折の写真が添えられている。

次がカラー写真一六頁で〈『日本百名山』の深田久弥と山の文学展（カラー図版）〉。先ず「百の頂に百の喜びあり　深田久弥」の書が青い空の写真を背景に。次いで遺品の机、ピッケル、コッヘル等の愛用品、九山山房の扁額、鎌倉時代の文壇仲間の写真、著書、山の本、来信等々、数多くの出品資料の写真三〇点が鮮やかで、ここは本展の図録的部分。

次いで〔プロローグ　九山山房の世界〕に入り、藤原一晃〈世田谷の家・九山山房の日々〉、深田森太郎〈父が「百名山」を書いた頃、世田谷・松原の暮らし〉。書斎の深田さんや家族との写真が個人的興味を引く。

「――子供たちに贅沢を戒めた父は、山へ行くときもスキーに行くときも、一家四人混んだ三等車の通路に新聞紙を敷いて座り、しりとり遊びなどをしていた。」という父親像。

三九頁からが、〔第一部　幼年時代、ルーツを探る〕。五頁一六枚の写真と近藤信行〈ふるさとの山々――深田久弥のルーツを探る〉。

「――紙と印刷業の家に生まれた彼に山ごころを植えつけたのは、郷里の先輩で、のち医師となった稲坂謙三である。」

「深田久弥がこの稲坂につれられて、はじめて白山の頂を踏んだのは、大正七年中学三生のときである。――中略――　これが彼の山岳開眼となった。」

四七頁〔第二部　同人から作家デビューへ〕となり、一三頁三九枚の写真に加え、近藤信行〈山と文学の青春――文壇登場のころ〉。上京から文学仲間との交わり、「津軽の野づら」での文壇登場。登山への傾注から山の文章を書き始める時期――

「彼は、文学上の仕事で世に出たが、この時期からすでに山に賭けていたし、山にたいするとき、彼の表現はもっともすばらしい成果をみせた。」

六五頁〔第三部　『日本百名山』の世界〕十五頁のカラー版で日本地図の上での百名山の所在地と、利尻岳を始めとする「百名山」からの十一の山と夫々の原稿の写真。昭和四六年三月二十一日茅ヶ岳で倒れる直前の写真等。それに、急逝を伝える翌日の朝日新聞夕刊の記事に、串田孫一「深田氏を悼む」。小林秀雄の読売文学賞に『日本百名山』を〔批評文学〕として推したことを述べた文章と本を受け取った葉書の礼状等。

近藤信行〈『日本百名山』とその周辺〉、「――山の品格、山の歴史、山の個性、そして頂上に達したことのある山という点から『日本百名山』を完成した。そのとき、彼は還暦をむかえていた。深田久弥ならではの仕事であった。」

大森久雄〈『日本百名山』の誕生〉。

「山と高原」連載が始まる前後の編集者の思い出。因に、この人の配慮がなかったら、『日本百名山』の原稿は散逸してしまった。

九三頁からは［第四部　「ヒマラヤ」から「シルクロード」へ］で、パスポートの写真やジュガール・ヒマール、バーミヤンやカブール等シルクロード探査行での写真。雁部貞夫〈深田久弥のヒマラヤ〉、長澤和俊〈深田さんとシルクロードの旅〉、近藤信行〈ヒマラヤからシルクロードへ〉。

一一一頁から［第五部　山の文学・山の名著］。福田宏年〈山と文学〉では、山の文学と小説の関係が論じられ、水野勉〈魅力的な山岳書の古典〉で、山岳書全体を俯瞰する。一二五頁からは最後の［第六部　年譜・出品資料］。年譜と出品資料の出所一覧表。

以上長々と記したのは、この本が文学展用に編まれたもので、三、〇〇〇部印刷されたが市販はされず、この原稿を書いている現在（九六年七月）残部は六〇〇部とのことであり、今後増刷はなくいずれは絶版になる筈なので、本稿も折を得た記録として残しておいた方がよいと考えたからである。

写真総数一八八点。深田さんの二歳の頃の写真から始まり少年時代、中学・高校から戦中、また家族の写真の他、昭和初期の小林秀雄、今日出海を始め文壇との交わり等貴重な写真が改めて数多く見られることは、文学展としては当然の準備かもしれないが、無闇に写真の氾濫するこの世の中で、人物写真の持つ固有の記録価値が再認識されるようで、皮肉にも興味深い。

文章面では様々なエピソードが深田さんを語り、肉付けとなっているが、深田研究者でもある近藤信行さんによる、第二部の〈深田久弥のルーツ〉から第五部〈シルクロードへ〉迄の四章が、伝記的側面と評価をしっかり捉え本書全体に太い一本の筋を通すことになった。また、年譜の作成は常に労多い傍ら地味な仕事であるが、重要な部分を成す。十一頁に亘る〈年譜――深田久弥の足跡〉は充分に詳細で、中馬敏隆、堀込静香のお二人に感謝しなければならないだろう。

「日本百名山」の出版は一九六四年だから、深田さんは当時晩年の六一歳であった。従って、本書は、「日本百名山の深田久弥」として著名になる以前からの作家、登山家、ヒマラヤ研究者としての深田全体像を今に示すという文学館の企画が、豊富な資料と相俟って大変まとまりのよい好著になったといえる。

さて、この文学展は好評で会期中の来場者は九千人にのぼり、何度も足を運んだ熱心な人達もいたという。「日本百名山」が名著であることは論を俟たないが、一方でガイドブック的な読まれ方をされたり登山対象の指針になると聞く風潮は、矢張り登山文化とはいえないであろう。「日本百名山」を「批評文学」と見た小林秀雄の眼が改めて印象的である。本の読み方は今更ながら易しくはない。

大森久雄さんから後日、この展覧会で深田さんが息子さんあての葉書に「ふかだ」ではなく「ふかた」とローマ字で宛名を書いていたことに気付いたとの話があった。それでパスポートのコピーを見ると、たしかに「ＦＵＫＡＴＡ」と記されていた。

私事になるが、開会日の翌日、会場では「登山それぞれのスタイル――低山彷徨とエッセイの愉しみ」と題して、「北八つ彷徨」の著者の山口耀久さん、山岳写真家の三宅修さんと私の三人の鼎談会があった。幸い盛会だったが、これも当然深田さんのお蔭である。

深田さんと私とのつながりはといえば、一九五七年頃、串田孫一

さんを中心に作っていた山の同人雑誌「まいんべるく」に原稿をお願いしたことが切っ掛けで、同誌に載せた私の木版画が深田さんの目にとまり、それが「九山山房」の蔵書票になり、更に文字を「日本百名山」に変えて初版の表紙を飾るという思いがけない結果となった。蔵書票は七〇〇枚余摺ったが、摺る度に松原のお宅に伺いお酒をご馳走になった。また、深田さんがニュージーランドに行かれた時、私はシドニーに住んでいたので連絡があり、藤島敏男夫妻もご一緒で家に来て頂いたりした。シドニーの植物園にお伴した後、藤島さんが「――という喜八も知らぬ花を見るかな」という一句を披露、深田さんが実に楽しそうに笑っておられたことを思い出す。そういえば、当時まだ尾崎喜八さんもご健在だった。

（大谷一良）

（なお、本書をご希望の方は、代金一、〇〇〇円に送料三一〇円を添えて直接世田谷文学館宛に申し込んで下さい。住所は、〒一五七 世田谷区南烏山一―一〇―一〇）

神戸大学山岳会・山岳部『山と人　八十年』

未知の世界を求めて――一九九五



神戸大学山岳部・山岳会
1995年11月刊
編集責任者　金井健二
B5判　418ページ

一九一五年（大正四年）に前身の神戸高商山岳会として発足した神戸大学山岳部の八十年史である。旧制高校を除けば、大学山岳部としては最も古い慶応、京大と同じ年代の創部で、戦前戦中の三十年、戦後五十年の歴史はずっしりと重い。第一部は歴史編、第二部では八十年史を彩る人物像、第三部に会員による紀行・エッセイという構成となっている。それぞれの時代を代表する優れた指導者として随所に登場する田中薫、高木正孝、平井一正各氏を中心とした戦前の台湾遠征、戦後の一大エポックとなったパタゴニア遠征、一九七〇年代のカラコルム・シェルピカンリ初登頂、更に一九八〇年

代のチベット・クーラカンリ初登頂など登山史を彩る記録の数々の記述に加え、戦後計十一名の犠牲者を出した遭難の記録と反省、八〇年代後半以降の大学山岳部の行詰まりの苦悩など、伝統的な学校山岳部の栄光と苦悩が読み取れて誠に興味深い。

黎明期からの長い歴史を紐解くと、海外遠征の望み薄くかつ国内登山での目標を失いかけた戦前の一時期、戦時中の空白、それに続く学制改革期の混乱、度重なる遭難事故などが、時には山岳部の存続の危機となって部の存亡をかけた議論となり、大学の山岳部とはいつの時代にも何と悩みの多きところかと思わずにはいられない。

前記指導者三氏は、それぞれが華々しい海外遠征の立役者であったと同時に、困難に直面した局面での山岳部、山岳会に精神的なバックボーンを与える役割を果たしており、「山岳部八〇年の歴史で特筆すべきは、一貫して優れた指導者に恵まれた幸運」（岡市敏治氏）とまで言わしめている。この三氏がいずれも神戸大学のOBではなく他校出身の教官（田中、高木両氏は東大、平井氏は京大）であったことは、他校の山岳部ではあまり見られなかった一つの側面ではなかろうか。

田中薫氏の神戸高商への移籍は昭和二年。直後に欧州留学となり実質上の赴任は昭和六年のこと。「この洋行帰りのしかも氷河研究で著名な田中先生を迎えて当時の山岳部員は驚喜したにちがいない」（円満寺正和氏）とある。その頃の山岳部は、昭和六年三月の田中伸三氏等による白馬岳主稜の初登攀等の記録を樹立するなど丁度その躍進期にあり、田中薫、伸三両氏の師弟がたちまち意気投合した様子なども語られている。山岳部員はしばしば田中邸へ押しかけ、山好きの田中千代夫人（田中千代学園の創始者）ともども山の話や山岳部の悩み事をながながと話し込むといった羨むべき師弟関係がずっと後年の戦後のパタゴニア遠征の時代まで続いたという。

戦前の二度の台湾遠征はこの様な雰囲気の中、田中薫氏を中心に昭和九年、十一年と行われたが、その後時代は日支事変を経て、山岳部のOBの多くが出征し、戦時色を増して行く。昭和十三年発行の部報「山小舎」の田中氏の次の様な論評の後、部史はやがて空白時代に突入していくことになる。

「事変前までの登山はその山への思慕の純粋性によって、次の如く順次高所より低所へと排列されていた。即ちヒマラヤ—岩場—冬山—夏山—ハイキングという風に。今国策に順応して山を以て体位の向上に資せんとすれば正にこの順序は逆転せざるを得ない。……中略……ヒマラヤに行けないことを嘆く人は、ここに大きな道標を立てることに努力すべきだ。今までの心尽くしが埋もれぬ為に、再び時至って発足する日の目印に。」

敗戦後の混乱期、神戸大学山岳部が昭和二五年に発足するまでの間にも、その母体となった神戸経大予科、神戸工専では既に山岳部の活動が始められ、関西学生山岳連盟神戸セクションが組織され各校の弱体化を補完すべく合同合宿などが行われた。昭和二十四年春の神戸工専、神戸経大予科、旧制甲南高校、新制灘高校、報徳商高の合同パーティによる北鎌尾根合宿の珍しい記録写真もある。

高木正孝氏の神戸大学赴任は昭和二十八年で、赴任直後に第一次マナスル遠征に参加、帰国直後に山岳部長に就任している。当時発足直後の神戸大学山岳部は、大学自体がまだ蛸足大学であったこと

から来る組織上の悩みに加え、戦前の異なる母体山岳部ＯＢの統一組織化の困難にも直面していたが、高木氏はヨーロッパアルプス、ヒマラヤの経験者としての技術面での指導の傍ら田中薫氏らとも協力して山岳部及びそのＯＢ会の組織確立にも尽力することになる。曰く「山岳部がやらねばならないことは、ＯＢの組織化、ルームをもつこと、山小舎をつくること、次は君！　海外遠征だよ……」。そしてこれらが次々と実現され、やがて一大エポックとなった昭和三十二年の日智合同パタゴニア探検隊（遠征隊長田中薫、副隊長高木正孝）の派遣となり、この隊は翌三十三年三月アレナーレス峰（三四三七㍍）の初登頂を果たす。ちなみにこの時代までに大学山岳部（山岳会）で海外遠征を果たし得たのは戦前の立教、戦後も僅かに早稲田、京大あるのみであった。

しかし、東京の七年制高校成蹊学園育ちでヨーロッパじこみ、華麗な山歴を持った心理学者高木正孝氏の神戸での活躍が順風満帆であったわけではない。田中薫氏は「彼の指導精神はネオアカデミズムで、必然的に近代探検主義に結びついているようである。これがため始めは学生たちもとまどい、ついで現役部員と先輩団との間に、浅いけれども溝ができたことも事実であるが、……」と指摘する。

その後の高木氏は山岳部員にとってのカリスマ的存在となり、「登山学校方式」「クラシカル登山」等々の遺訓を残し昭和三十七年八月南太平洋に消息を断つことになるのだが、この謎の死に繋がる暗示が何かありはしないかとの素朴な疑問に勿論この報告書は何も答えてはくれない。以後「高木さんの山登り」をめぐる論争は続く。

編集責任者金井健二氏自らの執筆になる「遥かなエクスペディション」は本人が隊長を務めた昭和三十八年のボリビア・アンデス遠征の顛末を詳述したものだが、隊員の造反による隊の分裂劇は、その裏にあった高木正孝氏との確執を抜きにしては語れないもので、今回初めて公にされたもの。造反隊員側の台詞として「高木先生の山登り」がしばしば登場したという。公式記録ときれいごとの回顧録に偏りがちなこの種の部史の型にはまらず、過去の遠征登山の「知られざる側面」を記録に残そうとの編集方針に沿った本稿が、造反側の反論がないのがやや物足りないが、本報告書の読み物としてのハイライトの一つとなっている。この隊は結局主目標のイヤンプ峰を放棄してイリマニ山群に転進、その中央峰と南峰を登頂して帰国する。

高木氏が消息を断って二年後、昭和三十九年に平井一正氏が神戸大学に赴任する。その後の三十年史の要約が巻頭言「神戸大学回想三〇年」にある。京都大学士山岳会のチョゴリザ、サルトロカンリと二度の遠征に参加しチョゴリザでは初登頂も果たしたという輝かしい山歴の持ち主も、翌年には副部長に就任したものの神戸の山仲間入りするまでには少々の年月を要した。山岳部では西鎌尾根での遭難があったり、アラスカ・ユーコン遠征が行われたりした後、念願のヒマラヤ遠征となるのだが、昭和五十一年シェルピカンリ（七三八〇㍍）の初登頂の際の遠征隊長となった平井氏は語る。

「神戸大学にきて一〇余年、ようやく気心しれた仲間が育ち、遠征隊を作るまでになった。はじめは私の背後に京都大学学士山岳会という組織があったため、なんとなく敬遠気味であったＯＢ連中も、ようやくなじんできたという感じになった。」

以後の山岳部・山岳会では、一方で痛ましい遭難事故、その事後処理、反省、対策の過程での様々な葛藤と遭遇しながらもそのエネルギーを数年毎の海外遠征へと傾注していく。現役部員によるヒマラヤ合宿（昭和五十八年パルチャモ峰）、次の大目標の一つとなった世界第二の未踏峰（当時）チベットのクーラカンリ峰（七五五四メートル）の登頂（昭和六十一年、総隊長平井一正）、更には中国との合同登山および四川省の未踏峰チェルー（六一六八メートル）の登頂（昭和六十三年、隊長北口博教）へと続く。さて、次なる目標や如何に、となったところで平井氏は定年退官となり本書発刊の年に神戸を去った。

九十周年、百周年を待たずしての八十年史の編纂の意義は、激変する登山界、存亡の危機に立つ大学山岳部の今後を考えると時宜を得たものといえよう。しかし、編者諸氏も述べるごとく、この八十年史が大学山岳部と、そこで青春を過ごしたかつての若者への挽歌となることなく、若い世代に読み継がれ、伝統ある山岳部の火が燈り続くことを切望するものである。

編集に若干の注文をつけるとすれば、各稿の見出し小見出しに今少し工夫して何処に何が書いてあるのかを解り易くしてほしかったこと。またそれと同じ理由で巻末の年表も遠征隊名や山名を解り易く入れてほしかった。

なお最後に、昭和三十一年の創刊号からの誌名「山と人」の由来を探ると戦前活躍した故山本明氏の遺稿集につき当たる。昭和十五年第二次台湾遠征の事実上のリーダーであった山本氏は中国山東省での戦死の直前に野戦郵便局にあった大枚の預金全額を母校山岳部に寄付するとの遺言を残した。同氏の遺稿を田中薫氏が編集出版した書名「山と人」（昭和十六年朋文堂・「山と渓谷」一九九五年八月号に参考記事があり）が縁となって選ばれたに相違ないと思うのである。

（越田和男）

木下是雄著

『山　ひと　スキー』



晶文社　1996年1月刊
四六判（木下是雄集2）
355ページ　3,800円

先年の冬渡辺兵力、山田二郎両先輩のおともで鹿沢温泉に泊まり、湯の丸山に登ったときのこと、紅葉館の玄関で先に送ったスキーを探していたら、送り主が木下是雄となっているスキーがあった。宿の人に聞いたら毎年お見えになりますとのこと、学生の時ここのゲ

レンデで朋文堂から出された先生の著書『ペルケオ・スキー読本』をテキストにみんなで練習に励んだことを懐かしく思い出した。

家に帰って本棚を探したら、表紙が黄ばんで大分傷んだこの本が出てきた。そこで木下先生も入っておられるアルパイン・スキー・クラブの会報に、この本のことを書いていただくようお願いしたら、こころよく引き受けて頂けた。それを御覧になった松丸秀夫さんが、「懐かしい本のことを取り上げましたね、スキー技術の本はいろいろありますが、理論的に一番確かなのはこの本です」とおっしゃったのをおぼえている。今やこの本も珍しいらしく、神田の悠久堂に行ったらカバーを掛けられショーケースの中に鎮座していたから、怖くて値段を聞くこともでき兼ねた。

少し脱線するけれど私の中学にも、化学班だか物理部といった人気のある先生の取り巻きサークルがあって、山岳部にいた私から見れば秀才面した虫の好かない連中が集まっていた。そしてある日の授業で先生がガモウの『不思議の国のトムキンス』が面白いと紹介したら、この連中は一斉に飛びついて、得々とこの本の面白さについてしゃべるようになった。私もこっそりと買って読んでみたが、悔しいことにちっとも面白くない。物理が好きな連中はどうかしているんじゃないかと思った。そしてこの本は何年か本棚の隅で埃を被ったままになっていたが、大学の二年の夏、涸沢の合宿から帰って家でぶらぶらしているときに何気なく手にとってみたら、面白くて一気に読み通してしまった。その夏はすっかりガモウにとりつかれ、図書館で見つけた十冊ばかりの全集を全部読んだのを覚えている。一冊の本の印象がこれほど劇的に変わった経験は後にも先にもこれだけである。何が私の中で変わったのか分からないが、少しは物事を論理だてて考える習慣と能力が身についたのだろうと不思議に思っている。それからはこのような系統の本も良く読むようになり、岩波から出た『物理の散歩道』の何冊かも私の手元にあり、この本の著者ロゲルギストのなかに木下さんが入っていること位は知っていた。

そんな事を知っている方がいて、この本の書評を私に書けと言う。気軽に引き受けたものの、そのつもりでこの本を読みなおして、えらいことを引き受けてしまったと気がついた。というのもこの本には様々な形で発表された、一九五〇年代から最近までの山とスキーの話、交遊録、旅行記など様々な内容のエッセイが幅広く収められていて、これを一言で評するなどとても私ごときの手には負えそうにない。言わばこの本は著者の自伝の一部ともなり得るような著作と言えよう。

詳しくは小田稔氏が巻末に、「木下さんの山」、「木下さんのスキー」、「木下さんと人の交わり」、「木下さんと南極」、「木下さんの地球紀行」に分け、手際良くこの本の解説をしておられるのでお読み頂くほうが早道だが、このような解説が必要なくらい内容が多岐にわたる本なのである。

三つに分かれるこの本の第一部は、山とスキーに関するエッセイ集になっていて、当然の事ながら一番興味深く読ませていただいた。「ハイキングと山登り」、「大学山岳部のかかえる問題」、「山用スキー靴論争」など、このような問題に縁がない今の人々には興味が湧かないテーマかもしれないが、先生よりすこし後の世代に属する私も、

同じような議論を折に触れていたので懐かしくもあり面白かった。

大学が四年制になってからすぐ山岳部に籍を置いた者にとっては、戦前の水準を越える山登りを、四年制の枠の中でどのようにしたら達成できるかと言うのは最大の関心事、O・B現役一緒になってずいぶん議論したことを「大学山岳部のかかえる問題」を読み懐かしく思い出した。

しかし第一部でもっとも興味深かったのは「登頂の真偽」で、科学者として実験データについて『そこで、私が論文をまとめるとき、あるいは彼等の論文をチェックするときに、私は往々にして不確実な確保のもとに脚下数百㍍の岩壁を登る感じを味わわされるわけである』と率直な悩みを打ち明けておられる。そして中国のエベレスト隊の報告についてアルパイン・ジャーナルの編集者は「この報告は、頂上近くのルート、その他地形の細部などの一番肝腎な点については甚だしくあいまいである」とコメントしているが『そういう記述は、ふしぎに、でたらめは書けないものだ』と科学者としての永年の体験から出た感想を述べられているのが印象深かった。そのほかにも「墜落」、「私の見た学習院山岳部」などにそれぞれに印象が残るがオールド・タイマーには面白くても、最近入会した人に面白いかは分からない。

第二部は交遊録、書評などが中心となっているが、日本山岳会の諸先輩、黒田正夫さん、初見一雄さん、あるいは「N・Nカップリングのこと」と題した西堀栄三郎・永田武両先輩の思い出など興味深く読ませていただいた。しかしこれは当然のことながら存じ上げている方のものは面白く、そうでない方に関するものは余り面白くない。読む人によりさまざまな受け止め方があるのを、ここで私がどうこう論評を加えても始まるまい。ただ初見一雄さんの思い出を書いた「初つぁん」と題する一文は、お二人の人となりがしのばれるしみじみとした佳篇で、あの初見さんの警咳に接したことのある方は是非お読みいただくようお勧めしておこう。

第三部は南極、ネパール、ブータン、スイスなどの旅行記、一九五六～五七年の南極行から最近のブータンのトレッキングまで、地域も年代もずいぶん幅広く取り上げられていて楽しい。やはり南極観測が大変な壮挙として報じられた頃の南極行は、さすがに生き生きとしていて、今読んでも新鮮である。それにネパールのトレッキングに出かける前に、理科年表で気象条件を調べ服装を用意するくだり、遠征の前にカラチの気温などをこれで調べたことを思い出した。文化系の学生であった私でも理科年表を手元に置いて、山登りだけでなく海外出張の折にも利用していた。この頃分厚くなり兎小屋の場所をふさぎ困っていたが、最近になって一枚のCD-ROMに過去の何十冊分のデータが収まったので古い理科年表を整理してしまった。これも時の流れを感じさせる。

こうして読み終えて見ると、バラエティーに富んだ内容のエッセイを詰め込んでいるが、山とスキーという二本の横糸が全編を貫いているのでまとまりが出て居るように思える。しかしそれだけに横糸が弱い部分がややつまらないように思えた。この本は普遍的な読み物とは言えないが、著者と登場人物を知る人にとってはたまらなく楽しい本であることは間違いなかろう。

（山本健一郎）

会報「山」図書紹介一覧―一九九五年度―

●四月号（五九九号）

邢天正著『邢天正登山講座』（戸外生活圖書股份有限公司・台北）
橋本廣著『山景画集』（桂書房）
栗林一路著『句集　山嶺旅情』（自家版）
熊谷樫著『北海道の山を滑る』（白山書房）
G・L・マロリー著／田中純夫訳『エヴェレスト・付論』（本会越後支部）
日本地図センター編／国土地理院監修『地図利用マニュアル』『地図記号のうつりかわり』
Geoff Tabin "BLIND CORNERS Adventures on Seven Continents"

●五月号（六〇〇号）

Audrey Salkeld & José Luis Bermudez "ON THE EDGE OF EUROPE" Friedrich Bender/Jill Neate tr. "CLASSIC CLIMBS IN THE CAUCASUS"
カフカスの地図
①Teberda Region-Western Range 1：100000
②Mount Elbrus Region 1：80000
③Bezingi-Sugan-Laboda Region 1：100000
④Adai Khokh-Khalatsa-Kazbek 1：100000
⑤Central Caucasus 1：200000
広島山稜会編『峠』創立三十五周年特集号
W・ウエストン著／三井嘉雄訳『日本アルプス登攀日記』（平凡社）

●六月号（六〇一号）

共同通信社編『山を歩けば』
奥日光写真クラブ編『山からのたより』
戸田博子編『志賀重昂―回想と資料』生誕百三十年記念誌（自家版）
日本イヌワシ研究会・日本自然保護協会編『秋田県田沢湖町駒ヶ岳山麓イヌワシ調査報告』

●八月号（六〇二号）

西尾寿一著『渓峰閑話』（ナカニシヤ出版）
『ナムチャバルワ初登頂』（読売新聞社編）
L. D. S. Thomson "THE BLACK CLOUD"
R. W. Sandford & Geoff Powter（日本自然保護協会発行）
"CANADIAN SUMMITS Selections from the Canadian Alpine Journal 1907-1994"
"Berg '95 Alpenvereinsjahrbuch"
Fred Beckey "MOUNT McKENLY Icy Crown of North America"
平野長靖著『尾瀬に死す』（社会思想社）

●九月号（六〇四号）

飯田辰彦『有峰物語』（ＮＴＴ出版）
今尾恵介著『地図の遊び方』（けやき出版）
小倉董子著『これなら安心・山歩き入門』（主婦と生活社）
田口二郎著『東西登山史考』（岩波書店）

●十月号（六〇五号）

伊佐九三四郎著『キリマンジャロの石―辺境の山・旅―』（現代旅行研究所）

斉藤清明編　今西錦司初期山岳著作集『初登山』（ナカニシヤ出版）

田淵行男著『山は魔術師―私の山岳写真』（実業之日本社刊・ブルーガイドセンター発行）

中華民國健行登山會編　國民旅遊叢書『大台北地区近郊登山手冊』（交通部観光局発行）

田部井淳子著『山の頂の向こうに』（佼成出版社）

●十一月号（六〇六号）

加藤則芳著『森の聖者―自然保護の父ジョン・ミューア』（山と渓谷社）

山口裕一著『人はなぜ道に迷うか』（筑摩書房）

ガストン・レビュファ著／近藤等訳『山こそ我が世界』（山と渓谷社）

吉村迪著『信仰の山』（東京新聞出版局）

高木正孝著『パタゴニア探検記』（岩波書店）

Andrea Gabbard "LOU WHITTAKER Memoirs of a Mountain Guide"

●一月号（六〇八号）

学習院総務部広報課刊『テムズとともに英国の二年間』（学習院教養新書）

山岳修験学会刊『山岳修験』第七号（十周年記念号）抜き刷り

廣瀬誠・清水巌著『山と信仰・立山』（佼成出版社）

佐伯富男追悼集編集委員会編『芦峅の自然児・トンコ―佐伯富男追悼集』（講談社出版サービスセンター制作）

●二月号（六〇九号）

中村正晃・土田玉江著『グリンデルワルト便り』（山と渓谷社）

飯山達雄編『写真集北朝鮮の山』（国書刊行会）

山村調査グループ編『村の記憶』（桂書房）

憩谷樫著『グリーンランドは旅人を離さない』（白山書房）

群馬県山岳連盟編『母なる大空　冬期サガルマータ南西壁一九九一～九二／一九九三～九四』（群馬県山岳連盟）

宇都木慎一編『関大山岳部の七十年　創部七十周年記念誌』（関西大学体育会山岳部ＯＢ会発行）

●三月号（六一〇号）

早川禎治著『知床記―自然と人との出会いについて考える―』（近代文藝社）

正橋剛二解読校注『立山遊記・立嶽登臨圖記』（桂書房）

岩田修二・小疇尚・小野有五編『世界の山やま』二分冊（古今書院）

大関保著『ネパールヒマラヤの山旅』（穂高書店）

住谷雄幸著『江戸百名山図譜』（小学館）

追悼

山口健児氏（一九〇五～一九九五）

「山ケン」こと山口健児（たける）氏は一九九五年六月三十日、あと一ヶ月余で迎える満九十歳〈卒寿〉の誕生日を前にして逝去された。この訃報に接したのは、北大山岳部の創立七十周年を記念する集いの七月一日の朝である。一九二五年山岳部の創立に参画し、今日を築いて来た今は亡き多くの先人達のうちで残り少ない先輩をまた一人失う思いで、その日、集まった仲間達は限りない寂寥を覚えた。そのとき、創立時のことを語り、山ケンと共にした山行のことなども話していた「ダブサン」こと渡辺千尚氏（元北大教授）も今年五月二十五日逝去されたことはかえすがえすも残念なことである。

山口氏は一九〇五（明治三十八）年東京に生まれ、明治中学を経て、北海道の自然に憧れて北大予科から農学部に進んだ。予科に入ったのは一九二三（大正十二）年の春、恵迪寮に入寮、そのとき旅行部の部屋に入れられ、山仲間として育つことになる。恵迪寮旅行部と予科桜星会旅行部の部員は冬になると北大スキー部員に変身して、青山温泉に合宿、スキー術を教えこまれたという。合宿が終わるとスキー登山に励むことになる。北海道の山は余り高くはないが、雪線が低い。二〇〇〇㍍級は厳冬期は本州の三〇〇〇㍍級以上の登山技術を要する。スキーは冬期登山に欠かせない道具となる。山口氏は北海道の山は夏はネマガリダケやチシマザサの密生によって縦走できない、厳冬の厳しさを避け春の雪を利用して縦走するのがよいということに着眼して、「三国山より石狩岳へ」「五月の芦別夕張連峰」などを「北大山岳部報」第一巻や第二巻に記述しているがごとく、北海道の山の初期の登山について慧眼をもって説いている。氏は北大山岳部員のなかでも、山のみならず眼に触れ、耳にするもの万般について研究心旺盛、博覧強記をもって知られ、部報二号所載の「日高山脈アイヌ語考」はその面目躍如たるものの一つといえる。「北海道の高山に登らんと考えるときは、まづ第一に不可解なるアイヌ語の山の名、川の名に驚かされる」「山或いは川の名はその表現により山或は川の全性質を表して遺憾のない場合が多い。故にそのアイヌ語を知ることにより、どんな山或は川であるかの概念をよく把握できることができる」云々。

北大山岳部は一九二六（大正十五）年十一月に創立された。登山家であり思想家でもあった伊藤秀五郎氏をはじめ田中二郎、田口鎮雄、小森五作、櫻井信雄、坂本直行、沢本三郎、江幡三郎、中野征紀、初見一雄などの諸氏が創草期の部を形成して来た。山口氏は部創立に参画した。日本山岳会には一九三〇年入会。会員番号は一一七一だった。山口氏は名を健児＝たけるというが、「山ケン」で通っている。氏は海外の山もいろいろと訪れているが、メンヒなど登って暫くグリンデルワルトに滞在した折であろうと思われるが、氏の大切にしていた、そこで求めたと思われるペントのピッケルには自

ら「YAMAKEN」と刻印されている。これは今度出来た北大山岳館に保存されることになった。

「山ケン」の山以外の生涯の労作としては、ニワトリ―鶏の研究があることはよく知られていることである。

「山ケン」の、その人となりを知る人に遺した深い畏敬の念は限り無い。ご冥福を祈って筆をおく。

（湯川龍二）

今西壽雄氏（一九一四～一九九五）

京都学士山岳会幹部の新年宴会は、決まって一月七日、祇園の「近江作」で行っている。一月七日は今西錦司氏の誕生日である。今年の一・七会の席でいつものように芸奴さんの舞がでた。心えたもので曲は「東山」、舞は井上流である。しんみりした曲とゆるやかな舞は、常連の二人の芸奴さんのすばらしい芸で、しわぶき一つ出ない静けさのなかで終わった。満座の絶賛はいうまでもなかった。

曲中の「諸行無常」のせりふが妙に生々しく心にひびいた。

だいぶ以前になるが壽雄さんのご息女の結婚式に桑原・梅棹の両先輩と招かれ四時間を超える大披露宴であった。

数日後、彼から電話でハネムーン先の自動車事故で、ご息女が亡くなられ葬儀を行うので出席してほしいとのことであった。私は絶句したままであった。十分ほどして桑原さんから電話で相談をうけた。

「いや私は出る勇気がありません」

「うん、俺もスシオの顔を見られないよ」

結局、梅棹さんと三人欠席してしまった。

翌年の「一・七会」に壽雄さんは欠席せずに出席であった。口々にお悔やみを申しあげたが、ほほえんで「気にするなよ」と打ちけすだけだった。仲間との歓談で滅入る気持をふっきろうとする壽雄さんの悲しみの深さが、私たちの胸をうった。

今度の末期の病床で軍歌「戦友」を好んで歌ったと聞いた。終戦時、旧満州（中国東北）で妻子を失い、自分はソ連の戦車隊と死闘を展げ部下を失った深い悲しみが、終生心の奥底にわだかまっていたことを知った。

「はなれて遠き満州の赤い夕陽にてらされて、戦友は野末の石の下」の悲痛なメロディーは彼の心そのものであったのだろう。

あんな立派な人がどうしてこのように不幸にあい続けたのか。宗教の永遠の課題であろうが、いかなる論も私には納得できない。

人間とはしょせん生き物である。単なる生き物の生と死なのかも知れない。

チョゴリザ登頂日に因んで八月四日、アンナプルナ、チョゴリザ、ノシャック、サルトロカンリのメンバーが集まる「アンチョゴ会」がある。発足した頃、私は北海道勤務だったので相当おくれて参加した。桑さん、壽雄さんは殆ど皆出席だった。

武生の林一彦君（マナスル偵察隊、サルトロ）の肚いりで越前海岸で行うことが多く、私も立山、黒部、白山の山麓に設営したりし

た。若かっただけに夜を徹して痛飲したものである。壽雄さんも相当乱れたことがあったのを覚えている。しかし後年、ご夫人方が参加されたせいか、無芸快飲の彼は終始ご機嫌よく乱れたことがなかった。

一橋の小谷部全助は壽雄さんが最も尊敬していた登山家であった。私も小谷部さんの登攀記をよんで、このような優れたクライマーになりたいと熱望した時期があった。

壽雄さんの本質はやはりハードなクライマーであったと思う。アンナプルナ、マナスル、鹿島の奥壁等ではその真価が発揮されている。もちろん山岳会会長、チョモランマ三国合同登山での類いまれな大リーダーの手腕については、論をまたない。しかしベース・キャンプや北京、ラサで総指揮をとるより、チョモランマの頂を自分の足でふむチャンスがなかった口惜しさがあったに違いない。

芳子夫人は晩酌では必ず藤平の話をしたので兄弟以上の交わりでジェラシーを感じたとおっしゃり、ご長男の邦夫氏は「一番おそろしかったのはアンナの退却だった」と聞いておられ、関西支部の方々は「アンナは一番楽しい山だった。残念だったという隊員は一人もなく全力を尽くした満足感だけだった」と壽雄さんの言葉を伝えていただいた。

反対に当時の隊員とはアンナの想い出を語りあった記憶はない。私たちの間ではアンナは記憶の底に沈みこんではない。想い出して語るものでなく、四十年以上を経てもなお生き続けているのである。私が胃の悪性腫瘍の手術で金沢大学病院に入院中、林一彦君が毎週のように見舞ってくれた。無事退院のとき第二外科部長の宮崎教授が尋ねたら林君は「藤平さんとは兄弟以上の関係です」と答えたことを宮崎教授は家内に伝えられた。彼とは学生時代から最も多く山行をともにしており、何度か生死を賭けたことがあった。

我儘がいいあえる甘えのある骨肉のつながりとは全く異質なものと思う。生死を賭けた山との闘いをくぐり抜けた裸の人間同士の魂のつながりであり、深い信頼の絆である。

山岳会会長としての今西壽雄を論ずるより、私は生死を共にした仲間としての壽雄さんを語りたかったのである。

（藤平正夫）

◇

秋、関西電力病院に今西さんをお見舞いしました。時々、混濁迷走する意識の中で私の手を確り握った力に激しく心が揺さぶられました。暗澹たる思いに打ちひしがれ来るべき時の覚悟は決めていました。

一九九五年十一月十五日、遂にその訃報を現実なものとして受けたときガックリと肩の力が抜け、マナスル登山成功以来四十年に亘る公私共々のことどもが走馬灯のように脳裡を駆け巡りました。

一九五六年第三次マナスル登山隊（隊長槇有恒、後援毎日新聞社）はヒマラヤ八〇〇〇㍍巨峰の初登頂に成功し、五年に亘る登山に終止符を打ちました。その第一次登頂者として今西壽雄とガルツェン・ノルブが栄誉を担いました。

今西さんとの知遇はこの登山が契機で、すでにＡＡＣＫの猛者としてアンナプルナでの勇猛果敢な登攀は登山界では定評がありまし

た。

白い帽子に半パンツ、ズック、肩に胴乱、手に採取網を持って炎天下カトマンズの街の水苔を採って廻っている姿が印象的でした。ガッシリした体軀、柔らかな物腰、寡黙。「これがあの凄い今西さんか」と親しみと畏敬を込めた眼ざしで見つめたことが昨日のように思い出されました。

マナスル登山の成功の持つ意義は単にＪＡＣ、登山界に留まらず、戦後十年を経て『手から口』への暗い世相からやっと抜け出し社会復興と国際社会への復帰第一歩との軌を一にし、社会一般に与えたインパクトは私どもの想像を遙かに超えたものでした。

初登頂者となった今西さんは槇さん共々時の人となり日本登山界を代表する世界の顔となりました。私が心底から敬愛して止まないのは、担った栄誉を常に謙虚に受け止め感謝の気持を終生の指針とされていたことです。

特にネパールについては一九七〇年大阪万博のネパールパビリオン建設の援助を初めとして公私共に限りなく続けておられました。最後は大阪の名誉総領事を拝任し社内に事務局を設け役務を支援されました。

また一九七〇年ＪＡＣ関西支部長時代、当時エベレスト登山担当理事としてスキー隊との登山許可競合問題で日々苦戦の私に温かい心強い励ましの言葉、最後の交渉にはカトマンズまで同行して頂いたことなども思い出されます。

特別な印象としてＪＡＣ会長時代（一九八五～八九年）に私も副会長を仰せつかり会務の補佐役として一緒に仕事が出来たことでした。丁度会の創立八十周年に当たり記念式典と晩餐会を椿山荘で行い秩父宮妃殿下のご臨席を戴き今西会長の挨拶、妃殿下のお言葉など盛会裡に無事終了し伝統ある会の行事の重責を果たした感動を持ちました。

祝賀会が終った夜、東海支部から日・中・ネ三国合同登山計画が提示されました。

当初、会長、山田副会長は静観でしたが、中国登山協会史占春主席の来日歓迎会の首席挨拶で「中国とネパールが合同してチョモランマ登山を行うに際し、日本はこれに参加し支援する責務がある……」と熱望されました。

参加決定以来二年余り、三国間での持ち廻り会議、国内準備、募金、資金援助計画など平等の原則に則りそれは大変手間のかかる神経を使う仕事でした。今西さんは七十二歳、私と十歳違いでした。会長在任中多忙な社長業の傍ら大阪・東京間を往復し一度も会合を欠かしたことなく壮者を凌ぐバイタリティーでした。

今西組の社長室でのことでした。

「今度の登山は今までのお礼奉公みたいなもんやな、特に異文化の三国登山隊のチームワークは登山の実際よりよっぽど難しいわ、やっぱり日本が軸になって裏方に徹してやらないとあかんな、日本が登山技術や資金を援助したからといって表立ってはいかんな。それから中国・ネパール共に国家事業として掛かっているので安全の内に結果第一だ、下手な失敗は許されないからしんどいわ。ＪＡＣとしては若手の育成と何等かのものを残したいね」と、総隊長の胸の裡を洩らしてくれました。

追　悼

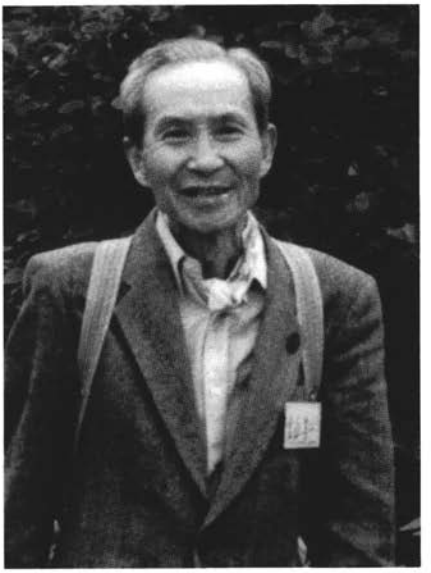


名誉会員

今　西　壽　雄氏

IMANISHI Toshio (Hon.Mem.)

(1914～1995)



名誉会員
金　山　淳　二氏
KANAYAMA Junji
(Hon.Mem.)
(1909～1995)



名誉会員
橋　本　誠　二氏
HASHIMOTO Seiji (Hon.Mem.)
(1918～1995)



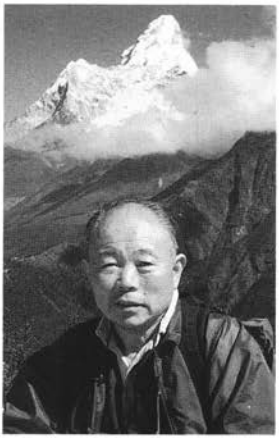
今　村　正　二氏
IMAMURA Shōji
(1913～1995)



◀野　島　福三郎氏
NOJIMA Fukusaburō
(1902～1995)



▲戸　村　貞　男氏
TOMURA Sadao
(1909～1995)

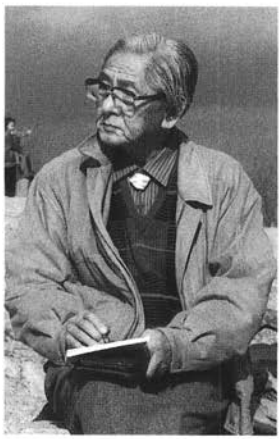


入　澤　郁　夫氏▶
IRIZAWA Ikuo
(1928～1995)
(写真は遺品のカメラに
入っていたもの)



◀高　尾　徳　重氏
TAKAO Tokushige
(1908～1995)

村　井　喜一氏▶
MURAI Kiichi
(1909～1995)





◀田　邉　　史氏
TANABE Hiroshi
(1930～1995)



久　保　孝一郎氏▶
KUBO Kōichirō
(1920～1995)

清　野　　恒氏▶
SEINO Tsune
(1910～1995)





◀宿　屋　昭　二氏
YADOYA Shōji
(1927～1995)

石　井　恵美子氏▶
ISHII Emiko
(1938～1995)



私も最後の道楽の極みと腹を据えて掛かりました。

一九八八年五月五日子どもの日、好天に恵まれ予想以上の大成功を収めました。北と南からの三名の交差縦走、それの山頂でのＴＶ衛星生中継の成功により中国・ネパールでのＴＶ放送の大反響は想像以上のものでした。

この日北京総指揮部で今西・史両総隊長は第二次登頂実施可否を巡っての大激論でも実施を強く主張した今西さんの迫力ある面影が伺えます。結果優先の原則に妥協を迫られた登山終結宣告は苦渋の決断であったと後で聞かされました。

若手の育成の種も蒔かれ、基金の原資も確保出来てほっとされ、「終りよければすべてよしやな」と呟かれておりました。

今西さんの頑健さを思うとまだまだこれからも十分にご交誼いただきＪＡＣ創立百周年の二〇〇五年までは大丈夫と思っていた事など思い浮かべ誠に惜しまれてなりません。

戦前からの実践登山の猛者がこれで又一人消え、一つの大きな幕が閉じられた思いです。

（大塚博美）

略年譜

一九一四（大正三）年九月九日　奈良県大和高田市に生まれる
一九四一（昭和十六）年　京都帝国大学農学部農林工学科卒業。内務省神戸土木主張所勤務（四月）。兵庫県土木部砂防課勤務（六月）
一九四二（昭和十七）年　陸軍野戦砲兵第四連隊入隊
一九四三（昭和十八）年　築城作業隊として虎頭八五一部隊入隊
一九四五（昭和二十）年～四八年　シベリア抑留
一九四八（昭和二十三）年　㈱今西組入社
一九五六（昭和三十一）年　マナスル初登頂により、文部大臣よりスポーツ並びに学術界貢献による感謝状。大阪府高石市名誉市民。内閣より銀杯
一九五七（昭和三十二）年　朝日賞、毎日スポーツ賞受賞
一九六三（昭和三十八）年　㈱今西組取締役社長就任
一九七八（昭和五十三）年　黄綬褒章受章
一九八四（昭和五十九）年　勲四等旭日小綬章受章
一九八八（昭和六十三）年　ネパール王国よりゴルカ・ダクシン・パフ勲章（勲二等）受勲。中華人民共和国体育運動栄誉奨章（一級奨章）受章
一九八九（平成元）年　中国科学探検協会名誉会員
一九九三（平成五）年　ネパール王国大阪名誉総領事。大阪市民表彰
一九九五（平成七）年　㈱今西組取締役会長就任。十一月十五日死去、享年八十一歳

主な山歴

一九三五（昭和十）年　鹿島槍北壁積雪期初登に成功（旧制浪速高等学校在学中）。済州島漢拏山積雪期初登に成功（同）
一九三六（昭和十一）年　日本山岳会入会。会員番号一六四九。紹介者は盛岡英治郎・宮崎武夫両氏

一九三八（昭和十三）年　内モンゴリア調査隊に参加（京都帝国大学在学中）
一九四〇（昭和十五）年　厳冬期の樺太で犬橇の研究に参加（京都帝国大学在学中）
一九五三（昭和二十八）年　㈳京都大学学士山岳会アンナプルナ峰遠征隊長
一九五六（昭和三十一）年　日本山岳会第三次マナスル登山隊に参加し、五月九日ガルツェン・ノルブとともに初登頂。
一九五七（昭和三十二）年～一九六九（昭和四十四）年　㈳京都大学学士山岳会常任理事
一九六九（昭和四十四）年～一九八五（昭和六十）年　日本山岳会関西支部長
一九八五（昭和六十）年～一九八九（平成元）年　日本山岳会会長
一九八八（昭和六十三）年　チョモランマ・サガルマタ三国友好登山隊の日本隊総隊長
一九八九（平成元）年　日本山岳会名誉会員に推挙される

金山淳二氏（一九〇九～一九九五）

金山さんを私が知ったのは一九三三（昭和八）年六月、慶応山中山荘の山岳部懇親行に於いてであった。山荘の大広間に四十余名が会食の席の中央に座を占めるチーフリーダー金山さんは小柄な体軀ながら歯切れよく辛口のジョークを交えて談笑しつつ会をリードして居られた。我々にはちょっと取り付き難いように思われた。

それから三ヶ月後、夏休みが明けて九月の夏山懇談会で金山さんから「木曜会」の創設が述べられた。「毎週一回必ず全部員がルームで顔を合わせてお互いの理解を深め且つ先輩方とも緊密になろう」との趣旨だった。

当初、木曜会の議題は研究発表が多かった。金山さん自らによるヒマラヤの紹介、特にカンチ解説には熱がこもっていた。有志部員が分担して「ウム・デン・カンチ」の翻訳を発表したのも金山さんの主唱によるものだった。私はつとめて木曜会に出席したが、金山さんと直々に話を交わし得ず、山へお供する機会もないままに卒業された。

卒業直後、一九三四（昭和九）年の夏、単独で南千島のチャチャヌプリ（国後島）に登られた。今にして思えば、これは珍しい貴重な山行だったと思う。

その年の冬にはSさんがリーダーの下に私達同期四名が参加した木曽御嶽隊に金山さんも同行された。快晴の一日、全員が首尾よく登頂の後、金山さんの主唱で剣ヶ峰から摩利支天、継子岳と存分に歩き廻った。金山さんは先頭を切ってグングン歩かれる。その軽快な足運びを見習おうと私は懸命について行った。

予定を終えて翌日中ノ小屋から里へ下る途中のことである。八海山の南斜面の凍結した急坂にかかってモタモタしていた私達をサッと追い抜いて一気にとばされる金山さんの「ホッケ姿勢」を少しも崩さない安定したスキーに私はすっかり感心した。Sさんも当時を

回想してこう述べて居られる。

「下山の途中一休みしていた処、夏道に直角の斜面に段差があったにもかかわらず金山さんが滑ってきてその手前でジャンプして滑っていったのを見たが、何んの下見もしないでしかもザックを負ったまま滑って来て咄嗟にジャンプができるとはその技術もさることながら度胸も大したものだ。どこでどうやって身につけたのかね」と。

そのスキーの技術や冬山経験は、スキー界では全国的にも知られていた叔父さんの松木喜之七さんの薫陶を受けたものであることを、金山さんは述懐しておられる。

さて翌年二月、私は厳冬期の富士山に登りたく思い仲間を誘っていたが、未熟な我々だけでは行かせて貰えず、リーダーを求めていた。そんな時、チーフの谷口さんがたまたま部室に顔を出された金山さんに、「若い連中が張り切っているんだ。金山、行ってやってくれないか」と頼まれた。金山さんは二つ返事で引き受けて下さった。

かくして一行五名が吉田口五合目小屋に一泊して登頂する日は富士には珍しい大雪で頂上直下まで膝を没するラッセルが続いた。後年、金山さんは思い出として「その時頂上迄あと十㍍の処で太田君に先頭を促したが彼は遠慮して受けなかった」と語られるが、私は全く記憶していない。もしそうだとすれば、それは未熟な隊員に対する金山さんの心遣いというか、励ましというか、一言では尽くせない深い心配りではなかったかと思うのである。

帰途、六合目からスキーで下る時私は森林帯の深雪に苦しみ転倒また転倒、疲労困憊して一行にはるかおくれた時、金山さんは処々で立ち止まり、にこやかな顔付きで待っていて下さった。現役時代にはきびしく近寄り難い金山さんだったが、この時は金山さんのゆとりのある温かい一面を垣間見た思いだった。

「厳しいだけがシゴキではない」と後日思ったものである。

下って一九三八（昭和十三）年一月、私達が西穂高露営行の時のことを金山さんはこう記されている。

「一月一日私はひとり釜隧道を通って上高地に入り、常さんと二人っきりで深酒をやり翌二日善六沢から西穂尾根のＢＣへ向ったが、主稜線に一歩顔を出すと身体が薙ぎ倒されるほどの強風でどうしてもＢＣを発見出来なかった。引返すのも癪で善六沢上部の立木の根元を踏みつけて雪穴を作った。学生のＢＣへ転がり込むつもりでプリムスは勿論、寝袋、ローソクさえ持っていなかった。運よくツェルトだけ持っていたので、それをかぶり新宿駅で買った甘栗だけを少しずつ喰べて夜を明かしたが、実に長い夜だった。しかし数年前、谷口君と過した二月の八ヶ岳山麓のビバークにくらべて寒くなかった。その翌日またＢＣ捜しに尾根を覗いたが前日同様なので下山した……」と。

当時、私達は予定を終えて全員がＢＣへ戻った夜、はからずも金山さんが差し入れて下さった鰻の缶詰に舌鼓を打ったのだが、その時は、まさか金山さんが数日前にビバークまでして私達を励ましに登って来て下さったとは露知らず、後日そのことを聞いて金山さんの後輩に対する温情と風雪ものかわ自信を持ってビバークされた「強い山登り」に感動した次第である。

登高行の記録欄に見る金山さんの山歴は予科二年（昭和四年五月）の甲斐駒行に始まり南アルプス、越後三山、八ヶ岳等と拡がり回を

重ねられるが、中でも一九三一（昭和六）年一月同行二名の仲間と共に八海山の冬季初登頂を雪中露営によって成功されたことは特筆に値しよう。

それ以来集中的に剱や穂高に向かわれるが、それも長時間のアルバイトと露営、特にツェルトによるビバークが目立つ。谷口現吉さんと初めて同行された北鎌尾根行もそうであった。そしてこれがきっかけとなってお二人は知り合いコンビが芽生えた。

その当時、三田さんが駐在先の印度から山岳部宛てに下さったお手紙に強く触発された金山さんはヒマラヤへの夢をふくらませられた。谷口さんも全く同感でご両所の絆はこれを契機に一層強まった。そしてお二人による翌年春の剱岳八ッ峰初登攀、更に二月の八ヶ岳のロングラン（本沢温泉―赤岳―権現岳―ビバーク―小渕沢）の実現となる。「この両度の山行こそ生涯最も思い出深いものだった」とはお二人が異口同音の述懐である。

後年谷口さんが「俺が本当に張切って登った山にはいつも金山が一緒だった。金山だって俺と同じ筈だ」と洩らされるのも宜なるかなだ。

前述三田書翰の示唆による積雪期高処露営の構想は一九三三（昭和八）年春の剱岳主稜線に、次いで一月の大喰岳の露営に具体化した。いずれも金山、谷口ご両所協力の成果である。

軽量級の金山さんに重量級の谷口さん。片や積極果敢、片や慎重断行、この様に全く対照的な性格のお二人のコンビはまさに比類稀といえよう。

「金山がラッセルした後俺はもう一度ラッセルするんだ」と軽口を叩かれる谷口さんの言外にもその友情が窺われる。

それはお二人のお仕合せに止まらず、後に続く山岳部全体に大きく貢献していると私は思っている。

戦後早々に、金山さんは大病に罹り胸部整形までされた。幸いにして健康を取り戻されたが、体力的なハンディは消えなかったであろう。しかし晩年になられても御郷里長岡の山岳界の指導に尽くされたし、日本山岳会の年次晩餐会、総会その他の会合には遠路をいとわず日帰りで欠かさず出席された。大変なご努力である。そのご気力はやはり往年の山への闘志、そして情熱と無関係ではなかったと思う。さればこそ八十七年の高齢を全うされたのだ。

先年谷口さんが急逝されたその前夜、金山さんは長岡から大町の谷口さんへ電話された。「『今風邪を引いて寝ているんだ。これで俺も人並になったよ』『馬鹿言うな。早く治せよ。じゃ切るよ』この短い会話がサヨナラになった……」と。

金山さんのお力落しはいかばかりだったろう。

今やお二人は黄泉の国で再会され相携えて彼岸の山に登り「鷲の如く絆なき青春の凱歌をその頂に高唱」しておられるのだ、と私は信じてやまないのである。

略　歴

一九〇九年　六月二十二日　長岡市にて出生
一九二二年　長岡中学入学
一九二八年　慶応義塾大学予科入学
一九三四年　慶応義塾大学卒業

一九三六年　日本山岳会入会（会員番号一六七一、紹介者松方三郎、中屋健弐）
一九四一～一九四六年　日本山岳会幹事（学生懇談会担当）
一九九五年　日本山岳会名誉会員に推挙される
一九九五年十二月四日　死去

（太田　敬）

今村正二氏（一九一三～一九九五）

乱雑を極めた私の部屋の本の山の中に同じような本があるのに気付いたのは随分昔のことである。そして引っ越しでもすると忘れてしまうのだが又思い出す。こんなことを繰り返し今日に到った。スウェン・ヘディン『探検家としての余の生涯』（小野六郎訳・橘書店版・昭和十七年六月発行）。同じく『探検家としてのわが生涯』（山口四郎訳・白水社・昭和四十一年一月発行）の二冊である。戦時中のものは紙質は悪いが少し大版でカバーの絵は趣がある。そして表紙の裏に几帳面な書体でS. Ozeki：1943.6.23と記されている。この本が何故私の処にあるのか、先ずその説明をして今村（尾関）正二氏のお人柄を偲びたい。昭和十年代の始めの頃、早大山岳部は究極の目標をヒマラヤにおくということを定めて戦中戦後そのまま踏襲してきた。そのために少なからず窮屈な山登りをするようになってしまったが、その時代のリーダーとして難波清一、小林雄二郎、小西宗明、そして尾関正二らの名前を忘れることはできない。その少し後に関根吉郎らが続くのだが、次に挙げる記録からも明らかである。

昭和十二年一月　第一次冠帽峰遠征　隊長難波清一（小林、小西、尾関らも参加）
昭和十四年一月　台湾新高山山群遠征　隊長尾関正二
昭和十六年一月　第二次冠帽峰遠征　隊長関根吉郎

このような枠の中で声高に山を論じ、ヒマラヤを語る人達は多かったが、その原点である探検的なものに目を注ぐ人は多くはなかったようだ。その数少ない中の一人が尾関正二であった。昭和十五年電気通信学科を卒業し、沖電気工業に入社して無線機の開発製造に従事したが、幸い兵役に服することもなく、暇を見て学生の指導に力を貸していた頃のことである。昭和十九年の後半であったろうか、山にも行きにくくなり、なにか勉強会のようなことを麻布龍土町に近い今村邸で行ったことがあった。ヒマラヤを語っても空しさが先に立ち、法文系の仲間は既に戦陣にあった。理工系で入営を延期されていた私達にもなんとなく死の臭いが漂ってくるような時代である。そんな時、ふと貸し与えられたのがこの本であった。中表紙に描かれた胡旋舞を踊る少女の姿が印象的で夢中で読んだことを覚えている。百の説法より、一寸突き放して、頭を冷やして昔のことでも勉強しろという今村先輩の態度はやさしさと厳しさの入り交ったもので私にはなんとも好ましく思えて嬉しかった。そして五十余年、いまだにその本が私の手元にあるこの不始末、詫びるべき人はもう亡い。

戦後は日本山岳会学生部の指導に参画し、一九四八（昭和二十三）年から数年間理事を務め研究を担当したがその純粋さと論理的な態度は他校の人達にも好感を持たれていた。そして特筆すべきことは登山用通信機の実験である。早大山岳部の主な合宿の都度、私の記憶では昭和十八年前穂の北尾根以来、電池の重さに辟易しただけで失敗の連続であった。要するに当時の真空管では電力消費が大きく性能が悪いということであったのかも知れないが、その効果が少し出始めたのはマナスル二次の時からであった。スーパーヘテロダインを使った沖電気製の警察無線機を少し改造したものでなんとかヒマラヤ山中で通信が可能になったのである。三次では電通大芳野氏の応援でようやく安定した通信網が確立して、沖電気の装置は基地局として活躍した。これも戦前からの夢が実現するのに十年を要したという例であろう。その後の専門分野の活躍は門外漢の私には十分説明できないが沖電気退職後晩年は昔の仲間と再び山歩きを楽しみ、ヨーロッパアルプスを訪れることも数回に及んだ。時にはケンブリッジに留学された厳父の足跡を辿ってツェルマットのホテル・モンテローザに泊まり、ウインパーを偲びつつマッターホルンの景観を楽しんだりしたようだ。一九八八（昭和六十三）年永年会員になった時、「無為のうちに五十年が過ぎたようだ」と感想を記しているが一生の趣味として音楽を楽しみ、製本装丁を手がけたり、最晩年はドイツ語の講読に励みファウストの勉強に迄到っていたことを奥様から伺うとまさに今村先輩の面目躍如たるものがある。清明な人柄で物の本質を見つめ続けていたような姿勢を想像するともう少し長生きして頂きたかったという思いが募るのである。合掌

略　歴

一九一三年（大正二年）　一月七日　東京に生まれる
一九三三年（昭和八年）　第一早稲田高等学院理科入学
一九三七年（昭和十二年）　一月　第一次冠帽峰遠征
一九三八年（昭和十三年）　日本山岳会に入会（一七五八番）紹介者難波清一・鈴木正俊
一九三九年（昭和十四年）　一月　台湾新高山群遠征
一九四〇年（昭和十五年）　早大理工学部電気通信学科卒業、同年沖電気工業㈱入社
一九四八年（昭和二十三年）より日本山岳会理事を数年務める
一九七九年（昭和五十四年）以降ヨーロッパアルプス旅行数回
一九八八年（昭和六十三年）　日本山岳会永年会員
一九九五年（平成七年）　十月九日没、享年八十二歳
付記　今村家に生まれたが母方の姓尾関を名乗っていた。昭和十五年頃今村姓に戻る。

（村木潤次郎）

飯田輝英氏（一九一四～一九九六）

飯田輝英君（会員番号一八五〇）は一九九六（平成八）年三月四日、川口市の協同病院で亡くなった。胃ガンの手術、胆嚢の切除な

どで入退院をくり返したあとのこと、八十二歳であった。葬儀は生前彼が協力を惜しまなかった浦和市の諸聖徒教会で行われた。

飯田君を日本山岳会の会員になるよう誘ったのは私である。というより、年齢に多少のズレがあったが、気心も通じ合い、当然山も一緒によくやった東京農大山岳部ＯＢの四人に呼びかけ、みんなを代表して私が、阿佐ヶ谷の小島烏水先生のお宅に、入会紹介者をお願いにあがり、幸い快くお引き受けをいただいた時の、日本山岳会昭和十五年入会同期生の一人である。もう一人の紹介者は広瀬潔氏にお願いした。残念なことにあとの三人は戦時中に山岳会から遠ざかってしまい、飯田君だけが会員として残っていた。しかし、その彼も、実は途中で一度除籍となったが、また思い直して復活会員になった。だから本来ならば疾うに永年会員になっている筈なのである。

何事にも精力的、緻密に取組む性格だったのに、どういうわけか、日本山岳会には二、三の例外を除いてめったに顔を出さなかったから、会の中にあまり知友はいないと思う。

水戸一中から農大へ入ったのが一九三一（昭和六）年だった。そのころ私は既に部の中堅で剱や穂高を駆け巡っていたので、新入生の飯田君とは顔を合わせる機会も少なかったが、それから間もなく彼はめきめき力量を発揮してきた。

私が卒業して一、二年たった時、厳冬期の早月尾根の計画を持ちかけてきたことがある。早月尾根に経験をもつ私に花をもたせようとする彼の好意だったけれども、たしか私が体調を崩していたため実現しなかった。

彼は矢つぎ早に、昭和十年三月下旬から、部員五名を率い、穂高の白出沢にベースを設置し、涸沢岳以南、西穂高までの飛騨側からの総合登山を、自ら総リーダーとなって実行した。飛騨側からの涸沢岳、奥穂高岳、西穂高岳、とくに最も力点を置いたのは、彼自身クライマーとなったジャンダルム飛騨尾根の登攀であり、その完登であった。私の記憶に誤りがなければ、この記録はたしか積雪期の初登になるのだと思う。

山岳部と言っても、前時代的な個人山行の集まりに過ぎない小集団だったのを、組織化し近代化を図ったのは飯田君の功績であった。全学生千人前後の大学に置かれた小さな山岳部でありながら、四月上旬、飛騨側から直登四人、涸沢側からサポート隊五人、同時に合計九本のピッケルを奥穂高の頂上に立てられたのは、なんと言っても彼のリーダーシップが抜群だったからであろう。

飯田君は卒業後水戸の農事試験場に、私は彼よりも早く陸軍糧秣廠の食品研究室に勤めていた。昭和十二年一月、彼が試作したライトウェイトテントの性能を確かめようと、八ヶ岳赤岳のコルに、私は陸軍の研究用耐寒食料や高々度航空食糧のサンプルを持ち出し、雪上露営と食料の研究をやったことがある。元旦を赤岳の頂上の強風の中で迎えたのも、私にとっては飯田君とのなつかしい山行の思い出となった。

山へ登る理系の学生が、高山植物とか、蝶などの昆虫学などに関心を寄せたりするのは一般的な傾向であろう。しかし飯田君は細菌学を専攻していたことから、これと山とを結びつけるきわめてユニークな研究領域を開拓した。大変興味のあるテーマなので簡単に

紹介してみたい。卒業一年前の作業であった。

その研究は「富士山及び穂高岳における窒素固定菌について」という内容で、富士山では浅間神社を基点として高度二〇〇㍍ごとに頂上まで十五ヶ所、穂高は徳沢を基点として涸沢の池ノ平、奥穂高頂上に至る計九ヶ所で採取したサンプルから、窒素固定菌であるアミロバクター（嫌気性菌）とアゾトバクター（好気性菌）を分離検出し、更にこれの培養観察を続け、高山岳地における同菌の垂直分布の実態を検証した。因みに当時（昭和十二年）このような微生物の高所分布について調査されたのは、僅かに八甲田山のデータが学会に報告されているのみであった。

飯田君は、前述の農事試験場勤務中召集を受け、陸軍歩兵中尉（終戦時は大尉）で大陸に転戦中、昭和十九年疎開先の防空壕で夫人と二人の幼い愛児を焼夷弾によって失っている。戦争受難者というよりほかはない。召集解除後は農水省に技官として勤めたのち、吉原製油、月島食品などで要職を歴任した。若い時代に果たせなかった中央アジアの夢は、暇がとれるようになってからバルトロに数回、クンヂェラブ峠が開放されると聞くと直ぐそこを通って中国のカシュガルへの旅を楽しんできた。

七十歳代の後半からはふた月に一度か二度くらい、どちらからともなく、用もない電話をかけ、お互い老年期の生活を労わりあい、励ましあった。正直なところ私の方が元気だった。日がたつにつれ彼の声に力がなくなってくるのが眼にみえるようだった。残念だけれどあまり遠いことではなさそうだなという予感がした。天から与えられた寿命なのだから仕方がないと私は割り切っていたのだが、しかし現実にそれを子息から知らされたときは、一瞬動揺するのを抑えられなかった。

日本山岳会会員の追悼の記を書くについては、本来は山岳会に関連した思い出などを書くべきところ、残念ながらそれにふさわしいことが見当たらず、もっぱら私との私的な関係ばかりになった。私からみればいくらか後輩にあたる彼の追悼記を書くことになるとは夢にも思っていなかった。目立つことや、出しゃばることを嫌っていたため、日本山岳会では何もやらなかった。ただの一会員で終わり、そして先に逝ってしまった。そればかりか、私に、考えてもいなかった追悼記まで書かせた、飯田君、君は幸せだったなあ、といまはなき君の霊に告げたい。冥福を祈る。

（織内信彦）

橋本誠二氏（一九一八～一九九五）

橋本さんの登山は中学時代から始まり、昨年六月に亡くなるまで、約半世紀に及んだ。彼が中学生の頃親戚を頼って旧満州に旅行したことがあり、帰ってから彼の地の乗り物洋車（ヤンチョ）の土産話をきいて仲間からヤンチョという愛称をつけられ、以来六十余年彼はヤンチョと呼ばれていた。山の後輩からも親しみと尊敬をこめてそう呼ばれたのであった。

彼は中学（札幌一中）に入り、創立間もなかった山岳部に入った。

一年上に葛西晴雄、有馬洋、林和夫らがいた。彼が中学四年の時、山岳部の仲間と夏の大雪山・トムラウシを六日間かけて登った。雄大な大雪のスケール、豊富な高山植物に接し、心に強力なインパクトを与えられた。この時、トムラウシの頂上で石狩連峰を眺め、彼は「よし次はニペソツをやる」と心に決するところがあったらしい。翌年の夏、彼が中学五年の時、ホロカ音更からニペソツに登り、再びヌプントムラウシの沢を十勝川へ下り、さらにペテトク沢から峠を越えて石狩川に出て、こののち石狩川をつめて頂上に登り、帰路には石狩川を下って層雲峡へ出る計画で出掛けた。当時の中学生としてはなかなか雄大なものであった。しかし幸か不幸かこの計画は、メンバーの一人の思わぬ事故のため、止むなく一行はニペソツを登っただけで引き返してしまったのであった。リーダーの橋本さんは、この山行のため北海道庁の林務課まで行き、林相図を貰ってくる周到さを示したのであった。後年の彼の登山家としての素質を窺い知ることができると思う。

一九三六（昭和十一）年、北大予科に入ると直ちに山岳部員になった。二年上には中学時代の先輩の葛西・有馬・林らが既に若手部員として活躍していた。彼は喜々として彼らと山行をともにし山男として成長して行った。

当時わが国の山岳界は北大を含めて京大、慶大等の諸大学山岳部が主流をなしていた。その中で立教大が初めてヒマラヤに遠征隊を送り、ナンダコート登頂に成功したが、このことは北大山岳部の若い部員達に強いインパクトを与え、彼らの中に海外登山志向の気運が高まって行った。しかし当時わが国では日支事変へと戦争が次第に進展拡大して行った時であり、山岳部の海外登山は高嶺の花にひとしいものであった。そこで彼ら若手山岳部員の目は日高山脈のペテガリ岳の冬期登頂へと向けられたのであった。それは当時、冬のペテガリは北大に残された最大の課題だったからである。一九三七（昭和十二）年一月下旬から二月上旬にかけて葛西をリーダーとする北大予科部員が主力となる隊が、極地法によってペテガリを目指した。橋本さんは入部したばかりの年のことで、優秀な彼は只一人ルーキーから抜擢されての参加であった。この隊のルートはコイカクシュサツナイ川からコイカクシュサツナイ岳に登り、国境尾根伝いにペテガリ山頂を往復するものであった。しかし登頂パーティーがオヤロマップ岳を越えた地点に設けた前進キャンプで、猛吹雪に遭い計画は挫折し、隊員達は撤退を余儀なくされた。ルーキーの橋本さんは、しかし氷で張りつめられたコイカクの渓谷を、ピッケルを手に、アイゼンを軋ませながら冬山の山登りを満身に歓喜を覚えながら登ったことと思う。けれど、彼はこの三年後に、彼の登山人生で最大の打撃をうけることになるのである。一九四〇（昭和十五）年一月五日、葛西、有馬をリーダースタッフとし橋本さんを含めた山岳部員八名、総勢十名からなるパーティーが再度冬のペテガリ登頂を目指してコイカクシュサツナイの渓谷を登っていた。そしてコイカクシュサツナイ岳付近に発生したと考えられる粉雪雪崩の襲来をうけ、このため一名を残して八名が遭難死したのであった。橋本さんはこの日、風邪のため下のベースキャンプに残っていたため難を免れたのであった。しかし親しい仲間を一瞬にして失った彼にとって、このアクシデントはきわめて大きく深くそして苦い経験と

なったに違いない。

橋本さんは北大予科から理学部の地質鉱物学科へ進んだ。彼は山登りと同時に、自分の生業として山々を調査して歩き続ける運命を担うことになった。いくら山好きな彼でも商売となると辛いこともあったであろう。幾日も幾週間もハンマーで石を叩きながら日高の山に入り、山を出る時には調査で集めた石で重くなったルックを担いで来る年月がどの位続いたことか。しかし彼の山を愛する気持と山岳部に対する誠実な思いは変わらなかった。ペテガリの遭難のあと、彼は冬山の雪中露営の方法としてエスキモーの生活様式イグルーをとり入れたり、雪洞方式も開発していった。戦後衰退している部にあって、彼は現役部員たちの先頭に立って冬の日高の山行を次々と試み、部の活力の回復に大きく貢献した。

彼の山岳部に対する業績は、地質学者としてのそれと共に、日本山岳会に評価されていった。戦後わが国が最初のヒマラヤ八〇〇〇㍍のマナスルに登山隊を送った時、一九五五（昭和三十）年、本隊に先んじて偵察と科学調査をかねて出された先遣隊の一員に彼は選ばれたのであった。さらにその後、東晃氏（北大教授、雪氷学者、北大山岳部ＯＢ）と共にアラスカの氷河（メンデンホール）の調査を行っている。地質学上の彼の業績は彼の主たるフィールドワークが日高山脈であったにも拘わらず、広くヒマラヤに及んだのであって、後年ヒマラヤ山脈地質研究で秩父宮記念学術賞を受賞している。

彼は一九四一（昭和十六）年山崎春雄、中野征紀の両氏の紹介で日本山岳会に入会（会員番号二〇一八）した。一九八四（昭和五十九）年から七年間日本山岳会北海道支部長をつとめ、病に斃れる前年日本山岳会に対する長年の功を認められ、名誉会員に推挙されたのであった。

（有馬　純）

福嶋一馬氏（一九〇六～一九九六）

福嶋一馬氏と私が日本山岳会への入会を決めたのは丁度五十年前、戦後間もない一九四六（昭和二十一）年であった。私共の福岡山の会は一九三二（昭和七）年の創立で戦前既に常時百五十名の会員を擁し気力満々の充実期を誇ったが、戦況の深刻化に伴い中堅会員の多くを戦地に送り消息不明、疎開者続出で終戦と共に残存会員こぞって復興に懸命の時期であった。日本山岳会にも入会して見聞を広め、情報を早急に入手し復興のめどをつかみたかったのである。

会員番号二五六五、二歳先輩であり六十余年の無二の畏友福嶋氏は残念にも本年三月八日九十歳をもって逝去された。二人は同時入会とのみ思い込んでいた私は念のため事務局に照会した処、私が一九四六（昭和二十一）年十二月、紹介者山田光男・塚本繁松氏、福嶋氏は一九四七（昭和二十二）年三月、紹介者山田光男・村上巌であることがわかった。あと一年、永年会員がそこまで来ていた福嶋氏は同時に私共の会の最長寿者であり、変転の時代によく対応して会創設以来終始貢献した大きな存在を失ってまことに痛恨の極みである。

氏は誠実無比、努力を惜しまない寡黙実行の人で対外的の派手な行動を好まず、つねに裏方としての生涯を通したが実力者としての裏面は周辺から深く信頼されていた。日本山岳会入会当時、会員間の交流が殆どなく、支部発足後も活動休止の期間に当たり、専ら福岡山の会での行動に生涯を終始された。

福嶋氏は戦中より既に西日本新聞社の要職にあり、わが会の主たる行事を同社事業部との共催又は後援事業とし、特に戦後の会の行動に心強い活力を与えられたことは感銘に堪えない処である。数例を挙げれば——

一九四七（昭和二十二）年八月、戦後第一回の二泊三日の登山講習会。この会は講習会の枠を超えて、拠り所を求めていた多くの若い岳人の集結の場となり戦後のわが会の態勢を一気に刷新し、国内の積雪期登山、ヒマラヤ計画と会史の最大の転機を作った。更に一九四八（昭和二十三）年十二月より翌一月にかけ九州最初の冬山隊・鹿島槍東尾根厳冬期初登攀にすすみ、以後毎冬の冬山合宿続行。

一九五二（昭和二十七）年戦後初の前年より計画（トゥインズ峰、七三五〇㍍）ヒマラヤ遠征は出港直前のインド政府の入国中止通知により涙をのんだが、わが会は勿論同新聞社も痛恨の事態となり福嶋氏の心痛が察せられた。

一九七〇（昭和四十五）年、前回より世界も日本も山岳界も状勢が一変したが再度のヒマラヤ計画（ダウラギリⅥ峰、七二六八㍍）は成功した。同新聞社は特派員を派遣、援助した。

一九七九（昭和五十四）年の遠征もカンジロバ主峰（六八八三㍍）に登頂、成功。

さて本年は福岡チョモランマ登山隊にわが会より三名参加。第二次アタック隊のわが会杉山洋隆君が五月十三日登頂成功。わが会では初めて世界の頂点に立った。福嶋氏もあと二ヶ月現世に長らえられたら最長老として生の喜びを分かち合えたのに真に悔しい。会の創設者竹内亮氏は会報『せふり』第一号表紙を当時未踏峰であったエベレストの写真図説とし究極の目標とする識見を示されたが六十四年を経て現実のものとなったいま、泉下でどんなに喜んでおられることか。おそらく福嶋氏と抱き合っておられるかも知れない。

福嶋氏を語れば氏が終生師と仰ぎ敬慕した竹内亮氏について一言触れねば叱りの言葉が地下より聞こえそうである。

農学博士竹内亮（たけのうちまこと・一八九四～一九八二）氏は一九一八（大正七）年北大農学部林学科実科卒、在学中の一九一七（大正六）年日本山岳会入会（会員番号五七七）、北海道の山々を登り『山とスキー』『山岳』（山岳総合索引参照）等に記録発表、一九二二（大正十一）年九大農学部発足時植物学教室助手として福岡市に赴任。黎明期の九州の未踏の山々を跋渉。一九三二（昭和七）年福岡山の会創設。旧満州国に転職並びに戦後留用（一九三九——）。一九五七年東京都に引き揚げ。一九八二（昭和五十七）年田無市にて逝去。

竹内氏は戦中戦後、不運に生涯を終えた植物学者であったが福嶋氏を最も信頼し、福嶋氏又竹内氏を敬愛し、一生を捧げる如く竹内氏の顕彰に努められた。一昨年（九四年）は竹内氏生誕百年に当たるので福嶋氏と二人主導で十一月に「偲ぶ会」と遺品・遺作の「展示」を行った。展示品の大半は福嶋氏が準備しこの作業は老人に重

荷ではなかったかと悔やんでいるが本人は竹内師への最後のお礼の仕事と満足そうであった。

福嶋氏の山行については本人の性格どおり静観的な山行が多く、深田百名山ならぬ、竹内亮『北九州の山とこころどころ』塗りつぶしに専念したり、勤務上の道義感から休日前夜、夜行列車出発、翌日終列車或いは翌々日早朝帰着、即出勤というパターンにも数多くお付き合いした。住居に近い筑後の山々には隈なく単独行が多かったようだった。

二人で苦労して竹内氏のために共編した出版物が少しある。一九八三(昭和五十八)年十一月一日竹内氏の一周忌に間に合わせて『せふり』追悼号四八頁を完成、氏に捧げた。多数の方々のご協力を得たが流石に竹内氏とその徳の重さをいたく感じた。次は竹内氏の資料が散逸しない内にと

(一)『農学博士竹内亮・業績と生涯研究資料抄』
(二)『農学博士竹内亮・学究と山の生涯』
(三)『農学博士竹内亮先生の書簡』

の三冊を少部数乍ら福嶋・村上共編したが、右の(一)(二)については『山』五三八号図書紹介欄に名誉会員望月達夫氏のご懇切な紹介をいただき感激の至りである。

略　歴

一九〇六(明治三十九)年一月六日　熊本県菊池郡生まれ
一九三〇(昭和五)年三月　九州帝大法学部卒業。同年十月福岡日日新聞社(四十三年西日本新聞と改称)入社
一九四五(昭和二十)年八月　同社人事部長兼秘書部長
一九五六(昭和三十一)年六月　同社総務局次長(局長待遇)兼人事部長
一九五九(昭和三十四)年十一月　同社総合企画委員会委員長(局長職)にて退社。同月同社監査役就任
一九六二(昭和三十七)年六月　監査役退任
一九九六(平成八)年三月八日逝去(九十歳)

(村上　巖)

戸村貞男氏(一九〇九～一九九五)

一九九五(平成七)年九月十日、私達の奇跡を祈った願いもむなしく、戸村貞男氏は、入院先の墨東病院に於いて、脳腫瘍により、八十六歳をもって、生涯を閉じられました。手術後、意識が混濁状態となり、ついで危篤の状態になったことを知り、奇跡の起こることをお祈りしておりましたが、その祈りも届きませんでした。

物故された日より二ヶ月前の六月二十六日の日本大学エベレスト北東稜登頂祝賀会の席上、実行委員会を代表して、お礼の挨拶を述べられた時のあの元気なお姿を思うにつけ、誰がお別れの日が、このように早く来ることを想像したでしょうか。私達の仲間の誰もが大きな衝撃を受け、深い悲しみにつつまれたことが、つい昨日のように思い出されます。

一九〇九（明治四十二）年八月二十九日、東京本所に生まれた戸村さんは、一九二七（昭和二）年四月日大予科に入学され、一九三二（昭和七）年三月に日本大学法学部独法科を卒業。在学中は山岳部に籍をおいていましたが、学生時代には初見一雄氏等の陰にかくれて、目立った存在ではなく、むしろ卒業してからの方が熱心に登山を行っていました。パートナーは何時も五百石出身の広田憲治氏（昭和九年四月九日、積雪期の池ノ谷を初完登され、左俣を経由して剱の頂上を一日で往復した人）とでしたが、戸村さんはその前年の夏には、積雪期の偵察をかねて池ノ谷に入り、右俣から剱尾根の中央ルンゼ付近を試登しておられました。

戦後シベリアから復員すると同時に、昭和二十二年十月に初見一雄氏らの紹介で日本山岳会に入会（会員番号三〇七八）。この時には山日記編集を担当するため、神山勉氏等日大ＯＢ十四名が同時に入会されております（このうち七名が既に物故）。その後、山岳部同期の初見氏に請われて、昭和十八年に初見さんが三田幸夫氏から継承した株式会社紀屋の番頭を引き受けています。この会社は戦前槙さんや早川種三氏等が設立した会社で、丸ビルに事務所があり、戸村さんは以後二年間位、同社の財務面を担当されていました。

四九（昭和二十四）年より家業の石油販売業に従事し、五三（昭和二十八）年には株式会社戸村石油店を設立し、以後総武線の沿線に次々とエッソ石油のガソリン・スタンドを展開していきました。一九七三（昭和四十八）年には事業の見通しもついたためか、暫く離れていた日本山岳会にも復活、一九七五（昭和五十）年には平沢一久前会長の後を受けて、日大山岳部のＯＢ会である桜門山岳会の会長に就任しておられます。以後物故される迄の二十年の長きに亙り会長を務められましたが、対外的活動はもっぱら初見氏や金坂一郎氏などに任せ、本人は表面には出ることなく、その後の桜門山岳会が実施したヤルンカン（一九七四）、北極点遠征（一九七八）、ヒマルチュリ（一九八一および一九八六）、マルカー（一九九二）等の海外登山の資金面を何時も心配され、資金調達の面倒を見ておられました。

一九九五年には、日本大学山岳部が創部七十年を迎えることになり、その記念事業としてエベレスト北東稜登山の計画が実施されることになりましたが、戸村会長はその実行委員長を引き受けられ、千谷壮之助ＯＢ等と共に計画の推進に当たられました。この遠征は学術隊を含めると二十名の隊員からなり、総予算も一億円を超える大規模な登山でありましたが、戸村さん等の協力のお蔭で、五月十一日、無事登頂を果たし当初の目的を達することができました。

戸村さんは、その報告書の完成を待たずに委員長在任中に他界されてしまわれましたが、せめて報告書だけはお目にかけたかったと、このことが悔やまれてなりません。ここに今は亡き戸村さんのご冥福をお祈りし、追悼文とさせていただきます。

（松田雄一）

〔編者注：戦前のＹＷＣＡ山岳会や朝日新聞婦人記者として活躍された戸村愛子さんは戸村さんの実妹〕

安彦六郎氏（一九〇六～一九九六）

安彦さんとの交際も古い、三十数年にもなるだろうか。いつも静かで、独特の語り口、そして言葉は温かい。

今年も例年のように年賀状は受け取っている。その安彦さんが、一月十一日に亡くなったという知らせだった。

安彦さんが、体調を崩したのは二年ほど前からだという。

身体の工合が悪いという彼が、麹町の私の事務所に、奥さんが付添うて、見えたのは昨年の春頃だった。

「安彦さん元気をだして…私が一緒に行くから、ヨーロッパアルプスに」と誘った。

「先ずシャモニ、モンブランからマッターホルンのツェルトマットそしてエンガデンの谷もよい、フリーブランでのんびりと巡りましょう」と元気づけに、いろいろと話をした。

奥さんの話では、すごく喜んで、ヨーロッパアルプスの旅を楽しみにして、最近は大分元気になったという。

正月も一段落して、夜の食事が済んで、安彦さんは急に眠るように亡くなった。

一九〇六（明治三十九）年八月生まれ八十九歳だったという。

安彦さんは学生時代から、山が好きだった。そして、記録のために写真も撮り出した。スキーもやった。猪谷六合雄さんの直弟子？でその頃は阿佐ヶ谷に住んでいて、猪谷さんは、よく見えたという。

社会人になって最初の就職は東京都庁だった。そして通産省へ、定年退職まで、三十数年間と永い。

私が安彦さんと山の写真を通じて知り合ったのは通産省の時代だった。

安彦さんの日本山岳会入会は一九四九（昭和二十四）年四月、会員番号三五〇一と古い。紹介者は原全教・藤井運平両氏だった。

安彦さんが、もっとも充実して、張り切っていたのは、日本山岳会が上高地に最初の山岳研究所を建設していた頃、安彦さんは、そのお手伝いで上高地によく通っていた。私の事務所にも寄って、「山研が完成したら行きましょう」と楽しそうだった。

私どもの日本山岳写真協会にも入会していて、三十年以上になる。山の写真熱も上昇して、安彦さんが憧れていたヨーロッパアルプスに奥さんと二人で三十日間もカメラの旅をしたのは、もう二十年も以前のこと。

アルプスの旅の二回目は団体ツアーで出掛けている。

そして三回目、今一度忘れ難いヨーロッパアルプスの山々へと、本当に楽しみにしていたという。

義理固い安彦さんは、私の事務所にみえる時は、いつも一升びんのお酒を二本提げてくる。

そんな安彦さんの姿も今はない。

ご冥福を祈る。

（風見武秀）

住吉　薫氏（一九二五～一九九五）

兵庫県教育大学名誉教授だった住吉薫先生は、昨年九月二十六日の午後、大阪の環状線新今宮駅の駅長室から「胸が苦しいので病院へ行くから救急の手配をしておいてほしい」と家に電話をかけられ、美智子夫人が大阪市立大学病院へ受け入れを依頼された後、すぐ再度新今宮駅から「意識不明になられました」と電話があり、救急車で大阪市立大学病院へ運ばれたものの、そのまま意識は戻らず一人であの世に旅立たれました。午後三時十五分でした。先生の生涯の仕事の一つであった『蝶』の用件で天王寺へ向かわれる途中の出来事で、死因は心筋梗塞でした。

五月に古稀の祝いを終えられたばかりで、やるべきことをいっぱい残されたままのご逝去でした。先生を知るだれもが信じられない最期でした。まわりの人たちは、いつも先生には何かにつけ〝あっ〟と驚かされることの連続でしたが、ご自分の最期までもみごとにそれを貫かれたと葬儀委員長をつとめられた友人の元大阪市教育長福岡康司氏の言葉に参会者全員が思わず頷かれていたのが印象的でした。それぐらい考えられない先生の最期でした。

博識、多才、七十歳を超えてもなお童心いっぱいの先生は、ご自分の最期をどのように感じられていたのでしょう。

私と住吉先生の出会いは、一九八二（昭和五十七）年の秋、アジアではじめて国際山岳連盟の総会がカトマンズで開催された時でした。主管団体であるネパール山岳協会から特別招待者として八名が日本から招かれましたが、この時にはじめてお目にかかりました。住吉薫・美智子先生ご夫妻は、ネパール山岳協会のパトロンとして、私は、ネパール警察の登山アドバイザーとして招かれたのですが、この時に知遇をいただき、以後ネパールからの来客が大阪に来られた際のお世話をお手伝いすることが続いてきました。先生と私は、『ネパールごっこ』と呼んでいました。元ネパール山岳協会会長のクマール・カドカ・ビクラム・シャハ殿下が来られると云うので、上高地の帝国ホテルを予約しお待ちしていたところが、ソウルから直接帰国されることになり、先生ご夫妻とウェストン祭を過ごしたことが懐かしく思い出されます。この時に、先生ご夫妻と焼岳に登ったのが私の先生との最初で最後の登山でした。帝国ホテルのメンバーだった先生夫妻は、毎年ウェストン祭が終わった六月中旬の静かな時季とお盆を上高地で過ごされ、まわりの山々に登っておられましたが、ウェストン祭はその時が初めてだったと聞きびっくりしたことを覚えています。この新緑と真夏の上高地滞在も終止符が打たれてしまったということです。

カトマンズの国際山岳連盟の一夜、ダウン・タウン、タメルの『ラム・ドゥドル』でチキン・チリを肴に、今は亡き加藤保男氏と交わしておられた会話が耳に残っています。住吉先生の「スポンサーがいっぱいついて、サガルマータの頂上までレールの上を走り出した列車みたいで、ブレーキが効かんのとちがうか」に対し、「冬季エベレストの最大の難関である烈風対策は、フル・フェイスのヘルメットを改良した秘密兵器で勝算は我にあり」と応えていた加藤保

男氏でしたが、両人とも今はこの世の人ではないのが残念です。『ラム・ドゥドル』のオーナーであり当時ネパール山岳協会のメンバー・セクレタリーであったテク・チャンド・ポカレル氏、ポカレル氏とともにヒマラヤン・ジャーニィ社をやっておられた大河原汎・由紀子ご夫妻、インド隊のエベレスト登頂者であるゴンブー・ラマ氏や田部井淳子さんたちと過ごした懐かしい一夜でした。

自分の意見は、いつも歯に衣を着せず述べられる先生でしたし、好き嫌いのはっきりした方でしたが、その分義理堅さと面倒見の良さは誰もが認める桁外れの方でした。そして交遊の広さも。大阪に来られたネパール人をホテル・プラザに泊めお世話をされた数も、私がお手伝いを始めてからでも何十人に及んでいます。

先生の趣味というより『仕事』と云った方がふさわしい『蝶』の採取とコレクションそして登山は、医学の勉強のため青年時代を、オーストリアで『斎藤茂吉』たちといっしょに過ごされたお父上の影響でした。そして、兄弟の中で一番お父上の影響を受けられたのが薫先生でした。毎年ウイーンに出かけられる『オペラ』好きも同様で、とても我々常人の及ぶ所ではありません。

子供の頃から昆虫採集が『蝶』一本となり、還暦まで集められた膨大なコレクションを、一九八六（昭和六十一）年三月、還暦の記念に大阪市立自然史博物館に寄贈され、これにより同年十二月に紺綬褒章を受けられましたが、先生らしいのは、この紺綬褒章受賞を記念して何か社会にお返しをと考えられ、ネパールに最初の足跡を印した日本人・河口慧海師の顕彰でした。河口慧海師の写真を入手され、兵庫教育大学の同僚で彫刻家の辻弘教授に依頼され制作したブロンズのレリーフを、「ここに日本とネパールの関係が始まる」との碑文を付けてカリガンダキ河畔とカトマンズに顕彰碑を建立することを考えられたのでした。そして、国際山岳連盟総会以来のご夫妻でのネパール訪問を、この河口慧海師の顕彰の際にと考えておられたのに、その直前にご自分が先にあの世の河口慧海師に会いに出かけられてしまいました。

先生の逝去に際し、勲四等旭日小綬章が授けられましたが、先生はこれに対しては、何を社会にお返ししようとされたか、知りたいと思うのは私ばかりではないでしょう。

十三年におよぶ先生と私の『ネパールごっこ』も終わりを迎えましたが、ちょうど来年生誕百年を迎える河口慧海師の顕彰と日本隊のヒマラヤ登山で亡くなったシェルパらの子供たちへの奨学金『住吉薫基金』の二つは、先生の遺志をついでやり遂げることが先生への私の義務であり、先生への餞であると考えております。ほとんど完成に近づいていたとお聞きしていた先生のお仕事の『研究』の集大成は、その分野の先生の教え子の方々がやり遂げられると信じております。

いまは、ただただ先生のご冥福を祈るばかりです。合掌

〈登山の足跡〉

一九二八年八月　十歳の時に家族で白馬岳へ登山（はじめての登山）
一九四六年～一九五二年　大阪市立医科大学にて山岳同好会をつくり仲間と登山を楽しみ、後山岳部を設立し卒業まで在籍
一九五〇年十月　日本山岳会入会（会員番号三八四二　紹介者篠田軍治、岸田権二）

一九七四年三～六月　ネパール・ヒマラヤ、ガンガプルナ峰へ遠征、登頂
一九七八年九～十月　ネパール・ヒマラヤ、クスムカングル峰へ遠征、退敗
一九七九年十月　ネパール山岳協会より美智子夫人ともどもパトロンに推挙

（倉内司郎）

佐藤　光氏（一九二六～一九九五）

一九九五（平成七）年十月三日、佐藤光（てるお）さんが亡くなられた。六十九歳でした。前年の一月に福島市内の病院で胃全摘出・肝臓切除の大手術をされ、小康を得て療養に努められましたが、再起かなわず仆れました。光さんは一九二六（大正十五）年一月六日福島市豊田町に生まれ、同市立第二小学校に学び、同市立福島工手学校に進み同校卒業。戦前戦後の一時期、福島市内の民間企業に勤務されましたが、一九四九（昭和二十四）年三月にキミさんと結婚、家業のそば屋を継ぎました。現在の「そば処おかめや」です。当時、店は大町の裏通りにありましたが、昭和四十六年に市の繁華街本町に店を移し、押しも押されもしない名店に育て上げました。キミ夫人の陰の力も大きかったと思います。

私が光さんと知り合ったのは、彼の従兄弟と私が、当時通っていた定時制高校の同級生であったことがきっかけになりました。初めて大町のお住まいに伺ったのは、昭和二十七年の早春でした。この折に南会津の山々の魅力をたっぷり聴かされました。残雪の浅草岳の写真、会津在住の小滝清次郎氏（会員）との交友のいきさつや、お人柄についてお伺いしたのもこの時でした。彼が山への関心を抱いたのは、少年期に父親と一緒に行った、吾妻山中の湯治場の宿で受けた、大自然からの感動が根底にあったと語っております。長じて山への憧れが高じ、結婚後間もない新妻キミさんを、一週間も放ったらかして、北アルプス穂高・槍ヶ岳を縦走するほどに熱が入る有様でしたが、帰宅するや花嫁の兄から大目玉を食らうという、後日談付きもあったようです。以来商売柄もあってか、短時間で登られる山に的を絞っていった節があります。南会津の山への傾斜も、この頃からではなかったかと思われます。

日本山岳会には、一九五二（昭和二十七）年に入会されております（紹介者は伊藤弥十郎・川又恒一両氏）。初代伊藤支部長、二代中嶋支部長を補佐し、支部事業の運営に力を注ぎました。委員、常任委員、副支部長を歴任し、一九八九（平成元）年から四年間、本部評議員を務めておりました。幅の広い人脈、多彩な企画力と行動で会員の信望を集めておりました。彼の人柄を一言でいえば、サービス精神と好奇心のかたまり、とでも言うのでしょうか、人を喜ばせ、楽しませることに知恵を絞った人でした。山は別格として趣味の範囲は広く、カメラ、焼きもの、こけし、民俗用具の収集、とりわけ野鳥と植物の観察、調査に関する造詣の深さは並々ならぬものがありました。収集品の中には、子孫繁栄のシンボル・金精様があ

りました。旧い農家を解体する現場に出向いて、その家の主を口説きおとして手に入れたとか、自慢の一品を店の片隅に、そっと置いたりしていました。彼はまた、名文家でもありました。何冊かの著作もあり、地方新聞への寄稿もしております。その一冊『蕎麦屋のおやじの博物誌』には、二俣山周辺の野鳥観察の記録「野鳥天国をゆく」、阿武隈高地北西部の山地を舞台にした「ヒメギフチョウを追って」の各編は、野鳥と蝶の生態、種類の特定の仕方とかを学説、俗説、ときには世相寸描を織り混ぜ、軽妙な筆致で書かれたものでした。

光さんは、支部の山行行事にも積極的に参加しておりました。彼と共にした山行の一つを記して、故人を偲ぶよすがにいたします。それは、一九八二（昭和五十七）年四月十一日、いわき市二ツ箭山で行った春山集会でした。地元会員吉田元氏が中心になって設営したものです。中嶋支部長以下十二名が参加、コースは麓の集落から林道を登り、途中から右手の御滝の沢へ、御滝からは左手の急坂を巻いて尾根にとりつき、頂の岩峰に達するものでした。前夜祭の酒精が、程好い加減に残っている一行は、快適にコースを辿ります。春日うらら、彼方のしじまからは野鳥の声も聞こえてきます。彼は、あれは何々、けたたましく、かん高い鳴き声はコジュケイ…。沢筋に生えているシダ類を指して、これは、葉の形が機織りの筬に似ていることからオサシダと名付けられたもの等々。また、植物の名を質問された時は、即答は禁物、一息、間をおいて答えることが肝要とか、解説の心得まで教わりました。彼との山行は、このようなおまけがつく楽しみがありました。好奇心を挺子に、興味の対象に迫る勉強家でもありました。手術後、退院の挨拶状には、今までの生き方を振り返り、健康のこと、家族のことを見つめ直して療養に励みたい、と書かれておりました。それなのに彼の訃を聞いて、何故そんなに急いで…と反問するばかりでした。「惜しみて余りある」とは、光さんのような人柄を指すのではなかろうかと、しみじみ思っております。

（安藤　治）

野島福三郎　氏（一九〇二～一九九五）

野島福三郎さんは一九九五年五月二十日、魚津病院で安らかに遠逝された。亡くなる前年まで九十二歳の高齢を数えながら山歩きやクロスカントリーをやっておられた。

野島さんは入善町の旧家で加賀藩の十村役（農政・民政機関の役名）を務めた由緒ある家系に生まれ、中学四年の頃から登山を始められたと聞く。その後一九二四（大正十三）年立山登山、一九三〇（昭和五）年小川温泉より朝日岳～白馬岳等数々の登山を行われたが、一九五六（昭和三十一）年魚津大火により自宅を焼失され正確な記録が残っていない。スキーも早くから行われ、一九二七（昭和二）年魚津市の宮津から坪野までのスキーツアーを行っておられる。まさに郷土の草分け的な存在と云える。

野島さんの晩年は奥さんに先立たれ子孫もなく孤独であった。私の所属する魚津岳友会では会友として酒宴にはよく出席され、何度

も席を同じくしたが寡黙な人であり常に静かに酒を楽しんでおられた。いくら飲んでも姿勢を崩すこともなく、歌ったり吹聴することもなく話はいつも聞き手になる人であり、人柄が示すように登山も第一線的な厳しいものではなく、静かに自然を楽しむタイプのものであった。また趣味としての写真歴は長く、最後に病院へ入る時もカメラを携えられたという。魚津大火で自宅が焼失する様子も逐一撮影しておられたという逸話が有る。その後残された多くの写真で身近な人達によって今年七月遺作展が開催された。

自然保護、写真、登山、スキー界の要職を務められそれぞれに貢献され生涯を終えられた。

略　歴

一九〇二（明治三十五）年　富山県入善町に生まれる
一九二七（昭和二）年　金沢臨時教員養成所卒。旧制魚津中学校の理科の教師としてスタート。滑川商業、愛媛県立城北高女、神通中、魚津女高、入善高、黒部中、富山第一高などに勤務
一九三二（昭和七）～三七（同十二）年　魚津沖、蜃気楼の調査員
一九五二（昭和二十七）年　日本山岳会入会（会員番号三九八九。紹介者中田勇吉・黒田年行）
一九五四（昭和二十九）～五九（同三十四）年　富山県学校気象研究会会長
一九六〇（昭和三十五）～七〇（同四十五）年　富山県スキー連盟副会長
一九六三（昭和三十八）～七二（同四十七）年　富山県山岳連盟副会長
一九七六（昭和五十一）～八六（同六十一）年　富山県自然保護協会常任理事
一九八三（昭和五十八）年　山岳関係の要職を務めスポーツ振興に尽くした功に対して知事表彰
一九九〇（平成二）年　勲五等瑞宝章受章
一九九五（平成七）年　逝去。享年九十二歳

（佐伯郁夫）

入澤郁夫氏（一九二八～一九九五）

入澤郁夫さん（会員番号四〇三四）が亡くなられた。一九九五年十一月十日朝、ヒマラヤのクーンブ山群ゴーキョ谷パンガで起こった時季外れの大雪に依る雪崩事故での突然の死で、同行、遭難された人々と共に倒壊したロッヂが命終の地となってしまった。誠に非運としか言い様がない。亡くなられる一月程前、ルームでのＪＡＰＶＣの十月例会の席で隣り合わせ「トレッキングに山田、兼子（両氏ともＭＷＶのＯＢ）が参加する事になったので俺も行って来るよ」と気軽に話していたのが訣れとなった。

入澤さんと初めてお会いしたのは一九四七（昭和二十二）年の夏でした。明治大学ワンダーフォーゲル部（ＭＷＶ）の新入部員だけ

での富士裾野合宿で、彼は既に予科三年でした。ピッケルを携行して居て、天幕の側溝を掘っていたのを憶えており、その頃から彼がＷＶの枠を超えた部員だったのだと思い返しています。一九三六（昭和十一）年創部のＭＷＶの前身は、初代部長春日井薫教授の金融ゼミの外郭サークル「あるこう会」でした。元々ワンダーフォーゲルは二十世紀初頭のドイツに興った自然回帰の青年運動ですから山野の跋渉が主な活動であり、アルペン的な登攀とは一線を劃したものでした。この様に性格の異なるＷＶ部にどうして入澤さんが入部されたのか、それも三年になってから、……今になって私にも解る様な気がします。彼は右手二指の損傷を自家のメリヤス工場での事故によるものと話していました。明治中学時代、山岳部の気鋭の部員として活躍をしていた彼が、明治大学入学時に山岳部への入部をためらい、断念したのは、この手指のハンデを意識しての事であったに違いないのです。二年を経てのＷＶ部への入部、この事に私は入澤さんの、やむにやまれぬ、そして並々ならぬ山への思慕、憧憬の深さを感じます。在部時代の入澤さんは何かと異端視され、校舎屋上からの懸垂下降など、後輩の指導に熱心であればある程、物議を醸す事になってしまいました。それもこれも総てが抑え切れない山への希求によるものだったのだと思い出されます。唯一存分に活動出来たのは上高地の夏合宿、野沢のスキー合宿ぐらいだった様に思います。彼のスキー術については当時からのもので豪快な直滑降は、脚の骨折後も全く変わりがありませんでした。在学当時からもそうでしたが殊に卒業の後は明大山岳部の人々と活動をともにされ、ＯＢ炉辺会に特別会員として受け入れられたのでした。それ以後の活躍は正に水を得た魚の如きものであったに違いありません。

入澤さんは一九五二（昭和二十七）年十一月、大塚博美氏、福井正吉氏の紹介により日本山岳会入会を果たしました。入会申込書によれば一九二八（昭和三）年七月二十二日千葉県市川市に出生とあり、山歴の項に初山行一九四〇（昭和十五）年七月、十二歳、燕槍縦走と記入されています。私は入澤さんのご出身は信州とばかり思っていました。ＭＷＶは戦後間もない昭和二十四年夏、上高地合宿を行いました。山岳部からの二十人用天幕借用のみでは足りずリーダーの入澤さんから旧陸軍九七式大型天幕（収容四十四名、八角錐型）を借用したのでした。南松本、村井にあった入澤莫大小工場から運んだとの事でした。工場に祖父がおられると聞かされたので、すっかり長野県人と思い込んでいました。入澤さんは一九九四年版の『山岳』に書かれた海野治良氏の追悼文の中で自らの少年時代の登山に触れられています。少年時代は奥多摩、裏高尾を歩かれていたようです。

一九八〇年に私が福井さん、折井さんのご紹介で日本山岳会に入会し、又お会いする様になりました。生来世話好きで明るい性格の入澤さんは集会委員会で活躍していました。外見には弱気を吐かぬ強気一本の様に見えながら、細かい気配りの出来る人でしたから多くの人達から親しまれて、会の活動の一環でもあるクラブライフの充実に力を尽くして居た様に思います。一九八九年には理事に就任され二期務められました。

入澤さんは高度な登攀こそされませんでしたが山岳に関する広い分野に亙っての知識欲、探求心を最後までお持ちでした。心から山

を愛し登山を楽しまれた一生と言えましょう。
　生涯を傾けて来られた家業の繊維会社も亡くなられる半年程前に社長を令弟に譲られ、会長に退いたばかりでした。
　時間にゆとりの出来たＭＷＶの後輩たちを伴ってのトレッキング、私は彼等の土産話を心から楽しみにしていました。誠に残念です。
　ご冥福を祈ります。

（小林　碧）

赤沼　節氏（一九二九～一九九五）

　赤沼氏と初めてお会いしたのは、私が吾妻山の会に入会させて貰った一九六五（昭和四十）年八月だった。その日は会が開拓した沢コースの整備ということで、鉈や鎌を持ち参加した。参加者は皆大先輩であったが、その中のお一人に「赤ちゃん」「先生」と呼ばれる方がいて、特に「赤ちゃん」はユーモラスな響きがあり、穏やかな容貌に対し妙にマッチしていたのを覚えている。以来、三十数年間の山にお供させて頂いたが、赤沼氏の人柄を表す代名詞となるのである。
　福島県の郡山市に生まれ、その後福島市に移る。福島中学（現在の福島高校）を卒業した一九四六（昭和二十一）年父と同じ教師の道に入り、教壇に立つこと四十四年、幾多の生徒をおくり出し一九九〇（平成二）年定年退職された。
　山に入られたきっかけは、私が十四歳下のためか話題となった記憶はなく、今となっては残念な思いがする。吾妻山の会に入る前の一九五四（昭和二十九）年に日本山岳会に入会されている（会員番号四二〇八、紹介者伊藤弥十郎・川又恒一）。県内の山に対するのめり込みは執念と思われるほど入山を重ね、とり分け吾妻連峰の冬山に活動し多くの足跡を残した。一九七三（昭和四十八）年の冬山合宿では、リーダーとして完全縦走をなし遂げ、その後若い会員が活躍するきっかけとなった。最近拝見した山日記には実に驚くほどの記録が記されていて、その一つ一つがまるで教材のようであった。壮年期以降は県外への山行も多くなり、東北の山々、北アルプス、谷川岳などを楽しみ、時折見せる鮮やかなクライミングは中々なものであった。一九八一（昭和五十六）年、武藤会長の死去に伴い、吾妻山の会の第四代会長となる。元来の穏健さから外部の信頼も厚く、県岳連の支部長や、市の遭対協では実質的なリーダーとして数次にわたる指揮をとっていた。吾妻連峰に於ける高山のスキー場設置問題は、原生林の保護を訴える多くの仲間と共に「高山の原生林を守る会」を結成し、設置の動きに波紋を投げた。
　一九八五（昭和六十）年の夏、会長を担ぎ出す格好で中国に渡ったのは、私の思い出として大きい。日記には「いつの間にか隊長にされた」と記されていたが、私としては、ボゴダに一緒に登りたい為の策でもあった。ベースキャンプで見せたあの奇怪な踊りには、ウイグルやカザフの面々もただ呆気に取られていたことを覚えている。そして五年後の夏、日中農林水産交流協会の新彊調査団に、赤

沼、佐々木、清野が推され、再び新彊を訪れる機会を得る。北京で中国登山協会の史占春主席に再会し激励を受けての調査だった。ウルムチに於ける新彊登山協会との交流では、赤沼氏の穏やかな質疑応答に協会幹部の方々もスッカリ打ち解け、多くの知識を得る結果となった。天池からサンゴチヤ峠を経由し、あの懐かしの遠峰直下を辿り天池に戻る調査行であった。大草原を馬に揺られて行く姿は、佐々木も私も「何故かよく似合うな」と感心したものである。帰国後、自らワープロ化した報告書は大変貴重なものと評価された。一九九三（平成五）年中島正夫氏の後を継ぎ福島県山岳連盟会長となる。一九九五（平成七）年にせまった第五十回福島国体の為、日増しに多忙を極め精力的に動いていたが、開催迄あと一年にせまった十月、体調を崩し検査の為入院された。進捗状況の報告は専ら病院で受けるようになる。一九九五（平成七）年五月二十七日、開催地で審判会議が開かれたが、夕方宿に戻り訃報を知る。只々愕然とするばかりであった。「俺は赤ちゃんだから歳をとらない」と冗談をいっていたが、六十六歳で逝かれるとはあまりにも若すぎ、あの穏健な魅力が懐かしく甦る。十月十四日、国体は冴え渡る秋空のした開会し、花に囲まれた遺影が福島県選手団の胸に抱かれ入場して行った。「天池は正に桃源郷」とおっしゃっていたので、今頃は湖畔のあの岩の上で、白い天山の山々を眺めていることでしょう。

最後に先輩の御冥福を心からお祈り申し上げ筆をおく。合掌

（清野義美）

高尾徳繁氏（一九〇八～一九九五）

山を尊び、山を愛し、山と共に生きてきた高尾徳繁さんは、晩年は心臓病のために、山の憶い出を語らう生活が長く、さぞや山の友人達ともう一度山頂に立ちたいと思ったことだろう。日本山岳会の年次晩餐会には九州から上京して参会する人は少数であるが、私は数年前に奥さん同伴で参加されている高尾さんに喜びの挨拶を交わしたことを憶い出す。高尾さんの登山生活は奥さんの協力と家族のよき理解により思う存分にその「力」を発揮されたのではなかろうか。十七歳のときに弟と雲仙、阿蘇、九重などに登ったのが登山が好きになるきっかけで、九州では最大の山岳会「福岡山の会」が一九三二（昭和七）年に発会するや創期会員として入会され、第四代会長として一九五五（昭和三十）年十一月より一九六六（昭和四十一）年十一月まで十一年間もの長期にわたり会長をつとめられ、名実共に九州の山岳会としては最高の基盤を作られました。その間に日本山岳会には一九五七（昭和三十二）年に北部九州支部創設と同時に入会され、副支部長の職につかれました。

当時としては日本山岳会も地方支部は少なく北部九州支部も高尾さんの入会により槇有恒元会長を発会式にご出席願い記念講演会を行うことが出来ました。当時は三十数名程度の支部ではありましたが、高尾さんの入会により中央との連携のパイプが出来たことは実業家として氏が巾の広い交友関係で以前より早川種三名誉会員との

親密な付き合いがあり、早川氏を介して槇元会長の出席を実現させたようです。高尾さんは口を開けば「私は何も日本山岳会には貢献することは出来なかったが支部発足の時に微力ながら日本山岳界の重鎮・槇有恒に出席してもらうことに全力を尽くして頑張った」と云われていたが、常に人に接するのに温かい心と大きな包容力をもって山岳会のお世話をして下さったことには感謝の気持でいっぱいです。

若い頃から九州の山は勿論のこと北海道から日本アルプスの山々、還暦を迎えた頃よりはヒマラヤ、ヨーロッパアルプス、カナディアンロッキー、アフリカのキリマンジャロ等の海外の山々にも足を運び、ご夫人も同伴で、ご家族ともども山行を楽しまれたようです。数年前には結婚五十五周年記念として、多額の寄付金を日本山岳会の福岡支部にも御寄贈下さいましたが、感謝の至りです。

晩年になってからは心臓を悪くされ無理をして山に出かけることは少なくなったようでしたが、山友達との会合にはよく出席されて楽しい集会にして下さいました。高尾先輩が先般、支部報の第五号に「日本山岳会北部九州支部発会当時の思い出」と題する記事を寄稿下さいましたがこれが最後の「語らい」かと思うと残念でなりません。どうか別世界の名山に沢山登って安らかにお過ごし下さい。

（高尾徳繁氏は一九五七年入会、会員番号四五四二。紹介者は早川種三、成瀬岩雄の両氏。一九九五年六月二日逝去。一九五七～八七年日本山岳会福岡支部副支部長）

（吉村健児）

中　保氏（一九二五～一九九五）

奥さんから症状悪化の報を受けて、日本ネパール協会の西沢憲一郎会長と病院を訪れたのは六月十六日、意外にも彼はいつもの中さんで、しきりに山岳会の自然保護委員会やネパール協会の在り方について自説を展開した。だが別室での奥さんの話では薬で元気だが何時呼吸が止まってもおかしくない状態と聞いて愕然とする。その言葉の通り僅か二十日後の一九九五年七月八日、訃報に接することになってしまった。頑健、剛直の彼がと息をのむ思いだった。

一九二五年十一月五日生まれ、もう僅か数ヶ月で七十歳を迎える筈だったが、とうとう古稀の峠を越えられないまま逝ってしまった。

中さんは旧官立静岡青年師範を卒業後、地元藤枝中学で農業の教課を担当していたが、その後保健体育の高校教員検定を受け、焼津高校教師となり、次いで一九五一年から安田学園高校に転じ保健体育の教師として一九八六定年を迎えるまで一貫して体育指導に専念する。登山は勿論、スキー、陸上競技、卓球、バレーボールを愛好し体育は万能だった。

登山は一九四三年、十八歳の富士山から始まるが、焼津高校教師時代生徒を引率して富士登山をしたのを始め、安田学園では奉職三年目に山岳部を創設、以降北アルプス、谷川岳、八ヶ岳など常に高校生と共に登る。現役時代の山行の殆どは若い高校生がパートナーだった。国体山岳競技の監督も務めた。この間、都高体連登山部副

部長、都高体連理事、高体連選出の都山岳連盟理事の役職に就く。

日本山岳会には一九五八年に入会（会員番号四七二六、紹介者和田一男、折井健一）するが、数年後には東京支部の理事、委員として冬期登山技術講習会、スキー講習会、スキーツアーなどに役員として参加している。一九八二年から自然保護委員会のメンバーとなり、中高校生徒向けの「フィールドマナーノート」の完成に尽力された。倒れたのはその日開かれた自然保護委員会に出席して帰宅直後のことで、玄関で吐血そのまま入院して帰らぬ人となる。中さんの最後の仕事が自然保護だった。

中さんの節は独特の癖があって慣れないと抵抗があったから、都岳連幹部なども大分辟易していたようだが、若い後輩の面倒はよく見ていてその人達の評判はよかった。個人的には親しみのもてる善人で、山行のバスの中でいつの間にか他の女性グループの話の中心になっていたり、旅の途中に立ち寄った食堂で主人に色々教えてやったら、酒が一杯タダになったとか、旅館の息子が彼の話を深夜まで聞いて、大変感銘したと翌朝父親から感謝されたりという逸話は数えきれない。自然保護全国集会などでは朝礼、朝の体操の号令から会場作り、椅子運びなどの下働きまで若手と一緒に汗をかくことを厭わなかった。

「おお！いいよ」と何でも気軽に引き受けたから、山と関係のない「歩く会」の指導を頼まれ夜間三十kmの集団行進の先頭に立って歩くことが数年続いた。一九九〇年から日本ネパール協会の理事に就任するが、これも気軽に受けた一つだったようだ。何度かのネパール行はあったけれどネパールに対してそれ程造詣を感じなかったし、役員会での天衣無縫の発言は同席する私の方がひやりとしたこともあったが、やがて一定の見識を持ち協会の運営の戦力となった。気軽に受けても、受けた仕事の手抜きはしなかった。

一九六八年に安田学園四十五周年を記念して、尊敬する学祖安田善次郎氏の出身地富山から、山越えで二週間かけて東京まで歩いたり、一九八六年には還暦記念に北海道稚内から鹿児島まで百六十日、三千二百kmの単独縦走をしたりと、武骨だがロマンを愛する男だった。

一九七一年、都岳連常任評議員を共にして以来二十五年の山仲間だった。「お前は靴を汚しすぎる。歩き方が悪いんだ」よく怒られながら共に登った。「おい、ちょっと先に行くよ」そんなあっけない別れのような気がして信じられない。

好漢。共に愛した山頂の遙か天上に君が磊落な笑顔で、在ることを信じている。合掌

（國見利夫）

村井喜一氏（一九〇九～一九九五）

一九六一（昭和三十六）年東海支部は設立された。初期の東海支部はヒマラヤへ行きたいばかりの二十代の若者が中心となって支部の運営を行っていた。当然話題も海外登山や日本の冬山などが中心で、そうしたことにあまり興味を示さない人たちには、何か入りこ

みにくい雰囲気があった。しかし一部の中年の先輩たちは、そうした生意気盛りの若者たちを温かい目で見て、山行こそあまり一緒にする機会はなかったが、支部の会合や鮎を食う会といった軽い山行などには積極的に参加して下さり、ともすれば一方的になりやすい支部を幅のある支部に発展させるのに役立った。

そうした先輩が今はなき永田弘さんであり、塩田良仲さん、そして残念ながらここに追悼を書かねばならなくなった村井喜一さんであった。

村井さんは、名古屋の昔からの味噌醸造元「金桝屋」五代目村井治兵衛（じひょうえ）氏の長男として生まれた（金桝屋は代々治兵衛を名乗り、今のような時代でなかったら村井さんも六代目治兵衛を名乗るところであった）。五代目治兵衛は当時としては珍しく登山の趣味があり、第一次世界大戦の後ヨーロッパアルプスへも遊びに行き、ピッケルを買ってくるなど、相当な山好きであった。

村井さんもそうした父に連れられ、少年時代から山に親しみ、一九二四（大正十三）年十五歳の時富士山に登ったのを皮切りに、毎年のように北アルプスを中心に三千㍍級の山に登っている。こうした登山は最初のうちは父に連れられ、ついでガイドと二人という登山をしていたが、そのうちＮＳＫ（ナスク）とか、やまんばの会といった山のグループを仲間で作って活躍された。時には奥さんの紀久さんを同行することもあった。中でも一九三五（昭和十）年三月の弥陀ヶ原―剱岳―雄山―弥陀ヶ原の登山は当時としては相当な記録ではなかろうか。

戦争、兵役などで登山は中断するが、戦後名古屋市西区から中村区へ移転し、金桝屋も個人から法人に切り替え、商売、子育てなどで大きな山行はできなくなったが、鈴鹿など近くの山へ出かけ、時には子供を連れて行ったりされた。

村井さんは二女一男に恵まれ、偶然次女の美津子さんが、私の大学山岳部時代当時としては珍しい女子部員で一年後輩であった。美津子さんの話では子供の頃に父が登山している雪山の十六㍉フィルムなどを見せられた記憶があるとのことで、戦前すでに何度か冬山も経験してみえたようである。

一九五九（昭和三十四）年、同業のイチビキの会長中村慶蔵氏らの勧めで日本山岳会に入会された。その二年後東海支部は設立され、支部の会合には極力出席され、支部最初の遠征には食料などの寄付も頂いた。村井さんはその後も長く支部の長老格として支部の会合に顔を出され、そうした支部に対する功績から、一九八一年、東海支部設立二十周年記念には名誉支部員に推挙された。

一九六六（昭和四十一）年、エベレストビューホテルができた時は、その第一回目のトレッキングにも参加され、ヒマラヤの景観も楽しまれた。

末っ子で長男の重雄氏も高校時代、山岳部で活躍し、京大山岳部に憧れて見事京大に合格したが、母上の猛反対で山岳部を断念した経緯がある。卒業後住友電工に就職し、勤務の都合で兵庫県の芦屋に住居を持ったので、一九八四（昭和五十九）年、長く続いた味噌醸造業を廃業し、村井さん夫妻は長男の家に転居された。

昨年の阪神大震災には入院中に遭われたが、それが直接の原因ではないが、病院の一部施設が不能になり、死期を早められたようで

ある。

略　歴

一九〇九（明治四十二）年十月十七日　名古屋市西区江中町一―一にて出生
一九二七（昭和二）年　愛知商業学校卒業
一九五二（昭和二十七）年三月　名古屋市中村区鳥居西通り二―六〇へ転居すると共に株式会社金桝屋創設
一九五九（昭和三十四）年七月　日本山岳会入会・会員番号四九三九（紹介者神谷真吾・吉田政次）
一九八一（昭和五十六）年　日本山岳会東海支部名誉会員に推挙される
一九八四（昭和五十九）年　兵庫県芦屋市に転居
一九九五（平成七）年二月八日　逝去。戒名　廣徳院釋法喜

（中世古隆司）

曽根義一氏（一九二八～一九九六）

「義ちゃ」のニックネームで親しまれた、曽根義一さんが亡くなられた。日本山岳会会員番号五三〇五、入会は六一年十月（紹介者は藤島玄・井口拓夫）。越後支部に属し、単位会では塩沢山岳会会長として会員を率いて、上州・越後の山域なかんずく巻機山を我がものの如く活動された。

当地は、日本列島を縦断する脊稜、越後山脈、新潟県立自然公園越後三山、上信越高原国立公園の谷川岳清水峠から苗場山まで網羅する位置にある。

曽根さんは、旧清水街道が山にむかう南魚沼郡塩沢町大字長崎の若松屋商店の老舗を継いで、清水をベースに巻機山塊、清水峠を窺う岳人に対し兵站の役割はもとより、常に新しい情報を提供する貴重な人として岳人に知られた。

この地方では、山岳が観光の対象となり始めたのは昭和三十年代の初期からだと思うが、曽根さんは、いち早く上田村山岳会を組織して、それ迄修験の山・信仰の霊山を冠せて一部の人達に注目されていた巻機山にのめり込んでいった。行政を動かし観光協会上田支会の一翼をも担った。偶々上田村山岳会が発行した巻機山案内を見た。曽根さんが写真を撮り、文案を練って作成したことが草稿に照らしてわかる。一山岳会の名で発行する例にもおどろくが、当時はこういう形態も首肯かれるふしもある。観光案内としては最も早いものだろう。

曽根さんは巻機のよさを語る。……殊に県下唯一の雨燕の営巣する窟があり、保護区域に指定される……。特に強調したい事で、燕の状態を常に気づかっていた。そう云えば黒ツブレの垂直岩壁の雨燕営巣地云々の白ペンキは、もうかすかにしか読めない。

一九六一（昭和三十六）年七月十一日、町内三つの山岳会が寄って現在の塩沢山岳会が誕生する。推されて会長に就任、以来三十余年曽根さんに頼ってきた。その昔、清水口留番所で知られるいずみ

やに「高松宮をお呼びし、巻機山でスキーをしたのも曽根さんの努力だった」「その頃は村のほとんどの会合にも彼は顔を出していた。また出来る立場でもあった」と、現在その旅館を経営して深い交際のあった阿部喜久治さんは云われる。

塩沢山岳会の年間山行の他に全日本登山大会、新潟国体、越後の国境踏査（新潟県境全踏査縦走）と存外忙しかった。

二十人からなる塩沢山岳会、曽根さんを除けば皆、人づき合いは大の苦手。従ってこれまで渉外などは一手に引き受け、いや、何のことはないめんどうくさい話は「全部曽根さん」「それは義ちゃがいい」と押しつけて来たと反省する昨今である。

悪い顔も見せず、いやがりもせず、文句を云わず、いつも何となくこなしていた姿がおもい出される。

清水行き越後交通のバスが登ってくる。「停めてください」若い女性が若松屋さんの前で叫ぶ。停車、すると義ちゃが出てくる。彼女は食料を購う。山の様子をきく。何がしかの包みを作り、要領よく山の情報を教える。「ありがとう曽根さん」。中にはバスを待たせてお店に入り、自分の好きな食料からビール・酒を物色する不届き者もいて、運転士さんも同乗している他のお客も文句を云ったりはしない。うその様なのどかな田舎の情景ではあるが、周囲が暖かく容認するのは曽根さんの人柄だった。大声を立てたところは見たことがない。飲んでも虎になったことはなかった。「義ちゃ、意外にもてたなあ」述懐である。

町の教育委員、体育協会副会長などの役職も持っていたがそれは記さない。

数年来、病に罹り入退院をくり返していたが、御本人が何も語らなかったので、大した病ではあるまいと、会員だれしもがたかをくくっていた。三月二十六日、突然の訃報であった。一九二八（昭和三）年生まれ、行年六十八歳。

（熊木貞夫）

皆川孝平氏（一九一三～一九九五）

『夢のある老人、それは老人ではない！』

皆川孝平さんに最初にお会いしたのは一九六三（昭和三十八）年、私が防衛大学校の四学年になったばかりの時で、皆川さんは、その時学校の総務課長として着任され、即山岳部顧問となられた時であった。皆川さんは、極めて多忙であったにもかかわらず、合宿の準備会、反省会には必ず出席され、簡明で率直な意見を言われるとともに、夏山合宿、冬山スキー合宿及び丹沢ボッカトレーニング等には常に学生と行を共にして懇切な指導を賜ったことを覚えている。一方、山岳部の山行が予定されていないときは、私たち学生を自宅に招待し、暖かいもてなしをされることが常であった。その最初に招待を受けた御縁で私が皆川さんの追悼文を書くことになった次第である。

皆川さんは、一九一三年福岡県に生を受け、神戸市で育ち、一九三二年立教大学予科に、一九三五年には九州帝国大学（経済）に入

学、大学卒業後は、通産省、防衛庁等に勤務された後、企業の役員として最晩年まで活躍されていた。そしてその傍ら、山を友とし亡くなる直前まで山歩きを楽しんでおられた。また、大学時代は、大学新聞の編集にたずさわられるとともに、自らも多くの執筆をされ、爾後『世界を歩く』『続世界を歩く』等の著作をされている。

皆川さんに対する私の印象は「超然として己の道を真っ直ぐに歩んでおられる人だ」ということであったが、これは、学生の頃からそうであったようで、自らを「有無」と号し、「有無山人」というペンネームで執筆をされている。「山人」とは「山男」という意味のほかに、人偏に山を書いて仙即ち「仙人」の意を兼ね、人偏に谷を書く、俗人とは異なる生き方をしたいという強い意志がうかがわれる。執筆の内容は非常に幅が広く、政治、経済、歴史、民俗、登山・旅行から食い歩き記まで多様である。その中でも登山・旅行に関する執筆が最も多く、「大学生と山への関心（自然に還れ　山を見直せ）」「九州山岳巡礼」「山と戦争」「映画による山岳美の表現」等を大学時代に執筆され、岳友第四号（一九七一年十月八日発行）にも「よい登山とは何か」を寄稿されている。

皆川さんは晩年奥様とともに多くの海外旅行をされ、その結果を『世界を歩く』『続世界を歩く』の二冊にしたためられているが、海外旅行の計画を立てる時、訪問先の国の歴史・文化・政治・経済・地理などを事前に詳しく調べ、見るべき所を予め決めておいて、社会科学者的な眼で実情を見、日本を視座として世界的視野の中で観察し、記述されておられる。この事前準備を周到にすると言うことについて、皆川さんは「私は学生時代に山岳部にいた。そこでしっかり教えられたことは、山に入る前の入念な準備である。一度真冬の北アルプスあたりに入れば、お金なんか何の役にも立たない。自分の頭と体力と背負っている食料と装備だけが頼りである。だから入山前に靴紐、ボタンにいたるまで、あらゆる準備を入念に整えた。社会人になってからもその習慣は大いに役に立ち、国内国外の大小の旅行には必ず綿密な支度をした」と晩年の著作である「旅支度」に述べられている。

また、「旅支度」には、『夢のある老人、それは老人ではない！』と自らの生きざまを語り、「何人にも納得のいく安らかな死である。寿命尽き自然そのものの死、悔いのない余生を過ごし、満足しきった死である。誰にも迷惑をかけることもなく、ある日、眠るが如く死ねば、これ以上の幸せはない」と自ら心の「旅支度」をされている。そして、最後のいでたちは登山姿にしてくれと遺言されていた由で、登山姿に愛用のステッキを持って旅だって行かれた。

最後の最後まで現役であり、山を友とし一生を青春として生きられた皆川さんの生き方には、深い感銘と尊敬の念を抱かざるをえない。

（皆川孝平氏は一九六一年入会、会員番号五三一八。紹介者は小原勝郎、浜野正男両氏。なお、日本山岳会上高地山岳研究所には、皆川氏から昭和一桁台以前の登山用具であるイタヤの単坂平型のスキー、仙台の山内作の製造番号入りのアイゼン、輪カン及び夏スキーの四点が寄贈されている。）

（田尻一實）

国島陽三氏（一九三三～一九九五）

八月初旬、ある山の会合で「国島さんは二日ほど前に退院したそうだ」と聞き、回復に向かっているものと信じていたその二日後、まさか幽明境を異にされようとは思いませんでした。厄介な肝炎だが、病とうまく付き合えば心配ないと聞いていただけに、突然の訃報に愕然としたのは私のみでなく、お世話になった多くの仲間も同じ思いであろう。

国島さんとの出会いは三十年前、石川富康さんが日本人の先陣を切ってヨーロッパアルプスに行く時の仲間うちの壮行会で酔い食らった後、石川さんの家に二人で泊まり込んだのが始まりだった。その後一九六七年に三十三歳の若さで国島さんは愛知県山岳連盟の理事長に推され、この時私も常任理事に引き込まれ末席でお手伝いをさせて頂く事になった。国島さんは連盟をまとめるのに、誰にもいい顔をすることは決してしなかった。言うべきことはズバリと言い、言ったことは徹底的にやり抜いた。当時は雨後の竹の子のごとく山岳会ができ連盟へ加入、あれこれ教えろと連盟に甘えてきた団体の理事には恐ろしい存在であったと思われる。

富士山、御在所、御岳等での岳連講習会に同行し国島さんから教わったことは枚挙にいとまがない。自らの経験からあみだした装備の工夫は、物不足世代の人とはいえ感心させられた。特に着衣類の仕上がりが印象に残っているが、これはどうやら裁縫プロの奥方を煩わせていたようだと後で知った。

以来亡くなられるまで、会社や家庭を犠牲にした岳連一途の献身的な活動は、諸先輩の築いた愛知岳連の名を更に高め、日山協をして国島には一目おく存在となったのは皆さんの知るところであろう。名実ともに抜群の力を有する国島さんにして華々しい山歴が少ないのは頷ける。常に黒子に徹したところが国島さんの偉大さである。

かように書くと山岳連盟に凝り固まった堅物を想像されるが、決してそうではなかった。理事長時代の一九七一年率先してＪＡＣに入会、岳連の幹部連中もそれに続いて入会した。そのころ御在所岳の藤内小屋に集うクライマーを募って藤内沢にアマゴを放流し「藤内沢遊漁組合」なるものを設立、亡くなられるまで代表幹事として東海地区における山仲間の親睦の輪を広げられたのは、国島さんならではの功績であり、世にいうＪＡＣと岳連の軋轢など東海支部と愛知岳連には全く無かったといえる。その実証は一九八八年、世界初といわれた五十歳以上のメンバーによるＪＡＣ東海支部主催の「インドヒマラヤ実年登山隊」となり、国島さんは総指揮として六名の隊員と共に自らもヤン峰の登頂に成功した。

さる六月二十九日、一周忌の法要に親しい山仲間と出かけ、改めてお悔やみもうしあげた。新しいお名前は「澄空院釋清陽」、どこにも「岳」や「山」がない。六十二年の人生の大半を山に注ぎ込み、完全燃焼しつくしたのだろうか、この見事な引き際の良さこそ国島さんの真骨頂であろう。

謹んで先輩のご冥福を祈る。

（国島陽三氏は一九九五年八月三日逝去。享年六十二歳。一九七一年十月日本山岳会入会、会員番号七二七〇。紹介者は原真、熊沢正夫氏。）

久保孝一郎氏（一九二〇～一九九五）

（横田明信）

久保孝一郎さんを知るようになったのは、私が山岳会に入会した一九七七年以降のことだから、彼の長い山歴からすればわずか十数年に過ぎない。しかし久保さんは新入会員だった私に強烈な印象を残し、そして逝った。

久保さんは集会委員会など山岳会が主催する山行の常連だった。春や秋の山行には、その頃にはもう流行らなくなったナイロンヤッケを着こんだ姿を必ず見かけたものだ。薄地のナイロンヤッケは胸のジッパーのポケットの中に、袖から胴衣までのすべてをたたみ込んでハガキ大の大きさにしまうことができる便利さが受けて、五〇年代後半から六〇年代前半にかけて登山者に普及した。たいていの人は空色（浅黄）かベージュ、あるいは赤か黒色ものを着ていたが、久保さんのは、チョコレート、それもミルクの入っていないビターチョコの色という珍しい代物で、これも少々くたびれたダークグレーのホームスパンのニッカホース、小型のキスリングというのが何時ものスタイルだった。あのヤッケの由来は聞き損ねたが、久保さんなりのお洒落だったような気もする。

山の温泉宿などに一泊したときなど、出発の時、何時も最初に玄関に出てくるのは久保さんだった。静かにたたずんでいるように見えても「これから山へ入るのが嬉しくてたまらない」というはやる気配が伝わってくるようだった。しかし、こんなこともあった。あれは八〇年の山菜山行。二岐温泉大丸屋旅館に泊り、大白森山、甲子山から甲子温泉に抜ける山旅でのこと、早い朝食で大部分の人が浴衣姿でお膳に向かっている中で、久保さんは早くも例のヤッケ姿に身をかためていたが、気のせいか、何時もより元気がない。気が付いた人もいて「どうしたの」と聞いても無言、誰かが「心配ない、先輩の望月（達夫）さんがいるからだよ」という声で一同納得、そのとき皆、久保さんに好意を抱いているのだなぁ、という感想が一つ。無頓着のようで、繊細なところもある、と改めて、久保さんの一面を見たような気がしたのを思いだす。

もう一つ、あれはアルプが廃刊になった年だから、八三年の晩餐会だった。場所はホテルニューオータニ。私の右隣に近藤緑さん、左隣に久保さんが座って……、宴が進み、自由交流の時間となって、旧知の麦倉啓さんが近藤さんを訪れて「私はアルプの創刊号から最終号まで全部持ってます」というような話をしていたとき、久保さんが「アルプといえば、蜂谷緑さんという人の『常念の見える町』というのは、素晴らしいエッセイだったね」という。驚いた私が「著者の蜂谷さんは、この方です」と近藤さんを紹介した。出会いとはこういうものであろうか、久保さんが読書家であることを改めて認識した一幕であったが、一橋山岳会の会報「針葉樹」に随分と寄稿

していることは後年知った。しかし、この出会いを奇貨として、近藤さんとの交流が始まるというようなこともなかった。これも如何にも久保さんらしい。

その久保さんが『山と人と』と題する本を出した。上梓したのは亡くなる五か月前の九五年一月二十二日のことで、この本を出すきっかけは、久保さんの飯豊山における遭難であった、と思われる。遭難のとき同行し、本の編集に携わった奥村一郎さんも書いているが、ユニークな本である。「遭難一周年―飯豊山の妖怪」と題する遭難の経緯と、転落事故により車椅子生活となり、登山者として命を絶たれた、と悲痛な心境を語り、一周忌の法要を営みたい、という文章を冒頭に配し、また山行記と追悼記に分かれ、久保さんの発案で、新しいものを前に、古いものを後に配列している。

遭難は九三年八月六日のことで、転落事故の後遺症に悩まされ、久保さんは車椅子生活を余儀なくされたわけだが、それまでは、晩年にいたるまで、冬から早春にかけてはスキー、春から晩秋にかけては山歩き、を頻繁に行っていた。例えば七十歳の時のスキー記録をみると、①八九年十二月二十六～二十九日、野沢温泉。②翌年一月十三～十五日、ＪＡＣ懇親スキー、八方尾根。③一月三十日～二月三日、おいらく山岳会、富良野と手稲。④三月一日～四日、乳頭山秋田駒ケ岳。⑤三月二十六日～二十九日、ファミリースキー、八方尾根⑥四月六日～二十二日、欧州アルプス・スキー、というスケジュールである。正にスキー三昧であった。遭難後の久保さんの無念の思いは想像するだけでも痛々しい。

久保さんは遭難による車椅子生活、ほぼ二年の後、一九九五年七月十九日に亡くなった。享年七十五歳。亡くなる半年前、山岳会の会報一月号（五九六号）の創立九十周年記念募金欄に「二〇〇口百万円　久保孝一郎」とのっている。あれは久保さんの山岳会への「お別れ」であったのか。

久保さんは、晩餐会翌日の山行、静岡支部が主催した「もみじ会」などの山行に奥様を同伴することもあった。その奥様も今年（一九九六年）二月四日に後を追うように亡くなられた。

また『山と人と』の追悼記に収録された「針葉樹」などへの寄稿をみると、大先輩の中川孫一氏、大塚武元北海道支部長、中島孚氏などへの、そして同期の山田亮三、根本大氏への追悼文は、短いながら、いずれも心情あふれるものである。この本を読んで思うことは、久保さんは、いまごろ夫婦相携え、さきに逝った諸先輩、友人、学生時代に遭難した後輩の友田純一さんら、と西国浄土の山々を一緒に楽しんでいるように思われる。合掌。

（関塚　貞亨）

飯野　信氏（一九二六～一九九五）

日本山岳会宮城支部の会員として活躍されてきた飯野信（まこと）さん（一九七二年入会、会員番号七四一七、紹介者伊達篤郎・板橋元一）が、昨年十月十九日亡くなられた。享年六十九歳であった。

日本山岳会は、昨年創立九十周年を迎え、そのお祝いが十月十四

日、新高輪プリンスホテルで催されたが、その直後のことであった。

訃報を耳にした時、私には、体が不自由になられてからも仙台の会合に欠かさず出席されていた飯野さんの姿が、この夏にはなかったことが想い出された。

私は記念式典に先立って行われた「ヨセミテからのメッセージ」と題したシンポジウムに出席したが、これは日米の国立公園を比較しながら、自然と人間の共生のあり方を探ったもので聞き応えがあった。もしもこの席に、自然の大事さを身をもって感じられていた飯野さんが居られたなら、どんなに喜ばれたろうと思ったのだった。

また、それに先立つ九月九日、盛岡で行われた東北ブロックの記念集会の折には、その当時病気療養中だったS会員と飯野さんへのささやかなおみやげに、JACのワッペンを買い求めたのであった。

飯野さんは、仙台市の交通局に勤務されていた。そして市役所山岳会のメンバーとして、たくさんの気の合った方々とさかんに登山を楽しまれていた。また、交通局の山仲間のグループ・あかね会の創設にたずさわったお一人でもあった。交通局の方々が関山峠から船形山までの縦走路を拓いたときのメンバーでもある。

日本山岳会とのつながりもおそらく会員になる遙か以前からあったと思う。しかし当時は、私たちの支部の入会基準が厳しく、随分と下働きをさせられてからようやく推薦されるのが通例で、飯野さんも、そんなお一人であった。

飯野さんの登山は、自然体で山に溶け込むような穏やかなものであった。このような登山は、おそらく山をよく知っていないとできないと思う。

そんなわけで飯野さんは、仙台あたりの山のことは誰よりも熟知していた。特にホームグランドにされていた船形山については、文字通り第一人者であった。まだ交通の便がよくなかった時代に、広大な連峰の隅々まで歩かれ、一木一草まで知り尽くされていたのである。私たち支部会員は、どんなに飯野さんから貴重な山の話を教えられたことだろうか。

飯野さんの山菜・キノコ採りの力量も忘れられないことである。私たちは山行の度に山菜・キノコのお裾分けに与かった。山行の帰りに家まで届けてくれるのである。その種類の豊富さにはいつも感心させられたものである。七十周年記念の船形登山の折などは、数日前から採取された山の幸によって、参加者は予期せぬ豪華な山菜料理をいただくことになった。この席には、本部から望月さんや野口さんらがおいでになり、北海道からもたくさんの皆さんが来られていた。こういったことが重なって「宮城に山菜・キノコの飯野ありき」となって、山行のかたわらそのことも楽しみにされて宮城を訪ねられる会員も居られた。

飯野さんは、自然保護のことにも深い関心を寄せられていた。「宮城山岳」七号には、「自然保護――船形山の現状について――」と題して、ブナ林伐採の進む船形連峰の行く末に危惧の念をしたためられている。

市役所の山小屋だったこまくさヒュッテを利用して、よく冬の蔵王に登っておられた飯野さんは、ある日突然、私を訪ねて来られて、観光用の雪上車が特別保護地区の蔵の磧を我が物顔に乗り廻して、

アオモリトドマツなどを傷めている状況を報告されてきたことがあった。役所の知人に相談したところ「言っても無駄だから諦めた方がいい」と言われて、余計私のところに来る気になったとおっしゃるのである。この無念さは私にもよくわかった。当時、県の環境部局の嘱託でもあった私は、早速関係者に働き掛け、まもなく再発防止のための厳重注意の達しが事業者になされることになった。それ以来、飯野さんとは自然保護について心から話し合える間柄になり、飯野さんには、支部の自然保護担当委員としても長く尽くしていただくことになった。

その飯野さんが倒れられてから、しばらくは、支部の中に大きな穴が空いたようになった。いつも健脚ぶりを発揮されていた方がいないと、登山もどこか寂しく感ぜられた。それでも夏と冬の仙台での会合には、うしろから車椅子を操作される奥様とともに、欠かさず出席されてにこやかな顔で山の話を楽しまれていた。それは私たちにとっても嬉しいひとときであった。

もしも、飯野さんがこんなに早く逝かれることがわかっていれば、もっとたくさんの山のことを教えていただいておくのだったと悔やまれる。私たち宮城支部にとっては、かけがえのない方であった。同時に、何よりも多くの支部会員に親しまれていた方であった。

（柴崎　徹）

清野　恒氏（一九一〇～一九九五）

情熱的な色彩とタッチで、ヒマラヤの山山や、そこに住む素朴な人人を温かい目でとらえ、描きつづけた洋画家、清野恒（せいのつね）（本名・恒太郎）会員は、一九九五年七月二十日、脳梗塞を起こし、自宅のアトリエで、仲子夫人に抱かれたまま、永遠に帰らぬ人となってしまった。行年八十四歳。

七十歳にしてスイミング・クラブ通いをはじめ、若い仲間との交流を楽しんでいたという。生涯、ダンディズムを貫き通した。その後ろ姿は、頼もしくもあり、後輩の私にとって、まぶしい存在の一人でもあった。それだけに、突然の訃報は、人のいのちのはかなさを、まざまざと突き付けられた思いだった。

だが、両親の老後を案じ、同居中の二女緑さんから「父は死の二週間前に、シャンソンを聞きながら、〝踊ろうか？〟と私を誘ったの。父らしいでしょう?!」と、聞かされた時、いのちが燃えつきる直前まで、若若しい感性を失わなかった、恒先輩を彷彿とさせる会話に、私はなんて素敵な人生のピリオドだったのだろう、と、悲しさよりも、喜びをかみしめている自分に気づき、はっとさせられた。

〝びげの画伯・恒さん〟の愛称で、誰からも愛され、慕われていた恒先輩は、ちょっぴりシャイだが、誠実なお人柄と、ウイットに富んだパリ仕込みの話しぶりは、周囲の人を幸せにしてしまう、不思議な魔力を持ち合わせていたようだ。本会のスケッチ指導も気さ

くに引き受けてくださり、ファンも多いはずである。

個人的には、同郷ということもあり、父（故・後藤幹次本会名誉会員）や義兄（後藤又兵衛本会会員）を通じて、家族ぐるみのお付き合いはあったものの、早大で同じ美術専攻、山岳部の先輩と知ってからの三十年間、山行やドライブで、お供をするうちに、相通ずるものがあることを発見し、どれほど感動を共有し、歓喜したことか……。

一九八八年、小梨の花の咲くころ、恒先輩夫妻と私たち夫妻は、徳沢園で二日間を過ごした。徳沢園主人上條進さんの古稀の祝いに、お世話になった山仲間たちで、恒画伯の絵をプレゼントすることになり、現地で、恒画伯に描いてもらうための徳沢入りだった。

「徳沢園が牧場だったころ、ぼくが学生時代だったから……五十年ぶりかなあ……」。ウキウキと私の車に同乗した。早朝、上高地に着いた時は、「ええッ!!　もう着いたの?!　ブーチャン（私）の車に乗ったら、地球の果てまで連れてってもらえそうね……」と、ドライバーへのねぎらいも、恒先輩らしい心配りだったことも忘れられない。

天気も上上。恒画伯のご機嫌も上上だった。タンポポが、じゅうたんのように敷きつめられた徳沢園の広場に、ゴザが敷かれ、机の上には、お気に入りのサドヤのワインが置かれた。恒画伯の視線が、残雪の前穂と奥又白をいち早くとらえた。構図が決まったようだ。被写体とキャンバスを鋭い目で見比べていたかと思うやいなや、キャンバスに突進。絵筆が走る。そして数歩さがっては、同じ動作が繰り返された。描いている間、わが夫は、アクリル系の絵の具が乾燥しないよう、時時、絵の具に水を吹き付けている。恒画伯は、キャンバスから目を離すことなく、ワインをひと口飲んでは、足を蹴りながら、狂った闘牛の牛のように、キャンバスに突進する。その何者をも寄せつけない集中力とその迫力……。そのかたわらで、徳沢園の子供たちを相手に、ゆったりとくつろぐ仲子夫人。動と静が一体となり、夫婦の絆を垣間見た気がした。

恒先輩は「人生は泣いたり笑ったり、いろいろあるけど、素晴らしいものだよ」とか、「友だちは、ありがたいものなんだよ」。「自分が幸せな時には、人にも幸せが与えられるんだよ」と、二人の娘に、繰り返し語りかけていたという。苦境にあっても家族の深い愛情と山仲間の友情に支えられ、モットーでもあった「素晴らしき人生」を全うした恒先輩に、最後の「サルー（乾杯）!!」を私は捧げたい。

略　歴

一九一〇年　山形県上山市、五助旅館の長男として生を受ける。朝に夕に蔵王連峰を眺め育つ。幼少より蔵王登山

一九二九年　早稲田大学入学、美術専攻。早稲田第一高等学院時代から大学まで、山岳部に在籍。今井友之助（本会名誉会員）らと共に北アルプス周辺、三ッ峠岩登り、富士山など合宿登山に参加。東北の山山にも親しむ

一九三九年　渡欧。パリにてフェルナンド・レジェに師事。絵の修業をするかたわら、ヨーロッパ・アルプスでスキーと登山を楽しむ

一九四一年　結婚後、海軍に徴用され、仲子夫人と共に、アモイからサイゴンへ。サイゴンで終戦。抑留生活を送り、四六年五月無事帰国
一九六七年　ネパール・ヒマラヤへ写生旅行。以後、七〇年代まで、とりつかれたように、二十数回、ネパール、インド・ヒマラヤを訪れる。ヒマラヤ行で新境地を見い出し、モダン・アートから、色彩の山岳画家として再スタート。大自然の真髄を描く。二十年間トキワ松学園横浜美術短大で、絵画・色彩教授。
一九七五年八月入会、会員番号七九九五。紹介者は折井健一・小倉董子

（小倉董子）

田邉　史（ひろし）氏（一九三〇～一九九五）

一九九五（平成七）年十一月十日、ゴーキョピークの登頂を果たし下山中の一行を襲った雪崩によって、私は、多くの友人を一瞬のうちに失った。田邉さんもその中の一人であった。

田邉さんと私は、昭和二十年代、まだ戦後を引きずっていた時代に、大学山岳部でともに山登りをしていた。

私は、学生だった頃、新人が音をあげると「うちの方がましだよ」といったものだ。ありていにいえば、暗にM大山岳部を思い浮かべていた。仮に、本当だったにしろ、炉辺会の方たちと近づきになるにつれ大変失礼な的はずれの妄想であった。入澤さん、田邉さん、石田さんと親しくなるにつれその感が深い。申し訳なし。

田邉さんと近しくなったのは、ここ十年ぐらいである。毎年一月十五日の前後、ＪＡＣ集会委員会の肝いりでスキーの会がある。その会の何人かが、明治大学八方尾根寮、俗にいう明大小屋に移ると、炉辺会の面めんが居られ、その方がたのお蔭で、私は存分にヒュッテ・レーベンを楽しむことができた。まさに多士済済。或いは、多彩な人たちの集団であった。が、その中で田邉さん一人は異彩を放っていた。ビールも、ワインも、日本酒も、アルコールを含んだ物質にはいっさい手をつけない。田邉さんは本物の下戸なのである。そうとう激しいお酒の席なのに、田邉さんは違和感もなく、結構楽しんでおられた。朝、起きるとすぐ飲み出すので、酔いざましに、一人、二人とスキーに出かけてゆく。田邉さんだけは素面で出かける。

こんな田邉さんの習性が、ＪＡＣの酒のみには、ありがたかった。私も、もちろんである。ルームの帰り、どこかでいっぱいやる時も、割り勘はちゃんと払う。いつか「田邉さんからは、割り勘を取りにくいなあ」。「いいえ、そんなことはないですよ」。できた人であった。

田邉さんは、山をまんなかにすえた趣味をいくつか持っていた。まず、スキー。特に山スキー。ＪＡＣ・アルパインスキークラブの創立メンバーであった。私も入会したいのであるが、「あいつは、そろそろ店仕舞いだから、入れない方がいいよ」、なんて声がありそうなので、単刀直入に田邉さんに聞いたことがある。当然、「そんなことはないですよ」なる返事を戴いたが、あのまじめな顔から

は、「そんなこと、ありますよ」と、読みとれそうなので、こんにちに至っても、入会のお願いをさしひかえている。私は、五月のゴールデンウィークに、蓮華温泉からなんべんも朝日岳をねらい、その都度、追い返されている。田邉さんは、小松原さんと組んで一回で登頂している。田邉さんは、私の同年代の友人の中では、体力、気力ともトップクラスの人であった。田邉さんは、山スキー用のプラスチックブーツの耐久性などについて、研究熱心であった。アルパインスキークラブの会報に掲載されている。今となっては、寄稿が少ないことが惜しまれる。

田邉さんは、ＪＡＣのフォトビデオクラブでも創立メンバーであり、事務局の担当者であった。ＪＡＣ創立九十周年記念にあたる年次晩餐会の会場で、田邉さんも写真の展示で忙しそうにしていた。私が、「手伝いましょうか」というと「太郎さんに手伝ってもらうと、まがっちゃうから」。こちらが、すでに赤い顔をしていたのでは、ごもっともであった。

私は、このクラブに入りたいが、やれ山だ、スキーだ、なんだかんだで、毎回例会にも出席できない。また、作品中心ではなく、山行の中で、いい写真を撮りたい、といったようなことを話すと、あの几帳面な田邉さんが、「そんなこと気にしなくていいからお入りなさい」。この一言で、ありがたく入会した。田邉さんは、二つの会の例会は、全て出席だったそうである。

毎年恒例になっている同人展には、田邉さんの遺作が出品されていた。二階の一等席に、八方の明大小屋から少しあがったところからの白馬連峰であった。おそらく手持ちでとったものと思われるが、きちっとピントがきていた。素面の田邉さんならではである。ぽつんと黒いマークのついた写真と、田邉史という名前を見ているうちに、いろいろな想いがこみ上げてきて、こちらの目の焦点が合わなくなってしまった。

田邉さんは、一九九五年五月から日本山岳会の評議員になる。名誉会員推薦の会では、発言は少なかったように思われるが、平素から無口な方だったので、席に着いているだけでも存在感のある人であった。

私は、正直なところ、六大学、日大、中央で山を登っていた仲間に身近さを覚える。かけがえのない相談相手を天にとられてしまった。ＪＡＣにしても充実、発展がこれからという時に人望厚い田邉評議員を欠いてしまい、まことに、痛恨の極みである。

手元に、炉辺Ⅶがある。田邉さんは、一九五〇（昭和二十五）年明治大学入学と同時に山岳部に入部。新入部員の時に、十二月から一月にかけての「北尾根から奥穂高へ」に参加している。この冬山合宿は、戦前からの課題を一つ一つ解決してゆくなかで、極地法形式を採り、実力がどの程度かを自らに問う、戦後登山の総決算と位置づけられている。田邉さんは記録によれば、在学中、全ての山行に参加されているようである。四年生の十二月には、リーダーとして「横尾尾根から滝谷登はん」を成功させている。社会人になってからも、ハードな登山をつづけられている。しかし、明大山岳部、炉辺会からみた、アルピニスト田邉史像は、その部報、その会報にゆだねられるべきものと思う。

私は、一九九六年八月三日、石田さんといっしょに、武蔵野市御

殿山に主のいない田邉家を訪ねた。淡たんと話される奥様、メモもとらず、ぽかんとうかがっていた。田邉さんがいつも座っていたところの前に、かなり凝ったオーディオの機器があった。奥様が音楽好きだったこと、ヨーデルが得意だったが、家で歌うと、三人の娘のひんしゅくを買うので、山で歌っていたようです、とお話になる。テープにとってあるといわれるので、さっそく聴かせて戴く。そういえば葬儀の時のＢＧＭがヨーデルだった。艶やかな声である。最後の山となった、ヒマラヤでも、きっと歌われたことであろう。

田邉さんは、明治を卒業すると、株式会社トンボ鉛筆に入社する。始めは営業、あの田邉さんがと思うものの、約束を忠実に守るなど評判は良かったそうである。製品企画部在職中は、高級鉛筆「ＭＯＮＯ」の企画発売。八二年秘書室室長。六十歳で定年を迎えた後も、請われて秘書室勤務。役員の公職に関する渉外を担当する。田邉さんのことだ、さぞや日本一の秘書室長だったことであろう。

田邉さんは、一九八〇（昭和五十五）年九月日本山岳会入会。紹介者は、児島弘昌氏と中島信一氏。会員番号八八五〇。エベレストの標高と同番号を狙っていたが、残念ながら二番ずれてしまう。

略　歴

一九三〇（昭和五）年九月二十五日　東京の浅草で生まれる
一九五〇（昭和二十五）年　私立暁星高等学校卒業。同校在学中から山岳部で活動。明治大学政治経済学部経済学科入学。
同時に、体育会山岳部に入部
一九五四（昭和二十九）年　同校卒業、株式会社トンボ鉛筆入社
一九八〇（昭和五十五）年　日本山岳会入会
一九九五（平成七年）年五月　日本山岳会評議員
一九九五（平成七年）十一月十日　ヒマラヤで遭難死

（中村太郎）

宮城恭一氏（一九一七～一九九五）

こよなく「山」を愛した人だった。そして宮城さんの行くところ必ず「酒」の香りがあった。本当に楽しそうに飲んでいた。その酒があるいは寿命をちぢめたのかも知れない。まことに残念ながら一九九三（平成五）年十一月に脳内出血で倒れ、そのまま意識不明になり、夫人の手厚い看護も空しく、一九九五（平成七）年四月六日に死去。享年七十八歳。

「誠心誠意」をモットーとした宮城さん。日本山岳会入会申込書の山行経歴の記入の仕方を見てもその人柄が偲ばれる。なんと別紙十一枚にわたって細々と山行が記入されているのである。恐らく、これはＪＡＣ始まって以来のことではなかろうか。

宮城さんが山でもっとも活躍したのは、恐らく一橋山岳部時代（昭和十一～十六年）ではなかろうか。その詳細は部報「針葉樹」の第九、十号に記されているが、戦局まさに急を告げるこの時期によくぞこれほど登れたものだと思う。舞台は富士山に始まり、北アルプスはもちろん南アルプス、八ケ岳、谷川岳まで足を延ばしている。

生前の宮城さんが嬉しそうによく語っていたのは、小谷部・森川両先輩の冬の鹿島槍荒沢北壁をサポートしたことであった。当時一橋山岳部の生々しい活躍がそこにあった。そしてこの時代、スゴ乗越付近で岳友友田純一氏の悲しい遭難にも遭遇している。

宮城さんは卒業と同時に商工省（現・通産省）に入省しているが、直ちに近衛歩兵四連隊に入営。スマトラで戦い、シンガポールで終戦、一九四七（昭和二十二）年十二月に復員している。

私はその古い経歴はただ記録に頼るのみであるが、私が実際に宮城さんを知ったのは一九七七（昭和五十二）年、もうひとつの山の会「一水会」に入ってきてからである。

一水会とは、通産省の現役とOB並びにその関係者で構成する山の会である。春と秋に総会と称して盛大なパーティーを伴った山行をすること、そして毎月第一水曜日に例会を行うことから一水会と称するようになった。

私は通産省出身ではないが、上司の関係から古くから一水会にかかわり、その幹事役をしていたので、ここで宮城さんとの深いかかわり合いをもつようになった。

宮城さんはさすが一橋・針葉樹会に籍を置くだけあって、山に対する基本に実に忠実な人であった。

こんなエピソードもある。

場所は外秩父の横隈（よこがい）山。十数人の一水会会員が例によって山頂での昼の宴会を始めていた。しかし、待てど暮らせど宮城さんが来ない。その日は朝から宮城さんは酒の香りを漂わせていた。こんな低山でベテランなら心配ないということで皆で帰ってしまった。実は宮城さんの方が先に帰っていたのであるが、「山に人を置いてくるとは山男の風上にも置けない」と大喧嘩になってしまった。その時の事情を知る者にとってはただニヤニヤするだけで、困った人が入って来たものだと思ったが、その後はさすが「誠心誠意」をモットーとするだけによき会員となっていった。

とにかく基本に忠実という点では、どんな低山に行くにも完全装備を怠らなかった。「宮城、お前だけ助かろうというのか」と先輩たちにからかわれるほど真面目であった。

一水会には既に一橋の大先輩故近藤恒雄氏もいたこともあり、よき先輩、後輩の関係を保ちながら居心地がよさそうであった。復員後、中断していた山行を再開、もっとも楽しく充実した山行を続けた時期であったのではなかろうか。なかでも一九七九（昭和五十四）年四月一日、元通産省の先輩二人と四尾連湖から三方分山そして精進湖へと抜けた折、先輩の一人が、心筋こうそくで倒れた。その時の宮城さんの立派な措置と迅速、沈着な行動には本当に頭の下がる思いでいっぱいである。その時のことを宮城さんの日誌にはただ次のように書かれている。「あと三十分ほどで精進湖というとき、同行の中島先輩が心筋こうそくでたおれる。あとは大変であった」。

また、宮城さんは本会会員では久保孝一郎氏とも親交が深く、山行表の記録には一水会に負けず劣らずその名前がでてきている。本会の諸行事にも久保氏との同行が多く記録されている。宮城さんは本会の役員こそしなかったが、年次晩餐会にはよく顔をみせ、針葉樹や一水会の仲間たちと杯を傾け楽しそうに語り合っていたのが印象的だった。

一九一七（大正六）年十月二十四日、兵庫県に生まれた宮城さんの経歴は実に輝かしいものをもっている。

一九四一（昭和十六）年、東京商大を繰り上げ卒業、高文行政科合格、四二年商工省（現・通産省）に入省。かくして宮城さんの通産省の高級官僚への途が始まった。

一九四七（昭和二十二）年、復員後は再び通産省に復帰、五三年、通商局通商調査課長を皮切りに、大阪通産局総務課長、大蔵省為替局管理課長、再び通産省鉱山局石油課長を経て、六〇年科学技術庁長官官房総務課長、六二年通産省公益事業局公益事業課長と各課長を歴任、六三年防衛庁調達本部副本部長、六四年通産省通商局輸出振興部長、六七年大臣官房審議官化学工業局アルコール事業部長を最後に通産省を退職している。

退職後も日本プラント協会専務理事をはじめ多くの特殊法人の理事を歴任、八八年四月に日本化学繊維検査協会の理事長をもって宮城さんの職業生活は終わっている。

これをもってしても、宮城さんは戦後の日本の復興にいかに尽力されたかがわかるような気がする。この間、とても山どころではなかったのかも知れない。山行の復活は、通産省のいわゆる現役を終わった一九六八（昭和四十三）年立山となっていることでもうなずける。その功により、一九八九（平成元）年四月、勲三等に叙せられた。

ここに誌上をかりて深く哀悼の意を表し、故人のご冥福をお祈り申し上げる次第です。

（小倉　厚）

石井恵美子氏（一九三八～一九九五）

「十月九日。七時十分出発。今日だけは曇り空、これから晴れるとよいが。私は高度順化が出来ているのだろう。ゆっくり歩いていれば苦しくない。十時、ゴーキョピーク頂上、五三八〇米、雪、何も見えないが、私にとってはじめての高度に達することが出来て良かった。十時三十五分、頂上出発、十一時三十五分、ゴーキョ小屋、昼食。十三時十五分、ゴーキョ小屋出発、雪降りしきる中を下る。十三時五十分、パンガ。私は小屋に入る。雪はどんどん降り積る。」（日記の最後）

一九九五年十一月十日。八時半頃大雪崩が発生、石井氏は日本人十三名、シェルパ十一名と共に死亡された。この事故については「山と渓谷」一九九六年一月号に詳細が出ているので、是非御参照願いたい。

石井恵美子氏は一九三八（昭和十三）年一月七日、中央区築地で五人兄弟の上から二番目として生まれた。この家は関東大震災後の二階建ての古い建物で、父上は築地魚河岸の製氷会社に勤めておられたというから、生粋の江戸っ子だった。中大独文科を出て運輸省審議官室を経て六六年、竹橋にある気象庁図書課に入り、長年に亘って刊行書類の編集に当って来た。八九年予報部通報課技術専門官となり、九四年初めて岐阜地方気象台防災業務調査官に転出、翌九五

年定年を待たず三年早く退職した。これは仕事を離れて登山に専心するためだったが、これが死の年になったのは運命の皮肉であった。

石井氏は吾々気象庁山岳部の者にとっては謎の人だった。新年会等には出て来るが、自分の事は何も語らないので、何となくベテランらしいというだけで、吾々も合宿等に強いて誘うのも畏れ多いと思って誘わなかったし、向うでも別に参加する意志もなかったらしい。私がベルリンの気象研究所で教えた事のあるハンスと云う男がオリンピックの頃に来日したので紹介した事がある。ハンス君は測候所を頼りに、日本全国を自転車旅行をして、このためにベルリンを首になってしまった。その後四回も来日したが、石井氏は彼を頼って何度かドイツ旅行をしていたらしい。一昨年彼が来日の折、是非石井氏に会いたいと云っていたが、私は岐阜の住所も親しい事も知らなかったので、会わせる事もできなかった。

一九八五（昭和六十）年に私が日本山岳会で山の気象の講義をした時に意外にも石井氏が来た。帰りに中村純二先生とそば屋に行った時、日本山岳会に入りませんかと云うと、意外にも即時OKだった（紹介者　中村、大井、会員番号九六二四）。入会申込書の山歴を見ると、正月分として八ケ岳立場川本谷、谷川一ノ倉東尾根、甲斐駒摩利支天、秋には一ノ倉四ルンゼ、八ケ岳小同心、稲子岳南面、駒、鳳凰、春には幽ノ沢右俣、夏には北鎌尾根、前穂北尾根、ヒツゴー沢、オジカ沢、等々が書いてあるので、彼女が中々のベテランだと初めて気が付いた次第だが、どこの会で登ったのかは明かしてくれなかった。科学委員会では探査山行の組織、会計や事務の外、文献の整理等もやったらしい。何よりのプラスは新しい交流が出来て玉山やヒマラヤにも道が開け、岐阜に転勤後京都や岐阜・大阪の山岳会の人達とも飯豊縦走や関西の山にも登れたのであろう。一方図書課では自ら世話人となってハイキング、スキー、水泳等をやり、碁も二段、麻雀も勝馬、又家族でも兄弟と山行をしていたと云う。

仕事から解放されて登山に専心出来る希望が達せられ、いよいよこれからが山の人生だという時に閉じられた五十七歳の人生は残念だが、結構豊かであったらしい。十二月三日、築地本願寺で葬儀の後、東京会館で「石井恵美子を偲ぶ会」が行なわれ、三百人以上の参加者を見た。岐阜支部では小津権現山で追悼登山を行い、科学委員会から十名が参加した。山スキーや山の写真のグループにも足跡は残っている。心からご冥福を祈りたい。

（本稿には高橋詢、山田文雄氏等の御協力を頂いた。）

（大井正一）

宿屋昭二氏（一九二七～一九九五）

［葬儀委員長としての挨拶から］

一言、お礼とお願いを申し上げますと共に故宿屋昭二さんのお人柄にふれてみたいと思います。

先日、私の親戚の通夜の席で当日の導師をなされた、ご住職が「死」という字について、このようにいいました。「死」の字は、上に一の字、その下にはカタカナの「タ」と「ヒ」があって「タビ（旅）」

と読ませます。即ち「一人で旅立つ」こと。人間は「一度は旅立たねばならないもの」であると話されました。宿屋さんはあまりにも早く一人で旅立たれたのではないでしょうか。

皆様もご存じのとおり宿屋さんは、弥彦スキークラブ会長、弥彦山岳会会長、新潟県山岳協会理事などをつとめ昨年までは弥彦村体育協会の副会長もしておりました。実直で包容力のあるお人柄で見事にこれらの要職をこなして、新潟県の山岳技術の向上や弥彦村のスポーツの振興に寄与されました功績は非常に大きいものであります。弥彦燈籠まつり協賛行事の松明登山の発展に、村民総歩け弥彦山登山大会、弥彦山フェスティバルでは安全で楽しく登るための登山技術の指導と普及につとめましたし、また、弥彦山登山道の整備にも意をそそぎました。その功績が認められて一昨年弥彦村の村政功労者として表彰されました。

忘れもしない昨年の二月十九日土曜日の午後でした。体調がすぐれないと私のところへまいりました。二人で県立吉田病院へいきましたところ、ただちに入院ということになりました。そして、検査、治療と一ケ月ほど入院しておりました。その後は月に二回通院して治療に専念してきました。

十一月五日に恒例になっています弥彦山岳会の「山じまい」を宿屋さんの故郷津川町の河川公園を会場にしていたしました。宿屋さんの生家は、阿賀野川に常浪川が合流するところが見渡せて、麒麟山が目のまえに聳えている景勝の地であります。

会員達が麒麟山に登っているあいだ私と並んで河原で豚汁を作っているときでした。「ちょっと飲んでみるか、ウィスキーを薄くして」といって、今まで口にしなかった酒を飲んだのです。そっと宿屋さんの横顔をみると、目に涙が浮かんでいました。焚火の煙が目にしみたのかなと思いましたが、久し振りに故郷の山や川を見て、そして病に倒れてから全く口にしなかった酒を飲んで、かつては「斗酒なお辞せず」と豪快に酒を飲み干していた頃を思い起こして病さえなければとの悔し涙だったのか、私にとって忘れることのできない宿屋さんのお姿でした。

奥さんは宿屋さんが昨年の二月に入院したときに主治医の先生から今日あることを聞いておられたのではないかと思います。胃癌でほとんど手をつけることができないほど進行していたのでした。本人には最後まで知らせず、じっと耐えておいでになっておりました。そのご苦労は察するに余りあるものがあります。

宿屋さんの誕生日は二月二十六日です。とうとうそれにとどかず旅立たれたのです（一九九五年二月十三日逝去。享年六十九歳）。

病床にあって病の苦しさを最後まで口にせずに、痛みが体中を走るのか時々顔をゆがめていましたが、息を引き取るまで、ありがとう、ありがとう、と何度も申していました。それは、自分に尽くしてくれた妻や娘達、お世話になった親戚の方々、先輩、同僚、そして、スキークラブや山岳会の皆さんの顔や姿が宿屋さんの頭の中を去来していたのでしょう。皆様方とともに心から宿屋さんのご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

（宿屋昭二氏は一九八九年入会、会員番号一〇五三三、紹介者は佐藤一栄・花井馨両氏）

（渡辺富衛）

アメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長

H. ADAMS CARTER（1914～1995）
アダムス・カーター氏

さあ、あれは去年だったかな、いや去年の筈はない、今年ですよ、そう今年でした。ある日例によって豆ちゃん、あの日本山岳会の名物男、前副会長の豆ちゃん（松田雄一氏。私だって負けず劣らず小さいが）から電話。「吉沢さん、死んだようですね」「誰がですか。私がですか？」「いや、あのカーターさんですよ」。耳も目も早く、常に正確なニュースの源泉である彼の事だ、出鱈目じゃあるまい。私は早速調べてみた。最近、米国から来た小冊子を見直したらチャンと出ていた。向こうの会長がキチンと書いている。あのアド・カーターの生年は一九一四年（私は一九〇三年）、急逝日は一九九五年四月一日となっていた。あの堂々たるスポーツマンが私より先に旅立つとは、ズルイなと思った。

ここでは詳しいことは書けないが、皆さんの力でアン（Ann）夫人とアドを日本に招待出来た時、私はキャノンの新しいカメラをアンに進呈した。あとでとても良く写ると喜んでくれた。アンは温かな人柄で、ハーバード大学の何かの委員をやっていた。大学を案内してくれた時に、会う人が皆丁寧な挨拶をしていた。余程偉い女性なんだろうと思った。

ところでカーターといえば、もう一人アメリカにいる。このほうはまだ健在で、米国第三十九代目の大統領（在任期間一九七七～八一）。温かい家庭に生まれ、何不自由なく一生を過ごそうとしている。しかし日高義樹監修・訳『カーター回顧録』上・下（一九八二年・日本放送出版協会）というのを発見してびっくりした。この本は、余程の古書店か、図書館へでも行かなければお目にかかれまい。

ジミー・カーターの事を書いたので肝心な事を書く余地が無くなりそうになってしまった。

年だけは忘れっこない。一九六一年、われわれがアンデスへ行って帰国の途中での話である。

隊員一同はニューヨークで解散、各自帰国のルートは勝手、私はカーター夫妻の招きで、マサチューセッツ州の北端にあるジェファースンの彼らのビラ（別荘）まで行かなければならない。大変なドライブである。何を使って行ったかは忘れたが、とにかくボストンでおりた。長い重い荷物を担いで外へ出た。誰も来ていない。どうせ誰か来るだろうと思って荷を下ろしベンチに腰かけていた。

五分もしないうちに、大きなカーターが汗をふきふき現われて私の荷物を担いだ。「さあ、これからカナダとの国境近くまで行くんですよ」ときた。山の裾をぐるっと回ると（長くなるので除中省略）彼のビラ。カーター一族が来ていた。女性が多いから賑やかなこと。

二日ばかり経ったら例のウイリー・アンソルドの一家がやって来た。私に会いたいので万障繰り合わせて来ましたよと、いってくれた。実はこの人がこの日の主役なのである。ウイリーは米国でも飛び抜けて有名な登山家なのだ。字に書くとeが入るのだが、発音するとeがとれてアンソルドとなる。即ち、〝売れ残り〟となるのである。〝埃だらけの棚ざらし品〟と紹介するのが、カーターの口癖（お

互いに仲間同士の場合だけ）になっている。ウィリー自身も嬉しそうにそういっているのだから世話はない（あとで、レニアで死んでしまった）。

カーター自身の失敗談にこんなのがある。カーターの職業は学校の先生。ボストンの家のそばの高等学校で、スペイン語やドイツ語、フランス語を三十年以上教えたり、スキーの選手やヤリ手の登山家も作っている。何しろお金にも時間にも不自由がないので、とても具合がいい。学校が休みになると、世界中の山岳会を、アンと一緒に訪問して歩いていた。米国山岳会の年報を世界一の、信頼すべきものに仕上げたのも、彼の人徳と勉強意欲によるところが多い。旅行先から随分葉書をくれていた。

一九九六のA・Jに出ている（三三二頁）B・ウォッシュバーンが書いた追悼記を読むと、アドはハーバード大学で二年間スキー部長をやっていたのがわかった。そう言えばスキーも相当なものでったらしい。

ある年、観光時期の真最中に、オーストリアのウィーンに出かけた。誰もがウィーンは見たい。われもわれもとウィーンを目ざす。カーターもアンも時期を忘れて一番混んでいる時にウィーンに行ってしまった。ホテルが皆予約済み。最後にウィーンの最高のホテルに辿り付いた。名前を聞かれたのでいうと、アメリカのカーターさんですか、失礼いたしました、さあどうぞ、こちらへ、といわれて案内されたのがホテルの最高の部屋だったのだそうだ。気がついて大統領じゃありませんよ、といったが、もう遅かったそうだ。色んなものが、二人には勿体ない程の量と質で、用意されてしまったあとであった。後の祭りとはこの事だった。ジミー・カーターと間違えられたのですね。ご苦労様でした。

（吉沢一郎）

会報「山」訃報・追悼文一覧

一九九五年八月号（六〇三号）
追悼　永尾和夫君を偲ぶ（長田正行）

一九九五年九月号（六〇四号）
追悼　橋本誠二さん（朝比奈英三）

一九九五年十月号（六〇五号）
訃報　秩父宮妃殿下ご薨去（中村純二）

一九九五年十二月号（六〇七号）
追悼　今西壽雄元会長を偲ぶ（斎藤惇生）

一九九六年二月号（六〇九号）
追悼　今西壽雄さん　日本登山界の巨星消える（大塚博美）
追悼　入澤郁夫さんを偲んで（豊田泰）
追悼　石井恵美子さん（中村純二）
追悼　田邊史さんを偲ぶ（石田要久）

一九九六年三月号（六一〇号）
追悼　金山淳二さんを偲ぶ（佐藤晴夫）

支部だより

■北海道支部

平成七年度の北海道支部の活動（一部重複）と八年度活動の計画をお知らせする。まず最初に昨年、支部長の私が九十周年記念山行で怪我をし、支部会員に多大の御迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、搬出に多大の労を取っていただいた方々に深く感謝する。簡単なところで不覚にも転倒し骨折したが、今後の自戒としたい。

平成七年度　四月二十二日　支部総会。出席三十六名。

五月二十七日～二十八日　支部山行。芦別岳本谷の雪渓を登攀。

七月　支部会報『ヌプリ』第二五号発行。二十一日～二十三日　支部山行。大千軒岳と砂原岳。

八月十四日～十六日　大塚元支部長の十三回忌。

十月七日～八日　支部山行兼秋のお月見。塩別温泉と武華（ムカ）岳。参加二十一名、会員外二名。温泉でのお月見は最高の天気だったが、翌日は曇る。登るにつれて雪が深くなり、ガスも出て頂上からの眺めは残念ながらなかったが、思わぬ初冬の山を楽しむことができた。

十月十日　雨で順延となった自然観察会を野幌森林公園で開く。秋晴れの体育の日、野田支部長の案内と解説で、北と南の接点ともいうべき平地の北方針葉樹林と落葉広葉樹林の秋の紅葉を楽しむ。参加十一名。

十一月十一日　ＪＡＣ九十周年記念北海道集会・懇親会。本部から村木会長・大屋理事・マカルーの重廣隊長が出席。ＪＡＣ創立以来の話やビデオ、マカルーの報告等を聞く。一般を含め二百五十名を超す盛会だった。翌十二日記念山行、日帰りで樽前山へ登る。太平洋沿岸は雪が少ないが、支笏湖を望みながら初冬の日を浴び、足首が埋まる程度の積雪を踏んで、強風をついてシシャモナイ沢ルートより登頂する。参加二十六名、会員外四名。支部晩餐会　参加四十二名。

平成八年二月二十二日～二十三日　支部山行。無意根（ムイネ）山。初めての試みとしてイグルーと雪洞を設営して泊まる。翌日はガスの切れ目に、羊蹄山（シリベシ・マッカリヌプリ）の端正な姿を眺めながらスキーで登る。頂上は風が強く寒かったが、すぐ下って風を避けた日だまりでしばし休憩する。さすがに二月下旬、日の光は暖かい。下りは余市岳・白井岳・定山渓天狗岳、さらに遠く石狩湾を望みながらの大滑降、十五時に無意根山荘前に帰着、解散する。東京在住の元北海道支部会員もはるばる参加し好評だった。参加十三名、会員外二名。

三月十三日　海外登山報告会。参加二十九名、会員外三名。フッド（三四二八㍍）アメリカ・オレゴン州、新妻・高澤。ホイットニー（四四一八㍍）アメリカ・カリフォルニア州、中嶋。ヒマラヤ彷徨（一九九五年三月～八月）、阿部。

平成八年度　四月二十日　支部総会・懇親会。本年は支部委員の改選年度ではないため委員の交代は数名にとどまる。昨年度の行事・会計報告、今年度の行事・予算案・人事案をいずれも承認する。出席四十四名（内五名は総会のみ出席）。

五月　支部会報『ヌプリ』第二六号発行。支部総会の結果と本年度の予定を早く支部会員に連絡するため、昨年から『ヌプリ』の発行を早めてきたが、本年より総会直後に出すことにした。五月十八日～十九日　支部山行。楽古（ラッコ）岳。新築のラッコ山荘に泊る。翌朝はおだやかな晴天で、標高一〇〇〇㍍付近から雪が残りその上の新雪を踏んで予定より早く登頂、南日高の山並みと太平洋の眺めをゆっくり楽しむ。全員真っ赤に雪焼けをした。

（以下予定）　七月二十日～二十一日　支部山行。北大雪の比麻良（ヒマラ）山と平山。　十月十日　自然観察会。西岡公園で火山灰丘陵の二次林と湿原の変遷を見る予定。　十二月十四日　海外登山報告会・支部晩餐会。昨年まで海外登山報告会は別の日に行っていたが、本年から晩餐会（土曜）の日の午後に合わせて札幌以外の会員も出席しやすいようにした。　平成九年二月二十二日～二十三日　支部山行。白井岳。昨年度好評だった雪中露営とスキー登山の予定。

以上のように支部山行、特に積雪期の登山を充実させてきたが、それに伴い参加しにくい人も増える。その対策として、自然観察会等の回数を増やし、道内各地で開催することによって誰もが参加しやすくし、また各種のグループ活動等を活発に行って、支部活動の活性化を図るとともに、支部三十周年に向けて準備をすすめていきたい。

（野田四郎）

■岩手支部

九十周年東北ブロック式典等を主管して例年より慌ただしかった、平成七年度の支部活動を記録しておきたい。

四月二日に盛岡市の河南公民館で委員会に続いて総会を開催した。予算・決算・行事計画などを決めた後、役員の改選では支部監事と委員が全員留任した。総会を一時休憩して新委員によって中谷支部長・菊池副支部長の留任を決め、委員の分担は事務担当松田、会計諏訪の留任の他は業務の分担を決めないこととした。直利庵での懇親会は、元老の小西喜助会員を中心に山の話に過ごした。

五月十三日　春の例会、二戸郡安代町山専旅館。翌十四日、例会山行、安代町中岳（一等本点）。登山道がはっきりしていない部分が多く、チシマザサの薮漕ぎを楽しんだ。菊池（修）・音石・椚田・諏訪・中屋・阿部（陽）・阿部（克）・幹事は中谷と松田。

七月八日　日帰り山行、和賀岳。秋田県の真木渓谷からピストン。松田・小池・中屋・阿部（陽）・阿部（克）・岩館・幹事は中谷。

七月　「岩手支部通信」第五号発行。

八月二十六日～二十九日　夏の例会山行。穂高駅集合、蕪岳・槍ケ岳・上高地解散。リーダー菊池（修）・サブ諏訪・音石・椚田・中屋・阿部（陽）・阿部（克）・浅野・佐藤（英）・松田・中谷。会員外二人。

八月二十八日　夏の例会、上高地山岳研究所。肝腎の槍の頂上で

はガスがかかったが、快晴に恵まれてゆっくりゆっくり表銀座を楽しんだ。田中信濃支部長のお声がかりで、各小屋では特別の配慮をして頂いて有り難かった。

九月九日　ＪＡＣ創立九十周年東北ブロック式典・重廣氏講演会・祝賀会　会場はホテル東日本　村木会長・中村副会長・藤平事業委員長と、県外から百人岩手支部三十人の出席で、支部としては今までにない盛事であった。

九月十日　記念山行　姫神山。一本杉から城内口に下山、中村副会長・中川常務理事他百人参加。式典などの準備は中谷支部長・菊池副支部長・松田事務担当委員・諏訪会計担当委員の四人で前年の六月から始め、当日の係は出席申込をした支部員に担当してもらった。

九月三十日　秋の例会。岩泉町・かむら旅館。

十月一日　例会山行　穴目岳、中谷・音石・和田・椚田・関口・小口・松田・佐藤（英）・阿部（克）・田高（幹）・小池・岩館・幹事は山崎・諏訪。お目当ての松茸は不作であった。快晴で山頂からは早池峰山、岩手山、遠島山などの展望を楽しめた。

十一月三日　日帰り山行、三ツ石山。菊池・佐藤（英）・諏訪・会員外三人・幹事中谷。この年は降雪が早く登山道が判らなくなっていた。みぞれが降るという最悪の条件で途中下山をした。

平成八年一月　支部通信第六号発行。

（中谷　充）

秋田支部

当支部における平成七年度は、例年通りの事業内容であったが、経験豊かな新入会員七名が加わって総員七十名となり、更に充実した組織内容となった。

支部山行については、主として支部事業への参加会員のお祝いを兼ね、本年は県北部にある北林（山）と三哲山を、北林嘉鶴子委員をダシにして五月三日に実施。また、県内の〝一等三角点めぐり〟として、七月二日に県北部・白神山地の一角にある長場内岳と、車でも登れる幟山、それに〝ふるさとの山〟の一つとして茂谷山をハシゴ。そして秋には、秋田市効外にあるヒル大発生の山・俎山と駒頭ノ森を登り、それぞれ会員多数の参加を得て楽しみ倍増の山行となった。

特別事業としては、毎年実施されている小さな海外登山・第三弾として、ボルネオ島のキナバル山を選び、十一名の参加者を得て一月十日から九日間の日程で実施。晴天のもと、全員登頂し、所期の目的を果している。

本会総会に先だって開かれた支部総会は、二十三名の出席者のもとに開催。会計・事業・予算案などを審議、懇親会も併せて行った。東北地区集会は、九十周年記念集会として岩手支部が主管され盛岡市に於いて開催、当支部より十三名が出席。また、本会の九十周年記念晩餐会には九名出席し、翌日の姫神山また丹沢の三ノ塔に登り更なる親交を深めあった。

支部報「秋田山岳」は、本年も三回発行して通算第三十二号とな

り、会の心臓部として力を入れている。

その他としては、関連団体の各種会議・事業などへ参加し、それぞれ支部会員が中心となって、地域山岳界の発展のため貢献している。

（佐々木民彦）

■山形支部

支部の総員数は、六十四名である。この中には団体会員が一つある。昨年の支部入会会員は十二名であり、物故会員は二名となっている。

支部会員六十三名（個人会員）について、平成八年四月一日現在の年齢別構成を見ると、三十代一名、四十代八名、五十代二十二名、六十代二十三名、七十代七名、八十代一名、九十代一名となっている。この内、女性会員は五十代が四名、六十代が一名、七十代が一名の計六名で、年代は別としても淋しい限りである。

六十三名の内、五十代と六十代で七四・六%を占めており、まさに熟年の集団といえる。

今、会そのものの若返りや、若い者に期待する、といわれてはいるが、まずは現状を踏まえた取り組みが大切だと思っている。

平成七年は、総会のほか登山を主とした集りは、五月十三日の「総会記念登山八森山」、六月十八日の「蔵王山の清掃登山」、十月七日・八日の「鳥海山清吉新道散策」、十月二十九日の「女甑山登山」、平成八年に入って二月十七日・十八日の「蔵王山樹氷原を滑る会」、三月十六日・十七日の「鳥海山宮様コースを滑る」となっており、ほぼ二か月に一回の割りで実施されている。この内、秋の「鳥海山清吉新道散策」、冬の「蔵王山樹氷原を滑る会」は、恒例行事となっており、この時期に集るのが、支部会員の楽しみの一つともなっている。情報交換、親睦には欠かせない集りである。

もう一つの恒例行事となっているものに、「支部晩餐会」がある。十二月の第三土曜日に一泊で行われるもので、山はご無沙汰しても、この日を待っている会員も多い。このほか、平成七年度の支部独自行事以外のものとしては、ＪＡＣ創立九十周年の東北ブロック式典と記念登山「姫神山登山」への参加がある。

総会を含めるとこの年度では、会員を対象とした集会・登山等は九回になるが、六十三名の会員についてこれらに参加した回数をみると、次のようになっている。

参加率からいえば五十代と七十代が注目される。五十代は七二・七%、七十代は七一・四%となっている。七十代の七名の方についていえることは、未だ現役で支部行事には積極的に参加され、山歩きもそれなりにこなしておられることには、敬意を表するほかない。

総員六十三名のうち、約六二%にあたる三十九名が、何らかの形で支部行事に参加されていることになるが、九回全部に参加されている方が一名いる。支部行事の推進役として貴重な存在で尊敬に値する。一方、三十九名が支部行事に参加しているとはいえ、その内の約四分の一にあたる十名が一回限りの参加である。こんなところにこれからの問題があるのかもしれない。

新しい会員の増加は、常日頃から心を砕いていることの一つである。支部行事に会員外からの参加も結構多く、その人たちがこれ

から会員として活躍してくれることを願っている。昨年の支部入会会員十二名の内四十代が三名、五十代が五名（内一名が女性）六十代が三名である。ただ総数で、四十代と三十代の比較的若い年代九名のうち、三分の一にあたる三名がこの一年の増加であることは、幾分なりとも将来に希望を持たせるものとなった。（梅津　博）

宮城支部

当支部は、今年で三十八周年を迎えます。現在の会員数六十二名で活動し、山行やその他の行事を含め平均して月に約一回の行事を行っている。

昨年（九五年度）の総会にて新役員が決まり西郡光昭支部長から、支部設立から五人目の柴崎徹新支部長が誕生いたしました。新支部長からの行事は次の通りです。

五月十八日・春山山行、蔵王連峰水引入道二十一名。六月十八日・自然保護山行、蔵王連峰鳥帽子岳十五名。七月二十二～二十三日・夏山山行、虎毛山七名。八月二十三日・ビールパーティー二十名。九月九日～十日・九十周年記念式典、盛岡二十三名。九月三十日～十月一日・秋山山行、大土ケ森六名。十一月十二日・晩秋山行、糸岳六名。十二月七日・支部晩餐会、ホテルリッチ仙台、二十四名。例年七十歳になられた支部会員に、赤色のセーターをプレゼントしておりますが、今年は吉野禎造会員、加藤義明会員の御二人に柴崎支部長より贈られました（加藤会員は都合により欠席）。元旦登山・泉ケ岳九名。一月二十日～二十一日・冬山山行、面白山六名。二月二十四日～二十五日・面白山～大東岳縦走四名。三月九日～十日・スキー山行、山形蔵王十一名。以上参加者で行事を終了した。

昨年は、二人の会員が亡くなったことが残念でなりません。鈴木秀夫会員（会員番号九七六二）と飯野信会員（会員番号七四一七）鈴木さんは、六月十九日に亡くなりました。民族学に詳しくいろいろな話を聞くのが楽しみでした。そして、飯野さんは十月十九日に亡くなりました。特に自然保護に情熱を傾けられました。改めてご冥福をお祈りいたします。

さて、最近になって新入会員が今年は四名ほど入会し、山行も少しずつ活発になってきたようです。

今年の移動総会は、鹿蝗山にて開催されました。隔年四月に行われる移動総会は山菜をたくさん現地調達し、総会後の懇親会にて天ぷら料理になるのですが、今年は低温のせいか、四月二十日というのに昨夜降った雪がほんの少しだけでしたが山道に残っているほどで、山菜もわずかだったようです。あいにくの雨で総会会場も頂上から変更し、吉野会員の山小屋にて開催されました。山菜の天ぷらでの懇親会は和やかに行われました。

今年の行事予定は（五月・六月は実施済み）春山山行五月十二日・大倉山十二名参加　自然保護山行六月二日・夫婦岩十六名参加　東北ブロック集会六月二十二～二十三日・秋田支部　夏山山行七月二十七日～二十八日　ビールパーティー八月二十一日　秋山山行・九月七日～八日　晩秋山行・十月二十七日　支部晩餐会・十一月三十日　元旦登山・泉ケ岳　冬山山行・一月二十五日～二十六日　雪山山行・二月十五日～十六日　スキー山行・三月八日～九日

なお、宮城支部報である「宮城山岳」が現在第八号まで発行されており、第九号が支部編集委員で編集中で、まもなく発行される予定です。以上今年度支部行事が総会にて決まり、それぞれの担当者が計画して山行を行います。どうぞ宮城支部の山行にも皆さん参加されてはいかがですか。歓迎します。

（千石信夫）

信濃支部

順不同になるが平成八年度は、支部総会で始まった。どの地域からも便利なようにと松本市内で四月二十一日、四十二名の出席で開かれた。議事は平成七年度の事業報告、会計報告、新年度事業計画、同会計予算を含む五議案を審議して原案通りに決定した。

今年度は、任期満了に伴う役員改選の時期であり、総会に先だって行った役員会で審議しこの結果を総会に提案した。三期六年勤めた役員もいたが、今年度は、支部創立五十周年また、ウエストン祭も第五十回の節目でもあるため全員留任という事で決定した。

年間行事は、四月通常総会、六月第一土、日曜日に第五十回ウエストン祭、夏秋の例会山行、一月新年例会、二月スキー例会、三月春山例会山行が年間行事大要である。また支部報を四月の総会時に配布するように発行している。ウエストン祭は今年度は第五十回という節目であるため記念となる様心掛けた。

記念山行初日は、例年行っている一般自由参加の徳本峠越えに加え、支部会員のみによるウエストン氏が上高地に入山した時のルートである新穂高より中尾峠越え、東天井から二俣、さらに槍沢を経て入山するルートで行われた。例年より残雪が多くあったが楽しい山行であったと報告された。

また、翌日の式典と記念行事は、梓川畔のウエストン碑前で本部より村木会長はじめ小倉評議員・また理事である水野氏に講演を頂くなど大勢の出席を頂き、安曇小学校児童、エーデルワイスクラブの合唱等を行いました。夏山シーズンの訪れを告げる第五十回ウエストン祭は盛況裡に終了しました。

七月十二日から夏山例会に黒部内蔵助平から立山方面に行く予定で準備が進んでいます。平成八年度の事業は、これからです。

平成七年度の事業は、四月の支部総会三十八名出席、六月三、四日第四十九回のウエストン祭五十七名が参加。七月の夏山山行は生憎の集中豪雨のため中止、八月二十六～二十八日本会創立九十周年中部ブロック記念式典および同山行に二十四名参加した。

十月二十一日、二十二日秋山例会ではできるだけ多くの会員が参加できることを心掛けている。戸隠村越水ケ原の戸隠小屋に一泊し、戸隠山に登って紅葉の山を楽しんだ。

平成八年一月二十一日松本で新年例会を四十九名の出席で行う。二月二十四、二十五日乗鞍高原で支部会員の山荘「ヒュッテほし」でスキー例会を行う。

三月十五～十七日春山山行燕岳。参加者は五名で初日の雨と例年にない雪のため大変であった。このほか本部主催の支部長会議、各種委員会にはその都度出席している。

平成七年度は七人の新入会員がありました。現在会員数は百七十名と増加していますが、構成員の多くは年齢が高く、若い会員の入

会を期待している。少しでも支部活動を増やし、人と人のつながりが若い会員の入会につながり、更に支部が発展していくように努力しなければと考えています。

（塚原賢勝）

■山梨支部

昨年は大澤伊三郎氏、風見武秀氏、今井友之助氏の三支部員が名誉会員に推挙された。

だが、山梨県岳界に大きな功績を残された大澤氏は本年六月、九十七才にて天寿を全う。また三月には古い会員芦澤俊雄氏が逝かれ、かえすがえすも残念であった。一方、新しい仲間五名を加え、総勢九十名の大世帯となり、大変にぎやかになった。

日常活動は月一回の委員会を中心に、本部の動勢、他支部との交流、支部山行の計画、支部員の動きなど話し合っている。一昨年から実施している支部親睦山行も、年間三～四回をこなせるようになった。支部員の多くは、県内の単位山岳会の中枢にいる者が多いので、日程的に相当きびしいのが現実である。

さらに、本年度からは、山梨県山岳レインジャー制度に9名が登録。山梨岳連の一員として、六月下旬から九月下旬にかけ、南アルプス、八ケ岳、奥秩父を中心に、山域の美化、高山植物の保護、登山指導にあたっている。

奥秩父の父といわれる第三代会長・木暮理太郎氏を記念する、木暮理太郎翁碑前懇親会は、本年で三十四回を数え、五月二十五日～二十六日、金山平の碑前で行われた。元会長の佐々保雄氏を迎えて、全国から五十一名が集まった。碑前祭の後の記念山行は、信州峠の東、夕日あたり、石っ骨の二座に登り、新緑の奥秩父の一角に立ち親交を深めた。

特筆すべきことは、昨年の本会創立九十周年記念中部ブロック集会で行われた記念フォーラム「南アルプスの山岳現況と登山の将来像」を、より掘りさげようという動きである。

一月二十日支部新年会において、内藤順造氏が、南アルプス広河原で行なった、登山者アンケートの分析。四月六日、支部定期総会に先だち、再度フォーラムを開いた。深沢健三氏、小宮山稔氏のリードで、話はかなり具体化した。①受入れ施設の問題点　②山岳環境をどのように守るか、その配慮と対策　③登山者として何ができるか、などであった。

討論の成果は近くまとまる予定だが、山梨県の山には多種多様な登山者が訪れる。例えば、旅行社企画のツアー登山、家族登山、健康志向の未組織登山者も増えてきている。交通問題、駐車場問題、山域の汚染、宿泊施設への不満など、従来考えられなかったような問題が出てきて、とまどうことが多い。はっきり言って有効な対策を探しあぐねているのが実状である。

幸い支部員の多くは、永年の山行活動から、それぞれの場でよくリーダーシップを発揮している。また、頼もしいことに若手も多くなり、現役のバリバリもけっこういる。これらの、多年積み重ねた経験や英知、行動力により、山梨県の山域が抱いている問題点、課題を直視し、堀りおこして討議を深め、山梨支部としての考え方や対応策を提言できるように努力していきたいと思っている。

（坂本　桂）

静岡支部

平成八年度日本山岳会静岡支部通常総会が五月十四日（火）六時半より、静岡市珠賀美神社社務所で開催された（出席二十九名）。

平成七年度の業務報告、決算報告が承認された後、平成八年度の業務計画（案）、予算（案）、支部規約改正（案）について議事に入った。

平成八年度の年間行事は、例年通り八月を除いた各月の第二火曜日を定例会とし、そのうちの十一月と四月の例会を秋と春の懇親山行に、十二月と一月の例会をそれぞれ忘年会と新年会に当てる。支部通信は、十月と四月の二回発行する。会費は昨年通り本部からの助成金で賄い、特に支部会費は徴収しないこととした。

支部規約の改正は、副支部長を新たに設定しようとするものであった。現在までの役員構成は、支部長一名、委員若干名、会計監査二名と規定されていたが、支部長が現職の場合業務遂行が困難な面も種々予想され、副支部長を置くことによりその改善を図ろうとするものである。この件も了承された。

これらの行事のほか今年度から新しく次の二点を重点的に行うこととした。第一点は、一九九一年より安間荘前支部長が中心となって進めて来た学術調査研究「富士山の森林限界におけるスラッシュ雪崩による植生の変動」を長期的積極的に追跡調査を進めてゆく。これは富士山を世界の文化遺産として保全しようとする気運とともに、地元山岳人の立場から地球環境保全の一助として寄与出来ると考えられるからである。

この誌面を借りて今迄の調査結果の概要を述べると、富士山においては植物の生理生態的な視点からは、森林植生が標高二八〇〇メートル付近まで登り得る条件を具えているが、八地点の調査結果から、標高二四〇〇メートルまでしか森林が成立できないでいる。この原因は、雪と氷と少量の火山礫の混合したスラッシュ雪崩が森林の若木を押し潰し、成木の樹皮を痛め成長を阻害し、厳しい環境の中で可能な限り這い登ろうとする植生（森林）に対してスラッシュ雪崩が、これを押し下げるように働いていると考えられる。これは雪崩の通路となる沢筋と尾根とでは様相が大きく異り、沢筋では標高一八〇〇メートル付近まで、雪崩の常襲地帯では一三五〇メートル付近まで森林限界が押し下げられている事実。また、森林限界付近には幼木が少なく五〇から一五〇年生の成木が最前線に立っていることからも理解できる。これらの現状を長期的に調査するとともに温度や降雪量、雪崩の発生回数と規模などを含めて考察することによって新しい知見が得られるものと考えられる。

第二点として、支部会員の中には種々の海外遠征に参加し、また、個人的にも海外の山に足を向けられる方が多い。しかし、現在まで支部が企画した海外登山は皆無であった。そこで支部としての目標と会員相互の親睦を図る第一歩として海外遠征を計画した。高齢化傾向の現実も考慮して、まず低くとも魅力的な山から始めようと天山山脈のアラタウ山遠征を計画したが、予約中の山行計画が多く、仕事面でも隊員が集まらず平成九年度へ延期することとした。企画が遅れたことや宣伝不足も考えられ、今後一年かけて実現したい。

（大石　惇）

岐阜支部

岐阜支部は、昭和四十六年に今西錦司先生（元日本山岳会会長）の呼びかけにより創立し、今年二十五周年を迎えている。

現在（平成八年三月三十一日現在）会員・会友あわせて百五十二名、高木碕男支部長をチーフに、委員十三名がサブリーダーとなって支部活動を運営している。

委員会を年十回ほど開催し、支部活動の年間事業計画や事業を具体的に企画し、懇親山行、現地小集会山行、山岳講演会、そして会報「岐阜山岳」を年二回発行するなど精力的に活動している。

平成七年度の主な事業等は、次の通りであった。

四月　支部総会　吉城郡神岡町の民宿「宗五郎」において、平成七年度支部総会を会員三十八名が出席し開催した。はじめに支部長から「会員も百五十人余と多くなった。登山活動・自然保護活動など常に研鑽して、日本山岳会の会員にふさわしい会員であってほしい。また、平成七年度は日本山岳会創立九十周年にあたり、七月に京都支部合同で記念式典を行う計画であり、成功させたい」と挨拶があった。役員改正では、集会委員に佐藤正雄会員を新任し、今まで二人であったものを三名とし、広報委員を新しく設け、清水芳彦会員を新任するなど委員会の充実を図った。こうして平成七年度の事業計画など六議案を原案通り承認した。

四月　桑崎山懇親山行　神岡町役場職員大前一寿さんら二人の案内により、山吹峠から取りつき、残雪を踏んで三時間あまりをかけて、四十人全員が登頂した。

七月　日本山岳会創立九十周年岐阜・京都ブロック記念式典、記念講演、並びに記念山行を、滋賀県多度町のアストロパーク天究館において、日本山岳会村木潤次郎会長、京都大学名誉教授伊谷純一郎氏らを招き、会員百十一人が参加して開催した。伊谷先生からは、「今西錦司先生との山行・サル研究をめぐって」を聴講した。翌日、鈴鹿山系の最高峰御池山へ七十一名が登頂した。

九月　ドウの天井・現地小集会　二十名が参加し全員登頂した。

九月　探索山行と講演　郡上郡高鷲村ひるがの高宗のホテルホワイトキャッスルにおいて、科学研究委員会と共催し、岐阜大学名誉教授大内幸雄会員を講師に招き、会員五十三名が参加して開催した。大内先生からは「ヨーロッパアルプス登山基地山村の変遷」を聴講した。翌日、奥美濃の大日岳へ五十一名が探索山行を行った。

十月　井出小路山懇親山行　四十七名が参加し、裏木曽県立公園の井出小路山へ、小雨が降っている薮山を難儀して登頂した。

十一月　山岳講演会　講師・伊谷純一郎氏演題「アフリカの彷徨」と題してを聴講した。五十三名参加。

十一月　石井恵美子会員がエベレスト山系ゴーキョー峰（五三八〇メートル）近くの山小屋で雪崩にあい遭難。往年五十七歳。

十一月　北大武山海外遠征登山　高木碕男隊長以下十三名は、十九日から二十六日にかけ台湾へ遠征し、中華民国山岳協会会員高全輝氏、陳詩亮氏、林文雄氏らの案内により、北大武山（三〇九〇メートル）へ全員登頂し、快挙であった。

（清水芳彦）

京都支部

京都支部は今年十周年を迎え、遅咲きの桜がまだ残る四月二十一日に吉田山麓京大会館において、創立十周年記念式典・講演・祝賀会を行った。

式典は薬師義美副支部長の司会で始まり、まず斎藤惇生支部長から、創設時八十数名であった支部員が現在は二百七十名程になっている。発足当初に今西錦司先生が云われた日本登山界をリードする「陰謀団体」たれ、という心意気をいつまでも忘れないようにしよう、との挨拶と十年間の歩みが紹介された。続いて各来賓の方々から祝辞や励ましの言葉をいただいた。村木潤次郎会長からは、十年は一つの区切りだが、今年もパイオニアワークを展開してもらいたい。阿部和行関西支部長からは故今西壽雄会長との秘話として、京都支部発足は少し遅かったのではないかと話された事や、支部員が京都へ移り寂しくなったなど、当時の思い出が紹介された。高木崎男岐阜支部長からは、京都支部ができて岐阜では会員が少し減った。兄弟支部の誕生は淋しさと嬉しさが半々であった、との笑いを交えての祝辞をいただいた。この他、福井・富山・福岡・岩手・東九州各支部代表の方々からも祝辞や激励の言葉をいただいた。紙面を借りて御礼申し上げます。

記念講演は「京都と登山家梅棹忠夫」と題して、酒井敏明副支部長と斎藤清明会員の二人との対談形式で行われた。梅棹先生は前国立民族学博物館館長で、文化人類学者としてまた探検家として多くの業績を残しておられ、一九九四年には文化勲章を受賞された。先生は対談の冒頭に、昨年日本山岳会の名誉会員にして頂いたことが事の他嬉しいと云われた。そして昆虫少年として山野を駆け巡っているうちに山の魅力を知ったこと、京都一中時代に新山城三十山を設定し完登。その報告書の作成の苦労話、旧制三高時代は留年を繰り返して山に登ったこと（白頭山より北へ原生林を彷徨、松花江の一源流を新たに確定した探検）、京大時代の大興安嶺探検などを楽しげに話された。戦後先生は健康を損なわれて登山より探検、学問的には文化人類学へと進まれたのだが、基本的には自分は登山家であると考えていたと云われ、聞いている者に感銘と共感を与えられた。

祝賀会は講演終了後二階会場で開催。司会進行は横田明男委員であった。百名を越える出席があり、賑やかに十年間の思い出話や、今後の支部のあり方など時間がたつのも忘れて語り合った。

支部ではこのほか十周年記念行事として、支部員各自のアイデアに基づく山行、または通常の山行を支部事務局へ届け出をし、それを記念山行として報告書を提出して貰う事になっている。いくつかを紹介してみると、「笹ケ峰より妙高外輪、火打山へのスキー登山」京大山岳部笹ケ峰ヒュッテをベースにスキーツアーに行く（参加十五名）。「城丹国境を歩く」これは山城国と丹波国の旧国境を一年以内に歩こうと云う計画である。四月の思わぬ残雪に始まり六・七月は、じゃんじゃん（藪漕ぎ）で大変な苦労をしているらしい。毎回十五名程の参加があり、八月現在五回目が行われている。「南米エクアドル・チンボラソ登山」も八月下旬から八名で計画されている。この他一般月例山行では、比良八幡谷沢登り、御在所岳藤内壁での

岩登り講習会、九月には風流なお月見山行、十月には岐阜支部との合同山行、スケッチ山行、十一月には明星山岩登り講習会、一・二月にはワカン山行や山スキー山行・氷瀑登攀入門など。また三月には関西支部との合同スキー登山も予定されている。

毎月第三水曜日に行われる山水会は、三月には「日本の山でも罹る高山病」と題して、支部員の中島道郎ドクターから自分での診断方法・予防法などを教わった。六月は最近「初登頂チョゴリザからクーラカンリ」と題して本を出版された平井一正支部員から、隊員・隊長として参加し初登頂した山の話を聞いた。七月は文化財の宝庫京都に居る特権として国宝拝観の例会を行っている。今年は四回目で東寺を拝観した。夏以後の山水会は、九月「心肺蘇生術実習」、十月「アフリカ大横断の旅報告」、二月「遭難対策」を予定している。

（森　栄司）

■富山支部

平成七年度は、前年からの念願であった大山町旧河内村播隆上人顕彰碑の横に榎木清水を受ける水鉢が完成し、併せて周辺の排水等の整備で広場が明るくなり、水鉢に落ちる水の音が山里の静けさを保っている。

最近は、この播隆祭（十三回）に一般の人達の参加も増え、旧河内村の人々の中にも若い世代の参加も多くなり、世話役の支部会員達もこの年中行事に張り切っている。

播隆祭後の高頭山への山行は、山草採りの真最中であり、会員も一般参加の人達も、とてもにぎやかな登山である。

同じ五月二十七日、二十八日は北陸三県合同現地集会が福井支部の担当で、深田久弥の郷里の山で、氏の百名山の一つでもある「荒島岳」に支部より七名参加、総勢三十七名での楽しい山行であった。また、六月の例会山行は「東笠山」の自然観察会で（十三名参加）、豊富に残る雪渓を登り、頂上の草原に咲く可憐なヒメシャクナゲに迎えられる。一面のピンクのジュータンのように花で埋まっているが、近づくと所々に穴がある。この場所でしか育たない花を心ない人によって持ち去られたのであろう。これも有峰ダムに入る小口川ルートの開通により、車で周辺の山々に入りやすくなったためであろうか。

七、八月は、岳連の行事もあり、会員の中には別の会に席を置く人も多く、岳連の役職をも兼ていたりでそれぞれ活動をしている。

九月、本部のフィルム・ビデオ委員会との共催で、紅葉の立山・黒部撮影会を、立山でお世話することが出来た。羽田栄治委員長はじめ県外から二十七名、支部八名、支部としては立山全国支部集会以来の県外会員との交流で、夕食の懇親会は銘酒立山の地酒で宴が盛り上がる。羽田委員長の、写真の持つ歴史的・芸術的意義についての講話。ティールームでのカメラ談義が限りなく延々と続いた。

悲しいことに十一月十日にネパールのトレッキングで、雪崩に遭い遭難された方の中に、撮影会に参加された入澤郁夫氏、田邊史氏のお二人がおいでになり謹んでお弔み申し上げます。

十月八日例会山行、寺地山八名参加。十四日、本部での九十周年記念式典六名参加。二十一日、北陸ブロック記念式典が金沢シティ

ホテルで行われ十名参加、翌日医王山での記念山行に参加する。

二十六日、支部会員川田邦夫富山大学助教授の南極観測隊副隊長の壮行会を市内ホテルで開き、多数関係者の参加があった。

十二月、支部晩餐会、二十三名参加、「九十周年記念マカルー登山隊の記録」、「日本山岳会九十年の歩み」のビデオを見ながら支部五十周年に向けて語る。

一月二十五日～二月二十日、岩橋崇至氏写真展（富山支部後援・名水黒部の流れ）が黒部市のコラーレで開かれ、初日には氏の講演もあり盛況であった。

二月の例会、三月役員会と七年度を終えた。

八年度総会で五十周年記念事業が提案され、記念誌の発行もあるのでますます忙しくなりそうだ。

なお支部会員（三九八九）野島三郎氏（平成七年五月二十一日九二歳で死亡）は永く山岳連盟、スキー連盟の副会長を務め、自然保護思想の普及、山岳会の後輩の指導に当り、生涯に渡る写業の中から代表的なものを五十点、遺作写真展として八年六月二十四日～七月三十一日まで富山・魚津の会場で開かれた。（木戸繁良）

■福井支部

当支部は平成三年十一月に発足して以来、五周年を迎えようとしています。北陸三県では福井支部が発足してから、平成四年六月の設立記念山行を近県と北陸三県の合同登山として経ケ岳で開催し、以後持ち廻りで、前日の宿泊所での懇親会が親睦を深めるきっかけとなっています。翌日の合同登山では百年来の知己のような間柄となって効果があり、毎年待遠しい思いをしている会員もいるようです。

本年度は日本百名山の一つ荒島岳で開催し、ブナの新緑が美しく天候にも恵まれ、参加者一同、初夏の一日を満喫しました。

また女性会員が九名となり、山行が活発に行なわれるようになりました。福井支部には若年会員もおりますが、既に他の山岳会で中心的なアクティブ会員なので、本支部においては中高年の会員が中心となって活動しています。総会には顔を出して意見も発表していますので、海外登山を企画してとも思っています。

〈平成七年度の活動報告〉

四月十九日　平成七年度定期総会　懇親会（宮本事務局長宅）　参加者　二十八名

五月二十七～二十八日　第四回　北陸三県合同現地集会　大野市「ロッジギンレイ」

荒島岳登山　参加者　三十二名

六月十七～十八日　乗鞍山　岩ごもり山　三国山　赤坂山　野坂山参加者　六名

七月十四～十七日　利尻山　礼文島（北海道）参加者　五名

八月十二～十六日　悪沢岳～赤石岳～聖岳～光岳（南アルプス）参加者　二名

九月十五～十七日　中央アルプス　台風のため予定変更　参加者五名

十月二十一～二十二日　「北陸ブロック記念式典」日本山岳会創立

九十周年記念登山　金沢シティモンドホテル　医王山　福井支部から参加者　十五名
二月十～十一日　九頭竜スキー場　木無山　民宿茂兵衛にて新年会
参加者　七名
三月十六～十七日　野伏岳～小白山　岐阜県　石徹白　藤尾旅館泊
参加者　六名
役員会で山行や、総会の案件その他を協議。平成七年度は五回開催（支部例会場）
毎月、集会例会（山水会）を第三水曜日に宮本事務局長宅で行なっているが、顔ぶれは大体同じなので折にふれて話しをしている。
（宮本数男）

■関西支部

関西支部の会員は、一昨年度の阪神・淡路大震災の影響もあり、十五名減の四百十二名になった。被災会員は百二十九名（神戸市・芦屋市・西宮市・宝塚市・伊丹市・尼崎市・豊中市・大阪西淀川区在住者）に上り、支部会員の三〇％に達した。
今西壽雄氏（一六四六・関西）が逝去されたことも、昨年度の悲しい出来事の一つであった。元本会々長・前関西支部長の今西壽雄氏は、十一月十五日午前十時三十七分、閉塞性黄疸のため関電病院で亡くなられた。十一月十六日お通夜、十七日羽衣の自宅で密葬された。「お別れ会」が十二月十二日大阪ロイヤルホテルで一時から執り行なわれ、二千余人の方々が参列され故人の冥福をお祈りした。
支部では近く、追悼の支部報を出す予定にしている。
日本山岳会創立九十周年記念行事が、全国各地で行なわれたが、最後の式典として関西・山陰ブロック記念行事が、一月二十七日、東洋ホテル葵の間で、村木会長、九十周年実行委員長・藤平前会長をお迎えし開催された。
式典に引続き、特別講演「エベレスト北東稜」をアタックした日大隊の行動を、神崎忠男氏が、次いで日本山岳会「マカルー東稜」隊の行動が、隊長の重廣恒夫氏によって、スライドを使用して行なわれた。いずれも八〇〇〇㍍の極寒、酸素不足、極度に乾燥した空気、風速四〇～五〇㍍の強風など、厳しい環境での登攀の話であった。
その後、記念フォーラム「高所登山の今日と明日」が、阿部和行関西支部長の司会で行なわれた。日本山岳会は今後どうあるべきか、若手登山家の育成など、問題提起があった。一方では、欧米からエベレストへの登山ツアーが組まれ、今年はエベレスト頂上に六十二人も登頂したという話もあった。この話を聞いて、万全の装備と技術をもってしても、厳しい環境、激しい気象変化で、限界状況に立たされれば、どうなるのだろうかという疑問を懐いた。日本女性の登頂後の遭難というその後のニュースは、この種の登山のメンバーシップの限界を示している。
懇親会に移り、大韓山岳連盟から会長以下五名の参加。北は山形支部の金森さん、南は大分支部の西さんの参加があり、和やかな雰囲気の中で行なわれ、最後に「雪山讃歌」を全員で歌い、万歳三唱で終了した。

翌一月二十八日の記念山行は、淡路島北端にある汝鳴山（三〇四・八メートル）であった。この山は阪神・淡路大震災の震源地、野島断層に近く（江崎灯台から富島までの約一〇キロメートルに渡る断層のズレが確認されている。――中でも野島平林にある貴船神社東端で、東側一・三メートルの隆起、一・七メートルの右ズレを起している）。また、明石海峡大橋（全長約三九〇〇メートル）の架橋工事が一望できることなどから選ばれた。ＪＲ明石駅に、八時四十五分集合し、フェリーで淡路島に渡り架橋見学、汝鳴山登山、野島断層見学をして、十五時頃明石港で解散した。記念登山参加者は式典の約半分の五十七名であった。

（三品武彦）

■山陰支部

近年当支部でのビッグニュースといえば、何といっても前支部長・港叶（みなと・かのう）氏の名誉会員章受章であろう。名誉会員といえば本部役員の歴任者か、いずれにしても中央で活躍した人という印象が強かっただけに、今回私たち支部会員の中から名誉会員が出たことは、我がことのように喜ばしい。しかも発表の場が昨年十月十四日、当会創立九十周年記念式典と重なった晩餐会の席という、またとない晴れ舞台だったから、本人の感激もひとしおだったようだ。

参考までに氏の業績を記すと、大正六年十月九日生まれ。旧米子中学をへて早稲田大学では山岳部に籍を置き、昭和十三年当時の台湾・新高山（玉山）遠征に参加。戦後帰郷して昭和二十三年の伯耆大山北壁大屏風岩初登攀をはじめ、当地方のスポーツ的登山の技術的、精神的主柱となり、昭和二十四年の山陰支部創立と、同二十六年伯耆大山での国民体育大会登山主管へと結びつけた。もちろんそれまでにも当地方の山は、信仰や学術研究、行軍訓練などの目的で登られてはいたが、アルピニズムという登山思潮を最初に当地方に持ち込んだ人として、氏の名前は忘れることができない。今なお当支部の毎月の例会にはほとんど顔を出し、常に前向きの姿勢で私たちの活動を後押しされる。

その私たちの活動だが、四十人に満たぬ小所帯のうえに近年高齢化が目立ち、支部としての業績に凝集されていない。しかし、一応平成十一年を目標に始めた県境踏破も粘り強く続けているし、会員個々には山に関して極めてユニークな活動を続けている者もいる。

また、当支部の活動を特徴づけるものの一つに〝友の会〟の育成がある。今やブームになったかの観のある中高年を中心に、初心者に登山の面白さ、すばらしさを少しでも味わってもらおうと、十三年前から続けているもので、原則として山小屋泊まりの県外への山行と、日帰りの地元の山での紅葉狩りが一回ずつ。毎回数十名の参加があり、この間の参加実人員は優に三百名を超す。参加費の余剰金は積み立てられて、当支部活動費の貴重な財源ともなっている。中には年二回のこの山行だけではあき足らず、有志でさらに長期の登山に出かけたり、遠く海外の山へも足を延ばすようになった。十三回目の今年は三連休を利用して、九月中旬に北ア燕～槍の縦走（別動隊は燕、西穂）を予定している。

来る一九九九年――平成十一年は、当支部の創立五十周年に当たる

ため、その準備にも今年からとりかかった。一応柱として記念祝賀会、記念展、記念誌刊行、記念山行（海外）の四事業を予定。それぞれの責任者による実行委員会を組織し、会員一人ずつの分担も決めた。記念祝賀会には、祝賀山行や山陰観光も含めて、ぜひ全国の会員諸兄姉にも来ていただきたいので、今からお願いしておく。

（小椋凱夫）

■東九州支部

創立九十周年のブロック祝賀集会を、全国トップで開催させていただいてから、この原稿を書いている時点（六月）で早くも一年たった。開催時の記念山行でミヤマキリシマツジが満開だったが、今年は天候のせいで一週間から十日遅れの開花だった。

また、九十周年に「祝砲を撃ってくれた」と冗談めかした硫黄山（九重山群）の噴火は、未だに収まる気配がなく、立ち入り規制が続いているし、地元では万一に備えて災害対策計画の作成や各種の訓練が定期的に実施されている。しかし、規制を無視して危険区域に入る登山者はあとを絶たず、山岳遭難対策協議会や救助隊をあわてさせている。

支部活動の方は、九十周年を終えて本年度は一服入れている感じ。支部会員は六十余名に過ぎず、祝賀集会に少人数ゆえの、それなりのエネルギーを使ったためでもあろうか。さらに、ここ数年、友好関係にある韓国山岳会・仁川山岳会の来県もない。

だが、毎月の定例山行は担当者や事務局の頑張りもあって、順調に消化されている。大分一〇〇山も月例会でほぼ登りつくしたことから、その後は県境の山に焦点を当ててきたが、昨年からは会員に希望の山を聞いての山行計画に切り替えた。その希望がかなり多く出されることは嬉しいことだ。

組織的には、長年にわたって取り組んできた中高年対策から、徐々に若者対策に方向を変えている。その際、大いに役に立つのが九十周年記念の日本山岳会紹介ビデオとマカルー登山の記録ビデオと言ってよい。先日も県高校総合体育大会の登山競技部門の閉会の際に、講演とビデオ上映を依頼された。仕掛人は高校山岳部の指導・顧問をしている支部会員たちで、若い人たちに好評だった。彼らが高校を卒業して大学などに進んだら、本部や各地の支部の門をたたくかもしれない。その時はよろしくお願いしたい。

ところで、九十周年の際、支部は創立三十五周年だった。四十周年はすぐそこである。二十周年も三十周年も、記念集会・山行、記録集・ガイドブックの発行など、それなりの企画を立案・実行してきたが、支部四十周年は二十世紀最後の西暦二〇〇〇年でもある。同時にそれは日本山岳会そのものが、百周年を目指して準備を本格化させるころだ。

そこで、支部四十周年には特別の企画を立てたいと思っている。その際は全国各支部の皆さんに大分への集合をお願いしたいし、支部会員の全員参加のもとで海外へも出掛けてみたい。一服状態とはいえ、本年はそれへ向けてのスタートについた年でもあり、燃焼のエネルギーを蓄える時期でもある。

支部の各種会合の度に、会員の間で話が出るのはそのこと。四十

周年を盛大に、そして若々しく迎えるためには、それを支えるというより、主役となる若い会員が大切だ。いま次々と入会している若い人たちへの期待は大きい。

（梅木秀徳）

■熊本支部

平成七年度の支部総会は四月二十三日、熊本市のＮＴＴ熊本会館に十四名が出席して開催された。役員改選は委員全員（四名）が再任となったが、会計監事は樋口会員に代わり神谷平吉会員が新任された。五月二十七日から三日間、福岡支部主管で開催された屋久島自然観察登山には、四名が参加して雨の宮之浦岳（一九三五㍍）に登り、全国から参集した会員と交歓した。

六月十七日、大分市で開かれた日本山岳会創立九十周年記念の九州ブロック集会（東九州支部主管）と、翌日の九重・平治岳（一六四三㍍）ミヤマキリシマ鑑賞登山には四名が参加した。恒例の夏季例会（ビールパーティ）は八月二十七日、熊本厚生年金会館に十六名が参集して楽しい交歓の一刻を過した。開宴に先立ち馬場博行会員がスライドを使って「マカルー東稜登山報告」を行ったが、苦闘のすえ勝ち取った登頂成功に大きな拍手が湧いた。

十月十四日、東京の新高輪プリンスホテルで開催された九十周年記念晩餐会は、皇太子殿下はじめ七百五十余名の会員が出席して極めて盛会であった。席上、前支部長の奥野正亥氏ら十一名の新名誉会員が紹介された。ご本人はもとより、支部としても名誉なことであり喜びに堪えない。秋季例会は十月二十八日、二十九日の両日にわたり紅葉の五家荘で開催された。泉村樅木の民宿「樅木山荘」に十四名が集まり、名物のヤマメと山菜料理を囲んで懇親会を開く。翌日は生憎の雨だが、厚生林が美しい九州背梁山地の白鳥山（一六三九㍍）に登る。高校教師の川端会員が、オーストラリアとタイの高校女子留学生を連れて来たが、二人とも快活で明るく皆の人気を集めた。

明けて平成八年一月七日の新年晩餐会は、熊本厚生年金会館に新名誉会員の奥野正亥氏ご夫妻をお招きして開催した。奥野さんのご人徳を慕って二十四名もの会員が出席し、和やかな祝宴となった。平成八年度の支部総会は四月二十一日、ＮＴＴ熊本会館に十五名が出席して開催されたが、任期満了となる支部長、副支部長の改選については、委員会で互選できず総会に持ち越された。支部設立四十周年を来年に控え、記念事業の計画や準備もあることから、規約改正はせず特例として本田支部長が留任することになった。また支部設立四十周年記念事業特別委員会の設置と、それに伴う役員人事については次期委員会に付託された。これを受けて六月二日の支部委員会では次の通り決定した。

副支部長　工藤文昭（新任）　神谷平吉（新任）
会計監事　中村恵二（新任）
委員　広永峻一（新任）　丸尾龍一（新任）
特別委員　西沢健一　和仁古昇　門脇愛子　馬場博行
※特別委員会は、熊本支部設立時の会員であり支部顧問の西沢健一会員を代表とし、支部役員全員で構成する。

（本田誠也）

宮崎支部

春夏秋冬、日向路の雨上がりは大気が澄み切って空は青く燦々と太陽が降りそそぐ。国宝のない宮崎唯一の宝は、太陽と自然がいっぱいの風土と自負している。

暮れ泥む大淀川堤防に立つと、北から西南に広がる山々が眺望される。日向灘から長く優美な稜線を中天に向けそびえ立つ尾鈴山、目を徐々に西南に向けると杖木山、国見山、掃部岳、大森岳、七熊山、韓国岳、高千穂峰と連なる。南東に展開される青井岳、雪ケ峰、鰐塚山、朝陳野、荒平山、双石山、花切山、鉢巻山など二十五座余が連なり山すそを太平洋に交えている。一八〇度に展開されるこれらの山は連なり合って長大な稜線をつくり、群青色からやがて勁いパノラマを形づくり夜のしじまにたたずむ。

今、この堤防からあの山は片付いていない、文献の再調査、修正チェック、行政の治山対策と林道開発計画確認、バリエイションルート開拓、登山情報収集と体験、登山道整備状況と危険箇所チェック、完璧な校正といった「みやざき百山」の課題への闘志がわく。反面、百山まであと五十座といった、百山への道が重くのしかかったタメ息が、支部員一人ひとりの心の中に同居している。

宮崎支部発足時に三つの目標を立てた。その一つが、「宮崎百山選定登山とみやざき百山小冊子刊行」。郷土の山を再発見し、一人でも多くの人に宮崎の自然を味わってもらうきっかけになればという願いである。他の二つは、紆余曲折しながら順風に帆を揚げて進んでいる。百山選定と登山は発足から二年余りで完了したものの、百山刊行は遅々として進まない。

八年前からこんな状態を打破しようと「百山の集い」の場を設けた。ようやくエンジンが掛かり始め、昨年七回集い延べ五十五人が議論を重ねた。本年度総会で、毎月第四土曜十三時から十六時までアルコールと雑談抜きでみっちり取り組むことにした。「意志あれば足も軽い」の例えで、カタツムリの歩みでも山頂に立とう。〝宮崎百迷山〟にならないよう今、支部員こぞって燃え上がっている。

県内の百六十八山からピックアップした、百山の持つ個性をどうとらえ引き出すか、多角的にとらえて見る山の深さと、変幻自在する山を表現することの難しさをつくづく味わっている。支部員それぞれの学識・知恵・技術・体験を「みやざき百山」の中に生かし、より新鮮なふるさとの山の情報を足で稼ぎつつ、改訂版を発行することのない「百山」を目指したい。

しかし、「みやざき百山」は遷桧であってもよいのでは…とも考える。お互い山の体験と感性をぶつつけ合い、山の内蔵する素朴な教訓に学びつつ、山を語り合う喜びを共有できる楽しさが保てるからである。

（大谷　優）

会務報告

一九九五（平成七）年六月～一九九六（平成八）年五月

一九九五年度役員・評議員・支部長

会　長　村木潤次郎
副会長　中村純二・斎藤惇生・宮下秀樹
常務理事　大屋悌二・中川武・吉永英明・大谷亮
理　事　松浦祥次郎・伊藤敞・水野勉・南井英弘・堀井昌子・渡邉雄二・溝口洋三・山本宗彦・田邊壽・宇田川芳伸・熊崎和宏・大藏喜福
監　事　川崎巌・石橋正美
常任評議員　小倉茂昶・大森弘一郎・村井龍一・大倉昌身・神崎忠男・重廣恒夫
評議員　藤平正夫・小須田喜夫・松田雄一・穴田雪江・山口俊輔・長尾悌夫・田中弘美・梅木秀徳・中村太郎・吉田宏・長坂博・田邊史・竹内哲夫・宮本数男
支部長　野田四郎（北海道）・松島静吾（青森）・中谷充（岩手）・岡田光行（秋田）・梅津博（山形）・柴崎徹（宮城）・佐久間高男（福島）・五十嵐篤雄（越後）・田中弘美（信濃）・古屋学而（山梨）・大石惇（静岡）・尾上昇（東海）・高木碕男（岐阜）・斎藤惇生（京都）・木戸繁良（富山）・増江俊三（石川）・中村義（福井）・阿部和行（関西）・吉川暢一（山陰）・吉村健児（福岡）・梅木秀徳（東九州）・本田誠也（熊本）・大谷優（宮崎）

理事会は会長、理事、監事、常任評議員によって構成される。

◇六月理事会　一九九五年六月八日　本会会議室

出席者　十八名

▽審議事項

一、福島支部長交替（中島正夫氏から佐久間高男氏へ、五月二十七日支部総会承認）について

二、第三回日本山岳耐久レース「長谷川恒男カップ」（十月七、八日開催）の名義後援について

三、世田谷文学館「『日本百名山』の深田久弥と山の文学展」（九月二十九日～十月八日開催）の名義後援、関係資料借用、「山」への広報文掲載要請について

四、九十周年記念プロック別式典助成費用額の助成限度額、費用支給、その他について

五、創立九十周年記念事業委員の一部変更について

六、役員・委員名簿作成について

七、山研のゴミ有料処理提案について

八、マカルー登山隊一九九五の行動日程、支払い、祝賀会について

九、合同募金の決算書説明と、募金の現況について

十、日本山岳会青年部ムスターグ・アタ山群登山隊一九九五（登山期間七月二十一日～八月二十七日、青年部十名）の名義後援について

以上十議案承認

［報告事項］

一、資料委員会より　資料の寄贈、返却、貸出について

二、HAT―J関連　エベレスト・ウイメンズ・サミット一九九五、第四

回国際交流青少年環境体験登山一九九五、日本大学エベレスト登山隊登頂記念祝賀会について
三、集会委員会より　第十九回若葉会山行、第十九回若葉会山行写真交換会、ビールパーティー、きのこ山行、九十周年記念晩餐会後の親睦山行の日程について
四、九十周年式典委員会より　打ち合わせ日程について
会報「山」六〇三号参照
◇七月理事会　一九九五年七月十三日　本会会議室
出席者　二十五名
▽審議事項
一、松本市立博物館主管特別展「日本アルプスと近代詩歌展」（七月十八日～八月二十日開催）の本会所蔵写真資料複写許可要請について
二、（株）アルパインツアーサービス社「ネパール・ヒマラヤの夕べ」（九月二日～二十九日開催）の本会所蔵十六ミリ映画「マナスルに立つ」借用依頼要請について
三、九十周年実行委員会組織名簿遺漏による、山口俊輔会員の委員追加について
四、越後支部長交替（佐藤一栄氏から五十嵐篤男氏へ、七月七日支部総会選任）について
五、副会長職務代行の順序（①宮下副会長、②斎藤副会長、③中村副会長）確認について
六、一方が終身会員である夫婦会員の年会費について
七、九十周年合同募金現況（七月十三日現在）について
八、マカルー登山隊一九九五の支払いについて
九、ＨＡＴ―Ｊより　第四回国際交流青少年環境体験登山一九九五出場高校教員への、本会からの派遣推薦状要請について
以上九議案承認
［報告事項］
一、定款変更の要請について
二、役員・委員会名簿記載の委員会委員の表示について
三、常務理事会と理事会の分別について
四、本会入会に際する会員の品位維持昂揚について
五、「プラスチック製登山靴の突然破壊に関する安全基準設定についての山岳四団体の要望書」について
六、日本勤労者山岳連盟提案「日本レスキュー協議会規約（案）」について
七、本会内規項目の取りまとめについて
八、名誉会員を囲む会（八月二十三日、ルーム開催）について
九、『山岳』第九十年の編集計画について
十、マカルー峰登山隊一九九五について
十一、九十周年記念事業について
十二、青年部ムスターグ・アタ山群登山隊について
十三、上高地山岳研究所について
十四、図書室について
十五、ルーム夏季休暇について
会報「山」六〇四号参照
◇八月理事会　休会
◇九月理事会　一九九五年九月十四日　本会会議室
出席者　二十三名
▽審議事項

一、山と渓谷社より、当会創立九十周年記念フォーラム広報のための当会所蔵写真複写許可申請について
二、三水会より、「三水会二十周年を迎えて」裏表紙への会章使用許可申し入れについて
三、前田精三会員より、神戸大学八十周年史編集のための当会所蔵報告書複写許可要請について
四、百年史委員会委員名簿遺漏による、南井英弘会員の委員追加について
五、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六に関する四件の許可について
六、平成七年度四月～八月の財務実績、九十周年記念事業の収支見通しについて

以上六議案承認

[報告事項]
一、名誉会員選出について
二、リーダー保険、傷害保険の検討について
三、会長特別表彰の検討について
四、マカルー登山報告の検討について
五、その他
・マカルー登山書類の完成と提出について
・重複図書の扱いについて。会報「山」の合本制作について
・九十周年記念フォーラムの進行状況について
・フォーラム用ビデオの完成について
・海外登山基金委員会の助成金、担当者変更について
・九十周年合同募金現況について
・九十周年式典への委員会、同好会の出展について
・同好会　緑爽会について

会報「山」六〇六号参照

◇十月理事会　一九九五年十月十二日　本会会議室
出席者　二十四名
▽審議事項
一、平成七年度秩父宮記念学術賞推薦について
二、「山」九月号掲載記事の一部（大森薫雄会員「杖をついて歩こう」を新ハイキングクラブ城北支部報告へ）転載許可について
三、（株）キュー・フォト・インターナショナル「パトリック・モローさんを囲む会」（十月二十六日開催）の名義後援について
四、平成七・八年度海外登山基金委員会委員と、助成金について
五、上高地山岳研究所への発電機の設置について
六、各委員会上期予算執行実績について
七、九十周年合同募金現況（十月十二日現在）について

以上七議案承認

会報「山」六〇七号参照

◇十一月理事会　一九九五年十一月九日　本会会議室
出席者　二十一名
▽審議事項
一、一九九八年度国際登山医学会総会名義後援について
二、「田部井淳子展」（福島トヨペット郡山鳴神店ショールーム、十一月二十五日～十二月三日開催）名義後援について
三、岩橋崇至「白頭山写真展～白頭山の四季」・同時開催「朝鮮歴史美術展」（京都市美術館、十月十一日～二十二日）名義後援について
四、日本レスキュー協議会「冬山遭難事故・雪崩シンポジウム」（東京代々木オリンピック青少年総合センター、十二月十六日）名義後援について

五、九十周年合同募金現況（十一月六日現在）について

以上五議案承認

継続審議

六、山岳傷害保険導入について

［報告事項］

一、九十周年記念事業結果報告について

二、九十周年記念事業収支報告について

三、平成七年度上半期監査について

四、総務担当より

・会員名簿発行について

・役員名簿について

・新入会員オリエンテーション（於ルーム、十一月十八日開催）について

・同好会連絡会議について

・理事の同好会名簿閲覧について

五、『山岳』発行について

六、マカルー登山について

七、百年史について

八、自然保護全国集会について

九、青年部より

・山岳部監督会議（於代々木全理連ビル、十一月十八日開催）について

・青年部懇談会（十二月六日開催）について

十、平成七年度山研利用状況について

十一、HAT―Jより田部井淳子代表の総理大臣賞の受賞を祝う会（於日本スポーツマンクラブ、十一月十五日開催）について

十二、財務担当より　平成八年度予算概算要求書について

会報「山」六〇八号参照

◇十二月理事会　一九九五年十二月十四日　本会会議室

出席者　二十二名

▽審議事項

一、岩橋崇至写真展「名水―黒部の流れ」（於黒部市国際文化センター・コラーレ、平成八年一月二十五日～二月二十日）名義後援について

二、日本レスキュー協議会「冬山遭難事故・雪崩シンポジウム」（東京代々木オリンピック青少年総合センター、十二月十六日）名義後援について

三、（株）集英社への槇有恒元会長の遺品撮影・資料閲覧等の許可について

四、植村記念財団からの資料貸出期間延期依頼について

五、委員会の委員追加について（山岳編集委員会　大関義明、山岳研究所運営委員会　堂本暁子）

六、同人シルバータイトルによる一九九七年カラコルム・ガッシャブルムⅡ峰登山の都岳連への推薦状交付要請について

七、九十周年記念事業収支経過について

八、九十周年記念フォーラム海外登山の部の、百周年にむける今後の事業について

九、山岳傷害保険について

十、定款改正について

十一、SSFフォア・オール・ネットワーク加入について

十二、TV番組「驚きもの木二十世紀～もうひとつの植村直己物語」制作協力について

十三、九十周年記念山岳名著復刻版販売期間延長について

以上十三議案承認

会報「山」六〇九号参照

◇**一月理事会**　一九九六年一月十八日　本会会議室
出席者　二十四名
▽審議事項
一、テレビ信州十五周年記念番組「美しき大地と共に―上高地の懐に生きる」への書籍、撮影物使用許可について
二、金沢アウトドアズ・フェスティバル96（石川県産業展示館、四月五日～七日）への協力・名義後援について
三、名誉・永年・終身会員の夫婦会員の会費減額について
四、海外登山基金助成金支給の決定（日本山岳会青年部K2登山隊一九九六）について
五、日本山岳会東海支部ウルタルII峰登山隊）について
六、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六の目的、隊構成、登山日程について
六、山岳傷害保険について
七、委員会委員追加（データバンク委員会　松尾良久、溝口洋三、清水亨）、編成（百年史編纂委員会）について
以上七議案承認
［報告事項］
一、日本山岳会マカルー登山隊の日本スポーツ賞団体「山岳」部門受賞について
二、『山岳』発送について
三、会員名簿について
会報「山」六一〇号参照

◇**二月理事会**　一九九六年二月八日　本会会議室
出席者　二十三名
議事に先立ち、村木会長より、一月二十七日～二十八日関西・山陰ブロックの合同式典で日本山岳会九十周年記念行事が終了したことの報告と、これまでの各委員の協力に感謝する旨の挨拶があった。
▽審議事項
一、（財）地球・人間環境フォーラム制作「世界遺産インド編」への写真貸出について　承認
二、平成八年度収支予算案について　継続審議
三、九十周年記念事業収支状況について　継続審議
四、マカルー登山収支について　承認
五、定款変更について　現況報告
六、二月申請新入会員について　申込み中村哲人ほか十一名　承認
▽討議事項
一、「白神山地世界遺産地域管理計画の運用に対する要望の件」の要望書提出について
［報告事項］
一、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六について　庶務・学習会の報告、登山隊長の挨拶
二、総務担当より　平成七年度事業報告書について
三、指導委員会より　アイスクライミング研修会（八ヶ岳ジョウゴ沢、二月三日～四日）について
会報「山」六一一号参照

◇**三月理事会**　一九九六年三月十四日　本会会議室
出席者　二十名
▽審議事項
一、秩父宮記念スポーツ博物館への貸与資料の貸与期間更新について
二、日本テレビ「午後は○○おもいっきりテレビ」への映像使用許可につ

いて
三、上高地山岳研究所平成八年度運営計画について
四、細則第十一条・第十二条の改定について
五、平成八年度事業計画（案）・収支予算（案）について
六、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六支援トレッキングツアーへの名義後援について

以上六議案承認

〔報告事項〕
一、秩父宮記念学術賞受賞について
二、NMA会長ダワ・ノルブ氏の三月十九日の来室について
三、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六の活動について
四、図書管理について
五、財産目録について

会報「山」六一二号参照

◇**四月理事会**　一九九六年四月十一日　本会会議室

出席者　二十四名

▽審議事項
一、小学館発行誌『サライ』掲載記事へのウェストン関係写真資料の撮影許可について
二、日本テレビ「午後は○○おもいっきりテレビ」へのフィルム貸出許可について
三、（株）講談社辞典作成のための『ナンダデヴィ縦走写真集』の写真貸出許可について
四、定款一部改正について
五、平成八年度総会提出資料について
六、監査報告について
七、九十周年記念事業収支について

以上七議案承認
継続審議

八、指導者賠償責任保険について
九、山岳傷害保険について
十、図書室整理について
十一、委員会委員追加承認について

以上三議案承認

〔報告事項〕
一、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六現況について
二、マカルー登山隊報告書について
三、ポカラ山岳博物館について

会報「山」六一三号参照

◇**五月理事会**　一九九六年五月九日　本会会議室

出席者　十九名

▽審議事項
一、上高地ウェストン祭　感謝状について
二、日本山岳会指導者賠償責任保険について

以上二議案承認

三、日本山岳会の団体傷害保険について
四、図書室の整理と一〇四号室について

以上二議案継続審議

五、図書室・書庫の『山岳』バックナンバー在庫整理について
六、チョモランマ三国合同遠征隊報告書在庫整理について
七、丹水会の同好会承認申請について
八、青森ウェストン祭出席依頼について

以上四議案承認

［報告事項］
一、評議員会について
二、日本山岳会青年部K2登山隊一九九六現況について
会報「山」六一四号参照
◇**支部事務局担当者会議**　一九九六年二月二十四日～二十五日　東京グリーンホテル水道橋
出席者　六十七名
▽二月二十四日　シンポジウム「九十周年を振り返り百周年に向けて夢を語る」
▽二月二十五日　事務局連絡会議
会報「山」六一一号参照
◇**支部長会議**　五月十八日　東京グリーンホテル水道橋
出席者　四十五名
▽議事
一、日本山岳会団体傷害保険について
二、日本山岳会指導者賠償責任保険について
三、全国支部懇談会について
四、第五十回ウェストン祭について
五、名誉会員推薦について
六、中華民国山岳協会来日について
七、支部報告
会報「山」六一四号参照
◇**通常総会**　五月十八日　東京グリーンホテル水道橋
出席者　二千九百六十四名（委任状を含む）
▽審議事項
一、平成七年度事業報告及び収支決算、財産目録承認の件
二、平成八年度事業計画（案）及び収支予算（案）承認の件
三、細則改定の件
四、平成八年度除籍者の件
五、その他

以上五議案承認

会報「山」六一四号参照
◇**主な行事・集会**
▽六月四日　上高地
第四十九回上高地ウエストン祭（信濃支部）
▽六月九日～十一日　粟ケ岳、守門岳
第十九回若葉会山行（集会）
▽六月十七日～十八日　大分市コンパルホール
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　九州ブロック
記念山行　平治岳
▽六月二十七日　ルーム
第十九回若葉会山行写真交換会（集会）
▽六月三十日　ホテルメトロポリタン
マカルー登山隊一九九五　マカルー峰登頂祝賀会
▽七月二日　八王子市郊外、高尾山
第六回写真撮影教室・ハイキング（フィルムビデオ、他）
▽七月八日～九日　アストロパーク天究館
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　京都・岐阜ブロック
記念山行　御池岳、探検の殿堂

▽八月二十六日～二十七日　甲府市古名屋ホテル
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　中部ブロック
記念山行　編笠山、仙丈岳
▽九月二日　ルーム
ビールパーティー（集会）
▽九月十日～十一日　ホテル東日本
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　東北ブロック
記念山行　姫神山
▽九月三十日～十月一日　博士山、高郷村温泉
きのこ山行（集会）
▽九月三十日～十月一日　奥美濃大日ケ岳
探索山行（科学、岐阜支部）
▽九月三十日～十月一日　立山室堂周辺
紅葉の立山・黒部撮影会（富山支部、フィルムビデオ、他）
▽十月十四日～十月十五日　新高輪プリンスホテル
日本山岳会創立九十周年記念式典
九十周年記念晩餐会
記念山行　丹沢・三ノ塔
▽十月十五日　ルーム
一九九五年度自然保護全国集会（自然保護）
▽十月二十一日～二十二日　金沢シティーモンドホテル
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　北陸ブロック
記念山行　医王山
▽十月二十一日～二十二日　春日村笹又君が代公園、阿弥陀堂伊吹山播隆祭（東海支部）
▽十一月十一日～十二日　札幌市共済ビル
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　北海道ブロック
記念山行　樽前山
▽十一月十八日　ルーム
新入会員懇談会（総務）
▽一月十二日～十五日　沼尻
懇親スキー山行（集会）
▽一月二十日～二十一日　名古屋ホテル
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　東海ブロック
記念山行　誕生山
▽一月二十七日～二十八日　東洋ホテル
日本山岳会創立九十周年記念ブロック別式典　関西・山陰ブロック
記念山行　汐鳴山
▽二月三日～四日　八ヶ岳赤岳ジョウゴ沢周辺
アイスクライミング研修会（指導、学生、青年）
▽二月二十三日　ルーム
第二十四回山岳史懇談会（図書）
▽三月一日　ルーム
第二十七回山岳図書を語る夕べ（図書）
▽三月五日　ルーム
山の映画（ビデオ）とお話の夕べ（フィルムビデオ）
▽三月十六日　ルーム
第二十二回新入会員オリエンテーション（総務）
▽三月十六日～十七日　東大秩父演習林
自然観察会（自然保護）

▽三月二十三日～二十五日　菅平・根子岳周辺、四阿山周辺
山岳スキー技術研修会　初中級者対象研修会（指導）
▽四月十三日～十五日　谷川岳周辺
山岳スキー技術研修会　中上級者対象研修会（指導）
▽四月十四日　陣馬山
サクラハイク（集会）
▽五月三日～六日　剱岳周辺
山岳スキー技術研修会　上級者対象研修会（指導）
▽五月十四日　明治大学創立百周年記念大学会館
日本山岳会青年部K2登山隊一九九六壮行会
▽五月二十五日～二十六日　金城山、雲洞庵、浅草岳
第二十回若葉会山行（集会）
▽五月二十五日～二十六日　山梨県須玉町
第三十四回木暮理太郎翁碑前懇親会（山梨支部）

◇主な研究会・講演会・シンポジウム

▽六月十日　ルーム
山菜勉強会（集会）
▽七月七日　ルーム
スキー力学講演会（科学研究）
▽十月二十六日　ルーム
第三回「山を語る」講演会（図書）
▽十二月二日　青山学院大学総合研究所ビル
最近の山岳通信の進歩（科学研究）

◇登山施設、その他登山のための適切な事業

▽上高地山岳研究所の資料室、展示室、宿泊施設等の活用
▽山に関する貴重な資料の収集、保管、管理

◇山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

◇自然保護運動の推進

◇機関紙等の発行

▽『山岳』第九十年（一九九五年）の発行
▽会報「山」第六〇一～六一二号の発行

◇国内および海外山岳団体との連絡、情報交換

▽国内関係団体（日山協、都岳連、HAT―Jその他）との連絡
▽海外登山団体との交流

◇海外登山

▽一九九五年七月二十一日～八月二十一日　日本山岳会青年部ムスターグ・アタ山群登山隊一九九五派遣
▽一九九六年五月二十一日　本山岳会青年部K2登山隊一九九六出発

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Volume 91 No.149 **Issued December 1996**

CONTENTS

My Career in Mountaineering ····· Tadao UMESAO···A21(7)
Mt. MANASLU : Commemorating 40th Anniversary of Successful Japanese Expedition Special Issue ····· A23(20)
① Prologue to Manaslu ····· Yuichi MATSUDA···(20)
② Miscellaneous impressions of one of the Japanese climbers 1953 Expedition ····· Jiroh TAGUCHI···(37)
③ Mrs. Jill Henderson and a Sherpa in Himalayas ····· Masami MURAYAMA···(44)
④ Reminiscences of the conquering climbers of Manaslu ····· (50)
⑤ Chronicles of climbing Manaslu 1950～1996 ····· Tsunemichi IKEDA···(62)
MANASLU : A Chronological Table 1950～1996···Compiled by Tsunemichi IKEDA···A24
The Ascent of Siniolchu ····· Sen HIRAIZUMI···A35(78)
Nanga Parbat : the 7th New Route in North 1995 ····· Hiroshi SAKAI···A36(87)
Whole Party succeeds in reaching the summit of untrodden peak in Mustagh Ata Mountains. ····· A42(94)
Mt. Sara Shuwa 1995, Southeast Ladakh in India ····· Msao OKI···A44(100)
The First Successful Ascent of the Twins : Mt. Gimmigela ····· Taroh TANIGAWA···A46(106)
The First Ultar Ⅱ Ascent and Tragedy 1996 ····· Noboru ONOE···A48(112)
A Symposium in Commemoration of the 90th Anniversary of the J.A.C ····· (125)
The History of Nihon University Mountaineering Club ····· Yuichi MATSUDA···(147)
Photo Exhibition "Japan in the Meiji and Taisho Eras as Walter Weston Saw It" ····· Makoto SUGIMOTO···A51(161)
Book Reviews ····· (166)
In Memoriam ····· (189)
Reports from Branches ····· (236)
Club Notes ····· (253)
Catalogue of Mountain Books ····· (A65)
Fitness Training Method for High Altitude Mountain Climbing ; Importance of Altitude Training and Breathing Practice ··· Masayoshi YAMAMOTO, Ph.D.···A53(A54)

ILLUSTRATIONS

Expeditions ····· (80～81)
Japan in the Meiji and Taisho Eras as Walter Weston Saw It ····· (160～161)
In Memoriam ····· (192～193)

The Japanese Alpine Club
(Founded 1905)
Address : 5-4 Yonban-cho Chiyoda-ku, Tokyo 102

Office Bearers and Committee
1996 (May 1996-April 1997)

President : MURAKI Junjiroh
Vice Presidents : NAKAMURA Junji, SAITOH Atsuo, MIYASHITA Hideki
Honorary Secretary : OHYA Teiji
Honorary Editor : TANABE Hisashi
Honorary Librarian : MIZUNO Tsutomu
Honorary Treasurer : YOSHINAGA Hideaki
Auditor : KAWASAKI Iwao, ISHIBASHI Masami

Committee

HORII Masako
ITO Takashi
KUMASAKI Kazuhiro
MATSUURA Shohjiroh
MINAMII Hidehiro
MIZOGUCHI Yohzoh
MIZUNO Tsutomu
NAKAGAWA Takeshi
OHKURA Yoshitomi
OHTANI Ryoh
OHYA Teiji
TANABE Hisashi
UDAGAWA Yoshinobu
WATANABE Yuhji
YAMAMOTO Munehiko
YOSHINAGA Hideaki

Council

ANADA Yukie
FUJIHIRA Masao
KANZAKI Tadao
KOSUDA Yoshio
MATSUDA Yuichi
MIYAMOTO Kazuo
MURAI Ryuichi
NAGAO Yoshio
NAGASAKA Hiroshi
NAKAMURA Taroh
OGURA Shigeki
OHKURA Masami
OHMORI Kohichiroh
SHIGEHIRO Tsuneo
TAKEUCHI Tetsuo
TANAKA Hiromi
UMEKI Hidenori
YAMAGUCHI Shunsuke
YOSHIDA Koh

Chairmen of Branches

Hokkaido : NODA Shiroh
Aomori : MATSUSHIMA Seigo
Iwate : NAKAYA Mitsuru
Akita : OKADA Mitsuyuki
Yamagata : UMEZU Hiroshi
Miyagi : SHIBAZAKI Tohru
Fukushima : SAKUMA Takao
Echigo : IGARASHI Tokuo
Shinano : TANAKA Hiromi
Yamanashi : FURUYA Gakuji
Shizuoka : OHISHI Atsushi
Tohkai : ONOE Noboru
Gifu : TAKAGI Sakio
Kyoto : SAITOH Atsuo
Toyama : KIDO Shigeyoshi
Ishikawa : MASUE Shunzoh
Fukui : NAKAMURA Tadashi
Kansai : ABE Kazuyuki
San-in : KIKKAWA Yohichi
Fukuoka : MATSUMOTO Yukio
Higashi Kyushu : UMEKI Hidenori
Kumamoto : HONDA Seiya
Miyazaki : OHTANI Masaru

MY CAREER IN MOUNTAINEERING

Tadao UMESAO

Kyoto is an ancient capital of Japan and has produced a refined city culture over a period of 1,200 years. It is a traditional city, but it is also a center of mountaineering, giving birth to many alpinists and explorers. I am one of these mountaineers who grew up in Kyoto.

Kyoto is surrounded by mountains. The northern range of mountains, Kitayama at less than 1,000 meters, is not very high, but is covered with very beautiful forests. Many young people, as I did in my youth, enjoy its natural sites and hiking through these forests.

I was born in Kyoto in 1920, and started mountaineering when I was twelve. When I entered high school, I visited other areas such as the Japan Alps. Later I underwent basic training as a mountaineer, including summertime mountain climbing and rock-climbing. I also climbed winter mountains and practiced mountain skiing hard. I was aiming to become an all-round climber, ever since I was influenced by the British alpinist, Winthrop Young's "The Complete Mountaineering."

In 1940, when I was twenty, I climbed a Korean mountain, Paektu-san bordering on the north eastern part of China. Francis E. Younghusband, a young British officer belonging to an Indian regiment, had already conqured this mountain in 1886 from the Chinese side. Then in 1930, the Kyoto University expedition reached its summit, for the first time in winter. Because of World War Ⅱ, climbing Paektu-san was prohibited by the government around 1940, but we were given tacit approval. As we were coming down along the north side, we unexpectedly discovered the origin of the Second Sungari River. We walked through the deep forest for six days and finally reached the border garrison station. Although it was only a short trip, I experienced a great pleasure walking in the midst of nature. I have no doubt that this was the beginning of my career as an explorer. In the winter of that year, I traveled through the tundra in Sakhalin using a dog sledge and climbed the North Eastern Mountains, since I was plannning to make an Antarctic expedition in the near future.

In 1941, I entered Kyoto University and majored in zoology. While at the university I underwent expeditionary training under the guidance of Dr. Kinji Imanishi. I took part in a training program on the Ponape Island and other islands of Micronesia in that year. This training program was as hard as that of a military academy.

In 1942, I became a member of the university's expedition party to Greater Khingan Mountains in northeast China. During this trip to the bank of the Amur River, we had to depend on the stars in order to determine our location, since there were no maps available of that great forested region.

Like other alpinists, our goal was also to conquer the Himalayas. However, because of the war getting more intense at that time, this was impossible. Since Japanese expedition parties were allowed to go as far as Mongolia, it became an alternative destination for Japanese mountaineers. I went to Mongolia with Dr. Imanishi, when he became the Chief of the Northwest China Research Institute (located in present Zhangjiakou, Hopeh).

When the war ended in 1945, we returned to Kyoto and started preparing for a new expedition. I was a graduate student at Kyoto University. After the signing of the peace treaty at San Francisco, it became possible for us to go to the Himalayas. Our aim from the beginning had been to climb a peak higher than 8,000 meters, so we selected Mt. Manaslu, because there were only a few expedition records regarding this mountain at the time. There were several expedition attempts since the first trip by our reconnaissance party to Manaslu in 1952. It was finally conqured by Toshio Imanishi and his party in 1956.

I was forced to abandon my dream of climbing Mt. Manaslu, because I came down with tuberculosis. After spending two years under medical treatment, I was again selected to become a member of the university's scientific expedition to Karakoram and Hindukush, and visited Pakistan, Afghanistan and Iran. We discovered a Moghol village, which had been thought to be located somewhere in west Hindukush. These Moghols seemed to be the descendants of the Mongolians who had fortified the defense of the frontier of Il Khanate in the thirteenth century.

During the period between the years 1957 to 1958 I visited Thailand, Cambodia, Vietnam and Laos to conduct biological research, as part of a team made up of six people, using three Jeeps. During this expedition we climbed Mt. Doi Inthanon, the highest peak in Thailand. Our next plan was to climb Hkakabo Razi, the highest peak in Burma, but we could not obtain permission from the Burmese government.

In addition, I have also climbed Mt. Kilimanjaro on the border between Tanzania and Kenya, during a scientific expedition to South Nilots Datoga pastoralists' village. Unfortunately, I could not reach the final peak because I injured my leg.

I think my career as a mountaineer leaves much to be desired, so I was honored to be recommended as an honorary member of the Japanese Alpine Club in October 1995.

Iassume they took into consideration my experience in conducting expeditions, because it is said that this club posseses, both, the characteristics of the Alpine Club and of the Royal Geographical Scoiety in England.

Mt. MANASLU

COMMEMORATING 40TH ANNIVERSARY OF SUCCESSFUL JAPANESE EXPEDITION SPECIAL ISSUE

It is 40 years since the Japanese Alpine Club conquered Mt. Manaslu for the first time. This special issue celebrates the special occasion in our club's history.

① Prologue to Manaslu……Yuichi Matsuda

Shortly after the end of World War Ⅱ, when Japan had not established any diplomatic relations, there was a Japanese with a dream to climb in the Himalayas ; this was Dr. Eizaburo Nishibori. This is the story of how he obtained permission to go to the Himalayas and why he chose to climb MANASLU.

② Miscellaneous impressions of one of the Japanese climbers of MANASLU in 1953. ……Jiroh TAGUCHI

③ Mrs. Jill Henderson and a Sherpa in the Himalayas. …… Masami MURAYAMA

④ Reminiscences of the conquering climbers of MANASLU.

⑤ Chronicles of climbing MANASLU 1950～1996. ……Tsunemichi IKEDA

Summary of Mrs. Henderson :

Jill Henderson was born in 1903 in Stanstead, Essex, England. She studied economics at Oxford. Jill Henderson first met her husband when she went to India to visit her sister who was married to a tea planter in Calcutta. The Hendersons were married in 1929.

Jill Henderson's daughter, Ann, informed us that her mother's real name was Mary, but when she married Jack she was then called Jill, after the well-known nursery rhyme "Jack and Jill". After their marriage the Hendersons moved to a tea plantation in Bengal, where they met a climber named Symthe who advised them to move to Darjeeling, which they did. It was here that they came to know about the Sherpas, men who earned their living by being guides into the Himalayas.

Jack and Jill Henderson took a protective interest in the Sherpas when they discovered that these men had no official protection or security. The couple formed an insurance for the Sherpas Jill, in particular, felt close to the Sherpa people. After the war few people were climbing the mountains, but gradually there was a return of climbers and Jill Henderson acted on the Sherpas behalf, securing their income and finally she set up a Sherpa union.

The Hendersons eventually returned to London and after her husband's death she went to South Africa and lived in a bungalow surrounded by sugar cane. Four days before her 88th birthday, on March 24, 1991, Jill died of a heart attack. Her daughters were with her at the time of her death.

MANASLU : A Chronological Table 1950—1996

Compiled by Tsunemichi IKEDA

1950 H. W. Tilman and his party made a reconnaissance of Manaslu from Bimtakhotii in the Dudh Khola valley in May. Three months later, after an unsuccessful attempt on Annapurna 4, they returned to Bimtakhotii. J. O. M. Roberts who crossed over Larkya Bhanjyang pass reported that he found a possible route to the summit plateau of Manaslu by the northeast.

1952 A Japanese reconnaissance party of six, led by Kinji Imanishi, also examined the western side of the mountain after an unsuccessful attempt on Annapurna 4 in autumn. They, then crossed over Larkya Bhanjyang pass and made it to base camp above Sama Village. They stepped in to the Manaslu Glacier and reached just below the Naike Col to find their route up the NE Face would be the most possible line to the summit plateau. They also reached a 5275m point on the E Ridge and observed the SE Face which seemed to be impossible.

1953 A 15-member Japanese Alpine Club party, led by Yukio Mita, made the first attempt to the NE Face in spring. BC was established on April 12 on the left bank of the Manaslu Glacier at 3850m. On June 1, after making nine camps, Kiichiro Kato, Jiro Yamada and Shojiro Ishizaka made the summit bid but retreated at the highest point of 7750 m.

1954 A 14-member Japanese Alpine Club party, led by Yaichi Hotta, planned the second bid by the same route in spring. At Sama they faced trouble : the villagers refused their entrance to the mountain, and the expedition had to withdraw to the Ganesh Himal. They made an unsuccessful attempt to Ganesh Himal I by the Thoro Gompa Glacier.

1955 Eizaburo Nishibori and Iwao Naruse went to Kathmandu in spring to negotiate for permission to climb Manaslu in autumn of 1955 and spring of 1956. A 3-member advance party, led by Katsuro Ohara, could pass through Sama without any trouble and reconnoitered as far as Naike Col in autumn.

1956 A 12-member Japanese Alpine Club party, led by Yuko Maki, finally made the first ascent of Manaslu in spring. From the North Col to the plateau, they took a little bit different line from the former attempt and made C 6 at a 7800 m point on the summit plateau. On May 9, Toshio Imanishi and Sirdar Gyalzen Norbu reached the summit. Two days later on the 11th, Kiichiro Kato and Minoru Higeta also made the summit. It was the first 8000 er for the Japanese climbers.

1970 A 2-member Japanese party, led by Satoshi Aoki, reconnoitered the W Face of Manaslu in autumn. They entered the Domen Khola valley to find a possible line on the NW

Spur which merges into the western edge of the summit plateau.

1971 An 11-member Japanese Tokyo party, led by Akira Takahashi, made the first ascent of the NW Spur in spring. They advanced six camps on the steep and difficult spur and on May 17, Kazuharu Kohara and Motoki Tanaka reached the summit. It was the second ascent of the mountain.

1971 An 8-member Korean party, led by Ho-Sup Kim, attempted the Japanese route on the NE Face in the same season. On May 4, Ki-Sup Kim fell to his death at a 7600 m point and they abandoned the summit.

1972 A 9-member Austrian party, led by Wolfgang Nairz, made the first ascent of the SW Face by the Thulagi Glacier in spring. They climbed the route without oxygen and on April 25, Reinhold Messner from South Tyrol reached the summit alone. He was caught by a terrible storm on his way down to the top camp and finally returned there after a desperate struggle. Franz Jaeger and Andy Schrick were lost in the storm on the summit plateau.

1972 A 12-member Korean party, led by Jung-Sup Kim, met with a disaster on the NE Face route in the same season. On April 10, C 3 at 6500m was overwhelmed by a huge avalanche. Five climbers including the leader and Kazunari Yasuhisa from Japan with ten Sherpas perished. The highest point reached was 6950 m.

1973 An 8-member West German party, led by Gerhard Schmatz, made the second ascent of the Japanese route on the NE Face in spring. After advanced five camps, the leader Schmatz, Sigi Hupfauer and Urkien Sherpa reached the summit on April 22.

1973 A 12-member Spanish party, led by Jaume Garcia Orts, unsuccessfully attempted the NE Face route in autumn. The climb was abandoned after their C 1 and C2 had been swept by avalanches between October 10 and 13. The highest point reached was 6100 m.

1974 A 13-member Japanese Ladies party, led by general leader Kyoko Sato, made an attempt on the E Ridge. After reaching a high point of 7000 m they shifted their plan to repeat the original route on the NE Face. On May 4, Naoko Nakaseko, Masako Uchida, Mieko Mori and Jambu Sherpa reached the summit. It was the first female ascent of any 8000er. Next day on the 5 th, Sadako Suzuki of the second team fell to her death between C 4 and C 5. Her body could not be found.

1975 A 12-member Spanish party, led by Jaume Garcia Orts, succeeded in repeating the NE Face route in their second attempt after 1973. On April 26, Gerald Garcia, Jeronimo Lopez and Sonam Sherpa reached the summit.

1976 A 19-member Korean party, led by Jung-Sup Kim, attempted the NE Face route in spring. They advanced five camps and reached a 7800 m point but abandoned the summit after the leader and the climbing leader Kyoung-Bae Kim had been injured by an avalanche on May 5.

1976 A 20-member Iranian-Japanese party, co-led by Mohammed Khakbiz (I) and Kohei Watanabe (J), repeated the NE Face route in autumn. On October 12, Jun Kageyama (J),

J. M. Assadi (I) and Pasang Sherpa made the summit.

1977 A 9-member West German party, led by Gerhard Lenser, failed on the NE Face route in spring. They established three camps but abandoned the summit at a 6780 m point due to adverse weather and avalanches.

1977 A 5-member French party, led by Jean Frehel, attempted the E Ridge in a semi-alpine style push in autumn. Pierre Beghin and Thiery Leroy who had reached 7560 m on October 26 were badly frostbitten and evacuated from BC to Kathmandu by a helicopter.

1978 An 11-member American party, led by Glenn Porzak, failed on the NE Face route in spring. The expedition was abandoned due to heavy snow falls after making four camps. The highest point reached was 7315 m.

1978 Seiji Shimizu and Yasuo Kato from Japan attempted a light weight ascent on the NE Face route in autumn. The pair, after established five camps assisted by six Sherpas, made the summit bid on October 7 but retreated at a 8000 m point by the waist-deep snow on the plateau.

1979 A 6-member Italian party, led by Lorenzo Massarotto, narrowly escaped from a disaster in spring. They established four camps on the NE Face route. On May 5, C 4 at 7350 m was overwhelmed by an avalanche and two climbers and two Sherpas were buried under the snow. They luckily evacuated themselves, however, all the four were badly frostbitten. Later on the 10 th, other climbers reached a high point of 7500 m.

1979 A 14-member Argentine party, led by Guillermo Vieiro, also avalanched on the same NE Face route in autumn. On October 9, Edgardo Jose Porsellana was killed and the expedition was abandoned at a high point of 6560 m.

1980 A 7-member Korean Dong-Guk University party, led by In-Jung Lee, repeated the NE Face route in spring. They made a rapid progress and established a top camp at 7500 m on April 21. Summit bids were failed twice and finally on 28 th, Dong-Hwan Son, Sherpas Ang Pasang and Ang Zawa made the summit. It was the first Korean ascent of the mountain.

1980 A 9-member Polish party, led by Janusz Ferenski, made the first attempt on the S Ridge by the Punggyen Glacier in spring. They advanced two camps on the glacier but the climb was prevented by frequent avalanches. The expedition was abandoned on May 17 at a high point of 6550 m.

1980 A 7-member Austrian party, led by Hanns Schell, attempted the NE Face route in autumn. On October 14, three climbers including the leader and four Sherpas reached a 7400 m point beneath the edge of the summit plateau but the climb was abandoned at the point.

1980 A 12-member Czechoslovak party, led by Dina Sterbova, originally planned to attempt the S Ridge and shifted their route on the NE Face in autumn. They established four camps up to 6900 m and three women and a man reached a 7200 m point but abandoned the summit on October 16.

1981 A 28-member West German party, organized by Hauser Ekskursionen International on commercial basis, climbed the NE Face route in spring. The expedition was consisted of two groups; a 13-member party was led by Hans von Kaenel and a 15-member party was led by Bernd Schreckenbach. They advanced five camps up to 7450m and sent 13 climbers and two Sherpas to the summit in three batches. The summitters were; the leader von Kaenel, Juergen Mecke and Wangchu Sherpa on May 7, Anderl Loferer, Karl Horn, Fredy Graf, Hans Zebrowski and Hansjoerg Mueller on the 9th, Walter Heimbach, Ruediger Schleipen, Peter Woergoetter, Sepp Millinger, Peter Weber, Stefan Woerner and Pasang Sherpa on the 19 th. Woergoetter and Millinger made the first ski descent from the summit and Loferer at the age of 62 was the oldest person ever to stand on the summit of any 8000 er.

1981 A 4-member French party, led by Pierre Beghin, made the first ascent of the W Face by the Domen Khola valley in autumn. They climbed the route in semi-alpine style with only two fixed camps and on October 7, the leader Beghin and Bernard Muller reached the summit after bivouacking at 7400 m. Next day on the 8 th, Gerard Bretin also made the summit bid but retreated at the edge of the summit plateau.

1981 Yasuo Kato, Takashi Ozaki and Masaaki Tomita from Japan made a light weight ascent of the NE Face route in autumn. The trio advanced three camps in cooperation with four Sherpas within ten days after BC and on October 12, Ozaki made the summit alone. Two days later on the 14 th, Kato and Tomita also made the summit.

1982 A 6-member Spanish party, led by Enric Font, met with a disaster on the NE Face route in spring. On May 10, the leader Font and Pere Aymerich made the summit bid and retreated from a 7600 m point. They spent the night at C 5 (7400 m) and radioed that they would descend because of shortage of foods. Next morning, however, they did not respond to the radio calls. On the 12 th when the weather was recovered, four members at C 2 found a huge avalanche had eliminated C 5.

1982 A 14-member French-Italian party, led by Louis Audoubert, repeated the NE Face route in autumn. On October 10, the leader Audoubert and Nawang Tenzing Sherpa set out their top camp at 7450 m and reached the summit.

1982 A 5-member Chamonix Guide party of France, led by Jean-Paul Balmat, abandoned the E Ridge at a high point of 6200 m in the same season. They, then intended to climb the NE Face route where the French-Italian party had been active and made C 1 at Naike Col. Although the leader Audoubert accepted Balma's party to try the same route, the liaison officers insisted them to get the approval by the authority in Kathmandu. Balmat and his party had to wait for six days and got the answer "no", after all.

1982 A 10-member Himalayan Association of Japan party, led by Noboru Yamada, attempted the first winter ascent by the NE Face route in December. On the 18 th, Takashi Sakuma, Fuji Tsunoda and Hiroshi Aota made the summit bid but prevented by strong wind at 7650 m on the plateau. On the way down, Sakuma fell to his death.

1983 A Yugoslav party, led by Vinko Mroevec, attempted the S Ridge by the Thulagi Glacier in spring. On April 24, Jernej Zaplotnik and Ante Bucan were killed by an avalanche at a 4500 m point and the expedition had to abandon the climb. The highest point reached was 7100 m.

1983 A 9-member West German party, led by Guenter Haerter, also made an attempt by the same route in autumn. They proceeded to C 4 at 7400 m and made the summit bid on October 18 but retreated at a 7500 m point because of shortage of climbing gears. They, then shifted to the Austrian route on the SW Face and climbed in alpine style. On the 22 th, the leader Haerter, Herbert Streibel, Hubert Wehrs, Hermann Tauber, Sherpas Ang Dorje and Nima Rita made the summit after two bivouacs at 6600 m and 7400 m. It was the second ascent of the route.

1983 Young-Ho Huh from Korea climbed the NE Face route in autumn. He established three camps and fixed some ropes assisted by two Sherpas and made the summit bid alone. He, once prevented at a 7700 m point on October 8, set out BC on the 19 th and got to the summit three days later. He met Haerter and his party near the summit on his way down.

1983 A 5-member Austrian party, led by Wilfried Studer, attempted the E Ridge and failed in autumn. The highest point of 7400m was reached by the leader Studer and Manfred Kaessler on October 7.

1983-84 An 11-member Polish party, led by Lech Korniszewski, made the first winter ascent of the mountain by the SW Face. Their progress was delayed by the fatal accident of Stanislaw Jaworski who fell to his death because the fixed rope was cut down by falling stones on December 12. They only could established three camps within the month. On January 11, Maciej Berbeka and Ryszard Gajewski sneaked out in a break of high wind and made the final camp at 7700 m. Next day they struggled for five hours to climb the last 450 m and reached the summit before noon. It was the second winter ascent of 8000 er by Poles after Mt. Everest in 1980.

1983-84 A 4-member Canadian party, led by Alan Burgess, also attempted the winter ascent by the NE Face route. They had stocked C 1 at Naike Col in November, however, the summit bid by the leader and his brother Adrian was prevented by high wind on December 10. The highest point reached was 7100 m.

1984 A 4-member Yugoslav party, led by Ales Kunaver, made the fourth ascent of the SW Face in spring. They intended to climb the S Ridge and the SW Face simultaneously, but tried the latter only. They advanced three camps and on May 4, Stipe Bozic and Viktor Groselj made the summit after two bivouacs. It was only 18 days since they established BC.

1984 A 12-member West German-Swiss party, co-led by Guenter Strum and Hans Eitel, repeated the NE Face route in spring. The summit was reached by Marcel Ruedi and Erhard Loretan on April 30, Michael Dacher and Fritz Zintl on May 7, and Norbert Joos, Wolfgang Schaffert, Rudolf Schaider, Guenter Strum, Sherpas Ang Chapal and Wangyel on the 11

th.

1984 An 8-member Polish party, led by Janusz Kulis, made the first ascent of the S Ridge by the Punggyen Glacier in autumn. They spent two weeks to fix ropes to reach the col between Manaslu and Peak 29 and extended their ropes to a 7400 m point. The summit bid was made by four climbers and Krzysztof Wielicki and Aleksander Lwow made the summit on October 22.

1984 A 6-member Italian party, led by Cesare Cesa Bianchi, failed on the NE Face route in autumn. The highest point reached was 7500 m.

1985 An 8-member Austrian party, led by Wilfried Studer, made the first ascent of the E Ridge in spring. They avoided the upper portion of the ridge and made a traverse to the north and gained the summit plateau. On April 22 at 22:00, the leader Studer, Rudi Meyerhofer and Ang Kami Sherpa set out their top camp at 6500 m and the two except Meyerhofer got to the summit next afternoon. The second summit bid on May 4 was made by the direct route to the East Pinnacle by Christian Gabl, Anton Schranz and Thomas Juen but was prevented at a 7300 m point. On their way down, Juen was swept by an avalanche and fell to his death.

1985 A 9-member Japanese Aomori party, led by Iwao Tsushima, attempted the E Ridge in autumn. They established C 3 at 6300 m beyond the crux of the ridge but abandoned the summit because of bad weather which lasted for over a week from October 8.

1985 A 7-member Yeti Dojin party of Japan, led by Yoshimichi Furuhata, attempted a ski descent of the NE Face route in autumn. They established C 3 at 7200m on October 23, however, C 2 at 6400 m was overwhelmed by an avalanche two days later and Nima Norbu Sherpa was killed. The expedition was abandoned.

1985 A 7-member Spanish Party, led by Felipe Uriarte, also failed on the NE Face route in the same season. Their high point was only 6300 m.

1985 Noboru Yamada and Yasuhira Saito made the second winter ascent of the mountain by the NE Face route in alpine style in December. They set out BC on the 5th and, after three bivouacs at 5350 m, 6100 m and 6850 m, made the first summit bid on the 9th but were prevented by high wind at a 7200 m point. They, once returned to BC, started again on the 11 th. Although the snow fall forced them to spend two nights at a 6100 m point, they made the summit on the 14 th after one more bivouac at a 7050 m point. Excellent snow conditions on the summit plateau helped them to move quickly.

1986 A 16-member West German-Austrian party, led by Michael Dacher, abandoned the summit by the NE Face route in spring. On May 3, Wilhelm Kleiber was lost below C 4 and Dieter Oberbichler fell to his death at a 7200 m point on his way down from C 4. The expedition was abandoned on May 11.

1986 A 10-member Colombian-Polish party, led by Eduardo Gomez, failed on the NE Face route in autumn. They established C 4 at 7250 m on October 31, however, bad

weather prevented their progress in November.

1986 A 13-member Yugoslav party, led by Jovan Popovski, made the first attempt on the SE Face by the Punggyen Glacier in autumn. They abandoned the climb at a high point of 7400 m.

1986 A 5-member Polish-Mexican party, led by Jerzy Kukuczka, climbed a new route on the NE Face in autumn. They first attempted the Austrian route on the E Ridge and was defeated at a 7750 m point in late October. They switched the route to the direct line to the East Pinnacle and the leader Kukuczka, Artur Hajzer and Carlos Carsolio set out their BC on November 5. The trio climbed in alpine style and gained the summit plateau after making bivouacs at 5500 m, 6300 m, 7300 m and 7600 m. On November 10, Kukuczka and Hajzer made the summit while Carsolio stayed at the final bivouac due to his frostbitten hands. Next day the trio descended the original NE Face route and completed the first traverse of the mountain.

1987 A 6-member Polish-Czechoslovak-West German party, led by Wojciech Szymanski, failed on the SE Face by the Punggyen Glacier in spring. They, after acclimatized on the NE Face route, the Polish trio attempted the face alone. Krzysztof Pankiewicz and Ludwik Wilczynski, climbing in alpine style, reached a 6800 m point on May 20 after three bivouacs. However, the 350 m of rock band above was covered by unstable snow and they retreated.

1987 Enric Basss and Francesc Barcelona of Spain attempted the NE Face route with only two Sherpas in spring. They established C 2 at 5600 m on April 8, but the camp was destroyed by an avalanche a few days later and they abandoned the climb.

1987 A 20-member Austrian party, led by Arthur Haid, repeated the NE Face route in autumn. On October 7, Walter Hauser, Johann Etschmayer and Lhakpa Sonam Sherpa got to the summit.

1987 A 15-member Japanese Aomori party, led by Seigo Matsushima, failed on the Austrian route on the E Ridge in autumn. They reached a 6300 m point on October 17 and established C 3, however, the camp was buried by heavy snow fall. On the 25 th, they reconstructed C 3 and reached a 6500 m point three days later. However, Ichigi Kudo who descended to BC from the highest point, was attacked by active cerebral blood vessel disorder and died. The expedition abandoned.

1988 Andrzej Machnik of Poland and Andrew Evans of America made an attempt on the NE Face in alpine style in March. They were defeated twice by heavy snow falls on the 8th and 12th. The highest point reached was 5400 m.

1988 A 6-member Italian party, led by Roberto Pe, failed on the NE Face route in spring. Their highest point was 7050 m on May 1.

1988 A 7-member Swiss party, led by Toni Spirig, Made the second ascent of the Austrian route on the E Ridge in spring. They established C 2 at 6800 m and on April 30,

Beda Fuster, Richard Ott and Ursula Huber made the summit bid. The trio bivouacked at a 7500 m point and reached the summit next day. The second bid on May 10 by the leader Spirig, Ueli Stahel and Pierre-Andre Levet was defeated at a 7600 m point by bad weather.

1988 A 12-member Spanish party, led by Antonio Lopez, repeated the NE Face route in autumn. Juan Agullo and Ang Lhakpa Sherpa got to the summit on October 25.

1988 Hiroshi Hori and Junji Kurotaki of Hirosaki University from Japan attempted the same route in the same season. On October 20, the leader Hori and Motilal Gurung set out BC for their summit bid together with the Spanish party. The pair abandoned their climb at a 7500 m point on the 24 th.

1989 An 8-member Esprit d'Equipe party, led by Benoit Chamoux of France, repeated the Austrian 1972 route on the SW Face in spring. They first planned to climb the S Ridge by the Thulagi Glacier, however, avalanche-prone slopes forced them to choose the SW Face as an alternative. All the eight climbers and a Sherpa reached the summit in May. They were; the leader Chamoux and Pierre Royer on the 9 th, Soro Dorotei and Josef Raconcaj on the 10 th, Frederic Valet and Yves Detry on the 11 th, and Alan Hinkes, Mauro Rossi and Tilta Tamang on the 12 th.

1989 A 6-member American-Spanish party, led by Keith Brown, ended in a tragedy on the NE Face in spring. On May 7, when three climbers were headed for C 5 at 7280 m, Santiago Suarez slipped at a 7250 m point and fell 250 m to his death.

1989 A 6-member Italian party, led by Oscar Piazza, failed in an attempt on the E Ridge in spring. The highest point reached was 7300 m.

1989 A 3-member British party, led by Mark Dixon, attempted the SW Face in semi-alpine style in autumn and failed. The leader Dixon and Adrian Parson reached their highest point of 7000 m on October 27.

1989 A 13-member American party, led by Adrian Burgess, failed on the NE Face route in autumn. Their highest point of 7060 m was reached on October 25.

1989 A Austrian-West German-Swiss party, led by Horst Frankhauser, also failed on the NE Face reaching 7300 m on October 10.

1989 A 4-member Himalaya Dojin party of Japan, led by Masaaki Fukushima, also failed. They reached 7400 m on the NE Face route on October 17.

1989 A 3-member Spanish party, led by Carles Gel, reached only 6000 m on the same route in September.

1990 A 9-member American party, led by Donald Goodman, met with a disaster on the NE Face route in March. On the 27th, Nancy Jackson, Charlie Schertz and Nima Wangchuk Sherpa, who were descending from C 1 to BC, were buried by an avalanche and killed. The expedition was abandoned at the highest point of 4990 m.

1990 A 6-member Italian party, led by Fausto De Stefani, climbed the same route in spring. On April 26, the leader De Stefani got to the summit alone.

1990 A 6-member Swiss-French party, led by Dominique Neuenschwander, attempted a ski descent of the same route in spring. They abandoned the climb at 6000 m on April 29.

1990 A 12-member Spanish party, led by Juan Fernando Azcona, failed on the NE Face route in autumn. The highest point of 6400 m was reached on October 1.

1990 An 8-member Kazakhstani party, led by Kazbek Valiev, attempted the SE Face in autumn. They established a high camp at 7000 m on October 5 and next day, Murat Galiev, Grigori Lunyakov and Zinur Khalitov climbed the rock band. They made a rapid progress and when they gained five pitches, a sudden slip of the leading climber resulted in all members' fall and their deaths.

1990 A 6-member British party, led by Ron Rutland, failed on the NE Face route in December. Their highest point was 6000 m on the 10 th.

1990-91 Eric Monier of France attempted a solo ascent of the SW Face in winter. He reached a 7950 m point on the summit plateau on January 6 but intense cold and high wind prevented him to continue to the summit. He safely descended to a 6000 m point by the evening and survived.

1991 A 5-member Swiss party, led by Franco Delatorre, abandoned their climb at a 6450 m point on the NE Face in spring.

1991 A 15-member Anglo-Irish party, co-led by Dawson Stelfox and Frank Nugent, also failed on the NE Face route in spring. They only reached at a 6100 m point on April 27.

1991 A 12-member Italian-German party, led by Hans Kammerlander, attempted the NE Face and lost two climbers in spring. On May 10, Kammerlander, Friedl Mutschlechner and Karl Grossrubatscher set out their C 2 at 7000 m for the summit bid but only Kammerlander reached a 7500 m point and retreated. On the way down to C 2, Grossrubatscher was found dead near the camp. Kammerlander and Mutschlechner joined at C 2 and continued to descend. When they reached some 100 m above C 1, a sudden thunder storm came in and Mutschlechner was killed by lightning.

1991 A 9-member Ukrainian party, led by Vladimir Shumichin, made an attempt on the SE Face in spring. They advanced three camps and reached a 7200 m point. The route above was difficult and they had to shift to the Polish route on the S Ridge on April 24. Aleksei Makarov, Igor Svergun and Viktor Pastuch set out to the climb in alpine style on May 1 and got to the summit on the 6th. They descended the NE Face route with two more bivouacs and completed the traverse of the mountain.

1991 A 7-member Spanish party, led by Antoni Llasera, failed on the NE Face route in autumn. The highest point of 7900 m was reached on October 6.

1991 A 9-member Italian party, led by Oreste Forno, also failed on the NE Face. The highest point of 7100m was reached twice on September 28 and October 8.

1991 An 18-member Swiss party, led by Bruno Jelk, sent two climbers to the summit by the NE Face route in autumn. On October 25, Mauro Ferrari and Horst Brantschen reached

the summit.

1991 A 7-member American party, led by Austin Weiss, attempted the SW Face in autumn. Their summit bid on October 22 was prevented at a 7800 m point.

1992 A 10-member Korean party, led by Tea-Kyu Park, climbed the NE Face route and sent two members to the summit in autumn. On September 25 at 18:00, Young-Cheol Lee and Nawang Phurba Sherpa reached the summit. On their way down they had to bivouac at a 7900 m point and were severely frostbitten and evacuated from BC.

1992 A 12-member International party, led by Krzysztof Wielicki, also climbed the same route in the same season. On September 28, the leader Wielicki, Marco Bianchi and Christian Kuntner made the summit and found that the steps of the Korean summitters three days ago stopped at the fore summit which located some 180 m away from the main summit. The second bid team of two were killed by separate accidents. Sylwia Domowska fell to her death at a 7200 m point on October 2 and Sven Vermeiren also fell to his death on his way down to C 2 next day.

1992 A Canadian party, led by Michael Galbraith, also attempted the same route. Their summit bid on October 1 was prevented at a 8050 m point.

1993 An 8-member Austrian party, led by Arthur Haid, repeated the NE Face route in spring. Josef Brunner, Gerhard Frossman, Josef Hinding and Michael Leuprecht made the summit on May 2.

1993 An 11-member Italian party, led by Paolo Paglino, repeated the SW Face in autumn. On October 13, Silvio Mondinelli got to the summit alone.

1993 A 10-member Austrian party, led by Sepp Inhaeger, climbed the NE Face route in autumn. The leader Inhaeger reached the summit alone on October 15.

1993 A 9-member Russian party, led by Valery Karpenko, also made the summit by the same route in autumn. Vladimir Lopatnikov got to the summit on October 19 and Igor Khmiliar and Ekaterina Ivanova also made the summit two days later. On their way down, Khmiliar fell to his death. Moreover Sergei Yadrishnikov was killed by an avalanche at C 2 at 6200 m on the 23 th.

1993 A 6-member German-Austrian party, led by Heinz Schauer, failed on the NE Face route in autumn. The highest point of 7300m was reached on October 6.

1994 A 7-member Swiss party, led by Andre Georges, climbed the NE Face route in autumn. On October 19, the leader Georges and Armand Salamin got to the summit while Chantal Mauduit from France abandoned at a 7600 m point.

1995 An 11-member German party, led by Holger Kloss, repeated the NE Face route in spring. Their summit bid was made from a high camp at 6100 m in alpine style. On May 7, Joerg Bartock, Thomas Steffen and Michael Zunk got to the summit after five bivouacs, however, on their way down, Zunk fell to his death. The day before, Joerg Schtarke who had abandoned the summit also fell to his death.

1995 An 8-member Kathmandu Club of Japan party, led by Ken Kanazawa, failed on the NE Face route in autumn. The first summit bid on May 13, by Mamoru Taniguchi, Satoshi Kimoto and Hiroshi Hori was defeated at a 7400 m point due to avalanche danger. The second bid on the 16th by the leader Kanazawa and three others with three Sherpas also was prevented at the same point. Finally Kimoto and Hori attempted the third bid but was defeated by snow falls.

1995 A 12-member Kazakhstani party, led by Kazbek Valiev, made the third winter ascent of the mountain by the NE Face in December. The summit was reached on the 8th by Yuri Moiseev, Alexander Baimakhanov, Shafkhat Gataoulin, Dimitri Sobolev, Oleg Malikov, Vladimir Souviga and Dimitri Mouraev.

2996 A 9-member Tibetan Mountaineering Association party, led by Samdruk, made the summit by the NE Face route in spring. The summit was reached by Tshering Dorje, Ren Na, Akebu and Pemba Tashi on May 3, and Wangyal, Gyalbu, Dachung and Lodue (Lho Tse) on the 4 th.

1996 Carlos Carsolio of Mexico, with his brother Alfredo, made the summit on May 12 by the NE Face route and became the fourth climber to complete all the 14-8000 er after Messner, Kukuczka and Loretan

1996 A German-Austrian-Swiss party, led by Ernst Schwarzenlander, abandoned their attempt on the NE Face route in spring. The highest point of 6700m was reached on May 10.

1996 Chantal Mauduit from France climbed the NE Face route in spring. She had climbed Pumori on 28 April and Lhotse on May 10. Then, she flew by helicopter to the foot of Manaslu and attacked her third mountain with Ang Tshering Sherpa. He became very tired on their final push to the summit on 24 May and stopped an hour and a half below the very top to wait for her. It was the fifth 8 000er for Mauduit.

THE ASCENT OF SINIOLCHU

Sen HIRAIZUMI

Siniolchu (6,887m) is located in the east of the Kangchenjunga massif, 17km away from the third highest mountain in the world, and was first climbed by Paul Bauer and his fellows from Germany in 1936. Since Siniolchu is sharp with a lot of snow, every Siniolchu expedition including Swiss (1937), India (1979) and Slovene (1994) parties followed the north-west ridge after Bauer's first ascent. We Janpanese trod the beaten track in the spring of 1995.

The trekking started from Lachen on April 22nd to Rest Camp with 13 members, two liaison officers, 5 high altitude porters, 6 kitchen staffs and helpers and 55 local porters carrying 2.5 tons of foods and equipments.

In this spring expedition Base Camp was established at 4,570m (Rest Camp) on April 29th, Advanced Base Camp at 4,700m (at the end of the lovely side moraine of Siniolchu Glacier) on May 1st, Camp 1 (C 1) at 5,300m (upon the plateau above the first ice-fall) on May 4th, Camp 2 (C 2) at 6,000m (just below the col) on May 14th and Attack Camp (AC) at 6,400m (small col on the north-west ridge just beyond the sentinel peak) on May 20th. 2,000 meters of fixed ropes were used from C 1 to AC for the sake of safety climbing.

The most dangerous part was to climb the second ice-fall, located between C 1 and C 2 in the expedition. Because the snow melted so much and rapidly in the daytime, the members had to fight against snow- and ice-slides at this part while they found their way on the right side wall of this dangerous ice-fall.

Upon the north-west ridge it was necessary to traverse the sharp fore-peak crowned with the cornice.

On May 21st Drs. Takashi Ohta and Masayuki Chida left AC early in the morning. They kept track of the sharp knife ridge and climbed the steep ice wall for 10h and finally reached the summit at 16 : 10. They evacuated safely to C 2 the next day after the bivouac at 6,640 m.

This was the fifth ascent to Mt. Siniolchu after Paul Bauer et al. first climbed in 1936. The expedition was over on May 28th after arriving at Lachen where all village people celebrated the success of the climbing.

SIKKIM HIMALAYA EXPEDITION OF JAPAN 1995 sponsored by Alpine Club of Tohoku University School of Medicine, 1-1 Seiryomachi, Sendai 980

Leader : Masafumi Katayama, M.D. (44)

Deputy leader : Sen Hiraizumi, M.D. (37)
Climbing leader : Katsuo Matsuki, M.D. (39)
Members : Hitoshi Goto, M.D. (37), Masayuki Chida, M.D. (34), Masami Hosaka, M.D. (31), Hirofumi Ichikawa, M.D. (31), Atsushi Koyama, M.D. (29), Takashi Ohta, Ph.D. (27), Ryosuke Wakusawa (24), Takehito Nakano (22), Masato Yamaguchi, M.D. (46), Morio Kasai, M.D. (73)
Liaison Officers : Major Praveen Gangwani (30), Naku Giri (24)
Office Managers : Ikuo Abe, M.D., Masato Nose, M.D., Hitoshi Komiya.
Executive expedition leader : Haruo Sato, M.D. (75)

NANGA PARBAT : the 7th New Route in North by Japan-C.I.T 1995

Hiroshi SAKAI

Today, on 7th/July, again, one more member of Tamura was seriously injured by stone fall at so called "Confessional Pitch" between Camp-1 and 2 while he was restoring damaged fixed rope caused by many stone falls. This possible accident in this 50-meter pitch by stone falls was well anticipated since opening route. That was why we had decided not to climb this part after 10 o'clock in the morning to avoid increasing those probability. In prior to this, on 26th/June, there was an accident took place on another member of Kousaka who was also damaged his arm with falling stone and forced to retire to Gilgit. The route was, as of today, completed along the flanks of Silverzaeken up to around 7,200m which is quite close to the mouth of Silver Plateau at 7,350m where the final Camp-4 is planned to be pitched.

After spending 3 days for the rescue activities to bring Tamura down on all member's shoulder to the Temporary Base Camp. I, as a leader of this expedition, settled myself in an insecurity mood at Base Camp, with contemplation a lot of another possible accident. "*We should stop a climbing here as the third accident in a next possible chance may cause a person die.*" However, it was agreed among ourselves that we should try to complete this 7th new roue with one more push in a rush tactics which could allow us to climb the part of Confessional Pitch only one time. It was obvious that original plan, which was to traverse Nanga Parbat from North to West after reaching the summit, had to be given up in a view of that we were now insufficient of number of climbers for the necessary camp deployment for the traverse. As of 9th/July, we were only 6 members remained with nobody of high altitude porter employed. For the final push to be commenced, we have decided to take a final rest at Base Camp for 4 days until 12th/July.

The plan :

The idea of this expedition to climb Nanga Parbat through new route came up to my mind in 1992 when I had a reconnaissance trek to the North of this mountain. Since Helman Burl climbed first time in 1953, only one party (Czechoslovakia in 1971) has succeeded to reach the peak through the original route on the North. And yet, nobody has succeeded to open a new route from the North despite of that there were 5 routes established other area than North since the first climb from North. After having reconnaissance as well as studying photo viewed from airplane, we were convinced to be worth to climb this new route along the ridge derived from East Peak of Silverzaeken. It was well anticipated that a key factor for success was how to climb over a bottom part of this ridge which sharply drop into Rakiot Glacier, in a shape of steep rock wall, standing 600m high from the glacier. Also, it might be troublesome for us to overcome hanging glacier lying down on the ridge at 6,300m above this rock wall.

Our team consisted of 10 members who graduated the same University of C.I.T (Chiba Institute of Technology), but only 3 members had an adequate experiences in a high altitude climbing. And, it was known from the beginning that 2 members out of those 3 can not participate in a whole period of this expedition. In this respect, it was important for me to find member who could be eligible climbers for final attack by rush tactics while we progress a prelude climbing up to 7,000m by means of conventional polar method.

Base Camp to Camp-1 :

On 5th June, with 3 day's caravan march set off from Tatoo by 100 porters in a total weight of approx. 3-tonnage, we arrived at Temporary Base Camp 3,900m camp (3,900m), which is normally regarded to be a site the for base camp of other parties. Our Base Camp was established at 4,500m high at the site on top of so called Great Morain where normally other parties put up camp-1, with consideration of considerably long distance to the summit. We kept 20 porters for loading up from T.B.C to our Base Camp because of much snow left between T.B.C and B.C. Spending 5 days for logistics assignment was perfect for the acclimatization. Probing some crevasses, Camp-1 was established on 11th/June at 5,300m on the Rakiot Glacier to where we followed the same route with the 1953 expedition.

Camp-1 to Camp-2 :

The route from Camp-1 to Camp-2 is explained by dividing it into two stages. The first stage was a steep wall in a mixture of snow and granite rock, arising up to 5,700m. After following obvious snow ridge in a angle of 45 degree, climbing started with rock crack in grade V + and followed a steep section in a mixture of rock and icy snow band/gully. After 6th pitches from the crack, there appeared one pitch of 50m in a grade Ⅳ +, where a 10m long wire ladder was fixed for the loading up, afterward. To the left side of our route, there

is a big snow gully leading up to the sky line of the ridge where we want to climb up. However, into this gully, there are stone falling down without a break after 10 o'clock. As we climb higher, we nervously felt more stone falls flying down towards us, producing terrible sound like a high velocity of gun-bullet in an air, as our route was directed towards the upper part of this snow gully. After gaining a height about 500m, which correspond to 2/3 of the first part, we met with a massive overhanging in a solid rock. To the right nothing of feasible route was found. We were obliged to take a route to the left into this snow gully for 20m long so that we could come out to the point above the overhanging. Putting ourselves into this gully needed everybody a much courage for a risk against stone falls. Before setting off into this gully one guy confessed himself to be a guilty for a forgiveness instead of having a punishment with stone. That is why this part was named to Confessional Pitch. After overcoming this point, again, the route was led diagonally to the right up until we come out to the skyline ridge. The second stage, after reaching out to the skyline ridge at 5,900m, was a sharp and thinner snow ridge which was intricating and jagging almost holizontally and continued up to Camp-2. Technically not so difficult to climb as the first stage, but it took up 5 days to fix a rope in a length of 600m. For such route, a delicate balance climbing required and resulted in slow progress. With spending 14 days from Camp-1, Camp-2 was established at 5,900m high just below the overwhelming ice tower on 25th/June.

Camp-2 to Camp-3 :

Above Camp-2, a massive ice tower in 300m high rose straight up into the blue sky. This ice tower is actually the bottom end of glacier lying down on the ridge derived from Silverzaecken. How we could overcome this vertical ice tower was also one of the issues since the planing stage. Fortunately, the upper end of ice buildings, which was more or less over hanging, was exposing us a weak point producing vertical slit in the center. Having a double axes against a hard glassy ice in 4 pitches length at an average angle of 70 degree, we overcame the difficult section and reached the point where ice tower produced the slit. In the slit, exposed ice surface was replaced with hard snow and declined its angle. After reaching the way out of this ice tower at roughly 6,300m, the route become easier and followed along with vast ridge in a knee deep snow continued to the site for Camp-3 at 6,700m, which was established on 4th/July at the place from where a slope is increasing an inclination angle heading for East Peak of Silverzaecken.

Camp-3 to Camp-4 :

The route from Camp-3 was progressed in a traverse on the flanks of Silverzaecken towards the mouth of Silver Plateau. After climbing 2 pitches in a mixture of snow and rock, we faced with quite difficult part which was a sheer crack vertically in straight

raising up in 50m length at almost 80 degree angle. The climbing grade of this section was regarded to be V, and named to "Yabe's Crack" associated with our member of Yabe who took a lead climb in this crack with bare hands. Overcoming this Yabe's Crack, we further developed the traversing route in a rope length of 400m along the North-West flank of Silverzaecken, then continued it in the length of another 400m on a steep angle of snow slope which lead us to the mouth of Silver Plateau. It was already 18th/July when we completed the route up to Camp-4 at 7,350m after we left Base Camp on 13th for the final push with remained 6-member.

Summit attack :

The sun rose in a windy condition on the morning of 21st/July, after having a bad weather for two days of 19th and 20th at Camp-3. This fine weather seemed to be a final chance for us to attack the summit, with consideration of such negative factor as limited viability in a poor foods' supply, an increasing chances of bad weather under the influence of monsoon in this time periods and what a long distance of route we have in front of us. Last but least, a decision has to be made. It comes to think of who should go for the summit. The criteria for selecting member was focused on how much an individual could be capable of endurance for long distance as well as for dozens of pitches we would encounter at summit massive at this very high altitude without oxygen aids. Finally, I selected attack member to those 3-person of Yukio Yabe (age : 29), Takeshi Akiyama (26) and myself of Hiroshi Sakai (38). Remaining 3-member were convinced to devote themselves to necessary supporting jobs for the attack team. With all 6-member, we loaded up necessary equipment and foods for one chance attack to Camp-4 on 21st. Support team climbed down to Camp-3 on the same day.

On 22nd, waking up at 00 : 30 a.m. we left Camp-4 at 03 : 10 with a head torch. However, a short while after, we went back to Camp-4 because of that Akiyama felt a pain in his chest and Yabe felt fingers and toes become numb with cold. In the night, we took an oxygen for a sleep so that we could gain back a physical strength.

Next morning on 23rd, again, we left Camp-4 at 03 : 10 in a windy condition, but under clear sky. By good luck, the snow field of Silver Plateau was perfect condition in a depth of less than ankle. Before 8 o'clock we successfully reached the opposit end of Silver Plateau.

What a difference compared with how much struggle Helman Burl had been suffered from deep snow in this snow field. From Diamir-Schanrte, whole profile of summit massive can be seen. Before going down 150m height to the Bazhin-Scharte, I have printed what route we should take on the summit wall into my memory tip. Also, I checked and confirmed with compass what direction our Camp-4 was located, providing for a white-out condition in case.

Calculating that we could manage to come back here within today after reaching the summit, we put down some equipments and foods in Bazhin-Scharte deposit so that we could

climb lightly and as much speedy as possible. Soon after setting off ourselves into the snow gully, which rises up in the summit's massive wall toward North end shoulder of the summit ridge at 8,070m, I realized that this massive wall was much bigger than what scale I calculated. Or, it may be, caused by high altitude, I might felt climbing speed so slow as to realize much bigger scale than what I expected. When we climbed almost half of this snow gully, we were obstructed with steep rock section. Nothing of miss leading were allowed for a route finding at this altitude. Leaving climbing-sack behind myself to get rid of any weight put on me, I took a lead to the left side of this rock almost 100m in a rope length and tried to see if there were any feasible route beyond this rock section. Above, there were feasible route which led us to the North end shoulder in a 120m rope length. Even though we had reached the point higher than 8,000m it was really long, long way to go for the final summit. It was already getting closer to the time of sunset and became windy with coulds moving fast. Along the summit ridge, we repeated relentlessly up and down climb in a numerous time around small projecting rock peaks. Suddenly, the ridge ahead of me fell down sharply and nothing of higher point left beyond here. I actually by this time reached the summit of Nanga Parbat at 17 : 13 in the evening, where many flags of other expedition parties remained with one piton left in the rock. 20 minutes later, Yabe and Akiyama also reached the top. We scarcely could communicate with Base Camp over walkie-talkie. What a dramatic scene it was on the top of Nanga Parbat.

A descending took place at 18 : 10 and climbed down until 10 o'clock in the night. But, we could not return to Bazhin-Scharte and obliged to have a bivouac at 7,700m with poor equipment. Next morning on 24th/July, it was snowing and nothing visible in a white-out condition especially on a snow field of Silver Plateau. However, we could manage to return safely to Camp-4 after 39 hours since we left. Since then this bad weather continued further until we returned to Base Camp on 28th. It was narrow success. Thanks God of Nanga Parbat for a lot of a good luck.

Summery information

1) Member

Leader : Hiroshi SAKAI (38)
: Masashi TERAMOTO (47)
Account : Kiyoshi HIRATA (28)
Food : Keiichi TAMURA (28)
Food : Takamiki KOUSAKA (25)
Medical : Masayoshi FUJII (48)
Equipment : Yukio YABE (29)
Record & Weather : Wataru ISHII (29)
Equip & Environment : Takehito AKIYAMA (26)
Transport : Takashi IWAMOTO (22)

2) Activity

May 15 : 1 st party's departure from Japan
22 : Main party's departure from Japan

June 2 : Caravan starts from Tato
8 : Start to approch to BC (4,500m)
10 : BC (4,500m) establishment
11 : C 1 (5,300m) establishment
18 : Temporary C 2 (5,700m) establishment
25 : C 2 (5,900m) establishment
July 4 : C 3 (6,700m) establishment
21 : C 4 (7,350m) establishment
23 : Summit attack. Bivouc on the return at 7,700m.

Hiroshi SAKAI reached the top at 17 : 13
Yukio YABE & Takehito AKIYAMA reached the top at 17:30
29 : Clear the BC
Aug 6 : Call of the party

3) Climbing gears :

Between each CAMP	Fixed rope numbers	Total fix	rock	ice	screw	snow·bar
summit (8,125 m) ~C 4 (7,350 m)	non	0 m	4	5	0	0
C 4 (7,350 m) ~C 3 (6,700 m)	φ 6 mm * 50 m 7 φ 8 mm * 50 m 12 φ 9 mm * 50 m 1	1,000 m	16	4	0	20
C 3 (6,700 m) ~C 2 (5,900 m)	φ 6 mm * 50 m 6 φ 8 mm * 50 m 4 φ 9 mm * 50 m 1 φ 10 mm * 50 m 5	800 m	2	8	12	18
C 2 (5,900 m) ~C'2 (5,700 m)	φ 6 mm * 50 m 3 φ 8 mm * 50 m 3 φ 10 mm * 50 m 6	600 m	5	3	7	14
C 2 (5,700 m) ~C 1 (5,300 m)	φ 6 mm * 50 m 4 φ 8 mm * 50 m 2 φ 9 mm * 50 m 4					

	φ10 mm＊50 m	9					
C 1 (5,300 m)			950 m	53	6	0	7
～BC (4,500 m)	φ6 mm＊50 m	5	650 m	0	0	0	12
	φ6 mm＊50 m	8					
TOTAL			4,000 m	80	26	19	71

WHOLE PARTY SUCCEEDS IN REACHING THE SUMMIT OF UNTRODDEN PEAK IN MUSTAGH ATA MOUNTAINS.

Prolog

In the summer of 1995, a party composed of members of the Japanese Alpine club's Youth Committee and Students Committee scaled a 6,848-meter high untrodden peak of the Mustagh Ata Mountains.

This expedition had been planned to train young climbers and give them an opportunity to experience a high altitude, but the most important purpose was to enable the members to experience the joy of climbing an untrodden mountain with their own skill and method.

On August 9 and 10 all the members of the party succeeded in reaching the summit.

Activity

The party left the Narita airport on July 21, began the ascent from Kashgar on the 25th and reached Lake Kalakull, on the 28th, each member of the party received training to get accustomed to the altitude of 4,400 meters to 4,600 meters. On the 27th, they moved to the 4,600-meter high BC forming a camel caravan, striving toward a higher altitude without a halt.

On August 2, the party fixed a rope on the right side of the glacier terrace and set up C 1 (5,450m). The party also set up a provisional C 1 (4,730m) between BC and C 1, and moved the luggage upward in several installments.

On the 8th, the party set up C 2 (6,070m). From C 1 to P Ⅰ (5,800m), the party moved along the right ridge, carefully avoiding hidden crevasses. Beyond P 1, the party could not walk along the ridge because the left side of the main ridge stretched precipitously down to the glacier while there was a big cornice of snow on the right side, so the party climbed the main ridge almost traversing it. It took three days to make a route from P Ⅰ to C 2. P Ⅱ (6,380m) was close to C 2 and was clearly visible from C 2, but there was no route to get there other than one on the narrow, steep ridge.

Summit

On August 9, the first attack party consisting of Jun Kamiohsako, Tatsuji Aono and Daisuke Sato headed for the summit. In order to locate C 3 and get an overall view of the route from C 2, the party continued route making from early morning. After climbing an easy but very long slope from P Ⅱ to a dome-shaped peak, the party stood on the peak, located slightly southward, where one could have an unobstructed view of the place.

At 18 : 38, the party was standing on the 6,848-meter high summit.

On the 10th, following the track of the first party, the remaining five members (Yoshio Kinugawa, Atsushi Shiina, Toru Hirasawa, Shigehiro Nakagawa and Daisuke Taketani) reached the summit at 13 : 40 by taking the same course as the previous day's group.

On the 11th, the party descended from C 2 to provisional C 1 (4,730m) in one stretch, recovering the fixed rope during the descent. On the 12th, all the members of the party reached Japan on July 21 to returning to Narita, completed the expedition. Granted that the weather was fair, it was fortunate that all the members of the party completed the expedition without any injury and nobody suffering from mountain sickness.

Epilog

The peak which the party had scaled is on the ridge facing the Koshkurak Glacier. At the time of planning the climb it was thought that the peak would be 7,000-meter high. But the map obtained at the place showed the height as 6,848m. The expedition did not prove to be the first ascent of 1995, the experience of striving to and reaching a high altitude, receiving the winds across the glacier, was valuable and unforgettable.

Lastly we would like to thank China Xinjiang Nature Travel Service for the unstinted help extended to the party.

(Translated from Japanese by Minako Sato)

[Japan Mustagh Ata Expedition 1995]

Members

General Leader		Takashi KAWAKAMI (67)
Expedition Leader		Yoshio KINUGAWA (49)
Climbing Member	(Accountant)	Masaru YABE (30)
	(Equipment)	Jun KAMIOSAKO (27)
	〃	Daisuke SATO (26)
	(Transportation)	Tatushi AONO (23)
	(Food)	Atsushi SHIINA (24)
	〃	Daisuke TAKETANI (20)
	(Health)	Shigehiro NAKAGAWA (22)
	(Document)	Toru HIRASAWA (21)

MT. SARA SHUWA 1995, SOUTHEAST LADAKH IN INDIA

Masato OKI

Mt. Sara Shuwa (c. 6,238m) was climbed as the first ascent by the team of Ashikaga Institute of Technology, Japan. Mt. Sara Shuwa, local name is located in the area of Rupshu Valley near Tsomoriri Lake in Southeast Ladakh.

The team comprised five members and a liaison officer—

1) Prof. Masato OKI (60) -Leader
2) Yuzo TAKEZAWA (53) -Sub-leader
3) Hiroki TAKASE (22) -Climbing leader
4) Yoshiyuki AMMA (39) -Food in charge
5) Takashi MATSUZAKI (19) -Equipment in charge
6) Arun Roy Chowdhury (27) -Liaison officer

The team started from Delhi August of 5th. by two van coaches and reached Leh on 7th August. The condition of entire road from Manali to Leh was extremely troublesome and risky due to heavy rains. Then the team reached Karzok village located west side of Tsomoriri Lake on 11th August morning and set up the Base Camp about at an altitude of 4,500m on the bank of Karzok Phu river. The team decided to climb in two groups 'A' group consisting of Y. Takazawa, H. Takase and A.R. Chowdhury and 'B' group consisted of Y. Amma, T. Matsuzaki and myself.

On 12th August, three members started for reconnaissance route for setting up of the Advance Base Camp (ABC・5,100m) and the Camp-1 (5,600m) with some loads. They crossed Karzok Phu river after about 30 minutes trek from the Base Camp and reached below a huge moraine hill.

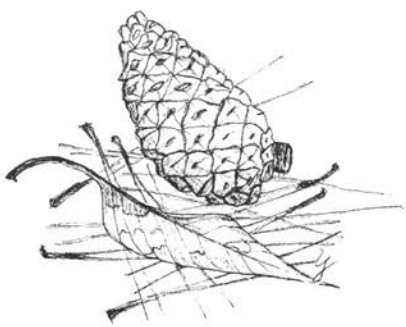
On 15th August, 'A' group established the Camp-1 and the group also surveyed the route beyond the Camp-1, duly laying about 500m fixed rope along northeast ridge of Mt. Sara Shuwa.

On 16th August, 'A' group started from the Camp-1 at 5.40 a.m. and climbed the snow covered face. After about four hours' climbing efforts they could reach the top of the snow ridge. Thereafter, the ascent to the summit involved climbing along the top ridge from the north side and then finally reached the summit at 10.55 a.m.

While 'A' group summitted Mt. Sara Shuwa on 16th August, 'B' Group moved up from the ABC and occupied the Camp-1 with the plan to make second summit attempt on 17th. 'B' group started very early 3 a.m. and after little over six hours' continuous climbing in cold

environment, they reached the summit.

On 18th August, tents and other stores, including garbage lying at the Camp-1 were collected and carried down to the Base Camp. After a few day's rest and recuperation at the Base Camp the team resumed the return journey on 21st August and reached Delhi on 24th August.



THE FIRST SUCCESSFUL ASCENT OF THE TWINS : Mt. GIMMIGELA

Taroh TANIGAWA

On October 7, 1995, we came upon an old piton and karabiner on a mountain ridge 7,000 meters high on our way to the summit. It had been left there, spiked into the rocky ridge and swinging in the wind, by the Tokyo University of Agriculture Alpine Club Expedition 1963 thirty-two years ago on their way to the attack camp. It was as if it were cheering us on in this attempt to successfully reach the summit of the Twins for the first time.

After thirty-two years, the Tokyo University of Agriculture Alpine Club (TUAAC) had organized another expedition, this time with the Nepal Police Mountaineering and Adventure Foundation (NPMAF), to finally conquer the Twins. Over the years, the route to Pangpema has become increasingly easier to walk in, but thirty years ago, this Nepal-Sikkim border region was still in the realm of the unknown.

Our club members had been waiting impatiently for obtaining the Twins' climbing permission. We yearned to conquer the summit no climber had yet reached. For those expedition members who had climbed a number of peaks over 8,000 meters, the Twins did not present an overwhelming challenge. Its shape, however, was so beautiful and, at the same time, awesome that the prospect was exciting.

From the British Expedition of 1899, the Twins has resisted all efforts to climb her—— the International Expedition in 1930, the German Expedition in 1936, and the Swiss Expedition in 1937. Our joint expedition decided to follow the same route that our 1963 Expedition had attempted. We approached from Cross Glacier just to the east of Cross Peak (6,510m) on the north-western side of the Twins. We set up Camp 1 at a point 5,600m high, and from there we headed for the Twins Col.

Since there was a good chance of meeting an avalanche if we climbed the runse, we took the rocky wall which was closer to Cross Peak. But we had to take the runse for the second half of the route, after which we climbed up to a col. From there we could reach the wide plateau which was our approach to the western ridge.

Six days after we had constructed Camp 1, we constructed Camp 2 at a point 6,000m high. A week after that, we had set up Camp 3, 700m above Camp 2. It was around these camps that we came upon the karabiner left by the 1963 Expedition and collected it.

It took 31 pitches from Camp 3 to the summit. Because the snow conditions over the rocky peak in front of the summit were very poor, we were most tense as we approached the peak

from the west side.

On October 16 at 11 : 20 a.m. we attacked the summit from Camp 3 and successfully conquered the summit of the Twins (7,350m). The attack team consisted of Tanigawa, Nagakubo, Yoshida, two Nepalese policemen and six Sherpas. We set up Camp 4 on a snowy ridge located about 4 pitches down the summit because we wanted to search for the member of the 1993 Expedition who had disappeared in a hidden crevasse just below the summit while trying to reach the summit from the Sikkim side.

On October 17 our second team (Ogasawara, Kobayashi, Numano, Hirose and two Sherpas) successfully reached the summit. Because of deep snow and the whiteout conditions that set in the day after we'd reached the summit, we had to abandon our search for the missing member of the 1993 Expedition.

The Member of Mt. Gimmigela Joint Expedition 1995 by Tokyo University of Agriculture Alpine Club and Nepal Police

General Leader	Yasunari Yamashita (56)
Climbing Members	Iwao Ogasawara (42)
	Hitoshi Motoyoshi (42)
	Shinji Kobayashi (38)
	Hideo Koike (36)
	Yukimasa Numano (30)
	Taroh Tanigawa (28)
	Koji Nagakubo (26)
	Kenta Hirose (25)
	Yuichi Yoshida (24)
Team Leader	Gupta Bahadur Rana
Climbing Members	Sel Bahadur Karki
	Gita Bahadur Joshi
	Ram Kaji Siwakot
	Santa Bahadur Ale

THE FIRST ULTAR Ⅱ ASCENT AND TRAGEDY 1996

Noboru ONOE

Akito Yamazaki (28) and Kiyoshi Matsuoka (24), the Ultar Ⅱ climbing team from Tokai branch of the Japnanese Alpine Club, stood on the top of Ultar Ⅱ (7,388m) at 6 : 45 a.m. on July 11.

Leaving Japan on June 3 and arriving in Islamabad on the day, they started making preparations for their expedition. On June 10 and 11, they travelled by land from Islamabad to Aliabad, Hunza, the starting point of their expedition. From June 14 until 21, they stayed in the Hassanabad Glacier area, which is located to the west of Ultar Ⅰ and from where the sharp ridge of Shispare (7,611m) can also be seen. From this location Yamazaki and Matsuoka intended to physically prepare themselves for the high altitude climb. Bad weather, however, kept them from doing as much training as they had hoped.

On June 22, they climbed down to Aliabad in order to make a reconnaisance of the southeast pillar through Nagar Hill, which commands a good view of Ultar Ⅱ. They also reconnoitered Mr. Hasegawa's Ultar Glacier route.

Studying these two routes carefully, they decided to take the latter one, even though they had planned on taking the former, since they thought they would have a better chance of successful ascent to the summit.

On June 25, they left Karimabad and set up Base Camp at Ultar Glacier (3,100m) and on the following day Advance Base Camp at 4,500m. On June 29, they ascended, fixing eight 50-meter ropes at dangerous spots, while reconnoitering the route on the way.

On July 2, they moved up to Advance Base Camp and their Ultar Ⅱ climb started.

On July 3, Yamazaki and Matsuoka left Advance Base at 2 : 00 a.m. Taking advantage of the early morning hours, there was hardly any danger of falling rocks or avalanches as they passed a big valley runse. At 8 : 00 p.m. they stopped and camped at 5,200m. There, they deposited food for one day and a can of gas to be used on their way back.

They had fixed eight 50-meter ropes before they reached this point, and they had only one 50-meter rope for the rest of the climb.

At 11 : 00 p.m. in the moonlight, they started on their climb on the rocks and ice. They safely passed the 5,350m point, where an avalanche had hit Mr. Hasegawa 5 years before. At 9 : 00 a.m. on the following day, they reached the 5,500m point, and being afraid of causing avalanches and falling rocks by moving during the day, they stayed there.

At 8 : 00 p.m. starting again in the moonlight, they got to the edge of a hanging glacier

which continued for 300m. Crossing one crevasse after another, crawling beneath overhanging rocks, they gradullay moved up the glacier. However, unable to go through the dangerous area by 4 : 00 p.m. they decided to set up a tent inside a safe crevasse at the altitude of 5,800m.

On July 7, at 4 : 00 a.m. they left this spot and managed to get over the hanging glacier. They stayed on the snow on Snow Peak (6,000m) that night.

Starting at 4 : 00 a.m. on July 8, they advanced on the ridge of ice and rocks, sometimes losing their way, sometimes thinking of retreating. They came to a spot where they feared it impossible to climb as they had already used up all of their ropes. Luckily at that point, however, they happened to find a fixed rope left there by previous climbers. Using it, they got down to the runse, and at 8 : 00 p.m. they again climbed up to the ridge, which was the rocky base (6,300m) in the foreground of Head Wall leading to the summit. They had proceeded staccato all the way up there. They stayed overnight in the tent.

On July 9, at 4 : 00 a.m. they began to climb on the rocks of Head Wall. On the lower slope they managed to go up on the snow walls, but they came to a deadlock at 6,600m. At 8 : 00 p.m. they decided to bivouac there.

On July 10, at 4 : 00 a.m.they started, though without any climbing equipment to be used to attack the sharp slabs and cracks. When they finally went through the wall at around 8 : 00 p.m. it got dark and they were forced to bivouac again at the altitude of 7,000m. At this point, they had only a small amount of food and fuel left, but both Yamazaki and Matsuoka were quite sure that the summit of Ultar Ⅱ was not far beyond this point.

On July 11, at 4 : 00 a.m. they started their ascent. Since they had decided to retreat if they failed to reach the summit on this day, carried nothing with them. They advanced with continuous steps along the 30 degree ridge up to the foot of a big peak, which was likely the one called Junction Peak by Mr. Hasegawa. After taking a short rest and exchanging words of encouragement to one another, they went on, finally reaching the summit of Ultar Ⅱ (7,388m). There they stood at 6 : 45 a.m. on July 11. It was a lucky mistake for them to have taken the left-side route Head Wall.

From the top of Ultar Ⅱ, where they stayed for less than 10 minutes due to the strong wind and piercing cold, Akito Yamazaki and Kiyoshi Matsuoka witnessed the beautiful peaks of Rakaposhi (7,788m) and Dilan (7,257m) to the south; snowy Ultar Ⅰ (7,329m) and Shispare to the north; and the rock tower of Lady's Finger far below their eyes. Yamazaki and Matsuoka got down as far as the 6,300m point on the same day.

On July 12, at 4 : 00 a.m. in the favorable weather condition of the early morning, they started descending. By afternoon, though, the blinding snowstorm made it very difficult for them to find their way down. They persevered, but by 8 : 00 p.m. they were compelled to bivouac on Snow Peak (6,000m), with scarce food and fuel.

From July 13 through 16, the severe snowstorm kept them from going out of the tent.

During this period, they ate nothing since they wanted to keep their small supply of food for the long descent ahead of them. They had only a little water which they got by melting snow with a cigarette lighter. On the 15th, a strong wind made a 5-centimeter tear in the tent, through which snow was blown in, wetting their sleeping bags.

On July 17, the weather finally improved. In spite of their wish to move early in the morning while the weather was good, they felt too cold to go out. Then, finally, with their gear all on, they ate three cookies each, drank some water, started from the tent at 10 : 00 a.m. hoping to get to the 5,200m spot where they had deposited their food and fuel. Though they climbed down to the 5,500m spot through the ice and snow wall, they could not go any farther. At 8 : 00 p.m. they had to stay there overnight.

On July 18, they walked through very unstable and dangerous area with greatest care from 4 : 00 a.m. through to 8 : 00 p.m. when they got down to the 5,200m spot where they had expected to find the deposited food and fuel. Devastatingly, they could not find the food and fuel they so desperately needed. They were beneath the layer of fallen serac.

On July 19, they started out at 4 : 00 a.m. At around 10 : 00 a.m. they managed to get to the place with fixed ropes. Shortly afternoon, a little above Advance Base, Yamazaki, who was walking ahead of Matsuoka, was met by one of the porters who came up with some food. Each of them was delighted to get a one-liter bottle of orange juice and two bars of chocolate. In the evening they modestly celeblated their successful ascent with some porridge and Chinese noodle soup.

On the morning of July 20, Yamazaki began to feel very sick. He complained of a violent stomachache. On the following day, the condition worsened. Matsuoka requested the liason officer to get helicopter evacuation for Yamazaki. However, at 11 : 00 p.m. at Advance Base Camp Yamazaki breathed his last breath before the arrival of the helicopter. His body was carried down to Islamabad to be met by his family and friends, then, on July 30, cremated in the open air.

The cause of his death cannot be specified. Most probably it is not high altitude sickness, but rather may be a result of stress caused by a sudden worsening condition of the digestive organ, or acute appendicitis. May his soul rest in peace.

PHOTO EXHIBITION
"Japan in the Meiji and Taisho Eras as Walter Weston Saw It"

Makoto SUGIMOTO

Last fall I received three catalogues from the Torino National Mountain Museum of Italy which contained photographs taken by Walter Weston. The Museum obtained this collection of 94 glass-made film slides colored with water paint, at an antique market in London. Prints from the slides were carefully produced using a computer in order to revive the remarkable scenes of the Meiji and Taisho eras. I was particularly fascinated by the pale, nostalgic color of the photos and decided to introduce them to present day Japanese.

I immediately arranged an exhibition of the collection at the Toyota Municipal Museum of Art from 1-13 October 1996. Toyota city, unlike Yokohama or Matsumoto, is not noted in connection with Weston but I felt confident that this event would be well received. After organizing several large-scale exhibitions, Toyota has become one of the centers for art and has many experts in this field, as well as having a collection of nearly six hundred photos. Moreover, the newly opened museum is known for its well-appointed facilities and security services, together with an excellent location.

Considering the possibility that in the near future this exhibition might be held in other cities as well as in Toyota, I invited a number of people to become members of the executive committee. These people comprised of a photographer, designer, journalist, company owner and a grass-roots movement activist and many other people including Mr. Aldo Audisio, the chief director of the Torino Museum, Mr. Fosco Maraini, who edited the catalogue and Mr. Mitsuo Miyahara, a Japanese artist from Italy. Everyone agreed to join me and together we worked on making the necessary arrangements.

We first prepared catalogues based on the Italian version. The Japanese translation included Weston's chronological details, profile and some new data provided by the Japan Society of Weston, to enable the younger generation to have more knowledge of this man.

Since we did not have any specific sponsors for the exhibition, raising founds seemed to be the biggest problem. However, we succeeded in finding some financial supporters as most of the committee were experienced in this aspect of organizing an exhibition. Sponsors

understood that it was important to hold the exhibition in 1996, as this celebrated the 100th anniversary of the publishing of his first book. However, I believe that the sponsors were mainly interested in these noteworthy works.

Committee members felt a certain pride in their efforts when the Yomiuri newspaper featured an article on Weston in connection with the exhibition. Our confidence increased that this exhibition would be extremely popular in Japan.

Despite some anxiety, it was possible to collect a variety of excellent display material of which there were three of Weston's original editions provided by the daughter of Mr. Seiichi Okamoto. She also sent us his manuscripts and memos together with the Japanese editions. Mr. Okamoto was known as the first Japanese translator of Weston's works. We ascertained that one of Weston's works "Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps" had been presented to Emperor Meiji. We obtained permission from the Imperial Household Agency to borrow it for the exhibition along with Weston's nine photos of the Japanese Alps, which also had been offered to the Emperor. Furthermore, two letters corresponded between Weston and his wife and their portrait taken at Wimbledon, were lent by the Aichi University of Education's library and Japan Society of Weston respectively. I offered some of my collection and finally we were able to display all of the Japanese translations.

On 1 October we had Mr. and Mrs. Audisio and Mrs. Rita Marchiori, the director of Cultural Office of the Region of Piemonte, as our guests at the opening of the exhibition. Mr. Audisio lent us six of Weston's original photo film slides from their collection and presented a commemorative lecture. Japanese visitors also enjoyed "Cervino 1901" the first Italian documentary film of mountaineering.

When these photographs are presented to the Toyota Municipal Museum of Art, I believe that they will then become public property.

FITNESS TRAINING METHOD FOR HIGH ALTITUDE MOUNTAIN CLIMBING ; IMPORTANCE OF ALTITUDE TRAINING AND BREATHING PRACTICE

Masayoshi YAMAMOTO, Ph. D.

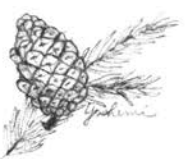
There has been considered that the most important physical fitness factor for high altitude mountain climbing is maximal oxygen uptake ($\dot{V}O_2$ max). This is true, but improving $\dot{V}O_2$ max only is not sufficient.

Another important factor is the ability of preventing the decrease of arterial saturation O_2 (SaO_2) under low oxygen environment.

Hitherto this ability is considered to be able to get in the course of expedition by repeating going up and down of the objective mountain. But usual expedition period (one or two months) must be insufficient for improving this ability. Much better method is to improve this ability before starting the expedition.

$\dot{V}O_2$ max is able to be improved by endurance training at sea level and the training principle is well established. But improving the ability of preventing the decrease of SaO_2 under low oxygen environment is difficult by the usual endurance training at sea level. The ability will only be improved by the training at high altitude or by the training in low pressure chamber. The most suitable altitude for the training is considered to be about 4,000m.

Furthermore, daily practice of breathing technique (especially abdominal breathing) is useful for preventing the decrease of SaO_2 under low oxygen environment.



高所登山のためのトレーニング
高地トレーニングと呼吸技術トレーニングの重要性

山本正嘉（国際武道大学体育学部）

1. はじめに

高所登山を行う上で最大の障害となるのは、低酸素による身体の諸機能の低下である。このような環境で生活を営み、かつ登山という厳しい運動を行うためには、優れた体力が必要である。一口に体力といってもさまざまな要素があるが、従来、高所登山にとって最も重要な体力要素は最大酸素摂取能力（$\dot{V}O_2$ max）であると考えられてきた[11,13,14]。

$\dot{V}O_2$ max とは、激しい持久運動を行ったときに、最大でどれだけの酸素を体内に取り入れられるかを表す能力である。$\dot{V}O_2$ max は、全身持久力に優れる者ほど高い値を示す。たとえば一般人の $\dot{V}O_2$ max は、1分間、体重1kgあたりの値にして40ml程度であるが、一流のマラソン選手では80mlと、一般人の2倍にも達する。

高所登山においても、$\dot{V}O_2$ max に優れる者では、低酸素の環境でも身体にたくさんの酸素を取り入れることができ、したがって高い登山能力を発揮できると考えられてきたのである。実際に島岡[11,13]は、$\dot{V}O_2$ max の高い人ほど、高所登山の登頂成功率が高いことを報告している（図1）。ヨーロッパの一流高所登山家の $\dot{V}O_2$ max は59.5 ml[9]、日本の一流高所登山家の $\dot{V}O_2$ max は57.1 ml[13]であると報告されている。この値は、一流マラソンランナーと一般人とのほぼ中間に位置しており、著しく高いとはいえないが、アマチュアランナーと同程度のレベルである[9]。

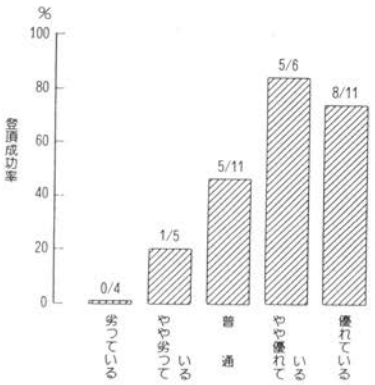


図1 最大酸素摂取能力と高所登山の成功率との関係。（島岡、1987）

筆者は1995年の春に、チベットのチョー・オユー（8,201 m）で登山を行った。筆者は過去5,000 m～6,000 m級の高所登山を4回行ったことがある。しかし7,000 m以上の高所経験はなく、また、5,000 m以上の高所へはこの14年間行ったことがない。つまり、8,000 m峰の登山を行うための体力は、ほぼ白紙に近い状態であった。そこで、チョー・オユーに出かける前に、日本で可能な限り $\dot{V}O_2$ max を高めるトレーニングを行い、それが現地での登山活動にどの程度有効かということを試してみた。

2ケ月間にわたる登山の末、幸い無酸素で登頂に成功した。しかし、$\dot{V}O_2$ max を高めるだけでは不十分ではないかという疑問も抱いた。本稿ではこの体験を交えながら、

高所登山において $\dot{V}O_2$ max 以外にどのような身体の能力が必要かということ、またその能力を向上させるためにはどのようなトレーニングをすべきかということについて、私見を述べてみたい。なお、この実験登山の詳細については、すでに別の場所に報告したので[16,17,18,21]、あわせて参照して頂ければ幸いである。また本稿は、文献20に改変と加筆を加えたものであり、これと重複する点が多いことをお断りしておきたい。

2. チョー・オユー無酸素登山の体験

この登山は小西浩文氏（33歳）、筆者（37歳）、シェルパ1名（ペンバ・ツェリン、51歳）の3名で行った。筆者以外の2名は毎年1～2回程度の高所登山を行っており、8,000 m峰の無酸素登山もすでに数回経験していた。

登山に出かける前、筆者は $\dot{V}O_2$ max を高めることをトレーニングの主目標とした。$\dot{V}O_2$ max を高めるためのトレーニング方法については、古くから研究が行われ、現在では原則はほぼ確立している。すなわち、運動強度は $\dot{V}O_2$ max に相当する強度の50～80%、1日当りの運動時間は15～60分、1週間当りの回数は3～5回とすることが望ましいとされている[12,15]。

筆者はこの原則に基づいて、丘陵地帯のサイクリング、荷物を背負っての坂道歩行、

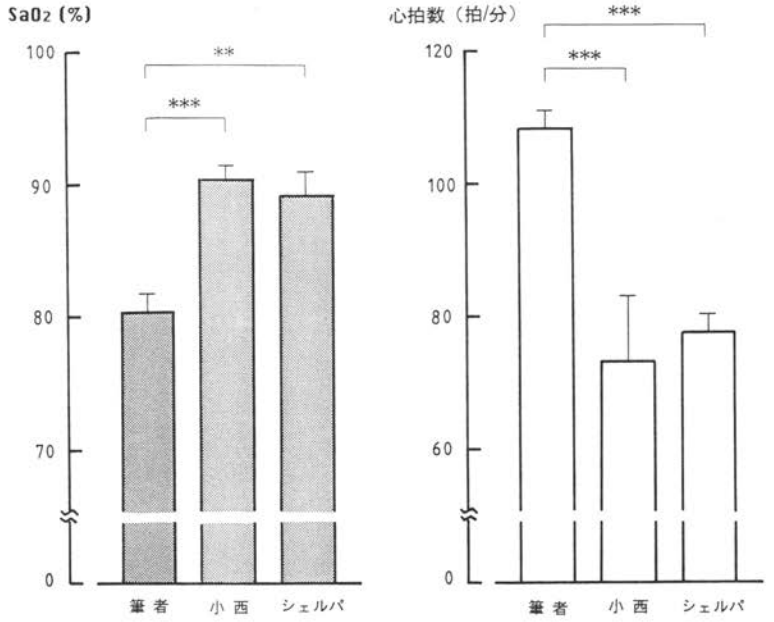


図2 チョーオユーのBC（5,700 m）における3人の動脈血酸素飽和度（SaO_2）と心拍数。安静時に同時に測定した5回分の平均値を示した。＊は有意差があることを示す。（山本、1996）

空身での坂道走などを週に4～5回の割合で行った[16,21]。トレーニングの期間は約5ケ月間であった。その結果、筆者の $\dot{V}O_2$ max は 52.6 ml から 57.2 ml まで増加した。つまり、日本の一流高所登山家の水準には達したわけである。

ところがチョー・オユーでの登山が始まると、筆者だけが発熱、頭痛、食欲不振、吐き気、嘔吐、下痢といったさまざまな高所障害に悩まされた。中でも食欲不振が著しく、栄養不良のため体重が11.6 kg も減った。体重減少の中身を調べてみると、脂肪量の減少が4.3 kg であったのに対して、筋を中心とした除脂肪組織量の減少は7.3 kg であった。筋量が減ったため、体力が大幅に低下した。帰国後に $\dot{V}O_2$ max を測定したところ48.8 ml となっていた。チョー・オユー登山のトレーニングを始める以前の値よりも、さらに低い値となっていたのである。

高所障害は体内の酸素不足によって起こる。もう少し具体的な言葉でいうと、動脈血の働きによって全身の組織へ運ばれる酸素の量（動脈血酸素飽和度：SaO_2）が低下することにより起こる[6]。SaO_2 は、最近普及してきたパルスオキシメーターと呼ばれる機器を用いれば簡単に測定できる。図2は、この機器を用いて、ベースキャンプ（BC）における3人の SaO_2 と心拍数を測定したものである。予想されるとおり、筆者だけ著しく値が悪いことがわかる。

出発前に $\dot{V}O_2$ max を日本人の一流高所登山家のレベルにまで高めておいたにもかかわらず、現地では、SaO_2 の低下→高所障害→栄養不足→筋量の低下という道筋をたどって、結局は折角高めた $\dot{V}O_2$ max も初期レベル以下にまで低下してしまったわけである。$\dot{V}O_2$ max を改善するだけでは高所登山のトレーニングとして不十分なのではないか、という疑問を抱いたのはこのためである。

次のような考え方もできるだろう。筆者は結局、$\dot{V}O_2$ max が低下した（おそらく50 ml を割った）状態で頂上アタックを行い、それに成功したわけであるから、8,000 m峰の無酸素登山は $\dot{V}O_2$ max が50ml未満であっても可能ということになる。事実、世界の一流高所登山家6名の $\dot{V}O_2$ max を測定した Oelz ら[9]の報告をみると、6名の中で最も優れた高所登山歴をもつ R. メスナーの $\dot{V}O_2$ max はわずか48.8 ml である。興味深いことに、この値は筆者の登山後の値と全く同じである。これらのことは $\dot{V}O_2$ max だけが高所登山の能力を決定する要因ではないことを示唆している。

3. 高所で体内を酸素不足にさせない能力の重要性

Oelz ら[9]は、メスナーは他の一流登山家に比べて $\dot{V}O_2$ max が低いかわりに、低圧室で低酸素暴露試験を行った時の SaO_2 の低下が、他の登山家に比べてかなり小さいと報告している。筆者の場合も、登山後に $\dot{V}O_2$ max は大幅に低下していたが、低圧室で低酸素暴露試験を行ったところ、登山前に比べて SaO_2 の低下は小さくなっていた[19]。したがって、高所登山の能力をより直接的に規定しているのは $\dot{V}O_2$ max ではなく、低酸素環境下で SaO_2 の低下を小さく食い止める能力の方だと考えられる。

高所登山の場合、登山という運動を行う以前に、低酸素の環境で長期間の生活を営ま

なければならない。ここで、$\dot{V}O_2$ max は運動能力に関わり、SaO_2 を低下させない能力は生活能力に関わると考えれば分かりやすいだろう。筆者は出発前に、運動能力（$\dot{V}O_2$ max）は向上させておいたが、生活能力（SaO_2 を低下させない能力）のトレーニングは不十分だった。その結果、高所での生活に適応しきれず身体が衰退を起こし、行動能力にまでもその悪影響が及んだと説明できる。つまり、$\dot{V}O_2$ max がいかに優れていても、SaO_2 を低下させない能力が伴わなければ、その価値は大きく減じてしまうといえよう。

低酸素環境で SaO_2 を低下させないようにする能力は、$\dot{V}O_2$ max を高めるトレーニングを積めば改善されるわけではないようである。図3は、長距離走選手と一般人とを対

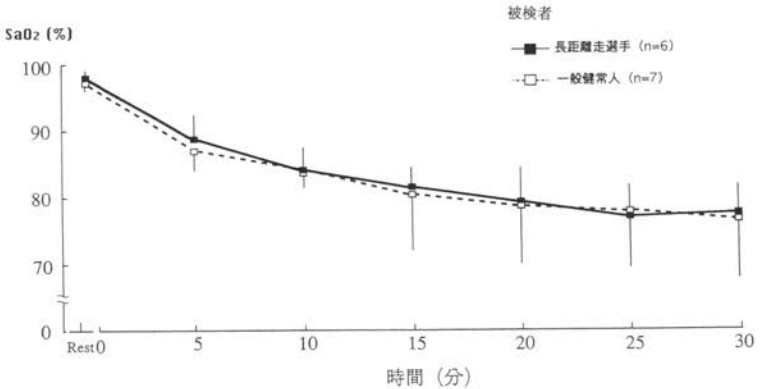


図3　長距離走選手と一般人とを対象として、低圧室を用いて低圧暴露試験（4,000 m 相当気圧で 30 分間）を行ったときの SaO_2 の低下。（山本、1996）

象として、低圧室で低酸素暴露試験を行ったときの SaO_2 の応答を比べたものである。$\dot{V}O_2$ max が高い（70 ml 以上）長距離走選手と、それほど高くない（50 ml 前後）一般人との間で、低酸素環境下での SaO_2 の低下には差がみられない。この結果は、$\dot{V}O_2$ max と SaO_2 を低下させない能力とが独立した関係にあることを示している。

4.　高地トレーニングの必要性

SaO_2 を低下させない能力はどのようにすればトレーニングできるのだろうか。トレーニングには「特異性」と呼ばれる原則がある。これは「トレーニングで与えた刺激に対応する能力は向上するが、それ以外の能力はあまり向上しない」ということを意味している。この原則を考慮すれば、低酸素に対応する能力は、酸素の濃い下界でいくらトレーニングをしても獲得されず、やはり酸素の薄い環境に身体を曝すことによってしか獲得できないのではないかと考えられる。

実際に、下界でどんなに激しいトレーニングをしたとしても、SaO_2 は 80～90％（3,000～4,000 m の高度に相当する）までしか低下しないことが知られている[3]。しかもこの

値に達するのは、高度に鍛錬された人が非常に激しい運動をしたときの、疲労困憊に至る寸前のわずかな時間に限られるという[3]。

低酸素環境で行うトレーニングには、高地トレーニングと低圧室トレーニングの2種類が考えられる。このうち低圧室トレーニングの方は、利用できる施設が少ないという点で一般的ではない。一方、高地トレーニングの方は特殊な施設を必要としないので、誰もが実践できるという長所がある。そこで以下、高地トレーニングの方法を中心に考えてみる。

陸上競技や水泳競技など下界のスポーツにおいても、近年、高地トレーニングの実践や科学的な研究が盛んに行われている。しかし、それらは下界での競技力の向上を狙いとしたものなので、その原則をそのまま高所登山にあてはめることはできない。一方、高所登山のための高地トレーニングの方法については、科学的な研究がほとんどない。そこで、これまでの登山家の報告を基にして、以下に筆者の私見をまとめてみた。

登山に先だって3,500 m～5,000 m の高地に長期滞在した場合には効果が高いと考えられる。たとえば、5,000 m 前後のチベット高原に1ケ月以上滞在した後にエベレストに単独で無酸素登頂したメスナーの例（1980 年）や、ネパールのクムジュン（3,800 m）で越冬し、酸素を用いてではあるが抜群の強さを発揮してエベレストに登頂した植村直己の例（1970 年）などをあげることができる。4,000 m 前後の高度で生活しているシェルパが高所で非常に強いということも、この考え方の妥当性を裏付けているだろう。

一方、マカルー登山に先だってアマダブラムの麓（5,800 m）に「銀の小屋」を建てて越冬したイギリスの登山隊（1960～61 年）は、高所に順応するどころかかえって衰退してしまったという有名な話がある[14]。人間の定住限界は約5,200 m とされていることも考えあわせると、それ以上の高度での長期滞在は逆効果ではないかと考えられる。

3,500 m 以下の高度ではどうだろうか。たとえば日本の山は、富士山を除けば高い山でも3,000 m をわずかに超える程度である。日本の登山家は当然日本の山で多くの登山を行っているが、富士山以外の山に多く登ったことによってヒマラヤで調子がよかったという話は聞かない。下界のスポーツの場合には2,000 m 前後の高度で高地トレーニングを行うことが多いが、高所登山の場合は3,000 m 以下の高度でトレーニングをしても目立った効果はないようにみえる。

以上をまとめると、高所登山のための高地トレーニングは、3,500 m～5,000 m 程度の高度で行うのが最も効果的であり、それより高すぎても低すぎても効果が小さくなるのではないかと考えられる。

5. 高地トレーニングの方法

高地トレーニングに最も適する3,500m～5,000 m の高度とは、人体にとってどのような意味をもつのだろうか。図4に示したように、SaO_2 は高度の上昇にともない低下し、3,500 m 以上の高度になると80% を割り込むようになる。この80% という値は、医療機関において急性の呼吸障害患者を扱う際、酸素治療を行う目安とされている。また登

山においても、下界の住人が急に高所に行くと高山病が起こるが、それは3,500 mを超える高所で特に多発する。

つまり、急性に近いかたちでSaO_2が80% を割り込む状況は、人間の身体にとって危機的な状況と考えられる。したがって高所登山を行う際、SaO_2が80% 前後となる3,500 m～4,000 m付近の高度において、あらかじめ十分に身体を順応させておくことは必須条件といってよいだろう。

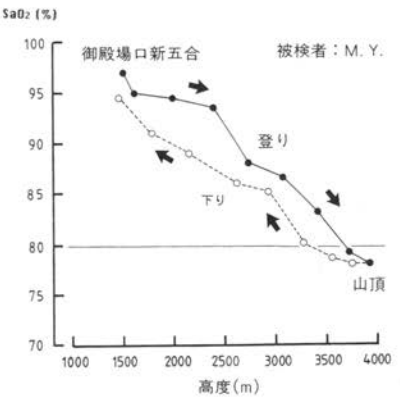


図4　御殿場口から富士山に登った時の高度とSaO_2との関係。3,500m前後の高度でSaO_2が80% を割るようになる。（山本、1996）

SaO_2を低下させない能力を身につけるということは、高所順応を獲得するということと同義である。これまで高所順応は、目的の山に行ってからルート工作や荷上げを兼ねて、その山を登下降しながら獲得するものと考えられてきた。しかしトレーニング科学の立場からみると、どんな身体の機能でも、トレーニングの効果が現れるまでには最低1～2ケ月程度はかかる。一方、通常の高所登山の期間も、1～2ケ月程度である。つまり、高所登山にとって最も重要な、低酸素環境でSaO_2を低下させない能力の獲得という点からみて、従来の高所登山はきわめて余裕の乏しい状態で行われてきたといえるのである。

$\dot{V}O_2max$は下界での持久トレーニングによって強化できるのに対して、SaO_2を低下させない能力は、おそらく低酸素環境でトレーニングをしない限り身につかない。また、$\dot{V}O_2max$を向上させるためには長期間（最低でも1～2ケ月間）のトレーニングが必要なように、SaO_2を低下させない能力を向上させるためにもやはり長期間をかけることが必要であろう。このように考えると、先に紹介したメスナーや植村直己、あるいはシェルパの例のように、登山に先だって4,000 m前後の高地にできるだけ長期間滞在することが、高所登山を成功させるための唯一かつ確実なトレーニング方法といえるのではないかと考えられる。

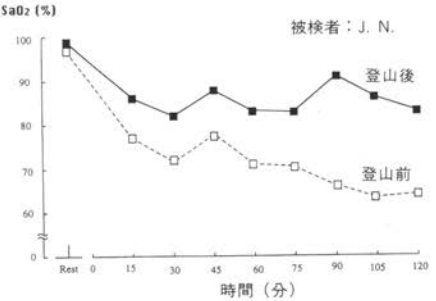


図5　御殿場口から富士山を2日間のうちに2回登り降りするというトレーニングを行い、その前後で低圧室を用いて低圧暴露試験（4,000 m相当気圧で120分間）を行ったときのSaO_2の応答。（山本、1996）

日本でこのようなトレーニングができる山は富士山しかない。富士山を登るとき、山頂に近づくと低酸素の影響によりそれまでとは異質な苦しさを感ずることは、誰もが認めることであろ

う。富士山頂に長期間滞在してトレーニングをするのが最善の方法なのであろうが、これは現時点では難しい。次善の方法は、この山にできるだけ頻繁に登ることだろう。富士山を有効に利用している高所登山家として、今回のチョー・オユー登山に同行した小西浩文氏をはじめ、戸高雅史氏、山野井泰史氏などの名をあげることができる。

筆者もチョー・オユーに出かける前に、5ケ月間で5回、すなわち1ケ月あたり1回の富士登山を行った。おそらく、全く行かないことに比べれば効果はあったものと考えられるが、この程度の頻度では十分ではないと感じた。上記の高所登山家の意見を集約すると、1ケ月に3回以上の登山を行うとかなりの効果があるといえるようである。図5は、富士山を2日間のうちに2回登り下りするというトレーニングを行い、その前後に低圧室を用いて低酸素下でのSaO_2の応答がどのように変化するかを観察したものである。1名の被検者の例でしかないが、登山後にSaO_2の低下が小さくなっていることがわかる。

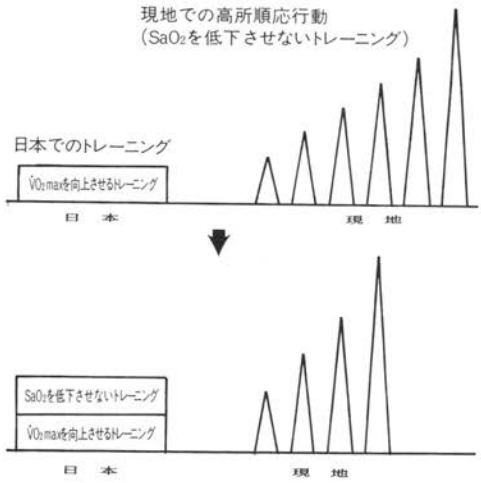


図6　従来の高所登山のトレーニング方法（上段）と、よりよいと考えられる方法（下段）。目的とする山へ行く前に、あらかじめSaO_2を低下させないトレーニングを十分に行うことにより、より余裕をもった登山が可能となるであろう。

遠征に出発する前の忙しい時期に富士登山を繰り返すことは面倒なことではある。しかしこれを行うことによって、現地での高所順応がよりスムーズに獲得でき、結果的には登山期間の短縮、あるいは同じ登山期間でもより余裕のある登山ができるのではないかと考えられる。

これ以外の方法としては、登山期間を可能な限り長くとり、目的とする山の登山に先だって、高所順応に最適な4,000 m前後の高度をもつ地域で、トレッキングあるいは軽登山をするのも効果的であろう。また、低圧室を利用するのであれば、4,000 mに相当する高度を中心として、できるだけ数多く、また長時間入室することが必要であろう。

いずれにせよ、これまでは目的とする山の麓に到着してから行うものとされていた「順応行動」を、図6に示したように、それ以前からできるだけ行うことが重要なポイントと考えられる。

6. 呼吸技術のトレーニング

原[1,2]は以前から、高所において呼吸を意識的にコントロールすることによって、登山能力の低下や高所障害を予防あるいは改善できるということを、経験的な立場から指摘していた。また増山[5]は最近、過呼吸を行うことによってSaO_2が改善することを、パルスオキシメーターを用いて客観的なデータで示している。筆者もチョー・オユーで小西氏から薦められて腹式呼吸を実践してみたが、図7のようにSaO_2や心拍数がはっきりと改善した。図2に示したように、SaO_2の低下が登山能力の低下や高所障害をもたらす元凶なのであるから[6]、高所に適した呼吸法を身につけている者はそうでない者に対して、きわめて有利な立場に立つといえよう。

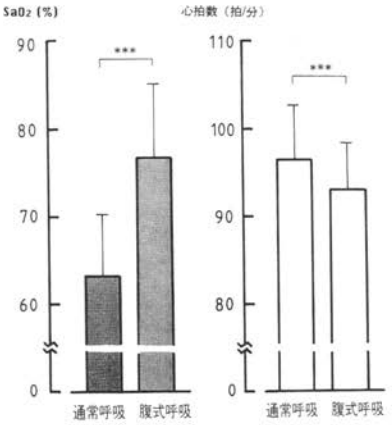


図7 筆者がチョー・オユーの BC (5,700 m) で、通常呼吸と腹式呼吸を行ったときのSaO_2と心拍数の比較。起床時に臥位で測定した16日分の平均値を示した。＊は有意差があることを示す。(山本、1996)

呼吸法を行うとSaO_2が上昇する理由は次のように説明できる。下界での普段の呼吸は無意識のうちに行われ、小さく息を吐いたり吸ったりして空気を肺に取り入れている（図8の左側）。このとき、肺の中には古い空気がかなり残っているので（残気量）、新しく入ってきた空気はこれと混ざり合い、肺胞内の酸素の量（分圧）は低下してしまう。古い空気によって新しい空気が薄められてしまうのである。下界では酸素の量が多いので、これでも酸素不足をきたすことはないが、高所ではもともと外気の酸素量が少ないので、下界と同じような呼吸をしていると酸素不足になり、高所障害や登山能力の低下を起こすことになる。

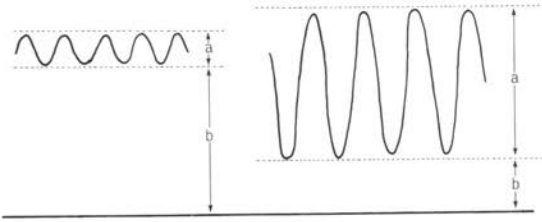


図8 肺における呼吸パターンの概念図。左側の図のように、小さく吐いて小さく吸うという通常の呼吸の場合、外気から取り入れた新しい空気（a）は肺の中に多量に残っている古い空気（b：残気量）と混ざり合うため、肺胞内の酸素分圧は大きく低下してしまう。右側の図のように、意識的に古い空気を吐き出してから吸えば、新しい空気の混ざる割合が大きくなるため、酸素分圧の低下を小さく抑えることができる。(山本作図)

高所に行くと、SaO_2を低下させないようにするために、無意識のうちに呼吸量を大きくする防御反応も起こる。しかし、それだけでは酸素不足を解消するに

は不十分なのである。そこで意識的な呼吸法が有効となる。意識的に古い空気を吐き出してから新しい空気を吸うことにより、肺胞内の酸素分圧をさらに上昇させることができる（図８の右側）。肺胞内の酸素分圧を上昇させれば、自動的にSaO_2も上昇するので、登山能力の低下や高所障害の発生をより効果的に防止できることになる。

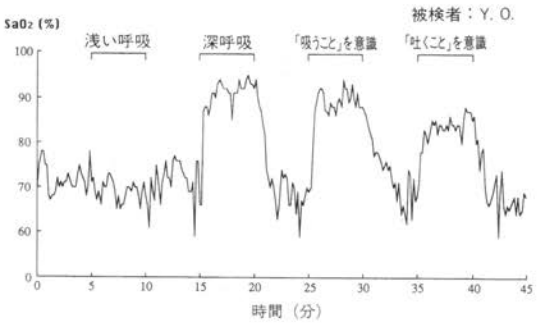


図９　低圧室（4,000 m 相当気圧）の中で、通常呼吸の他に各種の意識的な呼吸法を行ったときのSaO_2の応答。各種の呼吸法を５分間づつ、５分間の通常呼吸を間にはさんで、計 45 分間行っている。（山本、1996）

呼吸法の要点として「吐くことが重要」といわれるが[1,2]、その理由は上のような背景を考えれば理解できよう。

図９は低圧室の中で様々な呼吸法を行ったときのSaO_2の応答を示したものである。無意識な呼吸から意識的な呼吸法に切り替えると、SaO_2の値が急上昇し、呼吸法をやめると急下降することがわかる。高所でガモフバッグに入ると高度を約 2,000 m 下げたことと同じ効果があると言われているが、この図を見ると、適切な呼吸法を行うことによってもこれに劣らぬ効果が期待できることがわかる。

呼吸疾患に関する医学書[4,7,8]には、「呼吸訓練」という項がある。呼吸疾患の患者は、酸素の濃い下界であっても十分な酸素を取り入れることができないので、意識的に呼吸を管理することが必要となる。低酸素環境で登山を行う高所登山家も、これと非常によく似た立場に置かれているといってよいのである。



図10　呼吸疾患の医学書に掲載されている呼吸訓練法の一例。これらの訓練はすべて、息をゆっくりと大きく吐き出す能力の改善をねらいとしている。（織田ら、1979）

これらの医学書には、腹式呼吸、息をゆっくり長く吐く呼吸（図10）、口をす

ぼめる呼吸などさまざまな呼吸法や、身体をリラックスさせ酸素消費を減らす訓練などが解説されている。それらの内容は、これまで高所登山家[1,2,10]が経験的な立場から提唱してきた高所での呼吸技術とも、多くの共通点がみられるのである。

意識的な呼吸法が重要であるといっても、よい呼吸法と悪い呼吸法とがあることに注意しなければならない。よい呼吸法とは、基本的に「ゆっくり大きく」呼吸するということである。これに対して「速く大きく」呼吸すると、酸素は身体に入るが、二酸化炭素が過剰に失われてしまい、過換気症候群（目まいや失神）の原因となる。また「速く小さく」呼吸すると、肺胞内に新しい空気が十分に到達しなくなり、酸素不足を招く。

呼吸法のトレーニングは、体力トレーニングというよりは技術のトレーニングといった方がよい。この技術を身につけることは体力トレーニング以上に難しいことである。筆者もチョー・オユー登山の際に練習をしてみたが、とても一朝一夕で会得することは無理であることがわかった。呼吸法のやり方自体はごく簡単なのだが、それを絶えず行い続けることが至難の技なのである[16,17]。小西氏やメスナーは、下界の日常生活においても絶えずこの訓練を行っているとのことであるが、小西氏によれば、無意識のうちに正しい呼吸法ができるようになるまでには数年間もの訓練を要したという。

7. 要約

高所登山のための体力強化を行う際、これまでは最大酸素摂取能力（$\dot{V}O_2$ max）の向上に焦点があてられてきた。しかし、$\dot{V}O_2$ max と並んで、低酸素環境下で動脈血酸素飽和度（SaO_2）を低下させない能力を身につけることも重要であることを本稿では強調した。

これまでは、高所登山に出かける前には $\dot{V}O_2$ max を向上させるために下界で持久トレーニングが中心に行われた。そして、SaO_2 を低下させない能力は、目的とする山に行ってから順応行動を繰り返すことによって身につけるという方法がとられてきた。しかし、1～2ケ月の登山期間の間に、SaO_2 を低下させない能力を十分に獲得することは難しい。したがって、遠征に出発する前に、$\dot{V}O_2$ max を向上させるトレーニングとあわせて、SaO_2 を低下させない能力のトレーニングも十分に積んでおくことが必要と考えられる。

$\dot{V}O_2$ max は下界での持久トレーニングによって強化が可能であり、またその方法も確立されている。これに対して、SaO_2 を低下させない能力は、低酸素環境でトレーニングをしない限り身につかず、その方法も確立されていない。最善の方法は、4,000 m 前後の高地にできるだけ長期間滞在して持久トレーニングを行うことだと考えられる。4,000 m の高地をもたない日本の登山家にとっては、富士山にできるだけ頻繁に登ることが有効であろう。

また、このような体力トレーニングと並んで、低酸素環境で SaO_2 を低下させないような呼吸技術のトレーニングを普段から行うことも重要と考えられる。

引 用 文 献

1. 原　真：ヒマラヤサバイバル．悠々社，1994．
2. 原　真：すべては呼吸に始まる．岳人 571：138-139，1995．
3. 片山敬章，宮地元彦：10 週間の最大インターバルトレーニングが高強度運動中の動脈血酸素飽和度に及ぼす影響．体力科学 45：219-226，1996．
4. 北島政樹，藤村龍子編：臨床外科看護各論，医学書院，1995，pp.73-74．
5. 増山　茂：高山・高地とパルスオキシメーター．登山研修 7：141-151，1992．
6. 増山　茂：高所医学と生体酸素化の測定；戦後の歩み．登山研修 8：116-123，1993．
7. Moser，K.M.（栗原直嗣訳）：慢性呼吸器病の日常管理．金芳堂，1985，pp.47-50，69-73．
8. 織田敏次ほか編：呼吸管理・RCU，永井書店，1979，pp.369-376．
9. Oelz，O. et al.：Physiological profile of world-class high-altitude climbers．J. Appl. Physiol. 60：1734-1742，1986．
10. 尾形好雄：高所登山と体力．登山研修 10：39-43，1995．
11. 島岡　清：高所登山と体力．岩と雪 71：54-58，1979．
12. 島岡　清：高所登山とトレーニング．岩と雪 75：36-41，1980．
13. 島岡　清：高所登山と体力．臨床スポーツ医学 4：657-664，1987．
14. Ward，M.P. et al.：High Altitude Medicine and Physiology (2nd. Ed.)．Chapman & Hall Medical，1995，pp.557-571．
15. 山地啓司：最大酸素摂取量の科学．杏林書院，1992．
16. 山本正嘉：八千メートル峰，登山タクティクス解明への試み．岳人 578：119-125，1995．
17. 山本正嘉：運動生理学の成果と陥穽．山と溪谷 721：234-237，1995．
18. 山本正嘉：8000 m 峰無酸素登山の体験；死の地帯の運動生理Ⅰ，Ⅱ．体育の科学 45：909-914，985-990，1995．
19. 山本正嘉：新しく開発された「高所ベッド」の概要とその中での人体の生理的応答．登山医学 15：85-90，1995．
20. 山本正嘉：高所登山に必要な体力とそのトレーニング方法；特に最大酸素摂取量以外の能力に関して．登山研修 11：122-132，1996．
21. 山本正嘉：8,000 m 峰無酸素登山の運動生理：体力，順応，運動能力．登山医学 16：1996．(印刷中)

編集注　本稿は高所登山研究委員会が K 2 登山隊 1996 のために 96 年 3 月 19 日、ルームで開催した学習会の講議要旨である。

これから高所登山を目指すものにとって示唆に富む内容なので、山本正嘉氏に本誌のためにとりまとめていただいたものである。

山岳図書目録

「山岳図書目録」について

日本山岳会図書委員会

「山岳図書目録」を本年も継続掲載します。山の本以外に自然環境のものも拾ってありますし，昨年分でもれていたものも収録してあります。また締切り時間の都合で，一部に収録できなかったものがありますが，多種多様な本が出版されていることがわかります。有効にご利用ください。

- 記載は，日本で出版された日本語（また外国語）の図書と，外国で出版された英語，ドイツ語，フランス語の図書です。
- 日本語のものは発行年月日が1995年のもの，英語ほかの外国語のものは1993年から1995年のものです。
- 記載は整理番号，書名，著者名，発行所，定価，判型，発行地の順です。
- 定価，判型は日本語図書のみ掲載しました。判型が数字で表示されているものの単位はmmです。
- 記載の配列は，和書が書名の五十音順，洋書はアルファベット順です。
- 整理番号のうち，Nは日本語，Eは英語，Dはドイツ語，Fはフランス語です。N95とは，日本語図書，1995年発行の意味です。
- このリスト作成は図書委員会の有志が担当しました。

山岳図書目録——日本語　1994年

No.	書　名	著　者	発行所	定価	判型
N95-001	アイスクライミング	廣川健太郎／編	白山書房	¥1800 ＊増補改訂版	四六判
N95-002	愛知県の山—分県登山ガイド22	与呉日出夫	山と溪谷社	¥1750	A5
N95-003	アイヌ　神々と生きる人々	藤村久和	小学館	¥ 800	SL判
N95-004	アイヌ語地名の輪郭	山田秀三	草風館	¥6180	A5
N95-005	アイヌ植物誌	福岡イト子	草風館	¥2060	四六判
N95-006	アイルランド冬物語	アリス・テイラー／著 高橋豊子／訳	新宿書房	¥2080	四六判
N95-007	OUTSID—野生冒険学	岡田　昇	情報センター出版局	¥2800	A5
N95-008	アウトドアのキャンプ用具ハンドブック	ナツメ社／編	ナツメ社	¥1000	B6

N95-009	アウトドアこだわり図鑑	甲斐崎圭／監修	家の光協会	¥1800	A5
N95-010	アウトドアビジネスへの提言	中村　達	エスクァイアマガジンジャパン	¥1800	B6
N95-011	秋田631山全登頂記録	阿部暁雄	阿部暁雄		B5
N95-012	秋山—ヤマケイ登山学校9	福島功夫	山と溪谷社	¥1500	A5
N95-013	朝日連峰の四季	佐竹伸一	無明舎出版	¥2800	208×230
N95-014	芦峅の自然児・トンコ—佐伯富男追悼集	佐伯富男追悼集編集委員会／編	佐伯富男追悼集編集委員会	¥2500	四六判
N95-015	亜州回廊—インド・中国の旅	金井　武	連合出版	¥2000	四六判
N95-016	安曇野を描く	征矢野久	郷土出版社	¥1800	四六判
N95-017	あてのない絵はがき	辻まこと	小学館	¥ 780	文庫判
N95-018	あの山，この山—サラリーマン週末登山ライフ	川口暉夫	川口暉夫	¥1200	四六判
N95-019	阿尼瑪卿Ⅴ峰登頂報告書	鳥取大学山岳部／編	鳥取大学山岳部	¥1000	A4
N95-020	雨の匂いのする砂漠	G.P.ナバーン／著 小梨　直／訳	白水社	¥2200	四六判
N95-021	アメリカ自然史紀行	竹内健悟	無明舎出版	¥1600	四六判
N95-022	あやしい探検隊焚火酔虎伝	椎名　誠	山と溪谷社	¥1500	四六判
N95-023	嵐の大地パタゴニア	関野吉晴	小峰書店	¥1300	A5
N95-024	アラスカ　光と風	星野道夫	福音館書店	¥1400	文庫判
N95-025	有峰物語	飯田辰彦	NTT出版	¥1900	四六判
N95-026	歩くスキー徹底ガイド—基礎から楽しみ方まで	今村源吉	北海道新聞社出版局	¥1400	A5
N95-027	歩く地図S安曇野・立山・白川郷	あるっく社	山と溪谷社／発売	¥ 980	四六判
N95-028	歩く地図S北海道	あるっく社	山と溪谷社／発売	¥1100	四六判
N95-029	歩く地図S尾瀬・上州・佐渡	あるっく社	山と溪谷社／発売	¥ 980	四六判
N95-030	アルプス・スキー休暇	小谷　明／文・写真	東京書籍	¥1800	A5
N95-031	アルプスの氷河を滑る	熊谷　樫／絵・文	白山書房	¥1800	四六判
N95-032	アルプス・プロヴァンスの小さな旅	秋本和彦	東京書籍	¥1600	A5
N95-033	アンデス遙かなり—外交官22年・高野ひろし見聞録	高野ひろし	総合行政出版	¥1000	四六判
N95-034	異界を駆ける—山岳修行と霊能の世界	藤田庄市	学習研究社	¥1800	四六判
N95-035	行きたい人のチベット入門—西蔵好きのための役立ちノート	後藤ふたば	山と溪谷社	¥ 980	新書判
N95-036	イザベラ・バード旅の生涯	O.チェックランド／著 川勝貴美／訳	日本経済評論社	¥2884	四六判

N95-037	石鎚山気象遭難—石鎚の峰に散った多くの生命に捧げる	木暮　照	創風社出版	¥1200	新書判
N95-038	一枚の絵葉書	沢野ひとし	角川書店	¥1200	四六判
N95-039	いつか行きたい日本列島天然純朴の温泉	嵐山光三郎／文　山口大輔／写真	講談社	¥1800	A5
N95-040	いつか帰る森	本山賢司	講談社	¥1500	四六判
N95-041	岩木山にさく花	大橋耕造	北方新社	¥2800	B5変 ＊写真集
N95-042	岩手の渓流・滝20選	小西忠人／文　高橋照雄／写真	岩手日報社	¥1000	B6
N95-043	岩手のハイキングコース30	岩手日報社出版部／編	岩手日報社	¥1400	B6
N95-044	イワナ秘境の追跡	成瀬泰雄	三樹書房	¥1500	四六判
N95-045	ウエストンの信濃路探訪—山々への賛歌	田畑真一	センチュリー	¥1500	四六判
N95-046	ウエットランドの自然—エコロジーガイド	角野康郎・遊磨正秀	保育社	¥2300	B6
N95-047	美ガ原・霧ガ峰	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1000	四六判
N95-048	美ガ原・霧ガ峰・蓼科	実業之日本社	実業之日本社	¥ 900	四六判
N95-049	美ケ原の花—お花畑と186種の花	増村征夫	栃の葉書房	¥1000	四六判
N95-050	ウッディライフの四季	西川武彦	創樹社	¥1600	四六判
N95-051	ウトナイの四季—鳥たちの聖域	大畑孝二	北海道新聞社	¥2300	A5
N95-052	海と山の民俗誌	篠原　徹	吉川弘文館	¥6180	A5
N95-053	裏磐梯彩景—新日本の風景	鈴木一雄	日本カメラ社	¥2200	AB
N95-054	雲貴高原のヤオ族	田畑久夫・金丸良子	ゆまに書房	¥25000	A4
N95-055	江戸・東京百名山を行く	手島宗太郎	日本テレビ放送網	¥1200	B6
N95-056	江戸百名山図譜	住谷雄幸	小学館	¥2800	A5
N95-057	NHK気象ハンドブック	NHK放送文化研究所／編	日本放送出版協会	¥2200	A5
N95-058	EVEREST — From South Pillar	愛知学院大学山岳会／編	成文堂	¥2500	AB判
N95-059	黄金の大樹海—大興安嶺日中友好合同踏査先遣隊記録	安藤　潔	近代文藝社	¥1500	A5
N95-060	大分県の山歩き	吉川　満	葦書房	¥1600	四六判 ＊改訂版
N95-061	大阪府の山—分県登山ガイド26	中庄谷直・木村俊之	山と渓谷社	¥1750	A5
N95-062	オーロラに駆けるサムライ	谷　有二	山と渓谷社	¥1600	四六判
N95-063	オーロラの大地—アラスカの12カ月	相原なおみ	ビジネス社	¥1600	B6

N95-064	奥多摩　大菩薩	寺田政晴	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版
N95-065	奥多摩・秩父	弘済出版／編	弘済出版	¥1150	四六判
N95-066	奥多摩・秩父100の山と峠	津波克明	けやき出版	¥1500	A4変
N95-067	奥多摩の花・動物・自然・樹―ビジュアル・ネイチャー・ガイド	のんぶる舎編集部／編	のんぶる舎	¥1900	A5
N95-068	奥秩父・奥多摩・奥武蔵を歩く―山小屋の主人がガイドする	磯貝　猛・平田謙一	山と渓谷社	¥1800	A5
N95-069	奥日光自然ハンドブック―代表的な箱庭の景観を歩く	宮地信良	自由国民社	¥1300	B6
N95-070	奥三河の滝―10万年の旅	横山良哲	風媒社	¥1550	A4 ＊増補改訂版
N95-071	奥武蔵　秩父	寺田政晴	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版
N95-072	オコジョの不思議	野紫木洋	どうぶつ社	¥1500	B6
N95-073	尾瀬に死す	平野長靖	社会思想社	¥ 680	文庫判
N95-074	尾瀬の四季―久山一枝水墨画集	久山一枝	日貿出版社	¥2884	A4変
N95-075	尾瀬の花束	新井幸人	学習研究社	¥1000	B6
N95-076	男の民俗学	遠藤ケイ	山と渓谷社	¥2400	A5
N95-077	おばあさんの植物図鑑	斉藤政美／文　椎葉クニ子／語り	葦書房	¥2266	A5
N95-078	オブジェの山―わが心の燕岳	大川　淳	山と渓谷社	¥1500	B5 ＊写真集
N95-079	おもしろ自然・動物保護講座	小原秀雄	東洋書店	¥1680	四六判
N95-080	ガイア・シンフォニー間奏曲	龍村　仁	インファス	¥2000	B5
N95-081	甲斐路・清里	実業之日本社／編	実業之日本社	¥ 900	四六判
N95-082	海上の森の詩―雑木林の四季を歩こう	ものみ山自然観察会／編	七賢出版	¥1500	160×220
N95-083	KAILAS―チベット聖地巡礼	色川大吉・上野千鶴子／文　松本栄一／写真	小学館	¥3200	AB判 ＊写真集
N95-084	加賀白山	林　正一	日地出版	¥1100	四六判
N95-085	柿沢篤太郎山岳図書コレクション目録	平塚市中央図書館／編	平塚市中央図書館		A4
N95-086	火山の事典	下鶴大輔・他／編	朝倉書店	¥18540	A5
N95-087	カタクリの里―沢内村から春のたより	高橋喜平・瀬川　強	講談社	¥1500	180×200
N95-088	活断層と地震	金子史朗	中央公論社	¥ 740	文庫判
N95-089	金沢・能登・北陸	実業之日本社／編	実業之日本社	¥1300	B6
N95-090	上高地・乗鞍	小林俊樹	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版

N95-091	上高地・乗鞍—北アルプス	ブルーガイドセンター・山岳観光社／編	ブルーガイドセンター	¥1300	200×230 *改訂版
N95-092	上高地・槍・穂高　雲ノ平・乗鞍岳	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1100	四六判
N95-093	上高地・安曇野・黒部	実業之日本社／編	実業之日本社	¥ 900	四六判 *改訂版
N95-094	神様のくれた魚—ヤポネシア抒情紀行	立松和平	山と渓谷社	¥1500	B6
N95-095	神棲む谷—80年代遠山の記憶	中川賢俊／写真　飯田あれい／文	光村印刷	¥3900	310 *写真集
N95-096	ガラパゴスに魅せられて	本尾　洋	能登印刷出版部	¥3900	A4
N95-097	樺太植物誌	菅原繁蔵	国書刊行会	¥72000	B5 4冊セット
N95-098	カランコロン越える麗峰トゥクチェピーク登山隊	1994神戸トゥクチェピーク登山隊／編	1994神戸トゥクチェピーク登山隊	¥1500	B5
N95-099	カリマンタンの動物たち	安間繁樹	日経サイエンス社	¥1600	B6
N95-100	川喜田二郎著作集1　登山と探検	川喜田二郎	中央公論社	¥8800	A5
N95-101	川喜田二郎著作集4　発想法の科学	川喜田二郎	中央公論社	¥8800	A5
N95-102	川釣り礼賛	榛葉英治	平凡社	¥ 980	HL判
N95-103	環境NGO総覧（平成7年・上巻)—全国民間環境保全活動団体の概要	日本環境協会／編	日本環境協会		A4
N95-104	環境NGO総覧（平成7年・下巻)—全国民間環境保全活動団体の概要	日本環境協会／編	日本環境協会		A4
N95-105	関西　山越の古道（上）	中庄谷　直	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N95-106	関西　山越の古道（中）	中庄谷　直	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N95-107	関西周辺のキャンプ場オールガイド	実業之日本社／編	実業之日本社	¥1300	A5
N95-108	関西キャンプ場400 '95年版	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1400	四六判
N95-109	関大山岳部の70年(1925-1995)—創部70周年記念誌	宇都木慎一／編	関西大学山岳部		B5
N95-110	関東百名山	石丸哲也	山と渓谷社	¥2300	
N95-111	還暦のエベレスト	宮原　巍	山と渓谷社	¥1500	四六判
N95-112	危険！　活断層地図!!	石井勝利	データーハウス	¥1000	四六判
N95-113	紀行集　東京周辺の山	島本達夫／編	白山書房	¥1850	四六判
N95-114	気象予報士受験の手引	気象予報士試験研究会／編・著	成山堂書店	¥2800	A5
N95-115	軌跡	東　勝公	山路書房		四六判
N95-116	北アルプス—特選コース	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1200	四六判
N95-117	北アルプスやまびと物語	柳原修一	東京新聞出版局	¥1500	四六判

N95-118	北アルプス開拓誌—近代登山の基礎を築いた，山の先駆者たち	中村周一郎	郷土出版社	¥1600	四六判 ＊改訂版
N95-119	北岳を歩く—山小屋の主人がガイドする	中西俊明／写真・文	山と溪谷社	¥1600	A5
N95-120	北千島の自然誌	寺沢孝毅	丸善	¥1800	四六判
N95-121	北朝鮮の山	飯山達雄／編	国書刊行会	¥5800	A4 ＊写真集
N95-122	北の自然を守る—知床，千歳川そして幌延	八木健三	北海道大学図書刊行会	¥2060	四六判
N95-123	北の火の山	小池省二	朝日ソノラマ	¥1400	四六判
N95-124	北の山に還る—ひとり歩きの北海道38座紀行	見奈美秀蔵	見奈美秀蔵	¥1600	四六判
N95-125	キネシオテーピングThe Sports	全国キネシオテーピング協会／編	スキージャーナル	¥1500	B5
N95-126	九州の滝　渓　谷　湖	足利武三・井上　優	西日本新聞社	¥1700	B6
N95-127	京都丹波の山（上）	内田嘉弘	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N95-128	京都府の三角点峰—全183座完登の譜	横田和雄	ナカニシヤ出版	¥2900	A5
N95-129	京都府の山—分県登山ガイド25	坂井久光・内田嘉弘・大槻雅弘・木之下繁	山と溪谷社	¥1750	A5
N95-130	きょうは天気がいいから—勝手口から登山口へ	岡崎智恵子	岡崎智恵子	¥1300	B6
N95-131	霧ケ峰・美ケ原	野瀬和紀	日地出版	¥1100	四六判
N95-132	霧の山—続　ふくいの山・四季	増永迪男	ナカニシヤ出版	¥2000	四六判
N95-133	キリマンジャロの石—辺境の山・旅	伊佐九三四郎	現代旅行研究所	¥2000	200×140
N95-134	空撮登山ガイド（新版）No.1：北海道の山々	梅沢　俊・瀬尾　央	山と溪谷社	¥1700	B5
N95-135	空撮登山ガイド（新版）No.7：白馬・鹿島槍・針ノ木岳	中西俊明・内田　修	山と溪谷社	¥1700	B5
N95-136	空撮登山ガイド（新版）No.8：立山・薬師・雲ノ平	三枝輝雄・内田　修	山と溪谷社	¥1700	B5
N95-137	空撮登山ガイド（新版）No.12：北陸・近畿・中国の山々	吉澤康暢・吉田昭市・瀬尾　央	山と溪谷社	¥1700	B5
N95-138	草の海—モンゴル奥地への旅	椎名　誠	集英社	¥ 580	文庫判
N95-139	釧路湿原	表　優信	青菁社	¥1500	180×200 ＊写真集
N95-140	クマゲラにまつわる記憶	藤井忠志	盛岡タイムス社	¥1600	B6
N95-141	雲の上の診療所	大森薫雄	いしずえ	¥1700	四六判
N95-142	クライミングハンドブック	小日向徹	小日向徹	協賛金	B5
N95-143	グリーンピース・ストーリー	マイケル・ブラウン，ジョン・メイ／著　中野治子／訳	山と溪谷社	¥1600	B6

N95-144	栗駒山の四季	高橋亨夫	岩手日報社	¥2200	281×215 ＊写真集
N95-145	グリンデルワルト便り	中島正晃／発信　土田玉江／構成・文	山と渓谷社	¥1700	四六判
N95-146	グレートジャニー—人類400万年の旅　南米編Ⅰ	関野吉晴	毎日新聞社	¥4500	A4
N95-147	グレード別　近畿の山BEST 30	西村弘美	七賢出版 関西事業部	¥1500	四六判
N95-148	景観生態学	横山秀司	古今書院	¥2884	A5
N95-149	渓谷と山を訪ねて—東海ベストハイク	塚本義次／編	七賢出版 中部事業部	¥1500	四六判
N95-150	京阪神花の山旅	大阪府社会体育研究所／編	七賢出版 関西事業部	¥1500	四六判
N95-151	京阪神ベストハイク＆キャンプ30	友保深雪／編・著	七賢出版 関西事業部	¥1500	四六判
N95-152	ケイビング—入門とガイド	近藤純夫／編	山と渓谷社	¥2300	A5
N95-153	ケビンの里山自然観察記	ケビン・ショート	講談社	¥1700	A5
N95-154	鍍窓の彼方へ—鍍岳・チンネに逝った大石一馬さんを偲んで	ぶなの会／編	ぶなの会		A5
N95-155	光芒のとき	東京志岳会／編	東京志岳会		A4変
N95-156	広茫の山　御池岳—やぶこぎ讃歌	近藤郁夫	近藤郁夫	¥1500	四六判
N95-157	高野山四季の祈り	矢野建彦／写真　日野西真定／文	佼正出版社	¥2500	A5
N95-158	強力伝—21世紀最後の職人魂	新田次郎	小学館	¥1500	四六判
N95-159	国立公園図鑑	国立公園協会／編	大蔵省印刷局	¥1800	A5
N95-160	50歳からまた始めた山登り—二人で楽しく人生を歩むために	谷本蟬丸	新風書房	¥1500	四六判
N95-161	五十七歳の頂上	高橋銑十郎	高橋銑十郎	¥1500	B6
N95-162	古道紀行　甲州街道	小山　和	保育社	¥1800	B6
N95-163	古道紀行　塩の道	小山　和	保育社	¥1800	B6
N95-164	駒ヶ岳に魅せられて—全国18峰を尋ねて	鈴木　清	新風舎	¥1600	250
N95-165	ゴリラ探検記—赤道直下アフリカ密林の恐怖	河合雅雄	光文社	￥ 980	170 ＊復刻版
N95-166	これで安心登山術	岩崎元郎	東京新聞出版局	¥1300	四六判
N95-167	これなら安心　山歩き入門	小倉董子	主婦と生活社	¥1400	A5
N95-168	コンタツおじさんのちょっといい山	近藤辰郎	山と渓谷社	¥1900	B5
N95-169	こんなに美しい愛知の100山　新訂版—ハイキングコース徹底ガイド	あつた勤労者山岳会／編	風媒社	¥1550	A5
N95-170	西域記—玄奘三蔵の旅	玄奘／著　桑山正進／訳	小学館	¥1600	四六判

N95-171	埼玉県内の三角点—1995年度	遠山元信	遠山元信		B5
N95-172	ザイル—明治学院大学山岳部50周年記念号	小堀一政／編	明治学院大学山岳部		B5
N95-173	ザイルをかついだお巡りさん	長野県警察山岳遭難救助隊／編	山と渓谷社	¥1400	B6
N95-174	佐伯邦夫の山とスキー大全	佐伯邦夫	シー・エー・ピー	¥2500	A5
N95-175	蔵王だより　1	蔵王いこいの里／編	光陽出版社	¥1700	四六判
N95-176	相模大山	原田哲夫	近代文藝社	¥1700	四六判
N95-177	さっぽろ歴史散歩—山の辺の道・定山渓紀行	山崎長吉	北海道出版企画センター	¥1800	B6
N95-178	里山物語	今森光彦	新潮社	¥6800	B4変 ＊写真集
N95-179	サバンナに生きる	川田順造	くもん出版	¥3800	B5
N95-180	沢登り—ヤマケイ登山学校11	若林岩雄	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-181	沢登りのススメ—だれでも楽しめるもっと面白い山登り	敷島悦朗	山と渓谷社	¥ 980	新書判
N95-182	山書好日	日本山書の会・東海集会／編	日本山書の会・東海集会		A5
N95-183	山巓旅情	栗林一路	栗林一路		A5 ＊句集
N95-184	山野草への招待—四季の恵み＜里山から深山・渓谷まで＞	高木国保	広済堂出版	¥2500	A5
N95-185	山楽百花—自然のフォーカス	小荒井実	歴史春秋出版	¥2000	A5
N95-186	山稜 '95	全日本山岳写真協会／編	全日本山岳写真協会	¥1200	220×220
N95-187	シェルパ斉藤のバックパッキング術	斉藤政喜	小学館	¥1500	AB判
N95-188	滋賀県の山—分県登山ガイド24	片岡浜子・山本武人・沢原道則・米田　実	山と渓谷社	¥1750	A5
N95-189	滋賀高原—写真でたどる山と花の旅4	中村至伸	ほおずき書籍	¥1300	167×189
N95-190	四季戸隠	栗田貞多男	クレオ	¥1000	150×150 ＊写真集
N95-191	四季の山野草	夏梅陸夫	創元社	¥2000	四六判 ＊写真集
N95-192	シベリア大自然	福田俊司	朝日新聞社	¥3600	A4横 ＊写真集
N95-193	四万十川・歩いて下る	多田　実	築地書館	¥1854	四六判
N95-194	秋景—北の大地	白井良明	光村印刷	¥2000	200×220 ＊写真集
N95-195	SHUKRIA—菰野山岳会シスパーレ峰登山隊1994報告書	菰野山岳会／編	菰野山岳会		B5

N95-196	樹上の出会い—熱帯雨林の「天蓋」の生態学	三谷雅純	どうぶつ社	¥2060	B6
N95-197	樹木と生きる—山びとの民俗誌	宇江敏勝	新宿書房	¥1900	四六判
N95-198	縄文杉に会う	立松和平／文　日下田紀三／写真	講談社	¥1300	A5
N95-199	白神山地—恵みの森へ	根深　誠	日本交通公社出版事業局	¥1500	四六判
N95-200	知られざるジャパノロジスト—ローエルの生涯	宮崎正明	丸善	¥ 680	新書判
N95-201	シリア縦断紀行2	G.L.ベル／著　田隅恒生／訳	平凡社	¥2678	B6変 ＊東洋文庫
N95-202	シルクロード憧憬	庄司　勲	光村印刷	¥1000	170×190 ＊写真集
N95-203	シルクロード西へ—浪漫冒険紀行	京谷　寛	マインドカルチャーセンター	¥1600	四六判
N95-204	知床	窪田正克	平凡社	¥4500	A4横 ＊写真集
N95-205	知床記—自然と人との出会いについて考える	早川禎治	近代文藝社	¥2200	B6
N95-206	白馬岳を歩く—山小屋の主人がガイドする	磯貝　猛／写真・文	山と渓谷社	¥1600	A5
N95-207	白馬　鹿島槍	白馬登高会	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版
N95-208	白き嶺の男	谷　甲州	集英社	¥1400	四六判
N95-209	新・美しい自然公園12—日光国立公園「奥日光」	自然環境センター／編	自然公園美化管理財団		
N95-210	信仰の山	吉村　迪	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N95-211	信州	実業之日本社／編	実業之日本社	¥1300	B6
N95-212	信州讃歌	東山魁夷／画・文　長野県信濃美術館・東山魁夷館／編	求竜堂	¥2900	240
N95-213	信州の滝紀行—名瀑100選	窪田文明	郷土出版社	¥1600	四六判
N95-214	信州の地質めぐり—自然史ハイキング	地学団体研究会松本支部／編	郷土出版社	¥1600	四六判
N95-215	信州の歴史と文化—山と平と文学と	信州大学「信州の歴史と文化」編集委員会／編	郷土出版社	¥1600	四六判
N95-216	信州花の旅	増村征夫	新潮社	¥1500	B5変
N95-217	新選・山のパンセ	串田孫一／自選	岩波書店	¥ 670	文庫判
N95-218	新秩父見て歩き—ふるさと散策コースガイド12選	秩父愛鳥会／編	幹書房	¥ 900	A5
N95-219	新・花の百名山	田中澄江	文藝春秋社	¥ 550	文庫判
N95-220	神秘アラスカ	金本孔俊	京都書院	¥5800	240×310 ＊写真集
N95-221	森林と日本人	北村昌美	小学館	¥4800	菊判
N95-222	森林文化への道	筒井迪夫	朝日新聞社	¥1400	四六判

N95-223	人類400万年の旅—南米編1	関野吉晴	毎日新聞社	¥4500	A4
N95-224	スイス・アルプスの花	柳　宗民	日本交通公社出版事業局	¥1700	A5
N95-225	スイス・アルプス花の旅	山田常雄／著　鈴木光子／写真	講談社	¥1500	A5
N95-226	スイス・アルプスひとり歩き術	池田光雅	晶文社	¥2400	四六判
N95-227	スーパー低山ベストコース—東京周辺	武村岳男	山と溪谷社	¥1500	A5
N95-228	スキーの医学	石井清一他／編	南江堂	¥3914	B5
N95-229	鈴鹿源流	辻　凉一	山人舎	¥1600	B6
N95-230	鈴鹿を歩く	吉住友一他／文　笠井道男他／写真	山と溪谷社	¥1800	A5
N95-231	スポーツに必要な実践栄養学—免疫を高めるために	岸野泰雄・他	診断と治療社	¥3914	B5
N95-232	西安・雲南・シルクロード120パーセントガイド	日地出版／編	日地出版	¥1500	四六判
N95-233	生物多様性—生命の豊さを育むもの	堂本暁子	岩波書店	¥1000	DL判
N95-234	世界遺産—白神山地からの発信	野添憲治・北川智彦／編	同友館	¥1700	四六判
N95-235	世界探検歴史地図	F.フェルナンデス=アルメスト／編　植松みどり他／訳	原書房	¥25750	B4
N95-236	世界の名峰・花巡礼	白旗史朗	新日本出版社	¥3800	AB判 ＊写真集
N95-237	世界の山やま—アジア・アフリカ・オセアニア編	岩田修二・小疇　尚・小野有五／編	古今書院	¥2800	B5
N95-238	世界の山やま—ヨーロッパ・アメリア・両極編	岩田修二・小疇　尚・小野有五／編	古今書院	¥2800	B5
N95-239	全国花の群落地ガイド	大貫　茂	山と溪谷社	¥1500	四六判
N95-240	全国名水の旅—首都圏版	南　正時	山と溪谷社	¥1300	B6
N95-241	全国山の民宿	永岡書店／編	永岡書店	¥1200	A5
N95-242	千年ブナの記憶	塩野米松／文　千葉克介／写真	テレコムスタッフ	¥2400	190×190
N95-243	続々　展望の山旅	藤本一美・田代　博／編	実業之日本社	¥2000	A5変
N95-244	続・ひと味違う名古屋からの山旅	西山秀夫／編	七賢出版	¥1500	四六判
N95-245	空からみる世界の火山	荒牧重雄・他／編	丸善	¥13390	190×270
N95-246	大地の紋様—Patterned Ground in Spitsbergen	小疇　尚	小疇　尚		300×190
N95-247	大陸浪人	稲垣徳文	編集室ヴィスリー	¥1800	265×256
N95-248	逃TAO—異端の画家・曹勇の中国大脱出	合田　彩	文藝春秋社	¥1900	B6

N95-249	ダウラギリⅠ峰登山報告書1994—カランコランの山	同人シルバータートル隊／編	同人シルバータートル隊		B5
N95-250	高尾山	雪子・F.グレイセング	光陽出版社	¥1500	A4
N95-251	高尾山四季探訪—森と里のくらしから	いだ　よう／写真・文	けやき出版	¥1700	A5変
N95-252	高尾山　氷花楽乱	斎藤義範／写真　上田恵弘／詩	のんぶる舎	¥2500	181×251
N95-253	高尾　陣馬	馬場渓二	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版
N95-254	高山・飛騨路	実業之日本社／編	実業之日本社	¥ 900	四六判
N95-255	立山　黒部	石坂忠久	日地出版	¥1100	四六判 ＊第2版
N95-256	立山信仰の里—あしくら寺	広野和雄	桂書房	¥2800	220×230
N95-257	立山・剣・白馬岳　後立山連峰	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1200	四六判
N95-258	立山・剣岳を歩く—山小屋の主人がガイドする	鈴木昇己／技術指導　内田　修／写真　平本雅信／文	山と渓谷社	¥1640	A5
N95-259	立山遊記・立嶽登臨圖記	金子盤蝸／稿　正橋剛二／校注	桂書房	¥3090	A5
N95-260	楽しい京の山歩き—史跡とその歴史をたずねて	岩田英彬	松籟社	¥1400	B6
N95-261	旅をする木	星野道夫	文藝春秋社	¥1500	B6
N95-262	探検家の野外料理	キャロリン・ガン／著　藤田聖子／訳	山海堂	¥1600	A5
N95-263	タンザニアの草原にて—変わりゆく野性と暮らして	加瀬直明	研成社	¥1648	四六判
N95-264	丹沢讃歌	安原修次	ほおずき書籍	¥2800	A5
N95-265	丹沢山塊	奥野幸道	日地出版	¥1100	四六判
N95-266	丹沢の生きものたちの悲鳴—'94丹沢シンポジウム	丹沢ドン会／企画・編	夢工房	¥ 500	A5
N95-267	丹沢の谷110ルート	丹沢渓谷調査団	山と渓谷社	¥2000	A5
N95-268	丹沢を日本のツェルマットに—丹沢ブナ枯死シンポジウム	丹沢ブナ党／企画・編	夢工房	¥ 500	A5
N95-269	丹沢夜話　続々	ハンス・シュトルテ	有隣堂	¥2000	四六判
N95-270	単独登山—ヤマケイ登山学校13	佐古清隆	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-271	丹波の自然	丹波自然友の会／編	神戸新聞総合出版センター	¥2000	四六判
N95-272	地球生活	星川　淳	平凡社	¥1200	HL判
N95-273	地球の歩き方7　中央ヨーロッパ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1680	A5
N95-274	地球の歩き方8　メキシコ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1680	A5

N95-275	地球の歩き方15　ニュージーランド'96～'97版	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N95-276	地球の歩き方25　ドイツ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1680	A5
N95-277	地球の歩き方28　ネパール	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N95-278	地球の歩き方31　台湾	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1480	A5
N95-279	地球の歩き方39　中国—西安とシルクロード	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N95-280	地球の歩き方40　中国—チベット	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N95-281	地球の歩き方44　スイス	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1580	A5
N95-282	地球の歩き方47　アラスカ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥1680	A5
N95-283	地球の歩き方89　南米Ⅰ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥2080	A5
N95-284	地球の歩き方90　南米Ⅱ	地球の歩き方編集室／編	ダイヤモンド・ビッグ社	¥2080	A5
N95-285	チチカカ湖めざして	関野吉晴／写真・文	小峰書店	¥1300	A5
N95-286	TIBET—光との出会い	Will	地湧社	¥3090	210×180
N95-287	チベット・聖山・巡礼者—カイラスと通い婚の村	玉村和彦	社会思想社	¥ 640	文庫判
N95-288	西蔵放浪	藤原新也	朝日新聞社	¥1000	文庫判
N95-289	チベット・曼陀羅の世界—その芸術・宗教・生活	色川大吉／編	小学館	¥1000	DL判
N95-290	知命からのヨーロッパ・アルプス—希望と祈り	内田陽一	近代文藝社	¥2000	A5
N95-291	中央アジア探検史	深田久弥	白水社	¥6800	A5変 ＊復刊
N95-292	中央アルプス・御岳山・白山	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1200	四六判 ＊改訂版
N95-293	中高年の山ベストコース—関西周辺	高田　収／編	山と渓谷社	¥1600	A5
N95-294	中高年の山歩き—ヤマケイ登山学校12	丸山晴弘	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-295	中世の神仏と古道	戸田芳実	吉川弘文館	¥2987	四六判
N95-296	中部の旅と釣り	希代　宏	リバティ書房	¥1200	B6
N95-297	朝鮮紀行	イザベラ・ビショップ(バード)／著　時岡敬子／訳	図書出版社	¥4429	B6
N95-298	鳥葬の国—秘境ヒマラヤ探検記	川喜田二郎	光文社	¥ 980	B6 ＊復刻版
N95-299	ちょっといい宿・好きな宿—旅行作家がすすめる	日本旅行作家協会／編	日地出版	¥1500	A5
N95-300	沈黙の警鐘—信州の自然はいま	上島義弘	ほおずき書籍	¥1300	四六判

N95-301	麒麟峰初登頂	岐阜大学麒麟峰学術登山隊	東京新聞出版局	¥2800	A4変
N95-302	剣岳別山尾根—1993年度春山合宿遭難報告書	早稲田大学山岳部／編	早稲田大学山岳部		A4
N95-303	低山を歩く	横山厚夫	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-304	定本・信州百峠	井出孫六・市川健夫／監	郷土出版社	¥2000	B5 ＊改訂普及版
N95-305	デルスー・ウザーラ　上	ウラジミール・アルセーニエフ／著　長谷川四郎／訳	河出書房新社	¥ 760	文庫判
N95-306	デルスー・ウザーラ　下	ウラジミール・アルセーニエフ／著　長谷川四郎／訳	河出書房新社	¥ 800	文庫判
N95-307	天気をよむ・地形をよむ	川口邦雄	マサ・クリエイティブ	¥1380	四六判
N95-308	天山山脈カシカール峰初登頂の記	1994年JWAF瀬戸内天山カシカール峰登山隊／編	1994年JWAF瀬戸内天山カシカール峰登山隊		B5
N95-309	天峰槍ヶ岳	岩佐浩幸	クレオ	¥1000	150×150 ＊写真集
N95-310	東京・首都圏からの日帰りの旅	実業之日本社／編	実業之日本社	¥1300	A5
N95-311	東京の森林（もり）—あるいて・みて・かんがえる	(財) 東京市町村自治調査会／編	公人社	¥2266	B6
N95-312	峠—秩父への道	大久根　茂	さきたま出版会	¥1700	B6
N95-313	峠の廃道—秩父困民党紀行	井出孫六	平凡社	¥1200	HL判
N95-314	東海自然歩道　日帰りハイキング3—箕面公園，鈴鹿峠	武村岳男	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-315	東西登山史考	田口二郎	岩波書店	¥ 950	DL判
N95-316	東方見聞録	マルコ・ポーロ／著　長澤和俊／訳	小学館	¥1500	四六判
N95-317	東北の山—特選コース	山と渓谷社／編	山と渓谷社	¥1800	四六判 ＊改定版
N95-318	道北の自然を歩く—地質あんない	道北地方地学懇話会／編	北海道大学図書刊行会	¥1648	B6
N95-319	遠い林・近い森	菅原　聰	愛智出版	¥2000	A5
N95-320	ドキュメント渓流　No.1	朝風社／編	朝風社	¥2400	A5
N95-321	徳島の静かな名峰	尾野益大	尾野益大	¥1300	新書判
N95-322	徳島やま歩記	尾野益大	近代文芸社	¥1500	B6
N95-323	とっておき　北海道の山—道産子が案内する尾根・谷・スキー	三和裕佶	東京新聞出版局	¥1500	B6
N95-324	富山・立山・五箇山	実業之日本社／編	実業之日本社	¥ 900	四六判
N95-325	鳥居龍藏伝—アジアを走破した人類学者	中薗英助	岩波書店	¥3600	四六判
N95-326	トルコ紀行—炎天乾風	小田陽一	朝日ソノラマ	¥1300	B6

N95-327	トレッキング入門	Outdoor 編集部／編	山と溪谷社	¥1600	B5
N95-328	長き尾根の果てに—早坂敬二郎遺稿集	東京農大山岳会／編	東京農大山岳会	¥5000	AB判
N95-329	名古屋近郊いで湯の山旅	与呉日出夫／編・著	七賢出版	¥1500	四六判
N95-330	名古屋周辺山旅徹底ガイド—台高・鈴鹿・奥美濃	日本山岳会東海支部／編	中日新聞本社	¥1600	A5
N95-331	名古屋周辺ワンデイ・ハイク	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥1200	四六判
N95-332	名古屋から行く隠れた名山	松井志津子／編	七賢出版	¥1700	A5
N95-333	名残りの冬	国香ようこ	盛岡タイムス	¥1600	A5
N95-334	夏山—ヤマケイ登山学校 8	野村　仁	山と溪谷社	¥1500	A5
N95-335	七つの最高峰	ディック・バス，フランク・ウェルズ，リック・リッジウェイ／著　三浦恵美里／訳	文藝春秋社	¥2600	B6
N95-336	ナマステ	古味信彦	近代文藝社	¥1400	四六判
N95-337	奈良県の山—分県登山ガイド 28	小島誠孝	山と溪谷社	¥1750	A5
N95-338	ナンガ・パルバットからＫ２へ—ナンガ・パルバットからＫ２登山記録	日本教員登山隊／編	日本教員登山隊	¥4000	B5
N95-339	南極撮影･12万キロ—前人未到，大陸一周に賭けた 21 年間の記録	白川義員	小学館	¥1700	四六判
N95-340	南極の自然誌	サンフォード･A.モス／著　青柳昌宏／訳	どうぶつ社	¥3090	四六判
N95-341	なんで山登るねん—わが自伝的登山論	高田直樹	山と溪谷社	¥1400	四六判 ＊新装版
N95-342	なんで山登るねん—わが自伝的登山論　続	高田直樹	山と溪谷社	¥1400	四六判 ＊新装版
N95-343	なんで山登るねん—わが自伝的登山論　続々	高田直樹	山と溪谷社	¥1400	四六判 ＊新装版
N95-344	西丹波秘境の旅—漂白する丹後王朝の末裔	澤　　潔	かもがわ出版	¥2200	四六判
N95-345	ニセコ連峰・羊蹄山への誘い	北海道地図株式会社／編	北海道地図株式会社	¥2200	
N95-346	日光・奥鬼怒	沼尾正彦・室井正松	日地出版	¥1100	四六判
N95-347	日台友好南湖大山・太平山親善登山報告書—さあーイグドー	日本山岳会秋田支部／編	日本山岳会秋田支部		B5
N95-348	日本アルプス—登山と探検	W.ウェストン／著　岡村精一／訳	平凡社	¥1400	HL判
N95-349	日本アルプス登攀日記	W.ウェストン／著　三井嘉雄／訳	平凡社	¥2781	B6変 ＊東洋文庫
N95-350	日本アルプスと近代詩歌—平成７年度特別展・特別誌	窪田空穂記念館／編	窪田空穂記念館		B5

N95-351	日本人の自然観	伊東俊太郎／編	河出書房新社	¥3200	四六判
N95-352	日本の自然1—火山と地震の国	中村一明・松田時彦・守屋以智雄	岩波書店	¥3800	菊判
N95-353	日本の自然2—日本の山	貝塚爽平・鎮西・小疇・五百沢・松田・藤田	岩波書店	¥3800	菊判
N95-354	日本の自然—21世紀に残したい'95年版	朝日新聞社／編	朝日新聞社	¥3700	260×210
N95-355	日本の大自然21　富士箱根伊豆国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-356	日本の大自然22　雲仙天草国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-357	日本の大自然23　山陰海岸国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-358	日本の大自然24　南アルプス国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-359	日本の大自然25　利尻礼文サロベツ国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-360	日本の大自然26　知床国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-361	日本の大自然27　陸中海岸国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-362	日本の大自然28　小笠原国立公園	森田敏隆	毎日新聞社	¥2900	A4変
N95-363	日本の滝	永瀬嘉平	毎日新聞社	¥4800	A4 ＊写真集
N95-364	日本の滝—躍動する水の美と名瀑への招待	永瀬嘉平・三島昭男・宮田登他	講談社	¥1500	A5
N95-365	日本の森と海に未来はあるか—森に訊け3	橋本克彦	講談社	¥1800	四六判
N95-366	日本の森あんない・東日本篇—樹と森の自然ウオッチング・ガイド	石橋睦美	淡交社	¥2000	A5
N95-367	日本の森あんない・西日本篇—樹と森の自然ウオッチング・ガイド	石橋睦美	淡交社	¥2000	A5
N95-368	日本の山はなぜ美しい—山の自然学への招待	小泉武栄	古今書院	¥2600	四六判
N95-369	日本百名山登山ガイド下	山と渓谷社	山と渓谷社	¥1600	A5 ＊改訂版
N95-370	「日本百名山」の深田久弥と山の文学展（1995.9/2-10/8）	世田谷文学館／編	世田谷文学館	¥1000	A5
N95-371	日本風景論	志賀重昂／著　近藤信行／校訂	岩波書店	¥ 770	文庫判
N95-372	日本フリークライミングルート集	北山　真／編	山と渓谷社	¥2500	B5
N95-373	日本列島花maps　北海道の花 Part 3	北隆館／編	北隆館	¥2500	B5

N95-374	日本列島花maps 中部の花 Part 3	北隆館／編	北隆館	¥2500	B5
N95-375	熱帯雨林 BORNEO	水越 武	講談社	¥4500	A4変 ＊写真集,CD付
N95-376	ネパール ヒマラヤ・トレッキング	内田良平	実業之日本社	¥1800	B6変
N95-377	ネパール ヒマラヤトレッキング案内	中村昌之・内田良平	山と渓谷社	¥3900	B5
N95-378	ネパールヒマラヤの山旅	大関 保	穂高書店	¥2800	四六判
N95-379	ネパール凡人旅行	根本りつ子	こーりん社	¥1500	A5
N95-380	野の花の小径	いがりまさし	山と渓谷社	¥2800	AB ＊写真集
N95-381	野の花フィールド日記	松岡真澄	山と渓谷社	¥1800	B6
N95-382	野の花・山の花	朝山英一・鶴島久男	小学館	¥1800	AB
N95-383	登ればそれが名山	吉津征喜	近代文藝社	¥1500	四六判
N95-384	のんびり山歩きハンドブック—楽しく安全に歩くために	浅野孝一	自由国民社	¥1500	B5
N95-385	バークカヌーは生き残った	ジョン・マクフィー／著 中川美和子／訳	白水社	¥2000	四六判
N95-386	バードウオッチングを楽しむ本	亀田竜吉	学習研究社	¥1000	文庫判
N95-387	ハイキング12カ月—関西周辺	山と渓谷社大阪編集室／編	山と渓谷社	¥1600	A5 ＊改訂版
N95-388	バイクで越えた1000峠	加曽利隆	日本交通公社出版事業局	¥1500	四六判
N95-389	ハイグレード・ハイキング—東京周辺	内田鎌一／編	山と渓谷社	¥1600	A5 ＊改訂版
N95-390	パキスタン北部パミールの3つの峠—1994年踏査報告書	神奈川ヒマラヤンクラブ／編	神奈川ヒマラヤンクラブ		B5
N95-391	HAKUSAN—美しき神々の山	曽我隆行	橋本確文堂	¥2500	250×240
N95-392	白頭山の青春	梅棹忠夫・藤田和夫／編	朝日新聞社	¥1800	四六判
N95-393	はじめての人の沢登り読本	寺澤眞次	寺澤眞次	¥ 800	A5
N95-394	初めての山菜採り	艾原貴志	主婦と生活社	¥1400	A5
N95-395	パタゴニア探検記	高木正孝	岩波書店	¥ 950	DL判
N95-396	果てしなき山稜	志水哲也	白山書房	¥1800	四六判
N95-397	花咲ける孤独—評伝・尾崎喜八	重本恵津子	潮出版社	¥1500	四六判
N95-398	花の王国—白馬連峰のお花畑	増村征夫	新潮社	¥4000	B5変 ＊写真集
N95-399	花の霧ケ峰—フラワーウォッチハンドブック8	田中豊雄	ほおずき書籍	¥1000	新書判
N95-400	花の高原を歩く	安井 仁	グラフィック社	¥1980	A5
N95-401	花の志賀高原—フラワーウォッチハンドブック11	田中豊雄	ほおずき書籍	¥1000	新書判

N95-402	花の四季譜	井上光三郎	東京書籍	¥1800	A5
N95-403	花の栂池自然園—フラワーウォッチハンドブック12	田中豊雄	ほおずき書籍	¥1000	新書判
N95-404	パノラマアルプス	藤田弘基	恒文社	¥4900	230×310 *写真集
N95-405	母なる大空—冬期サガルマータ南西壁（1991-92/1993-94）	群馬県山岳連盟／編	群馬県山岳連盟	¥3500	B5
N95-406	春の山野草100	高橋勝雄	日本放送出版協会	¥1500	A5
N95-407	春山—ヤマケイ登山学校7	酒井国光	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-408	磐梯・吾妻山	渡辺徳仁・仁井田研一	日地出版	¥1100	四六判
N95-409	PEAKS OF GLORY—世界の山を登る	ステファーノ・アルディート／著　手塚勲・池田常道／訳	山と渓谷社	¥4800	B4変 *写真集
N95-410	比叡山／大原／坂本	京都滋賀自然観察会／編	京都新聞社	¥1400	四六判
N95-411	比叡山歴史の散歩道	講談社／編	講談社	¥1500	A5
N95-412	秘境ヒマラヤ・父と子の旅	小松健一	高文研	¥1854	四六判
N95-413	ひたすら渓流釣り	森　秀人／編	世界文化社	¥1500	B6
N95-414	ひとはなぜ自然を求めるのか	山口昌男	三田出版会	¥1300	A5
N95-415	人はなぜ道に迷うか	山口裕一	筑摩書房	¥1100	B6
N95-416	ひとり歩きの岳人—マイペースで楽しく山歩きをする人のために	鈴木璋三	新風書房	¥1200	四六判
N95-417	火の山	ロバート・デッカー，バーバラ・デッカー／著　井田喜明／訳	西村書店	¥3600	B5
N95-418	ヒマラヤ—大石一馬遺作写真集	大石一馬	大石トキ	¥3500	A4
N95-419	ヒマラヤに架ける夢—エコロジーと参画に基づいた山村活性化	川喜田二郎／編・著	文真堂	¥2200	A5
N95-420	ヒマラヤの渚—博物館に10億年以上前の“ヒマラヤの渚”を再現する	酒井治孝	近代文藝社	¥1600	四六判
N95-421	秘密国チベット	青木文教	芙蓉書房出版	¥3800	四六判
N95-422	百山百歓	山口つぐお	山口つぐお		160×220
N95-423	100の山と峠—奥多摩・秩父	津波克明	けやき出版	¥1500	A5変
N95-424	100 MT.FUJI—神々のやどる山	大山行男	キュウ・フォト・インターナショナル	¥7000	260×260
N95-425	評伝　今西錦司	本田靖治	講談社	¥ 680	文庫判

N95-426	比良の自然をみんなで楽しもう―子どもたちとの山のぼりをつづけて	淵田悌二	近代文芸社	¥1500	200
N95-427	琵琶湖発Ⅰ	鍔山英次／写真　唐木清志／文	サンライズ印刷出版部	¥2500	B5横 ＊写真集
N95-428	風景スケッチ12章	亀子　誠	日貿出版社	¥2369	B5
N95-429	夫婦で歩いたシルクロード	中山富太郎・佐代子	現代旅行研究所	¥2000	四六判
N95-430	ブータン自転車旅行―ヒマラヤの秘境600キロをマウンテンバイクで走る	九里徳泰・林　美砂	山と渓谷社	¥1500	四六判
N95-431	フォッサマグナ	山下　昇／編・著	東海大学出版会	¥4944	B5
N95-432	ふくしま　ブナ巡礼	若林健二／写真　奥田博／文	歴史春秋出版	¥2000	A5
N95-433	富士異彩	東京新聞編集局／編	東京新聞出版局	¥2900	240×260 ＊写真集
N95-434	富士山この一枚―ガイドとアドバイス	白旗史朗／編・著	日本カメラ社	¥3200	A4変
N95-435	富士登山ハンドブック―富士山の自然を楽しむために	富士自然動物園協会／編	自由国民社	¥1500	B6
N95-436	富士北麓の四季	関口幸雄	光村印刷	¥2000	201×220 ＊写真集
N95-437	富士よ　われらの	白旗史朗／編	朝日新聞社	¥3600	240×250 ＊写真集
N95-438	ふたりの夏山―夫婦で歩いた日本の高山ベストテン	藤田健次郎	山と渓谷社	¥1600	四六判
N95-439	ふたりの山遊び	高橋惇夫	高橋惇夫	¥1500	
N95-440	楓―出会いの一瞬	津田洋甫	光村推古書院	¥1000	B5変
N95-441	ブナ帯文化	梅原　猛・他	新思索社	¥3800	A5
N95-442	ブナの放流―森は地球のお医者さん	宮下正次	北斗出版	¥1854	四六判
N95-443	ブナの森	太田　威	平凡社	¥1980	B5変 ＊写真集
N95-444	ブナの森とイヌワシの空	博士山ブナ林を守る会／編	はる書房	¥2500	
N95-445	ブナをめぐる―写真でみる日本列島ブナ紀行	石橋睦美／写真　大場秀章／解説	白水社	¥4200	B5
N95-446	フライフィッシング讃歌	ハウエル・レインズ／著　倉本　護／訳	晶文社	¥2300	A5
N95-447	フリークライミング　ハンドブック	日本レクリエーション協会／編	日本レクリエーション協会	¥ 700	210×120
N95-448	ブルー・ポピー―ヒマラヤを彩るまぼろしの青	藤田弘基・茂市久美子	講談社	¥1500	B6変 ＊写真集
N95-449	ふれ愛やまある記	小野　清	近代文芸社	¥1000	B6
N95-450	北欧の小さな旅	小谷　明／文・写真		¥1600	A5
N95-451	ぼくのチベット・レッスン	長田幸康	社会評論社	¥1800	四六判 ＊改訂増補版

N95-452	僕はやっぱり山と人が好き（対談集）	沢野ひとし	角川書店	¥ 500	文庫判
N95-453	北海道山菜図鑑	佐藤孝夫	亜璃西社	¥2800	A5
N95-454	北海道樹木図鑑	佐藤孝夫	亜瑠西社	¥2800	A5 ＊第2版
N95-455	北海道地名漢字解	本多　貢	北海道新聞社	¥2200	四六判
N95-456	北海道夏山ガイド3—東·北大雪,十勝連峰の山々	梅沢　俊・菅原靖彦	北海道新聞社	¥2100	四六判
N95-457	北海道の樹木と民俗	伊達興治	北海道出版企画センター	¥1500	四六判
N95-458	北海道の山を滑る	熊谷　樫	白山書房	¥1800	四六判
N95-459	北海道野鳥記	竹田津実	平凡社	¥ 980	HL判
N95-460	北海道山の花図鑑—アポイ岳・様似山道ピンネシリ	梅沢　俊	北海道新聞社	¥2300	B5変
N95-461	北海道ワイルドライフ・リポート	平田剛志	平凡社	¥2000	四六判
N95-462	北極海へ	野田知佑	文藝春秋社	¥ 450	文庫判
N95-463	ボルネオ島最奥地をゆく	安間繁樹	晶文社	¥2300	四六判
N95-464	香港低山散歩	庄司雅昭	庄司雅昭	¥1600	B6横
N95-465	本多勝一集27—山登りは道草くいながら	本多勝一	朝日新聞社	¥3900	四六判
N95-466	マイカー登山・ベスト周遊コース—東京周辺	森田秀巳／編	山と渓谷社	¥1500	A5 ＊改訂版
N95-467	牧潤一・山岳画集—8000m峰14座を中心として	牧　潤一	ルミエール		210×300
N95-468	マダガスカル異端植物紀行	湯浅浩史	日経サイエンス社	¥1600	四六判
N95-469	マタギを生業にした人たち	野添憲治	同文館	¥1700	四六判 ＊増補改訂版
N95-470	マッキンリー気象観測 1990-1995	JAC 科学委員会／編	JAC 科学委員会		260
N95-471	マッターホルンの空中トイレ—女性登山家が語る山・旅・トイレ	今井通子	TOTO 出版	¥1000	四六判
N95-472	マドレの森—漂流する緑の聖域	高野　潤／写真・文	情報センター出版局	¥1700	四六判
N95-473	マルティニーク熱帯紀行—ラフカディオ・ハーン追想	工藤美代子	恒文社	¥2200	四六判
N95-474	水が流れている—屋久島のいのちの森から	山尾三省／文　山下大明／写真	NTT 出版	¥1600	四六判
N95-475	満ちてくる湖—The Flowing Lake	細川呉港	平河出版社	¥2369	四六判
N95-476	みちのく彩々—美しき東北の山々の四季	酒井　博	白川書院新社	¥2000	190×270 ＊写真集
N95-477	緑の明日を—自然と人間・ドキュメンタリー集	森とむらの会／編	清文社	¥1700	四六判

N95-478	緑の思考	ピエール・ガスカール／著　佐道直身／訳	八坂書房	¥2678	B6
N95-479	南会津	つり人社編集部／編	つり人社	¥1400	A5
N95-480	南アルプス	山と溪谷社／編	山と溪谷社	¥1300	四六判 ＊改訂版
N95-481	南アルプス—LIGHT AND WIND	山下春樹	山と溪谷社	¥1800	177×182 ＊写真集
N95-482	南の大地　オーストラリア	緑川洋一郎	東方出版	¥3800	250×260
N95-483	魅惑のアルプス—ドライブ紀行	池田光雄	グリーンアロー出版社	¥1800	B6
N95-484	村の記憶	山村調査グループ／編	桂書房	¥2472	AB判
N95-485	もっと好きになる山歩きの楽しみ方	スタジオ・ビーイング／編	永岡書店	¥ 980	A5
N95-486	森が滅びる—林道とダムの開発現場を行く	石川徹也	三一書房	¥1600	四六判
N95-487	森からの手紙	盛口　満	創元社	¥1600	A4
N95-488	森と心	稲本　正	角川書店	¥2800	A5
N95-489	森と文明の物語	安田喜憲	筑摩書房	¥ 680	新書判
N95-490	森の回廊	吉田敏浩	日本放送協会	¥2500	四六判
N95-491	森の神の民俗誌—日本民俗文化資料集成 21	谷川健一／責任編集	三一書房	¥11330	A5
N95-492	森の教室—生きもの讃歌	久山喜久雄	淡交社	¥2300	B6
N95-493	森の思想が人類を救う	梅原　猛	小学館	¥ 760	160×110
N95-494	森の聖者—自然保護の父ジョン・ミューア	加藤則芳	山と溪谷社	¥1600	四六判
N95-495	森の生活(ウォールデン)上	H.D.ソロー／著　飯田実／訳	岩波書店	¥ 620	文庫判
N95-496	森の生活(ウォールデン)下	H.D.ソロー／著、飯田実／訳	岩波書店	¥ 620	文庫判
N95-497	森の敵森の味方—ウイルスが森林を救う	片桐一正	地人書館	¥2060	四六判
N95-498	森の動物・昆虫学のすすめ	西口親雄	八坂書房	¥2060	A5変
N95-499	森林(もり)の不思議—気持ちをやわらげ，生命を吹き込む森林浴	谷田貝光克	現代書林	¥1200	四六判
N95-500	森への旅	水越　武／写真・文	小学館	¥2200	A4変 ＊写真集
N95-501	森を探しに	下村和子	関西書院	¥1800	四六判
N95-502	森を読む—種子の翼に乗って	ヘンリー・D.ソロー／著　伊藤詔子／訳	宝島社	¥2500	四六判
N95-503	モンゴルの旅	モンゴルタイムス日本支局／編	モンゴルタイムス社	¥1700	四六判
N95-504	屋久島	湯本貴和	講談社	¥ 740	新書判
N95-505	屋久島の山岳	太田五雄	八重岳書房	¥3900	菊判
N95-506	屋久島の時間—水と緑の12か月	星川　淳	工作舎	¥1957	四六判

N95-507	屋久島の植物	川原勝征／写真・文	八重岳書房	¥2000	四六判
N95-508	野鳥歳時記	山谷春潮	冨山房	¥1500	文庫判
N95-509	野鳥フィールド日記	岡崎　立	山と渓谷社	¥1800	B6
N95-510	八ガ岳を歩く—山小屋の主人がガイドする	鈴木昇己／技術指導内田修／写真	山と渓谷社	¥1600	A5 ＊改訂版
N95-511	やまがた・山の花	吉田　悟	山形新聞社	¥2500	B6
N95-512	山からの富士発見	峰広敬一	東京新聞出版局	¥3900	240×250 ＊写真集
N95-513	山口県の山—分県登山ガイド34	中島篤巳	山と渓谷社	¥1750	A5
N95-514	山口県百名山	中島篤巳	葦書房	¥1751	四六判
N95-515	山こそ我が世界	ガストン・レビュファ／著　近藤　等／訳	山と渓谷社	¥1800	四六判
N95-516	山小屋に泊まる旅ベストコース—東京周辺	桑子　登／編	山と渓谷社	¥1700	A5
N95-517	山小屋はいらないのか	三俣山荘撤去命令を撤回させる会／編	リベルタ出版	¥1545	B5
N95-518	山里の釣りから	内山　節	岩波書店	¥1100	DL版 ＊再版
N95-519	山でウンコをする方法—自然と上手につきあうために	キャサリン・メイヤー／著　近藤純夫／訳・エッセイ	日本テレビ放送網	¥1500	A5
N95-520	山で着る・使う—ヤマケイ登山学校4	西原彰一・今井泰博	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-521	山で食べる—ヤマケイ登山学校3	小池すみこ	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-522	山で泊まる—ヤマケイ登山学校2	森田秀巳	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-523	山で観る樹	日本山岳写真集団	東京新聞出版局	¥2300	B5変
N95-524	山と信仰—石鎚山	森　正史	佼成出版社	¥1800	四六判
N95-525	山と信仰—立山	廣瀬　誠・清水　巌	佼成出版社	¥1800	四六判
N95-526	山と信仰—恐山	宮本袈裟雄・高松敬吉	佼成出版社	¥1800	四六判
N95-527	山と人八十年—未知の世界を求めて	神戸大学山岳会・山岳部／編	神戸大学山岳会・山岳部	¥3000	B5
N95-528	山なみ遙か　福田文二遺稿文集	藤原優太郎／編	無明舎出版	¥3000	A5
N95-529	山に生きる—残されたふる里の時間	飯田辰彦	東京新聞出版局	¥1400	B6
N95-530	山に生きる	草野延孝／講演　石井千尋／編	夢工房	¥ 500	A5
N95-531	山に棲む—民俗誌序章	香月洋一郎	未来社	¥7004	A5
N95-532	山の足あと—勝田清二山行集	山の足あと編集委員会／編	山の足あと編集委員会		B5
N95-533	山の頂の向こうに	田部井淳子	佼成出版社	¥1300	四六判
N95-534	山の気象と救急法—すぐ役立つ	飯田睦治郎・桜井博幸	東京新聞出版局	¥1400	四六判
N95-535	山の気象学—ヤマケイ登山学校14	城所邦夫	山と渓谷社	¥1500	A5

N95-536	山の自然学現地講座参加者レポート集（1993.11-1995.4）	JAC自然保護委員会／編	JAC自然保護委員会		A4
N95-537	山の自然学現地講座No.4講義録（1995.2-1995.9）	JAC自然保護委員会／編	JAC自然保護委員会		A4
N95-538	山のトラブル対処法—ヤマケイ登山学校16	北田紘一	山と渓谷社	¥1500	A5
N95-539	山の花紀行	佐々木啓子	日貿出版社	¥2884	B5
N95-540	山の百名水	山下喜一郎	東京新聞出版局	¥1600	四六判
N95-541	山は魔術師—私の山岳写真	田淵行男	ブルーガイドセンター／実業之日本社	¥4500	B5
N95-542	山への想い	上野　巌	山梨日日新聞社	¥1200	新書判
N95-543	山より帰る	加藤泰三	加藤泰三遺作刊行会	¥7500	A5変
N95-544	山をいつまでも	葛山朝三	熱海書芸会	¥1500	四六判
N95-545	遊牧論そのほか	今西錦司	平凡社	¥1000	HL判 ＊再刊
N95-546	ユーラシア彷徨—敦煌・チベット・タクラマカン	前島幹雄	彩流社	¥2000	A5
N95-547	雪男探検記	レーフ・イザード／著 村木潤次郎／訳	恒文社	¥ 980	180 ＊再版
N95-548	雪と氷の世界—雪は天からの恵み	若濱五郎	東海大学出版会	¥1854	A5
N95-549	油山に咲く花—自然観察	成田翠峰	西日本新聞社	¥1500	四六判
N95-550	羊蹄山登山史	高澤光雄	倶知安郷土研究会	¥ 400	B6
N95-551	横浜山岳協会誕生史話	和田誠一／編	横浜山岳協会		B5
N95-552	Yosemite	アンセル・アダムス／写真・文　アンドレア・G.スティルマン／編　中村健／訳	宝島社	¥2900	230×220
N95-553	ライラLAILA1994—東京白稜会カラコルム登山隊報告書	市川　正／編	東京白稜会		B5
N95-554	林野庁フォレスターが選んだ森と樹木のフィールドガイド—関東周辺エリア編	林野庁森歩き研究会	山と渓谷社	¥1800	A5
N95-555	霊峰石鎚—大自然の魔性と美を秘めた神の	高橋　毅／写真　武智昭典／文	高知新聞社	¥1900	B5
N95-556	霊峰トゥクチェ	1994年神戸トゥクチェピーク登山隊／編	1994年神戸トゥクチェピーク登山隊		B5
N95-557	LET'S山スキー	峰凌倶楽部・板橋勤労者山岳会／編	峰凌倶楽部・板橋勤労者山岳会	¥1000	B5
N95-558	礼文—花の島・花の道	宮本誠一郎・杣田美野里	北海道新聞社	¥1100	A5
N95-559	轆轤師と落人伝説—木と共生した山人の世界	平野治和	新人物往来社	¥2060	B6

N95-560	ロッキー山脈の四季—春・夏	山岸行輝	東京書籍	¥1600	A5
N95-561	ロッキー山麓の四季—秋・冬	山岸行輝	東京書籍	¥1600	A5
N95-562	六甲の山—京阪神ベストハイク	小嶋叡一郎	七賢出版	¥1500	四六判
N95-563	わが山岳巡礼——一人で歩いた四五〇座より	小板橋光	小板橋光	¥1600	B6
N95-564	和歌山県の山—分県登山ガイド29	児嶋弘幸	山と渓谷社	¥1750	A5
N95-565	私の山行日記—日本百名山踏破記録	田中弘士	田中弘士		A5
N95-566	私の羽黒山	花柳瀧蔵	東北出版企画	¥2500	四六判

山岳図書目録——英語　1993年

No.	書名	著者	発行所	発行地
E93-086	Harmony in the Mountains : A Photo Collection of the Yangmingshan National Park	Pan Chien-Hung	Yangmingshan National Park Ho.	
E93-087	Lost in the Himalayas	Scott, James & Robertson, Joanne	Mainstream	Edinburgh
E93-088	Peaks & Plains of Central Asia	Schomberg, Colonel R.C.F.	Martin Hopkinson	

図書目録録——英語　1994年

E94-087	The Central Highlands	Hodgkiss, Peter	SMC	
E94-088	The Cuillin : Great Mountain Ridge of Sky	Stainforth, Gordon	Constable	London
E94-089	Curzon	Gilmour, David	John Murray	London
E94-090	Everest Canada : The Climb for Hope	Ansten, Peter	Caitlin Press	Prince George, Brit. Colombia
E94-091	Fear and Fascination. The 100 Best Rock Climbs in England and Wales	Odds, Geoffrey	Crowood Press	London
E94-092	I Hate to Train (How to Rock Climb Series)	Prichard Nancy	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E94-093	Moths of Nepal (Part4)	Haruta, Toshiro	The Japan Heterocerist's Soc.	Tokyo
E94-094	The Mountain	Hey, Douglas (ed.)	Tafelberg	Cape Town
E94-095	One Foot in the Pennines. 38 walks in the Peak, Yorkshire Dales, North & South Pennines & Northumber-	Smith, Roland	David & Charles	Newton Abbot

	land			
E 94-096	Peaks. Seeking High Ground Across the Continents	Bangs. Richard & Roberson. Pamela	Taylor Publishing Co. Gazelle Book Services	Dallas Lancaster
E 94-097	Performance Rock Climbing	Goddard. Dalc & Neumann. Udo	Stackpole Books	Mechanicsburg. Pennsylvania
E 94-098	The Sierra Nevada de Mérida	Chalbaud Zerpa. Carlos	Universidad de Los Andes	Venezuela
E 94-099	Training for Rock Climbing	Bollen. Steve	Penguin Books	London
E 94-100	The Undiscovered Country	Bartlett. Phil	Ernest Press	Holyhead. Wales
E 94-101	Walking in the Harz Mountains : Including Walks from the Harz Narrow Gauge Railway	Speakman. Fleur & Colin	Cicerone Press	London
E 94-102	Widow's Peak	Linscott. Gillian	Little. Brown & Co.	Boston
E 94-103	Winter Climbs. Ben Nevis & Glencoe	Kimber. Alan	Cicerone Press	London
E 94-104	Yosemite : The Promise of Wildness	Palmer. T. & Neill. W.	Yosemite Association	
E 94-105	Younghusband : The Last Great Imperial Adventurer	French. Patrick	Harper Collins	London

山岳図書目録——英語　1995年

E 95-001	Aurel Stein : Pioneer of the Silk Road	Walker. Annabel	John Murray	London
E 95-002	The Boardman Tasker Omnibus	Tasker. Joe & Boardman. Peter	Hodder & Stoughton	London
E 95-003	Caving in the Abode of the Clouds : The Caves & Karst of Meghalaya. Northeast India	Brooks. S.J. 〈ed.〉 & Smart. C.M.	Privatety Printed	England
E 95-004	Climbing : The Complete Reference	Child. Greg 〈compiled〉	Facts On File	New York
E 95-005	The Climbing Guide to Scotland	Prentice. Tom	Crowood Press	London
E 95-006	Climbs of the Cordillera Blanca of Peru	Sharman. David	Whizzo Climbs	
E 95-007	Chamonix Cragging-Valley Rock Climbs Around the Area	Shepherd. Nigel	Cordee	London
E 95-008	The Crag Guide to England & Wales	Jones. David	Crowood Press	London
E 95-009	Defying Gravity : High Adventure on Yosemite's Walls	Arce. Gary	Wilderness Press	

E 95-010	Dawson's Guide to Colorado's Fourteeners : Vol.2 the Southern Peaks	Dawson Ⅱ, Louis W.	Blue Clover Press	Monument, Colorado
E 95-011	Everest. A Trekkers' Guide	Reynolds, Kev	Cicerone Press	London
E 95-012	Footprints on the Peaks : Mountaineering in China	Zhou Zheng & Liu Zhenkai	Cloudcap	Seattle
E 95-013	Forbidden Mountains : The Most Beautiful Mountains in Russia and Central Asia	Pozzolini, Sicouri Paola & Kopylov, Vladimir	Indutech spa	Milan
E 95-014	The Game of Mountain and Chance	Sauvy, Anne	Bâton Wicks	London
E 95-015	Gary Hemming : The Beatnik of the Alps	Tenderini, Mirella	Earnest Press	London
E 95-016	Geoffrey Winthrop Young : Poet, educator, mountaineer	Hankinson, Alan	Hodder & Stoughton	London
E 95-017	The Grand Tour of Monte Rosa. A Circuit of the Pennine Alps. Vols Ⅰ & Ⅱ	Wright, C.J.	Cicerone Press	London
E 95-018	Great American Rock Climbs	DuMais, Richard	High Peak Books	Wilson, Wyoming
E 95-019	A Guide to Rock Climbing in Hong Kong	Heard, B.J.	Cicerone Press	London
E 95-020	High Altitude Medicine and Physiology 〈2nd ed.〉	Ward, M.P., Milledge, J.S. & West, J.B.	Chapman & Hall	London
E 95-021	High-Altitude Medicine and Pathology 〈4th ed.〉	Heath, Donald & Williams, David R.	Oxford Univ. Press	Oxford, New York, Tokyo
E 95-022	High Over Boulder : A Historical Guide to Rock Climbing Near Boulder, Colorado	Ament, Pat & McCarty, Cleve	Two Lights	Boulder, Colorado
E 95-023	Himalaya Alpine-Style : The Most Challenging Routes on the Highest Peaks	Fanshawe, A. & Venables, S.	Hodder & Stoughton	London
E 95-024	How to Rock Climb : Nutrition for Climbers	Bennett, Beth	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 95-025	Hueco Tanks : Climbing and Bouldering 〈2nd ed.〉	Sherman, John	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 95-026	K2 : The Story of The Savage Mountain	Curran, Jim	Mountaineers Books	Seattle
E 95-027	Landscape and Memory	Schama, Simon	Harper Collins	London

E 95-028	The Last Hero : Bill Tilman-A Biography of the Explorer	Madge, Tim	Hodder & Stoughton	London
E 95-029	More Climbing Anchors	Long, John & Gaines, Bob	Chockstone Press	Evergreen, Colorado
E 95-030	The Mountains of Bulgaria. A Walker's Companion	Perry, Julian	Cordee	London
E 95-031	Mountain Tables. Tables of the mountain and hill summits of England and Wales	Dewey, Michael	Constable	London
E 95-032	Mountain Trivia Challenge	Storer, Ralph	Mountaineers Books	Seattle
E 95-033	Mountain Weather. A Guide for Skiers and Hillwalkers	Burroughs, William	Crowood Press	London
E 95-034	On Top of Africa. The Climbing of Kilimanjaro and Mt Kenya	Shulman, Neville	Element	
E 95-035	Rock Climbing in Colorado	Green, Stewart M.	Falcon Press	Helena, Montana
E 95-036	Rock Climbs in Majorca, Ibiza & Tenerife	Craggs, Chris	Cicerone Press	London
E 95-037	Scientific Results from the Antaractic Walk Environmental Research Expedition 1991-1993	Yoshikawa, Kenji ed.	A.E.R.E.	Tokyo
E 95-038	6194, Denali Solo	Darack, Ed	Ed Darack Photography	
E 95-039	South Devon & Dartmoor	White, Nick	Cordee	London
E 95-040	The South East Ladakh Expedition 1995 Report	S.E.L.E.1995	Mountaineers	Bombay
E 95-041	Surfing the Himalayas : A Spiritual Adventure	Lenz, Frederick	St.Martin's Press	New York
E 95-042	Swanage and Portland	Coe, Nigel	Climbers'Club	London
E 95-043	Teton Tales : And Other Petzoldt Anecdotes	Petzoldt, Paul K.	ICS Books	Merriville, Indiana
E 95-044	Vertical Pleasure	Fowler, Mick	Hodder & Stoughton	London
E 95-045	Walk Guide Southwest of Ireland (3rd ed.)	Súilleabhain, Seán O	Gill & Macmillan	London
E 95-046	Walking in the Central Italian Alps, Vinschgau, Ortler, Adamello and their Parks	Price, Gillian	Cicerone Press	London
E 95-047	Walking in the Tarentaise & Beaufortain Alps	Akitt, J.W.	Cicerone Press	London

E 95-048	Zermatt. A Portrait Series guide to Zermatt and its Culture		E Upton-Eichenberger	

山岳図書目録——ドイツ語　1993年

G 93-024	Aus den Bergen—Photographien in Schwarzweiss	Winkler, Jürgen	Verlag J. Berg	München
G 93-025	Bergrettung—Lehrbuch der Deutschen Bergwacht	Freudig, Toni; Adalbert, Martin	Toni Freudig	Pfronten
G 93-026	Brauchtum in den Alpen	Haid, Gerlinde und Hans	Rosenheimer Verlag	Rosenheim
G 93-027	Einer geht immer voraus	Mutschlechner, Friedl	Rother Verlag	München
G 93-028	1000 Gipfel der Alpen—Wanderziele und Paradeberge	Höhne, Ernst	Verlag J.Berg	München
G 93-029	IGN-Karte No 909 im Massstab 1：1000000—Übersicht über die Klettergebiete Frankreichs	Marschner, Timo	Timo Marschner	Schorndorf
G 93-030	Mountainbike-Erlebnis—Ostschweiz u. Vorarlberg	Eggenberger, Vital	Verlag Climbe & Bike	Maienfeld
G 93-031	Die strafrechtliche Beurteilung von Bergunfällen	Benisowitsch, Gregor	Gregor Benisowitsch Im Boden	Hütten
G 93-032	Tourismus und Kultureller Wandel—Wallis 1950-1990	Antonietti, Thomas; Morand, Marie Claude	Kantonales Museum für Geschichte und Ethnographie Valère	Sitteén
G 93-033	Traumberge—Bergträume	Dolder, Willi	SILVA-Verlag	Zürich
G 93-034	Vierteljährliches Infoblatt "Alpinfo" Feuer in den Alpen	ALPINFO	ALPINFO	Brig
G 93-035	Wenn der Berg stürzt—Das Bergsturzgebiet zwischen Chur und Ilanz	Kirchen, Emil	Terra Grischuna Verlag	Basel

山岳図書目録——ドイツ語　1994年

G 94-022	Berg '95	Deutschen u.Österreichen Alpenverein Südtirol	D.Ö.A.	München, Innsbruck, Bozen
G 94-023	《Berg frei!》—100 Jahre Naturfreunde	Pils, Manfred	Verlag für Gesellschaftskritik	Wien

G 94-024	Bike-Führer-Schweiz	Lötscher, Urs; Bruno Müller	Outdoor Verlag,	Erstfeld
G 94-025	Dem Norden entgegen — Auf dem E5 von Verona nach Meran	Bodini, Gianni	Tappeiner Verlag	Lana
G 94-026	Tibet — Mit einem Vorwort des Dalai Lama	Nomachi, Kazuyoshi	Fredeking & Thaler Verlag	München

山岳図書目録——ドイツ語　1995年

G 95-001	Auf Abwegen — Bergsteigen und andere Zwischenfälle	Roeper, Malte	Rother Verlag	München
G 95-002	Bergbauern in Südtirol	Mangold, Guido; Marseiler, Sebastian	Athesia Verlag	Bozen
G 95-003	799 Bergrestaurants am Höhenweg	Spillmann Verlag	Spillmann Verlag	Zürich
G 95-004	Bergsteigen mit Kindern	Meier, Ruèdi	SAC-Verlag	Bern
G 95-005	Clubführer Gotthard — Von der Furka zum Lukmanier	Hunziker, Manfred; Brand, Maurice; Brenna, Giuseppe	SAC-Verlag	Bern
G 95-006	Faszination Skilauf — Vor hundert Jahren fing es an	Lauterwasser, Erwin	Edition Braus	Heidelberg
G 95-007	Die Geschichte der Bovalhütten und ihre Umgebung Tourenbeschreibung	Philipp, Hans	Verlag Emil Sutter-Lehmann	Grindelwald
G 95-008	Grenzschlängeln — Routen, Pässe und Geschichten	Bauer, Ursula; Frischknecht, Jürg	Rotpunktverlag	Zürich
G 95-009	Grenzen	Vogel, Andrea	Verlag Bündner Monatsblatt	Chur
G 95-010	Der grosse Walserweg — Wandern auf alten Saumpfaden über alpine Pässe	Irlinger, Bernhard	Berg Verlag	München
G 95-011	Ikarus über Graubünden	Donatsch, Peter	AT-Verlag	Aarau
G 95-012	Der junge Eugen Guido Lammer	Walkner, Martin	Martin Walkner	Salzburg
G 95-013	Karte und Kompass	Kaufmann, Edwin	Otto Verlag	Thun
G 95-014	Kletterführer Churfirsten-Alvierkette-Fläscherberg	Wälti, Thomas	SAC-Verlag	Bern
G 95-015	Kletterführer Zentralschweizer Voralpen	Lötscher, Urs	SAC-Verlag	Bern
G 95-016	Ein Leben lang	Hössli Erika	Verlag Edition WORTbild	Maienfeld
G 95-017	Nepal — Abenteuer Trekking	Banzhaf, Bernhard R.	Bruckmann Verlag	München

G 95-018	Die Oberengadiner Seen	Maier, Marcella	Verlag Paul Haupt	Bern
G 95-019	Rock Stars—die weltbesten Freikletterer	Zak, Heinz	Rother Verlag	München
G 95-020	Ski weltweit—Die 250 aussergewöhnlichsten Skigebiete der Welt	Schrahe, Christoph	Pietsch Verlag	Stuttgart
G 95-021	Sommerbergsteigen—Sportklettern	Müller, Walter	SAC-Verlag	Bern
G 95-022	Triumph in Fels und Eis—Die Geschichte des Alpinismus	Bonington, Chris	Pietsch-Verlag	München
G 95-023	Vaya con Dios—Begegnungen in den Anden	Meli, Walter	Stämpfli + Cie AG	Bern
G 95-024	Wandern im Oberwallis—Die schönsten Familienwanderungen	Grimm, Peter	Verlag J.Berg	München
G 95-025	Wo findet denn das Wetter statt?	Slongo, Mario	Verlag Lokwort	Bern

山岳図書目録——フランス語　1993年

F 93-042	Au-dessus des 4000 mètres	Énrico Martinet	Ed. Musumeci	Aoste
F 93-043	L'aventure du Vignemale	Didier Lacaze	Éd. Randonnées pyrénéennes	Tarbes
F 93-044	La cause des montagnes	Françoise Gerbaux		Grenoble
F 93-045	150 randonnées à raquettes en Savoie	Jean-Marc Lamory	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 93-046	Chemins du baroque (Savoie)	Denis Vidalie	Éd. Rossat-Mignot	
F 93-047	Au cœur des Pyrénées, l'aventure souterraine	Jacques Jolfre	Éd. Milan	
F 93-048	Contes à Pic	Samivel	Éd. Arthaud	Grenoble
F 93-049	Contes des brillantes montagnes avant la nuit	Samivel	Éd. Arthaud	Paris
F 93-050	Du glacier du Mont-Blanc au glacier des Bossons	Christian Mollier	Chez l'auteur	Chamonix
F 93-051	Guide du jeune naturaliste à la montagne	Eric Alibert	Éd. Delachaux et Niestlé	
F 93-052	Haute montagne : Passion d'explorations	Bernard Francou	Éd. Masson, col 《Pratiques de la géographie》	Paris
F 93-053	Horizons partagés	Louis Audoubert	Éd. Milan	Toulouse
F 93-054	Îles anglo-normandes Nature et randonnée	A.et S. Mouraret	Éd. La Cadole	Vélizy
F 93-055	Lacs et refuges des Pyrénées	Georges Véron	Éd. Randonnées pyrénéennes	Tarbes

F 93-056	Lieux en mémoire de l'Alpe — Toponymie des alpages en Savoie et Vallée d'Aoste	Hubert Bessat et Claudette Germi		Grenoble
F 93-057	Manuel de la grande randonnée et du trekking	Véronique et Thomas Lauer	Éd. Edisud	Aix-en-Provence
F 93-058	Monastères de montagne	Samivel	Éd. Arthaud	Paris
F 93-059	Les parois du destin	Jeanmi Asselin	Éd. Glénat	Grenoble
F 93-060	Pays, paysans, paysages. La réconciliation est-elle possible?	Segolène Royal	Éd. Robert Laffont	
F 93-061	Pyrénées voyage par les images	Hélène Saule-Sorbé	Éd. de Faucompret	
F 93-062	Le roman de Gaspard de la Meije	Isabelle Scheibli	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 93-063	Le tour du monde par les cimes	Christine Janin	Éd. Albin Michel	Paris
F 93-064	Sports de montagne et nutrition	Michel Batard	Éd. Artulen	Paris
F 93-065	Sur un plan incliné	Henri Sigayret	Éd. Oros-Tifimar	Voreppe
F 93-066	Le vagabond des airs	Didier Favre	Éd. Actes Sud	
F 93-067	Vallée des merveilles, un berceau de la pensée religieuse européenne	Émilia Masson	Éd. Faton	Dijon
F 93-068	Voile et escalade au Groenland	Chris Bonington et Robin K. Johnston	Éd. Arthaud	Paris

山岳図書目録——フランス語　1994年

F 94-021	L'alpinisme : Un jeu?- Les notions de jeu, de libre et de nature dans le discours de l'alpinisme	David Belden	Éd. Aroura	Paris
F 94-022	Altitude et longitudes	Jean Puiseux	Éd. Glénat	Grenoble
F 94-023	Calendrier Pyrénéen — Rites, coutumes et croyances dans la tradition orale en Comminges et en Couserans	Isaure Gratacos	Éd. Privat	Toulouse
F 94-024	Contes et nouvelles de l'envers	Jean-Marie Jeudy	Éd. Glénat	Grenoble
F 94-025	Chemins du baroque — Art religieux des vallées de Savoie ＊Patrimoine artistique et montagne	Denis Cerclet	Éd.《Les Savoisiennes— La Fontaine de Siloé》	
F 94-026	Chemins du baroque —Maurienne＊Patrimoine artistique et montagne		Éd.《Les Savoisiennes— La Fontaine de	

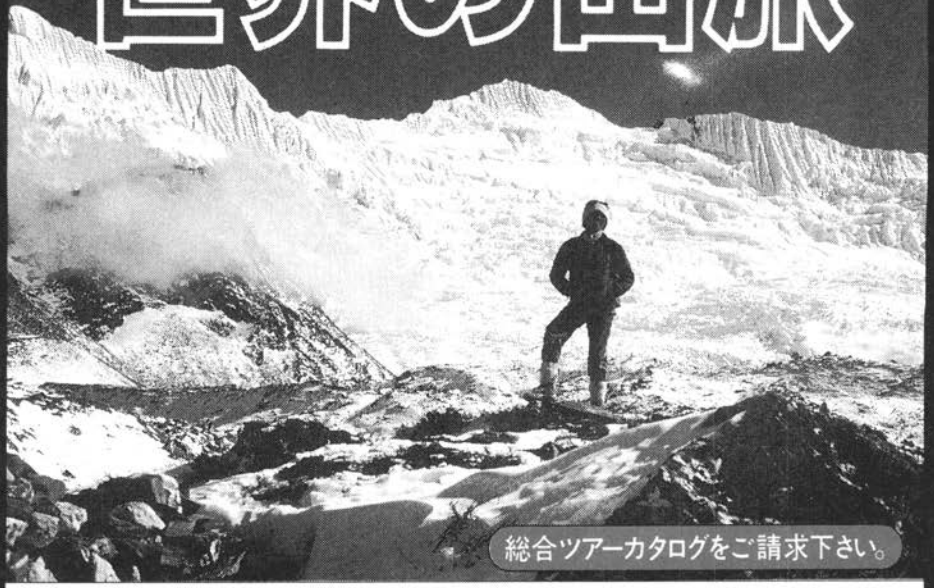
			Siloë》	
F 94-027	Chemins du baroque —Tarentaise＊Patrimoine artistique et montagne	Marius Hudry	Éd.《Les Savoisiennes—La Fontaine de Siloë》	
F 94-028	Encordé avec des ombres	Joe Simpson	Éd. Glénat	Grenoble
F 94-029	Et la nature?	Robert Hainard	Éd. Hesse	Saint-Claude-de-Diray
F 94-030	Guide de l'Obiou	Pierre Barnola	Éd. Gap	La Ravoire
F 94-031	Guide Gites Refuges, France et frontières	A.et S.Mouraret	Éd. La Cadole	Vélizy
F 94-032	Haut-Jura, de la Valserine à la Vallée de Joux	G.Benoît à la Guillaume, F.Labande	Éd. Olizane	Genève
F 94-033	Histoire de la compagnie des guide de Chamonix	Daniel Chaubet	Éd.La Fontaine de Siloë	
F 94-034	Les méharistes français à la conquête du Sahara 1900-1930	Daniel Grévoz	Éd.L'Harmattan	Paris
F 94-035	Mémoire paysanne, gestes et traditions d'un monde sauvegarde	Photographies de Robert Taurines. Textes de J.-P. Spilmont	Éd.du Mont	Annemasse
F 94-036	Les moissons de lumière-une traversée du Haut-Atlas Marocain	François Virot	Éd.de l'Envol	Le Chaffaut
F 94-037	Otzi, la momie des glaciers	Françoise Rey	Éd.Glénat	Glenoble
F 94-038	Randonnée alpine Haute-Savoie-Suisse romande	François Labande	Éd.Olizane	Genève
F 94-039	Réganel ou la Montagne á Vaches	Roger Canac	Éd.Glénat	Glenoble
F 94-040	Rèves des pays de Savoie	Valéry d'Amboise	Éd.Valéry d'Amboise	
F 94-041	Saint-Christophe-en-Oisans. Les derniers guides paysans	René Glénat		Grenoble
F 94-042	Ski de randonnée en Basse-Maurienne (Belledonne-Lauzière)	M. Salyn et J.-Y.Reffet	Éd.Édisud	Aix-en-Provence
F 94-043	Spitzberg, l'Archipel du Svalbard	Gérard Bodineau	Éd.Dmi	
F 94-044	Tourbillons dans l'Eau d'Olle	Christine Hacques	Éd.PUG	Grenoble

山岳図書目録——フランス語　1995年

F 95-001	Annapurna remier huit mille	Maurice Herzog	Éd.Arthaud	
F 95-002	Ascensions en télescope	Mark Twain	Éd.Hoëbeke	Paris

F 95-003	Autriche 250 jours de randonnée circuits faciles de hautes routes	Jean-Luc Theiller	Éd. La Cadole	Vélizy
F 95-004	Cartographie et orientation	J.-M. Lamory	Éd. Didier Richard	Grenoble
F 95-005	Les conquérants de l'inutile	Lionel Terray	Éd. Guérin	Chamonix
F 95-006	Escalades dans le Jura-Delèmont-Moutier-Bienne	Philippe Steulet	Éd. SAC-Verlag	Bern
F 95-007	Everest 1938	H.-W. Tilman	Éd. Arthaud	
F 95-008	Guide du Haut-Dauphiné, Massif des Écrins (Tome 1)	François Labande	Éd. de l'Envol Éditions de Belledonne	
F 95-009	La Haute Route	Maurice Chappaz	Éd. Hoëbeke	Paris
F 95-010	Hommage au Tibet	Olivier Föllmi	Éd. de La Martinière	Paris
F 95-011	Lotschental secret	Maurice Chappaz photos d'Albert Nyfeler	Éd. de l'Age d'Homme	
F 95-012	Nadir	Anne Sauvy	Éd. Glénat	Grenoble
F 95-013	Nouvelles d'en haut	Samivel	Éd. Hoëbeke	Paris
F 95-014	Le roi du rocher	A.-F. Mummery	Éd. Hoëbeke	Paris
F 95-015	Shimshal par-delà les montagnes	Jean-Claude Legros	Glénat, collection 《Hommes et montagnes》	Glenoble
F 95-016	Suite Montagnarde	Jean Proal	Ed. de l'Envol	Mane
F 95-017	Tourisme et Montagne	Bernard Debarbieux	Éd. Economica, collection《Géo-poche》	

世界の山旅



総合ツアーカタログをご請求下さい。

トレッキングからエクスペディションまで。

ALPINE TOUR

アルパインツアーはヒマラヤからカラコルム、ヨーロッパアルプス、アラスカ、カナダ、USA、南極、アンデス、パタゴニア、ニュージーランド、中国、アフリカ、北極圏その他の山岳地帯・辺境地域への主催ツアーやインフォメーションを用意しております。もちろん日本国内の山旅も企画しております。トレッキングのパッケージはもとより登山隊のための航空便や地上手配などに関し、私達は豊富な知識と経験をもとにご相談に応じることができます。ぜひ、お問合せ下さい。

運輸大臣登録一般旅行業第490号　日本旅行業協会正会員　IATA公認代理店

アルパインツアーサービス株式会社

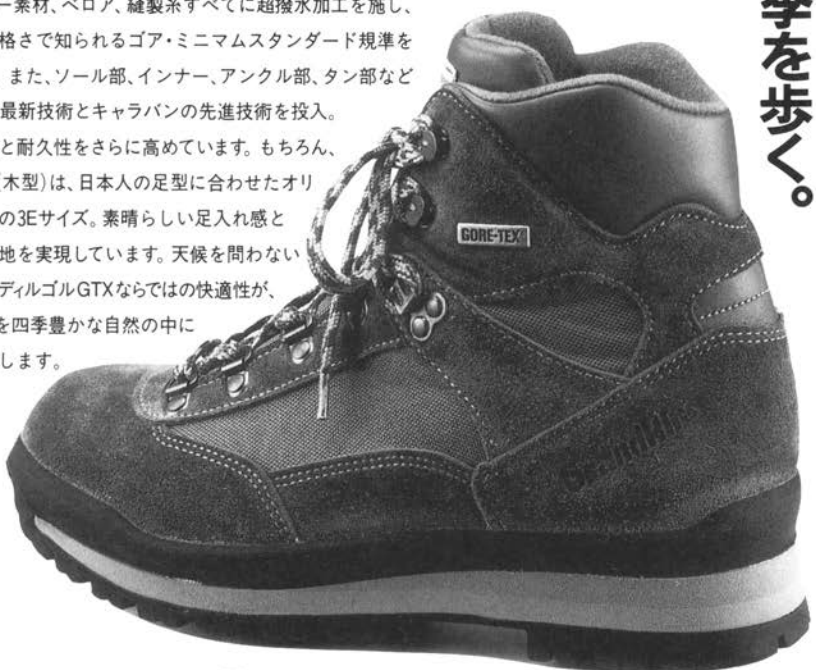
東　京	〒105	東京都港区新橋2-13-8(新橋東和ビル5階)	☎03(3503)1911(代表)
名古屋	〒450	名古屋市中村区名駅3-23-6(第2千福ビル8階)	☎052(581)3211(代表)
大　阪	〒550	大阪市西区靱本町1-10-22(ボロロッカビル4階)	☎06 (444)3033(代表)
広　島	〒730	広島市中区小町2-28(小町ハイツ5階)	☎082(542)1660(代表)
福　岡	〒810	福岡市中央区舞鶴1-2-8(セントラルビル5階)	☎092(715)1557(代表)
仙　台	〒980	仙台市青葉区一番町2-3-20(第3日本オフィスビル7階)	☎022(265)4611(代表)
札　幌	〒060	札幌市東区北9条東2丁目 北海道地区総代理店 ㈱りんゆう観光	☎011(711)7106(代表)

Grandking®

ヌレ、ムレを極限まで防ぐ、ゴアテックス®ブーティ採用のヘビートレッキング対応全天候モデル。

歩く、歩く、どこまでも快適に歩くGK-40ディルゴルGTXは、防水・透湿・通気性を高次元で満たす素材「ゴアテックス®ブーティ」使用のグランドキング・シリーズのトップモデルです。アッパー素材、ベロア、縫製糸すべてに超撥水加工を施し、その厳格さで知られるゴア・ミニマムスタンダード規準をクリア。また、ソール部、インナー、アンクル部、タン部など全身に最新技術とキャラバンの先進技術を投入。防水性と耐久性をさらに高めています。もちろん、ラスト(木型)は、日本人の足型に合わせたオリジナルの3Eサイズ。素晴らしい足入れ感と履き心地を実現しています。天候を問わないGK-40ディルゴルGTXならではの快適性が、あなたを四季豊かな自然の中にお連れします。

日本の四季を歩く。





GK-40ディルゴルGTX ￥19,500

●カラー：ダークブラウン、ローズピンク、パイングリーン、グレー

※ゴアテックス®およびゴアテックス®ブーティはW.L.GORE and ASSOCIATES,INC.の登録商標です。

●ラスト(木型)：3Eサイズ●サイズ：グレー・ローズピンク＝22.5cm～28cm、ダークブラウン・パイングリーン＝22.5～29cm(28.5ナシ)

Caravan®

製造・販売●㈱キャラバン/東京本社：〒170東京都豊島区巣鴨1-25-7☎03-3944-2331㈹・大阪☎06-866-0505㈹・札幌☎011-822-8664・福岡☎092-414-0795

※1996カタログ(フルカラー84P)ご希望の方は住所・氏名・年令・職業を明記し480円分の切手(80円×6枚)を同封の上キャラバン本社SG係までご請求ください。

軽く、コンパクトなテントのことなら

ARAI TENT

㈱アライテント

〒175 東京都板橋区赤塚5-13-7 Tel.03(3939)6481

アルファ米

お湯を注いで20分、
ホカホカのご飯ができあがり

姉妹品 アルファ赤飯

装備を
へらせ

時間を
かせげ



お求めは全国有名スポーツ用品店で……

尾西食品株式会社

本社 東京都港区三田4－15－36 メゾン・ド・聖坂内
TEL 03－3452－4020 FAX 03－3456－3783

大阪 大阪市淀川区新高1－15－41
TEL 06－391－5995 FAX 06－396－6157

宮城 宮城県古川市清水字新田88－1
TEL 0229－26－4135 FAX 0229－26－4130

講談社 〒112-01 東京都文京区音羽2-12-21

画家が紡いだ畢生のライフワーク
現代版・平家物語絵巻！

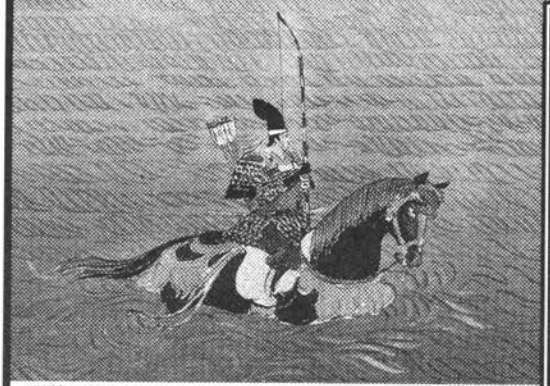
大増刷出来！

繪本平家物語

安野光雅

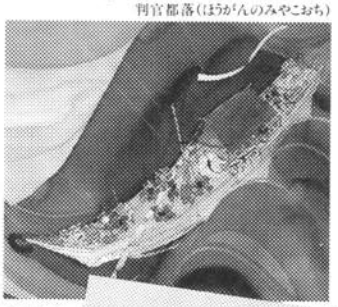
定価9、800円（税込）

「祇園精舎」より
「女院死去」まで
数々の名場面を、
精密な絹絵と
書下ろしの文章で
織りなした
安野光雅の華麗な世界。
七十九場面
百四十三章段を収載。



那須与一（なすのよいち）

判官都落（ほうがんのみやこおち）





【造本・体裁】
A判6取／180頁（図版オールカラー）／
クロス装箔押し／貼箱入り

壇浦合戦
（だんのうらかっせん）



信頼されて70年

山とスキー用品専門店



山友社 **たかはし**

四谷本店 〒160 四谷 1 － 20 相田ビル TEL (3351)7432・1912



山と山スキーの専門店

クレッターザック
キスリング
夏冬用テント
イギリス、オーストリア・
オリジナルセーター

片桐

〒113 東京都文京区湯島 3 － 38 － 9

Tel 03(3831) 1 7 9 4
FAX 03(3831) 6 6 8 0

旅するあなたのサポート隊

パッケージツアー、グループ・トレッキング等は 西遊旅行 が、格安航空券は キャラバンデスク が、皆様のお手伝いをいたします。

秘境の地へ
世界の山々へ







ネパールではカトマンズ連絡事務所の社員が、皆様のお世話をいたします。

トレッキング部門は、JAI・HIMAL TREK-KING が、一般観光部門は SAIYU・TRAVEL がそれぞれ皆様のお手伝いをいたします。スタッフは日本語も話せますので、お気軽にご利用下さい。



～ 地球の果てまでお手伝い ～

ディスカウント航空券の専門相談室

キャラバンデスク

東京☎03-3237-8384(代)

大阪☎06-362-6060(代)

シルクロード・秘境旅行・トレッキング・海外登山のパイオニア

運輸大臣登録一般旅行業第607号

株式会社 西遊旅行（さいゆうりょこう）

本　　社　〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1 岩波書店アネックス5F
☎ 03(3237)1391代　FAX 03(3237)1396

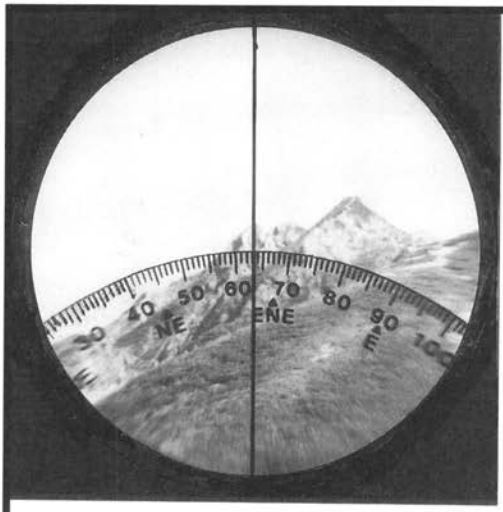
キャラバンデスク東京（格安航空券の専門デスクです）（住所同上）
☎ 03(3237)8384代　FAX 03(3237)0638

大阪営業所　〒530 大阪市北区神山町6-4　北川ビル5F
☎ 06 (367) 1391代　FAX 06 (367) 1966

キャラバンデスク大阪　☎ 06 (362) 6060（住所・FAX同上）

カトマンズ連絡事務所　P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
(JAI HIMAL TREKKING)　☎ 224248, 221707（アンナプルナホテル並び）

ロイヤルネパール航空
旅客代理店



手のひらサイズの高精度方位鏡

ハイアイポイント

コンパスグラス HB-3

自信を持って山に行こう！

山座同定 迷走脱出に力強い味方です。

広視界10° 高倍率の明るい視界内に見える目標がそのまま正しい磁気方位です。完全水密 耐圧水深50m 耐高度1万m 耐寒−25° 軽量78g水面浮上 フォーカスフリー 方位自動追尾

つや消し黒 ¥17,000 LED照明付 ¥19,800

黄橙色メタリック ¥18,000 （消費税別）送料 ¥600



海上での遭難、酷使と高空1万mの低圧に耐えるプロ用です。
その信頼と精度を山の行動と安全にお使い下さい。
カタログ代無料、電話 FAX 葉書でどうぞ。

東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

株式会社 石神井計器製作所

電話03-3928-5411 FAX03-3928-5411

コンパスグラスは狙った目標を絶対に逃がしません。

山と自然を愛する人々に贈る名著

日本山岳会企画・編集 大修館書店発行

覆刻日本の山岳名著

18点22冊＋解題書＋特別資料セット 定価195,700円

日本山岳会企画・編集 大修館書店発行

新選覆刻 日本の山岳名著

20点29冊＋解題書＋特別資料セット 定価180,250円

日本山岳会企画・編集 大修館書店発行

日本山岳会「会報」第一集

覆刻合本1号〜100号（昭和5年〜15年） 頒価12,360円

日本山岳会企画・編集 大修館書店発行

日本山岳会「会報」第二集

覆刻合本101号〜200号（昭和16年〜33年） 頒価14,420円

N・ディーレンファース 他著／西堀栄三郎・宮下啓三 監訳 大修館書店発行

図説百科 山岳の世界

定価18,540円

遙かなりエヴェレスト 島田巽著 定価1,545円

「覆刻日本の山岳名著」セットには「会報」第一集が含まれています。
又「新選覆刻日本の山岳名著セットには「会報」第二集が含まれています。

大修館書店

〒101 東京都千代田区神田錦町3-24

書店にない場合やお急ぎの方は直接ご注文下さい。☎03-5995-5434

好評発売中

日本は旅王国。日本には旅・王・国。

"日本の旅"の魅力を完全網羅! 最新の旅先情報満載ガイド「旅・王・国」!



「日本の旅をフルカバー」

旅・王・国

B6変形判／定価1150円(税込)～

❶北海道
❷札幌・小樽 登別
❸函館 大沼・松前・江差
❹釧路・網走 稚内
❺東北
❻青森 弘前・秋田
❼盛岡 八幡平
❽仙台 山形・鶴岡
❾会津 福島・いわき
❿日光 那須・塩原
⓫新潟・佐渡 上越
⓬東京
⓭横浜
⓮鎌倉 湘南・三浦半島
⓯箱根
⓰伊豆
⓱富士五湖 甲府
⓲信州
⓳軽井沢 小諸
⓴松本 上高地
㉑蓼科 霧ヶ峰
㉒名古屋
㉓高山 白川郷
㉔北陸 能登
㉕金沢
㉖琵琶湖 若狭・丹後
㉗南紀 伊勢・志摩
㉘奈良 飛鳥・斑鳩
㉙京都
㉚大阪
㉛神戸
㉜鳥取・松江 城崎・隠岐
㉝倉敷 岡山・姫路
㉞広島 岩国・尾道
㉟萩・津和野 山口・下関
㊱四国 淡路島
㊲九州
㊳福岡・佐賀 壱岐・対馬
㊴長崎 ハウステンボス
㊵別府・阿蘇 熊本
㊶南九州 奄美
㊷沖縄 与論

旅先の最新情報を満載。立体感あふれるビジュアルマップも充実

●

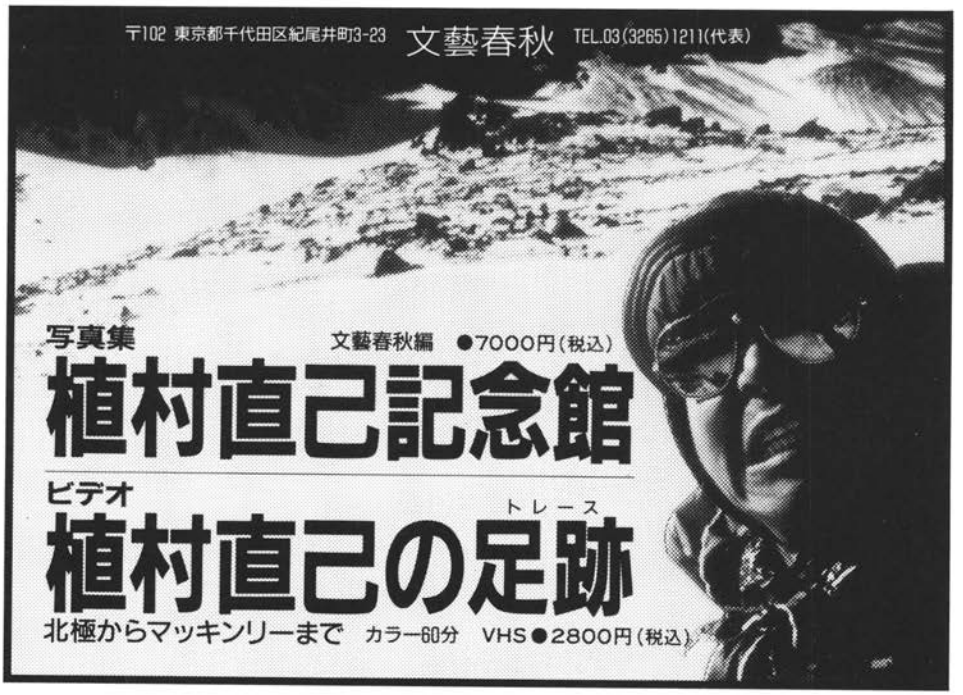
あらゆる交通手段に対応したデータをかつてない見やすさで掲載

●

知りたい情報を多角的視点から的確に伝える話題のガイドブック

エアリアマップ 昭文社

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23 文藝春秋 TEL.03(3265)1211(代表)



写真集
植村直己記念館
文藝春秋編 ●7000円(税込)

ビデオ
植村直己の足跡（トレース）
北極からマッキンリーまで カラー60分 VHS●2800円(税込)

平凡社・山の本

《平凡社ライブラリー》

94 **日本アルプス 登山と探検** W・ウェストン著 岡村精一訳
黎明期の日本アルプスの山々の奥深く踏破した英人牧師が、鮮やかに描くひらけゆく山々。写真多数収録。解説・水野勉 ◆1、400円

161 **日本アルプス再訪** W・ウェストン著／訳＝水野勉
一八八八年から九五年まで日本各地の山を歩き、『日本アルプス』を刊行した著者が、その後二度来日し、日本アルプスを歩いた旅行記録。◆1、400円

130 **檜原村紀聞 その風土と人間** 瓜生卓造著
清澄な秋川の流れ、奥多摩の山並、カブト屋根の民家と古老の語り——。山里の暮らしを綴った異色の風土記。解説・進藤純孝 ◆1、200円

134 **わが山旅五十年** 田部重治著
日本の山岳美の紹介に努めた田部重治。晩年の著者が描く明治から昭和にいたる「静観的山旅」五十年の集大成。解説・水野勉 ◆1、400円

138 **尾瀬と鬼怒沼** 武田久吉著
自然の楽園、尾瀬。初めての紹介者である著者が、明治から昭和にいたる尾瀬周辺の姿をペンとカメラで描く。解説・山口耀久 ◆1、000円

145 **黒部渓谷** 冠松次郎著
山の生涯の大半をその紹介に費やした「黒部の父」が綴った、大正期の秘境黒部核心部の記録。解説・水野勉 ◆1、400円

151 **山からの言葉** 辻まこと著
ウラヤマ歩きの天才。最晩年の5年間、雑誌『岳人』の表紙に描き続けた山男たちと表紙の言葉を一冊に収録。解説・宇佐見英治・小谷明 ◆760円

東洋文庫 586 **日本アルプス登攀日記** W・ウェストン著 三井嘉雄訳
日本近代登山の父ウェストンが山に携行し、日々の出来事を書きとめたフィールド・ノートの翻訳。◆2、781円

鹿野忠雄 台湾に魅せられたナチュラリスト 山崎柄根
戦前、台湾にとりつかれ優れた学問的足跡を遺した男の劇的な生涯。日本エッセイスト・クラブ賞受賞。◆2、700円

〒152 東京都目黒区碑文谷5-16-19/☎03-5721-1234/振替00180-0-29639 ◆価格は税込定価

実業之日本社の山と旅の本

定価はすべて消費税込みです。

山は魔術師 ―私の山岳写真―
田淵行男　B5判函入／定価4500円

車窓の山旅・中央線から見える山
山村正光　A5変型判／定価1960円

関東百山 ―100の山へのガイド・エッセイ―
浅野孝一・打田鉄一・楠目高明・横山厚夫
A5変型判／定価1850円

一日の山・中央線私の山旅
横山厚夫　A5変型判／定価2000円

展望の山旅(正)(続)(続々)
藤本一美・田代博
A5変型判／定価(正)1960円(続)(続々)2000円

カメラの山旅 ―山の写真とカメラハイク12カ月―
川口邦雄　A5変型判／定価2000円

甲斐の山旅・甲州百山
蜂谷緑・小俣光雄・山村正光
A5変型判／定価1900円

花の山旅・日本アルプス
新妻喜永　A5変型判／定価2200円

スケッチの山旅12カ月
山里寿男　A5変型判／定価2400円

黒部の山賊 ―アルプスの怪―
伊藤正一　B6判／定価1200円

楽しいカントリーウォーク
山浦正昭　A5変型判／定価1800円

首都圏ウォーキング1日1万歩ガイド50
日本歩け歩け協会　B6変型判／定価1300円

イタリヤところどころ ―光の国の歴史・美術散歩―
西本晃二　四六判／定価1650円

ブルーガイド・ワールド

⑪スイス　定価1400円
⑯ヨーロッパ・アルプス　定価1400円
㉔ネパール・ヒマラヤ・トレッキング　定価1800円
㉜アラスカ　定価1200円
㉝ニュージーランド　定価1200円

●ご注文はもよりの書店へお願いします。品切れの場合でも、書店へご依頼になれば取り寄せてくれます。
●書店に遠くご不便の方は小社に送料(冊数に関係なく一律300円)を加算してご送金下さればお送りします。(前金制・切手代用一割増)
〒104 東京都中央区銀座1-3-9／振替00110-6-326



名門がおすすめする 履きごこち。

おしゃれに心している日本の男たちは、
足もとに関する限り平和堂を信頼し続けてきました。
腕に覚えの職人が縫いあげた平和堂オリジナル。
そしてインポートの逸品。
店内にプレゼンテーションされているのは、
名門が選りすぐった"いい男のためのシューズ"ばかりです。
わかる男が履く靴を、平和堂は取りそろえています。

平和堂靴専門店

〒101 東京都千代田区神田小川町2－4
Tel.（3291）2571～2572
地下鉄：新お茶の水1分／小川町2分／淡路町3分
JR：お茶の水5分（毎月第3水曜日定休日）

よりよきテントの最高峰を めざすヨシダテント！

1978年　植村直己北極点単独旅行
1978年　日本大学北極点遠征隊
1981年　植村直己冬期エベレスト登山隊
1981年　明治大学エベレスト登山隊
1981年　早稲田大学K2登山隊
1984年　第26次南極観測隊
1985年　和泉雅子北極点遠征隊
1985年　第27次南極観測隊
1987年　風間深志北極点遠征隊
1988年　日本テレビ〝チョモランマ〟報道隊
1989年　和泉雅子北極点遠征隊
1989年　大韓民国北極点遠征隊

YOSHIDA TENT
OGIKUBO TOKYO

小さな店の大きな自信！

株式会社
ヨシダテント

〒167 東京都杉並区桃井1-3-3
☎03(3399)2548・FAX03(3395)4655

全国各地の美味・珍味を満載。

取り寄せて味わうもよし、

贈り物にもよしの、

便利な産直ガイド。

北海道から沖縄まで、代表的な名産と珍味を都道府県別に紹介。好物・おいしいものを取り寄せたいとき、お中元、お歳暮などの贈答用のカタログとして、旅先での買物、おみやげのガイドとして、いろいろに活用できる便利な一冊。

全国 名産・珍味 うまいもの

ふるさと宅配便

￥1,500

●全国のうまいもの180を厳選して紹介！

北海道＝天然貝柱・新巻鮭／青森＝八戸するめ／秋田＝きりたんぽ／岩手＝卵めん／宮城＝白石温麺／山形＝牛肉さくらんぼ漬／福島＝天然なめこ／新潟＝献上鮑／富山＝鱒ずし／石川＝ごり佃煮／福井＝小鯛ささ漬／栃木＝揚巻湯波／群馬＝水沢うどん／茨城＝だるま納豆／千葉＝鮒すずめ焼／埼玉＝岩茸／東京＝くさや／神奈川＝梅花はんぺん／山梨＝ブドウ酒／長野＝馬さし／静岡＝マスクメロン／愛知＝八丁味噌／岐阜＝筏ばえ／滋賀＝鮒ずし／京都＝西京味噌／大阪＝塩昆布／奈良＝三輪そうめん／和歌山＝ほろほろ鳥くんせい／兵庫＝いかなご佃煮／広島＝広島かき／鳥取＝松葉がに／島根＝出雲そば／山口＝ふく一夜干／香川＝さぬき手打うどん／徳島＝すだち／高知＝酒盗／愛媛＝五色そうめん／福岡＝明太子／佐賀＝わらすぼ／長崎＝からすみ／大分＝かぼす／熊本＝辛子れんこん／宮崎＝焼やまめ／鹿児島＝さつま揚／沖縄＝パパイヤ漬　他多数

富士書店　東京都文京区本郷４丁目１-14
電話03-3814-0498

苛酷な環境に立ち向かう
高品質アウトドアギア&クロージング



SINCE 1975

mont-bell

FUNCTION IS BEAUTY

モンベル

本　　社●〒550 大阪市西区新町1-33-20　☎06(531)4761(代)
東京営業所●〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-18-6　☎03(3760)2131(代)

山岳名著選集

実際のドラマチックな体験をもとに、世界屈指のアルピニストたちが綴った感動の物語。〈各巻A5判〉

ダウラギリ登頂
マックス・アイゼリン 著／横川文雄 訳 定価1545円

エヴェレスト登頂記
ジェームス・アルマン 著／丹部節雄 訳 定価2575円

パミール —シルクロードの城塞—
田村俊介 編著 定価2575円

遙かなる天山 —天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝—
A・アルダン・セミョーノフ 著／田村俊介 訳 定価2575円

"遠い頂"ヌプツェ —北西峰初登頂の記録—
登歩渓流会 編著 定価2575円

プモ・リ —世界で最も美しい山— 定価2575円
ゲルハルト・レンザー 著／織方郁映、橋本 信 共訳

アムネマチン初登頂
上越山岳協会 編著 定価2472円

スイスの山々 —SAC山案内人の体験記—
オレル・フュスリ社 編／岡沢祐吉 訳 定価1957円

北アルプス白馬讃歌 —山案内60年の回想—
大谷定雄 著 定価1957円

ナンガ・パルバート回想 —闘いと勝利—
カール・M・ヘルリッヒコッファー 著／岡沢祐吉 訳 定価1957円

氷山雪嶺二千年 —中国登山史話—
周 正 著／譚佐強・田川常雄 共訳 定価2266円

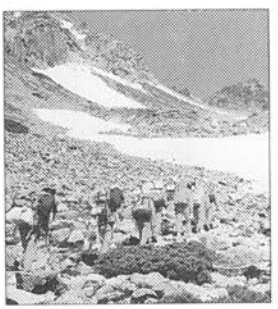
スイス —山案内人の手帳より
岡沢祐吉 著 定価2266円

写真集 北米大陸の屋根

ロッキー山脈

アラスカからニューメキシコ州までうねる分水界——。
大自然と野生動物の秘境、ロッキー山脈の魅力を探る写真集。

J・A・クラウリス＝写真／ジョン・ガルト＝文／B4判上製／定価6,000円（税込）



豪華写真集

天山
アムネマチン

中国新疆人民出版社 編
ベースボール・マガジン社 訳
A4判変型上製／定価7107円

明治34年、北魚沼郡長の発金による銀山探検隊が組織された。学問と産業開発の両面より、それぞれの専門家32名、案内人と人夫を含む総勢58名。その際の記録が「銀山平探検記」となって結実したのであった。それをそのまま復刻したのが第一巻。わかりやすい現代文にしたものが第二巻、第三巻には諸家の貴重な周辺登山紀行を集録。よって、湖底に沈んだ銀山への鎮魂となす！

●不朽の名著、復刻なる！

湖底幻影

■造本・体裁
●第1巻 背三つ目綴り（225×153㍉）マット入り
●第2巻・第3巻 A4変型判上製カバー装（287×210㍉）

全3巻
小島六郎 監修
定価2800円

山岳研究会

登山ハンドブック・シリーズ

各巻A5判

- 登山教本 定価1009円
- 世界の山岳 定価1009円
- 山の心 定価1009円
- 山の自然科学 定価1009円
- 山の資料 定価1009円

上越山岳協会 編／中国人民体育出版社 監修

中国登山ハンドブック
A5判 定価1854円

上越山岳協会 編
A4判変型上製 定価4944円

山登りのための体力トレーニング
窪田 登 著
新書判／定価855円

体育・スポーツ総合出版
株式会社 ベースボール・マガジン社
〒101東京都千代田区三崎町3-10-10☎03(3238)0181※宅配も可(送料380円)

A4判横見開きに展開する
ヨーロッパ・アルプスの大展望!

パノラマ アルプス

藤田弘基 写真集

◎A4判上製短辺綴じ
◎総96ページ(カラー80ページ)
◎定価4,900円(税込)

モン・ブラン山群、ヴァリス山群、
ベルナー・オーバーラント山群、
ベルニナ山群、ドロミテ山群、ホーエ・
タウエルン山群の六つの山群にある
夜明けから日没までの荘厳な風景を、
A4判横見開きのパノラマで収録。



山と自然を愛する人々へ贈る、珠玉のエッセイ

わが山と旅
秋谷 豊 著
抒情詩人が綴る、詩と山の50年。詩16篇収録。
●2,800円

緑の牧歌
太田愛人 著
農への回帰、野に生きることの素晴らしさ。
●2,800円

私のヒマラヤ紀行
茂市久美子 著
童話作家が描くヒマラヤ・トレッキング紀行。
●1,800円

もう登らない山
串田孫一 著
もう登らない山だからこそ、真の姿が見えてくる。
●2,800円

高原の花物語
手塚宗求 著
霧ヶ峰高原の山小屋主人が綴る珠玉のエッセイ。
●2,800円

息子と行く山
北原節子 著
幼い息子とともに高原の風に吹かれて歩いた日々。
●2,800円

新編・邂逅(かいこう)の山
手塚宗求 著
山の生活者として幾星霜。一人の精神の形成史。
●2,800円

雲をつかむ話
三宅 修 著
山岳写真家ならではの視点で語る、山との対話。
●2,800円

恒文社 〒101東京都千代田区三崎町3-10-10

●お近くの書店でお求めください。●着払い宅配便のご注文は、直接小社へ。(宅配料380円)☎03-3238-0181

YAMA-KEI VIDEO COLLECTION

深田久弥の日本百名山

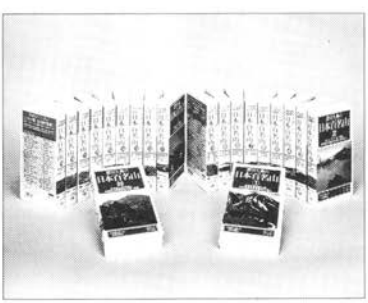
ビデオ版《全20巻》

空撮と地上映像に登山地図を加えて構成した、見て楽しむ日本百名山

人気沸騰の『日本百名山』30万本突破!!
語り=相川 浩・深沢彩子　音楽=元道俊哉
企画・製作・発行・販売=山と溪谷社　映像提供=NHK
制作協力=㈱NHKクリエイティブ　㈱ウォーク
●税込価格各2800円●税込セット価格56000円
カラー各55分 VHS Hi-Fi STEREO

❶利尻岳・羅臼岳・斜里岳・阿寒岳・大雪山
❷トムラウシ・十勝岳・幌尻岳・後方羊蹄山・岩木山
❸八甲田山・八幡平・岩手山・早池峰・鳥海山
❹月山・朝日岳・蔵王山・飯豊山・吾妻山
❺安達太良山・磐梯山・会津駒ヶ岳・那須岳・魚沼駒ヶ岳
❻平ヶ岳・巻機山・燧岳・至仏山・谷川岳
❼雨飾山・苗場山・妙高山・火打山・高妻山
❽男体山・奥白根山・皇海山・武尊山・赤城山
❾草津白根山・四阿山・浅間山・筑波山・白馬岳
❿五竜岳・鹿島槍岳・剣岳・立山・薬師岳
⓫黒部五郎岳・黒岳・鷲羽岳・槍ヶ岳・穂高岳
⓬常念岳・笠ヶ岳・焼岳・乗鞍岳・御嶽
⓭美ヶ原・霧ヶ峰・蓼科山・八ヶ岳・両神山
⓮雲取山・甲武信岳・金峰山・瑞牆山・大菩薩岳
⓯丹沢山・富士山・天城山・木曽駒ヶ岳・空木岳
⓰恵那山・甲斐駒ヶ岳・仙丈岳・鳳凰山・北岳
⓱間ノ岳・塩見岳・悪沢岳・赤石岳・聖岳
⓲光岳・白山・荒島岳・伊吹山・大台ヶ原山
⓳大峰山・大山・剣山・石鎚山・九重山
⓴祖母山・阿蘇山・霧島山・開聞岳・宮ノ浦岳

中高年層をはじめ多くの登山者のバイブルとなっている作家深田久弥著『日本百名山』のビデオ版。このビデオは、NHK衛星第2テレビで放映したもののノーカット版（未公開映像も収録）。空撮と地上映像に登山地図をも加えて構成したもので、各々の山の特徴がひと目でわかります。



〒105 東京都港区芝大門1-1-33　山と溪谷社　☎03(3436)4055《営業部》 振替口座 00180-6-60249

山の本　茗渓堂

坂本直行の本

わたしの草と木の絵本	1,800円
雪原の足あと	3,914円
原野から見た山	4,300円
山・原野・牧場	1,800円
淡彩絵はがき	
1集(再版)カラー8枚	800円
2、3、4集　カラー6枚	各 600円

島田　巽

山稜の読書家	4,017円
山・人・本	2,472円

三田幸夫

わが登高行	上	3,914円
	下	4,635円

小谷隆一

山なみ帖	3,296円

山崎安治

登山史の発掘	2,575円
登山史の周辺	3,914円

織内信彦

快晴の山	2,575円

加藤泰安

森林・草原・氷河	2,575円

藤島敏男

山に忘れたパイプ	3,296円

山田・横山 共著

青空と輝く残雪の山々	1,339円

望月達夫

忘れえぬ山の人びと	1,957円

渡辺公平

山は満員	2,266円

山岳洋書／地図／ビデオ

書籍》	予価
American Alpine Journal '96	3,900円
Alpine Journal '95	4,070円
Eight Sailing/Mountain Expedition Books (Tilman)	4,180円
Six Mountain Travel Books (Shipton)	4,180円
Guide to the Worlds Mountains (Kelsey)	4,550円
Trekking Peaks of Nepal (O'Connor)	3,250円
Ice World (Lowe)	5,200円
Himalaya—Alpine Style (Venables)	5,500円
Mountaineering—5th ed. —Freedom of the Hill	4,160円
Yosemite ; Free Climbs (Reid)	3,250円

地図》	
Mt. Everest ($\frac{1}{25,000}$) (Boston Musium)	1,690円
Nanga Parbat ($\frac{1}{50,000}$) —German Alpine Club	2,200円
Annapurna ($\frac{1}{100,000}$)	1,870円
Sikkim Himalaya ($\frac{1}{150,000}$)	3,080円
Garhwal Himalaya West ($\frac{1}{150,000}$)	3,080円
Mt. Mckinley ($\frac{1}{50,000}$)	2,420円
Mt. Fitzroy & Cerro Torre ($\frac{1}{50,000}$)	1,760円
Chamonix—Mt. Blanc ($\frac{1}{25,000}$)	1,650円
Kilimanjaro ($\frac{1}{75,000}$)	1,760円
Antarctica ($\frac{1}{1,000,000}$)	1,100円

ビデオ》	
Third Stone from the SUN	3,900円
Waterfall Ice	5,200円
El Capiten	3,900円

雑誌》	
Climbing (年8回)	900円
Rock & Ice (年6回)	900円

● 営業時間 ● 平日 11:00～20:30　土曜 11:00～20:00
日曜・祝日　定休
JRお茶の水駅西口前

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1-11
☎03-3291-9442 FAX03-3295-2043
振替 口座 00180-2-24723

編集後記

＊：今年はマナスルの初登頂から四十年の記念すべき年で、本号では九年後に迎える山岳会百年に向けて資料となるように、現時点で出来るかぎりの特集を組んだ。紙面の都合で随分と削ってしまった部分もありベストとはいかないまでもベターな特集が出来たと思っている。

＊：若い人々には「マナスルは神代の時代」と思っている人も多かろう。いまの高所登山には参考にならない、と関心を示さない人もいよう。しかし五二年の踏査隊は、日本全体がサラエボ以上の廃墟になってしまった敗戦から僅かに七年後に派遣され、五年目の第三次隊で初登頂に成功するまでの先人の快挙は、戦後史のハイライトの一つである。高所登山の知識は零に近く、外貨不足で優秀な外国の装備を揃えることは不可能で、踏査隊の装備はスイス隊などからもらったシェルパの装備より悪かった、というような状態からの出発であった。

＊：この特集に関連して、「九十周年記念フォーラム」の高所登山シンポジウムの併読をお願いしたい。鹿野さんは「ジャイアンツ十四座の初登頂でヒマラヤの黄金時代は終わった。しかし良い登山と悪い登山はこれからもある」。重廣さんは「エベレストに登ったかも知れない二四年のマロリーの服装は今の我々の冬の通勤着と変わらない」。原さんは「金を沢山使う大遠征隊に未来はない」といっている。

＊：ところで今年八月にK2に十二人の若人が登頂した。マカルーまでの大遠征隊と違い、費用も少なく、山本篤隊長、松原尚之さんら青年部の若い人だけでなし遂げた快挙であった。九十周年のシンポジウムに山本篤隊長も出席している。発言は少ないがK2成功後に改めて読み返してみると、珠玉のように輝いてみえるのが不思議だった。

山岳　第九十一年（通巻一四九号）
一九九六年十二月七日発行
価三五〇〇円
発行所　社団法人　日本山岳会
東京都千代田区四番町五―四
サンビューハイツ四番町
（〒一〇二）
電話　東京三二六一局四四三三番
振替口座　〇〇一三〇―一―四八二九
発行人　村木潤次郎
編集人　田辺寿
印刷所　株式会社　技報堂
発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二―一
電話　東京三二九一局九四四二番
振替口座　〇〇一八〇―二―二四七三三

本誌掲載の記事、写真および地図の無断転載を禁じます。

大好きな自然を、ゆっくりと楽しみたい

ATLAS TREK

ビギナーのための旅行から、未知の魅力を秘めた国々へ、そしてエクスペディションまで、それぞれのニーズにお応えし、新しいユニークな手づくりの旅をコーディネイトします。


Manaslu


Sagalmatha


Nanda Devi


Qomolangma


Kangchenjunga


Namcha Barwa

☆世界各地、日本の名峰へのトレックツアー、各種手配旅行、登山隊、航空券等々を取扱っております。

●お問合わせ・お申込みは…　運輸大臣登録旅行業第1167号

株式会社アトラストレック

〈東京〉03-3341-0030㈹　〈大阪〉06-341-9600㈹

東京都新宿区三栄町23番地　大阪府北区堂島2丁目3番33号, 4F

〈北海道地区総代理店〉株式会社ノマド

011-261-2639㈹

札幌市中央区南2条西6丁目一関ビル6F

北海道知事登録旅行業第2-249

トレックなんでも相談

東日本地区 ☎0120-088482

西日本地区 ☎0120-884808

北海道地区 ☎0120-665-665

ISSN 0286-7508

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. 91

1996